
明星の年輪
ー明星学園90年のあゆみー
学校法人 明星学園

明星の年輪

―明星学園90年のあゆみ―

1924～2014



小学校校舎北棟から校庭と中学校校舎をのぞむ　撮影：一瀬 清 前小学校長

表紙について

題字は創立同人・照井げん先生の筆。1974年（昭和49）、『50年のあゆみ』を刊行した折にいただいた。

表紙写真のプラタナスの樹は、1928年（昭和3）に創設した高等女学校の理科室・裁縫室の窓際に植えられた何本かのうちの1本である。女学校卒業生で元高校教諭の岸すみれ（10回生）は2008年、小学校を訪れ、語っている。「現在、明るい2階建ての新校舎の奥に“プラタナス広場”という場所があります。“プラタナス”というからには、あの日除けだった昔の木々しかない筈。どれもせいぜい直径15 ～ 20cmだったのに、現在の太さといったら大人の二抱え以上はあろうかと思われるほどの巨木と化していて呆然としました。あの頃の名残の1本がこうして根を張っている姿には“あれから同じ歳月を経ての再会なのだなあ”と、自然の生命力への驚嘆と共に、世にも不思議なものを見る思いがしました」。

それからさらに6年が過ぎ、現在もプラタナスの木蔭では子どもたちが走りまわっている。

表紙写真……大草 鷹平（79回生）

創立90周年を迎えて



理事長　出口 一彦

1924年（大正13）5月15日、井の頭公園を望む武蔵野のこの地に明星学園が産声を上げてから、本年創立90周年の大事な節目を迎えました。大正自由教育の理想を掲げ、大正、昭和、平成と、時代の荒波を乗り切り今日を迎えることができましたのは、ご同慶の至りであり、4人の創立同人の先生方とそれを後継した多くの先人たちのご功績とご苦労に対して、深甚の敬意の念を捧げるものであります。そしてこの間、学園を愛し支えてくださった後援者、多くの保護者、卒業生、加えて、地域の方々には、それなくしては学園の存続があり得なかったことを思い、改めて心からの感謝の念を捧げるものであります。

この経緯は、既に『明星の年輪―明星学園50年のあゆみ～70年のあゆみ』等の労作で世に問うていますが、今回改めて『明星の年輪―明星学園90年のあゆみ』として、その後の新たな収集資料を加味して編纂し、より総合的、多面的にその足跡をたどれるよう努めました。

大正デモクラシーから、直後の大不況と戦乱の昭和へと、過酷な社会情勢のなかに放り込まれた草創期から、戦後の民主化と高度成長の大きな転換期を経て、今、少子高齢化等を背景とした社会経済の停滞と先行きの見えない閉塞状態の中で、次の100周年を視野に入れなければなりません。

本誌に目を通していただければご理解いただけるように、90年の歴史は、決して理想を追い続けた甘美な道程ばかりではありません。輝かしい創業を受け、その後の長い守成（しゅせい）は、辛酸に次ぐ辛酸の連続であり、一私学として抱える数々の難題と時代の要請との格闘でもありました。

建学の理念は、我が国社会の必要とする幅広く多様な人物を養成しようとする理想であって、これはいつの時代にも変わらないものであります。しかし、現実には学園の目ざすものと、その時代時代の生徒・保護者の方々の期待と要請とでいかに調和・融合を図っていくのか、そしてそれを実現するために学園一体となった明星ならではの教育力の維持向上を追い求めた歴史でもありました。

今、学園は時代の大きな転換期にあって数々の課題を抱えています。次に来る100周年に向けて、学園の基盤をより充実していかなければならない時に当たり、学園の先人たちから、どのような示唆・提言をいただけるのか、歴史をひもとく意義はここにあるものと思われます。ここに学園関係者一人ひとりが次の10年間を価値あるものにするため、90年の歴史から、そして先人の皆様から大きな力を汲みとってまいりたいと考えております。

末筆になりますが、本誌の執筆・編纂の中心的役割を果たされた、依田好照氏、一瀬清氏、渡辺京氏、大野映子氏、串田妙子氏、大草美紀氏、略年表作成の総括をされた松浦恭子氏の皆さまには、長きにわたる献身的なご尽力に深く感謝申し上げます。

明星学園90年のあゆみから100年へ

―「Soul is Hard, Mind is Soft（魂において頑固、心において柔軟であること）」―



小学校校長　平田 和孝

明星学園は、国内においては大正デモクラシーの影響を受けた大正自由教育運動、世界においては、エレン・ケイが20世紀を「児童の世紀」と呼ぶなかで誕生しました。また一方では軍靴の足音が聞こえ、画一的な注入主義の教育が押し進められるなかで、あえて「個性尊重」「自主自立」「自由平等」の三つを建学の精神として掲げました。

以来90年、明星学園は、大きく、新教育時代に言われた「生活（労働）と教育の結合」そして教育の現代化運動を意味する「科学と教育の結合」時代を通じて、たゆみなく研究・実践を続けながら歩んできました。

いま、私たちは、この歴史的財産と自負を持って、90年のあゆみに学びながら、21世紀型とも呼ぶべき「共に生きる力」を前面に押し出すことで、次の100年に向かう指標としたいと考えます。

それは、何よりも「不易流行」の不易として、「よりよく生きる」という生活者としての人間の幸福追求権の基礎に自他の人権の尊重があり、教育の目的は、その自他の個性の尊重の上に、共に、個性の完全なる開花をめざして、「生活世界」を広げ、より豊かにしていくものと考えるからです。つまり、私たちが頑固なまでに建学の精神を大事にする理由がここにあります。

また、「流行」では、時代と社会の変化への柔軟な対応という意味で、時代や社会の変化の文脈をどう読み解き、子どもたちにそれをどう綴らせていくのかを明確にしていく作業を、絶えず課題としなければならないと考えています。

その際、明星学園では、「ほんもの」という言葉で、何が本物なのか、あるいは本物にふさわしいのかという、物事の本質やあるべき姿を絶えず見極めようという歴史があり、この探究の姿勢こそ、100年につながる基本姿勢だと考えます。

「歴史は掘るもの（発掘するもの）」です。本書を読み進めることで、当時の人が何を思い、何を読み、何を語ってきたのかが見えてきます。本書が学園100年への導きとなることを願い、一人でも多くの方に手に取っていただき、歴史を読み解きながら未来へのロマンを語り合いたいと思います。

先人たちに学び、未来をきりひらく



中学校・高等学校校長　河住 貴夫

はじめて明星学園を訪れたのは1984年の夏のことだった。

あれから30年。60周年から70周年、80周年を経て、90周年を迎えた。この30年のなかでも様々な歴史があった。私が中学校の体育教員となった1980年代から1990年代にかけては、小・中学校は一つの組織として、子どもたちが学問や芸術・スポーツの本質に触れ、それぞれの文化の基礎・基本がどうすればよりわかりやすく、より興味をもちながら理解していけるか、その内容や方法をただひたすら一緒に研究実践していた時代であった。そして、2000年代に入り、自主自立の精神を育む教科外活動の改革に本格的に取り組んでいった。

そして、明星学園は大きな転換期を迎える。6・6制への移行である。人事交流や合同のクラブ活動が盛んになり、これまで玉川上水をはさんで遠く感じられた中学と高校の距離がいっきに縮まっていった。

現在は、小学校の6年間と中学校・高等学校の6年間でそれぞれの発達段階における独自性を考えながらも、12年間で一本の幹を通す一貫性を追求している真っただ中と言える。一本の幹とは、まさに90年の時を超えて脈々と流れている「個性尊重」「自主自立」「自由平等」の理想を実現していくことに他ならない。

私は、昨年の4月に校長に就任したが、一本の幹を通すためには、まず過去の資料をあたり先人たちがどんな思いで学園を創設し、3つの教育理念にどんな意味を込めていたのかをひもとくことから始めなければならなかった。時代の変化に併せて明星の教育も変革するべきは変革しなければならないが、しかしその幹は目まぐるしい変化に振り回されてはならない。どんなに時代が変わろうとも揺らぐことのないしっかりとした幹をもち、その上で変えるべきものは変えていかなくてはならない。

この90年誌の完成を得て、私たちは改めて先人たちが何を考え、どんな取り組みをしてきたのかを学び、もう一度明星学園の幹となる理念の意味をしっかりと共有していかなくてならない。そして、来たるべき100周年・150周年に向け、明星学園の教育のさらなる充実と発展に邁進し、未来へとつなげていかなければならないと強く思うのである。

はじめに

2014年、明星学園は創立90周年を迎えた。子どもたちが明星で過ごした日々は、のべ30,000日を超えることになる。それをわずかな紙面で伝えるには限界があるが、創立期のことを知る人はわずかになりつつあり、今こそ、きちんとした記録を残さなければ、という思いに駆られて編集にあたった。

『明星の年輪―明星学園90年のあゆみ』編集委員会では、90年誌作成の目的を以下のように確認した。

・学園関係者がこれまでのあゆみを知ることで、現在の明星学園をよりよく知り、学園の発展に力を出し合う契機となる資料にする。
・学園の歴史を通じて、明星学園の社会的役割を認識し、学園の教育実践の質の向上に生かしていく。
・「教育実践史」「子どもたちの生活史」を併せ持つ性格の内容とする。
・読み物としても成り立つ、通史的な記述を心がける。
・明星学園に関心を持つすべての人を読者と考え、研究者の資料としても耐え得る内容とする。

編集にあたって以下の点に留意した。

・過去に作られた年誌の記述であっても再度検証し、可能な限り正確な記述にする。
・本文と引用文との違いをわかりやすくするため、活字書体を変え、そのページの欄外にその出典を表記する。
・項目ごとの担当者を＜文責＞または＜文責・構成＞として名を明記する。
・本誌とともに、新たに検証を加え組み直した略年表・人事一覧を別冊とする。

そのうえで、社会の動き、明星教育の節目を考慮して本誌を次のような5部構成とした。

第1部　黎明期の明星（1924年～1934年）
　　創立から10周年まで
第2部　アジア・太平洋戦争期の明星（1934年～1945年）
　　戦時下の明星学園
第3部　戦後教育改革期と明星（1945年～1970年代）
　　4・4・4制実施期の教育実践
第4部　一貫教育の新たな展開（1970年代～1990年代）
　　4・4・4制廃止後の教育実践
第5部　原点をみつめ未来をひらく（2000年～90周年）
　　6・6制小・中・高一貫教育

明星の教育を前進させるために、この本が役立てば幸いである。

目　次

創立90周年を迎えて……理事長　出口 一彦
明星学園90年のあゆみから100年へ ……小学校校長　平田 和孝
先人たちに学び、未来をきりひらく……中・高等学校校長　河住 貴夫

第1部　黎明期の明星 創立1924年（大正13）～10周年1934年（昭和9）

第1章　明星学園の誕生
1　誕生前夜 …… 6
(1) 一本の標木 —— 6
(2) 大正デモクラシーと新教育運動
1) 大正デモクラシー —— 8
2) 新教育運動・大正自由教育 —— 9
(3) 成城小学校の教育
1) 澤柳政太郎と成城小学校 —— 11
2) 成城小学校での小原国芳 —— 12
(4) 明星学園創立へのあゆみ
1) 成城小学校での出会い —— 13
2) 両雄並び立たず —— 13
3) 創立への第一歩 —— 15
2　学園の誕生 …… 16
(1) 明星学園設立趣意書 —— 16
(2) 開校の日 —— 17
(3)「社会立の学校」をめざして —— 19
(4) 建学の精神 —— 21
3　創立者と後援者 …… 22
(1) 4人の創立同人
赤井 米吉（あかい よねきち）—— 22
照井 猪一郎（てるい いいちろう）—— 26
照井 げん（てるい げん）—— 28
山本 徳行（やまもと とっこう）—— 30
(2) 上田 八一郎（うえだ はちいちろう）—— 32
(3) 後援者「隠れた人」茶郷 基 —— 35
茶郷夫人 —— 37

第2章　初期の教育実践
1　新教育の開拓者 …… 39
(1) 創立当初の教科課程 —— 39
(2) ドルトン・プランと明星 —— 42
(3)『新読本』—— 45

(4) さまざまな実践
1) 低学年における自然科の授業 —— 48
2) 霜田静志『芸術を基調とせる低学年の教育記録』—— 50
＊コラム1 —霜田静志の学力観 —— 53
2 創立期の子どもたち …… 54
(1) 通学 —— 54
(2) 初期のころの学校のようす —— 55
(3) 第1回生・2回生の生活 —— 56
1) 山本組 岸 叡子（横井/1回生）—— 56
2) 照井組 出口 喜久子（茶郷/2回生）—— 58
3 学校と家庭の連携 …… 60
(1) 母の会の活動 —— 60
(2) 学校・家庭・子ども —— 61
(3)「部落会」の提唱 —— 64
4 中学校・高等女学校の創設 …… 66
(1) 山積する難問 —— 66
(2) 上田八一郎の上京 —— 67
(3) 保護者の協力と後援会の発足 —— 68
(4) 初期の中学校
第1回生の生活 —— 71
『星雲時代』—— 74
(5) 初期の高等女学校
「思ひ出づるまゝに」赤井 米吉 —— 76
「思い出」青木 ふみ子 —— 77
5 初期の学校行事（小学校）…… 79
(1) 行事について —— 79
(2) 遠足・見学旅行 —— 79
(3) 夏季生活 —— 82
(4) 学芸会（舞踊の会・展覧会）—— 88
(5) 体育会・運動会 —— 88
＊コラム2 —清里寮（八ヶ岳） —— 90

第3章 初期の学園経営
1 赤井学園長の苦悩 …… 91
2 初期の後援者たち …… 94

第4章 創立10周年
1 10年の星霜 …… 95
(1) 創立10周年への思い —— 95
(2) 創立10周年の記念事業 —— 101

(3) 創立10周年記念式 —— 102
2 明星学園行進歌の誕生 …… 104

第2部 アジア・太平洋戦争期の明星 1934年（昭和9）～1945年（昭和20）

第1章 戦時教育体制のなかで

1 赤井学園長の欧米視察 …… 108
(1) 世界新教育会議 —— 108
(2)『世界の教育の動きをみて』—— 111
2 「国民精神総動員」のもとで …… 113
(1) 日中戦争の開始 —— 113
(2) 創造力と自由 —— 113
(3) 国民学校令と私立小学校 —— 115

第2章 戦時下の明星

1 戦時下の小学校 …… 117
(1) 戦争と子どもたち（『ほしかげ』から）—— 117
(2) スマートな講話 田中 一水（16回生）—— 118
＊コラム3 —子どもから見た先生たち —— 119
(3)「お知らせ」に見る戦時下の小学校のとりくみ —— 120
(4) 戦時下の小学校学習記録 —— 124
＊コラム4 —『さかだち学校』 奈良 正博（元保護者）—— 128
(5) 私の明星学園 岩崎 建二（20回生）—— 130
(6) 戦時体験の断片 原田 満寿郎（元教諭）—— 132
2 戦時下の高等女学校 …… 134
(1) 昭和10年代の女学校の5年間 —— 134
1) 学校生活で学んだこと 赤井 英乃（8回生）—— 134
2) 女学校の興味深い先生方の授業 岸 すみれ（10回生）—— 136
(2) 文化・芸術に恵まれていた女学部 御喜 晶子（北川/11回生）—— 138
(3) 戦時下の女学生の生活—学徒動員を中心に 馬場 洋子（志村/13回生）—— 140
3 戦時下の中学校 …… 143
(1) 私が明星で習ったこと 杉山 清（元教諭）—— 143
(2)『星雲時代』から 中学校生活の断面 —— 145
(3) 戦時下の旧制中学—読書体験を中心に 金澤 康（13回生）—— 148
(4) 戦時下の中学生の生活—学徒動員を中心に 松本 唯史（16回生）—— 150

第3部　戦後教育改革期と明星　1945年（昭和20）～1970年代

第1章　新制度による再出発

1 「6・3・3制」と男女共学 …… 154
(1) 敗戦直後の教育再建 —— 154
(2) 教育基本法と6・3・3制 —— 156
2 敗戦直後の明星学園 …… 160
(1) その頃　明星学園では —— 160
(2) 新制高等学校の発足 —— 161
(3) お知らせに見る終戦直後の明星学園小学校 —— 166
(4) 花ひらく明星祭 —— 170
(5) さまざまな体験（卒業生の体験談）
私の小学校時代　出口 一彦（24回生）—— 173
終戦まもない明星、子どもたちの学校生活　田中 祥子（追水/21回生）—— 174
兵隊服と坊主頭だったころ　田中 一水（16回生）—— 176
敗戦と明星　こき かほる（18回生）—— 177
新制中学発足の頃　松本 陽子（大類/20回生）—— 179
よき市民としての教養　高見澤 たか子（21回生）—— 182
高校山岳部秘話　小森 黎（19回生）—— 184
3 小・中・高一貫教育への始動 …… 186
(1) 学園一体化への志向 —— 186
(2) 三部合同劇『杜子春』—— 189
明星学園教育と私　富永 一矢（22回生）—— 191
(3) 第1回教育研究集会 —— 193

第2章　4・4・4制の軌跡

1 「4・4・4制」発足 …… 197
(1) 教育内容の一貫化をめざして —— 197
(2) 4・4・4制の反響 —— 200
＊コラム5 —小学校のジグザグ校舎 —— 204
2 教育研究活動 …… 206
(1) 公開研究会の始まり —— 206
(2) 公開研究会のあゆみ —— 212
(3) 高学年部の教育研究 —— 221
3 低・中学年部の実践 …… 223
(1) 教科書の自主編成 —— 223
(2) 夏季行事 —— 227
1) 千倉行事のとりくみ —— 227
2) 夏季生活と子どもたち —— 231

4　高学年部の実践 …… 238
(1) 教育研究「夏休み教育研究会から（高学年部）」—— 238
(2) 生徒の状況と自治会 —— 239
(3) 修学旅行 —— 240
(4) クラブ活動 —— 242
(5) 明星祭—仮装大会 —— 243
＊コラム6 —1960年代の明星学園　井部 高志（元教諭） …… 248
5　試練の時 …… 250
(1) 相次ぐ訃報 —— 250
橘全園教務の急逝 —— 250
照井校長も逝く —— 251
創立40周年と市村理事長の逝去 —— 253
上田校長の逝去と次期校長問題 —— 254
赤井学園長の逝去 —— 255
(2) 3校長の辞任 —— 257
星章をはずして　寒川 道夫（元小学校長） —— 258

第4部　一貫教育の新たな展開 1970年代～ 1990年代

第1章　教育をめぐる状況と明星

1　子どもと学校の状況 …… 262
(1) 1970年代の風潮 —— 262
(2) 学校改革への実践 —— 262
2 「4・4・4制」と9年の問題 …… 263
(1) 4・4・4制の手直しは必要か —— 263
(2) 9年生は8年生に続けるのがよいか —— 264
(3) 9年生は中学校へ—鈴木校長の提案 —— 264
3　内部進学問題 …… 266
(1) 基礎学力の問題 —— 266
(2) 内部進学に関する合意 —— 266
(3) 内部進学問題のその後 —— 267

第2章　1970 ～ 80年代の明星

1　小・中学校の実践 …… 268
(1) 教育研究体制の確立 —— 268
(2) 明星学園小・中学校の方針 —— 268
(3) 授業を創る —— 270
(4)『明星の教育』—— 273
(5) 公開研究会 —— 276

(6) 評価のあり方を変える —— 278
2 高等学校の実践 …… 279
(1)「4・4・4制」の廃止 —— 279
(2) 高校の改革
1) 新教育課程（1973・昭和48年）の編成 —— 279
2) 運営委員会体制と教育研究部の新設 —— 281
3) 生徒指導と教科外カリキュラム検討 —— 281
(3) 新校舎建築と教育総点検運動
1) 基礎学力問題 —— 283
2) 教育総点検運動 —— 283
(4) 新教育課程（1984年度実施）
1) 新教科カリキュラム —— 283
2) 学年単位の実践の展開—合宿旅行 —— 286
3) 男女共修生活科—歴史と共に生きる共学生活科　大平 初枝（坂本/元教諭） —— 287

第3章　新体制下の明星
1 新体制の発足 …… 293
(1) 学園の危機的状況 —— 293
(2) 新理事会の発足 —— 293
(3) 松井理事長と明星学園 —— 294
(4)「明星学園・建学の原点を求め明日への出発」—— 295
＊コラム7 —「学園のお金は父母と都民からいただいている」 —— 297
(5) 遠藤校長、無着教頭の辞任 —— 298
(6) 恩地・依田両校長の就任 —— 298
2 教育現場の運営 …… 299
(1) 全園校教務会 —— 299
(2)「内部進学テスト」の廃止 —— 300
3 創立60周年 …… 301
(1) 記念式典・祝賀会 —— 301
(2)「新しいルネサンスを切り拓く明星へ」—— 302
(3) 美術展と協賛展 —— 303
(4) 実践記録の発刊 —— 305
1)『明星の教育』—— 305
2)『都市を描く子どもたち』—— 308
3)『画集 みつめる目』—— 309
4)『みる つくる かんがえる』—— 310
5) 高等学校研究紀要発行 —— 314

第4章 「学校週5日制」
1 学校週5日制…… 317
2 小学校校舎建築 …… 320
(1) 新校舎建築 —— 320
(2) 旧校舎お別れ会
「さよなら」よりも「ありがとう」 増田 太郎（54回生）—— 321

第5部 原点をみつめ未来をひらく 2000年～90周年（2014年）

第1章 6・6制への道のり
1 「6・6制」の構想…… 326
(1) 6・6制検討委員会 —— 326
(2) 21世紀学園構想委員会 —— 327
(3) 社会の情勢と明星学園 —— 328
(4) 学校像の構想 —— 330
2 「6・6制」開始へ向けて…… 331
(1) 6・6制開始年度の決定 —— 331
(2) 6・6制の具体化 —— 331
(3) 6・6制スタート —— 335

第2章 6・6制開始後の新たな取り組み
1 新たな運営体制 …… 336
(1) 内部進学制度 —— 336
(2) 人事交流 —— 337
2 中学校校舎建築へ向けて …… 340
(1) 中学校校舎建築 —— 340
(2) 特別委員会の設置 —— 342
3 教育相談委員会の活動 …… 344
4 公開講座 …… 346
5 春の研究会 …… 351
(1) 小・中・高の課題共有に向けて —— 351
(2) 全園研究会（春の研究会）の意味と今後の方向 —— 356

第3章 新たな社会を生き抜く力
1 原点をみつめ未来をひらく …… 357
2 小学校の実践 …… 361
(1) 自らの思いを自らの言葉で綴る—卒業論文「12歳の主張」—— 361
(2) 引き継ぐべきものと改革すべきもの—算数の新たな取り組み —— 365
(3) 自然から学ぶ—「みいつけた」—— 371

(4) 図書室の実践―照井文庫に託されたこと —— 378
3 中学校の実践 …… 382
(1) 中学校の教科外教育 —— 382
1) 卒業研究 —— 384
2) 修学旅行（伊江島民家泊） —— 391
3) 職場体験 —— 395
(2) 教務上の諸問題 —— 401

4 公開研究会 …… 406
(1) 小学校「公開研究会」—— 406
(2) 中学校「公開授業と研究会」—— 410
5 高等学校の実践 …… 413
(1) カリキュラム改訂の取り組み —— 413
(2) 国際交流のあゆみ（短期交換留学に焦点をあてて） —— 415
(3) 自治会活動
1) 自治会 —— 419
2) 行事（体育祭／明星祭／音楽祭） —— 419
6 高等学校「安全の日」の取り組み …… 423
7 学園の危機管理体制 …… 424
(1) 防災 —— 424
(2) 防犯 —— 426
(3) 安全教室 —— 426
(4) 放射能・放射線対策 —— 427
8 保護者・地域・卒業生との協力 …… 427
(1) 小・中・高がひとつになって取り組むＰＴＡ活動 —— 427
(2) 子どもたちの教育活動を支援するボランティア活動 —— 428
9 創立90周年 …… 430
(1) 創立90周年記念式典・祝賀会 —— 430
(2) 記念式典 理事長式辞 —— 431
(3) 創立90周年記念ホームカミングデイ —— 433

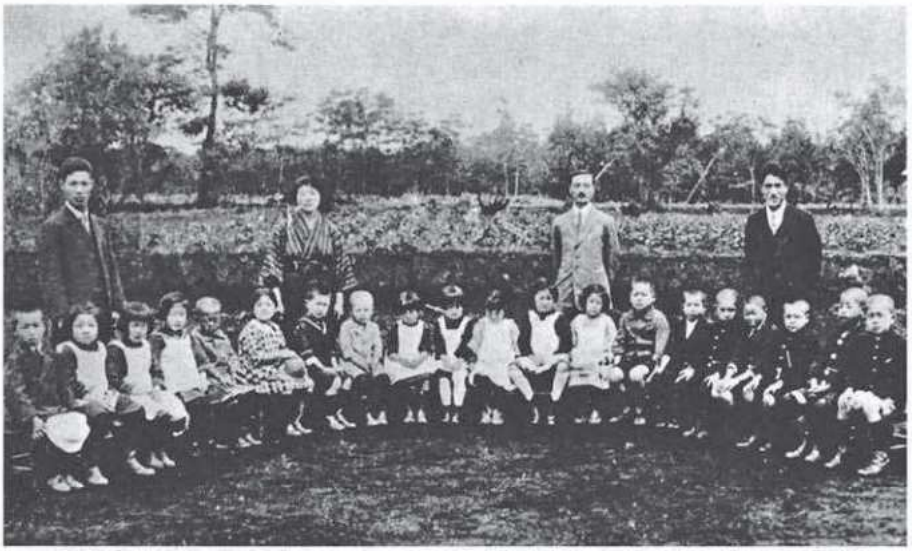
主要参考文献…… 439

編集後記 …… 442

略年表・人事一覧（別冊）

第 1 部　黎明期の明星

創立 1924 年(大正 13)～ 10 周年 1934 年(昭和 9)



開校記念写真、創立同人と 1・2・3 年生の児童たち（1924 年 5 月 16 日撮影）

第1章　明星学園の誕生

1　誕生前夜

(1)一本の標木

1924年（大正13)、自然に恵まれた井の頭公園の南の丘、雑木林に囲まれた麦畑に、明星学園は誕生した。学園が誕生した時の様子を創立同人のひとり照井猪一郎は美しい筆致で記している。

大正13年2月29日、むさし野はまだふかぶかと冬のとばりの中に眠っていた。

霜柱にふくれ上がった麦畑を、一足一足かみしめるようにきざんで行く4人の一団があった。一行はぽくぽくの黒土の上をとりつかれたもののようにむさぼり歩いた。

畑中の小高い一地点に最後の歩みをとめた一行は、やおらかついで来た一本の標木を打ち立てた。「明星学園建設地」……したたるような墨あとがあざやかに白木のおもてに読まれた。

彼らはそれをかこんでいっせいに大空をふりあおぎ、さて思い深げにまわりの森や林をながめまわした。誰からともなく無言のほほえみがかわされた。

大海の底のようにしずまりかえったひと時だった。真昼の太陽は真珠色のスポットをこの謙虚な開拓者たちの上におとした。

輝く日光、すみきった大気、ゆたかな土壌、それは彼らの久しくあこがれていた求道（ぐどう）の聖地であった。

池近く富士遠き森の台地――彼らはこの日この地に真教育の精舎（しょうじゃ）の礎（いしずえ）をすえた。〈※1〉

4人の一団とは、創立同人の赤井米吉・照井猪一郎・照井げん・山本徳行（とっこう）で、標木を打ち立てたのは、正確には大正13年3月16日のことであった。創立に向けての高鳴る心と緊張が伝わってくる。明星学園の原風景である。

創立同人のひとり赤井米吉は創立のときの様子を次のように記している。

この日、空はあくまで澄み渡っていた。井の頭台地は霜解けで、道がぬかるんでいた。畑の麦は2、3寸に伸び、標木は麦畑の真中に建てた。この日こそ学園創設の第一歩を踏み出した記念の日であった。それから校舎建築、児童募集の仕事が進められて、5月9日に明星尋常小学校設立認可を与えられ、その15日に開校式を挙げた。その当時ここは人家漸く両三軒、あたりは悉く（ことごと）麦畑であった。開校当初の敷地僅かに千坪、集まった児童は尋1・2・3の3年、3クラス21名であった。



4人の創立同人
（照井げん、赤井米吉、山本徳行、照井猪一郎）

〈※1〉照井猪一郎「呱々の声」『明星誕生ものがたり』（1994年5月15日復刻発行）、文芸部『明星 25周年記念』（1949年11月15日）に初出、『残照 照井猪一郎先生遺稿集』（1968年2月25日）所収

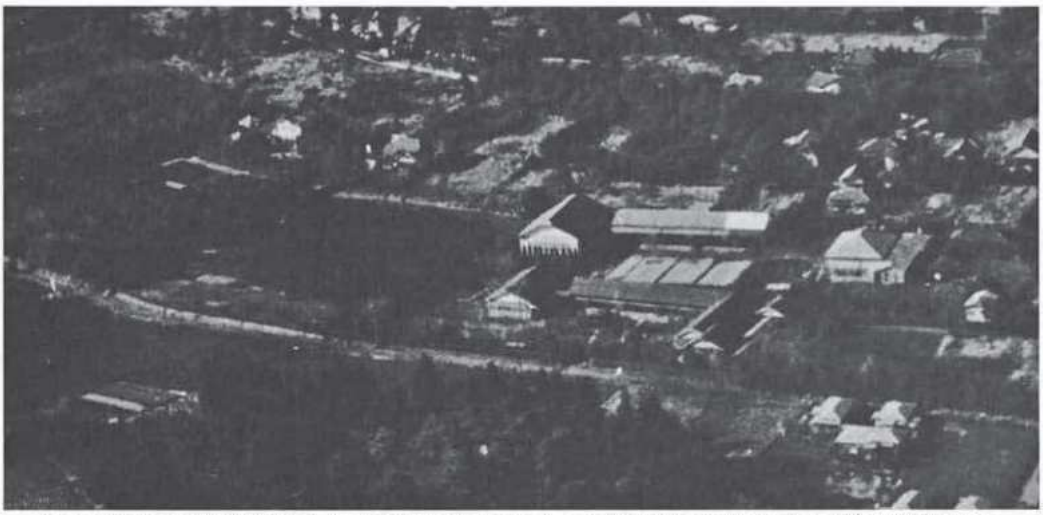
荒野に水は湧きて
砂漠に河も流れん。
やけた沙地は池となりて
うるおいなき地は水の源とかわらん。

とある文の言葉をそのままわれ等の学園に見出すのである。武蔵野の赤土の中に掘った一本の井戸、その水に渇を癒する幾百幾千の児童生徒。たれかこうしたことを夢みえられようか。〈※2〉

こうして麦畑の中に「明星学園建設地」の標木を立てたのであったが、新しい学校の名前はどうやって決まったのだろうか。それにはこんな話がある。

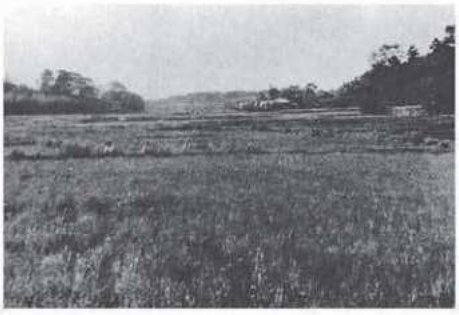
学園の名称は初めから同人の間にいろいろと議せられていた。「啓明」「黎明」「三鷹」「井の頭」「桜の丘」なども考えられたが満足されなかった。或る日、敷地を見に行った帰りに、夕暮の井の頭公園の森を逍遥した私はその美しい星の光に驚かされた。何だか初めて星を見る様な心地がした。(その後も感ずることであるがこの付近の星の光は他とは違う。実際美しい。) それは所謂(いわゆる)「明星」そのものではなかっただろう。然しその時ふとこの言葉が胸に浮んだ。ついに皆の意見も「明星」と決定したのである。幼い子等の心の明星、人類の憧がるる理想の明星、それを慕って、それをみつめて伸びよう、登ろう、精進しようとの意味であった。〈※3〉

学校を建設する前年に関東大震災が起こった。そのような混乱期、復興を目指す世相の中で明星学園の建設は進められた。3、4寸に伸びた麦を刈って校舎を建て、グラウンドにしたのだが、若々しい麦の芽を取り除くことの厳粛さを、赤井はのちに最初の卒業生を前にしてこう語った。



1937年(昭和12)に撮影された小・女学部の全景。創立から十数年を経ても周囲にはまだ森と畑が目立つ。

〈※2〉 赤井米吉『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』(1974年11月3日)18頁
〈※3〉 赤井米吉「明星五年」『渾沌』第8巻・第1号(1929年1月22日)4頁
『渾沌』— 広島高等師範学校出身のペスタロッチー研究者が中心となってつくった教育誌



4年前のこの頃、私共がここに学園建設の仕事にかかった時にはここは麦畑であった。此頃(このころ)あちこちの麦畑に見えるような3、4寸の麦がここにも作られていたのであった。私共は校舎を建てるには先ずその麦をとって地均(ならし)をしなければならなかった。私は人夫の人々が麦を取除いているのを見て空恐ろしい感に打たれた。一つは百姓の人々がこれ迄に丹精したものをむざむざと取り棄てることがその人々に対してまことに済まないことだと考えられたのである。今一つはこの麦が実ればそれで幾人かの生命をつなぐことが出来る。その麦を取り棄てるということの勿体なさであった。昔ある名僧が便所で飯粒を発見して、それを勿体なく思って塵を払って押しいただいて食ったという話もある。かかる貴い食物を私共は取り棄てるのである。私はこれは何か大きな罰が来ないではすまないような気持がした。これは非常に大きな収穫をして償をしなければならぬと考えた。人々の食う糧は作れないが、人そのものを造ることに努めねばならぬと考えた。然しそれから後、春来る毎に他の畑には麦が青々と生じ、夏来る毎に黄色く実ったが私共の学園には実りがなかった。私はいつも淋しい気持で私共の収穫は何時かと今日の日を待ちに待った。然し終にその日が来た。私の心は今漸(ようや)く平になった。慶び限りない。然しこの実りは如何であろうか。豊作か不作か。それは全く君達の今後の生活如何にある。どうか大きな実りであって欲しい。〈※4〉

麦畑は小学校に変わった。「あんなところに学校をつくったって子どもなんか入るものか」と皆からはそう言われた。多難な前途を抱えての第一歩であった。しかし画期的だったのは若き情熱を持った、教師たちがつくった学校だったことである。

(2)大正デモクラシーと新教育運動

明星学園は「大正自由教育」ともいわれる新教育運動の中で誕生した。成城小学校を母体として明星学園、玉川学園、和光学園が生まれた。この3校ばかりではなく、時を前後してたくさんの私立小学校が誕生した。明星学園が誕生する背景となった大正時代とはどのような時代であり、当時の教育はどのようなものであったのだろうか。

1) 大正デモクラシー

明治時代の2つの戦争——日清・日露戦争を通じて日本の資本主義は急速に発展した。しかし急速であったがゆえに、日露戦争以後行き詰まりを見せ、不況に陥った。その不況を一気に打開したのが第一次世界大戦であった。

戦場となったヨーロッパ先進国の工業は大打撃を受け、工場は破壊され、あらゆる工業製品が不足した。これを商機としたのが日本とアメリカであった。この時期、アジアの市場にも食い込んで急速に工業化を進めていた日本にとって、まさにビッグチャンスの到来であった。なんでも作れば売れるという特需の中で、日本経済は空前の好景気に沸いたのである。都市には人々が集まり、それらの人々のために新しい住宅がたくさん建てられた。こうした時期に都市の中産階層

〈※4〉赤井米吉「明星五年」『渾沌』第8巻・第1号(1929年1月22日)16頁

が幅広く形づくられ、この人々がのちに「大正自由教育」を支えることとなったのである。

第一次世界大戦とその後における国際連盟設立、軍縮へとつづく反戦平和運動の高まり、ロシア革命などに触発されて、日本の政治・文化にも大きな変化が訪れた。ヨーロッパの最新の思想、芸術、文化が新たに紹介され、人々は競ってそれを吸収した。それらを通じて人々は人間の権利、人生の価値観、生き方の追求などを主体的に考えるようになった。新聞や雑誌の発行が盛んになり、ラジオ放送が始まり、映画もつくられた。子どもの世界でも鈴木三重吉が刊行した『赤い鳥』(1918年7月創刊) は大きな役割を果たした。明星学園行進歌を作詞した北原白秋も、文部省唱歌を批判して、新しい内容・形式の童謡を同誌にも数多く発表した。

このような人々の考え方の変化は、政治の世界でも民主主義 (デモクラシー) 的な要求となって現れた。1916年 (大正5)、東京帝国大学教授・吉野作造が「民本主義」を提唱し、普通選挙と政党内閣制を主張、それを受けて国民の間に普通選挙を要求する動きが高まった。こうした時代の風潮が、のちに「大正デモクラシー」と呼ばれるようになったのである。

2) 新教育運動・大正自由教育

1886年 (明治19)、それまでの教育令を廃して森有礼(もりありのり)文部大臣の下に公布された第1次小学校令は、4年後の1890年 (明治23)、教育勅語発布と同じころに改められ、第2次小学校令として公布された。

第2次小学校令では小学校の目的を「児童身体の発達に留意して道徳教育および国民教育の基礎ならびにその生活に必須なる普通の知識・技能を授くることを以て本旨とする」と第1条に明示している。天皇中心主義、国家主義に基づく国民の育成を目指したものであった。

明治30年代初頭には、日本の近代国家体制を支える根幹として学校制度の一層の整備が必要とされ、1900年 (明治33) 8月に第3次小学校令が公布されるが、第2次小学校令の第1条は継承された。天皇に忠義を尽くし、国家を愛するという「忠君愛国」のイデオロギーと、父母に孝行、兄弟仲良くというモラルを教えることが教育の目的で、この考え方はその後大正、昭和の時代まで続いたのである。国定教科書がつくられ、訓練・練習を主体とした画一的な教育、知識注入の教育が行われていた。

しかし一方、既成の価値観にとらわれず自由な発想で政治や文化を動かすという大正デモクラシーの気運の中で、教育の世界でも改革が進められるようになった。すでに欧米では19世紀の終わりころから「新教育運動」(New Education Movement) という動きが起こっていた。ルソー、ペスタロッチー、デューイなどの思想に支えられ、学校教育に支配的であった「画一」「知識注入」ではなく、「子ども中心」「感性」「自学」を尊重する学校が築かれてきた。

遅ればせながら、日本でも民主主義的な潮流に支えられ「新教育」を目指す動きが活発になった。それがのちに「大正自由教育」といわれるもので、その大きなきっかけは1917年 (大正6)、澤柳政太郎によって創立された成城小学校であった。この成城小学校に集まった教師たちが新しい学校づくりを始めたのである。明星学園ものちに、この成城小学校を「親」として生まれる。

大正デモクラシーの動きの中で教育現場から始まった学校改革について、もう少し見ていくことにする。明星学園誕生への道すじが明らかになるからである。

学校改革の先駆けとなった学校には、兵庫県明石女子師範付属小学校、日本済美(にほんせいび)学校、成蹊実務学校、帝国小学校などがある。ここでは、そのいくつかにふれたい。

・明石女子師範付属小学校

及川平治は1907年（明治40）、33歳の若さで兵庫県の明石女子師範付属小学校の主事（教頭）になった。そこで13人の「劣等児」と言われた子に勉強を教え、ある確信を得た。それは子どもが悪いのではなく、間違った教育の方法にこそ問題があるということだった。学級編成、進級制度、教育課程を子どもに合わせることで救済できると考えた。のちに著した『分団式動的教育法』（1912年）はベストセラーとなり、学校は参観者であふれた。この教育法は子どもの生活経験・直接体験を基にして、子どもの自主的な活動を促すことを通して、知識や技術を習得させ、人格を形成させていくという方法であった。「分団式」というのはグループ学習に個別学習を加えたもので、「可動的分団式」と呼び、一斉授業を否定するものではなかった。及川は「万年主事」として30年も仕事を続け、その間自分一人で改革をするのではなく、多くの教育仲間と研究実践を積んだのであった。

・私立成蹊実務学校

1906年（明治39）、中村春二（はるじ）は岩崎小弥太・今村繁三とともに池袋に私立成蹊実務学校の設立を志し、1912年（明治45）完成した。教師と子どもは「ともに学び、ともに遊ぶもの」とし、「ともに修業し、ともに進歩しよう」と呼びかけた。教科教育は詰め込みや暗記主義を排し、「自研自修」を強調した。曹洞宗に基づく「凝念法（ぎょうねんぽう）」と名付ける独特の訓育法を採用した。また労働を通しての教育も重視した。

こうした新教育の流れは澤柳政太郎を中心とする成城小学校に引き継がれていく。

明星学園誕生の源となった成城小学校について述べるまえに、同時代に生まれた2つの小学校のことについて触れておきたい。明星の創立同人、赤井米吉もかかわった「教育の世紀社」、その考えのもとに生まれた「池袋児童の村小学校」と「自由学園」についてである。

・池袋児童の村小学校

1924年（大正13）、池袋に野口援太郎の私邸を開放し「池袋児童の村小学校」が創立された。教育の世紀社という民間教育団体を母体にできた小学校である。初代の主事である志垣寛は次のように述べている。

> 人間の活動を機械化しようとする学校、どこまでも自由で流転伸長して止まぬ人間の生命を切って揃えたように鋳型にはめようとする教育、そんな場所、そんな方法、そんな意見から教育を解放したい。
>
> 児童の生命を培い、彼等の感官を練磨し、肉体の十二分なる発育を助長する陽光と土と新鮮なる大気とをほしいままにする場所、春光和風、そぞろに人の心をやわらげる植物の色彩に富める自然のふところ、そこに、われらの教育所を建設したい。
>
> 教師対生徒という観念に囚わるる処なく、教科目や教授時や、はては教授法などというものに縛らるることなく、児童らしき生活を生活せしむる場所としての新しい学校、われらの共同生活の場所であり、われらの研究所であり、われらの労働所であり、われらの娯楽所であり、われらの競技所であり、然してまたわれらの安息所たるべき楽しい場所、即ち子供たちの生活の場所、それがわが児童の村である。〈※5〉

〈※5〉志垣寛『池袋児童の村小学校要覧』（1924年）、中野光『改訂増補版 大正デモクラシーと教育』（新評論、1990年12月10日）117頁

・自由学園

自由学園はキリスト者であった羽仁もと子・吉一夫妻によって1921年（大正10）に創立された。羽仁もと子は「各自、自主独立の人格を与えられている個人がそれぞれのかかわりによって、他の個人の存在および発達を助けまた助けられて、そこにおのずから大小さまざまの社会をつくり出しつつ、全人類社会を支持し発達させていく、その姿が自然のものだと思っているのです」という信念のもと、自労自活の学園づくりを進めた。「思想しつつ、生活しつつ、祈りつつ」を標語として掲げ、生活の中でこそ教育が行われ、その生活を通して教育された人間が社会の改造に向かうことを期待したのであった。

(3) 成城小学校の教育

1) 澤柳政太郎と成城小学校


澤柳政太郎先生

明星学園は成城小学校で出会った4人の教師たちによって創立された。その母体となった成城小学校とはどのような学校だったのであろうか。

1917年（大正6）、成城小学校は澤柳政太郎初代校長を中心に創立された。これまでの日本の教育の在り方を改革する教育の理想を求めたものであった。

創立者澤柳政太郎は信州松本の生まれ、東京帝国大学を出てから文部省に入り、文部次官、東北帝大総長、京都帝大総長を歴任、教育者でもあり教育行政家でもあった。澤柳政太郎は京都帝大辞任の後に、東京牛込区（今の新宿区）の成城中学校に校長として迎えられた。当時の成城は陸軍士官学校の予備校のような存在であった。以前から「教育のもとは小学校にあり」と考えていた澤柳は中学校の中に小学校を併設した。それが成城小学校であった（現在の成城学園は明星学園が創立した1年後に世田谷につくられた）。成城小学校の設立趣意書には次のように述べられている。

> 我が国の小学校が明治維新後、半世紀間に為した進歩は実に嘆賞に値しますが、同時に又、此の50年の歳月に由って今や因習固定の殻が出来、教育者は煩瑣な形式に囚はれかけました。外観の完備に近い程の進歩の裏には、動もすれば、教育の根本精神を遺れて形式化せんとする弊害を醸しつつあるやうに思はれます。我が国教育界には今や所謂、物極まって変じ、変じて通ずべき時節が到来したのではありますまいか。されば今こそはこの固まりかけた形式の殻を打砕いて教育の生き生きした精神から児童を教養すべき時であらふと思ひます。後略…〈※6〉

澤柳は形式主義、画一教育のカラをうちくだいて、生き生きとした精神で児童を教育すべきと主張したのである。そして教育改革を進める4つの柱を掲げた。これはその後に誕生した明星学園、玉川学園、和光学園に引き継がれていくベースになる目標であった。

1. 個性尊重の教育　　附、能率の高い教育
2. 自然に親しむ教育　　附、剛健不撓の教育
3. 心情の教育　　附、鑑賞の教育
4. 科学的研究を基とする教育

〈※6〉 成城学園『成城学園六十年』(1977年)13～14頁

「個性尊重の教育」は画一主義教育を批判する核心的な考え方である。子ども一人ひとりは無限にその性質に差異がある。相違ある児童に全一様の教育を強制することはできない。子どもの能力に応じた少人数教育を目指すべきである。

「自然に親しむ教育」は、大都市の生活環境は子どもをいたずらに早熟にさせ、神経過敏にさせていると分析。自然の中で、自然相手の教育を目指そうとするもので、具体的には「自然科」の教育をカリキュラムに加えた。

「心情の教育」は二つのことを内容としていた。一つは教師と子どもとの間の人格的接触および感化を重視することであり、もう一つは芸術教育の尊重であった。

これらは「新教育」に共通する特徴であったが、第4の柱「科学的研究を基とする教育」は成城小学校の大きな特色であった。1年ごとに研究を積み重ね、その研究をもって教育の改善を図っていくものとする。学者と実践家の溝を埋め、理論と実践を一致させるような研究学校を目指した。

私立学校の教師たちの心のありよう、いわば澤柳精神というものを、教育研究家の中野光(あきら)氏は次のように語っている。

> もっとも大事なこととして、澤柳がねがったことがあります。それは私立学校の教師は、どういう立場におかれても「教育」と「研究」をとおして子どもと共に成長していくべきだということでした。
>
> ですから、私立学校は閉鎖的であってはいけない。ひとりよがりであってはいけない。実践と研究をとおして公教育全体を改革していく力を持たないといけない。したがって教員は教師であると同時に研究者でなければならない。そこに教師としての誇りと喜びを感じとるべきだ。これが澤柳精神でした。〈※7〉

のちに赤井米吉が述べた「社会立の学校を目指す」という言葉に通ずる精神である。中野氏が赤井を「澤柳精神の継承者」と呼ぶ所以であった。こうして成城小学校は教育研究を実証的に行う実験学校、研究学校として誕生した。そして日本の教育改造運動を推進する存在として、日本の教育界に大きな影響を与えていくのである。

2) 成城小学校での小原国芳

成城小学校創立2年目に主事（教頭）として着任した小原国芳は、成城小学校の中心人物として研究実践を推進した。小原は1887年（明治20）生まれ、明星学園の創立同人赤井・照井と同年代であった。故郷鹿児島では赤貧の子ども時代を過ごし、電気技師養成学校で勉強、電信局で働いた。何とかして勉強したいと鹿児島師範学校に入学、さらに広島高等師範学校に進み、赤井米吉と運命的な出会いをはたす。二人はよき友となり、キリスト教青年団体「光塩会」で活動を共にした。

小原の同級生に上田八一郎がいた。後に上田は赤井の誘いを受けて明星学園の教育に参画した。

小原は広島高師卒業後、香川師範に2年勤め、さらに京都帝国大学の哲学科で学び、1918年（大正7）、広島高等師範附属小学校の教務主任（主席訓導）となった。1919年（大正8）、校長の命により東京への出張が決まった小原は、京都帝大で指導を受けた小西重直の紹介を受け、上京後初めて澤柳政太郎と会った。当時澤柳53歳、小原31歳であった。

〈※7〉 中野光『大正自由教育研究の軌跡』(学文社、2011年1月20日)149～150頁

澤柳は小原を成城小学校の主事として迎え入れた。主事就任とともに小原は精力的に仕事をし、成城小学校は活気づいた。1920年（大正9）には研究発表ための機関誌『教育問題研究』を発刊し、講演、著述、学校内改革に邁進、成城の名声を広めた。小原は『教育問題研究』誌上に「教育改造論」を連載し、講演では「全人教育論」を語った。彼は軍人を育成するような学風の成城中学校ではなく、成城第2中学構想を持っていた。そして澤柳校長のヨーロッパ教育視察の折、校長不在のまま第2中学を創ったという実力者であった。

(4) 明星学園創立へのあゆみ

1) 成城小学校での出会い

赤井米吉は1922年（大正11）5月、成城小学校の主事であった小原国芳の誘いを受けて、秋田師範付属小学校から成城小学校に幹事として赴任した。小原と赤井は広島高等師範学校の1学年違いで、共に学んだ間柄であった。二人は互いに惹かれあうものがあった。小原が成城小学校で創刊した研究誌『教育問題研究』に赤井はすでに投稿していた。成城小学校で二人はよき同志でありよきライバルでもあった。赤井は小原とともに学校運営・管理においても指導的役割を担っていった。赤井は秋田師範付属小学校で一緒に教鞭をとった照井猪一郎、愛媛師範時代の教え子であった山本徳行を成城小学校に呼び、教育の充実を図った。この二人はやがて赤井と共に明星学園を創っていくことになる。

2) 両雄並び立たず

赤井は学校経営にも有能さを発揮したが、教育研究に熱心で、同僚の教育研究・教育方法にも厳しい評価を加えていった。赤井が特に強調したことは、教科書や教材を自分たちでつくらなければならないということだった。『教育問題研究』誌に「教科書民間刊行論」を書き、「いかに」教えるかだけでなく「何を」教えるかをともに研究対象にしようという主張であった。赤井はまた、小原が対外的な講演にしばしば出かけ、学校での教育活動をおろそかにすることに猛反発した。やがて成城小学校では教師たちが「小原派」「赤井派」の二派に分かれ、対立は表面化した。

そのころのことを、池袋児童の村小学校の初代主事であり赤井の盟友でもあった志垣寛が、著書『教育太平記』に記している。

> 赤井は石川の生れ、広島を出て愛媛師範や武生（たけふ）中学を経、秋田師範の主事になった。在学中は名物男で落語の名人だった。何かあるとすぐ一席やる。「ええ相変らずお笑いを一席申し上げましておあとは……」というわけ。31室に屯（たむろ）して四六時中煙草ばかり吹かしているので三一亭煙突の称号を奉られていた。秋田に行って3ヶ月目に学校劇をやるやらせぬで校長の柏木三郎と正面衝突、こんなやぼな校長と仕事ができるかッと辞表を叩きつけ、こんどは止める止めさせんで4ヶ月もごたごた。4ヶ月目にやっと勝って（まけてたかも知れない）秋田をすてた。合計7ヶ月の秋田生活だった。それから小原に招かれて成城入り。もとより一介の訓導のつもりできた。ところが小原は幹事という肩書つきの辞令をくれた。
>
> 「何をやるんだい」
>
> 「まァ会計のことなどもやって貰いたいが」
>
> というわけ。小原にしてみれば自分より先輩である赤井だ。平ではすまんと思ったろう。

ところが赤井は仕事ずきでノラリクラリとしてはいられない性。グングン仕事をするので、何だか副主事みたいなカッコウになってしまった。小原には直言するし、なまける訓導にはピシピシ叱る。まるで沢柳が小原を叱るみたい。

そのころ小原は奥野や田中を外遊させたりしたが、自分も一度外遊したいと思っていた。その準備もあり、著述に忙しく自然自宅にこもって学校を留守にすることも多かった。赤井がいるからとの安心感もあったろう。そうなると赤井の勢力はますます伸びる。赤井に叱られた訓導は小原に訴える。小原は赤井と正面から議論するのは嫌いだ。どだい赤井と小原は性が合わない。赤井は沢柳に近い。二人は火と水だ。くちさがないジャーナリストは小原をルソーとし赤井をカントだといった。気の弱い小原は赤井と向き合っていると気が重くなる。何が何でもこの機会に外遊して息抜きがしたくなった。小原は本腰で外遊準備に没頭した。〈※8〉

「小原派」は赤井の排斥運動をするに至った。主に赤井が経理に独裁的であったこと、子どもたちに厳しすぎること、父母に横柄であるという批判だった。赤井は反論した。経理の乱脈をただす必要があったこと、教師の研究が思いつきの発表主義におちいっていること、児童の生活面である程度の規則の必要性を痛感したこと、父母の機嫌取りが度を越していることなどを挙げた。

さらに学校の規模をめぐる考え方の違いもあった。小原は広大な敷地を用意し、農園や牧場を含む大きなスケールでの学校を夢見ていたのに対し、赤井は小さな学校で教育の成果を上げることを目指していた。

職員会議が持たれた。澤柳校長の「双方で言い分があるのでお互いに話し合って誤解を解いてもらいたい」という要望もむなしく、一緒にやっていくことの困難さを痛感するものとなった。学校内外で「両雄並び立たず」と言われた。赤井は別の学校を創らねばと決意し、照井夫妻、山本とともに新しい学校づくりへと動き出した。赤井が『沢柳研究』第5号にこのころのいきさつを記している。

12年になると小原君はいよいよ外遊準備がいそがしそうで、ほとんど出勤しなかったので、わたしの担任の桜組は小野誠悟君にゆずって、わたしは主事代理のようになった。…中略…

ある日（澤柳）先生から「今晩おそく宅へ来るように」とのおことづけがあった。（2月21、22日ころと思う）…中略…先生の話によると、数日前に成城の奥野、谷、田中、上里、岸、田中宣、吉田、（もう一人だれだったか）の8人が来て、赤井の独裁的であること、職員に対してエコヒイキのあること、子供たちに厳格すぎること、母さま方に横柄（おうへい）であること、結城・照井などが赤井派をつくって、古いものを追払うとしている、などを列挙して、赤井を出してくれといった、ということを話され、その解明を求められた。

わたしは成城の経理、教育問題研究の経理の乱脈を直すには、暫く独裁的、厳密すぎるようにしなければならなかったこと、職員の研究の思いつき、デッチアゲ、発表主義であることを制裁するには、従来の発表に対して厳しい批判を加えねばならなかったこと、児童の自由が学習の自習をこえて、生活全面の放肆（ほうし）になっているので、ある程度の規則の必要性を痛感したこと、月謝の高いこと、後援会を盛んにする必要から父母のきげん取りが度をこしていること、などをあげ、この人々の非難は全面的にみとめるが、少なくともこれまではこういう態度でいなければならなかったことを弁明した。

澤柳先生はほとんど全部を認容して下さって、25日（月曜日）に職員会を開いてよく話

〈※8〉志垣寛『教育太平記　教育興亡五十年史』（洋々社、1956年）84頁

合うことにして、12時近くお宅を出た。…中略…

翌25日月曜日午後3時すぎから職員会が開かれ、澤柳先生、小原君も出席され、澤柳先生から8人の諸君から赤井非難のあったこと、赤井には赤井のいい分があるので、これから互に話合い、誤解を解き、よい交りに戻してもらいたいといわれた。〈※9〉

こうして開かれた職員会は、4時間に及ぶものだった。その場では「お互いの心はわかった」ということで散会したが、その後小原から届いた手紙で、赤井は彼と一緒に成城で仕事をすることは難しいと判断、新しい学校設立に向けて、資金援助を請うため茶郷氏のもとに向かった。なお、新しい学校の顧問は、澤柳氏へお願いし、承諾を得た。

3) 創立への第一歩

新しい学校づくりに取り組むことになった創立同人たちは希望に燃えていた。創立同人は赤井米吉、照井猪一郎、照井げん、山本徳行の4人だった。

学校建設のために資金を貯めていたわけではなかったので、どうしても経済的援助が必要だった。赤井は国分寺の茶郷基氏を訪ね、新しい学校の設立について援助を願い出た。

茶郷氏は朝鮮で鉱山を経営する実業家で、成城小学校の保護者であり、一人娘の担任は照井猪一郎だった。茶郷氏は赤井らの申し出を快諾した。土地代金ばかりでなく建築資金、教員の給与の分も約束してくれた。



井の頭の池

赤井たちの学校建設のための土地探しは本格化していった。いくつかの土地を下見し、疲れ果ててたどり着いたのが「井の頭」の地であった。池があり林があり自然豊かな土地はみんなの夢を駆り立てた。そしてさっそく土地の所有者である大盛寺の許可を得たのであった。

1924年（大正13）3月16日、井の頭の照井家（照井猪一郎・げん夫妻の家）に4人が集まり、麦畑の中に「明星学園建設地」の標木を立てた。3月の明るい穏やかな午後早い時刻であった。ここに新しい学校建設の第一歩が記されたのであった。

＜文責：一瀬 清＞

〈※9〉赤井米吉「沢柳政太郎先生」『沢柳研究』第5号（1971年9月10日）8、14、15頁

2　学園の誕生

(1)明星学園設立趣意書

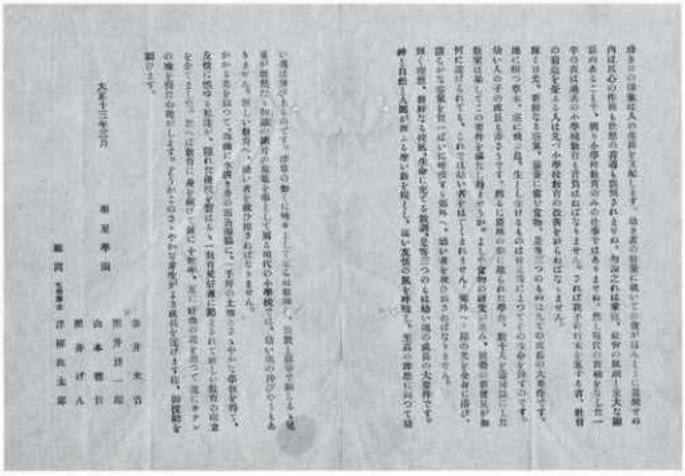
1924年（大正13）3月24日、児童募集のちらしに記した設立趣意書は次のとおりである。

幼き日の印象は人の生涯を支配します。幼き者の教養に就いて社会がほんとうに覚醒せぬ内は民心の作興も思想の善導も庶幾されませぬ。勿論これは家庭、社会の風潮と至大な関係のあることで、独り小学校教育のみの仕事ではありませぬ。然し現代の世相をなした一半の責は過去の小学校教育も背負わなければなりません。されば我が子の行末を案ずる者、社会の前途を憂うる人は先づ小学校教育の改善を計らねばなりません。

輝く日光、新鮮なる空気、滋養に富む食物、是等三つのものは凡ての成長の大要件です。地に樹つ草木、空に飛ぶ鳥、生とし生けるものは皆是等によってその生命を伸ばすのです。幼い人の子の成長も亦そうです。然るに塵埃の巷に建てられた学舎、数十人を寿司詰にした教室は果してこの要件を満たし得ましょうか。よしや食物の研究が進み、医薬の新発見が如何に遂げられても、これでは幼い者をはぐくまれません。郊外へ！　陽の光を全身に浴び、清らかな空気を胸一ぱいに呼吸する郊外へ、幼い者を救い出さねばなりません。

輝く理想、新鮮なる校風、生命に充てる教訓、是等三つのものは幼い魂の成長の大要件です。神と自然と人間が与うる聖い教を糧とし、温かい友情の風を呼吸し、至高の理想に向かって幼い魂は伸び上がるのです。浮草の如くに転々として定まらぬ教師と、点数と競争で駆らるる児童が雑然たる知識の断片の蒐集を事として居る現代の小学校では、幼い魂の伸びようもありません。新しい教育へ、幼い者を救い出さねばなりません。

かかる考えを以って、森幽に水清き井の頭公園脇に、1千坪の土地とささやかな学舎を得て、友情に燃ゆる私達が、隠れた後援を誓わるる一教育愛好者に励まされて新しい教育の樹立を企てました。思えば教育に身を捧げてここに十数年、互いに紆曲の道を辿って遂にカナンの地を得た心地がします。どうかこのささやかな芽生がよき成長を遂げます様、御援助を願います。





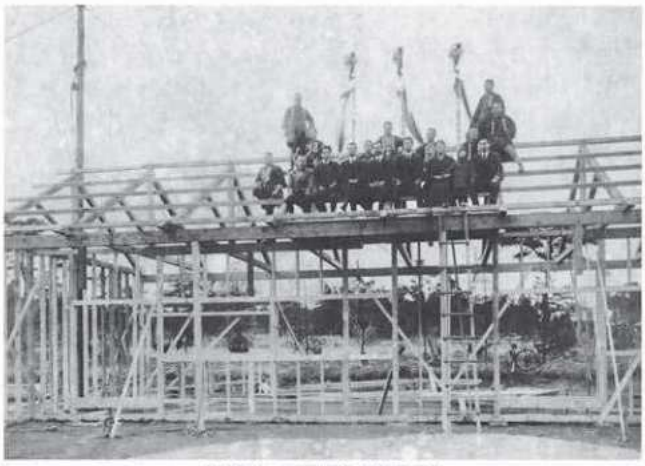
児童募集に関しては次のように記した。

> 一、名称　明星学園（尋常小学校）
> 一、位置　井の頭公園弁天黒門前（吉祥寺駅より7町）
> 一、募集人員及び学年　尋1，2，3年　各級男15　女15宛
> 一、開校期日　4月20日の予定
> 一、授業料　6円
> 一、申込所　市外千駄ヶ谷911赤井方
> 毎日午後1時より4時迄の間にお子様同道で御出下さい。

創立同人はこのちらしを8,000枚作り、中央線沿線に配布した。

(2) 開校の日

設立趣意書には「4月20日開校」と記したが、3月下旬のそのとき、校舎建築はまだ始まってもいなかった。慌しかった開校準備の様子を、のちに創立者たちがそれぞれに述懐している。



上棟式　1924年(大正13)

開校予定は4月20日としたものの実は校舎の建築契約もこの日漸く出来たのであった。学校とはただ一本の立札だけであった。思えば無謀なことであった。建築屋にはどうか1ヶ月間に出来上る様にと念を押したが、それも後から考えれば無理な注文であった。が兎に角にこうして児童をまつことになった。…中略…

困ったことには校舎の建築は一向に捗どらない。毎日車に1台位づつしか材木が運ばれなかった。大工小屋が出来て釘の響きだしたのは4月21日であった。これでは魔法を用いない限りは4月中に出来よう筈がない。止むを得ず15日開校ということにして、5月1日に父兄を招集してその諒解を求めた。その頃のもどかしさは筆につくされない。が兎に角に5月5日には漸く上棟式、14日はコケラの屋根だけ出来た。勿論床も張れず腰板も出来ておらぬ。然しもはやこれ以上に延期は許されない。その翌日を以て開校式をあげることにした。〈※1〉

開校式当日、校舎は仕上がっていなくとも森の学校という主張で盛り上がろうと思っていた創立同人。しかし開校の日はあいにくの雨であった。それでも児童父母は集まってくれた。1年7人、2年5人、3年9人、総勢21人、教師4人の学校はこうして始まった。開校の日には、ドルトン・プ

〈※1〉赤井米吉「明星五年」『渾沌』第8巻・第1号(1929年1月22日)5～6頁

ランの提唱者、ヘレン・パーカースト氏にも来てもらう予定であったが、雨が激しく断りを入れた。澤柳政太郎氏には来校していただいた。

当時の様子を、同人たちは以下のように記している。

5月15日明星学園の開校の日は、朝から荒天だった。パーカーストは全国を巡って、その2、3日前に帰京していたので、パーカーストと先生と2人に開校式に立会ってもらうことにしていたが、とてもパーカーストを招くことはできない天気だったので、それはことわって、澤柳先生だけをお迎えにいった。

吉祥寺駅から学園まで歩いてもらったのは、ほんとうに穴があったら入りたいくらいであった。先生はきれいな赤皮のくつをはいておられた。そのころは赤皮のくつは第一流の人々でなければはかないものだった。それも雨の日には黒くつにかえたものである。その赤ぐつで、いなか道を15分間も、雨の中を歩いていただいたのは、ほんとうに恐縮なことであった。

校舎はまだ半たちで、雨がふきこんだ。入学生は1・2・3年で21人、その父母、まことに淋しい入学式だったが、澤柳先生はわたしらをほめ、必ず立派な学園になると思うと激励して下さった。(赤井米吉)〈※2〉

開校の日はすがすがしい若葉の5月15日、天気がよかったら武蔵野の空気を吸っただけでもどれくらいよい印象を残したかわからないのに、これはまたどうしたものか大変な荒天、印象の点からだけ考えるとこの方はむしろ強かったでしょう。朝から冷たい冷たい雨が止まずに降りつづけて居る。今のように便利な自動車があるでもなく、淋しい公園の道を御臨席の澤柳先生をはじめ皆歩いてお出でになったものです。然も校舎はやっと半出来で、周囲には窓一つなく、床板も仮張りのがたがた、ほんとに屋根があるというに過ぎなかったのです。仕方がなしにあたりに幕など借りてまわしたが、それでも雨は遠慮なく吹き込んで来るので、澤柳先生も、「これではあんまりひどいなア」とおっしゃいましたが、ほんとにお気の毒で皆に済まないという気持でいっぱいでした。せめて今日だけでも朗らかな天気を恵んでくれたらと、薄暗い空がうらめしくてなりませんでした。それから2、3年学園に何か催し事のある度に雨が降ったので、明星と雨とはつきもののように言われたものです。

学園の誕生は今は故人となられた茶郷氏の後援に依って案外楽に出来たが、さてこれを哺み育てて行く苦心はまた決して容易なものではなかった。その意味に於て開校の日の嵐は、吾々にそうした暗示と覚悟を与え、兎角(とかく)誇らかになり勝(がち)な人間の心に強い鞭をあて、謙譲と反省と同情とを教えてくれたのかもしれない。(照井げん)〈※3〉

大正13年5月15日、明星学園開校の式典は入学式を含めて行われた。あいにくの雨を半ぶきの屋根はしのぎかねて、式壇はぬれるにまかされた。参列の子どもたちの、親たちの、来賓の頭から頬をつたって雫は床をぬらした。でもみんなの顔はかがやきにあふれていた。

＊　＊　＊　＊

校地は緑にかこまれた1,000坪の畑地、校舎といってもそれは109坪のほんのバラック普請、集まった児童は1年2年3年の3学級あわせて男女21名——これは明星学園発祥の種の起源であった。(照井猪一郎)〈※4〉

〈※2〉赤井米吉「沢柳政太郎先生」『沢柳研究』第5号(1971年9月10日)23頁
〈※3〉照井げん「追憶二三」小学部教育月報『ほしかげ』第7号(1934年5月15日)
〈※4〉照井猪一郎「呱々の声」『明星誕生ものがたり』(1994年5月15日復刻発行)
文芸部『明星 25周年記念』(1949年11月15日)に初出

次の日は前日と打って変わっての晴天。井の頭の新緑は洗われた鮮やかさに輝いた。保護者はこの日も子どもに付き添って来校してくれた。前日できなかった記念撮影を、校庭で1枚、森の中で1枚撮った。記念植樹も行った。植樹の木は寿命の長い公孫樹（イチョウの木）とし、入口の左右に教師たちが1本、児童が1本植えた。

> 校舎はまだまだ出来なかった。然しそれも考えようによっては却ってよかった。ここは児童の家であった。教師ばかりで考えてはいけない。「これから皆で考えて立派な学校を建てよう」とも云った。…中略…校舎の方は大工を急がせ乍ら、私達は毎日児童と共に校庭の手入をした。自然科の第一歩はこうして自分たちの家の営みとなったのは意味あることであった。校舎の日に日に完成に近づくのを見るのも心地よかった。正面に土手も出来た。周囲に大きな樹木も植えられた。しだいに学校らしいものが出来て来た。児童も続いて入って来た。私達の明るい心地がずっと続いた。〈※5〉



開校記念写真（1924年5月16日）

(3)「社会立の学校」をめざして

6月21日に校舎は完成した。学園の敷地は1,000坪、落成した校舎は109坪、3間に4間の教室5つ、事務室、小使室、物置、便所で、その工費は1万2千円、バラックとはいえ心地よい建物であった。南にたたきの廊下を置き、教室からすぐに庭に降りられる構造だった。児童をできるだけ外に出させるためであった。

当日、児童30人と父母その知己の人々とともに開校披露式をあげた。梅雨時には珍しい晴天の日であった。人々は口々に「おめでとう」と言い合った。来校者は70名。赤井米吉が学校の教育方針を述べた後、澤柳氏の講演、栃内海軍大将、福田北多摩郡部長、自由学園の羽仁もと子女史、成蹊小学校の小瀬松太郎氏などの来賓祝辞があり、父兄総代祝辞は中川景輝氏が行った。児童も「お星さま」を斉唱した。

この開校披露式で赤井校長が語ったことは、私立学校のあり方として画期的なことであった。

〈※5〉 赤井米吉「明星五年」『渾沌』第8巻・第1号（1929年1月22日）6頁

学園はわたくしが設立者ということになっています。しかしこれは法律上の手続でありまして、わたくし一人の設立したものではありません。照井夫妻、山本君の4人が一心同体で経営して行くのであります。がこの4人でも経営できません。この4人はここで仕事をするもので、ここの経営はわたくし共の陰にかくれて絶大な援助をして下さる人によってなされているのであります。この人は名を出すことを好まれませんので、暫くかくれた人としておかねばなりません。むろんその人も自分の学園を作るつもりで助けて下さっているのではありません。この国、この社会の一教育機関を作るつもりで居られるのであります。これは全くこの社会のものであります。この教育機関を利用してわが子を教育しようと思われる方は、何人でもこれを利用することができます。

わたくし共には一個の教育上の理想があります。この理想を実現するために新しい学園を建てることが必要であると思って、ここに建てたのであります。しかしわたくし共の理想はわたくし共の私かな考えではありません。わたくし共はこの理想はわが国社会の理想であると信じています。この理想によってわが国社会の必要とする人物を養成しようと思うのであります。

かく経営においても、教育においても、ここはわれわれのわが侭勝手をするところでなく、わが国社会の一教育機関で、わたくし共は暫くここに働くものであります。だから、「私立」といわれますが——むろん「公立」ではありません——いわば「社会立」であります……この意味において、御来会の各位に将来この学園の成長発達に対して深い御関心を持たれんことを希うのは、敢てわたくし共への御援助を希う私的な希いではなく、わが国社会の発展を助ける「公」の義務であることを訴えたいのであります。〈※6〉

私学ではあるが社会を視野に入れて、研究の成果を社会に返し、社会を変えていくのだという決意と、「社会立学校をめざす」という創立者のはっきりした意志が示されていた。事実、明星学園の教育研究は公的教育に大きな影響を与えるものとなっていったのである。



創立翌年の運動会(1925年10月21日)

〈※6〉赤井米吉「お礼に代えて」『明星学園PTA会報』30周年記念号(1954年6月)2頁

(4) 建学の精神

明星学園は4人の教師によって創立された。4人を、そして初期の明星学園を支えていた教育理念とはどのようなものであったのか。照井猪一郎の「明星誕生ものがたり」を中心に記述する。

> めまぐるしい新教育の花園から、この草深いむさし野にわけ入って来た私たちのあの日の姿を人は何と見たであろう。
> 「あんなところに学校をつくったって子どもなんか入るものか」。親しい友だちまでがそういってとめた。電車は東京から30分おき、駅から徒歩20分、お天気でも霜どけ道では靴を泥にすいとられる井之頭でもあった。
> しかし、子どもと学び、子どもと生きる私たちには、そこにいささかの不安もなかった。
> 個性尊重——自主自立——自由平等
> ただそれだけが私たちの上に輝く教育の灯火(ともしび)であった。
> ただそれだけが明星教育のゆるがぬ基本理念であった。
> その日から学習も訓練もその他の一切の教育活動もこの根源からこんこんと流れ、うるおい、しみわたって行くべきであった。
> 森のひとつ屋はせまかったが、子どもたちの教育の場は広かった。とざさぬ窓から子どもたちは無限に解放さるべき教育の約束だからである。
> 学校と家庭と社会——それは子どもたちの生活環境であった。両親と先生とちまたの人たち——それは彼らの指導体制であった。
> 子どもたちはつねにこの三次元の中に学び育てばよいのであった。〈※7〉

ここで照井が述べた明星学園の教育理念、「個性尊重——自主自立——自由平等」、この三つは以来脈々と引き継がれ、今日に至っている。

「個性尊重の教育」

子どもたちはそれぞれの個性に生きている。個性が理由なく傷つけられたり歪められたりしたのでは正しい教育はできない。教育の原則はまずこの個性を十分に伸ばすことで、ひとりひとりの個性に即してきめ細やかな教育の方法が工夫されねばならない。ひとりひとりの個性に合わせて、伸ばすべき長所を伸ばし、補うべきことを支援していく。

「自主自立のひとたらしめる教育」

子どもの自主性を重んじ、自立的な態度を身に着けるためには、学び方も主体的であるべきである。自信に満ちた生活は自主性によって支えられる。創意、発見のある学習態度はそれを促進させる。明星で保障される自由は勝手気ままにふるまうことではなく、自己の確立に向かっての自由である。

「自由と平等の教育」

人は自由であり平等でなければならないということは、子どもたちの上にも無条件で当てはまる。子どもたち同士が平等であり、子どもと教師が平等であるように、教師同士も平等なのである。何人も「強制」による束縛は受けない。自分が自由であるということは、他人の自由をも同等に尊重されねばならないことである。

＜文責：一瀬 清＞

〈※7〉 照井猪一郎「わが道をあゆむ」『明星誕生ものがたり』(1994年5月15日復刻発行)
文芸部『明星 25周年記念』(1949年11月15日)7頁に初出

3　創立者と後援者

(1)4人の創立同人

■赤井 米吉（あかい よねきち）


赤井米吉

赤井米吉は1887年（明治20）6月1日、石川県石川郡野村（現金沢市）に生まれた。生家は山本、後年赤井家を継ぐ〈※1〉。少年期に金沢市川上新町のメソジスト教会の日曜学校に通い、15歳の時洗礼を受ける。

1902年（明治35）、15歳で石川県尋常師範学校乙種講習科を修了すると11月、石川県犀川村駒帰尋常小学校二又分教場の準教員として赴任する。赤井の教員としての出発点である。翌年3月、この準教員生活に別れを告げ、石川師範に入学する。師範在学中、内村鑑三・島崎藤村に書を送る。藤村からは丁寧な返事をもらい文学を志すきっかけとなる。1907年、師範卒業に際し赤井は将来の希望について「私立学校の設立」と書き、高師の英文科入学を希望したが受験の結果は不合格、石川郡金石尋常高等小学校に赴任することとなる（20歳）。赤井学級はきわめて活気に満ちたクラスであったが、この異色教師に対し町長をはじめ町の有力者は彼を白眼視、ただここでの教員生活が1年だったこともあり、問題が表面化することはなかった。また、のちに赤井夫人となる野里つるは、当時の高等4年女児組に在籍していた。

1908年広島高等師範学校予科に入学、多くの師友に恵まれる。小原国芳との出会いもここにあった。英文学の研究にも力を入れ、アーヴィング、T.S.エリオットの著作のいくつかを全訳し、バルザック、ツルゲーネフ、トルストイの英訳本を読んだ。また、英語劇に力を入れ、講談部長への就任、キリスト教青年団体「光塩会」への加入など、その活動も多彩で精力的であった。1910年、本科2年の夏休みには、山口県秋吉台に本間俊平を訪ね、1か月滞在し、労働と信仰の鍛練と教えを受けた。そんな中のひとこまである。――ある朝、赤井を含む5～6人の学生が自主的に礼拝をしていた。ひょっこり顔を出した先生は礼拝していた学生に対し、「なに？神さまあの人たちは寝ていますが、わたしは起きています。わたしは善人です、アーメンか。馬鹿やろう！……何故友達を起こさないのか」と大雷を落とし、あわてて起きたほかの学生には「しっかりやらねば駄目だぞ」と言われただけだったという。納得のできなかった赤井はこのことについて本間に質問した。その時のことを、のちに赤井は次のように書いている。

> その晩、庭で涼んでおられる先生に、このことを聞くと、「学校ではよい子をほめて、悪い子を叱る。それがいけないのだ。悪い子がおるというのは、善い子が本当に善い子でないからだ。自分の友だちが悪いことをするのを黙って見ているのは、自分もなかば悪事の手伝いをしているのだ。本当に友情があるならば、なぐられたって、友人の悪をとめねばならぬ」といわれた。先生が非行少年に同情されたり、小菅の刑務所では囚人に、自分の不親切をわびたりされたのは、この精神である。「世の罪を負う」ということを実際に感じ、なされたのである。〈※2〉

〈※1〉 1908年（明治41）8月、西田幾多郎の仲介により、赤井家の養子となった。
〈※2〉 月刊『全人』（玉川大学出版部、1963年10月）

赤井はここで「学校の先生でおまんまを食って、文学創作をやろう」という二足のわらじの生活を夢見ていたことに厳しい自己批判を加え、教師としての生活に「身も心も」統一しようと決意する。



広島高師を卒業した赤井は1912年（大正1）、25歳で野里つると結婚。愛媛師範学校に赴任する。校長山路一遊から深い感化を受け、教育問題を語り、ロックの『教育論』、ルソーの『エミール』、ペスタロッチーの『ゲルトルート』などの古典に触れた。後に明星学園創立の同人となった山本徳行は、この時代の教え子である。

1916年、福井県立小浜水産学校教諭兼舎監に転任。小浜という町は漁村特有の漁と酒の雰囲気に満ちていた。学校は春先、鰯の時期になると、あたかも鰯屋のようにあわただしくなり、学校生活が労働を中心に展開していた。漁師気質で気の荒い生徒も実習に出たときはまことに生き生きと活躍していた。教師赤井は、そういう労働の事実と教科指導を結びつけた場合、生徒の眼が授業中に生き生きとしてくることを知った。

1919年、福井県立武生中学校教諭に転任。校長は教育に対する情熱を持たない小人物であり、生徒と教師集団の関係もまるで仇同士のようだったという。教科書もいかにも味気なく、このとき赤井は「出口のない袋小路」の中で、教師の頽廃と形式主義教育に対する反発を感じ、新たな天地を求めていたようだ。

この時期、大正デモクラシーの思潮は教育界にもしだいに顕著になり、1917年成城小学校設立、翌18年には鈴木三重吉が『赤い鳥』を創刊する。小原国芳が成城の主事となり、『教育問題研究』を出すと、赤井も投稿の機会を与えられた。その一方でスペンサーの『教育論』の翻訳を進めていた赤井は澤柳政太郎、小原国芳から成城へ招かれたが、秋田師範の付属小学校主事としての招きもあり、澤柳と相談の結果、1921年9月、ひとまず秋田へ赴くことになった。

秋田師範では照井猪一郎との出会いがあったが、校長の官僚的態度に反発を感じ、半年で辞任、1922年春、成城小学校に幹事として着任すると、愛媛師範時代の教え子だった山本徳行、秋田師範付属小の照井猪一郎というすぐれた教師を成城に招く。6月、澤柳政太郎・小西重直・長田新の3氏が欧米教育視察より帰国。澤柳や長田はドルトン・プランに注目、赤井にこれを紹介することを勧めた。彼はE.デューイ及びH.パーカーストの著作を、それぞれ『児童大学の実際』『児童大学の教育』という題名のもとに翻訳、紹介し、そのことによって赤井米吉の名は一躍全国に知れわたった。当時のすぐれた教育者でもあった澤柳政太郎と識り、ドルトン・プランの紹介者となったことは、赤井がこの時期のいわゆる新教育運動の重要な担い手になったこと



左から澤柳政太郎氏、パーカースト氏、赤井、秘書のカフマン氏

をも意味した。しかし成城小学校の教師集団の内部では、幹事赤井に対する反感が強まり、彼の排斥運動が表面化した。このいきさつについては、志垣寛が紹介しているが〈※3〉、結局は小原国芳と赤井とは「両雄ならびたたず」ともいうべき存在だったのである。ここで赤井は小原派とたもとを分って照井猪一郎、山本徳行とともに、新たに自分の学園を創ることを決意するに到る。

学園設立にあたっては、当時朝鮮の永中金山を経営しており、子女を成城に入学させていた茶郷基氏に資金援助を仰いだ。1924年（大正13）3月16日、赤井は照井・山本と家族を引き連れて、幸運にも確保できた井の頭の一角に「明星学園建設地」の標木を立て、4月20日の開校予定日を目指して準備が始められた。予定より遅れはしたが5月15日開校を迎え、校長となる。

赤井は「児童の研究、教材の研究、然して方法の研究」が統一的におしすすめられてこそ「真の教育研究」に値する、と考えた。その限りで彼は当時の文部省の教育課程政策に対しては、はっきりと批判的立場に立った。「国定教科書以外のことを教えるのは法律的犯罪であるかのように考えられている今日の状況」〈※4〉を不合理・不自由だと断じ、岡田文相に対してもかなりきびしい批判を投げかけた。〈※5〉

したがって、赤井が明星学園を創設したのは、学校教育が国家権力によって画一的に統制されていることを批判し、何ものにもとらわれない自由教育を実践する場を研究的に創造していくことが、その重要な目的なのであった。ドルトン・プランについても、彼はそれを我が国に紹介したことについては責任を負ったが、プランそのものについては決して無条件に共鳴したのではなかった。むしろきびしい態度でそれが流行現象になることをいましめた。

1928年（昭和3）、明星学園中学校、高等女学校開校、校長となる。この時期日本はファシズムへの傾斜を見せ始め、歴史が変動の渦中にあることが誰の眼にも明らかになってきた。赤井はその著作『新しき教育計画のために』〈※6〉の中で、資本主義社会の矛盾を「集団的労働と集団的経済」によって克服すべきだと説き、社会改良主義ないしは修正資本主義の立場から教育改造論を展開したのであった。マルクス主義とは立場こそ異なれ、「明確な社会認識と、非合理的なものを極力排斥する」という基本的態度を堅持しようとしたことは、この時期に彼が自由主義の立場をいぜんとして守っていたことをも意味したのであった。1934年に、彼が大阪へ講演旅行中、特高〈※7〉の家宅捜索を受けたのも、赤井がそのような理論ないし思想の持ち主であったことと無関係ではないだろう。

1936年、英国ロンドンの郊外チェルトナムで開催された第7回世界新教育会議に出席、つづいて欧米諸国の教育を視察。赤井はさまざまな会合において国際理解と平和を説くが、一方でイギリス・アメリカの経済的・政治的支配が、後進資本主義国ならびに植民地においていかに甚だしい矛盾を生んでいるかを認識することになる。欧米視察を転機として、赤井の思想の中に、それまで稀薄であったナショナリズムがあらわれてくる。


英国へ出発（横浜港）

政府が国家総動員法を公布し、文部省が『国体の本義』を発行した1938年、赤井は「日本民族は再び大飛躍をなすべき時期に来た」〈※8〉と述べ、「皇国の道」教育に協力する立場をとった。明星の中学部第1回卒業生が徴兵の年齢に達したのは1937

〈※3〉志垣寛『教育太平記　教育興亡五十年史』（洋々社、1956年）
〈※4〉小原国芳『日本の新学校』新学校叢書（玉川学園出版部、1930年）
〈※5〉赤井米吉『ダルトン案と我国の教育』（集成社、1924年）
〈※6〉赤井米吉『新しき教育計画のために』（刀江書院、1932年）
〈※7〉特高＝特別高等警察。おもに思想犯を取り締まった。
〈※8〉赤井米吉『新世界観と教育』（教育建設社、1941年）

年であるが、以後10回生までが軍の庭に出陣していった。赤井自身、敗戦間際の本土空襲により母を防空壕の中で失っていた。

敗戦を迎え1945年（昭和20）の秋、赤井は連合国軍総司令部顧問として教育再建のために力を尽くすことを要請され、新しい教育方策の樹立に参画する。他方、彼は郷里金沢に女子のための専門学校、金沢女子専門学園（のち金沢女子短期大学、現在の金沢学院大学）を翌年設立、園長となる。

これらは赤井が戦後の社会、教育にそれまでになしえなかった活動分野を切り開こうとしていたあらわれであるが、1946年11月4日の教職追放令により赤井はいっさいの教職から退くことを余儀なくされるにいたった。この間の事情を赤井は後年、次のように述べている。

> わたしは戦前にしばしば警視庁の特高刑事のお見舞を受けた。岡・三木・戸坂といった左翼学者が訪ねてきたからであろう。満州旅行をした時には、大連の水上署はわたしの乗船をとめようとしたし、欧米旅行から帰った時には、横浜の水上署がわたしの下船をとめた。わたしは何かあやしいものだったらしい。
>
> ところが、戦争がすむと、「超国家主義者」ということになって「追放」を命ぜられた。追放係のアーロウッド少佐は、わたしの助命運動をするといったが、わたしは辞退した。わたしはたしかに追放令にひっかかるような行動をしているのだから、多少の知り合いの故をもって助命されるべきものでない、と思った。あまたの教え子が「先生いってきます」「よし、やってこい。万歳」と送り出し、その中の28人もが帰ってこないのに「わたしは平和主義者でありました」ということはできない。〈※9〉

彼には自分の過去をいつわることができない良心があった。

1952年（昭和27）10月、赤井は追放を解除された。追放期間中、明星、金沢女子短大とも新たな発展過程を歩んでいた。彼は両校に戻ることなく金沢、北陸新聞社社長に熱心な勧めがあり、就任するも1953年1月に辞任を決意。6月、明星学園理事長に迎えられる。創立30周年を祝い、学園拡張のための資金集めに奔走するなど、明星のために力を尽くした。

この間、1955年ふじ幼稚園設立、1956年には成立した新教育委員会法にもとづいて、武蔵野市教育委員会の委員長となり、全国市町村教委連合会会長に四たび推された。1957年11月、天皇・皇后の園遊会に妻とともに出席。1959年（昭和34）、教育功労者として藍綬褒章を、さらに1964年、勲四等瑞宝章を受ける。この年6月、喜寿を迎え、多くの友人知己・教え子らの勧説により喜寿記念として教育論集『愛と理性の教育』〈※10〉を平凡社より上梓。


赤井先生胸像（小学校いちょうの広場）

学園においては1958年（昭和33）理事長を辞め理事に、1965年7月上田八一郎小・中・高校長逝去にともない、8月1日学園長となる。1973年10月、悪性貧血のため三井記念病院に入院、入退院を繰り返す。1974年（昭和49）2月15日容体急変、急遽吉祥寺森本病院に入院。容体刻々悪化。2月26日永眠。86歳。病名腸出血。3月9日、明星学園にて学園葬。

〈※9〉赤井米吉「教委四年」（全国市町村教委連合会編『教委研究』1961年3月号）
〈※10〉赤井米吉教育論集『愛と理性の教育』（平凡社、1964年）

■照井 猪一郎（てるい いいちろう）


照井猪一郎

1887年（明治20）4月7日、秋田県平鹿郡川西村（現横手市）、照井直吉（秋田師範第1回卒業生）の長男として生まれる。1902年、県立横手準教員養成所を卒業すると、4月から平鹿八沢木村尋常高等小学校に準教員として奉職。照井15歳の時であった。1904年、同校を辞して上京。1年独学したのち、私立順天中学校4年生に編入、2年間昼は順天中学で、夜は正則英語学校に通う。1907年3月、順天中学校を卒業。郷里からは医学専門学校に入り、医者になるよう要望されるが本人にその意志なく、独学を続け、かたわら太平洋画会で絵画を学ぶ。

1916年（大正5）秋田県仙北郡内小友小学校代用教員となる。1918年小学校尋常科正教員の免許を取り、内小友小学校訓導となる。さらに1920年、小学校本科正教員の免許（全教科）を無試験で取得すると、翌21年秋田県師範学校付属小学校訓導として迎えられる。在任中彼は公会堂で学校劇（照井は日本の児童劇を芸術としてあつかわず、教育のために劇を活用した。だから児童劇といわず、後年学校劇といっている）を発表、秋田魁新聞紙上で県知事と学校劇論争を行っている。秋田県教育界での学校劇の草分けであり、地理教育・理科教育・文学教育・歴史教育に重要な役割を演じた。この年9月赤井米吉が付属小学校主事として着任。二人の出会いがここにある。翌1922年5月、赤井が東京都牛込区私立成城小学校に幹事として転任すると、照井もまた同年11月、成城小学校訓導として迎えられる。また翌1923年、同僚の加藤げんと結婚する。

1924年（大正13）5月15日、現在地に明星学園開校。創立同人赤井米吉・照井猪一郎・照井げん・山本徳行の4名。また茶郷基が資金面からこの仕事を援助した。この年は関東大震災の翌年、経済・社会は混乱し、大正デモクラシーの気運は衰え、日本が再び暗い時代に入っていく時代でもあった。

照井の教育については柴田勝（元成城初等学校長）が『新教育研究』1号〈※11〉の中で次のように評価している。要約して紹介する。

> 照井の教育実践は総じて“やりぬいた”、“考えぬいた”というところから生まれた独特なものである。教養の広さと児童認識の適切さを示す実践といえる。その特徴をあげると、24時間教育の必要性に着目した夏季生活、歩くことを基本とした見学行事、子どもが自然に目を向けることを重視した「自然科」、リトミックによる音楽教育などがある。そればかりではなく文学教育について、また具体的方法についての研究と実践は特筆に値する。彼の作った『新読本』は長い間のプリントによる実践を活版にしたものだが、日本の小学校の国定教科書に影響を与えた。センテンスメソッドによる国語教育の基礎と方向を示す役割を果たした。さらに学校劇を好み、その教育的効果と重要性を児童教育の上に置いた先覚者であった。

〈※11〉柴田勝「照井猪一郎とその教育」『新教育研究』1号、1965年4月



照井先生と受持ちの2年生(1925年)

1927年（昭和2)、ＮＨＫ（愛宕山）から学校劇を放送する。その時の出演は5･6年生で、だしものは「夜明けまで」。照井猪一郎作・演出であった。1937年（昭和12)、創立以来つづけてきた夏季学校が軌道にのる。6年生は軽井沢寮で10日間、4・5年生は千葉県建田村の農家と朝日屋に分宿して10日間。これが千倉生活の第1回である。1939年、この年から逆立ちのできない子どもが一人もいないくらいに体操がさかんになり、当時世間から「逆立ち学校」とも言われた。

1941年（昭和16）4月1日、小学校が国民学校に改組。私立小学校は国民学校と認められず、明星学園では小学校を初等部と改称した。この年の12月8日に太平洋戦争が始まる。1943年7月、汽車に乗らず、歩いてでも千倉まで行き、夏季生活をさせると頑張ったが許可されなかった（前年7月20日に学童の旅行禁止令が出されていた)。1944年4月、学童疎開はじまる。明星では縁故疎開をすすめ、疎開先のない子どもたちを学校で守るために寝具・食糧を確保し、100人あまり収容の防空壕建設のため、5･6年の子どもたちと小学校の職員が突貫工事をした。また用務員が帰郷したため照井は用務員室で宿直し、学校を守りぬく決意であった。

終戦の翌年、1946年（昭和21）照井は東京私立初等学校協会理事、日本私立小学校連合会副会長となる。1947年3月、明星学園初等部を小学校に改称。4月1日、学制改革（6・3・3制）が行われると新制中学校の初代校長に就任。1948年4月、日本新教育研究会理事に就任。7月、夏季学校が6年ぶりに復活。1949年7月、文部省国語審議会委員となり、1957年7月まで継続4期にわたり同委員をつとめる。1955年、東京都知事から教育功労者として表彰される。

1956年（昭和31）3月、新しい千倉寮で第1回千倉研究会をもつ。さらに翌1957年11月には、第1回校内教育研究集会がもたれると、「このような研究会が職員側から、自主的に発案され実行されたことは非常にうれしい。学校がこの会を主催する」といって、今後毎年続けるように要望したという。また､照井は教育研究について『明星誕生ものがたり』の中で次のように語っている。

> すぐれた教師というのは授業と入試準備のうまい先生のことで、うまい授業というのは、決められた教材の分量を45分の1時限内にはめこみ、巧みな演技で器用にまとめあげられることをいい、参観人をアッといわせ、子供たちを五里霧中にさまよわせることをさしたものであった。
>
> それはすべて子供のためのように見えて、その実先生自身の満足のためのものであった。…中略…



教育は常に教師の一方的な思わくで行われ、授業は相手の個性を無視した十把ひとからげの一斉取扱いであった。

こうした技術をいやがうえにも磨きあげようとする授業の研究会は、ひんぱんに各所に行われたが、教育の本質を極めるための研究会はどこにも見られなかった。

私たちはまずこうした教育の世界に見切りをつけ、ことごとくこれを非難した。

子供たちはそれぞれの個性に生きている。それが理由なく傷つけられたり歪められたりしたのではそのこの正しい成長はない。

教育の原則はまずこの個性を充分に伸ばしてやるところに終始する。一人一人の個性に即して教育の方法が工夫され施されなければならない。〈※12〉


照井先生レリーフ(小・中図書室)

さらに、次のような戒めも忘れてはいない。

教科の研究、授業のくふうは教壇に立つものの当然の任務であり、責任であります。

特に私立学校の場合にあっては、それぞれ建学の理念に基づく信条のもとに、それらが進められるものであります。

しかし、その教育が単なる特殊であるならば、それは論外であります。窮極において一般に通用しない“特殊”は、それは特殊でもなんでもなく、奇型と言うべきでしょう。わたしたちが求めてきた教育は、まさに、人間がする教育として最も正しく、最も豊かなものを目指していたものであります。人間の子どもに、否、日本民族の子どもに、“なにを”“どのように”教えなければならないか、考えさせなければいけないのか、その一点にかかわっているのであります。(第1回公開研究会校長挨拶)〈※13〉

1960年(昭和35)2月、はじめて御飯がのどを通らぬといいだす。2・3・4・5月と病床に伏す。同年5月3日、藍綬褒章を授与される。1961年11月21日、第1回公開研究会において「私立の教師には、教育の本質をとことんまで追求する使命がある。それをやろうとしている明星の教師に拍手してやってください」と、終わりの挨拶をする。1962年8月、千倉の夏季生活には元気な姿を見せたが、しゃっくりが止まらなくて苦しんだ。1963年11月22日、第3回公開研究会には最後まで出席するつもりで頑張っていたが、研究会の前夜40度を超す発熱で倒れる。1964年(昭和39)2月25日永眠。76歳。病名急性腎炎、食欲不振による心臓衰弱。3月2日、学園葬。

■照井 げん(てるい げん)

1890年(明治23)12月、秋田市に生まれる。1910年4月、秋田県女子師範学校を卒業、西馬音内、川尻、船川小学校を1922年3月まで歴任する。

同年4月、私立成城小学校に奉職。5月には赤井米吉が、また9月には照井猪一郎が成城に着任している。研究のための実験校として創設された成城小学校は開校5年目。研究成果を次々に発表していた。教育問題研究会・教育講習会発足、雑誌『教育問題研究』発行等、成城小学校のも

〈※12〉「三つの生命」『明星誕生ものがたり』(1994年5月15日復刻発行)、文芸部『明星 25周年記念』(1949年11月15日)7頁に初出、『残照 照井猪一郎先生遺稿集』(1968年2月25日)所収
〈※13〉第1回公開研究会資料『明星の授業 1961』

っとも教育活動の躍動した時期に教鞭をとったわけである。

1923年（大正12）11月、照井猪一郎と結婚。翌1924年、明星学園小学校創立に際し、同人として参加する。創立当初、1年生の担任、その後は音楽科を担当、かたわら会計、学園創立当初の多忙な学校事務一般の整理にあたる。

音楽教育において、音楽の3要素の中でも最も重要な要素と言われるリズムに焦点をあてた。リズム教育は肉体運動を通して行うべきであると主張、1年生に対しては歌を教えることよりも、まずピアノの音に合わせて歩かせることから始めた。また、小学校における音楽教育の目的を和音感をつけることとし、これこそが日本人の耳をよくする本当の音楽教育であるという考えのもと、実践を深めた。


照井げん

人間、照井げんについて原田満寿郎は「"学園の母"と親しまれ、慈母と女傑の二面が巧みに調和された人。～美しというにあらねどわが妻は人の妻とは異なりてあり～と猪一郎から愛され、慈しまれた女房」と記している。また、『ほしかげ』第36号には、「先生を語る」と題し、次のような生徒の文章が掲載されている。

「げん先生」　松繩 昭子（13回生）

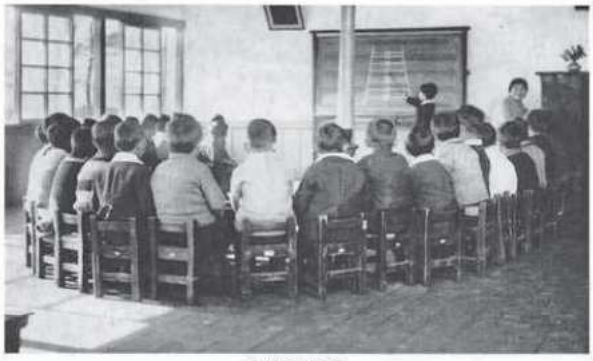
この学園（小学部）中たった一人の女の先生、音楽のげん先生はお母さんのような先生で、私の母のようによく肥って居られる。その肥った体から澄みきった声を出して、私達に教えて下さった。

「ゲーアーゲーゲーゲー」「1と2と3と4」「それでは歌ってみて下さい」と言うように。

げん先生は明星学園のお母様だ。いつもいそがしそうにして居られる。会計をやったり、書方をやったり、それで居ておうちの事は一切おやりになるそうな。つくづく感心させられる。

去年の秋の関西旅行の時もあの長い道のりを私達といっしょに大きな体を少しもくたびれた様子もなくお歩きになった先生。ずいぶんお丈夫だなあ。

先生のくせは眼鏡ごしに私達を見るのがくせ、はてあの眼鏡は近眼か、いやいや老眼かな、私にはわからない。〈※14〉


音楽の授業

1953年（昭和28）9月、東京都から教育功労者として表彰される。1963年11月、猪一郎（小・中学校長）の病気、快復進まず、専心看護のため依願退職。猪一郎は1964年2月逝去するが、げんは翌65年5月、創立同人として、また永年の学園に対する功労により明星学園名誉教諭となる。退職後も小学校図書室において、小学生に読書指導を行う。

1976年（昭和51）4月27日永眠。85歳。5月16日、追悼式。

〈※14〉小学部教育月報『ほしかげ』第36号（1940年3月20日）

■山本 徳行（やまもと とっこう）


山本徳行

1897年(明治30)3月、愛媛県に生まれる。1915年、今治中学校を卒業、小学校代用教員となる。翌1916年愛媛師範第2部に入学。このとき寄宿舎の舎監をしていたのが赤井米吉であった。1917年、小学校訓導となり、1922年に私立成城小学校に奉職する。一方、翌1923年には日本大学高等師範部に入学する。

1924年（大正13)、私立明星学園創立に際し、赤井米吉、照井猪一郎・げん夫妻とともに同人として参加。創立当初3年生を担任、引き続いて6年生卒業まで担当する。この間、日本大学法文学部に入学。山本は希望に燃えていた。

私たち3人は思い切った新教育を考えていた。まず、時間割のない教室である。始業・終業の合図もいっさいないのである。学籍簿もなければ出席簿も作らない。もちろん通知簿もない。そしてあるものは、克明に記した教育記録簿だけである。教授の方式はプロゼクト・メソッドであり、ドルトン・プランである。校舎ができ、花壇の花が美しく咲き揃った頃には、生徒数も次第に増加して、1学級30人の定員にほぼ近いまでになっていた。運動場にはスベリ台もでき、小鳥の舎もたった。小さな夢の学園である。子供たちはいっぱいの太陽を浴びて、広い武蔵野をかけめぐっていた。教師も子供もまっ黒であった。野外が常に教室であって、教室はむしろ休憩の場であった。(山本徳行自叙伝『坂』)〈※15〉

しかし、まもなく山本は壁にぶち当たる。彼の悩みは大きかった。


1925年3月、山本徳行先生と3年生の子どもたち

しかし、妙案であると思っていたプロゼクト・メソッドも凡々の私たちでは長くつづけられえないものであるとわかった。2カ月もすればもう教材の発展が限界にきて、堂々めぐりをしている感である。こんなことで「学力」がつくであろうか。ドルトン・プランそのものも、生徒たちは伸びるようには見えるであろうが、ヒョロ長い伸長で練り鍛えることに欠けている。叩き鍛え、教材の背後にあるものをつかみ取らせることが、これで果しうるであろうか。始業・終業の合図も、あってみれば邪魔くさいものであろうが、段落のケジメをつけることもまたあってよいのではなかろうか。反省せしめられることが多い。私の悩みは更に大きくなるばかりであった。(山本徳行自叙伝『坂』)〈※16〉

結局山本は、第1回卒業生27名を担任として卒業させた翌1929年（昭和4）3月、明星学園を退職する。この間の経緯について彼は後に次のように記している。

〈※15〉『坂』(今治明徳高等学校、1967年1月5日)52～53頁
〈※16〉『坂』(今治明徳高等学校、1967年1月5日)53～54頁

開校時に受け持った3年生が6年を卒業するので、私はここの教壇を降りた。その理由の一つには明星同人の教育観と、私のそれとの相違もあった。私には「学力」というものがあるとの信念がある。教育とは児童を成長せしめることであり、習得する力を得さしめることであるということは肯定する。しかし3年生には3年生としての「学力」があり、5年生には5年生としての学習知識を得ていなければならないと私は信じている。そしてそれはある場合においては、詰め込むこともまたやむをえぬ教育であると信じている。真理は日々に新しい。真の教育こそ新教育であるというのである。私は間違っているのかも知れない。しかしかかる私はすでに学園の異端者であった。もっともっと早く去るべきであったろうが、恩師赤井先生の恩情にあまえて、5カ年をお世話になったわけである。申し訳のないことであった。(山本徳行自叙伝『坂』)〈※17〉

明星学園退職後、1929年天王寺師範学校教諭、34年大阪府視学就任。36年豊中市の小学校長、翌37年豊中市高等実践女子校長に就任、1941年愛媛県主事など歴任した後、今治明徳学園初代理事長に就任、今治明徳高等学校長、短期大学学長を兼務する。

1966年(昭和41)6月3日、藍綬褒章を授章、伝達式に参列。翌日、三十数年ぶりに明星の地を踏んでいる。



翌4日は小雨の日であったが、私は文部省・大蔵省に出かけたので、妻は在京の子供3人に案内されて、箱根路を周遊する。そして次の日は、一同うち連れて赤井先生をお訪ねした。私はこの先生によって今日がある。まず何をおいても先生にこの光栄をご報告しなければならないと思ったからである。家族一同して井の頭の杜を歩く。そして明星学園を訪(おとな)う。明星を創めたあの頃は、この杜も、もっともっと幽邃(ゆうすい)であった。原始林の面影が残っていた。27歳だった私はこの泉の傍で物思いにふけったものである。今ここに同行する3人の子はその頃まだ生まれてもいなかった。明星学園も随分変った。照井猪一郎君も逝ったし、上田八一郎君も他界した。「カナンの地」とて逃れて来た花園ではあったが、私は同行を離れて一人歩きをして来た。しかし明星の発展を希わない日は1日とてもなかった。何分にも思い出深い草分けの一人である。あの頃植えた木が、今では一抱えもの大木に生長しているのに驚かされる。その頃色をまっ黒にして武蔵野をかけめぐっていた教え子も、今ではもう52歳だという。嘘のような話である。思えば、お互に年輪を重ねたものである。(山本徳行自叙伝『坂』)〈※18〉

1978年(昭和53)永眠。81歳。著書に『尋一教育の実際』(1924年)、『欧米旅日記』(1964年)などがある。

〈※17〉『坂』(今治明徳高等学校、1967年1月5日)57頁
〈※18〉『坂』(今治明徳高等学校、1967年1月5日)133~134頁

(2)上田 八一郎(うえだ はちいちろう)

1890年（明治23）5月15日、富山県福野町に生まれる。父義男は富山県城端村助役、後に初代町長となる。しかし、1898年、祖父の米相場の失敗などにより一家破産、金沢市に移り住むことになる。


上田八一郎

1909年、広島高等師範学校入学。本人は苦学してでも東京に出て政治家になりたかったが、すべてが官費であるという経済的理由と、校長北条時敬先生をはじめ、金沢の第四高等学校の先生が多くおられるということで、父が広島高師進学を強く推したようだ。同じ英語科の1年先輩には赤井米吉がいた。また、小原国芳とは同級であり、寄宿舎も同室であった。

1913年、広島高師卒業と同時に英語の教師として附属中学校に奉職。1921年、家族8人とともに朝鮮大邱（テグ）に転住。大邱中学創設に参加し、同校教頭に就任する。転任の理由は大家族の生活、弟妹の教育という経済的理由と、長男八郎の言によれば、それまで精力的に活動していた高等師範の大学昇格運動の頓挫が一因にあったようだ。

1923年（大正12）、赤井が朝鮮旅行の途次に上田を訪ね、宿泊する。家族にとっても金沢時代から面識があり、気楽な来訪者であった。「東京に来い」が赤井の口癖であったようだ。英語の教師である以上、どうしても本場のロンドンに行きたいという気持ちを述べたが、赤井は、「東京に来るとスポンサーができるぞ」と、いとも簡単に言ったようだ。後になって「東京に来れば」が、「明星に来たら」に変わったらしい。

> 大正13年の夏、赤井園長は講演のため私の前任地朝鮮に来られた。その時明星学園も3年後には中・女を併設するから上京されたいとの話があった。私の方から色々な希望を出してみた。1学級30名、生徒総数150名を超えざること、男女共学、無認可の学校、上級学校入試準備の要らぬ学校、武道と教練のない学校等。それらのことに対し、園長は笑って聴いていた。〈※19〉


広島高師で小原国芳と（1913年）

1927年（昭和2）、明星学園中学校・女学校設立のため大邱を去り、一家で東京に転住。翌1928年、明星学園中学校（旧制）の部長に就任する。中・女設立にあたっては不況もあり、困難を極めた。まさかの時は無認可の学校で差し支えなしとしていたが、父母の間からどうしても大学受験可能な学校にという意向が強く、資金計画、実行等当時の父母の献身的な活動により設立が実現した。結局夢であった受験教育をしない学校は、父母たちの熱意によって、受験を考えなくてはならない学校としてスタートを切ることになる。

以来、上田は「生徒の人格を尊重しよう。彼らの個性を尊重しよう。彼等を英漢数で割りきっ

〈※19〉上田八一郎「25周年の回顧」文芸部『明星 25周年記念』（1949年11月15日）86頁

てはならぬ」という信念を、父母・社会に対し常に主張し、明星学園の教育に全力を尽くした。

上田自身は次のように述べている。



私はあくまで個性の尊重者である。世間では（個性──自由──我侭──放縦）（団体──規則──服従──統制）という風に飛躍的に考える人が多い。しかし私は特異性を持った大個性の集団でなければ団体も社会も強固なものにならないと信ずる。個性を滅却した団体は、よし強制によって一時的の統制は得られるであろうが、決して永続きはしないと固く信ずる。〈※20〉

私の娘は女学部に、息子は小学部に通っている。そして私は二人のためにこの小さなマッチ箱のような明星が此の上もない結構な生活の場所であると信じている。ところが一面、鉄筋コンクリートの学校にさえ通わせて置けば安心が出来、また、大定員の学校に入れてさえおけばお互いに揉まれ磨かれて自然に玉となるかのように聞かされると、私もなるほどと一応は頷いても見るが、さて静かに考え廻らすと、団体的訓練や社会意識の養成は、いかにも大定員学校の特権であるかのように思われるが、実際の処、内から発する自得の力でなくて、外から強制的に鍍金されたものとしたら、その瞬間だけは奇麗に見えても、いつかは剥げる。外から揉まれ磨かれた玉といっても硝子玉であり、飴玉は飴玉である。

一体、世間では学校教育に余り価値をおき過ぎる傾向がある。私の短い教師生活から考えてみても、学校教育の力というものは誠に微々たるものであって、子供の一切合切を学校に一任して安心している親があったら大変な間違いである。なお、また、貴方のお子様は私が責任を以てお引き受け致しますなどと大きな口をきく教師がいたらその教師はよほど偉い人か、でなければ……（一寸うまい言葉が出て来ない）ごまかされてはならぬ。親切そうにみえて一向親切でない学校があり、不親切に見えて、とても親切な学校もある。元来親切そうな教育というものは生徒の成長には甚だ迷惑なものである。設備が完全であり標本が沢山あれば、それだけ親をごまかす力を持っている。然し私の経験では満ち足ると倦怠が来たり、教育堕落の第一歩を踏み出す恐れがある。足らざる処に何かを以って補わんとする努力が起り苦しみが生れる。ホントの教育はこの見えざる処に行われるものではないだろうか。〈※21〉

そんな上田は生徒から愛された。彼らの目に上田は次のように映っていた。

「ハチ公先生の追想の一端」　藤田 早苗（5回生）

1. 小さい体で右手をあげて「ヤァー」のポーズ。
2. 立派な教育理念をもちながら、教育論をブツでもなく、書くでもなし。実践のみ。
3. 人間教育、社会教育を中心とした、教養と学習の調和。

〈※20〉小学部教育月報『ほしかげ』第12号（1934年12月15日）
〈※21〉上田八一郎「親・教師・人」『明星の教育』創刊号（1931年1月）

4. 過ちも過度のイタズラも、反省なき時は、厳しく恐ろしい叱責があるが、反省しているとオトガメなし。曰く「叱るより本人の方がモット悩んでいるヨ」「それでよし」と。
5. 安月給の学園に、よくも多くの名教師、名物教師を揃えた能力。
6. 学園教育を目の仇に赴任したハリキリ配属将校を学園教育のよき理解者とハチ公先生信奉者に変身させる人格と魅力。
7. 中学部生徒より女学部生徒に人気あった中学校校長。

「我らがパッチャン」　　金澤 康（13回生）

木造平屋の教室、カーンカーンと鐘の音が始業を告げると、煙草をくゆらせ乍ら上田先生が到来する。漫画「江戸っ子健ちゃん」の先生（モデル？）は短身痩軀、眼鏡の奥に光る眼。「水曜日はウエズネズデー（上田寝ず）だよ」、名指しされるのを恐れ且つ期待する英語の授業。——1学年30余名、5学年の全校生160余名の明星“星雲時代”の終期、中学生の愛着と尊敬の的、我らがパッチャンの姿である。

「常に人生の“bright side”を見なさい」卒業後、私が大病時に戴いた先生からの端書。以後、慈父の如き先生宅を訪れた折々「君、民主主義とは手間のかかることやね」と戦後の学校経営の労苦を洩らされた。

「特異性を持つ大個性の集団でなければ、団体も社会も強固なものにはならない」全体主義の時代に自由主義最後の教えを受けた私共同期にとってはパッチャンの薫陶を受けた所極めて大であった。今、同じ道を歩む者として先生を想うことしきりである。〈※22〉



上田先生レリーフ（高校中庭）、上田先生の直筆文字「Cool brain and Warm heart」

1946年（昭和21）11月、赤井の辞任にともない、中学校（旧制）・高等女学校（旧制）校長代理就任。翌47年3月、校長に、4月には明星学園理事となる。48年4月、新制高等学校校長に就任、これにより男女共学が実施されることになった。

1955年（昭和30）5月、藍綬褒章を受章。その後、学園の振興事業始まるとともに酷暑の中を土地拡張のため奔走、体調を崩すも小康を得るや再度振興事業達成のため活躍し、そのためますます健康を害した。

1964年2月、照井猪一郎の逝去に伴い、明星学園中学校長・小学校長を兼務。以前より脳血栓と右足と右手の軽いマヒ症状、また微熱が続く。

1965年（昭和40）3月、卒業式で卒業生全員と握手したのが最後となった。7月16日永眠。75歳。病名肺炎。7月18日、学園葬。父祖の地、富山県城端町の昭和4年に自分自身で建てた先祖代々の墓に納骨された。子供の時、夜逃げ同然で出た町だけに故郷という印象は薄かったが、病気が進むにつれて、早く城端に行きたいと言っていた。

1966年5月15日、レリーフ除幕式。明星学園にかかわる方々、広島の附属中学校ならびに大邱中学校の卒業生の皆さん方のお力添えで、レリーフが完成した（制作は11回生の四田昌二氏）。現在、第三体育館入り口横に置かれている。

〈※22〉「思い出の記」『上田八一郎先生 生誕百年誌』（1991年5月）

(3) 後援者「隠れた人」茶郷 基

学園設立時の唯一の後援者、茶郷基氏について、赤井米吉はのちに次のように語っている。


茶郷基氏

ことしは茶郷基先生が逝かれて30年です。

だしぬけにこういうことをいっても、今の父母のかたがたにはお分かりにならぬ方も少なくないでしょうが、明星学園創立のときの唯一人の後援者であった方です。

明星学園設立趣意書のおわりに、

「森幽に、水清き井の頭公園脇に1千坪の土地と、ささやかな学舎を得て、友情に燃える私達が、隠れた後援を誓われる一教育愛好者に励まされて、新しい教育の樹立を企てました」

とあるが、その「一教育愛好者」というのが茶郷基さんだったのです。

学園創立の議がおこったのは大正13年2月24日のことでした。照井猪一郎先生、山本徳行先生（現今治明徳高等学校長）などが、そのころ千駄谷にあった私の宅に集って話し合ったのです。われわれがそれまで勤めていた成城学園からはなれて、新しい学園を建てねばならない事情になっていたのです。がそれには資金を得ることが、何よりも必要なことです。その後援者として第一に白羽の矢をたてたのが茶郷さんだったのです。

2月17日の午後、私は代表格で、国分寺のお宅へ伺いました。

茶郷さんとはその前年からおつき合いさせて頂いていました。お嬢さんの喜久子さん（現出口正夫教授夫人）が成城小学の1年生で、照井さんの受持であったことから、当時問題になっていた成城学園の郊外移転の土地物色のために小原主事（現玉川大学長）と共に、しばしば国分寺のお宅へ相談にいっていたのです。

そして茶郷さんは、私と同郷の石川県出身であること、朝鮮の永中金山を経営しておられる富豪であること、学生数人に学資金をみついでおられることなどを知って、深い尊敬を払っていたのです。お宅は、今国分寺駅の南口になっているあたり一帯1万坪の屋敷に、瀟洒な作りの家がありました。

私は新しい学園を建てねばならないことになった事情を概略お話して、「1万円」助けて頂かれないだろうかとお願いしたのです。貨幣価値のずっと高い時代ではあったが、1万円で学園が建つものでないことはわかっていたが、突然のお願いだから遠慮したのと、これだけあれば先ずスタートすることは出来ようし、スタートが出来れば後はまた後、といったような大まかな考えであったのです。

茶郷さんは即座に、「1万円では足りなかろう。当分必要なだけの校舎を建ててあげよう。設備費も、経常費の不足も出してあげよう」と、ほんとうに棚からぼた餅のようなお返事であった。そして至急に「敷地」を選定するようにと注意されました。

2月29日、いまの小学部の敷地をきめると、すぐに1年間の地代500円を千駄谷の私の家までもってきて下さった。

校舎109坪（教室5、職員室、小使室、便所）をお知合の古賀貞周氏の会社へ委託して下さった。契約は私と古賀氏の間につくったが、支払は凡て茶郷さんがという了解のものであ

りました。契約高は1万2千円でした。

設立認可願を東京府へ提出するとき、私は茶郷さんに設立者になって頂き、われわれは雇用人にしてくれと頼みました。設立者は相当の資財をもっていることを示す必要があったからです。それに対して茶郷さんは「あなたがたのために建ててあげるのだから、あなたが名義人になるように、資金をみせる必要があるならばこしらえてあげよう」といわれて、ラサ島燐鉱の株式4万5千円を私の名義に書換えて下さったので、私はにわか大尽のような顔をして認可願いを出したのです。

2月の末にはじまった話が3月末には校舎建築にかかり、児童募集のちらしを配るというスピーディーな進行に、成城の人々はじめ知友の者は目をみはったものです。われわれも鼻高だかでした。ちょうどドルトン案の創始者ミス・パーカーストが来て、各地で講演をした時でした。私は女史の通訳をしてまわって歩いて、いたるところでお祝いを言われたりしました。みんな茶郷さんのお陰です。

茶郷さんは多くの知人をもっておられました。栃内曾次郎（海軍大将）、加藤隆義（子爵・後海軍大将）、水野錬太郎（文部大臣）、床次竹次郎（内務大臣）、島芳蔵（正金銀行重役）、これらの方々のお宅へ私を連れていって、教育についての意見を聞かせたり、後援をお願いさせたりされました。

結局、校具備品費として2千円頂きました。敷地の地ならし、周囲の垣根つくりに出入の植木屋をいく日もよこし、ヒバ苗をたくさん持ってきて下さったのです。

こうして5月15日開校式をあげたのです。ただし児童は1・2・3学年、3組21人しか集まりませんでした。大震災後の郊外移住は始まっていましたが、井の頭公園南の学園付近は昔からの農家が2、3あるだけの、文字通りの武蔵野ですから、1千枚くらいのチラシをまいてもそう来ないのがほんとうでしたでしょう。しかし、これでは教師4人、小使夫婦の6人が食うことはできません。

そこで茶郷さんは4人の教師の月給380円を毎月補給することにして下さいました。月謝6円、21人分、126円は小使給と諸雑費にあてればよいことになったのです。まことに呑気な経営です。その内に児童数はだんだん増えてきました。夏の休みに開いた夏季学校の宣伝も手伝って、9月には40名近くになりました。それでも茶郷さんは、はじめ通り380円ずつ出して下さったのです。明星学園のものが、その後財界の不況にさらされた時でも、屈託のない顔をしてやっていたのは、初期の茶郷さんに助けられた時分にできた悠々とした校風のためです。

茶郷さんはもと神職の家から出られたので、古神道によく通じておられ、しばしばそのお話をされました。われわれが「先生」と呼んだのはこのためでした。さらに漢方医薬の造詣が深く病気療養の人びとによい注意をなされ、ずっと後のことですが、私の長女もお世話になりました。「医は慰なり」というお言葉を私は今も至言と思っています。われわれが「先生」と呼んだわけもここにもあったのです。

むろん教育についてもいろいろなご意見をおもちで、よく教えられましたが、いわゆる「新教育」の意気に燃えていたわれわれは、かえって反抗を試みることもありました。その中でも「習字」と「制服」の問題はずい分議論しました。「画一」と「模倣」を何よりも嫌ったわれわれは、どうしても聞きいれなかったのですが、それから40年、時代の変遷もありますが、もっと冷静に教えをうけるべきだったというような悔が感じられるのです。

修身の救育も熱心で、「幼学綱要」を現代風に書きかえて、各学校へわけることを考えつかれ、照井さんに書き直してもらい、私は近衛文麿さんの題字をもらってきたりして、立派なものをつくり数万部売ったのですが〈※23〉、出版者がずるくて茶郷さんも照井さんも骨折り損になったのは気の毒でした。茶郷さんのこうした力を利用して教育雑誌を出した先生もありましたが、これはうまくいきませんでした。

第2年目には、新1年生が予定どおり30名入学し、2年以上の組は皆20名以上になりましたが、第1年同様に経常費を補助していただくことになっていました。ところがその6月に、朝鮮の大雨洪水で永中金山にはひどい山崩れがあり、取引銀行の朝鮮銀行は戦後の第1の不況という二つの不幸が重なっておこったのです。口に出してはいわれませんでしたが、その被害は大変なものだったようです。われわれは進んで経常費の補助を辞退して、自立の方策をとることにしました。

その後山之内兵十郎さん、井野正次郎さん、川井源八さんなどに後援してもらったり、母の会・後援会をつくってもらったりして、多くの方々のご援助を願いましたが、それは当初の茶郷さんの援助によって、「愛される校風」ができていたからであります。

茶郷さんは国分寺の屋敷を処分して、小金井駅近くに静かな家をたてられて隠棲の生活にはいられました。

昭和3年小学校の第1回卒業生が出て、中学校、高等女学校を開始したときには、建築資金4万円は、当時の父母の方がたがつくって下さいましたが財団法人の基本金11万円を積んでみせねば、各種学校として発足しなければならないので苦労しました。茶郷さんは北海道炭鉱の株7万円を提供して下さったので、関係者一同愁眉を開いたことです。1校の設立認可でもなかなか困難なことですのに、中・女2校一ぺんに認可されたのは全く異例といってもよいことでした。これも全く茶郷さんのお陰です。

書がすきで、きれいな字をかかれました。毎年1月2日に私は必ずお宅へ伺って書き初めをしたものです。茶道にも通じておられ、好まれ、明月（めいげつ）の夜私たち夫妻が招かれて、お座敷で月を眺めながらお茶を教えられたのも忘れられぬことです。〈※24〉

茶郷夫人

シヨ夫人は、表だつことを好まず、夫の意志に添い、あくまで陰の後援者としての立場を堅持して、父母会・母の会その他の公的なところの活動は控えていた。ただ創立当初は準備も整っていない時であったため、多少、表面的なこともされた。開校の日には150人分のいなり寿司を折詰めにして徹夜で作り、祝賀の会食に間にあわせた。校庭に樹木も少なかったので出入りの植木職人に植樹させたり、自宅の庭木を移植させたりした。

また後年、女学校の課外にお茶とお花の授業などをされた。

1954年（昭和29）の30周年記念式典に、学園にとって第1級功労者のひとりとして茶郷基氏の功績が表彰された折、次のように語られている。〈※25〉

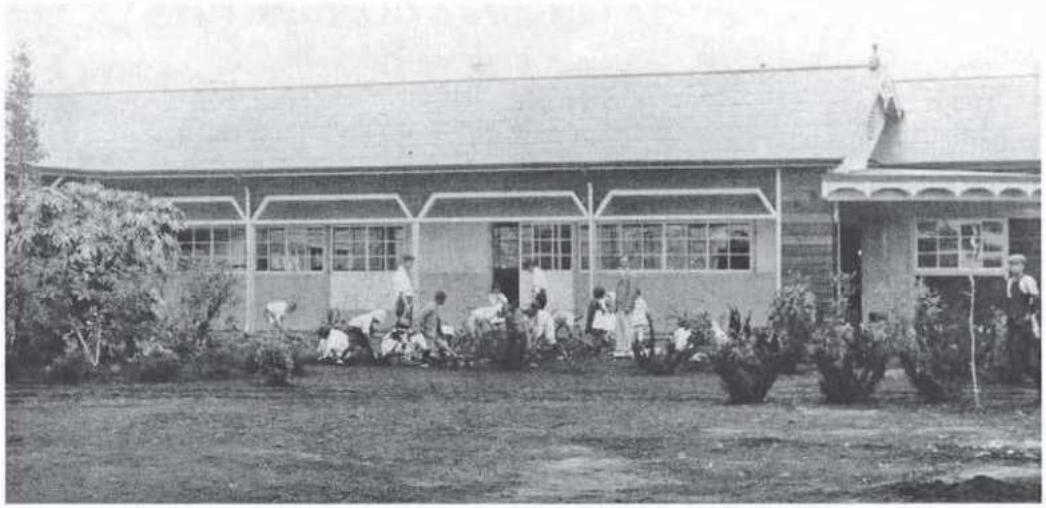


茶郷シヨ夫人

〈※23〉『幼学綱要読本』（成美會、1931年）
〈※24〉PTA会報『道』No.59（1963年7月10日）
〈※25〉原田満寿郎記『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』98頁

主人は在世中は明星学園の創立にお手伝いしたことなど外部の方へはいっさい洩らしませんでした。ことに、こどもに対しては絶対に秘密にしておりました。…中略…

はじめ、学園は先生がたった4人でしたが、主人はその方々、特に照井先生のご人格に接して、あんな立派な人のためなら、自分はどんなお力添えをしても惜しくないと常に申しておりました。後略…〈※26〉



創立まもないころのようす。茶郷家から手配された植木職人が、教室前に植樹している。
写真左端には記念樹のイチョウが、中央には教師と児童たちが写っている。

＜文責：堀内 雅人＞

〈※26〉『PTA会報30周年記念号』(1954年6月)

第2章　初期の教育実践

1　新教育の開拓者

(1) 創立当初の教科課程

赤井米吉は、創立して5年を振り返った「明星五年」〈※1〉の中で、開校当初の教科と時間数について次のように記している。

校舎も出来た、教育の内容については開校準備の間も殆ど毎日のように同人は集って研究していたのであったが、今や愈々落付いて討議も出来るようになった。当時の教科及時間は次の様に定めていた。

学科としての数学の仕事は2年から始め、1年では児童の日常生活の間に於ける数観念の自然的発達を待とうと考えた。数学の始期に就いては当時も我が教育界に問題のあったことであり、今日も尚つきない。当時私達は凡ての学習が常に児童の内からの要求に即すべきであることを信じていたので、この教科に就いては尋1時代は尚早の感をいだいていた。然しそれは教科としてなす数学の仕事の内容を現行文部省のそれにのみ置いたものであった。その他の仕事を考えれば尋1でも数学の仕事は多々あり得たであろう。然しそれに就いてはまだ十分な案が立てられなかったので、暫し私達の案のたつまで、こうして児童の発達を待つ方が得策と考えたのである。

	1年	2年	3年
国語	12	11	11
美術及自然科	5	5	5
音楽及体操	5	4	4
数学	—	5	5

教科及び時間割

美術と自然科を一つにして考えたのはその間に一脈相通ずるものがあるように思われたからである。自然科の中には理科の初歩として、科学的研究への前提としてのもののあることは勿論であるが、児童の自然に対する態度にはこれを美的対象として、これを全的に眺める風のあることを感じて二つを一つにして時間数を定めたのである。勿論時によって全然科学的に取扱うこともあれば、全然美的に取扱うこともあった。音楽と体操もかのダルクローゾのレトミックの主張のようにリズム、ハーモニーの身体的表現が音楽教育の方法として非常に必要なものであり、体操、ことに低学年の体操にはリズムを担わすことが児童の心理的、身体的発達に伴うものと考えて一つにして時間を取った。これも体操の時には必ず歌を歌わせるか、ピアノを弾じてやらせると云う意味ではなかったし、音楽にはいつでも身体的活動を伴わせようというわけでもなかった。両者に一つのリズムの相通ずるもののあろうことを考え、その方法を工夫せんとの意図に外ならなかった。



然し私達はここで私達が既に有していた多くの教育上の最良の方法を実行して、最も優秀な人を造り出すと確信してここの仕事を始めたも

〈※1〉 赤井米吉「明星五年」『混沌』第8巻第1号(1929年1月22日)

のではなかった。寧ろ色々の試みをして真に善き方法を見出さんとの念願に外ならなかった。当時私達が共同の研究問題としていたものは、



1、この環境を如何に我々の教育に取り入れるべきか——自然科や美術の仕事は言うまでもないが、更に凡(すべ)ての学習を生活たらしめる為にこの環境を如何に処理すべきであろうか。——もしこの問題が解決したら我国の田園の学校の教育にかなり大きな問題を投ぜられようと考えた。所謂(いわゆる)教育上の改革が多く都会地から発祥するのは余り面白からぬことである。どうかして田園の教育を振興させたいと思った。

2、戸外教授業がどれだけ迄に行われ、如何なる方法で行うのが最も有効であるか。——従来外国で行われたオープンエアースクールは多く病弱児の為であった。健康児の為にそれは考える必要のない事であろうか。私達はそれも必ず善い事であろうと考えた。然しその方法は如何、——もしこれが解決するならば児童保健の問題に大なる光を投ぜられる筈である。然してこれもまた田園の学校のひと工夫となろう。

その他問題は多々あった。勤労教育の問題などもその一つであった。6月の末には馬鈴薯の収穫期であったので、百姓の畑に行ってそれを掘らせて貰い皆で洗って、共に食したりした。勿論まだ低学年の児童のことであるから大きな作業は出来なかったが、こうして土に親しむ機会は多かった。



7月になると井の頭公園のプールが開かれた。2・3年の児童に2、3泳ぐものがあったばかりで他は皆駄目であったが、浅い児童の徒渉池で毎日午前11時頃から水遊びをした。学園で裸体になって、畑の中をぬけてプールへ駆けつけるのである。学園の存在を知らぬ水泳客は皆驚きの眼をみはった。〈※1〉

ちなみに、当時の文部省の教科課程は次ページのようなものである。これと比較してみると多くの相違点を見ることができる。「分科を手に小きざみにして集めてガンモドキのように包んでやる」合科主義を批判し、分科を4つにしぼり、各分科間の連絡を十分にしようと考えた。また、修身の時間を特設しなかったことも特筆される。

すべての教科、すべての生活が児童の生活指導である時に修身なる特別の時間においてのみ道徳的生活の指導をしようとするのは自己矛盾である。国語も音楽も体操もすべて道徳的教育の使命をもつのである。もちろん突発的な児童相互間の道徳問題もある。しかしこれはその場合において、何時、如何なる教科の時でも、注意し、教訓すべきであると考えてこの

〈※1〉赤井米吉「明星五年」『混沌』第8巻第1号(1929年1月22日)

科は特設しなかったわけである。〈※2〉

しかし、この当初のプランは変更を余儀なくされる。試行錯誤が続く。

1919年(大正8)改正小学校令施行規則による毎週教授時数

	学年	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
教科目	修身	2	2	2	2	2	2
	国語	10	12	12	12	9	9
	算術	5	5	6	6	4	4
	日本歴史	—	—	—	—	2	2
	地理	—	—	—	—	2	2
	理科	—	—	—	2	2	2
	図画	(1)	(1)	1	1	男 2 女 1	男 2 女 1
	唱歌	4	4	1	1	2	2
	体操			3	3	3	3
	裁縫	—	—	—	女 2	女 3	女 3
	手工	(1)	(1)	(1)	(2)	(2)	(2)
	計	21	23	25	男 27 女 29	男 28 女 30	男 28 女 30

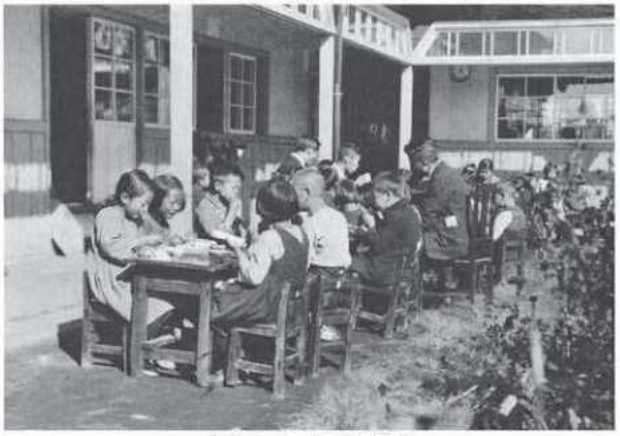
1941年(昭和16)の国民学校令による毎週教授時間数までもかわらなかった。
( )内は課すことを得というもの。

かように4大分科に分けて始めたのであるが、いよいよ実際に試みているうちにいつか従来の分科に堕(だ)してしまった。さきにも述べたようにまず音楽と体操は教師が異なるので、自然仕事も分離し、その各々に時間も分配しなければならんことになった。次に美術も主任の教師が十分に指導できないので専科教師を置くことになり、自然科と分離してしまった。かくて国語・美術・自然科・音楽・体操・数学の6科になった。さらに同一教師が指導する国語の読方と綴方も書き方もそれぞれ特定の時間を要求するようになり、やがて6科目が8科目にもなり、高学年では地理・歴史が加わり、裁縫がはいり、全然元の木阿弥になってしまった。

それ等の跡を省みて気のつくことは、かかる分科の根本に横たわるものは、児童の能力開発の思想である。われわれが生活指導を目ざして立ったことは既に趣意書の吟味において述べたことである。しかしその実現の方法としての教科課程はまだ十分に検討せられていなかった。そしておよそ4大分科にしたものの、その中に各々の分科が依然として残っていたこともさきに記したとおりである。これ等の分科主義の根底に横たわっている思想は普通教育または基礎教育なるものは将来如何なる生活をなすにあたっても必然とせられるような能力を発達せしめることだということである。読む力・綴る力・書く力・描く力・作る力・観る力・歌う力・走る力・数える力・そうした力を養わねばならぬとすることである。だから児童の生活を指導すると称して、如何なる生活事象をもってきて、これについて理解を与え、その実践を指導していっても、その裏にそれによって読む力は如何に発達し、綴る力は如何に伸長するかとの問題が浮かび、それがいつも不安に感じさせられる。教師の方にはそれについて一応の考えをもっていても、父兄がそれを如何ですかと疑問してくると容易にこれを納得せしめられぬ。それを納得せしめられないと悟って自らも不安を感じてくる。かくて生活そのもの、指導よりも能力を養おうと考えるようになる。われわれの教師が結局従来どおりの分科主義に堕したのはこの能力養成の旧い思想に負けたのである。今もわれわれからこの思想は抜けきらない。一般教育界においても生活指導の主張は相当有力になっており、郷

〈※2〉 赤井米吉記『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』37頁

土教育や労作教育の流れを見ながら依然として新教科課程が構成せられないのは、この能力発達の思想に問われているためである。この思想を整理しない限り新教育は新しい展開をしないであろう。が、さらに進んで能力発達の思想は全然まちがいであろうか。新しい生活指導の教育はこの能力を如何に考え、如何に処理すべきものか、これが今われわれに課せられている根本的問題である。上級学校の入学試験の方法、それにつれて騒いでいるのは学校の入学準備教育も根本をただすと、この思想にある。〈※2〉


先生といっしょに昼食

(2) ドルトン・プランと明星

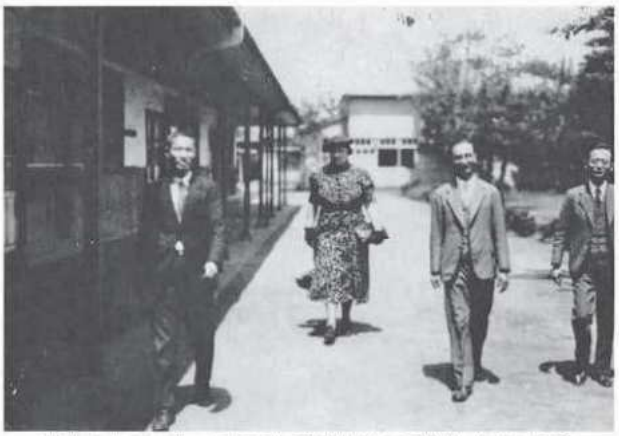
アメリカ人、H・パーカーストによって提唱された「ドルトン・プラン」は、その紹介者の予想を超えて大きな反響を呼びおこし、大正期の自由教育運動における一つの潮流を形づくることになった。彼女は1900年前後のアメリカの公教育が大衆化していく過程で、理想を失い、子どもを受動的地位に立たせ、画一化していることをするどく批判していた。一方、彼女自身、最初の教師としての体験が片田舎の単級学校であったことから、どうしても自学のための形態を創りだしたいと願い、ここから個々の子どもが能力・要求に応じて学習課題と場所を選び自主的に学習をおしすすめることのできる「教育的実験室」のプランを創り出すにいたった。それは1908年のことだといわれている。その後、彼女はモンテッソリー法研究のためイタリーに留学し、帰国後マサチューセッツ州のドルトンのハイスクールならびに「児童大学」と名づけた一私立小学校において「実験室案」を実施するにいたった。1919年のことである。これがいわゆるドルトン・プランであり、このプランは間もなくイギリスに紹介され、2,000を超える学校で実施するにいたったという。

ドルトン・プランは、パーカーストによれば「学校の社会化」を目ざし、学校生活をデモクラティックな共同社会のひな型にしようというものであった。したがって、その原理は、第1に「自由」であり、第2に「協同」であり、第3に「個別的作業」であるという。子どもの学習には、学習主体である子どもが、集中・没頭できる条件＝自由が必要であり、同時にそこでは、集団生活の相互作用が有効に利用されなければならないという。また、子ども自らが自己の学習課題と自分の能力とを対応させ、計画的に仕事にとりくむとき、もっとも深い興味が生まれるし、最大限の力が発揮できると考えたのであった。

澤柳政太郎が小西重直、長田新らとともに第1次大戦後の欧米の教育の視察から帰ってきたのが1922年（大正11）6月、その時持ち帰ったのが『ドルトン実験室案』であった。赤井米吉は澤柳の勧めでドルトン案の第一の書、E・デューイの“The Dalton Laboratory Plan”を翻訳、出版、

〈※2〉『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』37～38頁

大きな反響を呼ぶ。赤井自身、この間のことを「ドルトン案20年」〈※3〉の中で、次のように記している。


来校したパーカースト氏と3先生(左から照井・赤井・上田)

大正11年の秋、澤柳先生らの外遊報告の講習会が成城小学校で開催されたとき、ちょうどこの翻訳が出来たので、会場で売るとメチャクチャに売れ、またたくまに版を重ね、結局翌年9月、関東大震災で紙型を焼くまでに15,000部売った。

10月ころ創始者ミス・パーカースト自身の書いた“Helen Parkhurst. Education on the Dalton Plan”を長田教授のところへ送ってきたのを、長田教授からわたしのところへ転送されたので、早速翻訳にかかり、翌年大正12年2月『ドルトン案児童大学の教育』という題で刊行した。…中略…

翌13年4月、大阪毎日新聞社と成城小学校の共同でパーカースト女史を招待して、東京で3日の大講習会を開き、ついで仙台、富山、金沢、奈良、大阪、京都、松山、壱岐、熊本など20ヶ所ほど廻って、大震災後の日本教育再建のようなすばらしさであった。

成城小学校は大正6年に澤柳先生がはじめられたのである。大きな改革として、1組の定数を30人の小学級とし、学年のはじまりを春秋2回、つまり半年、12学級制だった。それは児童の個人差に応じた教育をし、進んだものはいつでも半年さきの学級へのぼらせるというしくみだった。

だがその半年の「超級」を認定するのはだれか、何を基準でそれをさせるのか、それがはっきりしないで、いろいろ苦心されていたが、そこをドルトン案はよく教え、はっきりと行うことが出来るようにする。成城がドルトン案を実行し、宣伝したのはこうした教育的配慮からであった。

ところで、ドルトン・プランがわが国の教育者に注目されるにいたった理由はどこにあるのだろう。中野光(あきら)氏はその著『大正自由教育の研究』の中で次の3点を挙げている。

① 明治以降の学校教育について、子どもの能力・個性の違いを無視した「学級教授」を行ってきたとする批判が当時起こっていた。この学級教授の弊害の克服こそが目下の課題であると考える立場の者にとって、分団式教育法、児童中心主義の教育、自学輔導法などの普及が、学級教授の弊害を是正する必然的動向であると考えられた。

② ドルトン・プランのかかげていた「自由・協同」という原理は、当時の大正デモクラシーの教育思潮と一致していた。

③ このプランが学習方法を問題とし、教科課程の改変を要求するものでないことから、国家権力と対立することなく、一般的普及をみるに適したものだった。

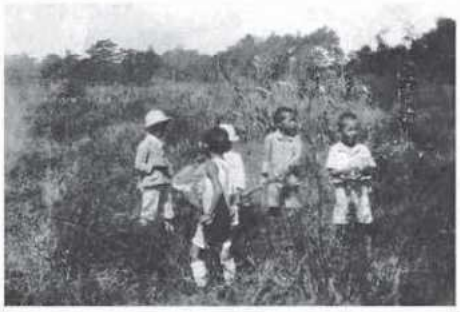
〈※3〉 赤井米吉「ドルトン案20年」PTA会報『道』No.89(1972年9月)

先に赤井米吉を、ドルトン案の我が国における最大の紹介者の一人として記した。しかし、赤井自身次のように語っている。

> かようにドルトン案を率先して紹介しまた、成城小学校で数度、案そのままの形で実施もし、あるいは一部だけを試みてもみ、さらに大正13年4月この案の創始者ミス・ヘレン・パーカーストの来朝した時にはその講演の通訳にも当った。こうした事から世間には私をドルトン案の絶対的支持者のようにレッテルをはっているものもあり、したがってまた明星学園はその実験学校であるかのように想像するものもあった。だからここでわれわれはこれに対して如何なる態度をとったかを述べることは、創立当時の学園教育を考えるうえにおいて必要な一項であろうと思う。〈※2〉

結果から言うと、赤井はこの案のもつ精神から、そこに多くの善きものがあることを認めつつも、明星学園において全面的に実施することを躊躇した。その理由の一つは、このプランが教育の内容について語らず、学習の方法・形態の変革のみを問題にしている点にあった。赤井はこの学園において教材研究こそ起こすべきだと考えていた。

また、ドルトン案の児童の自由研究なるものは、参考書を目で読み、手を使って書くという仕事を多くした。それは独自的学習の長所ではあったが、一方この案では軽く扱われている人の話を聴く、人に口頭で伝えることの教育的意味を彼は「読む・書く」とともに重視した。



さらに、ドルトン案の研究法では室内作業が多くなった。実験室で参考書を繙(ひもと)く学習が中心だからである。赤井らは田園学校としてスタートする明星学園において「1冊の書を手にして戸外に出て、森の影、田の畝に腰かけて自由な学習をなす」そんな学校をイメージしていた。

> これらの理由をもってわれわれはドルトン案をそのまま採用することはできなかった。ただし、といってその全部を棄て去ることもできなかった。アッサインメントを指導案とし、あえて請負仕事の形式にはせず、学習の手引として、児童にこれによって自ら学習を進行せしめることとし、教師は常にこれを視守(みまも)って必要な指導を口頭で行ったこと。あるいは、児童の能力に応じて進度を自由にしたこと。机は従来の1人、または2人用であったのを協同学習に便にするために6人用の大机にしたこと。これらはすべてドルトン案に学んだものであった。いわゆるドルトン案そのものからいったら、われわれは決してその忠実な実施者ではなかったであろう。しかしわれわれはドルトン案以上に忠実でなければならんものがあった。それは教育における結果主義を否定し、過程主義を重視することであった。ドルトン案においてもパーカーストはそのことを主張しているのであるが、あのアッサインメントではどうしても結果主義に堕するおそれを十分に持ち、わが国にて実施したところでもそのために失敗している。〈※2〉

ドルトン案の紹介者として時の人となった赤井米吉は、ドルトン案の限界を批判的に乗り越え

〈※2〉『明星の年輪―明星学園50年のあゆみ』38～42頁

ようとした。それは教育の内容と方法を結びつけて研究することだった。それを実現するために、明星学園の教師たちは教材の自主選択、編成という至難の課題に立ち向かっていくことになる。それが一つの形となって立証された。学園の教師たちの手によって国語の『新読本』第1巻が刊行されたのは、1926年（大正15）年のことである。

(3)『新読本』

1923年（大正12）3月発行の『教育問題研究』第36号（成城小学校発行）において、赤井は「教科書民間刊行論」と題し、次のような文章を記している。

> 教科書国定は我国教育の1エポックをなした。そは確に種々の重大なる使命を果した。然し昨日善かりしもの、今日は必ずしも善くない。時代は進む、社会は動く。時代と社会を無視して1制度を固守するのは策の得たものではない。
>
> もはや国定の時期は去った。再び民間刊行の時期が来た。
>
> 教師、学校、社会、国家が課業を選択し、児童は従順にそを受容れている時代には国定は賢し策であった。然し今や児童は自らの要求と願望を持っている。然して将来の社会、国家はかかる人を要求するのである。この新しい児童に社会に応ずる教科書は多種多様、人々各自らの書を発見し得られる様でなければならぬ。
>
> 近時盛に行わるる児童読物の研究が次第にかかる趨勢をつくりつつあるのは喜ばしいことである。教育界にこの輿論の益々高まらむことを祈る。

折しも、時代は新教育運動に対する干渉と弾圧を増していた。1890年の教育勅語発布を受け、議会では教科書の国定制度の建議があいつぐようになった。一方、文部省は国定修身教科書の編集に着手、1903年にはついに、それまでの認可制度・検定制度を廃止し、小学校用教科書の国定制度を決議、翌年、まずは修身・国語・地理・歴史から実施された。その後、教科書における筆者や編者の独創性を発揮する余地は急速にしぼんでいくことになる。

赤井が「教科書民間刊行論」を発表した翌1924年、川井訓導事件（松本女子師範付属小の青年教師川井清一郎が修身の授業で国定教科書を使わず、森鴎外の作品を副教材として使い、休職処分になった事件）が起きている。また、奈良女高師付属小学校でも、教師たちが創り出した新しい実践が官製の教科構造をくずし、国定教科書の権威を無視する可能性ありとされて、弾圧されている。

にもかかわらず、この年3月、『教育問題研究』第48号において赤井は再び教科書民間刊行の重要性を高らかに宣言、同時に成城小学校を去り、明星学園の開校に向け着手するのである。

> 国定教科書の範囲内で自由教育論が唱導されているのは現代の一奇観であろう。児童の内的興味はむしろ研究方法よりも研究の対象にある。論者は国定教科書が児童の学習材料として最上のものであると認めるのであるか。学習は「如何に」の問題よりも「何を」の問題がより重要であることを考えないのか。
>
> ある所では児童の環境を整理すると称して教室内に處狭き迄に学習材料を羅列し、宛として古物屋の店頭の如くにしている。然し宇宙間の凡ての材料を教室に集めることは出来ない。

この人達は如何なる標準によってそれ等の古物を蒐集羅列するのか。

或る人は教科課程は全然児童の撰擇に任すべしと云う。然し児童は自らの知らない物を撰擇することは出来ない。彼等の見聞の範囲に於てするのみである。然らば彼等の撰擇範囲に如何なるものを置かんとするか。

教材論の起らざるは我教育界の浅薄と怠惰を意味する。曾て教科書の民間刊行を論じたのもこの意味からであった。再びここに論じて識者の注意を促す。もし「教材」と云う言葉が嫌なら「学材」とでも言いなさい。児童の練習事項のことである。

教材論をなすときにまずブッツかる問題は教育理想論であろう。夫から児童心理の問題、社会文化の問題にも逢着しよう。然し児童に対して明瞭な答をなしうるものがあろうか。教材論の起らざるも宣なるかなだ。

浅薄と怠惰の我教育界は如何に「方法」の問題に花が咲いても実は永久に結ばない。情ないことだ。



自主編成の教科書第1号

明星学園が開校し、共同研究の成果が実を結ぶ。国語の教科書『新読本』である。巻一が1926年（大正15）に、その後、巻五まで刊行された。

明星学園編の『新読本』は、当時の国定教科書「ハナハト」読本（『尋常小学　国語読本』1918～1932）を批判的に乗り越え、1933年に改訂された国定教科書「サクラ」読本（『小学国語読本　尋常科用巻一』1933～1940）に大きな影響を与えた。

「ハナハト」読本が単語の羅列から始まっているのに対し、『新読本』では反復を含めたリズムを重視している。また、季節感もあり、子どもたちにとってより親近感のある構成になっている。1938年（昭和13）6月8日、文進社から発行された巻一の序文「児童の為にこの読本をえらばれる父兄教師の方々へ」の中で赤井は次のように述べている。〈※4〉

幸い私達のそれへの努力は立派に文部省の改正讀本の上に實現され、その方法は編纂方針の内容形式を通して充分に承認されました。

結局それはこの讀本を使用する事によって、國定教科書の教育目的をより深くより廣く徹底さした上に國語的教養を一層豊に培い得る事を意味して居ります。

以上日本の教師父兄諸氏に之を頒ちたい趣旨の一端を述べて批正を仰ぎます。

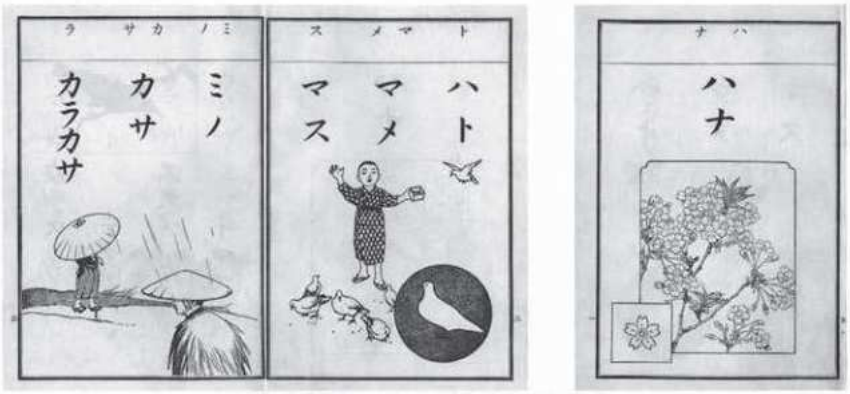
また、初版の序文「児童の為に此の読本を選択される父母、教師の方々に」の中では、この読本に対する赤井の熱い思いが語られている。

この読本は教師と父母と児童とが共同して作ったものです。

読本は単なる読み物とは違わねばなりません。単に読んでその内容を知ったり、感じたり

〈※4〉『新読本』巻一は1926年（大正15）5月に集成社から発行されたものが初版であるが、その後改訂版が1938年（昭和13）に文進社から発行されている。

すること以外に読む力を増すという要件が備っていなければなりません。児童が好んで読むから善い読本だとも言われず、文字や語句を系統的に排列したものが善い読本だとも言われません。児童の現在に立って将来を眺めたものでなければなりません。従って読本は児童の読書力――（形式的に、内容的に）――（趣味的に、研究的に）――の発達と同様に発達的

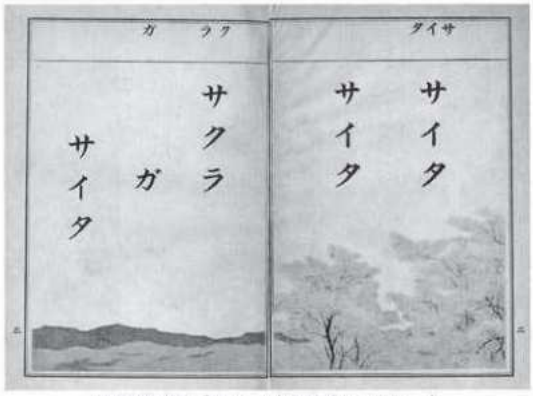


国定教科書「ハナハト」読本（1918年～）



照井猪一郎著『新読本』（1926年発行）

でなければなりません。この要件を十分に満たすには児童の発達相を十分に知らねばなりません。然しこれは容易なことではありません。心理学はまだ極めて概念的なものを教えるのみです。私達大人の記憶はもう朦朧としています。また、よしや明かに幼時を追憶し得ましてもそれは現代の児童にしっくりすることは出来ません。こうして多くの児童読本はまだ児童の発



国定教科書「サクラ」読本（1933年～）

達相にぴったりしていない様に思われてなりません。そこで児童と共同して作ったならば彼等自ら適当なものを選んで私達大人の想のとどかぬところを補ってくれるだろうと考えたのです。こうして出来たのがこの読本です。

然しそれも容易な仕事ではありませんでした。まず最初にこれを企てたのは我学園の照井猪一郎先生でした。児童の読み物として適当しそうなものを全部謄写刷にして児童に与えて、その中で児童の好んで読み行くものを見つめて行かれたのです。次に照井げん先生が、その次に霜田静志先生、大高義一先生が先に選ばれた物を修正して、また児童の反応状態を見つめて、前後3ヵ年、4人の教師と100人余りの次々と入り来る児童によって作られたものです。その為に要した謄写刷の紙は数万枚に及びます。材料を探したり、作ったりして、これを謄写原紙に書き、いよいよ謄写しているうちに夜を徹したことはどれだけあるか知れません。更に児童に与えたものは必ず一応は父母の方々にも目を通して貰いました。そしてその感想、忠言も聞きました。中には文字の使い方、文章の構成について迄も細かい注意を与えて下さった方々もあります。またこれをまとめるについては数次の職員会を開いて、山本徳行先生や私も加わって色々と推敲もしました。装幀は松岡正雄先生がやって下さいました。こうしてこの読本は我学園に関係のある凡ての教師と父母と児童が一緒になって作ったものです。

まだ十分とは言われませんでしょう。他の教師、他の父母の方々が他の児童に与えて御覧になったら、あるいは多くの欠点を見出されるかも知れません。それはむしろ私達の期待するところです。私達の過去3年の研究をひとまずまとめて提出して、広く多方の士のご批判に訴えたら更に改善の暗示を与えられることだろうと考えまして、こうして世に出して見ることになったのです。児童の教育に興味を持たれる教師、父母の方々がこれを児童に与えてその反応の状態を凝視して、忌憚なき御批判を与えられるよう切に御願致します。私達はそれによっていよいよこれを完全なものにしたいと思います。

大正15年4月　明星学園にて
赤井米吉

(4) さまざまな実践

1) 低学年における自然科の授業



当時、文部省が定める教科課程では、小学校低学年に理科は置かれていなかった。「独り理科に限ったわけではなく、歴史にしろ、地理にしろ、方法さえ適当であれば低学年においても現在よりはもっと適切に指導し得ることは確かであるし、4・5・6学年まで打ち捨てておいていい筈のものでもないのである。したがってこれらの学科のみを、殊に4年5年にくりのべたことについて、その理由とする根拠がいかにも薄弱であった」と照井は言う。「そこで専門的な知識を授けるのでない限り、低学年には低学年なりの理科があ

り、地理があり、国史があり得るということは常識的にも考えられてきた」。〈※5〉

事実、低学年の「理科」は、心ある教師たちによってかなり早くから「自然科」「直観科」「観察科」などの名称で提唱され、実施されてきた。成城小学校でも「自然科」と称して、広大な戸山が原を教場にさまざまな実験的実践を行った。照井は成城での実践をさらに深め、同僚たちと一緒に研鑽を重ねた。


新宿伊勢丹デパートで展示(1935年)

照井らは、自然科は低学年の理科であると位置づけた。そして何よりも自らを戒めたのは、プログラムの配列のままに、ばらばらな教材を知識として蓄積させようとする指導者の態度であった。既成の知識をばらばらに頭につめこむだけでは意味がない。「私達は自然界を、出来るだけ生命あり、統整あり、調和あり、節理ある機構として理解させたい。選択する材料もこの目的を破壊することなしに、たといその一部を提供することは余儀ないとしても、それは全体とつながりを持つことを明瞭ならしめて欲しい」。〈※5〉これが彼等のねがいであった。

さらに、児童の自発活動を重視した。そこから、児童に絶えず科学上の疑問を提出させ、教師の介在の下にこれを協同的に解決することによって、低学年における理科教育の目標を達成しようとする実践が生まれた。

井の頭の地は自然の無限の宝庫であった。照井はダーウィンさえ驚嘆したという、あのファーブルの態度を子どもたちのどこかに植え付けたいとねがった。彼はまた、教室に容積約50リットルのガラス製の大水槽を2個おいて、子どもたちに1年のときから水棲動物を飼育させた。「子どもたちはこれを眺める。私はこれを眺めさせる。3年の間これを継続して来た。今ではこの水槽のミズスマシ1匹だって子どもたちの親しい仲間である。……子どもたちはよく『ゲンゴロウも3年生になった』と言う。彼等は彼等と共に水槽の動物たちもこの教室で生活し卒業することと思うているのであろう」。


生き物の観察

照井は『自然科の究明』の結語をつぎのように記し、児童の作文で結んだ。「子どもの眼にうつった自然界の一現象、これを取りこむ子どもの態度、子どもの人生観の反影——なんとわざとらしさのない素直さであるかを見よ」。

これらの実践は脈々と、現在の小学校低学年の「みいつけた」の取り組みへと連なっている。

〈※5〉照井猪一郎『自然科の究明』明星パンフレット第1輯(1931年10月)

2）霜田靜志『芸術を基調とせる低学年の教育記録』

霜田靜志は明星学園創立の翌年、1925年（大正14）4月から1931年（昭和6）3月まで、小学校第4回生の教育を6年間担当した。そのうち第1・2学年における教育実践は、2冊の著書『芸術を基調とせる低学年の教育記録』〈※6〉、『低学年児童の教育』〈※7〉に詳細に記録されている。

ここでは、まず、そのような実践をするに至った経緯を略述する。


霜田先生と子どもたち（4回生）

霜田靜志（本名利平）は1890年（明治23）、埼玉県に生まれた。赤井・照井より3歳の年少である。東京美術学校（現東京芸術大学）図画師範科を卒業し、熊本県山鹿高等女学校と4つの小学校を兼任。肺患による4年間の闘病生活ののち、埼玉県立女子師範学校の教壇に立った。ついで1921年から成城中学校の図画科嘱託となり、翌年から成城小学校の図画手工科嘱託を兼ねた。それと並行して東京帝国大学文学部の聴講生として美学美術史を専攻している。この頃から霜田の美術教育に対する研究は大きく進んだ。

当時すでに山本鼎（かなえ）によって自由画教育運動が提唱され、沈滞した図画教育に爆弾が投じられていた。霜田はこの運動に共感を覚えながらも、満足しきれぬものがあった。――自由画教育は図画教育に革新をもたらしたが、所詮は絵を描くことにほかならぬ。しかも自由画といいながら、ひたすら風景と静物の写生に終始している。これは子どもの絵としてそのまま肯定しうるかどうか疑問である。アメリカなどでは、子どもの生活環境に現れるあらゆる事象を描かせることが盛んだが、これは風景・静物以上に子どもの表現の興味の対象であり、心理的に見ても重要なものである。図画教育においては、風景・静物の写生ばかりに傾くことなく、もっと子どもの心理に合った生活表現、童謡・童話等の絵画的表現を大いにさせるべきだ――と霜田は説いた。

図画教育をこのような広い意味の美術教育と考えるようになった霜田は、この教育は美術の教育であるよりは、美術による教育であり、美術による人間教育であるという立場に進んだ。この立場からは、もはや絵画や工作だけが問題ではない。さらにそれ以上に、音楽も、童謡も、子どものつづり方も、劇や舞踊も問題になってきた。

こうして、霜田は総合的な芸術教育運動に乗り出した。幸い澤柳政太郎が理解してくれていたので、澤柳を会長とする芸術教育会を組織し、1923年（大正12）4月、機関誌『芸術教育』を創刊した。顧問には坪内逍遥、正木直彦東京美術学校長、有島武郎、島崎藤村などを迎え、同人も多彩な顔ぶれであった。しかし、この年9月の関東大震災で大きなダメージを受け、『芸術教育』も最初の予想ほどには伸びていかなかった。なんとかして存続させようと努力をつづけたが、ついに廃刊のやむなきに至った。

霜田は、振り出しにもどって教育の実践に徹しようと思った。この決意を当時創立したばかりの明星学園の赤井園長に話したところ、赤井から「それだけの考えがあるなら、ぜひ明星に来て君の思うとおりにやってくれ」と言われた。そういう経緯で小学校1年の担任となり、6年間の生活を共にすることになったのである。

〈※6〉霜田靜志『芸術を基調とせる低学年の教育記録』（平凡社、1927年3月10日）
〈※7〉霜田靜志『低学年児童の教育』（刀江書院、1935年4月15日）

霜田静志は、芸術教育を理解せず知育のみが教育であるように考える風潮を批判した。

> 国語や算数の出来る子どもがいつも優秀な子どもと考えられ、図画や工作や音楽のようなものの上手な子どもが、どれほどうまくとも、国語・算数のようなものが出来なければ、劣等な子どもと考えられやすい。これははたして何によるのであろうか。いうまでもなく、これは大人の功利的見地からの判断である。文字を多く覚えれば処世上どれだけ得だとか、算数がよく出来ればどれだけ便利だとかいう、全く功利的見地からこれを考えるからである。真に児童の発達の本質的方面から考えるのでなく、現代の大人の社会から見ての功利的見地でのみ判断しようとするがためである。〈※7〉

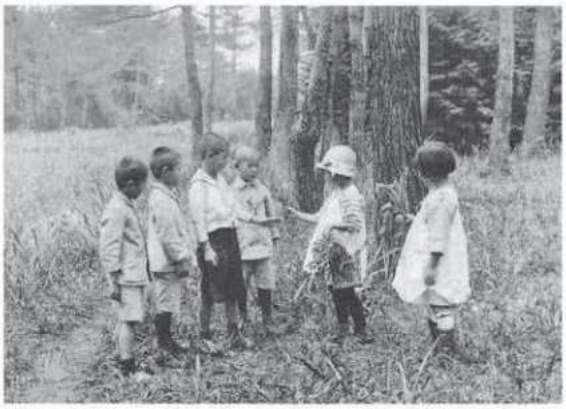
霜田が求めたものは「大人の功利的な見方を捨てよ、そして純真な子どもの心に培え」ということだった。国語教育においても、芸術性・文学的領域の重要性を主張した。低学年への指導方法では、学習を詩から始めたり、お話に絵を利用したりもしている。算術の学習も物売りごっこのように遊戯化され劇化される。「私たちの学園では、1年では本当の算術らしいものはやらないが、児童の生活の中に現れた数の問題を取扱い、遊戯の中から数の経験を導き出すことにしている」。〈※7〉

理科教育においても、従来の物を機械的・物質的にのみ扱う傾向を批判した。一輪の花を見るにしても、分解的に見るだけではなく、総合的に見ることの重要性を主張した。

「花弁が何枚だ、雄蕊が何だ、雌蕊がどうなっていると、詮索するだけではいけない。花そのものを知るためには、その成り立ちを調べると同時に、美しく咲いている花そのものの姿を、そのままに見、そのままに受け入れる必要がある。……切れ切れの物質と見ずして、花そのものを一つの生命として見る。そこにわれわれは尊い価値を見出す。言わばこれは芸術的態度によって物を見ていくことである」。〈※7〉

美術教育では製作だけではなく、作品を鑑賞させることにも力を注いだ。児童に絵を描かせた後は必ず展示し、どれがよくできたかを比較判断させた。もちろん鑑賞の対象は児童作品だけではない。芸術的に優れていると思われる童書家の作品から始め、有名な美術家の名作にも触れさせようとした。

「私はお話による美術鑑賞の教育を試みている。作品を示し、その絵の内容を語り、作家の生活を語ってきかすと、尋1の児童でも教師の取扱い次第で、相当に興味を持って聴くものである」。〈※6〉



最後に訓育の問題について彼の主張を記しておきたい。学園では1年から3年まで、修身科をおいていないが、児童はお談義めいたことを言われなくとも、日々の生活でしだいに社会生活意識が発達し、しだいに自己を知り、協調の精神を尊ぶようになるのだと言う。

「訓育は決して、子どもに徳目を教えてこれを守らせて行く方法によって徹底するものではない。何々すべしと教えてこれを守らしむべく強制して行く方法は、教育としては拙の拙なるものである。子どもには子ども同士の社会生活

〈※6〉 霜田静志『芸術を基調とせる低学年の教育記録』(平凡社、1927年3月10日)
〈※7〉 霜田静志『低学年児童の教育』(刀江書院、1935年4月15日)

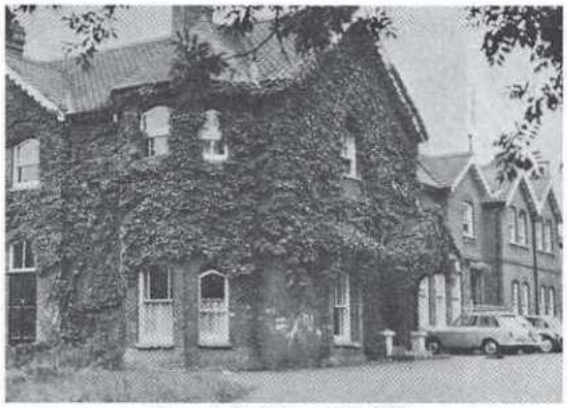
の中から、お互いに守るべき道徳を学ばせ、これが必要を感ぜしめて、これを実践せしむるよう指導すべきである。私はこの立場から子どもの社会性を発達せしめ、その道徳性を高めることに専ら力を尽した」。〈※7〉



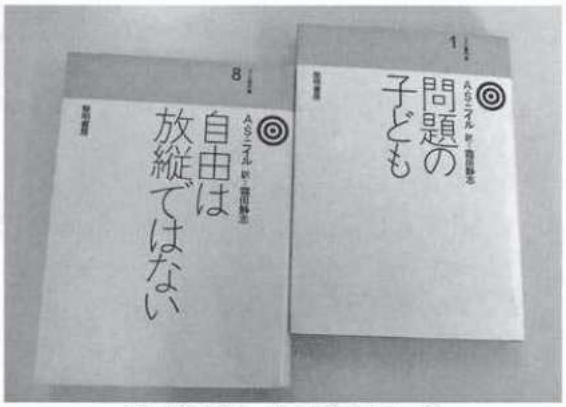
受持ちの子どもらが4年生になった年、1928年（昭和3）4月から10月まで、霜田はヨーロッパに出かけた。チェコスロバキア（当時）のプラハで開かれる国際美術教育会議に出席のためであった。

この渡欧によって、霜田はいままで文献によってのみ知っていた外国の美術教育にじかに触れることができ、書物や文通によってのみ知っていた学者、教育家、美術家等と親しく語る機会を得た。また、それ以上の大きな収穫は、国際美術教育会議への出席に先立ってイギリスに渡り、徹底した自由と自治で知られるA.S.ニイル〈※8〉のサマーヒル学園を訪ねてニイルに会い、1週間子どもたちと生活を共にして、その教育の実態を見とどけたことであった。

霜田はヨーロッパからの帰途、35日を要する船旅のあいだに、ロンドンで買い求めてきたニイルの新著『問題の子ども』を熟読した。一節一節に心をうたれ、この本の翻訳を決意した。『問題の子』の翻訳は、霜田自身の研究を児童心理と精神分析の研究へと方向づけることとなった。また、霜田静志訳『ニイル著作集』全10巻（黎明書房）は1967年～76年に刊行されている。



サマーヒル・スクールの本館



霜田静志訳『ニイル著作集』の一部

＜文責：堀内 雅人・依田 好照＞

〈※7〉 霜田静志『低学年児童の教育』（刀江書院、1935年4月15日）
〈※8〉 アレクサンダー・サザーランド・ニイル（1883－1973）。イギリスの新教育運動の教育家。ロンドン郊外にサマーヒル学園を設立し、精神分析と心理学に基礎をおく、徹底した自由教育を実践した。

COLUMN 1

霜田靜志の学力観

昭和初年、とくに1930年代には、都市の新中間層の間で進学競争が過熱した。1933年(昭和8)、霜田靜志が明星学園小学校を卒業した長男光一〈※1〉を、府立中学ではなく、明星学園の中学に進学させたとき、ある母親からこう言われた。

「惜しいですね、お宅の坊ちゃんはお出来になるのですから、府立をお受けになればきっと入れると思うんですが――」

それに対して、霜田はこう答えた。

「私の所の子供も勉強させて受けさせれば、府立の学校に入れるかも知れません。しかし私の所の子供は今、そうした試験準備の勉強などとは縁の遠い勉強をしているんです」

「まァどんな勉強をしていらっしゃいますの？」

「私の所の子供は機械をいじるのが好きでしてね、真鍮板だの針金だのを切ったり曲げたり叩いたり、電気の玩具か何か作ると言って、毎日ガチンガチンやっているのです」

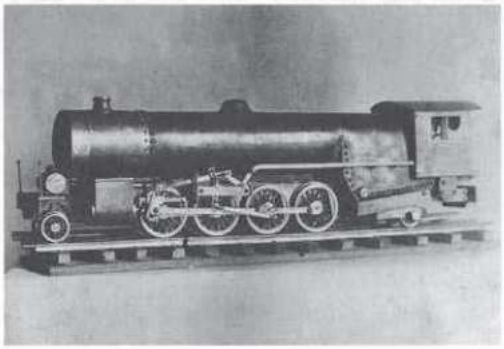
「はァ」と婦人。霜田は付け加えた。

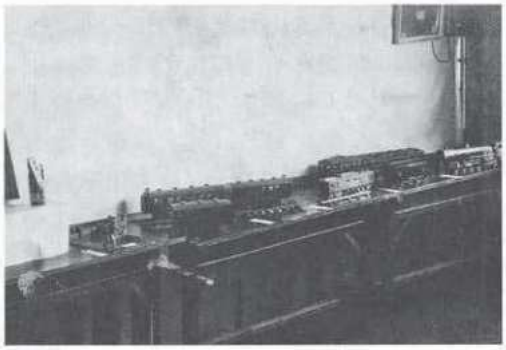
「子供が好きでやっているこういう仕事は、子供の将来に何か役立つ大きな力となると思いますので、これをやめさせるのはどうも惜しいように思われてなりませんのです。府立に入る準備をするということになりますと、こういうことを一切やめさせてしまって、毎日教科書の丸暗記の勉強をさせなければなりません。それは子供にとって余りにかわいそうなことです」。

霜田はさらに、つぎのように書いている。

「子供が科学玩具の製作に夢中になっているということは、それ自身尊い体験活動であって、それが後に進むべき専門的研究に役立つ役立たないはどうでもよいことである。もちろん後に役立てばそれに越したことはないけれども、役立たぬからとて無駄ではない。子供はこうした仕事に熱中している間に、知識を実際化する方法を学ぶし、その間に工夫創作の力を十分に進め得るからである」〈※2〉

霜田少年製作の蒸気機関車
中学4、5年頃、苦心して作った。実際に蒸気で走る。





展示会
同好の士が集まり、自作を持ち寄って展示会を開いた。

＜依田 好照＞

〈※1〉 第6回生。東京大学名誉教授。2008年(平成20)11月、文化功労者顕彰。
〈※2〉 霜田靜志「子供をめぐる親と教師の問題」日本児童社会学会編『今日の子供を如何に教育すべきか』(刀江書院、1936年)、復刻版:児童問題史研究会監修『現代日本児童問題文献選集17』(日本図書センター、1987年)

2　創立期の子どもたち

(1)通学

現在、小学校の最寄り駅は井の頭公園駅であるが、創立当時はまだ井の頭線もなく（帝都電鉄＝京王井の頭線の全線開通は1934年・昭和9年)、吉祥寺が最寄り駅であった。

子どもたちは吉祥寺駅から井の頭公園を通り、池にかかる橋を渡って通学していた。当時の写真にはランドセルを背負った子どもたちがうっそうとした杉並木を通学しているものや、霞がたなびく池の橋を渡っているものがあり、さながら遠足にでも出かけているような風情である。


通学する子どもたち(井の頭公園の中橋)

当時の様子を赤井米吉は以下のように語っている。

大正14年1月には1年22人、2年16人、3年19人総勢57人になった。武蔵野の冬は霜が実にひどい。朝は雪の降ったように白く地を蔽うているが、10時頃からぐしゃぐしゃに解けて、道も庭も野原も沼田のようになってしまう。靴の土は雪国の下駄につく雪のようで、それが教室の中までも入って来るのには閉口した。児童は自然廊下だけで遊ぶようになった。こんなことだったら廊下をもっと広くするのであった。但し南に廊下をつけたので、ここで遊べば、晴天でさえあればいつでも春のようにぽかぽかしていた。


通学路(公園入口)の除雪作業(1936年)

雪の朝は教師は吉祥寺駅まで児童を迎えに行った。公園の杉並木の雪路をのぼって来るのは私のような雪国に生まれたものにはほんとに嬉しいことであった。私はしみじみと幼かりし昔の通学路を思い出した。特に寒い日には昼食に豚汁を造って皆で啜った。小さな群ではこんな事も出来た。

3月になると上水の土堤の南側にはタンポポ、スミレが咲き出し、ボケが紅の唇を見せ出した。やがて薄い霞がたなびき、雲雀が鳴き出した。天地の生命が復活して来るのを児童が1日1日とみつめて暮らすのもよいことであった。こうして明星の第1年は終わった。〈※1〉

〈※1〉赤井米吉「明星五年」『混沌』第8巻第1号(1929年1月22日)

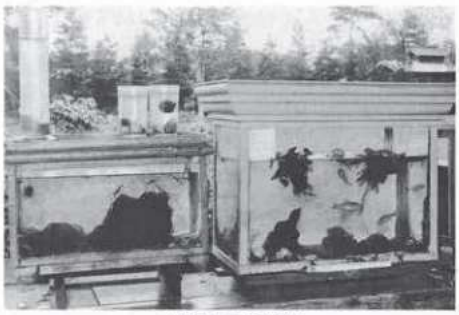
(2) 初期のころの学校のようす

開校当初の児童は1年生7名、2年生5名、3年生9名の総勢21名であった。それに対し創立同人の4名と職員夫婦、敷地は1,000坪、校舎は3間×4間の教室5つに事務室、小使い室、物置、便所というスタートである。

教室は2年目（1925年）に高学年用の教室を2教室増築し、4年目には音楽室や図書室を別建物にするなど、順次広げていった。4年目になると児童数は6学級で160名、教員は10名という規模であった。

創立から数年経った頃、照井は校庭の隅に小さなコンクリートの池を作る。金魚や鮒、鯉を入れて、その後池の中にはミズカマキリやコオイムシなどの水棲動物が自然に繁殖していった。池にはチョウやトンボ、ホオジロやヒキガエル、ヤマカガシといった多くの生き物が集まり、そこでは生物界の食物連鎖を観察することができた。教室には大小二つの水槽を置き、水棲昆虫や、貝類、魚類、藻類などを入れて教室内でも生き物を観察できるようにした。常に小動物や昆虫など、自然を身近に感じることで、それらに対する興味や観察眼が養われた。教室の南側にタタキの廊下を置き、教室からすぐに庭に降りられるような構造にしたのも、児童を出来るだけ外へ、土のある場所へ出そうとした工夫である。これは90年経った今でも、子どもたちの生活の中に引き継がれている。

創立期の校舎は一面の麦畑と雑木林に囲まれていて、この環境を様々な形で利用した。



水棲昆虫の飼育



校庭で



畑づくり



林の中の授業



校外で

校庭の一部を畑にし、作物を育てた。また夏には近くの農家へ行って馬鈴薯を収穫した。林の中で読書・算数・自然科・図画の教授がおこなわれたこともあった。秋になると近くの森で茸狩りや栗拾い、畑では芋掘り、大根引きなどをおこなった。また真冬の夜には天体観察会をおこなっていた。

その頃の授業の様子を、当時の小学部教員、中村勇がつぎのように書いている。


小学校校庭で天体観察会(1933年)

創立の頃

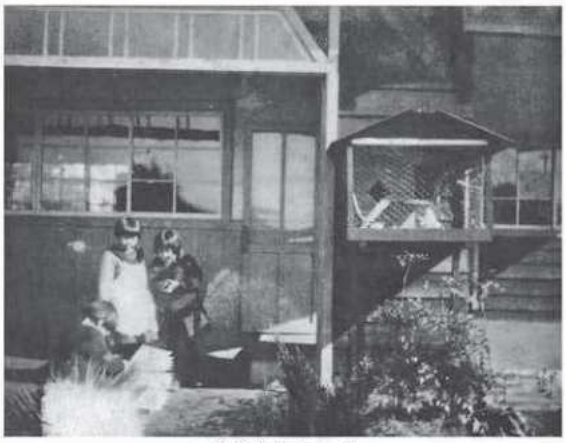
1年生は教科書は「明星読本」1冊だけで、ランドセルにはいっている物は弁当・ノート・クレパス・筆箱・ブロック・ナイフ・ものさし・虫めがねなどのたぐい。朝学校で頭数が揃うとランドセルを背負って森へ出かける。門を出れば林があり麦畑があり原っぱがあり、柳の土手があった。森の中で話を聞いて歌を歌って、本を読んで、絵をかいて、蛇やとかげを追い回して、木登りをして、蜂の子を食べたり焼き芋をしたり、苗代の泥に靴を取られたりした。〈※2〉

(3) 第1回生・2回生の生活

卒業生が、当時をふりかえって記した文章から転載する。

1) 山本組　岸(横井) 叡子(えいこ) (1回生)

理科（自然科） あざみ、りんどう、提灯草等の咲くかたわらで、日向ぼっこしながら土手に足を投げ出して、めいめい読んでいた「花の巻」は、自家受粉とか風・虫媒花等に1頁使い、写真も数多く、ピンクの厚い表紙も他の教科書と違う手応えがありました。


生き物にふれる

赤いボケの咲く人喰川（玉川上水）の向こう、三鷹まで歩いたのは白亜の天文台への遠い道でした。途中の林の中では、笠の裏が青変してくる初茸もよく見つかり、草にさしてぶらさげました。揃いの帽子の中へ女児はれんげ草、男児はどじょうを入れて、宝物のように持ち帰った日は、何をしに行ったのでしたかしら？

顕微鏡の中で4本糸を手足のように踊らせてるつくしの胞子は、何回見比べてもガラス版の上の緑の粉でしかありませんでした。

学校の井戸端の朝顔棚は衝立のような形で大きく、その花の下で「黒いなあ」と先生は私の首筋の日焼けぶりに呆れて、さもおかしそうでした。

〈※2〉『明星の年輪―明星学園50年のあゆみ』(1974年)119頁

小使室のまわりは、山羊、鶏、猿、兎、蜜蜂の大家族で、お爺さんもお婆さん（用務員）もそのお世話で忙しかったでしょう。

地理　全員土を掘り、山を築いてグループ製作。1坪関東地方が五つ六つ。お互いに見比べ、富士の頂上へ一握り加えたりしました。

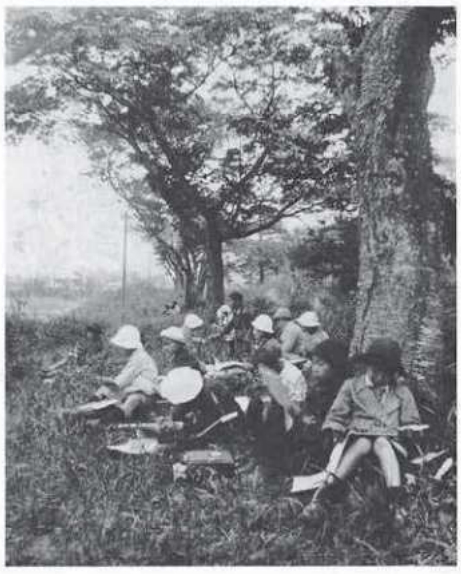
日本史　先生のお得意の教科。「羽柴どのー」と大声で片手をあげた時の先生の位置も、向きも、空の晴れ具合までも、テレビの実況放送に負けぬ印象を残しました。勇ましく切腹した武士が誰だったのか思い出せなくても、「遠き者は音にも聞け、近きは寄って目にも見よ」は耳の底に響いて、やはり読んだ話とは違います。あの調子で「板垣死すとも自由は死せず」を聞きたかったと残念です。

数学　何より私の苦手。鶴亀算なんて面倒くさい。それどころか、立てた棒の数よりもその間隔の方が少ないという事実は、自分で運動場へ10本立てたて歩いてもなお狐につままれた気分。そんな子でも時が来れば「2点間の最短距離」だの、「長さだけで太さがない」等とお話変われば如何にも学問らしい観方が新鮮で、面白ければわかる。わかり始めれば優秀組入りと、土台作りは先生、苦労していただいた甲斐がありました。

国語　教科書は白黒（表紙）双方こなした筈にもかかわらず、中身の記憶がなく、自習書でコツコツやったこと自体が身に付き、今も辞書へは気軽に手が出ます。『新読本』(明星学園編纂)と、先生が刷って下さった童謡はいくつも覚えています。ストーブを囲んで『坊っちゃん』を会読した頃が、児童文学から純文学への入口。良い本できっかけを作って下さいました。教室の図書棚には児童文庫・小学生全集がずらり。中でも「クオレ」と「小公子」は素敵、未明も三重吉も懐かしい。

落伍者を出したり順位を発表する必要がないから試験はなかったが、自習の後始末として覚えるまで簡単なテストが繰り返されました。のんびり屋は予告されてもその日を忘れて遊びほうけたもので、テストが明日に延びると聞くと、「ああ助かった」を何気なく連発し、「そうか、助からんところだったんか？」と先生はニヤニヤなさいました。

図画　この時間くらいは松岡先生へバトンタッチして一服なさっても差し支えなかったでしょうものを、先生は折れそうに細い腰に似ずエネルギッシュ。丘の草むらで生徒の間へ座ってパレットを出し、自画自賛しつつ松岡先生が廻っていらっしゃるのをお待ちになる。これだから学校というよりも「先生との生活」という実感が生まれたのでしょう。



「この絵、うまいでしょう？」と或る放課後、私を招いて、教育誌の扉絵をお見せになりました。白い丸花瓶に菊かボンボンダリヤのありふれた構図。大写しの無彩色なので、まさか自分の水彩画だとは気付かず、うっかり「ええ」と答えたら、先生は写真の下に置いていた手を除けられました。自分の名が印刷されてそんなところにあろうとは！ 実物以上に見えてついひっかかった驚きは今に至るまで。（この日「扉」という言葉を知りました。）

音楽　めったに休まないげん先生がお休みだった日、やっぱり音楽室に入りましたが、ピアノはそっちのけで、小椅子を半円型に並べ、向い合わせて山本先生のも小さい椅子を置かれました。端の人から順に好きな歌を独唱させていくうち、少人数なので全員終わっても時間は余りました。「今度は先生の番」と立って、出来る限りゆっくりと荘重に「児島高徳」をお歌いになり、終りの方は気持ちよさそうに歌っていらっしゃいました。その後いつだったか、放課後、先生はひとりでピアノを弾きながら「故郷の廃家」を歌っていらっしゃった、あの時はしんみりした空気が漂っていました。〈※3〉

2）照井組　出口（茶郷）喜久子（2回生）

国語の授業　『国語読本』などいうものがあることすら知らなかった私達は、先生はいつも読み物を作って下さるものと思っていました。その読み物は章の終りに問題と新しい漢字が書き抜いてあり、解答が出来ると一人一人見て頂き次に進むわけです。

先生独自の軽妙な筆致の挿絵が物語を一層楽しくさそいこんで、次の読み物を頂くのがどんなに待たれた事でしょう。「羅生門」、「曽我物語」、「竹取物語」、「人魚姫」、「安寿と厨子王」等々、読解力に応じた文章に書きなおされ、新漢字を組みこまれてまとめられるのです。しかもグループによって違った題材の読み物を作られるのですから、その御苦労は口につくせぬ感謝の思いです。



畑仕事　今の中学校のあたりでしょうか、畑を子供達に開放して下さって、2人1組に区切られた小さな農園は、都会育ちの子供達にとって裸足で踏む微妙な土の感触を楽しませてくれました。自分達の手でまいた種の発芽・成長の驚きと興味。朝ごとの手入れをはげんで、収穫をくらべ合う時の楽しさ。自分の名入りの鍬や手足を洗う時など、井戸端で誰かがポンプを替る替る汲みあって、大騒ぎした後の爽快感も今なお肌に残る感じがする程です。

バラック校舎　設備も実績も名声もなにもない、そんなささやかな学園へ大切な子供達を、親達が大きな夢を描いて託されました。その勇気と熱意と信頼こそ、どのようにか尊く美しく、明星をささえる礎となった事と確信せずにはいられません。

子供達は不便な電車を乗りついで、そそり立つ深い杉並木の公園の道を、繊細な心をときめかせて通っていました。

赤井先生、照井先生、おげん先生、山本先生。当時はまだお若く、新教育の創造へ身を挺して邁進していられました。その燃え上る情熱の火は、御父兄の方々の厚い信頼を得てこそ、開校の日、雨のしぶきにもめげず列席の人々の顔に、希望の輝きを満ち溢れさせたものと信じます。

通学路　当時の通学路は長橋を渡らずに弁天様の前の急な石段を上って、縁台を並べた休み茶屋の前の小径を辿り、今の井の頭会館の前あたりに通ずる道を通って通学する時期がありました。ちょうど梅雨時のしとしと降りつづく朝など、御茶の水のあたりは大杉の根元そこかしこから澄んだ清水がこんこんと湧き出ていて、一面に黒小豆をまきちらした様に小さく動く小蛙の大群と

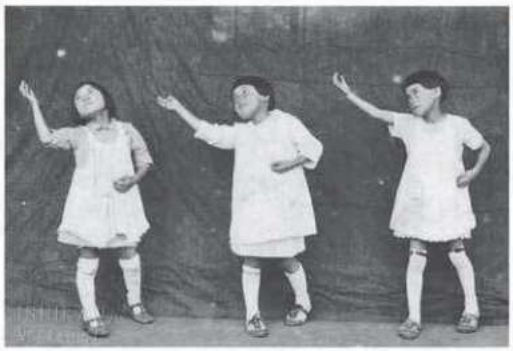
〈※3〉山本徳行『峠』（1977年4月5日）所収

知って驚き、踏みつけずにはどうしても歩けずに、思わず足がすくみ、つまさき歩きでとびとび通った道すじの雨に洗われたあの鮮やかな緑の美しさと共に浮ぶ思い出の一つです。

学芸会　教室前の歩廊を舞台にした学芸会で、照井先生作の児童劇がたびたび上演されました。見物のお母様方は庭に椅子を並べて楽しむその目は日ざしさえなごんで、親、子、教師のかもし出す、明星らしい風景でした。教室が楽屋で装置も衣装も工夫をこらした手作りで、子供らしく懸命にはりつめた目は真剣に輝き、協力して成しとげた喜びと充実感に充ちていました。〈※4〉



うっそうとした井の頭公園の杉並木



女児の舞踊



教室前の廊下を舞台に劇の上演

＜文責：照井 伸也・一瀬 清＞

〈※4〉「遠き日をふりかえりて」『明星学園後援会会報』5号（1969年7月10日）

3　学校と家庭の連携

(1) 母の会の活動

創立3年目に入ろうとする1927年（昭和2）の1月、「明星学園母の会」が生まれた。その経緯を赤井学園長はつぎのように記している。

> 児童の教養に母の力の大きなものであることは今さらいうまでもない。したがって学園の仕事にも私たちはできるだけ母の共働を求め、これを学園の教師の一人とみなそうと考えた。それは単に児童一個人の問題に対して教師と母とが十分に連絡しようとしただけでない。母親たち相互の間の理解と同情と共働をも望んだのである。
>
> 一村一校のところ、祖先代々その村で暮しているところでは、学校によらなくとも父母は互いに知り、また互いの児童を知っている。何某は誰々の子どもとよくわかっている。しかし私たちの学園のように寄り集まったところでは、特別に学園を中心としてお母さんたちが集まって来なければ互いに知りようもない。30人のお母さんたちがみな30人の子どもを持ったつもりでと希ったのはそのためであった。創立の初期、まだ学園の教室に余りのあった頃、その一つを母の部屋としておいたのもそのためであった。
>
> 教師と母との連絡だけならばお母さん一人一人学園に来てもよければ、教師が家庭訪問をしてもすむ。しかし横の連絡のためには母の会を開いてときどき一緒に集まる必要がある。こうして学期学期の母の集まり、ときおりの母のための講演会等、ずいぶん頻繁に母の会合を催してきた。お母さん方もその意味を了解してよく学園に来てくださった。いろいろな仕事の手伝いもしてくださった。
>
> 大正14年の夏、15年の夏、有志の児童をつれて神奈川県三戸の海岸で10日の生活をしたときのごときは、つきそいのお母さん方によって炊事の方はことごとく引き受けてくださった。ことに15年の夏行ったときには、一児童は猛烈な疫痢にかかって、一時は危篤の状態にまでも陥ったが、つきそいのお母さんの方がわが子のように看病してくださったのは、ほんとうにうれしいことであった。
>
> こうして1年、2年と年を重ねるうちに、学級学級でお母さん方の交わりが密になり、やがて他の学級との間にも交わりが加わり、ついに昭和2年の1月には、母の会として形の備わったものがお母さん方の間に生まれてきた。それは互いの親睦と修養と学園の手助けを目的とし、年1円の会費で講演会の開催、盆暮れにおじさん・おばさんへの心付けなどを事業とする。さらに有志の人々は自分の小遣いを節約して学園と教師の危急の場合のためにと醵金してくださった。それはただ今までにおよそ2,000円になっている。苦しい学園の生い立ちを助けはぐくんだのは、やはりこうした母なる人々の心からの同情であった。児童の教育そのものにおいて、学園の対社会の問題において、私たちがしばしば失望の淵に沈淪したとき私たちを慰め、励まして、学園をここまで押して来たものは私たちのお母さん方であったことを忘れてはならぬ。〈※1〉

この「母の会」の熱意が父親たちを動かして、中・女学校創設の資金づくりを目的とする「明星学園後援会」を発足させたのは、その年の2月であった。

また、バザーも母の会の活動のひとつであった。たとえば、1931年5月、学園創立7周年記念事

〈※1〉 赤井米吉「明星5年」『混沌』第8巻第1号(1929年1月)、『明星の年輪―明星学園50年のあゆみ』『同―60年のあゆみ』に再録

業として、母の会主催のバザーが開かれた。『明星の教育』第1年第4号（1931年7月）の巻末、「学園便り」につぎの記事がある。

- ◆ 母の会主催でバザーを開く。この日の純利益600余円。目下その金を如何に効果的に費消するかに苦心擬議中とか。明星はかくして力強く支持され、発展して行く幸運を持つ。
- ◆ お母様方のバザー開催の熱意に動かされ、これを援助する立場で、この日小学部では学校劇を催した。表紙の写真は当日演出の「退屈な王様」の一場面。照井氏おおわらわでの演出指導に好評で酬いられた。この日のプログラム。「お地蔵様は知ってるか」1・2・3年。「退屈な王様」5年。「壷は誰のものか」4・5・6年。



学校劇（教室の前で）

(2) 学校・家庭・子ども

初期の学園では、母親とともに父親も学校と密接に連携し、授業参観をはじめさまざまな学校行事にも積極的に参加していた。2人の兄とともに11年間在学した久保田宏明氏（12回生）は、つぎのように往時を回想している。

私は明星学園が誕生して2年後の1926年（大正15）、東京・阿佐ヶ谷で兄弟3人の末子として生まれました。

両親は明星学園の教育方針に感銘し、当時は官尊民卑の公立優位の時代の中で長男を入学させ、続いて次男をも通わせました。そして、5、6歳離れた兄たちの経験をもとに私もその仲間にいれたのでしょう。当時の明星学園は、1学年1クラスの小さな、小さな学校でした。1学年20名という小規模な学校ということが、さらに両親の心を動かし、喜ばせたのだと思います。

当時の小学部は担任が1年生から6年生まで持ち上がりで、卒業させるとまた1年生の担任に戻っていました。私の担任は牧均先生という九州八代のご出身で、眼鏡の奥には優しさを秘めながらも、1年生の時からビシッと物を言われる大変厳しい先生でしたが、今でも一言一言が私の心の隅に残ってもいます。九州弁で「センセイ」と言えず、「シェンシェイ」というアクセントが今でも忘れられません。父とはすっかり親密で、なんでも語り合える仲だったようです。私が大人になってからも、父はよく子どもの頃の話を聞かせてくれました。

その一つに、私が1年生の時、牧先生が5つのリンゴを取り出し、「ここに同じリンゴが5つあります」と話し出した際、私が「先生、リンゴは大きいのも小さいのもあり同じではない」と言い出し、周りの友人達も「そうだ、そうだ」と騒ぎ出して、授業が続かなくなったことがあったそうです。先生は、職員室から包丁を持って来て、一番小さなリンゴに合わせ

て皮をむき、結局6つくらいのリンゴになってしまい、後に「大変な授業でしたが楽しい思い出の一つです」と父に笑いながら話されたとのこと。私は後に教育の世界に入って、明星学園の先生方が1年生の問題提起に対してそこまでやって下さったのだと、何か大きな示唆を与えられた気がしたものです。



また、当時の私立学校は、家庭との連携も大変密でした。もちろん明星学園もそうでした。運動会や学芸会の時などは、父母による模擬店の参加が慣行で、私の家がみつ豆の当番のとき、母は数日前から黒豆を煮たり、寒天に赤や緑色をつけたりして準備していたこと、そして当日は、出来上がったみつ豆の材料を大風呂敷に幾つも包んで、それを母の後からあの厳格な父が持って、阿佐ヶ谷の家から吉祥寺へ、そして井の頭公園を抜けて学校へ持って行ったことなどを思い出し、その姿を想像するだけで懐かしく、また微笑ましさを感じています。

そのように、私立学校では当時も広い地域から児童・生徒が集まっていたにもかかわらず、学校と父母・生徒の三者が密接な関係にあり、それが教育全般に良い意味で強い影響を与えていたことも確かです。

先にみつ豆を母の後ろから持って行った厳格な父と言いましたが、父は早稲田大学に学び、卒業と同時にフランス・ドイツに留学、帰国し、教授としてまた、政経学部に新聞学科を創設したり、学部長としても力を注ぎ、博士論文であったフランス・ケネー経済学を生涯のライフワークとした、大変厳格な学者であったと思います。

しかし、母とは学生結婚という当時としては全くリベラルな考えの持ち主でした。私には学校の宿題をやるより多くの本を読むことをすすめ、小学生の頃にはシートンの動物記やファーブルの昆虫記、島崎藤村など日本の作家のものを、中学生になるとロマン・ローラン、ヘルマン・ヘッセやゴンクールの日記、アミエールの日記などの外国の作品を次々と持ち込んで読まされたものです。明星学園のような学校でも夏休みなどには宿題はありましたが、両親は宿題よりも読書や山歩きをすすめましたので、私は両親に隠れて宿題をやったものでした。

外では厳格な、そして、家でも書斎に閉じこもりがちな学者としての父も、土曜日の晩は必ず家族でトランプやダイヤモンドゲーム、コリントゲームなどを楽しみましたので、土曜日の晩が来るのを待ち遠しく思ったものです。そして、毎年夏休みには、信州の山で父が先頭になって草花を採集したり、昆虫類を追いかけて過したものでした。…中略…

このような父母の子どもへの接し方は、学校の保護者を巻き込んでの全人的な教育によるものと、明星学園に今でも感謝しております。〈※2〉

また、著名な版画家・装幀家の恩地孝四郎氏は、4人の子どもを明星に学ばせ、学園の教育を強く支持された。1934年（昭和9）の夏、伊豆伊東での4・5年生の夏季生活に参加、スケッチな

〈※2〉『親の役目―子どもをより善くするために―』（日本教育システム開発協会、2007年3月）

どを指導、その体験記を『ほしかげ』に執筆された。

たった8日間であるが、多くの子供たちと一緒に暮らして、いままで知らずに、もしくは漫然としか感じていなかった彼らの世界を、新たに見直し得たことは私にとって甚だ幸いであった。僕はいわゆる漢学式厳格なおやじの下にあったため、例えばいろいろな所行なども善悪にはっきり割り切る心のくせがあるし、人間をとかく善玉悪玉に分けたがる。しかしああして40人からの子供のなかにあってその心の動きを見ていると、その行為を簡単に割り切ることのいかに難しいかを感ずる。すべての行動がその環境のなかに於て必然であることを明確に知った。例えば結果に於て善でない行動にあっても、その成因を知るときに、その行動の必然さが知られ、その行動の成果については、そこに馴致される所の環境こそ責任者であって、行動者に責任を求むべきではないことだ。児童に於て殊にそう覚じたい。この事は、私自身の家庭にあっての子女の教育に関して、自省せられるものだ。

また、40人からの子供たちの精神が、各々やはりその性格の必然によって行動され、その行動の妥当さが、比較の容易さから、非常にはっきりと分ったことだ。これも私の家に於て4人の各々異なる性格——まだ性癖というべきものだが——の上にあてはめてその行動の善悪を簡単に律することの不当なのを悟らされる。われわれの社会にあっては一つの道徳律によって個を律する。この道徳律に合致し難き性格者は、その行動を非妥当視されがちである。この一律主義は一般教育にみる弊であるが、この明星夏季生活の8日間で私はまた、明星教育の美点を讃美しなければならないものを味わされた。40人の一人一人に対する教導者の周到なる理解とそれに適応せる対応だ。この教育はなまやさしい努力では就せぬ。御定まりや、学習教育法では出来ないことである。児童に対する愛、私愛でない公の愛情、児童に対する細心なる不拘束、そして児童の心に立脚した教導。いまさらに生きた教育の伸長性を感じた次第であった。若い魂の損なわれない発展、それを見ているような心持であった。40の子供の魂が密集した存在としてそこにあった。…中略…



集合した子供の世界は、一人一人の子供の生活とも違うし、ああした夏季生活の子供たちの生態はまた学窓生活とも異なるものがあろう。五十嵐先生も教室だけで子供の全容を知るは難いといっていられた。先生の細心を以てしてそうであるのかと思う。そして、こうした生活は子供を知るについてまことにいい機会とされていた。僕の如きでは、こうした機会は、子供そのものを知るについてまたとない好機である。学園の父兄方も、こういった機会に「子供」と明星の教育に接せられることをおすすめしたい。魯鈍(ろどん)、僕の如きでさえこんなに感慨させられるものが多かったのだから。〈※3〉

〈※3〉 小学部教育月報『ほしかげ』第10号(1934年10月30日)

(3)「部落会」の提唱

初期の教師たちは、子どもたちの成長にとって学校と家庭の連携の大切なことを訴えていたが、もうひとつ、同じ地域に住む父母同士のコミュニケーションの大切なことを考え、「部落会」を提唱した。『ほしかげ』には次のように記されている。

> 同じ学園に子供を託して、同じ歓びと同じ悩みをもつ近隣――それは必然相寄る魂でありましょう。
>
> 近所の同年級の子供が優等賞を頂いた、級長になった、受験準備で夢中だ、と眼に触れ耳に聞こえる時。随分子供の教育に理解をもち堅固であった筈の教育方針も、心の底に動揺と焦燥の相を呈してくる親心は決して無いとは申されませぬ。稀には学校が違うために近隣の子供と遊ばせるのはどうかと思い、また遊ぶ友達の無くて困るということもある。学校でこうしてくれるとよいが、と平常思っていることでも、さて学園に行って大勢の前で話すとなると引っ込めてしまう。腹を割った父兄と教師でこそ子供達を托して、しみじみ安心な気にもなる。それに近い所で、しかも夜でもあれば両親揃って出られるが、学校だとなかなかその分に行かぬというのも事実でしょう。
>
> そうした沢山の理由から、例えば荻窪部の父兄、阿佐谷部の父兄、といった具合に、近い場所の父兄がその場所の適宜の家を中心に集まり、学園から2、3の教師が加わって、「明星に子供を托してる」意味を中心とした会合が欲しいと思います。荻窪明星会、阿佐谷明星会、名前などどうでもよいが、如何なものでしょう。子供達だけはよく行ったり来たりするが、親達はお互いに顔も家も知らぬなどはいいことではありません。この際、子供を契機として、近隣愛に欠けた東京の生活の上に彩色をすること自身も無意味ではないでしょう。子供の学校を選ぶにしても、近所の父兄、子供を本当によく知れば――学校を理解する程度も深く――安意な気持で決定されるものですから、この部落会には、そうした人々の参加も結構だろうと思います。
>
> 歓びと慰めと、励ましと理解と、そうした意味で和やかな部落会の誕生を提唱します。〈※4〉

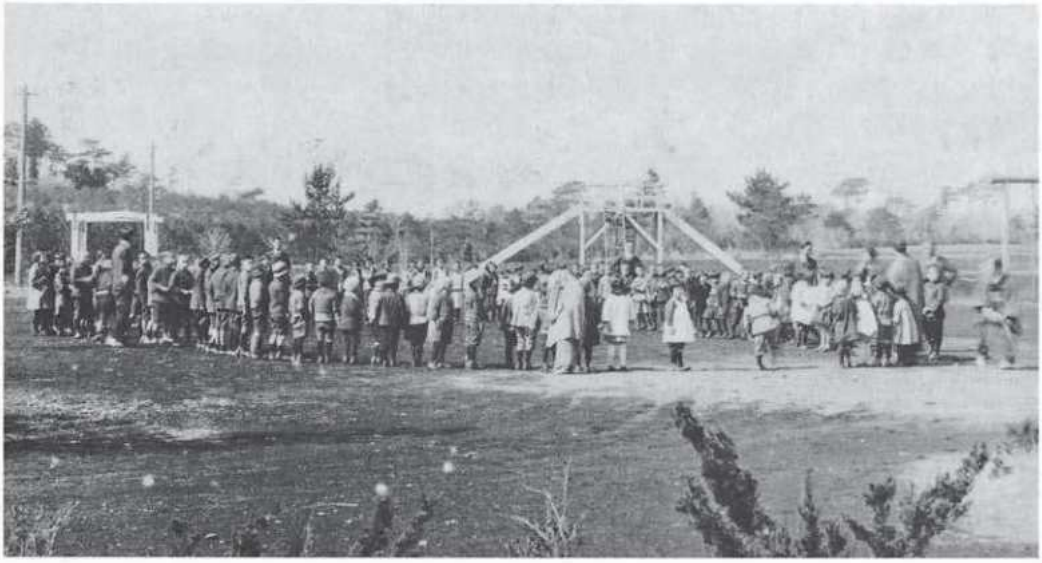
提唱の成果は大きく、『ほしかげ』13号（1935年3月20日）、15号（1935年7月20日）には、早くも以下のように部落会が開催されたことが報告されている。

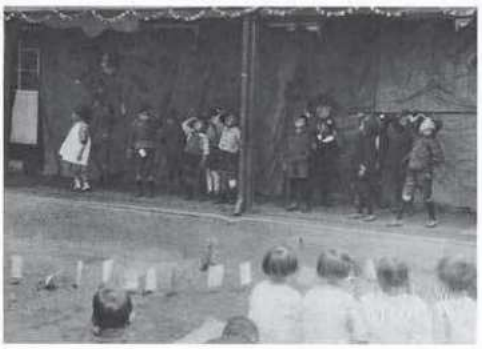
1月	19日	吉祥寺第2区部落会（大津氏宅）
	20日	阿佐谷第1区部落会（荻野氏宅）
	21日	三鷹第1区部落会（加納氏宅）
	25日	三鷹第2区部落会（両角氏宅）
		阿佐谷第2区部落会（松田氏宅）
	26日	荻窪部落会（森氏宅）
	30日	吉祥寺第2区部落会（田畑氏宅）

2月	2日	吉祥寺第3区部落会（野村氏宅）
		帝都電鉄沿線部落会（宮原氏宅）
	16日	西荻窪方面部落会（武田氏宅）
5月	30日	阿佐谷第1区部落会（荻野氏宅）
6月	7日	荻窪部落会（恩地氏宅）
	13日	吉祥寺第2区部落会（大津氏宅）
	14日	吉祥寺第3区部落会（大澤氏宅）
	21日	東中野部落会（市村氏宅）
	24日	三鷹第1区部落会（二村氏宅）

〈※4〉小学部教育月報『ほしかげ』第12号（1934年12月15日）

創立期の子どもたち











＜文責：森村 卓・依田 好照＞

4　中学校・高等女学校の創設

(1)山積する難問

1927年（昭和2）の4月、創立4年目にして6学年がすべてそろった。普通教室や特別教室の増築にかかる資金に苦慮しながらも、その窮状を察して支援の手を差し伸べてくれた父母たちに助けられ、ようやく小学校として完成をみたのであった。

それは大いによろこぶべきことであったが、しかし一方で、また新たな問題に直面することになった。

赤井学園長は、当時の状況を以下のように述べている。

> この年の初め頃から中等部の問題が次第に起こって来た。一般の小学校では5年生から中等学校への入学準備をするそうである。私達は如何にすべきであろうかが最上級を持つ山本君の大きな悩みであり、同人すべての頭を痛めた問題であった。小学校教育の本質からいえばこんなことは問題にはならぬ。誤まれる中等学校の教師の教育観に迎合して準備などはなすべきものではなかろう。しかし児童にとっては中等学校へ入られぬということは大問題である。父兄においてもそうである。この現実の問題に当面すると理論ばかり言っておられぬ。父兄（特に5年）の間にも不安な気分が次第にあらわれてきた。しかもことは経費と関連する。同人は集まるごとにこれが問題になり、ほんとに鳩首したものである。ある時は私は出て、某中学校の経営をひきうけ、それをこの学園の中等部としようと計ったこともあった。しかしそれも思う様にはならなかった。この年の春全部が完成し、6年生が出来た当時、この問題に対する私たちの態度くらい不安なものはなかった。〈※1〉

赤井は明星学園を創設したときから、小学校の上に法令によって定められたいわゆる「正規」の中学校・高等女学校を併設することは考えていなかった。文化学院や自由学園と同じように、いわゆる「各種学校」として行こう。その方が法令上の煩瑣な制約にしばられないで、自由に新しい試みができると考えていた。しかし、その考えをいよいよ実現させようとすると、各種学校では困ることが多い。

ひとつは、上記のように、小学校を終える子どもたちの進学問題であった。

この時期――大正・昭和初期、小学校を終えれば労働に従事するのが当然とされていた時代に、都市部を中心とする比較的富裕な新中産階層の間では、中等学校への進学競争が過熱していた。受験に成功するためには、それなりの受験準備が必要とされた。新中産階層の親たちのなかには、子どもの自発的な活動を尊重する新教育を支持しながらも、同時に、当面の受験に必要な学力を学校に求める心情もあった。

明星学園には中学校・高等女学校がないから、子どもたちは既存の中学校・高等女学校を受験することになる。進学競争の過熱や受験準備のための教育をいくら批判してみたところで、肝心の子どもが志望する学校に入学できないのでは困る。

また、中等学校を「各種学校」として運営した場合、生徒たちは卒業しても上級学校（高等学校、専門学校）を受験する資格が得られないという問題もあった。上級学校を受験するためには、改めてむずかしい認定試験を受けなくてはならない。

「生徒はわたしの所有物ではない。わたしの教育理想の犠牲になるべきものではない。やはり普

〈※1〉赤井米吉「明星5年」『渾沌』第8巻第1号（1929年1月22日）

通の中学校・高等女学校としての認可を受けて、その規定の範囲内で可能な限り新しい試みをやるべきだ」。

赤井はそう考えて、「財団法人明星学園」という組織をつくり、財団が経営する中学校・高等女学校として認可をとることを決心した。

しかし、財団法人をつくり、中学校・高等女学校を設立するまでには、資金計画をはじめとして、越えなければならない難関がいくつもあった。

学園創立当初からの後援者・茶郷基氏は、朝鮮で経営する鉱山が風水害で甚大な被害を受けたため、1年余で手を引かれることになった。もはや援助を乞うわけにはいかない。

つぎの後援者である山之内兵十郎氏は、女学校だけくらいなら引き受けようと言われたが、1927年（昭和2）、不況による取引銀行の閉鎖でこれも絶望。

さらに、人を介して城北中学設立の援助を乞われたので、赤井が参加してこれを明星の中・女学校にすることに奔走してみたが、これも絶望となった。

赤井学園長から中学校・高等女学校設立の仕事への協力を懇願されていた上田八一郎が、朝鮮の中学を退官して上京したのはこのような時期であった。

(2) 上田八一郎の上京

上田は広島高等師範学校で赤井の1年後輩。のちに玉川学園を創設する小原国芳（当時は鰺坂）とは同級。3人とも互いによく識り、親しい間柄であった。上田は広島高師を卒業と同時に付属中学校に奉職したが、1921年（大正10）、一家をあげて朝鮮に渡り、大邱中学校の創設に教頭としてあたった。

3年後、明星学園が誕生した1924年（大正13）の夏、赤井が講演のため朝鮮に来て、上田の家に立ち寄った。二人は上田の母のつくった日本的キムチをサカナに杯をかたむけ、夜を徹して語り合った。



このとき、赤井は、3年後に中学部・女学部を併設するから、上京してこの仕事を手伝ってくれと言った。上田は、自分は英語の教師であるから、本場のロンドンに行きたいという気持ちを述べた。赤井は、そうか、それはよい、東京に来るとスポンサーができるぞと、いとも簡単に言った。そして、赤井はまたすぐに話をもどして、どうしても上京して中学部・女学部設立の準備をやってくれという。

上田は大邱中学校の創設をふくめて、10年間の官・公立学校の体験から、いろいろな希望を出してみた。——1学級30名、生徒総数150名を超えないこと。男女共学、無認可の学校。上級学校入試準備の要らない学校。武道と教練のない学校etc.

赤井は上田の話を笑いながら聴いていた。

その後、二人は文通を重ねていたが、赤井から上田のもとに「いよいよ出て来い」という連絡があったのは、1927年（昭和2）の2月であった。3月、学園中学部を創設する代わりに

城北中学校を引き受けることに決まった、という手紙がきた。4月になって、中学部・女学部設立の趣意書の案文が送られてきた。「一、文化理想の教育。二、文化創造の教育。三、文化体験の教育」という赤井の文字が躍っていた。

5月、赤井から来信。城北中学校は不認可となった。中学部創設は困難、女学部だけの創設で我慢してくれとあった。

7月28日、上田は大邱中学校を退官して上京した。以下、上田の手帳に記された「日誌」を抄録する。

7月 30日(土) 品川着。駅にて赤井君より愈々(いよいよ)また中・女同時創設の事に進捗しつつありと告げらる。
8月 11日(木) 赤井、照井君と中学部敷地を見に行く（注：現在の校地にあらず)。
17日(水) 赤井、照井君と新敷地を見に行く（注：現在の校地にあらず)。
19日(金) 赤井君と茶郷基氏を訪問す。
27日(土) 官立中学校新設の経験は私立中学校新設には何等の用をなさざるものの如し。不安なしとせず。創設に対する不安よりも教育そのものに対する良心的不安甚だし。
31日(水) 学園へ行き、赤井と語る。「教育方針」が書き難い。まず文化がわからぬ。大分気が楽になった。
9月 4日(日) Quit uneasy about the new school.
5日(月) 職員一同と新・新敷地を見る（注：現在の校地)。
校舎には京橋区林間学校［三鷹］を入札、移転せしむる事とす。
(注：現在の本館なり)
6日(火) 始業式。紹介。小学5・6年生の一部を持つ。
14日(水) 初めて6年生に授業す。赤井と土地測量せんとす。〈※2〉

こうして2学期からは小学5・6年生に英語を教えたり、土地を見て回ったりしていた。しかし、創設の資金をどう調達すればよいのか、まったく方策が立たなかった。

上田は、いざというときは各種学校でもよしと考え、自由学園や文化学院も何度か訪問し、実際の授業も見学していた。だが、父母の間からは、どうしても将来は大学受験が可能な学校にしてほしいという要望が強くなり、「母の会」が動きはじめた。

(3) 保護者の協力と後援会の発足

明星学園「母の会」が誕生したのは、前述のように、1927年（昭和2）のことであった。当初は母親たちの自主的な会で、学園の経済的な面の援助もするが、むしろ自分たちの文化活動をするのが主な目的であった。この「母の会」が積極的に動きはじめた。

母の会の熱心なる働きが次第に父兄の人々を動かし、父兄の有志の集会が頻繁に催されるようになった。それが夏から秋に盛んになって、ついにこの年10月2日をもって父兄の総会が開かれ、明星学園後援会なるものが組織せられて、それが中等部の設立をひきうけて下

〈※2〉「創立に至る迄の日誌抄」『星雲時代』38号(1934年)、および『上田八一郎先生 生誕百年誌』所収の手帳から

さることになった。かくて上田八一郎君をこの方の主任として迎えて設立の準備に着手してもらうことになり、山本君も落着いて6年の仕事を進められるようになった。

かつて成城小学校でそこの父兄後援会の献立をした私は、その困難な仕事であることを十分に知っていたので、ここで再びそれを繰返そうとはほとんど考えなかった。何人か特志な人があったらその人にとのみ願っていた。それに学園の父母は実際のところ富豪といわれるものではない。児童の教育に熱心であるということのほかには一般小学校の父兄とさほどに違ってはおらぬ。その事情を十分に知る私は、ほんとにかかる後援会によって中等部、しかもそれは一つではなく、女学部、中学部の二つを設立してもらうということは忍び得られぬことのようにも考えた。しばしば自ら回避の道をとろうかとも思った。しかし金があれば出来るという問題でもない。金よりも情熱であり、理想であり、和合であると思うと、かかる父兄なればこそ出来るのだと考えた。自らの子女の教育の機関を自ら経営するということは最も望ましいことで、第三者から慈善的に出された金の恵みにあずかって行くのが必ずしも能でないとも考えた。行こう、行けるところまで行こう。皆が和合して行ったならば、そして大なる理想に向かって努力をつづけたら如何なることも成らぬということはなかろう。というような風にも考えられて、ついにこれに一切をお願いして進むことになった。

こうした土地の選定、校舎の設計、教科課程の研究等に夜の8時、9時までも職員会が幾晩もつづき、後援会の委員の人々の奔走が日夜営まれて、この年の暮は実に忽忙として暮れた。〈※3〉

ここに至るまでの状況を、上田の手帳（日誌）から抄録する。

9月　18日(日) 父母と相談会、創設多少困難と思わる。
　　22日(木) 赤井君宅にて父母5名と創設費出資案を練る。
　　23日(金) 38年間の坊主頭をオールバック式とす。
　　25日(日) 父兄有志会。出資金につき協議、難産。
10月　2日(日) 父母大会、依然光明を認めず。
　　11日(火) 山之内氏宅にて役員会。
　　25日(火) 山之内氏宅にて役員会。
　　26日(水) 渡辺万助氏を赤井と訪問。土地の件につき依頼。
11月　8日(火) 中等部・女学部の学課課程の相談会。教育理念について、正しい理想を抱いて社会に奉仕する人を。
　　イ．健康の人、ロ．感謝の人、ハ．熱意の人、ニ．明知の人。
11月 23日(水) 赤井、照井両君と京橋区林間学校を見に行く。
12月 22日(木) 公証役場に行く。水質分析検査に衛生試験場に行く。

10月に発足した後援会は、父母総会を開いて1口30円ずつ拠出することがきまり、山之内兵十郎氏とほかに2人、100口の方がおり、全校110名が1人平均10口、全体で3万3,000円が集まることになった。当時としては大変な金額であった。山之内氏が顧問、会長は岡崎栄松氏、会計は新締五郎氏、ほか数人の役員は、毎週のように山之内邸で会合した。

こうして、父母の支援態勢はより強固なものになってきた。しかし、創設のためにはまだ大きな難問があった。その年も押し詰まった12月29日（木）、上田は日誌に悲痛な文字を書きつける。

〈※3〉赤井米吉「明星5年」『渾沌』第8巻第1号(1929年1月22日)

「赤井君より呼びに来る。基本金の問題で難産、ほとんど絶望なりと」。

明けて1928年（昭和3）の元旦。「拝賀式後、職員に赤井君より中・女創設中止声明」と上田の日誌。

難問は設立認可に必要な財団法人の基本金であった。明星学園は中学・女学校の両校で11万円積んで見せなければならなかった。赤井にも上田にも、そんな大金を工面する方策はない。新年早々、教職員も意気消沈した。

1月10日、山之内邸で父母の役員会が開かれた。上田は、無認可でもやる決心で臨んだ。ところが、役員たちは万難を排して「正規」の中学・女学校を創設するという。役員会は連日開かれて、父母の間にはこれに賛同する空気が濃厚となってきた。

問題の基本金は、2月6日までに、茶郷基氏（内藤正太郎氏名義の株式）7万円、尾高豊作氏（刀江書院社長）2万円、川井源八氏（三菱電機会社社長、父母）1万円、服部春一氏（国際図書社長、父母）1万円、合計11万円を借り受ける見通しができ、ようやく設立認可を申請できる目鼻がついた。

こうして、中学校は現在の高等学校の場所に、高等女学校は既設の小学校校地内に建設することとなった。中学校の校舎は当面、京橋区（現在の中央区の一部）が三鷹に所有する林間学校の建物101坪を、公買入札のうえ落札して移築することにした。高等女学校の校舎125坪は、川井源八氏や井野正次郎氏の尽力で、三菱銀行深川支店の建物を移築することにした。

以下、上田の日誌から――。

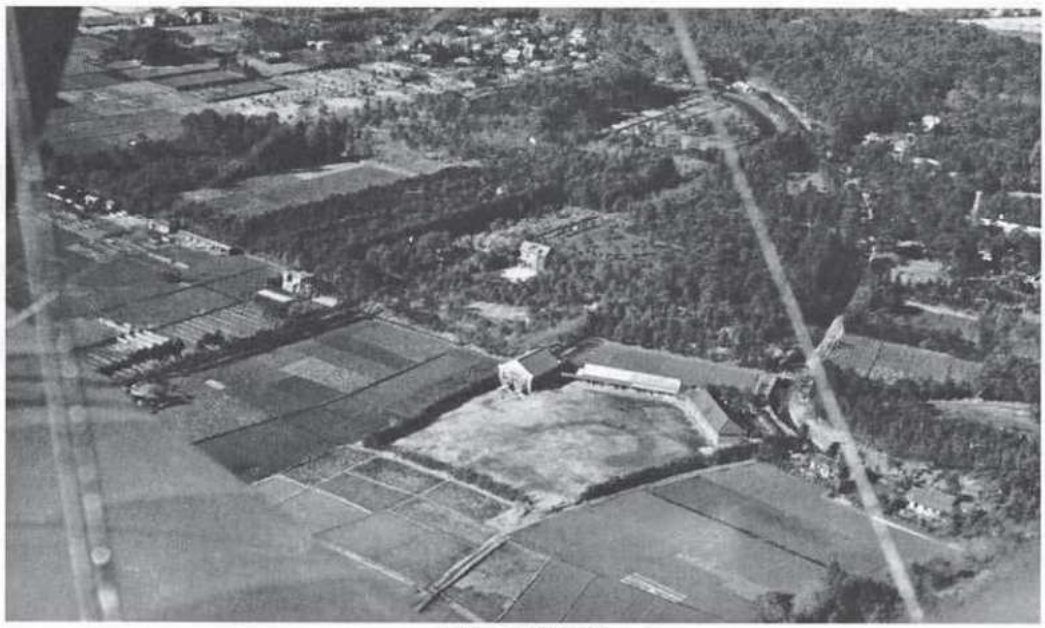
2月 17日（金）創立書類完成。役場経由、東京府に提出。
18日（土）生徒募集、職員採用準備、教科書選定、新聞広告、チラシ、広告、要覧作成。
教育趣意「一、聖き大望を。二、創造的に。三、体験的に。四、健全に」
22日（水）小学校宛広告チラシ、多忙多忙。
25日（土）地鎮祭
27日（月）中・女建築、土台がため（セメント）始まる。
3月 2日（金）東京府より中・女同時に出発は無理なりと言い来る。
14日（水）中学校前新橋、架橋工事開始。
22日（木）第2回提出書類完成。赤井君宅より午前1時帰宅。井ノ頭の森暗し。
4月 5日（木）中・女校舎落成。
9日（月）女学部第1回入学式。
10日（火）中学部第1回入学式。
20日（金）中・女設置認可せらる。

入学者は、中学校16名、高等女学校14名。まことに小さな中等学校だが、学園の歴史のあゆみに大きな一歩を記した壮挙であった。母親たちの熱意が父親たちを動かし、父母が一体となって取り組んだ支援の賜物である。

「紆余曲折を経て、ともかく形だけは創立ということになった」と上田は書いている。

「その当時、小学部の父兄であった故茶郷氏、故山之内氏および岡崎氏、新氏など、その他母姉の方々が園長を助けて異常な努力を払われたことに対し、衷心感謝の念を表してやまない」。〈※3〉

〈※3〉「25年の回顧」文芸部『明星 25周年記念』（1949年11月15日）



初期の中学校遠景

(4) 初期の中学校

第１回生の生活

旧制中学校第1回生の加藤誠之助は、中学校第5学年に在学中、校友会誌『星雲時代』第4号（1933年1月1日）～第7号（1933年3月6日）に、「中学部をめぐりて――楽しかりし5年間の思い出」を連載している。かなりの長文なので、ところどころ要約・補足しながら再録する。なお、学校の正式名称は「中学校」だが、学内では「中学部」または「中等部」と呼ぶことが多かったので、ここでもそれにしたがっている。

1928年（昭和3）4月10日、開校式というのに朝から雨。牟礼の畑の中の小さな校舎に新しき生活を求めて集い来た者は、小学部から9名、他校から7名。

勉強の方は、上田先生に英語、国語、作文を習った。上田先生の国語は面白かった。時々この畑の中の中学校に自動車が来ることもあった。これは郷土教育連盟の尾高豊作先生〈※4〉の車で、僕等に有益な話をしに来て下さったのだ。尾高先生のお話はとても滑稽で、笑いの中に「社会」というものが如何なるものか僕等の頭にピンと来た。

数学は岡邦雄先生で、僕等のために教科書をつくられた。「僕等はこの書によって明日の数学を今日学ぼう」と一番はじめに言われたのを思い出す。音楽は吉原規先生で、僕等はよくレコードを鑑賞した。地理の山下重輔先生が唾を飛ばして講義したのも楽しい思い出の一つである。

3学期になって内野健児先生が就任され、漢文をはじめて習った。お天気のよい日は椅子を草原に持ち出し、車座になって講義するのは先生が始めたことで、僕等はのんびりした気持で講義を聞いた。

〈※4〉 尾高豊作（1894～1944）渋沢栄一の孫。刀江書院社長。赤井米吉と親交があり、明星学園顧問。郷土教育運動の推進者



第1年は終ったが、校風というものを新しくつくり出したようでもなく、小学部の校風をそのまま延長したようなものだった。2年になって、生徒が増すにしたがって他校の気風も少しずつ入ってきて、ここに一種変った中学部の校風を生み出しつつあった。

5月には多摩川へ遠足をして、帰りに雨に出会ってビショぬれになって駈足で帰ったことがあった。この頃から新しい2教室が増築されつつあったが、6月30日には落成した。この夏は昆虫採集に夢中になった。2学期になって、みんな一生懸命集めた昆虫標本を陳列して父兄に供覧した。

僕等は新校舎に入って心ゆくばかり勉学にいそしんだ。その結果が通知書にあらわされた。誰も彼も満足の態であった。通知書はそれにつけられてある点数が必ずしもその人の価値をあらわすものではない。人の価値が点数によってあらわされるということは不可能のことである。唯これによって少しでも勉学の跡を反省する資料とし、また将来の自分の態度を決定するによいものである——というふうに考えている僕達にとっては、通知書の点等はたいして気にもかけなかったのである。



3学期には作品展覧会を開いた。相当苦心して描かれた大きな作品もあった。上田先生は「わしにはこの方面のことはあんまりよくわからんが」と言われて、それでも何くれとなく絵を陳列するのを手伝ってくださった。小学部の卒業式当日のこととて、たいへん大勢の人が見に来られ、僕達は大満足であった。かげに松岡政雄先生がいて僕達の図画・手工を指導して下さったことを忘れてはならぬ。

伊藤至郎先生、尾形鶴吉先生、新1年生を迎えて、中学部の第3歩は大なる希望に満ちて大きく踏み出される。

これより先、教員室のストーブを囲んで上田先生に、「今度の1年生は何人くらい入りますか？」と質問すると、上田先生は「今度か、今度は小学部から何名、他から何名」と親切に教えて下さった。どんなに僕達は僕達の仲間が増していくのを互いに喜び合ったことか。

あの唾を飛ばして熱弁を振う山下先生は退職せられたが、その代り温厚で雄大な尾形先生が就任せられた事は僕達にとっては嬉しいことであった。

この年はテニスが盛んだった。上田先生・内野先生はテニスコートに出られなかったが、伊藤先生が出て得意の腕を振った。僕もテニスがぐっと上達した。

大津君兄弟は鮮やかなものだった。新テニスコートが出来て、コート開きをやって、皆で

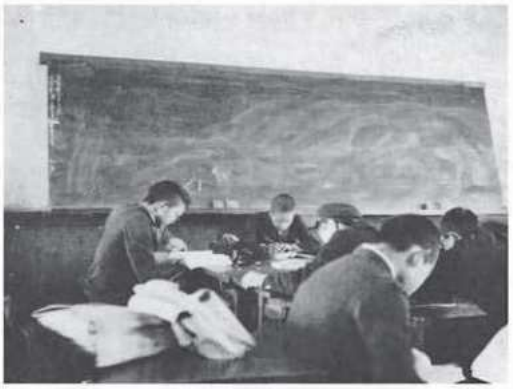
戸外でお菓子を食べた。

やがて美術の秋が訪れ、11月2日より5日間、銀座伊東屋で作品展覧会を催した。この展覧会は学園が世の中へ出る第一歩であった。都会の人々は絵画を通じて、田舎の学園に魅惑せられた者も少なくなかったろう。

かくして秋も過ぎ、冬立ち初むる頃の僕達は勉強に追われて忙しかった。それでも天気のよい日は、三鷹の方や立教女学院の裏の方など遠くまでスケッチブックを小脇にかかえて出かけ、田舎の風景をスケッチし、楽しげに歌をうたいながら西日さす畑の中のちっぽけな——それでも尊い学園に帰って来るのだった。



4年生になった。なんだか急に偉くなったように感じて、すばらしい空想を理性は留めることが出来なかった。中学の4年は随分悪戯ですね……等とよく外部から聞いた。実際よく荒っぽいこともした。しかしダークサイドばかり見てはいけない。ブライトサイドには常に美が存在していた。一種の筆舌に尽し難き級風も出来ていた。



5年になった。もう4年生の時のような運動もしなくなったし、たいして暴れもしなくなった。受験という障害物を越す準備をしなくてはならぬからだ。各先生方は非常にお骨折り下さり、僕等に都合よいようにして下さった。

1学期の終りには軽井沢の明星学園寮に5泊して、浅間山の大自然を背景に野外演習をやった。夜襲のとき小哨長となり、指揮刀を振って指揮した折の気持は忘れられない。夏休みには勝山で臨海生活をしたのに、僕は忌中で参加出来ないのが残念であった。



2学期には緊張した気持で勉強せざるを得なかった。最後の運動会も過ぎ、実弾射撃演習も過ぎ、大きな行事はたいてい終った。そして上級学校進学という大なる希望に満ちた昭和8年を迎えた。そして今はもう春だ。

吹く風は遠山の雪の冷たさを伝えるけれど、日の光はなんとなく肌に暖かい。小川のほとりにぽっちり緑の芽がめぐんできている。もうすぐ卒業だ。

『星雲時代』

中学校の校友会誌『星雲時代』の創刊号は、開校から4年目の1932年（昭和7）11月に発行された。B4判縦書き4段組み、謄写刷り、12ページ。

巻頭の「創刊の辞」は、まさに「星雲時代」に在る若人の夢と苦悩と希望とを格調高くうたいあげている。



『星雲時代』創刊号

太陽系の生成される前は、地球も火星も太陽も、みんなが混沌たる星雲の渦巻きであったのだ。その星雲の中から若い星が一つ二つ三つ……と無数に生れて、蒼々とした宇宙に輝き始めたのだ。その嬰児のような星——それは或は形の整わぬものもあったろう。或は安定せぬ軌道をころげまわっていたかも知れない。しかし、それを混沌たる暗夜に仰ぎ見た原始人がもし居たとしたなら、その驚異はいかばかりであったろう。そしてそれらは年代を経ると共に地上の花にまさる輝きを以て、悠久の詩をまたたき、智慧の光を人類世界になげかけている。

＊　　＊

学園に集ったわれらはまさに星雲時代だ。今は混沌としているがやがては新しい世界にその軌道を占めるであろう。真理の使途としてあらゆる方面にさんぜんと輝くであろう。此処には希望がある。歓喜がある。幸福がある。と同時に苦悩もある。悲嘆もある。煩悶もある。時には手を執って語り合いたいし、時にとっては詩文に託して慰めたいこともある。僕達はそれらをただ自分一人のものとして喜び、苦しむだけでなく、学園の友達同志が相扶け相励まして、よりよい自己と社会に発展させてゆきたい。今ここに創刊の運びになった「星雲時代」もそういう類の僕らの一つの機関でなければならない。

＊　　＊

以前から各クラスで回覧、もしくは謄写の雑誌が出ていた。5年の「黒潮」（以前の「轍」「浮子」）、4年の「曙」、3年の「あかつき」等がこれである。それらを見ても、みんなが何か発表機関を持ちたい欲望のあったことが分る。しかしそれが中学部全体として統一されなかった為、各クラスのものはごく一部分の人によってしか行われず、一般の人々の関心をかち得なかった。また普通の中学校では大抵校友誌があるが、僕らの中学部ではまだそれが持たれていない。女学部の方からは既に「明星時報」が出ているし、僕らも僕らの新聞なり雑誌なりをもちたいと願っていたが、「星雲時代」によってその願望の達しられたのはこれほどうれしいことはない。

＊　　＊

「星雲時代」は結局新聞と雑誌の中間をゆく、我が中学部独自のものになりそうである。要するにそれは、僕らの学芸、運動、趣味等あらゆる文化生活の反映であればよいのだ。此処で僕らは言いたいことを言い、論じたいことを論じ、歌いたいことを歌いたいのだ。此処は

僕らの談話室であり、討論場であり、鍛錬場であり、文苑であり、詩歌の花園である。星雲時代の我若人の群は此処から出発して、やがて成長した数々の麗しい星の群となって世界の空に輝き出るであろう。

執筆者は、中学校国語科教師の内野健児。当時34歳。長崎県対馬の生まれで、広島高等師範学校卒業。赤井米吉・上田八一郎の後輩にあたる。日本支配下の朝鮮に渡り、教職のかたわら詩誌『耕人』『亜細亜詩脈』などを主宰し、早くから注目された。しかし、朝鮮人に対する支配者でなく人間的な友であろうとするこの詩人は、総督府から朝鮮追放を命じられて日本へ戻り、1929年(昭和4) 1月、明星学園に奉職した。

中学校での教え子のひとり、恩地邦郎 (5回生) は、のちに明星学園PTA会報『道』〈※5〉につぎのように書いている。

「教師としての彼はいつも柔和なまなざしと烈々とした気魄が満ちていて、不真面目な授業態度に怒ると時には、教科書で頭からぶちのめすことすらあった。けれども生徒からは愛され、いつも生徒と共にあり、教科外活動の指導などに面目躍如たるものがあった」。

内野の教科外活動の指導は、校友会誌『星雲時代』の編集指導、詩集『北斗抄』編集指導、版画集の作成指導、演劇部の設立など多岐にわたっている。

教師としての仕事のかたわら、「新井徹」の筆名でプロレタリア詩人会の活動にも精力的に取り組んだが、やがて中野区江古田の結核療養所「浄風園」に入所。空襲の激しくなった1944年4月12日、夫人と2人の幼い子どもを残して他界した。享年46。

夫人で詩人の後藤郁子さんは、のちに、明星学園との関わりにふれてこう書いている。

6年間の病中、勤務先の明星学園の諸先生、父兄達、教え子達の変らぬ子弟の情によって私たちは経済的にも守られ、代る代る見舞われる前後、上級生達は学徒出陣してゆきました。彼の死の翌朝うす紫のジンドロギュームの高価な蘭の一鉢が卒業生から届き、心のこもった贈りものを一眼、彼に見せたいと思ったものです。

…中略…新井 (内野) は学校では「星雲時代」という教え子の新聞をたすけ、『星雲詩集』を編んだせいか教え子の手紙をよくもらいました。その中で「先生もうあんな烈しい詩は書かないで下さい」とあるところを見ると、名を変えても教え子は別のところでの先生の行動を知ってなお尽していて下さったようで深く感謝しています」。〈※6〉



〈※5〉 恩地邦郎「ある詩人のこと」明星学園PTA会報『道』59号(1963年7月)
〈※6〉「新井徹との道」『新井徹の全仕事−内野健児時代を含む抵抗の詩と評論』(創樹社、1983年)

(5)初期の高等女学校

以下の文章は、明星学園高等女学校校友会の機関誌『ＭＩＯＺＩＯ』No.50「十周年記念号」(1924年7月30日）に寄せた、赤井学園長兼高等女学校長の回想である。

「思ひ出づるまゝに」赤井 米吉

昭和3年4月9日、第1回入学式の朝はきれいに晴れて、春の陽差しが漲(みなぎ)っていた。開校式にふさわしい、晴れ晴れした、希望に満ちた日だった。

生徒は14人、余り丈の高いものはいなかった。ちょっと今の1年生を連想させる組だった。如何にもちっちゃなものだった。



今の第1教室が普通教室で、第3教室が職員室、第2教室は控室のように使っていた。便所は第1教室の脇にあった。講堂もなかった。芝生もなかった。そこには雑草がぼうぼうと生えていた。それを14人で刈るのは大変だった。

全園の集りは音楽室と図画室を打ち抜いてやっていた。その秋の御大典奉祝式もそこで挙げた。翌年の春、女子部だけで学芸会をした。「青い鳥」の劇をやった。青い鳥にセキセイインコを使ったが、放れてストーブの煙突の上にとまって捕えられなくてこまった。

第1回の遠足は中学生と一緒に「鳥獣研究所」へ行った。小学校を了(おわ)ってまもないことだったのと、両方とも小人数だったので、そんなことも出来た。

その年の夏は神奈川県の鴨居で、小・中・女一緒に臨海生活をした。宿は中学生だけが別だった。栄養協会から来た料理人が一人でさっさと食事を造るのに皆感心していた。

講堂のできたのは次の年の6月だった。全園の学芸会をして祝った。大きな講堂が出来たと思って喜んだものだが、今では狭くてしょうがない。芝生もそれと一緒に出来たのだった。



沓掛の寮の出来たのは5年の夏であった。その時も小・中・女一緒に林間生活をした。壁が乾いていなかったり、電燈が来ていなかったりして、随分不自由だったが、自分たちの寮の出来たことを喜んだものである。

割烹室などの出来たのは6年の春だった。第1回生は4年から料理を始めた。最初は昼食の折、その料理の仕方をひと通り話したものだった。

創立25周年にあたり、1933年から1944年まで高等女学校の教職にあった青木ふみ子から寄せられた文を紹介する。

「思い出」青木 ふみ子

私が女学部のお手伝いを始めましたのは、昭和8年の4月、女学部の第1回生が巣立ったばかりの時でした。従って私は、第2回生の皆さんから、只今高等学校3年にご在学の方までを知っております。あの頃はまだ至って小人数で、女子部全員が80名そこそこでした。それだけにお互いによく知り合えて、教師と生徒というよりは、年の違う友達同志という感じでした。


歩け歩け

卒業生の皆さんと私共との間の、楽しい話題の一つは「散歩」です。終戦前に女子部にいた人でなければあの「散歩」の妙味を理解出来ないでしょう。今ご在学の生徒さんにこの話をお聞かせするのはお気の毒にも思いますが、書かないではいられません。10年くらい前まで、正門を出て今の高等部へ行く道の左右はまだ一面の草原や雑木林でした。春はすみれや木瓜が咲き、ところどころに金蘭や銀蘭（今は見ることも出来なくなりましたが）が可憐な姿を見せました。秋は草ひばりの声が風の音の様に満ち、りんどうが幾つもの花を着けた頭を重そうにもたげました。春は、新学年の動揺がやゝおさまった頃にどのクラスからともなく、散歩のおねだりが始まるのでした。いつもの様に教科書を持って教室の方へ行くのを途中で待っていて、「先生、お散歩」「ね、ね」とせがみます。「さあ」と一応は言ってはみますが、こちらも堪らなく行きたくなってついに首を縦に振るのでした。林に分け入ったり、草原に坐ったり、上水のふちを歩いたり、心ゆく許り楽しんだものです。各クラスの散歩のお伴をして、一日中あまり授業をしなかった日には、さすがにちょっと気がとがめる思いもしましたが、今となって振り返ってみますと、明星の散歩は私の生涯にとって、ワーズワースの「水仙」にも等しい祝福の思い出になっております。あの折にふれた自然のいぶきと皆さんの心とは渾然と無形の詩になって、いつも私の心の奥深い所を占めておりますから。


割烹室の1回生

明星生活のもう一つの楽しい思い出は、週3回の会食でした。各学年が交代で調理いたしました。1年から割烹があるというのが明星の1年生の誇りでした。専任の先生を迎えるまで3年間ほど、私が皆さんと御一緒に割烹を致しました。お料理の種が尽きて随分苦労致しました。皆さんはお菓

子作りが何よりお好きでした。その頃、真っ白な御飯にオムレツやカツレツのお菜、それにお菓子をそえて、一食の費用が15銭から20銭だったと言っても、この頃の生徒さんには夢のお話の様に聞こえるでしょう。中学部や初等部の先生からよく御注文があって、御馳走をおかもちに入れたり、お盆に載せたりして、エプロン姿の2、3人がお届けにいきました。中学部からは、今は亡くなりましたが、あの生きながら仏像のように円満だった「中学のおじさん」がよく受け取りに参りました。1年生が初めて御馳走を作る日の、割烹室も割れそうなあの歓声と混雑の中にもう一度入って見たい気が致します。

初めの頃の職員室もごく小人数で、女学部の専任は金子先生、佐々木先生と私くらいなもの。渋谷先生が私より2年近くおくれて御就任になりました。中学部・女学部かけもちの、吉田先生、多湖先生、杉山先生、岩瀬先生、越智先生などの御新入ごとに、円卓やストーヴのまわりに、赤井先生を中心にして、気持のよい座談がはずみました。その折々の社会現象や、美術、音楽などに就いての、型にはまらない自由な批判や感想でした。職員室の話題のよさが、絶えず私を啓発し、明星の一員であることに誇りを感じさせました。こうして書いておりますと、先生方お一人お一人のお声が聞こえて参ります。

職員室と言えば、大抵の学校ではおよそその反対でした。11月の末に、教室よりも一足お先にストーヴに火が入りますと、休み時間ごとにあたりに来る生徒の群で室が一杯になるのでしたし、卒業式前の2、3日、巣立ちを控えたひよこさん連の羽目をはずしたおしゃべりや、「何か書いて下さい」のおねだりで、それはそれは賑やかなことでした。終戦後になって急に民主化とか言ってさわいでいる学校に、明星の初めからの風景を見せて上げたく思います。

「あの頃はよく喧嘩したわね」これも卒業生の皆さんの言い草です。どのクラスも、3年くらいまで、盛んに喧嘩したものでした。なれないうちは、どうもこのいざこざが気にかかってなりませんでした。が、12年もいるうちに、赤井先生の「ほっとけばいい、自然に解決がつく、4年の夏休み過ぎには自然に落着く」という御診断が、なるほどと呑込める様になりました。喧嘩するほど自分を吐露したからこそ、裏表の無い、のんびりした中に何か力のある、所謂明星気風が出来上ったのでしょう。

音楽観賞、ぶどう液つくり、見学、遠足、運動会、さては戦時の白衣縫いから動員と、思い出は限りありませんが、多くの方のお顔やお声が渦巻く中に、ぼんやり考えにふけり勝ちで、もう書けなくなりました。

終りに学園の御隆昌と、先生方、卒業生の皆様の御多幸を心の限りお祈り申し上げます。〈※7〉

＜文責：森村 卓・依田 好照＞

〈※7〉 文芸部『明星 25周年記念』(1949年11月15日)

5 初期の学校行事（小学校）

(1)行事について

当時の学校行事は、その教育的意義を高く評価し、多面的な実践を試みた。行事はカリキュラムの一環として授業と関連付けられていた。また6年間を見通して、学ぶ内容が深まっていくように工夫されていた。それぞれの行事によって教育的効果が十分あげられるように、時期、場所が綿密に練られ、毎年4月に新年度が始まると、年間計画が明瞭にわかるよう、保護者にも予定表の配布・保護者会での説明などを行い、周知に努めた。



筑波山

(2)遠足・見学旅行

明星では創立以来、見学・旅行・登山・宿泊行事を、教室での学習を補完・充実させるために欠くことのできないものとして位置づけてきた。

遠足や旅行のような見学学習では、ものづくりの現場（生産）、できたものがどのように人々に届くのか（流通）、どのように売られ、買われ、利用されるのか（消費）、などの経済活動を学ぶことはもちろん、歴史・文化的な背景や、地理的な特徴を考察することにも重点が置かれた。

また普段の学校生活の中でも集団生活指導・社会生活の訓練は重視されていたが、校外へ出かけることによって社会道徳を学ぶ機会も得た。

したがって見学学習は総合的に学び、かつ体を鍛えることもできる行事なのである。

教師たちは系統的に教案を立案し、あらかじめ遭遇するであろう問題についても周到に準備した。

行事では児童は現地において深い印象を得る。それをさらに帰ってから教室で整理し、次の学習へと積み上げていくものであった。

「小学部遠足旅行見学系統案」〈※1〉を次頁に掲載する。じっくり読むとカリキュラムとして何を学習させたかったのかが見えてくる。



大涌谷



青梅

〈※1〉 小学部教育月報『ほしかげ』第14号（1935年5月15日）

十月	十一月	十二月	一月	二月	三月
多摩川附近製鉾（二〇錢程度） 八洲圖（地形展望鳥瞰圖）	製菓工場 （森永、明治）	上野動物園 不忍ノ池			
高尾山（地理） （關東平野西部） 多摩御陵	製菓工場 （森永、明治）	田中玩具工場 （千住二ノ九一七） 玩具工場 東京セルロイド （寺島）			
大山登山（地理） （ケーブルカー終點迄） （關東平野西南半部） 阿夫利神社	カルピス會社（澁谷） 鐵道省汽車博物館 （有樂町）	青木鉛、メタル工場 （西巢鴨町池袋） 鉛筆、クレヨン （大日本鉛筆 西巢鴨池袋）	ライオン齒磨工場 （日暮里生ノ驛）	養魚場 （砂町方面）	後樂觀菅 隅田公園（川蒸汽） 震災記念塔
筑波登山 高山測候所 （筑波男體） （全關東地方展望）	自動車工場 （鶴見フオード）	精糖工場 （鹽水港　芝浦） （大日本精糖—砂町）	博物館（上代文化） 科學博物館 動物園	草花栽培 （城東方面）	增國神社 遊就館 國防館
大島行 汽船一泊　小使共二圓 （椿式大山ト航海）	製鹽工場 （程々谷、鶴見） 製油所（鶴見）	文房具、タイプライター （黑澤工場 荏原矢口町）	肥料藥品 （大日本人造肥料） 王子 鉾物工場 川口	紡績工場 メリヤス工場 綿織物工場 モスリン、絲糸紡績	明治神宮 寶物館 繪畫館 乃木神社 乃木次將邸趾 乃木大將墓
卒業學年圖西廻行 小使共一六圓 （汽車汽船共 六泊—七日間）	新聞社 （日日、朝日） 東京青果市場 （秋葉原）	時計工場 （精工舍—柳島） 帽子 （東京帽子—柳島）	芝ト上野 （東京史蹟） 寬永寺、增上寺、泉岩寺 靈廟跡蹟 （西郷、靜合見所）	東京市淀橋淨水場 （一五錢） 燈臺專賣局資材工場 三河島汚水處分場	染物工場 製糸工場 紡織物工場 （八王子方面）

○其他臨時催物ヲ適當ノモノアル場合　○金曜大掃除

小學部遠足旅行見學系統案

	一年	二年	三年	四年	五年	六年
四月	井之頭動物園	大宮公園（高井戸）	宮城遙拜 日比谷公園 航空館	村山貯水池 山口貯水池	多摩聖蹟 鳥獣試驗所（京王電車、南武電車） 多摩丘陵ヨリノ展望	鎌倉ノ史蹟めぐり
五月	四日　全校運動會 全校沙干狩	武藏境淨水濾過場 村めぐり（牧山、養鶏、田植）	鎌倉ト江ノ島名所めぐり 村めぐり（養蚕、田植） 養蜂園	箱根、熱海一泊旅行 小田急組遊利用 日光一泊旅行 東武線利用 （四、五合同、一年交替）	箱根、熱海一泊旅行 小田急團遊利用 日光一泊旅行 東武線利用 （四、五合同、一年交替）	日立鑛山 水戸 水戸城趾、常磐神社 偕樂園（日帰り）
六月	豊島園 村めぐり（農村ノ生活）	植物園（小石川） 製氷工場 アイスクリーム工場 清涼飲料工場	繊道有火宮工場 磁器博物館 氷川公園 氷川神社	ガラス工場 吹ガラス、型ガラス 電球 （村松ガラス工場） 錦糸町	ゴム工業 （東京ゴム工業株組） セルロイド加工 （ローヤルセルロイド） 亀戸	駒込淨土 （大倉財閥、雜司ヶ谷） 王様クレヨン工場 （池袋）
七月	立川飛行場	軍用鳩教習（中野） 軍用犬教習、警察犬	軍港（横須賀） 軍艦ノ内部 三笠艦	商港（横濱） 旅客汽船 其他港ノ設備 野毛山公園 船舶信號所 生絲檢查所	造艦造船所 久里濱（ペリー上陸地） 觀音崎燈臺 走水神社 追浜飛行場	北伊豆ノ史蹟 北條、韮山、三島 日帰り 一泊ナラバ修善寺泊
八月		夏季生活 學校宿舍	夏季生活 學校宿舍 夏ノ天體觀測	夏季生活（海） 神奈川縣三戸 城ヶ島燈臺 芝崎ノ高射砲 武相御獻登山（有志） 日帰り	夏季生活（海） 神奈川縣三戸 城ヶ島ノ燈臺 芝崎ノ高射砲 昇仙峽登山（有志） 夜行發日帰り	箱根明星學舍（山） 夏季生活 湯河、妙義、小諸 輕井澤、善光寺 日原鍾乳洞（有志）一泊
九月	製氷工場 アイスクリーム工場	眞多摩川原 御獻繪下軍 射山溝	三鷹天文臺 桑ノ栽培場 深大寺	府立蚕事試驗所 立川養豚場 立川飛行場（陸軍）	武藏國分寺趾（一〇錢） 府中大國魂神社 （武藏國府趾） 分倍河原古戰場	國會議事堂 兵營 魚市場

(3) 夏季生活



校外活動の中でも、特に夏季生活は規模・期間において学習の重要な位置を占めている。

当初、夏季生活は参加希望者によるものであった。目的や意義を懸命に保護者に説明し、次第に参加者を増やしていった。

夏季生活について、学校は次のように考えていた。

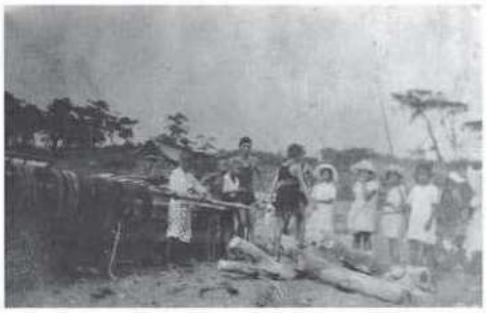
児童の日常生活は、学校、家庭、社会の三つに分かれている。時間的には児童は24時間のうち4分の1だけを学校で過ごし、あとの18時間は家庭環境の中にいる。学校と家庭で生活理念が異なっていても、児童は環境に順応しやすいので、平気でいるかもしれない。しかし、これは教育上重要な要素であると同時に、危険性をも持つものであり、教育の徹底を欠いたものとなる。学校と家庭とで統一した教育ができればよいのだが、それは困難であろう。そこで、学校で夏季生活を実施することで、教育の統制下で、それぞれの持つ生活経験を持ち寄って、洗練された一般性を持った生活を創造するのである。夏季生活で、教師は今まで以上に時間をかけて、子どもの生活全面に質・量ともに多くかかわることになる。子どもの成長に中断や休止はない、40日におよぶ夏休み期間であっても、子どもの生活は依然として学習的に発展し得る。どのようにこの期間を過ごすべきか、学校がひとつのサンプルを示して、その後の継続を家庭にお願いするということになる。





夏季生活期間は、友達や教師とともに食べ、ともに宿泊する。全面的に集団生活をするのである。この生活の中で、友達の美点を発見し、自己の短所を反省し、お互いの個性を深く知り合うのである。

夏季生活の1日は3期に区分する。起床から9時までの午前を第1期、日中を第2期、夕食後を第3期とする。第1期には主として算術、読み方もしくはその他の幅広い学習を配し、生活の基礎を学ぶ。日中の第2期は図画、手工その他の工作や作業とする。夕食後は娯楽読み物、映画、花火、ラジオ、蓄音機などによる趣味生活に充てる。以上の基本プランに、個々に応じた行事——水泳、釣魚、採集、見学等を入れる。すべてを自律的な生活となるよう時間割を作る。



こうして練り上げられたのが右のような表である。

この表のように、1年生を除く2～6年生で夏季生活が実施された。2・3年生は学校に泊まり、4・5年生は千葉県千倉の海へ、6年生は軽井沢寮に宿泊した。布団は持ち寄りであった。

夏季生活計畫及實行事一覽表

六年

期間　自九月十九日　至七月二十八日
場所　長野縣輕井澤町杏掛字上野原
明星學寮
經費　拾錢
集合　七月十九日午後十一時新宿驛待合室
解散　七月二十八日午後三時四〇分上野驛

日々定行事

午前
六、〇〇　起床、室内整理、体操
七、〇〇　朝食、自由
八、〇〇　學習
九、〇〇　採集標本作製
一〇、〇〇　手工製作
一二、〇〇　木影、おやつ、自由
午後
三、〇〇　自由入浴
五、〇〇　夕食、自由
六、〇〇　散歩
八、〇〇　日記、通信
九、〇〇　就寢

特別行事

日
一九　輕井澤ヨリ一帶ノ展望
二〇　碓山登リ
二一　雄冰峠行
二二　白糸瀧行
二三　善光寺行
二四　鬼の押出方面自由
二五　輕井澤町見物
二六　自由
二七　荷物整理歸宅

晝
生活中の打合せ
花火會
自由映畫會
學藝會

夜
生活中の打合せ

準備

○衣類（毛布一、毛糸セーター、シャツ、襦袢、浴衣、下駄、レンコート或ハ其代用品、洋傘
○日用品（歯磨道具一式、女子ハ結髪道具タオル、日本手拭、ハンカチ、チリ紙、封筒、便箋、葉書、切手（三錢一、錢五厘）、下駄、室内遊具（手鞠ナドノ軽キモノ）、花火、マッチ、ロウソク、ランプホヤ、平素持薬（アルコノ持ッテ來テヨイ。）
○學用品（筆記帳、鉛筆、ナイフ（アルベハ手工用ヨリモ）、ケシゴム、自由讀物（任意）、手工用具（彫刻用ノモ類）學校カラノ仕事其他
○食品（キャラメル、ドロップス、氷砂糖、田舍名物煎餅ノ類）食トおやつ
○備考　一切ノ持物ニハ名ヲ付ルコト。
歸リ上野カラノ電車賃ハ自辨ノコト

指導者　安藤　明田川

五・四年

期間　自七月十九日　至七月廿六日
場所　靜岡縣伊東町三濱館別館
學園
參加者　拾錢
七月十九日午前八時東京驛三等待合室着ホーム
七月二十六日午後三時四十五分東京驛着ホーム
四年　名
五年　名
計　名

日々定行事

午前
六、〇〇　起床、整頓。
七、〇〇　朝食、洗面。散歩。
八、〇〇　學習、寫生、
九、〇〇　採集、標本作製、
一〇、三〇　水泳、後岸
一、〇〇　午睡、室内
午後
二、三〇　讀書、水泳及海岸ノ遊ビ
四、五、六、　自由時間
六、〇〇　夕食後通信
七、〇〇　夜ノ行事、日記
九、〇〇　就寢

特別行事

日
一、伊東名所古蹟巡リ遠足、淨ノ池、一碧湖、携帯寺、音無神社、伊東城趾、結城墓、
二、海藻標本作製指導
三、魚類貝類臨時指導

夜
夜臨天體觀察
花火會
學藝茶話會等

準備

寢衣、浴衣（浴衣、シャツ）水泳着、下駄、ハンカチ、
摩紙、水筒、洗面用具、髪洗用品（女）

三年

期間　自七月二〇日午後二時　至同　六日午後一時
場所　學園
參加者　拾錢
七月二〇日　午後二時
同　二五日　午後一時

日々定行事

午前
六、〇〇　起床、寢具
七、二〇　日の注意
八、〇〇　學習、通信
九、〇〇　今日の反省
午後
一、三〇　午睡、讀書、
二、〇〇　水泳競技、讀書、
四、〇〇　入浴、
五、〇〇　夕食、
六、〇〇　夕の行事、明日の行事打合せ
七、三〇　書簡
八、〇〇　室内整理、
九、〇〇　就寢

特別行事

日
二〇　午後二時茶話會
二一　ドッヂボール、キックボール競技會
二二　遠足
二三　正田飛行機製作
二四　場見學
午後一時茶話會

夜
お話と臨天講座
映寫會
花火の會
天文台見學

準備

寢具　敷蒲団、敷布、枕、毛布或ハ掛蒲團
寢衣
浴衣、下駄、シャツ（三枚）
水泳着、（水泳する者のみ）
洗面用具（手拭、齒ブラシ、齒磨）
學習用具、雜誌その他の本、玩具、動物採集器具虫眼鏡、水筒

指導者　原田　猶井（女）

二年

期間　自七月二十四日午後三時　至同　二十七日午後三時
場所　武田八拾錢
參加者　七月二十四日　午後三時
七月二十七日　午後三時

日々定行事

午前
六、〇〇　起床、体操、洗面、整頓
七、三〇　朝食、協同學習
八、三〇　遊び
一、三〇　書簡
午後
二、三〇　自由學習
四、五、　運動
六、三〇　夕食、入浴
八、三〇　後の行事
九、三〇　就寢

特別行事

日
二四　午後三時茶話會
二五　水遊び（公園プール）
二六　小運動會
二七　正午茶話會

夜
花火會
天体觀測
映寫會

準備

寢具　敷蒲團、敷布、枕、掛蒲團、寢衣
浴衣　下駄、シャツ類。
水泳着（水泳をなすもの）
洗面用具
遊び道具（花火その他）
學習用具（必要のものゝみ）
所持品必ず記名のこと

指導者　伏見　須井（女）

（小学部教育月報『ほしかげ』第22号、1937年（昭和12）7月15日）

前述したように、初期の夏季行事は参加希望者による任意の行事であった。開始当初の数年間、3割程度であった参加者は、やがて7割を超すようになった。多くの参加者が集まるきっかけとなったのは、裁縫室・割烹室が備えられた1931年（昭和6）、それまで毎年海や山へ出かけていたのを改め、2年生から6年生を対象に、学校内で夏季生活を行ったことであった。この年のお知らせを見てみよう。



＜お知らせ１＞

夏の休みも愈々近づいて来ました。例年は山か海へ出かけたのですが、これには多額の費用を伴うことですので、全部の児童にと希望しつつ有志の形式に致さねばならず、また実際参加したのはいつも1/3足らずでありました。これは義務教育である小学部としては特に遺憾なことでありました。

今年は女学部に裁縫室・割烹室が出来ましたので、これを利用して短日でもここに宿泊し、親しく寝食を共にすることによって、平素学習生活の間には観られぬ児童の生活ぶりの観察もし、共同生活の訓練も致し、ここの土地でも平素の学習生活では余り利用出来ない方面のことを利用して、特殊の効果をあげ、然も経費を軽減して少しでも多数の参加を得たいと思いまして、別紙のような企を致すことになりました。

御家庭ではそれぞれ夏休の利用についてはお考のことですから全部強制ということには出来ないと存じまして、やはり有志に致しましたが、出来るだけ多数、少なくともこの時期に当地に居らるる向は凡て参加さして頂けたらと希っています。

昭和6年7月3日　明星学園小学部

保護者各位

＜お知らせ２＞

別項夏季生活についてご通知申し上げた通り、今年は2年から6年まで、現在の場所でやってみます。プログラムは学年に準じてそれぞれ内容が工夫されてありますから、各学年から詳細御通知申し上げますが、全体的な生活綱要として下表をお目にかけます。

夏季生活綱要	
時　間	行事摘要
午前６時	起床、寝具整頓、洗面、当番、ラヂオ体操
午前７時	食事、其日の行事に関する指図打合せ日記、通信其他
午前８時	仕事開始
午前11時	水泳（30分間）
午後12時	昼食
午後１時半までの	休憩、自由、
午後１時半	仕事開始
午後３時	おやつ
午後５時半	夕食
午後６時	気象、天体観測、星の話、蛾の誘護、音楽会 お話会、蓄音機、ラヂオ、映画、花火等それぞれ
午後９時	ラヂオ天気予報を聞いて就寝

其の他の件に関して

1. 各学年の日割
   2年――7月20日～23日　　3年――7月23日～27日　　4年――7月27日～31日
   5年――7月31日～8月6日　　6年――8月6日～12日
2. 食事＝食事は重要な仕事で、しかも此の計画の大役ですが、幸い福原さんが全期間に亘って多大の犠牲を払って全部お世話下さることに御承知下さいました。学園としても皆様としても此上の御安心はないことと存じます。
3. 経費＝1人1日70銭の割に徴収します。内訳概要は、50銭が食事及びおやつ、20銭は諸設備、蚊帳、其の他賃貸物の料金等の諸雑費
4. 各自の準備はこれも各学年からそれぞれ通知がある筈ですが一般としては下記の通りです。
   ①各自敷布団1枚、シーツ1枚、毛布1枚持参のこと。但し低学年ではそれぞれ申合せ便宜上2人組合って布団シーツ各1枚、毛布2枚を持寄ることになるでしょう。
   ②寝衣は各自準備
   ③其の他の携帯品は各学級より詳しく通知します。
5. 期間中は止むを得ない事情が突発しない限り、たとえ学園付近の居住者といえども自宅で間食其の他の食事をしたり宿泊したりは出来ません。
6. 父兄の御来観は随時随意です。但し特に御自分の御子さんだけの世話をしたり、宿泊したりは御断りいたします。
7. 平素家庭生活の経験上、殊に注意を要する点（たとえば遺尿やねぼける癖の如き）がありましたら御腹蔵なく受持に御内報下さればそれぞれ周到な考慮を払います。
8. 申込期間は来る10日までに生活費を添えて各受持教師の手元まで御届け下さい。

昭和6年7月3日　明星学園小学部

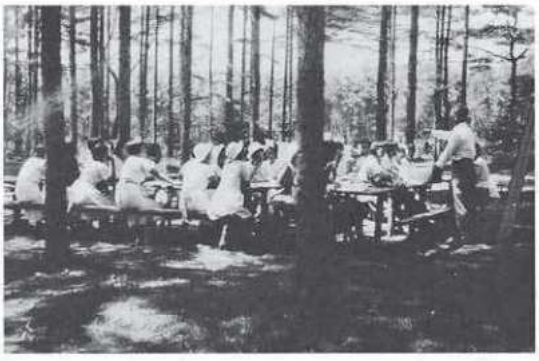
保護者様

この学校内での夏季生活は任意であったにもかかわらず75％の児童が参加し、その後行われた海や山での夏季行事への参加者増加にもつながったのであった。

生活を支える根拠地として、子どもたちが寝泊りする寮の存在は大きい。

軽井沢の上野原寮（長野県）、千倉寮（千葉県）を紹介する。

●上野原寮（軽井沢）



1930年（昭和5）春、学園保護者の市村今朝蔵氏から軽井沢の土地3,000坪を寮建設のため寄付された。その夏には、出来たばかりの寮で小・中・女の3部合同、10日間の夏季生活を実施した。天候不順による工事の遅れに伴い、寮の完成が間に合わず、数日は無理を言って星野温泉に泊めてもらい、豪雨の中食事を運ぶという場面もあった。この軽井沢の寮は所在地の“上野原”をとって「明星学園上野原寮」と名づけられた。

海抜1,000メートルの高原、うっそうとして遠

く浅間のスロープに達する落葉樹林に囲まれた、沓掛字上野原台地の一角に寮が生まれ、寮を囲んで明星の保護者の山の家が3軒、4軒とつくられた。この寮はその地名から、通称「沓掛寮」とも呼ばれた。

この寮を基点に、森や林、浅間山、妙義山、八ヶ岳へ出かける夏季生活がおこなわれた。戦後、寮は増築され、長い間活用されていたが、1983年に明星会（同窓会）の寄付により改築された。

●千倉寮（南房総）

明星では創立以来、宿泊を伴う夏季生活を重視してきた。創立年には早くも教室を利用して夏季学校を行い、翌年には希望者を募っての実施ではあったが臨海学校も始まっている。その後、小学校低学年（2・3年生）は学校の教室で、4年生以上の高学年と女・中学生は山や海に出かけて行う夏季生活が定着していく。1930年（昭和5）夏には軽井沢寮が出来上がり、山の生活の拠点として盛んに利用されるようになるが、海の行事は三浦海岸などを転々としていた。教師たちは、海の家を持ち夏季生活を充実させたいと願い、行動を起こした。その当時の思いを、照井は次のように記している。

吾等に与えよ。「海の寮」を

—照井小学部長記—

私たちは私たちの子供のよい生活場として軽井沢に「山の寮」を持っている。ねがわくば、近き将来において、同じ意味でのよい「海の寮」を与えられんことを切に祈るものである。海に子どもたちのために寮が欲しい。そして年毎に繰り返す漂泊的巡礼の境遇からまぬがれて安心のできる場所で、落ち着いた夏季の生活をさせなければ……という祈願は年既に久しい。今年（1936年）休暇明け、夏季生活の印象まだ生々した中に私たちは、来年のためにまた永遠の将来のために、理想の安住地を求めて小学部の職員（安藤・中村・牧・原田）と第1回卒業生の2、3の者（岡崎・加藤・江川）が動員された。候補地としての原則的な条件は次のようなものだ。





(1) 人気や風俗が、いわゆる避暑地ずれのしてない土地。
(2) 交通所要時間は、片道3時間以内の海に近いところ。
(3) 衛生・物価その他の生活条件の最適の所。
(4) 将来、寮を設備する目的のうえから、できるならば土地を無代提供してくれるか、さもなくば地代や部屋代もしくは宿泊料のごく安いところ。

> といった虫のいい一方的な要求が主で、それには休暇中大体の見当もつけてある関係から、房総半島沿岸内外にわたって一応の調査をしてみた。そして安房郡千倉町に接続する松林中に白羽の矢を立てた。〈※2〉



こうして照井たちは房総半島を歩き回り、堤防に守られた遠浅で穏やかな海、生物が豊富な磯、半農半漁の村で食料が豊富にあるこの地を見出した。同じ頃、千倉に明星村を建設する計画が進み、水産組合の管理地を借地契約した。近い将来、この地に臨海生活に必要な寮を建て、また近くには保護者の別邸を建設し、理想的で健全な「明星村」を設立する計画であった。



そして1937年（昭和12）7月、千倉にて初めての4・5年生の臨海夏季生活が実施される。寮建設以前のことなので、子どもたちは青木家と朝日屋に分宿。炊事場と食堂は旧漁業組合の事務所を使用した。この後、1939年（昭和14）から、小学校の夏季生活は4・5年生が千倉、6年生が軽井沢となる。2・3年生は高等女学校の裁縫室で実施。



1941年（昭和16）、近くに売家が出たのでこれを400円で買い取り、旧漁業組合の事務所のところに運び、事務所にくっつける。しかし戦争が激しくなってきたため、終戦後しばらくするまで、この建物を使用することができなかった。

千倉での夏季生活が再開したのは1948年（昭和23）のこと。この年は6年生が20名ずつ2週間の臨海生活であった。1956年（昭和31）には青木家の庭に新しく寮がつくられ、千倉寮（瀬戸寮とも呼ばれた）と命名された。創立50周年記念事業として、後援会の寄付により1976年（昭和51）年に改築され、その後長きにわたって千倉での夏季生活の拠点となった。

〈※2〉小学部教育月報『ほしかげ』第24号（1936年12月5日）

(4)学芸会(舞踊の会・展覧会)

明星学園では、学んだことを自分のものにし、表現するという活動を重視していた。学芸会・音楽会・舞踊の会・展覧会などが一年を通じて行われた。これらの活動は教育の実態を総合的に、学園内外の方に理解してもらうための良い機会でもあった。

昭和の初期には3月17日、18日に行われた「卒業生送別学芸会」において音楽・舞踊の発表を行い、国家の祝日—1月1日（元始祭）、2月11日（紀元節）、4月29日（天長節）、11月3日（明治節）には「演劇の会」が定期的に行われ、演劇を発表した。

右記は小学部教育月報『ほしかげ』第6号（1934年3月20日）に載せられた当日の演目。

また、舞踊に関しては1931年（昭和6）6月から著名な舞踊家・宮操子氏を招いて毎週水曜日に小学部の女児60名を2部に分けて指導を受けた。新しい学校舞踊の世界を開拓しようとする研究的態度でなされた。宮操子氏がドイツへ外遊したあとには、当時「現代舞踊芸術の旗手」とも呼ばれていた石井小浪氏を迎え、小・女学部の生徒が指導を受けた。

さらに、芸術教科の発表の場として、図画工作・手芸・裁縫の展覧会を行った。1930年（昭和5）11月2日～7日には、銀座伊東屋において学園生徒児童作品展覧会を開催するなど、明星学園の教育の実体を学園内外に明らかにした。



卒業生送別學藝會

暖い陽ざしの三月十七日卒業生を送る學藝會を講堂で開催いたしました

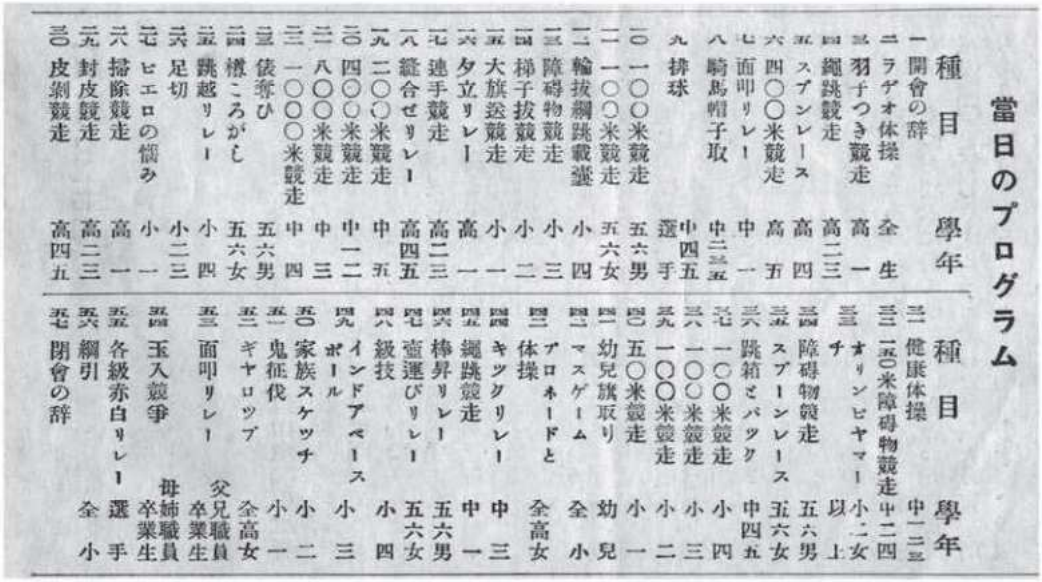
一、	合唱	かへりませう	一年	全体	一二、	獨唱	軍馬進軍	五年	横川
二、	〃	ひかうき					みかん船		
		きのこ取	三年	高橋			愛國の歌	六年	全体
三、	〃	兎さん		西野入	一四、	ピアノ	露のワルツ		
		春風吹けば			一五、	舞踊	春	四年	有志
		秋の田家	四年	全体	一六、	獨唱	兵隊さん		
四、	ピアノ	支那のちやうちん行列			一七、	合唱	朝のうた	一年	大津
五、	舞踊	すゝらんの歌	五年	森					武井
			三年	有志	一八、	獨唱	雀のお使ひ	四年	
		うぐひす							久保田
六、	合唱	那須の餘一	二年	全体	一九、	ピアノ	行進曲	二年	照井
七、	獨唱	電車ごつこ	一年	明吉	二〇、	舞踊	蝶のをどり	六年	田中
八、	合唱	梅	五年	全体	二一、	獨唱	雁	五年	有志
		山彦			一二、	〃	煙台守の娘	三年	林
九、	ピアノ	獅の歌	四年	恩地	二三、	舞踊	あの山かげ	六年	福原
一〇、	舞踊	飛躍	六年	福原			湖上の月	六年	有志
		四匹のお馬			二四、	合唱	この君この國	五六年	女
一一、	合唱	くりから谷	三年	全体					

(5)体育会・運動会

秋には小・中・女3部合同の運動会を行っていた。運動会とは体育祭であり体育展覧会とも呼べるものであった。日常の学校体育の実践を活性化し、あわせて技量の発達程度を見せるものだった。

運動会とは別に小学部独自の体育会・体操会も行っていた。ここで言う体育会とは、日常の授業の発表の場であり、体育の公開授業とも言える。日常的にどのような体育教材をどのような子どもたちに、いかなる方法で指導しているか、いかなる指導体系によって指導されているかを観

てもらい、体育への関心と理解と自覚を図り、子どもたちの体位の向上、体力の充実を目的とした。単に体育を身体的鍛練とのみ見るのではなく、スムーズに学校生活ができる身体の生活訓練と考えているのである。



當日のプログラム

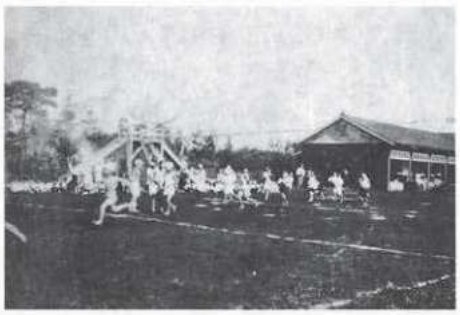
	種目	學年
一	開會の辭	
二	ラヂオ體操	全生
三	羽子つき競走	高一
四	繩跳競走	高二三
五	スプンレース	高四
六	四〇〇米競走	高五
七	面叩リレー	中一
八	騎馬帽子取	中二三五
九	排球	中四五選手
一〇	一〇〇米競走	五六男
一一	一〇〇米競走	五六女
一二	輪抜繩跳戰鑓	小三
一三	障碍物競走	小四
一四	掃子拔競走	小二
一五	大旗送競走	小一
一六	夕立リレー	高一
一七	連手競走	高二三
一八	繪合ぜリレー	高四五
一九	二〇〇米競走	中五
二〇	四〇〇米競走	中一二
二一	八〇〇米競走	中三
二二	一〇〇〇米競走	中四
二三	俵寄ひ	五六男
二四	樽ころがし	五六女
二五	跳越リレー	小四
二六	足切	小二三
二七	ヒエロの惱み	高一
二八	掃除競走	小一
二九	封皮競走	高二三
三〇	皮剝競走	高四五

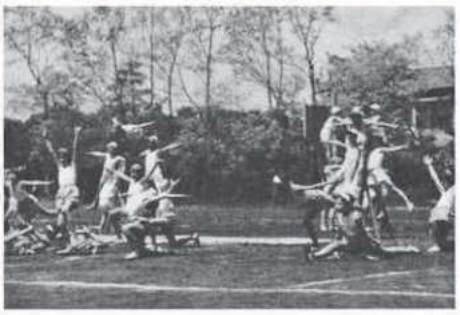
	種目	學年
三一	健康体操	中一二三
三二	一五〇米障碍物競走	中二四
三三	オリンピヤマー	小二女以上
三四	障碍物競走	五六男
三五	スプーンレース	五六女
三六	跳箱とバック	中四五
三七	一〇〇米競走	小四
三八	一〇〇米競走	小三
三九	一〇〇米競走	小二
四〇	五〇米競走	小一
四一	幼兒旗取り	幼兒
四二	マスゲーム	全小
四三	プロネードと体操	全高女
四四	キツクリレー	中三
四五	繩跳競走	中一
四六	棒昇リレー	五六男
四七	壺運びリレー	五六女
四八	級技	小四
四九	インドアベース	小三
五〇	家族スケッチ	小二
五一	鬼征伐	小一
五二	ギヤロップ	全高女
五三	面叩リレー	父兄職員卒業生
五四	玉入競爭	母姉職員卒業生
五五	各級赤白リレー選手	全小
五六	綱引	
五七	閉會の辭	

『ほしかげ』第10号（1934年10月30日）に掲載された第10回運動会プログラム

また、これら運動会や体育会とは別に、集団継歩や駅伝継歩といった長距離を集団で歩く行事も行われていた。学園―多摩御陵間、学園―羽田間、夜間強継歩は夏季・秋季にしばしば実施された。1943年（昭和18）には「長距離部隊駅伝継歩」として、学園―甲府駅間の120kmの継歩を入念に計画したが、諸盤の事情により実現できなかった。

このように明星学園では、自然に学びつつ、すぐれた芸術や文化に触れることが大事にされていた。子どもたちは幼い時期に本物と出会うことで、表現意欲を引き出されていったのであった。





<文責：照井 伸也・一瀬 清>

COLUMN 2

清里寮（八ヶ岳）

上野原寮・千倉寮に比べるとずっと後の事であるが、明星学園の3番目の寮として1966年（昭和41）に清里寮が完成する。当時の学園の経営状態を考えると非常に困難な事業ではあったが、さまざまな方たちのご尽力により実現することができた。以降、小学生のスケート行事や中学生の登山行事、高校生の合宿など児童・生徒の行事の拠点となった。残念ながら漏電による火災で1984年1月7日にその幕を閉じたが、深い森に囲まれた清々しい清里の自然と小ぢんまりした寮の記憶は、当時を知るものの心に今も鮮やかに残っている。中学校長上川淳は、落成式の様子をPTA会報『道』73号（1966年12月）に記している。



中等部の夏季行事がすでに始まっていた7月23日（昭和41年）、山梨県、清里の八ヶ岳寮、落成式が行われた。

学校側からは衣笠理事長・寒川校長以下数名の理事、それに、高等部職員も何人か顔をつらねていた。県や地元の関係者を招くことも考えなくはなかったが、はるばる山道をのぼってきていただくのもお気の毒と、これはやめにした。

だが、建築をやっていただいた島藤建設、英建築の方々の他に、坂本さんだけはぜひ、とお呼びしたわけだが、坂本さんは定刻以前から姿を見せ、感慨深げに寮の建物や周辺のあちこちを見まわっておられた。

私もそうだが、学園では誰もが坂本さんとは初対面であった。

亡くなられた橘先生の奥さまの弟さんで、ここ清里の学園村敷地のあっせんをしてくださった方なので、ぜひ坂本さんにはおいでいただき、一緒に寮の落成を祝っていただこうと話し合っていたのだった。私は、坂本さんのお祝いのことばを聞きながら、ふと、千倉や、軽井沢の寮のことを考えていた。

――軽井沢の市村さん、千倉の青木さんは、ともに明星学園夏季行事の大恩人であるわけだが、さしずめこの坂本さんは、八ヶ岳寮のかげの功労者になるのだろう。

なにかがつくられていくかげには、得てして、こういう方の存在があるものだ。



市村さんや青木さんの名は、明星の夏季行事の歴史が続くかぎり、言い伝え、語りつがれることだろう。だが、坂本さんの場合はそうはいくまい。私は、この広い7千坪の敷地のどこかに、坂本さんの名まえをそっと刻みつけておきたい衝動にかられるのだった。

＜照井 伸也＞

第3章　初期の学園経営

1　赤井学園長の苦悩

明星学園が創立された大正から昭和初期は、私学にとって大変厳しい時代であった。一方では国の教育政策があり、教育は軍国主義の方向に傾いていく。またもう一方では財政難であった。創設された私立学校のいくつかは財政難によってひとつひとつ理想のともし火を消していった。池袋児童の村小学校や『窓ぎわのトットちゃん』（黒柳徹子著）で有名になったトモエ学園もその一つだった。

明星学園では赤井は学園長・校長として授業をもつ傍ら、金策に飛び回らねばならなかった。その苦悩を学校日誌や赤井本人の日記から読みとることができる。

大正14年学校日誌

1月3日（土）　元始祭　夜、教職員一同茶郷基氏邸にて会食、本年のことを談ず。
大正14年度経常費予算
収入　授業料　5,940円　一人66円　90人分
支出　総額　10,900円
内　職員給　7,560円　小使給　540円　賞与　400円
地代　1,200円　図書備品　600円　消耗品費　600円
差引不足　4,960円

5月25日（日）　茶郷氏からの金を当てにしていたが、今日も来ない。淋しい気がする。今日訪ねようかと思ったが止めた。

6月1日　茶郷氏より金が来た。一息つく。山陰震災見舞募集したのが児童たちから44円90銭、捨得金1円70銭、職員3円4銭、計50円として日々新聞社に委託す。

6月27日　茶郷氏来校、茶郷氏から300円来た。とても不足。2人分の俸給をとって他は来月に延ばすことにした。同人諸君の苦痛や如何に。ああ何とかして金が得られぬものか。

9月9日　保護者会を開き、月謝引き上げの件決議す。

9月19日　今日の東京日日新聞の「角笛」に投書があった。父兄か、父兄の話を聞いたものか、いずれにせよ多少は教育に関係近いもののように思われる。何の反感か。8円の月謝は安くないことは知っているが、どうにもできない。この現状を如何にせんや、悶々の情にたえない。

9月30日　この月もどうやら過ごされた。
職員給未払　150円　備品　130円　諸方の買い物　100円
来月は300円ほど借りねばどうしてもやっていかれないだろう。

12月3日　赤井夜、茶郷氏を訪ね校舎のことを相談す。駄目なり。山之内氏へ依頼することにする。

12月4日　赤井、午後山之内氏を訪ね校舎の件相談す。心よく容れらる。帰途井野氏を訪ねしが不在。とにかく、校舎だけは出来ることになった。窮すれば達する。神の与へだ。感謝しなければならぬ。〈※1〉

〈※1〉 原田満寿郎「学校日誌は語る・大正14年」PTA会報『道』No.93（1974年9月20日）60頁

このように創立1年目にして早くも財政は厳しさを極め、すべての責任は赤井が負わねばならなかった。茶郷氏からの資金援助は彼の事業の関係で打ち切られたが、幸いにも山之内兵十郎氏の援助が得られた。しかし学園の財政は一向に好転せず、赤井の苦行は続く。毎日毎日金策に駆け回り、子どもや教員に心配をかけまいとした。一方、家族には厳しかった。自分の家族の食べるものまで節約してお金を学校につぎ込んだ。そうした努力を支えていたのは、明星学園を何とか生き続けさせようとする思いであった。赤井は同人に向けて次のようなメッセージを書いている。

> 我々の学園は、もともと現代の教育のかけているものを補い、誤れるものを正さんとして建てられたのである。正しく児童を教育しようとの考えであった。従がってそれは教育の改造であると同時に社会の改造を目的にして建てられたのであった。この根本的目的が我々の間に常に意識されているならば我々の学園の存在の意義は失われない。それはもとより容易な仕事ではない。我々の知と徳をもって完成し得られることができないかもしれない。然しこれを意識し、これに向って努力するその努力は、よしや不完全であっても、必ず大きな酬をうけるにちがいないと思う。一粒の種子が地に落ちて育くまれることによって百倍千倍の実が実るように、我々の仕事はいつかは大きな結果を招来することにちがいない。若しこの精神が失われるならば、かくの如き小学園が一つ在るもないも、それは大した問題ではない。否かくの如き小さなものにこれだけの費用と人々の苦心を集める必要はない。むしろ無くなることが経済的にも精神的にも有利であるかもしれない。どうかこの根本的なことを凡てが意識して進んでほしい。〈※2〉

この後赤井の苦悩は単に金策にとどまらず明星での教育の質にまで及んでいる。そのことを日記で見ていくことにする。

昭和３年の日記

6月15日

学園の教師の理想の低いのは、何よりも心配である。経済上の苦心などを十分に知らせることによって、ほんとに学園を愛し、心の奥からこの事業に精進せしめたいと思ってこれまで凡てのことを打明けて言って来たのであるが、その為にこんなに委縮しては何にもならぬ。……

うつむいて教育は出来るものではない。大空を見なければ駄目である。今の学園の根本的病は大空を見ないことである。そこへ来るとやはり宗教的信仰の人でなければ駄目である。

昭和４年の日記

5月20日

朝、私の生活も思想も全く行き詰ってしまった。日々の支払はこれまでの負債で動きがつかなくなった。雑誌の原稿もいつも期限がすぎてしまう。

10月3日

雨、朝、江川氏を訪い誘って玉川学園に小原氏を訪う。土地○(手)○(明)について何物かうるところがあろうと思って。彼の経営は実際的である。夢の様なことを言っているが、確かに現実に立脚している。赤井の如き及ぶところではない。大いに啓発せられた。

〈※2〉 赤井米吉「同人諸君」1927年（昭和2年）9月29日の日付の原稿用紙、『赤井・照井両先生 生誕百年誌』22頁

12月10日
午前、学校で母へ手紙を出した。学園の生活を収入に適したものにしたいと。その為に種々の緊縮を行わねばならぬ。ついては先ず私自身が実行しなければならぬ。それでこの家を出てもっと小さなところに入ると。
夜久し振りに家庭礼拝をなす。学園のことを祈って涙が出た。すると子供たちも泣いた。彼等の泣くのを見ると、いよいよ悲しくなる。なんとかしておだやかに暮させたいとも思った。然し、凡てを犠牲にしなければならぬ。十字架のイエスを深く考えねばならぬ。学園の為に血を流さなければならぬ。子供達も苦しいだろうがやがてそれが大きな恵となる時が来るであろう。……
「主よ、汝は雲の柱、火の柱となりて我等を導きたまえ。我等の明星は永劫に消ゆることなかれ。曙の空にさきがけ、黄昏の空にさきがけ、光れ。我等の明星、燦として清く、高く」。〈※3〉

一時は死さえ考えた赤井を支えたのは聡明なる夫人と娘たちであり、神への信仰であった。財政的に苦しみながらも1929年（昭和4）には小学校卒業生を送り出し、中等部、女学部を新設した。その時の心境を次のように述べている。

世間には苦しみの中に楽しみを見出す、という言葉があるが、打明けたところ、私はまだその苦中に楽は見出しえない。苦しみはもう御免蒙りたいようにも思う。然し、あれやこれやと種々の苦しみをなめている間に、私の人生観、社会観、従って又教育観が幾分ずつでも開けて来るのを最大の収穫と思っている。今後なお幾年かの苦しい生活がつづくだろうが、その間にもさらに私自身の眼に開かれていくことを望み、待っている。児童を教育する、といって実は自ら教育せられているのである。（1929年、小学校第1回卒業生を送り出すにあたっての心境――赤井の日記より）〈※4〉


赤井を支えた家族

そして1930年（昭和5）4月4日職員会議では次のように職員に語りかけた。

天下、学校実に多い。その中へ我々の学園が出現したのは何の為であったか。文部省の定めたところのものを克明に実現しようとしてならば何もこう苦しんでこの学園を建てる必要はなかった。実に新らしい時代が要求する教育をせんが為であった。その為には文部省のものに囚われず、厳密な批判を行って行かねばならぬ。勿論敢て異をたつる必要はない。然し、研究、実験の労をさけ、既成の教育に追従するのは学園の堕落である。深く慎まねばならぬ。その為には常に研究的態度をもって教材に、教法に研究をおこたらぬ様でなければならぬ。〈※5〉

〈※3〉 中野光著『教育改革者の群像』（国土新書、1976年）115頁
〈※4〉 中野光著『教育改革者の群像』（国土新書、1976年）117頁
〈※5〉 中野光著『教育改革者の群像』（国土新書、1976年）118頁

2　初期の後援者たち

初期の明星学園にはその財政を支えてくださった多くの支援者がいた。茶郷基、山之内兵十郎、井野正次郎、川井源八、服部春一、木谷吉二郎、市村今朝蔵という方々であった。

茶郷基氏は学園創設時の唯一の後援者であった。創立の趣意書に「森霊に、水清き井の頭公園脇に千坪の土地と、ささやかな学舎を得て、友情に燃える私たちが、隠れた後援を誓われる一教育愛好家に励まされて、新しい教育の樹立を企てました」とある影の後援者こそ茶郷基氏であった。

茶郷氏に続いて発展途上の学園を支援してくださったのは、山之内兵十郎氏と鈴衛夫人であった。山之内夫妻は新しい教育を目指した4人の同人の熱意に惹かれ、末娘を明星に転入させ、保護者となった。小学校の校舎建築費、中・女学校開設の後援会費など多額の寄付をしてくださったばかりでなく、後援会の最高顧問となり、各界の有力者とも交誼をとりついでくださった。夫人は「母の会」設立の立役者であった。


山之内兵十郎氏


山之内鈴衛氏


井野正次郎氏

井野正次郎氏は工務店の店主。一人娘の富枝さん（4回生、のち音楽の北川先生）が入学した年に小学校5・6年の教室、音楽室、美術室、つづいて中・女学校の建築を請け負い、資金を立て替えてくださった。彼もまた夫人とともに後援会の役員として活躍された。夫人はのち建築費の未払い金を帳消しにしてくださった。

市村今朝蔵氏は軽井沢の三千坪の土地を寄付してくださった。そこに軽井沢寮が建てられ、林間学校として利用された。後には戦後の困難な時期に理事長を引き受けてくださり、財政面でも多くの貢献をされた。子どもたち、孫たちを明星で学ばせ、きよじ夫人は長らく学園の評議員として尽力された。


市村今朝蔵氏

＜文責：一瀬 清＞

第4章　創立10周年

1　10年の星霜

1934年（昭和9）5月15日、明星学園は開校の日から10年目を迎えた。

(1) 創立10周年への思い

創立同人は、その時の思いを小学部教育月報『ほしかげ』第7号（1934年5月15日発行）に載せている。そこには創立2年目から7年間明星学園で教鞭をとった霜田静志も「明星の教育」と題して原稿を寄せている。また、就任3年目の教師・中村勇が後に続く者の思いを「私どもの立場」と題して綴っている。ここに4人の文章を紹介する。

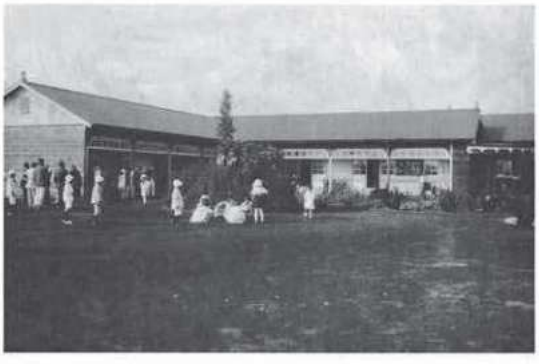
創立 10 周年に当って　園長 赤井 米吉

いよいよ10周年を記念する時が来た。「10年たったら」という気持ちが随分持たれていた。「10年たてば」と言って下さる方もあった。がその10年が来てもまだ何一つとしてまとまったものはない。凡てがまだまだ創業の途上にある。このテンポの速い時代にこれはまた余りにも遅々たる歩みだった。この10年に世界は急激な変化をなした。一面から言えば不況の10年だったが一面から言えば躍進の10年であった。日本も、東京も、井の頭もこの10年に面目を一新している。そうしたものに比べると我々の歩みは左程でもなかった。もっと大幅の歩みが出来た筈だったのにと満ち足らぬ想いがする。

もちろん外形的に見ればここにも相当の発達はあった。兎に角に、武蔵野の麦畑の中に一学園が生れたということは不思議な出現であった。「うるおいなき地」が水の源になったのである。麦畑の中に掘った一本の井戸、その滾々（こんこん）たる水、それを幾百人の幼い者が飲んだ。そして成長した。「生命の水」。しかもその水は彼等の胸中深くに更に永久の泉となって、滾々として湧いている。これは偉大な変化であった。

大正13年5月15日開校したときには児童は小学1年7、2年5、3年9、合計21名、職員は照井君夫妻、山本、私の4人、校地は1,000坪、校舎110坪それだけで総てだった。今は小、中、女3部350名、卒業生小学部200名、中女60名、職員30名、校地6,300坪、校舎650坪、こう比較して見ると随分発展したものと言わねばならぬ。

校庭の公孫樹、松、さわらは皆苗木を植えたものだが今では一人前の樹木になっている。



10年たてばやはり10になるものだ。然し小学部の第一期の校舎の如きはもう古びてしまった。色はあせ、床も朽ちかけて来た。程なく改築を考えねばならぬ様になった。それにつけて思うのは生きた草木と死んだ物の違いである。生きた草木は10年の間に伸びたったが死んだ物は年1年と腐朽して行く。世界の不況と躍進の二面もそれから来たのである。「外なるものは日に朽つるとも内なるものは日に新なり」である。いや生命は絶えざる死と生によって伸びる。昨日のものを葬らねば今日のものは生れない。世界の躍進も一面に不

況があったればこそである。学園の如きも多くの死を嘗めたればこそ成長も出来たのである。



10年の間には随分風雨に曝されたこともあった。然しそんな日ばかりだったのではない。暖い春の陽に照らされもした。記憶というものは変なもので、あるときはこの10年を風雨の連続だった様に考えたり、又或る時は不断の春風和光だった様に考えたりする。今の気分で昔を追うからである。実際はそんなものではない。苦楽相寄ると言った方がよい。然もそれが成長に必要だった。或は同情ある人々に慰められ或は理解なき鞭に打たれた。熱せられたり、冷されたり。その間に伸びたり、緊ったりするのだ。伸びてばかりも居られまいし、緊ってばかりも居られない。が結局必要なものは皆与えられたということになる、顧みれば凡て有難い。

中女学校の卒業生はこれで2回出ている。小学校から続けて考えると第1回生は9年第2回生は10年ここで生活したわけである。現在の5年生が同校の時の1年生で、これが出ると学園の仕事が丁度一巡りしたことになる。自動車が出来ても、飛行機が出来ても、これだけは10年たたねば10にはならぬ。社会の目覚しい躍進、急テンポの進行にもかかわらず、教育のみはいつも遅々として進まぬように思われる。時勢に取り残されているように嘲けられることもある。然し世の中には自動車の往けぬ山道があったり、飛行機で飛込めぬ竹叢もある。自動車の都合のよい所、徒歩の便利なところ様々である。自動車が便利でもどこもかしこも自動車でというわけには行かぬ。教育の如きはその徒歩か手押車で行かねばならぬところの多い道である。生理的に1年に10年分の成長が出来ぬならば心理的にも同様10年の仕事は10年かかる。それを飛躍させようとして実に多くの失敗が示されている。



時代と共に教材は変る。教法も進歩する。然し成長の法則には変化がない。ギリシャ時代よりも今日の社会文化のレベルは上って居るが、今日の愚人はギリシャの賢人よりもえらいというわけにはいかぬ。恐らく人間知情意は2,000年前も今も異ってはいまい。教育の遅々として進まぬ理由はそこにある。学園の教育研究は速成栽培の研究ではなかった。むしろ物質的方向の進歩をただちに精神方面にもたらせて、人間速成を急ぐ時勢へ反省を与えんが為のものであった。

澤柳博士の学園へ寄せられた書に、

「児童数の増加は結構ですが余りに順調過ぎるかと存じます。初めは辛抱する時期を経過したいと思う位です。自然に来るのでなくてはいけないと思います。人員よりも教育の実質実蹟を第一として進まれんことを、さすれば必ず盛んになります。名の顕われんよりは実の揚らんことを希望します」。

とあった。学園は生徒募集の宣伝に熱中しない伝統はここにある。中途種々の事情から宣伝に苦心したこともあったが翻ってみるとそれはよい結果にはなっていない様に思われる。





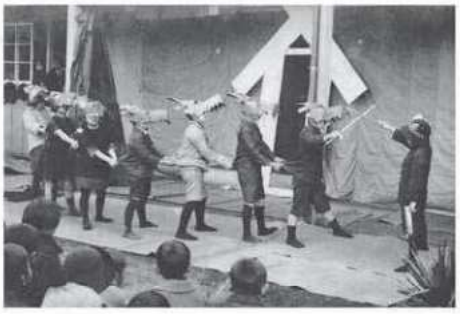
勿論教育の如きは最も社会的な事業である。したがってそれを世に示し、人に問うことは必要である。こそこそ隠れてやるべきものではない。然しそれも内からの自然な、発展でなければならぬ。内を忘れた外、実のむなしい声、であってはならぬ。貝類のあの堅き貝殻もやはり内なるやわらかい肉が生み出したものである。我々の器械道具、校舎もやはり我々のうちから生み出したものでなければならぬ。外への仕事は内への仕事、内の充実が外の発展である。

10年の間に実に澤山な人々の御世話になった。お父様方、お母様方、友人、知人、先輩、静かに想い廻(めぐ)らすと無数の人々の顔、言葉、奔走が浮び出て来る。有難いことである。学園開校披露の日（大正13年6月21日）私は式辞の一説に次の様に言った。「ここは私が設立者になっていますが、これは名義だけのことで、実はこの4人の同人の共同経営です。然もこの4人も実は設立したのではなく、私達の蔭にあって絶大なる援助をして下さる方の力によって出来ているのですがその人も敢て自らを現わされないのはその人もこれを自らのものとせず、社会のものたらしめんが為です。私達はこの社会のものたる学園に働くものです。

ここの教育に対して私共は一個の理想をもっています。然しこの理想は決して私共の我儘勝手な考えではなく、この社会の理想であるとかたく信じています。今多くの人々がそれを認めてくれなくともやがては凡(すべ)ての人々に明瞭に認められ、熱心に求められる理想になると信じています。それ故に精進し、その故に敢て憚(はばか)らず幼いものを導こうと決心しているものです。

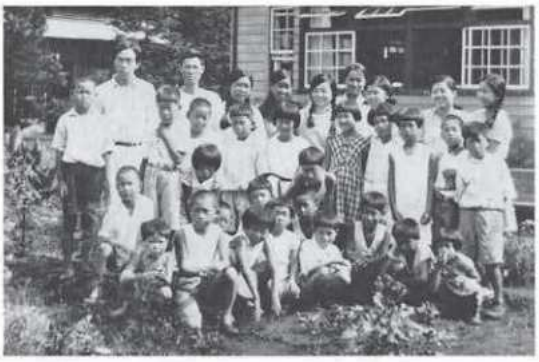
かくこの学園はその経営も教育も共に社会のものです。これを私立とは呼ばれていますが、——勿論公立とは言われないでしょうが——社会立ともいうべきものです。従ってここの盛衰は私共ここに働くものの喜憂のみではなく、全社会の喜憂であらねばなりません。この意味に於て私は御来会の諸君がこの学園の振興に対して同情と助力を寄せられる義務があると訴えるものであります」。

10年私はこの考えで暮して来た。仕えるつもりで。乏しいながらに全力をあげて仕えて来た。此処は使う人なき奉仕の道場である。児童の何よりも学ばねばならぬことは奉仕の道である。職員も父兄もこれを第一眼目として指導して行かねばならぬ。今日迄の学園はそれによって立って来た。将来も更に多くのそれが要求せられる。諸共に奉仕の道に進みたい。〈※1〉



〈※1〉 小学部教育月報『ほしかげ』第7号（1934年5月15日）1～3頁

第二の誕生を目ざして　照井 猪一郎



風に薫る若葉、日に映ゆる新緑——目路限り知らぬ武蔵野の樹海の底に黙々として5月の学園は今年の営みをいそしむ。

渺茫際涯知らぬ野と森を侵す浅緑、そが波間を踊り出た鯉幟は爽かな銀鼠色の大気の中に悠揚と泳ぐ。

5月は武蔵野の生命である。鯉幟は関東武人の象徴である。学園明星は実に11年前の昔ゆかりあるこの季節を卜してこの地に誕生した。

爾来私達は年毎に週り来るこの生く日の足る日を待ち侘びて、校庭の空高く鯉幟を樹立する。そして180の児等の将来を祝福する。特に今年はその画期的な10周年であるという。私達は学園の歴史を愛慕すると共に、更に第2の誕生を意図して明日への躍進を思念せねばならぬ。「温故知新」は将に私達に課せられた今年の命題であろう。

「10周年記念祭」それは誰の耳をもそそるに十分な言葉の響である。幾多の美談や観劇や努力の結果を以って今日を将来したいという過去を言い換えたものだからである。

けれども私達にあっては無条件でその昂奮と感傷を恣にすることは許されない。

歴史は尊い。併しその尊い所以は一度性という古い事実の存在と蓄積に於てのみの謂ではない。徒らに過去の追憶を掘り返してはその回顧に陶酔するだけでは老人の愚痴と撰ぶところはあるまい。私達の視野は更に明日への歩みに向かって拡がって居るではないか。

私達は今日を劃期として吾学園10年の歩みの中から、「何が学園を今日にまで導き得たか？」「今日の吾々は現代従業員として如何なる役割を勤めつつあるか？」「それは果して国家社会の待望に添ふものであり、而も将来への発展的生命を宿す體のものであるか否か」を厳密な客観的立場の上から再吟味して見なければならぬ。そこに10周年という劃時代的、或は周期的回顧と反省の意義と必要性が成り立つ。そして其上にこそ今年の吾々の仕事が新しく発祥する。そしてこの第2の誕生を哺む第2の創業は今学園を耕しつつある人々によって営まれねばならぬ。

唯私達は将来についてそう軽率に語り得ないかも知れない。それから不渡り手形の濫発をも慎まねばならない。併し過去の再吟味その事自体の中には多くの未来への暗示が芽ぐみ、次に掲げるような些やかな仕事の計画の端々にも私達の歩まんとする劃線の方向が解って頂ける様な気がする。〈※2〉

この後も、照井は「学科目について」「学習指導について」「自律的生活の指導」「今年の行事プランについて」「校舎の修理」等、計画していることを述べている。

つづいて、『ほしかげ』に寄せられた元教師霜田靜志と、当時就任3年目であった中村勇の一文を紹介する。

明星の教育　霜田 靜志

明星も早10年になったか、思えばまことに感慨無量のものがある。私は第2年から、明星

〈※2〉小学部教育月報『ほしかげ』第7号（1934年5月15日）3頁、『赤井・照井両先生 生誕百年誌』に再録



の教育に参加したのであるが、当時私は自分の教育生活に於ける止み難き要求から、是非学級訓導として1組を受け持っての仕事をして見たいと思い、これに馳せ参じたわけである。

此の時入学した子供等を卒業させる迄の6ヶ年其の間には随分と苦労もしたが、同僚の諸君と父兄の御援助によって、どうやら大過なくすごす事が出来た。最近私はそれの詳細なる記録をまとめて「子供への理解」なる一書を著したが、其の書の最後の1頁に私は6ヵ年を通じての私の態度を次の如くに記して置いた。

振りかえって考えて見るに、私の6年間の教育は、知識の集積という点に於ては、何としても大きな効果を挙げ得たとは思わない。私は常に単なる知識の集積でないもっと大きな立場からの教養という事に力を注いで来たのである。

多くの人々は知識の量の多きことのみ欲する。そこで詰込み教育が盛に行われる。併しそうした詰込みの知識が果して真の知識であろうか。成程試験のためには、そうした知識も役に立つであろう。併し試験を通り過ぎれば忘れてしまっていい知識である。

お互に自分の学生時代を反省して見れば分かる事で、吾々の頭に後まで残って居る知識は、決して試験勉強のために覚えた知識ではない。必要に応じて求めた知識である。

此の見地から私は子供に対して、単なる知識の注入は出来るだけ之を避けた。そして彼等をして知識探求の興味と必要とを感ぜしめ、之によって研究せしめたその結果、子供等の研究の方法なり態度なりはかなり確かなものになった。

知識の所有という事にのみ重きを置く人々は何でも覚えて居なければならぬように考えるが、之程馬鹿な話はない。昔は物識りが必要であった。併し百科事典も図書館も完備せる現代に於て、物識りがそんなに必要だとはどうしても考えられない。大事なのは研究の方法や態度の出来て居る事である。どう調べれば之が分かるかという点にすぐ気がつく事である。

知識の所有の量の多きを望むよりは、知識を働かす力の方が大事である。即ち大事なのは所有の教育ではなくて創作の教育である。結局私の6年間の努力は、子供の力を創作的に発展せしむる努力であった。

子供は勉強する時期が来れば勉強する。それを余りに親や教師があせって詰込ばかりすると、子供は却って勉強に対して拒否するようになる。それでは何にもならない。之をマラソン競争に比較して考えて見ると誠によい。始めに余り走らせて疲れさしてしまっては、後の大事な時になって、力が出て来ない。然るに今日の教育者や親達は、最初から走らせるつもりだからかなわない。子供こそいい迷惑である。私はそうした態度を決して採らなかった。それ故に私の教えた子供達は将来に発展する可能性を多分に持って居ると信ずる。

私は之が明星の教育の本当の精神だと思って、徹頭徹尾押し通して来たのであるが、今日に於ても此の点は同じであろうと思う。否、今後に於ては益々此の精神を発揮して、明星の光を輝かすであろう事を私は確く信ずる。

併しそうした教育は、今の世間の実情とは隔りがある、今の世間の多くの人々は準備教育ばかりを要求して居る。明星では小学部を終えて後に進むべき中学部女学部があるのに、それにも関らず、父兄によっては、屢々他の学校に行く準備教育を要求した。併し私はそれを勇敢に斥け、あくまで明星教育の立場を説いて思い止らせるようにした。幸にして私の教えた組の父兄は私の此の精神をよく理解して呉れて、私の思う所を貫徹させて呉れた。私の教えた組の子供等が、1、2の例外をのぞいて悉く明星の中等部に進んだのはそのためである。而して「子供への理解」一篇に記したる如き思い切った教育の出来たのも、父兄の此の理解による事と今更に感謝の念を禁じ得ない。〈※3〉

私どもの立場　中村 勇

10周年記念日を迎えて、確かに3年目に足を踏み入れたのみの私には、自分で骨折らなかっただけに草分をされた方々のようにしみじみ来し方を回想するというようなことが出来ないのを遺憾に思う。何事によらず創業の苦心というものは一通でないことをよく聞く、そしてほんとうにそういうものだろうと思う。だから最初から此の学園の建設に苦しんで来て居られる方々、または苦しまれた方々に対して頭が下がる思いがすると同時にその方々に対して此の記念日を心からお祝したい。そんなことをいうと、まるで自分が局外にあるように見えてよくないと思うのであるが、此の10周年に、たった2ヵ年より参加しなかった私自身がどれ程の意義も持たないことが考えられてならないのである。

日本の創業当時に参加した者は一人も居なくとも私どもは紀元節をお祝する。それと同じような意味に於て私は此の記念日をお祝し、同時に十分に意義あらしめ、且つ創業にあづかった方々の苦心を偲び度いと思う。私立学校の創業は公立学校の創設とは全然異って、何等の背景を持たずに自力で立たなければならないものが多く、それこそ文字通りの「草分」で、だから一般の公立学校の記念日とも全くその趣を異にするものである。

そこで私自身此の際どんな意味を自分自身に持たせなければならないかを考えて見なければならない。つまりどんな気持で此の記念日を迎うべきかを考えて見なければならない。

私どもが何事かを記念するということは単にその事を回想するという感傷の外にその最初の精神に新しい動力を与えることであるというよりも、自分の内にもう一度その精神を見直して新しく踏み出すことを予約することに外ならないのである。だからそうした立場からするならば、此の際最も重要な役目を擔う者は他の誰よりも現在此の学園を組立てている人達、そして明日の一歩を踏み出す人達でなければならないわけである。


遠足(日光)

此の学園の出来た当時はわたしはまだ学校を卒業して間もない頃で、方々で私立学校が新教育の峰火を挙げていた頃である。私は遠い僻村から、そうした新鮮な教育を行い得る学校の教師と児童達の幸福を思っていた。過去10年間に於ける日本の教育が思い切り轉回されたことは何人も疑わない所である。而してその轉回は何と言っても、従来の教育と軌を異にして進んだ私立学校の人達の力に因る

〈※3〉 小学部教育月報『ほしかげ』第7号(1934年5月15日)7頁

ものが多大であった。何事も思い切りやる人によってのみ改造もされ轉囘も可能なものであって、私立学校であればこそそれが可能であったのかも知れない。そして又それなくして私立学校の立場が失われてしまうのである。敢然と進む者のあとには必ず思い見なかった欠点が残されることがまぬがれないものであるが、それを怖れ過ぎては何事も成し得ずに終ってしまうのである。多くの賢い人達は、決して最初から手を触れない。そして前進した人の残した欠点を拾いあげては何とか難くせをつけ度がるものである。現在では公立学校も一見変る所がないように見えるが、それは一般の小学校が漸く水準に近づいたのであって、何とかかんとか言いながらもその先駆をなした人達のおかげを多かれ少なかれ受けているのである。

新しい教育の芳香に陶酔して教育の真実な姿を見失うことは自ら戒めなければならないことではあるが、統一とか統制のために動きの取れない固い殻を自ら着てしまうことは教育の発展を阻止してしまうことになる。そしてそうした殻を破ること、否そうした殻を着ないで自展して行くことこそ私立学校の使命でなければならないのである。

今や私立学校の教育は教育者達の手から経済的にもぎ取られつつあることはまことに悲しむべき現象である。勿論教育は教育者の意志一つでは出来る仕事ではない。然しながら、教育者の教育理念外に教育が求められるようになったら、教育という事務だけは保たれるかも知れないが、教育そのものは地を払って居なくなるのだ。児童の自由（放任の意では毛頭ない）が教育の第一件であると同様に教育者の権威も亦教育の第一条件でなければならない筈である。私どもはもっと積極的に私どもの教育理念の前に奴隷になり、義理や体裁や意地やを跳越えて奉仕することを必要とする。華やかな覇気も教育には惜まるべきものであるとともに老大家の如き勿体振りも亦何物も貢がないであろう。「親鸞は弟子一人持たず候」という沈潜よりも「天下の教育を如何せん」の不退轉こそ目下の我が国の教育に、殊に私どもになくてはならぬ態度ではあるまいか。〈※4〉

(2) 創立10周年の記念事業

学園10周年を記念するために、いくつかの事業が計画された。その第一期計画として下記の校舎増築が具体化し、以下のように発表された。

1. 中学部
   ①講堂1棟　平屋建80坪　②作業室　平屋建20坪
2. 女学部
   ①普通教室　平屋建45坪　②理科室　平屋建25坪
3. 小学部
   ①科学館1棟　平屋建50坪

※地、歴、数学、理科の実験室、作業室及び器械標本その他の教鞭物の陳列、保管に充てるもので前号にもその必要と実現の可能を記載したもの。

※小学部の校舎、机、腰掛、便所等の大修理及器械備品の為めに1,000円が計上されてあります。器械備品というのは主として理科学習に使用する児童実験用具、体操用具、地理教授用掛図等であります。〈※5〉

〈※4〉 小学部教育月報『ほしかげ』第7号（1934年5月15日）8頁
〈※5〉 小学部教育月報『ほしかげ』第7号（1934年5月15日）9頁

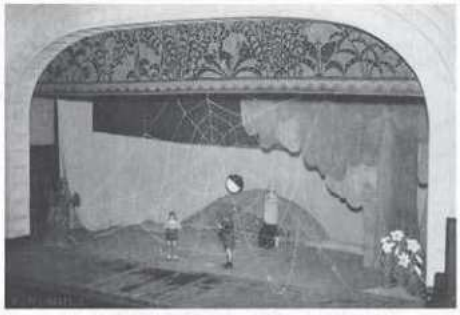
(3) 創立10周年記念式

1934年（昭和9）5月15日　学園の講堂で式典は営まれた。

創立当初児童21名、教師4名だった学園は、この時、児童生徒349名、教師31名になっていた。

10年前のあのどしゃぶりの開校式とはうってかわって、この日の天気は晴れ。教師と子どもたちとの心を映した空はどこまでも青く、これまで幾多の困難を乗り越えて迎えた10年目を天も祝ったかのようである。

式典の様子が『ほしかげ』（小学部教育月報）に次のように報告されている。

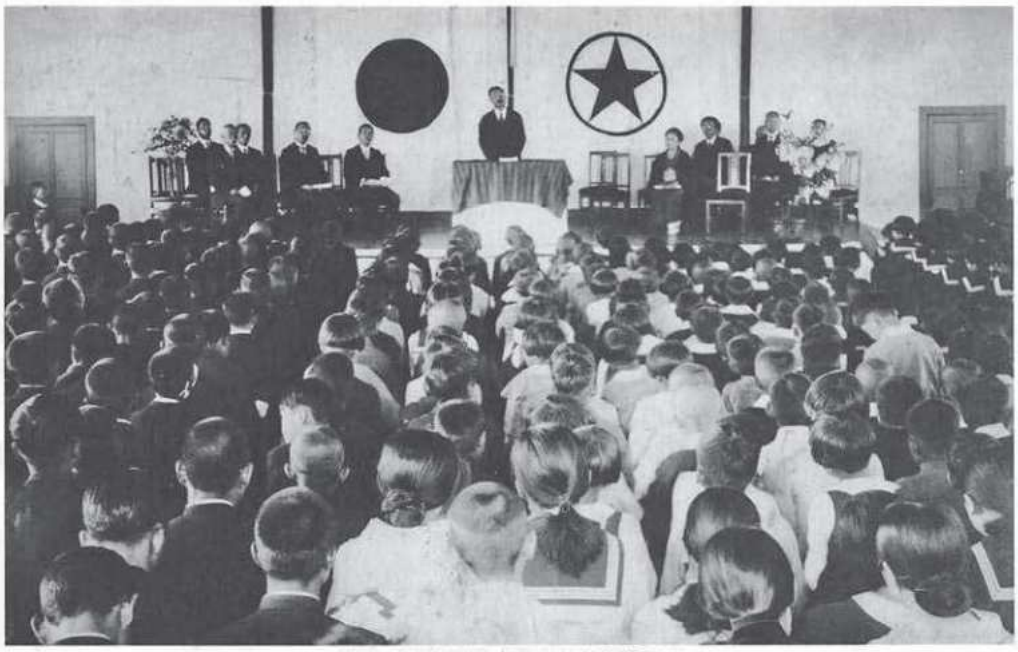


児童劇「お地蔵さんは知ってるか？」

創立 10 周年記念式

5月15日 於 当学園講堂

好晴に恵まれて学園創立10周年の意義深い式典は15日午後2時文字通りの盛況裡に挙行された。来会者約200名、それに三部の職員生徒児童で狭い講堂は鮨詰め乍ら静粛に、寿ぐ者も祝われるものも今日の佳き日の昂奮を感じた。最初園長の創立前後の回顧より将来の待望に亙る式辞があり、永井柳太郎拓務相、藤井皇子御養育掛長、羽仁もと子自由学園長、赤堀後援会長、卒業生代表等の式辞、山積する祝電披露の順に式程を進め、「明星の歌」の合唱に終了した。〈※6〉



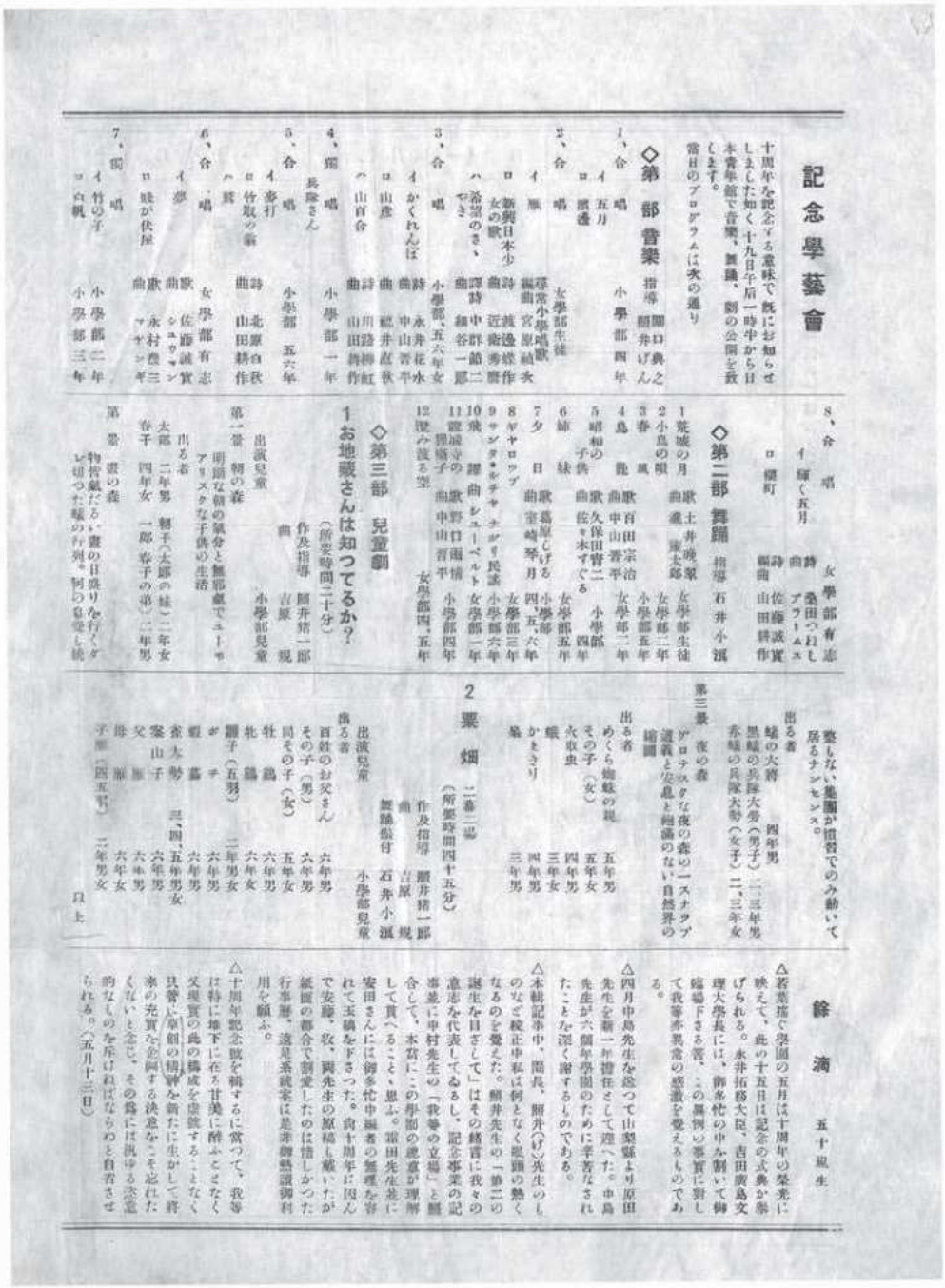
創立10周年記念式典での赤井学園長

〈※6〉 小学部教育月報『ほしかげ』第8号（1934年6月20日）1頁

記念学芸会

5月19日、午後1時半から日本青年館に於いて公演され、来場者はおよそ2,000名に達した。〈※7〉

学びの場の営みとしては、小・女学部合同の学芸会（5月19日午後1時半から神宮外苑日本青年館で）、小学部の児童劇放送などが行われた。



記念學藝會

十周年を記念する意味で既にお知らせしました如く十九日午后一時半から日本青年館で音樂、舞踊、劇の公開を致します。當日のプログラムは次の通り

◇第一部 音樂 指導 關口典之 照井げん

1、合 唱 イ 五月 小學部四年
ロ 雨蛙

2、合 唱 イ 旅 導常小學唱歌 編曲 宮原禎次
ロ 新興日本少女の歌 詩 渡邊修作 曲 近衛秀麿
ハ 落葉のさゝやき 譯詩 中野節二郎 曲 綠谷一郎

3、合 唱 イ かくれんぼ 詩 永井花水 曲 中山晋平
ロ 山彦 曲 紙井彦秋
ハ 山百合 詩 川路柳虹 曲 山田耕作

4、獨 唱 長隊さん 小學部一年

5、合 唱 イ 春打 小學部 五六年
ロ 竹取の翁 詩 北原白秋 曲 山田耕作
ハ 雪

6、合 唱 イ 夢 女學部有志 歌 佐藤誠實 曲 シューマン
ロ 眠が伏屋 歌 永村豊三 曲 マサシ

7、獨 唱 イ 竹の子 小學部二年
ロ 白帆 小學部三年

8、合 唱 イ 輝く五月 女學部有志 詩 桑田つねし 曲 アプトムス
ロ 櫻町 詩 佐藤誠實 編曲 山田耕作

◇第二部 舞踊 指導 石井小浪

1 荒城の月 歌 土井晩翠 曲 瀧廉太郎 女學部生徒 女學部二年
2 小鳥の唄 女學部五年
3 春 風 歌 百田宗治 曲 中山晋平 女學部二年
4 鳥 龍 曲 久保田宵二 小學部 四年
5 昭和の子供 歌 佐々木すぐる 女學部五年
6 姉 妹 歌 島崎しげる 小學部 四、五、六年
7 夕 日 曲 室崎琴月 女學部三年
8 カヤロップ 女學部六年
9 サンタ・ルチャ ナポリ民謠 小學部六年
10 飛 躍 譜 曲 シューベルト 女學部一年
11 證城寺の狸囃子 歌 野口雨情 曲 中山晋平 小學部四年
12 澄み渡る空 女學部四、五年

◇第三部 兒童劇

1 お地藏さんは知つてるか？（所要時間二十分）
作及指導 照井猪一郎 吉原規
曲 小學部兒童

出演兒童
第一景 朝の森 明朗な朝の氣分と無邪氣でユーモアリスクな子供の生活
出る者 太郎 二年男 鶴子（太郎の妹）二年女 春子 四年女 一郎（春子の弟）二年男

第二景 晝の森 物寂氣だる、晝の日盛りを行くダレ切つた騎の行列や何の爲とも

2 粟畑（二幕二場）（所要時間四十五分）
作及指導 照井猪一郎 吉原規
曲 舞踊振付 石井小浪 小學部兒童

出演兒童
農る者 百姓のお父さん 六年男
その子（男） 六年男
同その子（女） 五年女
牡鹿 六年男
鶴子（五羽） 六年女
ガチ 六年男
雲 三、四、五年男女
案山子 六年男
父 六年男
母 六年女
子（四五羽） 二年男女

以上

詩滴 五十嵐生

△若葉揃で學園の五月は十周年の榮光に映えて、此の十五日は記念の式典が擧げられる。永井拓務大臣、吉田虎男文理大學長には、御多忙の中御臨場下さる筈、この異例の事實に對して我等赤誠の感激を覺えるのである。

△四月中島先生を迎つて山梨縣より原田先生を新一年擔任として迎へた。中島先生が六個年學園のために辛苦なされたことを深く謝するものである。

△本號記事中、園長、照井(げ)先生のものなど統一中私は何となく眼顯の熱くなるのを覺えた。照井先生の「第二の誕生を目ざして」はその緒言に我々の意志を代表してゐるし、記念事業の記事並に中村先生の「我等の立場」と照合して、本當にこの學園の精神が理解して貰へること、思ふ。雷田先生並に安田さんには御多忙中編者の無理を容れて玉稿を下さつた。御十周年に因んで安藤、牧、岡先生の原稿も載いたが紙面の都合で割愛したのは惜しかつた。行事暦、遠足系統案は是非御熱讀御利用を願ふ。

△十周年記念號を飾るに當つて、我等は特に埴下に在る甘美に醉ふことなく又現實の此の構成を空想することなく只管に草創の精神を新たに生かして將來の充實な企圖する決意なこそ忘れたくないと念じ、その爲には凡ゆる惡意的なしの言を聞けばならぬと自省させられる。（五月十三日）

〈※7〉 小学部教育月報『ほしかげ』第8号（1934年6月20日）4頁

2　明星学園行進歌の誕生

「明星学園行進歌」は、1934年（昭和9）、創立10周年の秋、運動会の後の式で、初めて合唱された。

北原白秋作詩・細谷一郎（白秋氏の知人）作曲である。

夫人とともにお嬢さんの篁子さんの応援にみえていた白秋氏は、このとき特に保護者席から出て、生徒たちの前に立って聴いておられたそうである。〈※1〉

この「明星学園行進歌」は次のようにして誕生した。

10周年記念学芸会が5月19日、神宮外苑の日本青年館で催された折、お嬢さんが出演する劇を観にいらしていた北原白秋氏と赤井は偶然並んで観ていた。かねてから「中学部の生徒たちに、行進しながら威勢よく歌われるものがほしい」と思っていた赤井は、白秋氏に「明星行進曲」を作ってもらいたいと頼んだ。白秋氏は快く承諾してくださった。赤井は「明星学園の歌」（赤井米吉詩・吉原規（いさむ）曲）と、学園の要覧とを改めて資料としてお渡しした。しばらくして原稿用紙に記された「明星学園行進歌」が白秋氏から届いた。曲は白秋氏の知人の細谷一郎氏によるものであった。

この時の喜びを赤井はこう記している。

> 「深き木立」は今の若い人々にはぴんと来ないかも知れないが、戦争前までは井の頭の池の両側から新東京辺りまで樹齢40～50年の杉が深く茂っていた。「富士」は校庭から晴れた日の朝夕は望まれたものである。それらの風物がことごとく詠みこまれ、「校歌」といわないで、一篇の井の頭の詩としても立派なもの。それにわれわれのモットー「清く」「朗らか」がよまれ、「若き魂」が歌われているので、われわれは有頂天になってよろこんだ。〈※2〉

また、戦時中の「明星学園行進歌」の取り扱われ方についても赤井は次のように記している。

> 戦時中は何でも統制ばやりで、「校歌」も東京都の許可をうけねばならないというので「明星学園の歌」と一緒に「明星学園行進歌」も提出した。すると許可にはなったが、「めざめ若き魂」を、「さめよ若き魂」と訂正せよとの条件がつけられていた。大詩人白秋さんの詩を訂正する官吏の無謀さにおどろいたが、暫くそのように直して歌っていた。戦争がすんでからまた元どおりになった」。〈※3〉

その後、「明星学園行進歌」は小・中・高で校歌のようにして歌われてきた。
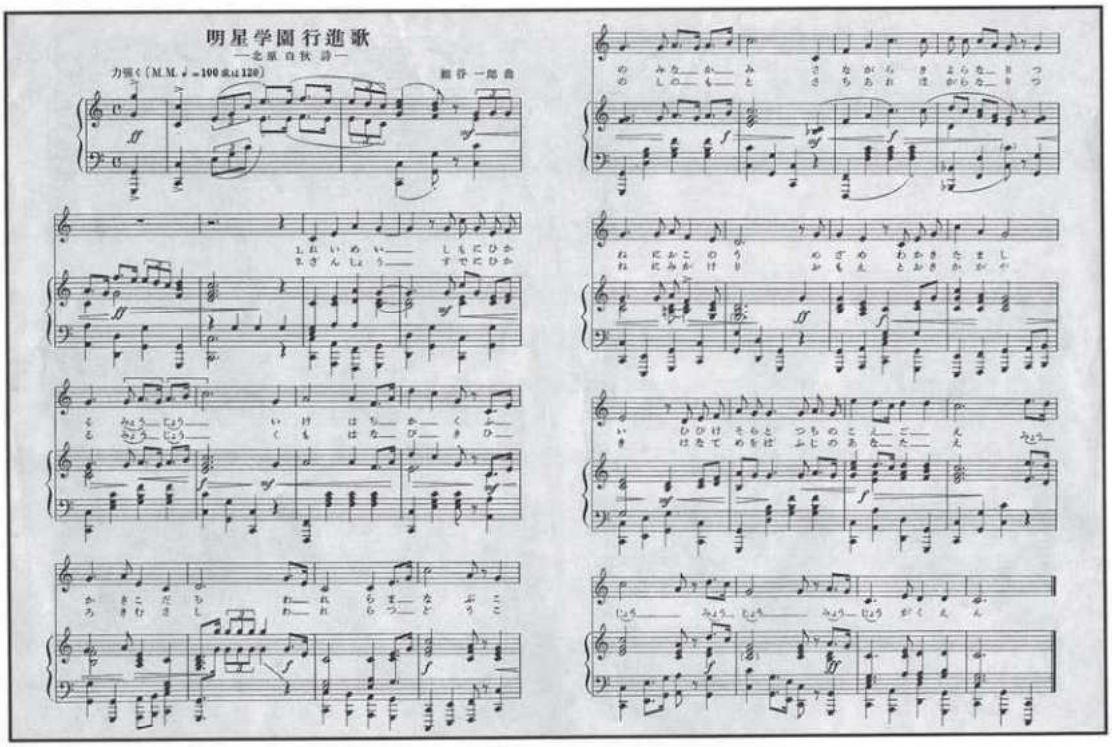
しかし、小学校では1976年以降、中学校では1978年以降歌われなくなった。

2000年に「なんで歌わないの」と、卒業生で元中・高国語科教諭の岸すみれが、『明星会会報』で発信。以降3年間このことを会報で取り上げつづけた。〈※4〉

40年近く小・中学校では聞かれなかった「明星学園行進歌」は、さまざまな時を経て、中学校では2013年度の入学式から、小学校では2014年度の入学式から、ふたたび歌われている。

〈※1〉赤井米吉記『明星の年輪―明星学園50年のあゆみ』110頁
〈※2〉『明星の年輪―明星学園50年のあゆみ』110頁
〈※3〉『明星の年輪―明星学園50年のあゆみ』110頁
〈※4〉『明星会会報』No.47（2000年秋）～No.50（2003年初夏）


明星學園行進歌
北原白秋詩
細谷一郎曲
明星学園行進歌
北原白秋詩　細谷一郎曲
1 黎明。
暗に光る明星。
風は近く、
ふかき氷雪。
我等学びこの氷上、
さながら
滑らなり、雪に行のう。
めざめ 香きたましい、
ひびけ 空と地の声々。
明星、明星、
明星、学園。
2 残雪。
すでに光る明星。
園はなびき、
ひろき武蔵、
我等富うこの師のもと、
築あれ
滑らなり、雪に磨けり。
思え、遥きかがやき、
はなて 目をば富士のあなたへ。
明星、明星、
明星、学園。
明星學園

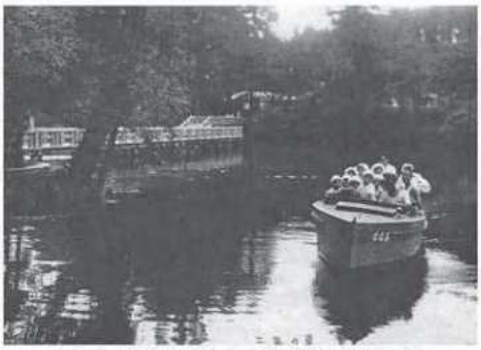

明星学園行進歌
—北原白秋詩—
細谷一郎曲
力強く（M.M. ♩=100 或は120）

<文責：大野 映子>

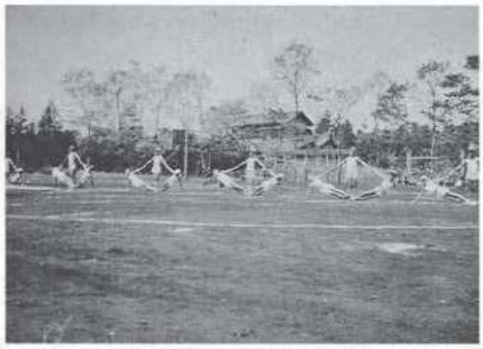
昭和10年代の子どもたち



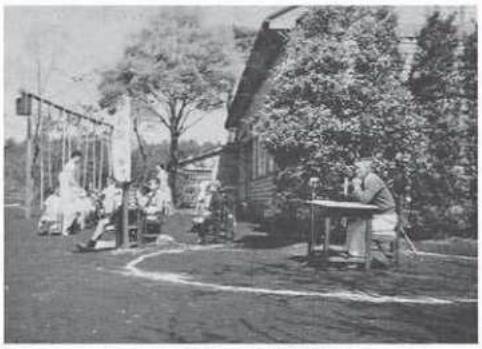
1年生、夏休みの前（1936年）



2年生、夏季生活（1937年）井の頭弁天池



3年生の組体操（1938年秋）



グラウンドを見つめる照井先生



2年生の冬（1938年）



5年生の遠足（1940年6月8日）美保の松原

写真提供：森 武夫（15回生）

第２部　アジア・太平洋戦争期の明星

1934 年(昭和 9)～ 1945 年(昭和 20)



太平洋戦争開戦の年の夏、軽井沢・上野原寮で過ごす６年生（15 回生）
（1941 年７月 15 日から９泊 10 日の林間生活）

第1章　戦時教育体制のなかで

1　赤井学園長の欧米視察

(1) 世界新教育会議

内外の情勢

1936年（昭和11）1月8日、赤井学園長は、新教育協会の野口援太郎会長からの手紙を受け取った。手紙の内容は、「今年8月、イギリスのチェルトナムで第7回世界新教育会議が開かれるので、日本の首席代表として出席してもらいたい。文部省の普通学務局長・河原春作氏とも話してある」というものであった。

野口は赤井より19歳の年長で、かつて姫路師範学校の校長として自由教育の実践に先鞭をつけ、また新教育運動の実践機関「教育の世紀社」（1923年結成）の中心人物であり、赤井は社友という間柄であった。赤井らが明星学園を創設した年、野口は「教育の世紀社」が母体となって設立した池袋児童の村小学校の校長として実践を進め、いまや新教育運動の関係者が大同団結をはかる新教育協会（1930年結成）の会長という重責を負っていた。

当時、国際的な教育会議には二つの流れがあった。ひとつは「世界連合教育会」（ＷＦＥＡ）の会議で、各国の教育会・教員会の全国組織（日本では帝国教育会）が世界的規模で行うもの。かつて澤柳政太郎などがたびたび出かけたのは、こちらの会議であった。もうひとつは、各国の新教育運動家によって成る「新教育連盟」（ＮＥＦ）の国際的な会議である。野口が会長を務める新教育協会は後者の日本支部としての性格をもち、フランスのニースで開かれた前回の会議には、協会代表として羽仁もと子（自由学園園長）らを送っている。



見送りの教師たちと赤井夫妻

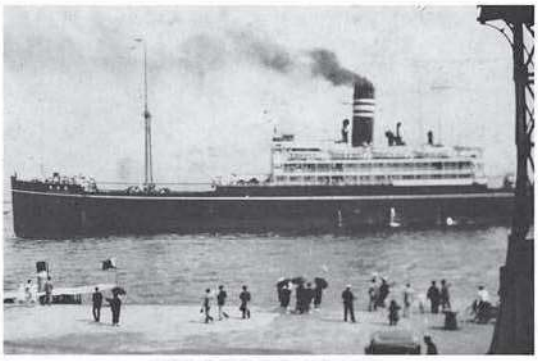
新教育連盟は1915年、第一次世界大戦（1914 ～ 18年）の真最中に結成された。発足してまもなくロシア革命がおこり（1917年）、ソビエト社会主義共和国連邦が成立し（1922年）、やがてスターリンの独裁体制になっていく。イタリアではムッソリーニの率いるファシスト党が政権をにぎり（1922年）、ドイツではヒトラーが政権をにぎった(1933年)。ドイツがベルサイユ条約を破棄し、再軍備を宣言、イタリアがエチオピア侵略を開始したのは1935年、イギリスで第7回世界新教育会議が開かれる前の年である。ヨーロッパには新たな戦争の危機が醸成されつつあった。



手を振る赤井学園長

自由主義の新教育運動がおびやかされてきたため、連盟は各国の教育行政機関にも会議への派遣協力を呼びかけた。日本の文部省にも初めて招請

状がきた。文部省の河原春作は新教育協会の野口援太郎と相談して、赤井を首席代表として文部省から出し、その他のメンバーは新教育協会の有志を募ることにした。


埠頭をはなれ行く鹿島丸

文部省がイギリスでの新教育会議に代表を送ることにしたのは、5年前の満州事変（1931年）以来、日本の国際的評価が著しく悪化したからであった。日本は国際連盟を脱退し(1933年)、ドイツ・イタリアとともにファシズムの国とみなされていた。文部省は、日本は世界平和をめざし、自由教育を行っている国であることをアピールしようとした。赤井に白羽の矢を立てた背景にはそういう事情もあった。

赤井は世界新教育会議への出席を承諾した。しかし、赤井が渡欧の準備を進めているあいだに、二・二六事件（1936年）がおこり、軍部は政治への発言権をいっそう強めていった。そういう情勢のなかで、赤井代表らの渡英はあやぶまれたが、平生釟三郎（ひらおはちさぶろう）文相の決断で実行された。

こうして、赤井学園長は1936年（昭和11）6月7日、大勢の人々に見送られ、横浜港から鹿島丸で出発した。

チェルトナムへ

赤井は、毎日、見聞した事柄や感想を『外遊日記』に書きとめている。日記によれば、上海、香港、シンガポール、ピナン、コロンボ、アデン、スエズ……と、2、3日ごとに寄港し、それらの港では上陸して見学している。健康と社交を兼ねて、デッキ・ゴルフなどの競技にも進んで参加した。教育会議で行う講演の原稿も船室で書いた。

7月19日、船はマルセイユに入港した。その後、パリ、カレー、ドーバー、ロンドンを経て、目的地チェルトナムに着いたのは7月29日。日本を発ってから52日の長旅であった。

チェルトナムはロンドンの西郊。当時は列車で3時間余り、人口5万の小都市であった。三方を丘陵に囲まれた静かな美しい町で、男女別のカレッジと教員養成所があった。日本代表の宿舎は緑したたる木立のなかの白亜の建物で、男子学生の宿舎のひとつであった。

会議は7月31日から8月13日まで、2週間にわたって開かれた。参加者名簿に登録された会員は980余名。このほかに講演の聴講者が約500名で、多い日には1,500名もの人が集まった。

イギリス人とアメリカ人が多く、日本人は首席代表の赤井を入れて8名。ほかにベルリンに留学していた東京高師の教授と、ケンブリッジ大学を出て研究を続けている人を通訳として雇ったので、合計10名だった。ソ連、ドイツからはひとりも来ていなかった。

世界新教育会議での講演

赤井は世界新教育会議で、「新教育連盟の招待会における挨拶」「日本の茶の会における挨拶」「日本文化と国際理解」「日本における新教育運動の社会的意義」と四つの講演を行っている。そのうち、最初の新教育連盟の招待会での挨拶の記録全文を紹介する。

7月30日、開会の前日、会長エンソール女史はクインス・ホテルにチルテナム（チェル

トナム）の有力者、連盟本部委員、各国代表の主なもの50名余りを招待して、最初の顔合わせの茶の会を催した。エンソール会長、事務総長ローソン氏の挨拶に次いで、日本代表と米国代表のテーブル・スピーチを求められたので、わたしは次のような挨拶をした。最初の会であり、わたしに指名があろうとは全然予期していなかったので、竹沢君（日本代表の通訳として雇ったケンブリッジ大学出）に通訳してもらうつもりであったが、会の空気があまりになごやかなものであったので、直接英語で話した。それがかえってよい反響をえたようであった。米国代表はライアン氏であった。



チェルトナムのシティホール、世界新教育会議の会場の一つ

エンソール女史、諸君。

先刻、エンソール女史から挨拶をするようにといわれた時、わたしはわたしの英語が拙くて、諸君にはクロスワーズパッズルを課するようなことになるのを恐れて、日本語で話して竹沢君に通訳して頂こうと考えていました。しかしエンソール女史及びローソン氏の話をきいているうちに、わたしは拙い英語でも直接に諸君に話しかける方がよいように感じました。どうかこれをお許し下さい。（拍手）

日本に『婦人の友』という有力な雑誌があります。この雑誌の記者が本年の始めに二つの質問を出しました。その一つは「日本から世界に贈りたいものは何か」、その二は「世界から日本に貰いたいものは何か」というのでした。

これにたいして沢山の回答がありましたが、その中でもっとも意義深いものは、上田博士のなされたものでした。

第一の質問に対する彼の答は、「平和を求むる声」で、第二の質問に対する答もまた同じく「平和を求むる声」というのでした。（喝采）　今日世界はいずれの国でも皆これを必要としているのであります。「国際理解」「国際的精神」、われわれの新教育精神がそれであります。

われわれは日本の代表者として、この一つの声を諸君に伝えるためにきたのであります。そしてまた、われわれは日本の代表として、この声を贈られることを期待してきたのであります。（喝采）

わたしはこの静かなチルテナムの町に到着して、われわれの期待が裏切られることがないという感じをもったのであります。第7回世界新教育会議が、この静かなチルテナムに開かれたことを意味深く考え、深く感謝いたすものであります。

ご静聴を感謝いたします。（大喝采）〈※1〉

別の日、赤井は他の日本代表に諮り、チェルトナムの有力者や連盟本部の役員、各国の首席代表などをクインス・ホテルに招待して、お茶の会を開いた。かれはそこで、ユーモアにあふれたスピーチで日本という国を紹介した。

また別の日、日本における新教育運動についての報告では、「自由綴り方」の主張から始まっ

〈※1〉赤井米吉「世界新教育会議での講演」『愛と理性の教育』（平凡社、1964年6月1日）278頁

た日本の新教育運動が、いまや「自由教育は農村の疲弊を救済することができるか」という問題に直面し、郷土教育という第二の段階に達していることを話した。

アメリカ代表のひとり、ウォシュバーンとも再会した。ウォシュバーン博士は日本の教育界でも著名で、先年来日したこともあった。

(2)『世界の教育の動きをみて』

赤井が見たもの

世界新教育会議につづいて、3か月余り、赤井は精力的に欧米諸国の教育を視察して回った。そのことに関連して、中野光氏はこう書いておられる。

「赤井は、さまざまな会合において国際理解と平和を説いた。しかし、他方、各国を巡る過程でイギリスおよびアメリカの経済的、政治的支配が、後進資本主義国ならびに植民地諸国にとって、いかに甚だしい矛盾を結果しているかということをも認識せざるをえなかった。とりわけ彼の眼に映じたのは、インドにおけるイギリスの植民地支配の現実であり、それには深いいきどおりを感じた」〈※2〉

ドイツでは、オリンピック直後のベルリンとミュンヘンに滞在し、ヒトラー・ユーゲント（ナチス・ドイツの青少年団）の活動も見た。のちの研究用にドイツの教科書も手に入れた。イタリアでは、ムッソリーニの青年団・少年団の訓練場も見た。だが、赤井の眼はヒトラーやムッソリーニの思想と行動への安易な同調者のそれではなかった。

アメリカには10月10日から1か月滞在した。ローズベルト大統領のニューディール政策が実行に移され、ふたたび選挙戦がはじまっていた。赤井はラジオでよくローズベルトの演説を聴き、ボストンでは演説会場にまで出かけた。また、さまざまな種類の学校を訪問して、教育の実情を知ろうと努めた。

10月14日、ニューヨークのドルトン・スクールにヘレン・パーカースト女史を訪ねた。校舎は5階建てで、幼稚部、小学部、中学部、高等部が各階に分かれ、それぞれに図画室、図書室、音楽室を持っていた。生徒は400人というが、そんなにいるようには思えないほどに部屋が多い。どの部屋も多くて12、3人、少ないのは4、5人で、めいめいが自由研究をやっていた。ドルトン・プランは活かされていた。

求道の旅

10月28日、ウィネッカ市に教育長のウォシュバーンを訪ねた。チェルトナムで再会して以来の対面であった。この日の対面が機縁となり、赤井は第二次世界大戦後、ウォシュバーンの著作『生きた教育哲学』『新教育の生かし方』『世界意識への教育』を翻訳して日本の教育界へ紹介することになる。

11月3日、ローズベルトが大統領に再選されたことをロサンゼルスで聞いた。アメリカも素朴な自由主義の時は過ぎ、帝国主義の時代に入ったと感じた。赤井はのちに書いている。

「今日の世界の国々の教育にあらわれている一つの大きな旗じるしは、国家教育、民族教育というようなものである。そういう方向から教育の改造を行おうとしているものが著しく見える。ドイツ、イタリー、日本等においてわれわれはその代表的なものを見ることができる。ロシアもそうであろう。英米もそうであるともいわれよう。そして民族精神の復興が叫ばれている。人々は

〈※2〉 中野光「教育者としての赤井米吉」、赤井米吉『愛と理性の教育』（平凡社、1964年6月1日）429頁

これを復古的、反動的ともいっている。しかしそれはただ復古のための復古や、反動のための反動ではない。民族をひとまずうしろ向きにすることによって、その団結を強固にし、かくて大いなる前進をなさしめようというのである。より大なる精神力をもって、より豊かな物質力を実現せんとする目論みである。うしろむきの前進である。したがってそれは分裂の前進であり、対立の前進である」。〈※3〉

しかし、そういうなかにあって、「デモクラシー」の大切なことを考えつづけ、訴えつづけている人がある。赤井は、敬愛するジョン・デューイの講演「教育に於けるデモクラシーの課題」を直接聴くことはできなかったが、講演記録を入手して、帰国後に翻訳しようと考えた。これは帰国後の著書『世界の教育の動きをみて』に収められた。

欧米の旅を通じて、赤井の思想のなかには、ナショナリズムが一段と強くなった。しかし、それとともに、迷いも苦悩もいっそう深くなった。毎日欠かさずつけていた『外遊日記』に書きつけている。「世界はこれでよいのか。……日本は一体どうしたらよいのか。こんなことを考えている間に私の一生はすんでしまいそうである。私は一体どうしたらよいのか。……沢山の書物を読んでも、多くの人々に会っても、その文字、言葉だけをおぼえて帰ったって何もならない。私という人間が生きなければならない。……自分を作らねばいけない」

彼は、ヨハネ伝を初めから読み直した。「13章あたりからのキリストの言葉に深く感じた」と『外遊日記』に書きとめている。

帰国の途上、竜田丸が太平洋の真ん中を過ぎて日本に近づいた頃、船内の放送で日独防共協定が結ばれたことを知った。日本はファシズムへの道を突き進んでいた。



赤井米吉著『世界の教育の動きをみて』
（刀江書院、1937年）



C.ウォシュバーン著 赤井米吉訳『世界意識への教育』
（誠文堂新光社、1954年）

〈※3〉 赤井米吉『世界の教育の動きをみて』（刀江書院、1937年11月18日）7頁

2 「国民精神総動員」のもとで

(1) 日中戦争の開始

欧米の旅から帰った翌年——1937年（昭和12）、赤井学園長は多忙な日々を過ごしていた。

3月は卒業の月で、小学校は第10回生18名、中学校・高等女学校は第5回生で、それぞれ21名、19名が卒業した。依然として小さな学園である。

4月は入学の月。入学者はわずかに増えた。5月に入って、ヘレン・パーカースト女史が来校した。赤井が去年の10月にドルトン・スクールを訪問して以来、7か月ぶりの対面であった。その日、小・中・女学校全員が講堂で女史の話を聞いた。通訳はもちろん赤井学園長である。他方、8月には世界連合教育会（赤井がイギリスまで出かけた新教育連盟とは別の組織）の世界教育会議が東京で開催されることになっていて、赤井は主催者側の帝国教育会の理事なので、その準備に奔走していた。

6月4日、近衛文麿内閣が成立した。およそ1か月後、7月7日の夜、北京郊外の盧溝橋付近での発砲事件を契機に、日中両軍が交戦した（盧溝橋事件）。近衛内閣は不拡大方針を出したが、軍部の圧力に屈して兵力を増派し、戦線を拡大した。政府はこの宣戦なき戦争を「北支事変」と名づけ、ついで「支那事変」と呼んだが、実質的には「事変」ではなく全面的な「戦争」であった（日中戦争）。

赤井は近衛首相を訪ねて、「8月には世界中から多数の教育者が集まって来るというときに、こんな騒ぎを起こすとは、とんでもない下策である」と直言した。近衛とは明星の初期の保護者であり後援者であった市村今朝蔵・きよじ夫妻を介して昵懇（じっこん）の間柄であった。赤井はまた、近衛のいわゆる革新派の官僚・学者から成る昭和研究会にも加わっていた。近衛は「大事に至らないですむだろう」と言ったが、事態はもはやどうにもならない段階に進んでしまっていた。

第7回世界教育会議は、8月2日から7日まで東京帝国大学を会場として開かれた。海外からの参加者は43か国におよび、総員869名。国内の参加者も予想をはるかに超えて2,409名に上った。会議は18部門に分かれ、大学内の各教室で行われた。赤井は各国の要人を応接したり部会に出席したりと多忙な毎日であった。

その間にも日中戦争は拡大して、8月には上海でも戦闘がはじまり、日本軍は年末には首都南京を占領した。

(2) 創造力と自由

日中戦争開始直前の1937年（昭和12）5月、文部省は『国体の本義』という小冊子を発行し、全国の学校や官庁に配布して、国民思想の教化をはかった。それは、『古事記』『日本書紀』の神話にもとづいて、日本は天皇を中心とする一大家族国家であると教え、現人神（あらひとがみ）である天皇に絶対服従すべきことを説いていた。

近衛内閣は、日中戦争開戦後、国家主義・軍国主義を鼓吹し、国民の戦争協力をうながすために、国民精神総動員運動を展開した。「挙国一致」「尽忠報国」「堅忍持久」をスローガンに、消費節減、貯蓄奨励、勤労奉仕を要求した。

戦時体制が形成されるにともなって、国体論にもとづく思想統制、社会主義や自由主義に対する弾圧がきびしくなった。言論界では、国体論やナチズムの影響を受けた国家主義的な思想が主

流となり、また、欧米の植民地支配からアジア諸民族を解放し、日本を盟主とする共存共栄の新秩序を建設することを説く大東亜共栄圏論が叫ばれた。

こういう社会状況のなかで、赤井は年来の同志である志垣寛らとともに、私立学校の生き延びる道を模索しながら、国策に協力していく姿勢を強めた。しかし、国策に協力しつつも、納得できない教育政策にはきびしい批判を加えた。たとえば、彼は言う。

「思うに新東亜の建設は我が国民に課せられた一大創作である。これを属国にするのでは勿論ない。各々の民族の主体性を認めつつ、その経済、文化、政治に大協同帯をつくり、生活を共にしようとする。この新秩序は他に何らの模倣すべきものがない。全く新なる創造でなければならない。従ってそれはどこまでも我が国民の創造力の発展を要請するものである。将来の国民教育に於て、創造力の涵養の重要なことは言をまたない」。〈※1〉

そこで、赤井はつぎのように言う。

> 創造力は命令によって発展せしめることは出来ぬ。何事でも命令と通牒で出来ると心得ている官僚とその亜流は、創造力をも命令を以て生み出させようと考えているかも知れぬが、それは不可能である。創造力を生むものは実に個人の自由活動である。
>
> 子供の心を自由にするには先ずその足を自由にせよ。
>
> 子供の心を自由にするにはその手を自由にせよ。
>
> 子供の心を自由にするにはその口を自由にせよ。
>
> これは創造力のイロハである。
>
> 「陶冶(とうや)」、「涵養(かんよう)」の言葉を嫌って、「錬成」、「修練」を使った人々には、このイロハはわからないかも知れぬ。従来の教育を軟教育だとして、しきりに硬教育をとなえ、到るところ児童の体罰問題を起こしている人々は、創造力を錬成するのだ、硬教育でなければいかぬ、大いに打ちのめさねばと考えているかもしれない。が、古来の人間生活の事実によるならば、自由のないところに創造力は伸びなかった。現在、将来の人間が急変せざる限り、この事実は変らない。かくの如き教育観、教育法の行われる限り、創造力は伸長しないであろう。〈※1〉

赤井は、個人の想像力と、それを生むための自由が必要であることを強調し、指導者の養成を重要視した。

> 児童の創造力を伸ばすべき、教員の創造力は全然封鎖し、閉じこめて、文部省の定めたこと以外には一足も出られぬようにし、その研究は特定の雑誌以外に於ては、発表を禁止し、その雑誌に於ては、誰は自由主義、彼は個人主義、教員の額に烙印を押し、自ら教育界の法王の如き態度を取るものを許しているとは、実に不可思議千万である。「児童の創造力は伸ばせよ」「教員の創造力は厳に取り締まれ」は、余りに矛盾した考えではないか。結局教員を、否教育を、機械視する物質主義・統制主義者の教育政策である。国家の危機これより大なるものはない。〈※1〉

自他の生き方にきびしい赤井の性向と鋭い批判精神は依然として健在であった。

〈※1〉赤井米吉「個人創作力を国家創作へ」『新世界観と教育』(教育建設社、1941年10月1日)145頁

(3) 国民学校令と私立小学校

「紀元 2600 年」

1940年（昭和15）。この年は神武天皇（『古事記』『日本書紀』に書かれている伝承上の天皇で、『日本書紀』では初代の天皇とされる）の即位から2600年とされ、11月10日から5日間にわたって、全国各地で「紀元2600年」を祝う祭典が盛大に行われた。

皇居前の特設広場に天皇・皇后を迎え、5万人が参加した。近衛首相が寿詞（よごと）を読み上げ、「天皇陛下万歳」を唱えた。東京だけでなく全国各地で旗行列や提灯行列などが行われ、子どもたちは学校で日の丸の旗をつくり、「奉祝国民歌」を歌って行進した。

明星学園でも11月10日、小・中・女合同の式典が行われ、赤井学園長の音頭で万歳を三唱した。

この祝典行事は、「万世一系」の天皇の下、国民を戦争遂行に邁進させる国民精神総動員の総仕上げであった。祝賀の5日間は、8月から禁じられている昼酒も許され、赤飯用のもち米も特別に配給された。そして15日の朝には、全国の町や村に大政翼賛会による「祝い終った、さあ働こう」のポスターが貼り出された。

この年の流行語は、「祝い終った……」のほかに、「バスに乗りおくれるな」「ぜいたくは敵だ」「新体制」「八紘一宇」など。「八紘一宇」の「八紘」は八方と四隅、全世界のこと。「宇」は屋根、家のこと。つまり「全世界を覆って一つの家となす」という意味で、日本の海外進出を正当化するための標語であった。

国民学校令

「紀元2600年」を盛大に祝った年、1940年（昭和15）の12月6日、国民学校令案が閣議に提出された。これは3年前の日中戦争開始の年、近衛内閣が国民教育の再編成を行うために設置した教育審議会が検討してきたもので、とくに従来の「小学校」を「国民学校」に改めることが注目されていた。

国民学校の目的（第1章）は、「皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ皇国民ノ基礎的錬成ヲ為スヲ以テ目的トス」と述べ、教育勅語を具体化する「皇国民の基礎的錬成」を主眼に置いた。

制度の面では、従来の尋常小学校（6年）、高等小学校（2年、義務制ではない）を改めて、初等科（6年）と高等科（2年）とに分け、義務教育は6年から8年に延長された。

12月24日、国民学校令は正式に閣議で決定され、同日、橋田邦彦文相はその大綱をラジオを通じて公表した。

橋田文相の説明は10項目にわたっていたが、そのひとつは、「私立の国民学校は認めない」というものであった。ラジオ放送を聞いた私学関係者のあいだに衝撃が走った。――「これはいったい、どういうことだ！？　私立小学校をつぶすということなのか……」。

私立小学校協会の濱野重郎会長（清明学園長）以下3名は文部省に出向いて、担当官に説明を求めた。「閣議決定である」と繰り返すばかりでらちが明かない。私立をつぶすようなことはしない旨の説明を受け、一同はひとまず退出した。

疑心暗鬼の4人は2日後、文部大臣に面会を求めたが、ついに大臣は現れず、担当官から私立小学校は国民学校としては認められないが、「私立学校令」による学校として今後も存続が可能であると伝えられた。

年が明けて、1941年（昭和16）1月、文部省は「既存の私立学校は玉石混淆で、設備も教育内容も甚だ不十分で国民教育機関として認め難いものもあるので、たとえ既存の学校でも条件に合

わなければ認可取り消しもあり得る」との方針を打ち出した。

危機感を募らせた協会関係者は、2月8日、東京府下の私立小学校校長ら30数名を九段の暁星小学校に緊急招集し、対応策を協議した。その際、従来の私立小学校協会に未加盟の学校は新たに参加し、さらに組織を強化することになった。〈※2〉

ちなみに、2月8日の緊急集会のとき、私学の結束を呼びかける檄文を書いたのは明星学園の照井猪一郎で、それは情熱を込めた名文だったと語り草になった。〈※3〉

この檄文は、残念ながらどこにも残っていない。

校名に刻まれた歴史

国民学校令は、1941年（昭和16年）3月1日に公布され、4月1日から公立（市町村立）の小学校は一斉に「国民学校」に改められた。しかし私立小学校は、国民学校という名称をつけることも、従来どおり小学校を名乗ることも許されなかった。それは明かに官尊民卑の思想の現れであり、私立学校の否定であった。

キリスト教主義、児童中心主義、自由教育、個性重視、等々、それぞれに独自の教育理念を掲げ、苦しい経営状態に耐えながらも、教育の開拓者として創造的な実践を積み上げてきた私立小学校は、挙国一致、戦争遂行を第一義とする支配層にとって好ましからざる存在、危険な存在とみなされたのである。

私立小学校はみな校名を変えた。明星学園小学校は「明星学園初等部」、成蹊小学校は「成蹊初等学校」と改称し、成城小学校は「成城学園初等学校」に、清明小学校は「清明学園初等学校」に変えた。1884年（明治17）に「東洋英和女学校」として開校した東洋英和女学院の場合は、1909年に「小学科」を新設して「東洋英和女学校小学科」と名乗っていたが、「英和」の「英」は英国の「英」だというので永久の「永」に変え、小学科を「東洋永和女学校附属初等学校」に変えた。

一方、自由学園の創立者・羽仁もと子は、幾度となく東京府の学事部から校名変更を要求されたが、羽仁は「人間の自由を重んずるのでなくては教育はできない」と、確固たる信念をもって主張し、文部省にも何回も出向いて「自由」の大切さを主張しつづけた。こうして戦況が激しくなっていくなかで月日が過ぎ、終戦を迎え、「自由」の校名が守りつづけられたと、身近にあった人が証言している。〈※4〉

また、自由学園と同じ1921年（大正10）に創設された文化学院は、小学校を持たず、文部省の学校令によらないユニークな学園として知られている。根っからの自由主義者・西村伊作校長は、偶像礼拝否定と反骨の精神から「紀元2600年祭」を批判するなど、戦時体制になっても教育方針を変えず、巣鴨の拘置所に拘禁されたが、ひるまずに抵抗の姿勢を貫いた。1943年8月、文化学院は強制閉鎖され、校舎は陸軍によって接収された。〈※5〉

戦後、新しく学校教育法ができて、多くの学校が校名をもとにもどした。しかし、たとえば成城学園のように、戦争が終わってもあえて変えず、「成城学園初等学校」と名乗っている学校もある。「私立小学校協会」も「小学校」を名乗ることができず、「東京私立初等学校協会」と改称したが、戦後になってもその名称を変えず今日に至っている。協会の先達は、これも「抵抗のいしぶみ」であると述べている。

＜文責：依田 好照＞

〈※2〉『東京私立初等学校協会―結成70年の歩み』（2005年3月3日）63頁
〈※3〉「座談会　日小連35年の歴史を語る」『日本私立小学校連合会のあゆみ―創立35周年記念―』（1977年5月12日）40頁
〈※4〉千葉貞子「ミセス羽仁の思い出」『自由学園の手紙①』（自由学園出版局、1994年5月1日）8頁
〈※5〉『愛と叛逆―文化学院の五十年』（文化学院出版局、1971年5月25日）507頁

第2章　戦時下の明星

この章は、1931年（昭和6）の「満州事変」から日中全面戦争を経てアジア・太平洋戦争、そして敗戦に至るまでを取り上げる。

当時書かれた若干の資料のほかに、何人かの卒業生の方々にご自身の貴重な体験を書いていただいた。ひとくちに戦時下の体験と言っても、それを体験した時・場所によって異なる。学年が1、2年ちがうだけで、極端に言えば「天国と地獄」ほどにちがう。

便宜上、小学校、高等女学校、中学校の三つに分けて構成した。

1　戦時下の小学校

(1)戦争と子どもたち

1937年（昭和12）日中全面戦争開始から、1941年（昭和16）太平洋戦争開始までの間、子どもたちが何を考え、自分たちの将来に対してどんな夢をいだいていたのか、小学部教育月報『ほしかげ』の中に追ってみた。

時局と子どもたち

■日支事変の事　　4年・男子（1937年10月5日『ほしかげ』29号より）

僕はおかしいことがあるのに気がついた。千葉県の夏季生活から帰るとき、田舎では出征の人が出るとき見送る人が泣いていたが、東京へ来ると皆喜んでいることだ。少し変だなあと思った。

僕はまだニュース映画を見ないのであまりよく知らない。

それからある飛行将校が、うたれて落ちる時などハンカチをふったというところはとても感心した。

僕が今残念に思っているのは、日本と支那とが仲よしになって世界中平和になって、どこの国からも、連絡がとれるようにしたいと思っていることだ。

僕の家からこの間、慰問袋を出したがその中にいろいろな物を入れてあげた。そして何か包む時は、新聞紙でつつんだ方がよいと言ったのでそのわけを聞いたら、ヘイタイサンは新聞が読みたいからだということです。

こういう慰問袋をもらった兵隊さんは、とても喜んでいるだろうと思った。

■一億をこえて　　6年・女子（1941年3月20日『ほしかげ』38号より）

我が国の人口は一億人でもまだまだ人口はすくないと言われている。兵隊に行かない若い人たちは大陸へ大陸へと叫んでいる。

人口2秒間に1人生まれ、死ぬのは7秒に1人ずつ死んで行くのだそうです。「これからだ」私たちも国を背負って人口を増やして行くのです。今は太平洋波高しと言っているように、すぐ隣の「アメリカ」という国と戦が起ころうとして今日明日のこともわからない。

この日本、昔から栄えて来た国、今こそしっかりやって行かなければならない時です。

本当にこの国に生まれた私たちは幸福であると考えて、女学校へ入学してもっともっとしっかり勉強をして御国のために尽くす心がなければならない。私どもの希望と責任はもっともっと先に待っています。

子どもたちの夢

■造兵工学　　6年・男子（1940年3月20日『ほしかげ』36号より）

僕は今工学方面をやりたいと思っている。その中でも軍艦の方が好きだ。松田君もそうだ。

どんなものをやるといっても別に決まっていない。飛行潜水艦なんかを作ったら面白いだろう。軍艦だから鉄で出来ている。鉄だから飛ばない。それを飛ばそうというのだ。なにか特別なものを使わなければならない。それから動力もガソリン、エンジンでは駄目だからロケットだ。これは水中でも使えるが、水が入らないようにしなければならない。また大砲のかわりに怪力線を使い、装甲も軽くて弾丸が当たっても穴があかないし速力も速く、光学兵器もこうなれば天下無敵だろう……なんて言ったってそれはまだ空想だが本当に日本にあったらいいだろうなあ。

イギリスやアメリカだって一寸手が出せないだろう。ああ早くそうなりたいなあ。それには体を強くしなければならないから早く丈夫になろう。

■発明発見家に　　6年・女子（1940年3月20日『ほしかげ』36号より）

私はこの前まで「○○女史」になりたいと思ったけれど、今では日本のためにうんとよい発明発見をしたいと思っている。

私は昔のことを考えるのが好きだからエジプトのミイラの秘密を研究して考古学をやるつもりであったが、このごろ発明発見家がよいと思っている。まず私は太陽の周りを廻る遊星のところへ行けるような大ロケットを発明して、遊星の秘密を探りたい。女だって今の日本ではそれくらいのことはやってみねばならない時代じゃないかと思う。私は発明発見家はお国のため世界のために役立つ未知な秘密をどんどん片付ける。だから私は女であっても発明発見家になりたいのだ。

田中一水さんは16回生。小学校・旧制中学校を明星で過ごし、中学在学中に学制改革が実施されたため5学年終了後、新制高等学校の3年生となった学年である。卒業後は東京教育大で生物学を学び、明星の高校と中学校で理科教諭として長年生徒たちに親しまれた教師でもあった。田中さんが若き教師時代に、小学生のころの記憶から赤井学園長の印象を書き残している。

(2) スマートな講話——田中 一水（16回生）

創立以来、先生は園長兼女学校長で、小学校（6年）と旧制中学（低学年）では週1回修身を教えておられた。しかし何といっても印象に強いのは式典のときであって、明星の中ではもっとも外向的かつ外交的性格を具えておられた。スマートな先生の講話は、幼い小学生をもあきさせなかった。当時は祝日には必ず式があったわけだが、何かの都合で、小学部長の照井先生や中学部長の上田先生が代行されると、それはもう式とはいえないと私共チビには思えるほどだった。もとより戦時下であり、日本軍が米英を敵にまわして大勝利をおさめた折など、「誠にザマア見ヤガレといいたいのであります！」と拳を振り上げて熱弁をふるっておられた姿は今も記憶に鮮かである。

先生は自由教育の推進者であると同時に情熱的なナショナリストでもあったといえるだろう。日本を大日本と呼んではいたが、その頃の日本は世界の片隅のオトギの国としてしか一般には認められておらず、それを歯がゆく思わぬものはなかったのである。だが、先生の修身にせよ講話

にせよ、御自身の信念を語られ、私共には決して型にはまった道徳を押しつけることはなかった。修身の教科書も先生の授業でつかったおぼえはない。ともかく先生のお話は、当時としては例外的に視野の広い、国際感覚にあふれた楽しいものであった。先生も御自身の雄弁を楽しまれていたようである。〈※1〉

COLUMN 3

子どもたちから見た先生たち

『ほしかげ』29号（1937年10月5日）、36号（1940年3月20日）、37号（1940年4月3日）より

原田 満寿郎先生
たいていの時は大股で走っている。言葉の終わりに「ね、ね」とつけ足す。子どもたちに取り付かれわいわい言われながら嫌な顔一つしない。あだなは原まん先生。

高橋 律之助先生
「おさむらい」みたいな先生。額が光っていて、頭を取り囲むように髪がある。何かを考えているときは手を額に当てていつも元気ににやにや笑う。

鎌田 貞之助先生
背は低く、筋肉でがっちりした体。体操が得意。号令をかける時は体の空気が全部なくなりそうな声を出す。

橘 正薫先生
まじめで静かな先生。綴り方を読んで下さる。ちょっと考えたのではわからないような難しいことを言う。つま先を伸ばしてぼさぼさの髪をふらせながら駆けている。

佐藤 加寿輔先生
お話や朗読が上手。とっても太っているのに、足をキュンキュンとあげるので面白い。どら声で、目をカッとひらいて見つめられるとみんなたじたじとなる。

吉田 賢次先生
とても愛嬌のある先生。いつも1・2年生の子どもたちに囲まれ幼稚園の先生みたい。授業が済むといつも運動場でみんなと遊ぶ。大きな目をパチクリさせて人を笑わせる。

曽我 英吉先生
とても面白い図画の先生。たいてい10分くらい遅れて教室にやってくる。そして必ず全員の顔を見てから「さあこの間は何をやったか」という。

杉本 幸一郎先生
上品な顔をした手工の先生。とても倹約家だ。私たちが木をもらいに行くと必ず「設計図は？」と聞く。制作しているときも「設計図は？」と聞く。「さあ、すわって。すわって」が口癖。

〈※1〉『星雲時代』復刊第1号（1974年）、『赤井・照井両先生 生誕百年誌』（1988年5月15日）所収

(3)「お知らせ」に見る戦時下の小学校のとりくみ

学園には小学校から保護者宛てに出されたガリ版刷りの「お知らせ」が保存されている。

そのなかから、戦時下の小学校の教師たちが子どもたちのために、保護者の協力を得てどんなことにとりくんだか、その一端を見てみたい。

わら半紙5枚半にわたる「お知らせ」。冒頭に「第3回体操会に当たり一応この目的の由来を説明しておく時期に達したと思う」と言う。大意を要約すると――。

①「お知らせ　第３回体操会に当たって」 1940 年（昭和 15）４月 23 日

国民、とくに都市生活者の体位低下の傾向は著しく、このなかに私たちの児童が含まれていることは重大な問題である。私たちの見るところでは、明星学園小学校の子どもたちは、一般に発育良好で、如何にも健康らしい外観を持っていた。しかし、最も生活活動に重要な関与を持つ握力、懸垂、登攀、打撃等は一般に不得手で、跳躍、投擲、担負等に著しい劣性を示し、最も簡単に見える直立不動の正常姿勢でさえ、ものの5分とは持続できない有様だった。私たちはそうした傾向を児童一人ひとりについて科学的に調査し、児童の体位向上のための年次計画をたて、実施にとりかかった。

まず、それへの準備運動として最も無理のない、最も全身鍛練である徒歩行を課した。

爾後、登山・遠距離歩行等が組織的に行われて、この目的は充分な効果をあげた。〈☆〉

昨年になると、2年生が神奈川県の与瀬から高尾山塊を越えて多摩御陵までの純徒歩逆コースを平気で征服し、一人の落伍者もなく、翌日みな平日のように元気で登校した。徒歩時間6時間内外の山道は一般の大人でさえ楽でないコースである。

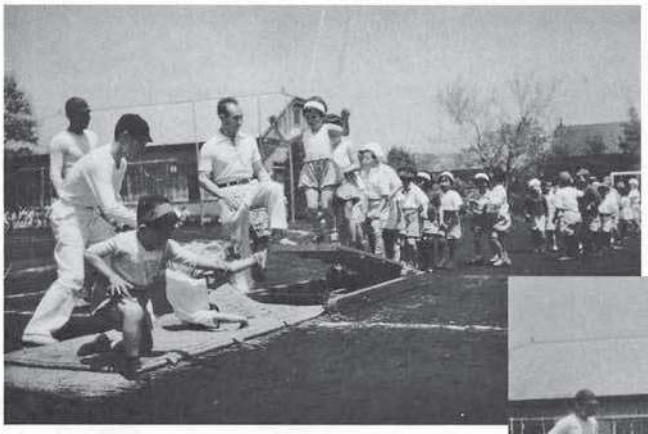
5か年にわたるこうした準備鍛練は大体目的の段階に達した。いよいよ本格的な体操の学習である。まず、昭和13年度の第1回体操会では、子どもたちの日常生活のなかから体育的な動きを抽出した。彼等は例外なく下肢の運動能力は高いが、上体、特に胸背の運動の劣弱さを演技の事実によってはっきり自覚することが出来た。

私たちはこの事実の前に第2回の体操会の発表は懸垂を中心とし、第3回は跳躍・転回を中心とし、つぎの第4回は以上を統合・充実することによって、ひとまず第1期の4年計画を完成することを約束した。今回は即ちその第3回目に該当する。（以上要約）

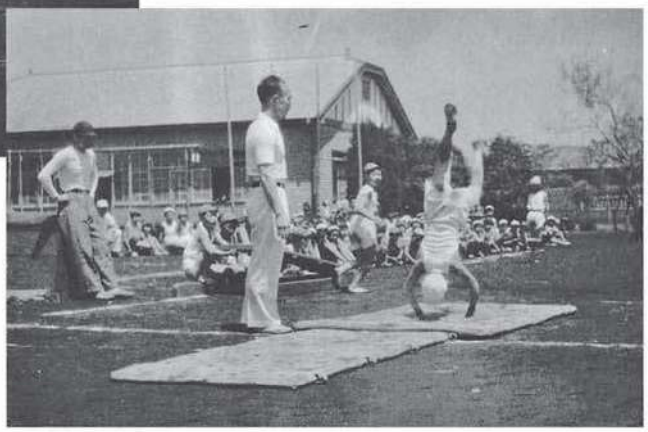
そして、「お知らせ」はつぎのように結ばれている。

「せっかくの子どもたちの頑張りである。必ずプログラムの最初からお見落としなくご覧くださることは、子どもたちへの大人としての儀礼でもあり、限りない激励でもあることを申し添えてお願いに代える」。

〈☆〉この時期に定着した年間の登山・遠距離歩行には、学年単位の遠足・見学行事のほかに、春季強歩訓練（高尾山）、秋季強歩訓練（御岳中心）、多摩御陵（八王子市）・学園間の集団継歩がある。後者の三つは学年単位ではなく、全校児童を体力別・コース別6班に編成して行われた。



よき指導者の下で
指導は高橋律之助。学校体育を理論的に追究する高名な実践家であった。



一人ひとりを伸ばす
跳躍・転回等を無理なく、順序を踏んで、積み上げていく指導法が工夫されていた。

第3回　体操会プログラム

期日　昭和15年4月28日（雨天なれば5月5日）午前9時開始――午前11時30分終了

順番	種　目	学年	方　法	目　的
1	国民体操	全体	徒手	平素における仕事への準備運動
2	走技（1）		100メートル・200メートル・50メートル	
3	登攀・懸垂移行	全体	吊竹・竹柱・横木・肋木等の登攀および移行	胸背筋鍛錬
4	上肢の振り	全体	徒手	胸郭の拡大と肺活量の増大
5	跳躍	全体	スプリング・跳び箱・バック等使用	全身の鍛錬とテスト
6	担負	全体	類似した体重同士が背負い合う	上体と腰部の強化
7	柔軟運動	全体	徒手	諸関節の動きの面を拡大円滑にする
8	動きの旋律	有志	あらゆる運動の組み合わせ	体動の総合的動きと総括的な表現
9	メデシンボール	1年	1年生のボール遊戯	初めて課せられる団体訓練
10	諸筋の力運動	全体	徒手	筋力鍛錬
11	球技の基礎練習	有志		各球技への基礎練習
12	巧緻運動	全体	徒手	意志の命ずるままに最も効果的にかつ正確に動きうる身体鍛錬
13	タンブリング	有志		力とバランスの総和
14	転回	全体	跳び箱・スプリング使用	最も高き総合運動
15	縄飛び	有志		跳躍の一般化
16	走技（2）		300メートル・400メートル	
17	綱引き	全体		

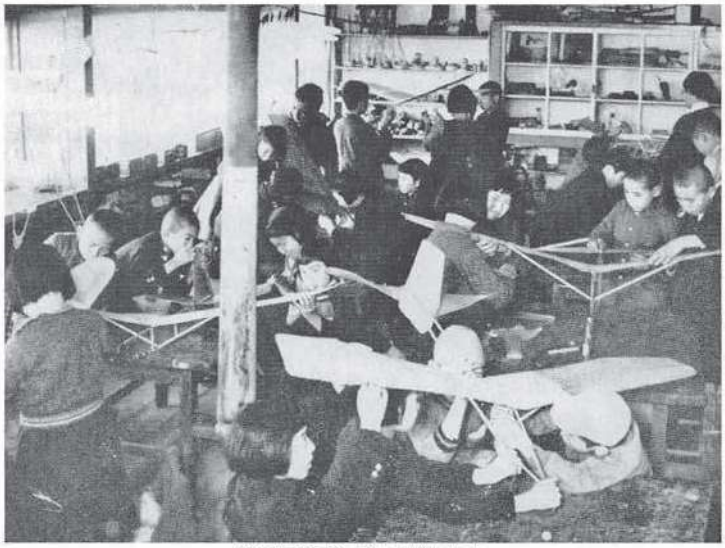
●注意　当日児童の服装はランニング（袖付禁止）、パンツ（女子は学校配給のもの、男子は白キャラコ製、黒線あってもさしつかえなし）、運動足袋に限定。

②「お知らせ　工作展覧会の開催」 1942年（昭和17）3月9日

拝啓　来る14日（土曜）・15日（日曜）の両日午前10時より午後3時まで、本年度卒業児童を中心とする工作展覧会を開催しますから、ご家族ご知人お誘い合わせご来観くださいますようお願いいたします。

工作は機械科学の表現法として今後日本の科学教育の中軸をなすべき重要な部門でありますが、物資材料の制約は児童の計画実行を甚だしく不如意ならしめ、客観的効果としては隔靴掻痒の感なきを得ないと存じます。しかしそれが却って教育としての効果をもたらし、彼等ならではという警抜大胆なる独創と手法は大人をして思わずほほ笑ましむるものあることを信じます。

しかも彼等のたえざる努力と苦心とによって寄せ集められたる材料……空箱を解体した板と釘、缶詰殻を展開したブリキ、いやしくも彼等の手に触れ眼に映ずるもの一つとして資材ならざるなく、いわゆる「捨てりゃ廃品、活かせば資源」の標語を一層積極的に、「捨てりゃ廃品、活かせば力」とした児童の率直なる構想には、未来日本の大きな姿を髣髴させ、大人に大きな示唆を与えることと存じます。



模型飛行機づくりがさかん

③「お知らせ　算数学習の実際」 1943年（昭和18）5月14日

拝啓　行事暦によって予てご承知おきのことと存じますが、末記日程によって初等部全学年の算数学習実際をお目にかけます。毎々申し上げることですが、国民学校案の中で算数ほど思い切った革新を断行した科目はございませんが、それだけにまた家庭でのご指導も種々な困難が生ぜられていることと存じます。

よって本年度の教育事業の一つとして、全学年を通じて算数の取扱い方を皆様と共に徹底的に研究吟味して、最も正確な、最も能率的な教育効果を挙げたいと念願してこの企画をしたものであります。

特に時刻を午後に配当したのも、ご来会の便宜を考えてのことでございますから、当該学年のみの方に限らず、なるべく多数のご来会を待ち上げます。



5月16日（日曜）13時より　初等部1年、2年、3年
5月23日（日曜）13時より　初等部4年、5年、6年

学園では非常の場合に備えて、前年度から「非常集団帰宅演習」を実施していたが、空襲警報発令時を想定して、さらに詳細な確認事項を家庭との間に共有した。

④「お知らせ　空襲警報発令時の処置」 1942年（昭和17）5月7日
下記三つの立場を綜合ご考慮の上、万遺漏なきようご配慮願います。

児童では
1. 登校途上の場合
　イ　乗車前だったら家に引き返す。
　ロ　乗車後だったら急いで学校に来る。
2　帰宅途上の場合
　イ　乗車前だったらすぐ学校に引き返す。
　ロ　乗車後だったら家に急ぐ。
3. 徒歩通学の者は
　イ　井の頭公園まで来た者は学校へ来る。
　ロ　公園までの途中だったら家に引き返す。
4. なるだけ垣根添いや木下をえらんで急いで歩く。
5. 警防団員のさしずによく従うこと。

学校では
1. 登校前の発令が午前中解除されない時は、その日は休業とする。
2. 午後授業中もしくは帰宅途上発令された時は、その後の情況に即応して乗車帰宅か徒歩帰宅のいずれかを選ぶ。
3. 学校出発の時刻は電話で当番家庭に伝達する。必要あれば家庭群通伝法もしくは電話網によって全部に知らせる。
4. 隔遠の子にして特定されている者は必要あれば学校側で泊めておく。

家庭では（略）



空襲に備えて集団帰宅（1944年）
方面別に班が編成され、毎学期、上級生の指導による非常徒歩演習が行われた。



1943年7月。リュックサックに戦闘帽で通学する生徒が目立つようになる。

＜文責：一瀬 清＞

(4)戦時下の小学校学習記録

1941年（昭和16）12月8日、太平洋戦争開戦。日に日に厳しくなる社会の状況下で、初等部の子どもたちはどのような日常を送っていたのだろうか。本誌編纂にあたり卒業生から寄せられた当時の日記、絵画などの中から見ていきたい。

資料を提供してくださった新山英輔さんは19回生。1940年（昭和15）4月に初等部入学、2年生の12月に日米開戦、6年生の8月に終戦を迎えた。小学校生活6年間のほとんどを戦時下で過ごした学年である。各種記録には戦時の日本の社会情勢が反映されているが、そのような中でも平時と変わらぬ教育への取り組みがなされたことが、これらの資料から読み取れる。19回生の初等部6年間、担任は原田満寿郎先生。なお、新山さんの4歳違いの兄、2歳違いの姉、4歳下の弟もそれぞれ明星に通った。

■夏休みの日記



1940年、1年生の課題「夏休みの日記」。先生の手作りであろうガリ版刷り、大判の日記帳。表紙には「皇紀2600ネン」の文字がある。

小学生になって最初の夏休み、家族と共に過ごす1年生の日々が記されている。7月27日のページには

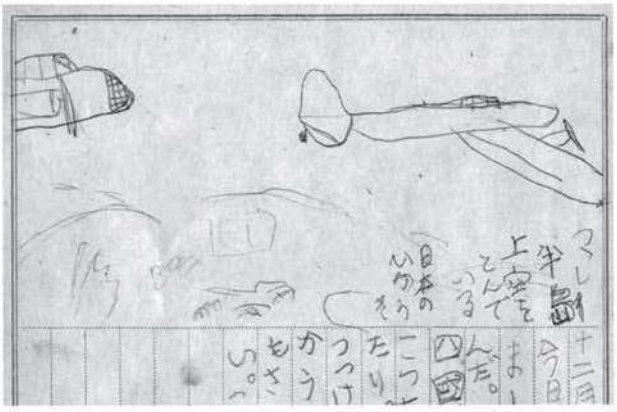
「キャウオネエチャンガ、カキセイカツニ、イキマシタ」

と書かれており、この日から初等部の夏季生活が始まったことがわかる。

■日米開戦

1941年（昭和16）12月8日、2年生の日記から。

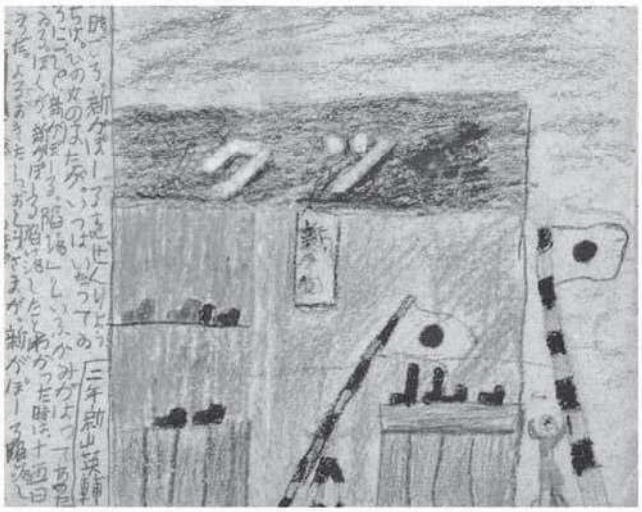
> 今日、日米戦争がはじまりました。てきは米英をらんだ（オランダ）。しなは前から。てきは四國。こっちは大日本一國。でもこっちはどんどんばくげきしたり、軍かんやひかうきをやっつけるけどむかうからは、ひかうき一きもこない。ばくげきもされない。なんにもされない。こっちが、いまはかっている。



文章に添えられた飛行機の絵は2年生の少年の想像によるものだろうが、描きなれたタッチである。

■２年生……シンガポール陥落

年が明けて1942年（昭和17）2月17日に描かれた絵と文の題材は「シンガポール陥落」。



十五日のよるの八時ごろ、新がぽーる（シンガポール）をせんりょうしました。まちはひの丸のはたがいっぱいたってゐた。ところどころに『しゅく、新がぽーる陥落』といふかみがはってあった。みんなよろこんでゐる。ぼくが新がぽーる陥落したとわかったときは、十五日のよる十一時ごろだ。よるおきたらおとうさまが『新がぽーる陥落したぞ』といった。こんど入城しきのとき、はたをもってあるくらしい。子供だけおかしと長ぐつとごむまりをもらふそうだ。

絵の中の靴屋さん店頭には赤や黒の長靴が並んでいる。そして中央に描かれた白い札には「新」の字が見えるが、これは当時シンガポールのことを「新嘉坡（“シンガポール”の中国語での旧称）」と表記することがあったからだろう。

■作文に記された空襲

四月二十日　空襲　三年　新山英輔

をとゝい日本にはじめて外國のひかうきが、ばくげきをしにきた。アメリカのひかうきだ。がっかうでかへらうと思ってまってゐると、きうにウーウーとさいれんがなって、じゃんじゃんとはんしょうがなった。をどろいていってみると、女学生が空しうけいほうといってゐたからいそいでらんどをもって、きょうしつの前に並んで櫻の木の下でまってゐると、照井先生がよんでゐるのでそっちへゐくと、先生のお話があって、きょうしつの中で本をよんでかへるときをまってゐた。しばらくして先生が、出ろといったから、みんな出ると『ぶたいに並べ』といったから並んだ。そして小川ぶたいにははら田先生がついてきた。西十一小じにきたからそこからまがってうちへかへった。家へかへると、お兄ちゃんが『てつき』がしんぢくまできてばくげきしたぞといったけど、ぼくはまだしずおかにしかこないのかと思って、うそだとをもった。それから本をよんでいると、どどーんとかうしゃほうのをとがしたのでこんどはほんたうに東京も空しゅうされただらうとをもった。でもしんぢくまではこないだろうと思ってゐると、きうに大きなこうしゃほうのをとがどどーんとした。こんどはあまりちかいから、中野ぐらいまでてききがきたのかとをもった。夜になってゆうかんを見たら、しんぢくまできたらしかった。

■３年生……夏季生活

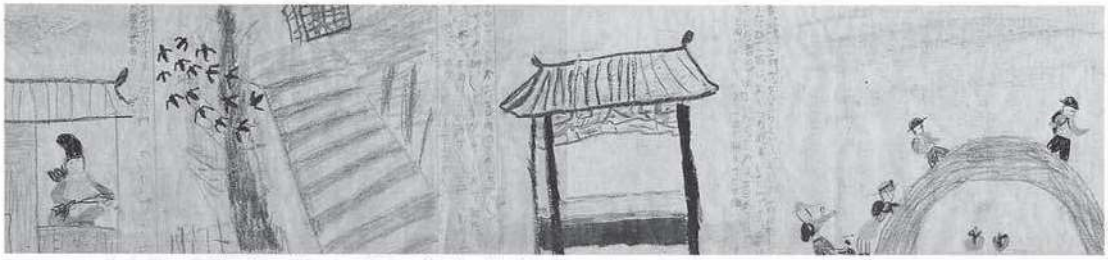
創立以来、初等部2、3年生の夏季生活は校内での宿泊行事だった。1942年（昭和17)、新宿まで空襲が迫ったこの時期にも夏季生活は行われていた。

19回生は4年生になった翌年の夏、千倉での臨海生活も行なっている。

■遠足・見学旅行

戦時下にもかかわらず見学・旅行・登山・宿泊行事などの伝統はしっかり守られていた。旅行へ行く前には目的地の地理や歴史の予習をし、帰ってくると見学記としてまとめた。

＊3年生（1942年）の鎌倉・江ノ島旅行は鎌倉時代武家文化（歴史）と、海岸の浸食（地理）の総合学習。集合は吉祥寺駅。横須賀線鎌倉駅から歩いて鶴岡八幡宮、鎌倉宮へと、神社に伝わる数々の逸話を辿りながら旧跡を巡る。バスで移動して長谷の大仏を見学の後は江ノ電で江の島へ向かい、海食洞窟を見学している。



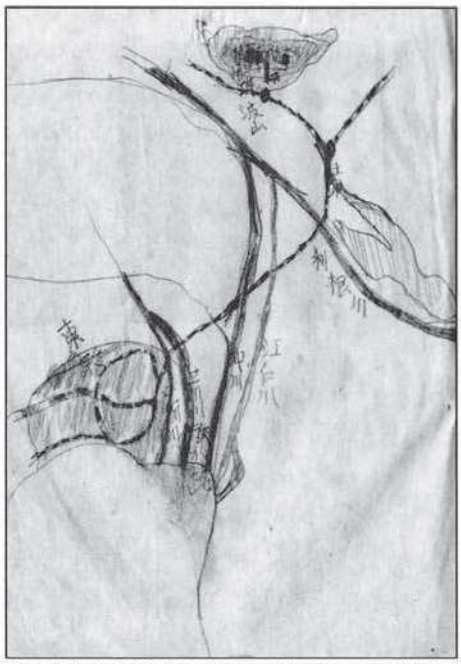
上の絵は見学記録の中から、鶴岡八幡宮の部分

＊4年生（1943年11月18日）の筑波登山記録には、常磐線の車窓から見た様子についても細かく記録されている。

上野から、常磐線に乗って少し行くと鉄橋を渡る。隅田川の鉄橋だ。ここからはずっと鉄橋が多い。

隅田川の次は、荒川放水路だ。その次は中川、江戸川の順だ。僕たちは、汽車の右側に乗ってゐたから手賀沼が見えるはずだが、僕は見えなかった。…中略…

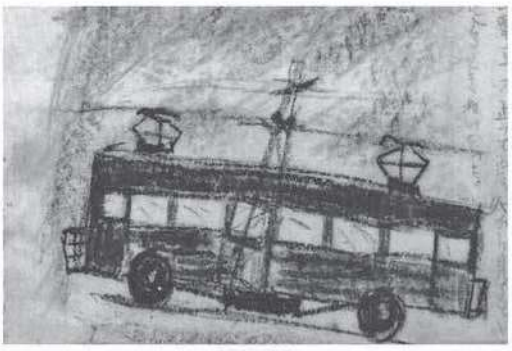
しばらくすると、利根川を渡る。鉄橋は長いが本当の川は少ししかなくて、河原が広い。普通なら船などがたくさん見えるさうだが、あまり見えなかった。川も大水になれば堤防の中にいっぱいになるさうだ。



「筑波登山」記録から、「東京から筑波までの略図」。事前学習がしっかり行われていた。

このように、通過地点の地理を確かめながらの行程であった。この日のコースは、筑波神社～ケーブルカー～

御幸ヶ原～男体山～御幸ヶ原～女体山。お弁当は昼の分だけではなく、夜の分も持参して帰りの土浦駅で食べて帰るという、一日がかりの遠足だった。


登山電車

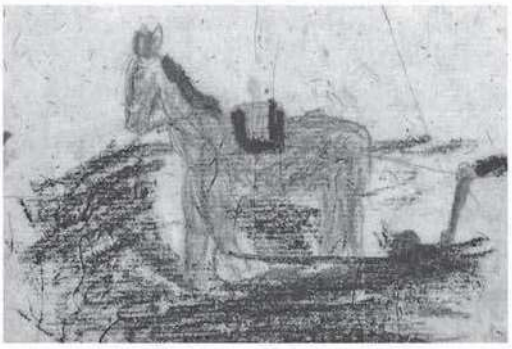
＊5年生（1944年）では箱根へ火山学習。これも創立初期から続く行事のひとつで、現在（2014年）も小学校5年生が伊豆大島で火山学習を行っている。現在の高学年は行事記録を“新聞"にまとめているが、この時代は障子紙状の長い紙に時間を追って絵と文章を記し、くるくると丸めて保存できるようにしていた。登山電車や箱根の山頂からの景色、大涌谷では硫黄がにおい湯気が立ち、ところどころお湯が流れる岩場を歩いたことなど、クレヨンを使った色彩豊かな絵とともに、いきいきと描かれている。

＊6年生（1945年）の関西修学旅行は戦争末期の混乱のため中止になったが、5年生までの見学旅行などは例年通りに実施されていたことがわかる。

■観察日記

1944年（昭和19）、5年生の課題。学校近隣の農家で、作業のようすや稲の生育過程を観察したもの。6月22日から10月15日まで、旅行記録と同じように、巻き紙の右側から左へ向かって、田起こし、田植え、水稲と陸稲の違い、稲の花の観察、病気の稲、と続いている。初夏から秋にかけて継続された観察学習の記録である。昭和19年という時期であっても、身近なものを題材にして、総合的な学習が行われていた。


田植え


馬鍬（まぐわ）を引く馬

＜文責：大草 美紀＞

COLUMN 4

『さかだち学校』奈良 正博（元保護者）

1942年（昭和17）7月、偕成社から出版された『さかだち学校』〈※1〉は、明星学園をモデルに描かれた「童話」の傑作である。

作者田畑修一郎は、1903年（明治36）生まれの作家、小林多喜二と同年に当たる。宇野浩二に師事、井伏鱒二、太宰治、坂口安吾、坪田譲治などの文学者と交流・呼応しながら作品を書き続け、1938年（昭和13）『鳥羽家の子供』が芥川賞候補作に挙げられた。

1943年（昭和18）取材先の盛岡で急逝、享年40だった。彼には、二男一女の子どもがいたが、3人とも明星育ち〈※2〉だった。長男・志摩夫は『さかだち学校』ついて「明星学園とのお付き合いの中から生まれた、修一郎の“心象スケッチ”“自分の夢と明星学園の理想を重ね合わせて描き出した創作”」と語っている。ここで、物語の一部を紹介する。

「私」、山川新吉は、貧乏な画学生、幼くして両親と死別、祖母に育てられた。絵が好きだったので、印刷所で働きながら絵を描きつづけた。…中略…

ある日、新聞にふしぎな広告を見つけた。「教師兼小使を求む。ただし、機械、農作、絵、手工なんでもかまわぬが知識よりも技術のことをほんとうに知っている人。または技術はなくとも働くことの好きな人、正直な人、夢を持つ人。／東京府下　ちんがの村／さかだち学校」というものだった。…中略…

そこで私は、学校を創った紅鱒先生、白熊先生といっしょに子どもたちと生活をともにすることになる。「教えるのではありません。生徒たちといっしょに勉強したり、働いたりするのです」と、紅鱒先生は話された。

美しい牧歌的な風景に包まれた「さかだち学校」の名の由来は、子どもたちが挨拶がわりに跳んでみせる「とんぼ返り＝空中転回」などの体育演技にあった。

紅鱒の養殖や乳牛を飼って乳をしぼり、バターを作る。畑でとれたサツマイモをふかしてバターをぬった「バタサツ」をみんなで食べる。果樹や野菜、薬草、稲などの作物を育て、花を咲かせ、堆肥も泥まみれ汗まみれになって作る。機械工作室には見事な模型飛行機がぎっしり格納されている。それはゴム動力だが、本物そっくりの質感で、飛びっぷりもまた素晴らしい。…中略…

野外でのスケッチに出かけたおり、崖から落ちた生徒の手当てをしてくれた校医の馬越先生は、「この学校を見ているうちに、世の中にはやっぱり楽園というものはあるものだ、と信じるようになりました。大人がそういうものを馬鹿にするのは、それは目と心が汚れているのです。ないと思うのは大人の猿智慧で、信じようとしないからです。求めようとしないからです。信じて求めさえすれば、どこにでも美しいものは現れて来ます」と話してくれた。後略…

1941年（昭和16）10月、赤井先生と女学校生徒が上高地の河童橋で撮った写真に田畑の姿

〈※1〉『さかだち学校』田畑修一郎著
〈※2〉長男・志摩夫（11回生）、長女・光草子（12回生）、次男・夏樹（14回生）

がある。当時彼は親友の経営する宿にこもって、長編小説の執筆中だった。しかし完成した作品は、「時局に合わない」という当局の指令で出版されず、彼はその240枚ほどの原稿をみずから焼いたという。『さかだち学校』はその翌年に出版された。節を曲げず表現する途を童話に求めたとしても、ほとんど戦時色のない、自然のエネルギーに温かくつつまれた夢の学校物語が創られたのは、奇跡のように感じられる。

1939年頃には、逆立ちのできない子どもが一人もいないくらいに明星の小学校では体育がさかんになり、世間からは“逆立ち学校”ともいわれた。

たしかに『さかだち学校』は明星学園をモデルにした創作であるが、「紅鱒先生」が照井猪一郎先生を、「白熊先生」が赤井米吉先生をモデルにしていること、校医の「馬越先生」が実在の医師井草先生（ご子息が11回生）を反映していることなど、描写からすぐ感じとられるところだが、なぜ明星学園が「夢の学校」としてこのようにとらえられたのだろうか？

1935年（昭和10）12月20日発行の明星学園小学部の教育月報『ほしかげ』17号に、作者は、本名田畑修蔵の名で、「感想」と題した一文を書いている。

「子供を預かっていただく前には、私は明星学園については殆ど何も知らなかった。…中略…そして少しずつ明星のよさが解って来た。今では、最初の偶然が子供達のためにどんなによいことであったかを思い、又、今日の困難な世相の中で、子供のためにこんなによい生活を教えられる場所があることが不思議な感じさえするのである。

私はあまり楽しかったとは云えない自分の学校生活から考えて、子供達が大きくなったときどんなにか明星での生活を楽しく思い出すだろうかと、彼らの幸福のために自分も胸のうちが温まる気がする。…中略… 私は明星の特長がますます深くなり、今よりもっと世に知られて欲しいと思う。…中略… 又一つ、世間には不幸な教育しか受けられない子供も沢山いるので、明星の子供達が特殊な空気に慣れて自分の幸福さをおろそかにしないように、願わくば今の質素な空気が失われないように、と思う」。

1941年8月の同人誌『文学草紙』には、「事変っ子」と題した一文が掲載されたが、そこで田畑修一郎は、苦しい家計のもと3人の我が子を明星に通わせる苦労の重さを、照井先生にいかに助けてもらったかを率直に記し深く感謝しつつ、明星学園の「教師たちが子どもの中に入りこみ、子どものことをよく知っているのは驚くばかりだ」と賛嘆している。



田畑修一郎自身が教室の様子、子どもと教師の濃密な生活、教師と父母の辛抱強い交流、父母の協働などを直接体験し、そこで生れた感動や愛が、「子ども一人一人を大切に！」という明星教育のモットーの確信に昇華して、純真・素朴な「理想の学園、夢の学校」のイメージを創り上げたことを、彼自身残した文章が素直に伝えてくれる。（本誌作成にあたり寄稿）

戦時体験は同世代の人と共通するものをもちながらも、人により、時により、状況によって異なっている。ここでは当時荻窪在住の岩﨑さん（1935年2月生まれ、20回生）に、記憶に残る幼い日のことを書いていただいた。

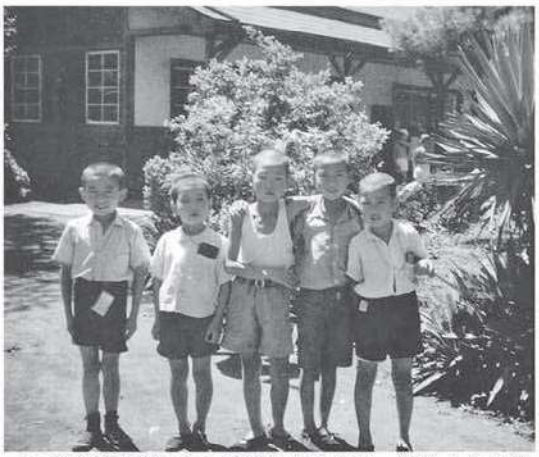
(5) 私の明星学園——岩﨑 建二（20回生）

私は1941年（昭和16）4月、明星学園初等部に入学し、高校を卒業するまでの12年間を過ごした。

父母から聞いた話では、私は学習院に入学すると決まっていたが、母の叔父の小説家、田畑修一郎の強い薦めで明星学園に入ることになった。田畑は、長編小説を執筆するため逗留していた上高地で、女学部を引率して焼岳登山に来ていた赤井先生と話す機会を持ち、胸の内に生まれた明星学園への深い信頼が、私への入学の薦めになったのであろう。

初等部1年生の時に始まった太平洋戦争は、国民に厳しい耐乏生活を強い、5年生で戦争が終わった後も「敗戦」によって市民の社会生活は様々に混迷し、不安定な時代が続いた。したがって私の初等部での日々は、小学生としての勉強の基礎も欠きがちで、警戒警報や空襲警報が出るたびに慌ただしく対応する落ち着きのないものであった。

学園へは、自宅のある荻窪から吉祥寺駅まで省線（現在のＪＲ）に乗り、井の頭公園の中を歩いて通学した。公園の杉並木は昼間も薄暗く、何か怖いような気がした。長橋を渡って「のんき坂」を登り、上に出るとホッとしたものだ。


太平洋戦争開戦の頃。髪型は坊主刈り、革靴から布製の靴となった。

1941年12月、太平洋戦争の開戦を、生徒たちは椅子を並べて聞いた。1年生の担任であった桑原正三先生がのちに出征されるとき、「残念だけれど明日から戦争に行く」と皆の前で挨拶された時の悲しそうな顔を、私は今でも忘れられない。

戦争が一段と激しくなった4年生の時、佐藤加寿輔先生が担任になった。たいへん温かい先生だった。佐藤先生はその頃奥様を亡くされており、普段それぞれが持ってくる弁当の時間に先生も皆と一緒に食べるのだが、おかずを作れなかったのだろう、教室の外で栽培していた唐辛子を取って来てそれをおかずに弁当を食べていた。家に帰ってそのことを話すと、母は大きめの弁当箱に天婦羅を詰め、子どもの足では自転車でも遠い道のりを、荻窪駅北口にある佐藤先生の家まで届けることになった。私は途中で空腹になり、大好きなさつま芋の天婦羅をつまみ食いしてしまい、先生の家にたどり着いた時にはカラカラと音がするほどに減ってしまっていた。佐藤先生はそれを百も承知で「ありがとう、ご苦労さん」と笑いながら私の頭を撫でてくれた。

明星学園は戦中戦後にかけて、子どもたちの体力育成に重点を置いていた。私は大好きな体育に熱中した。特に空転は得意で、体育祭のためにマットを外した土の上で、転回や倒立を繰り返し練習していた。

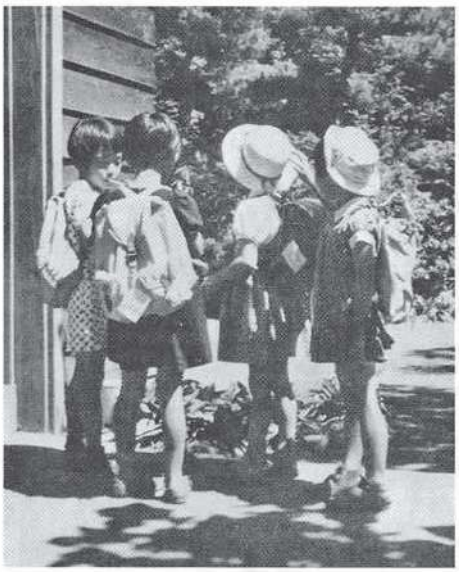
ある日、私は風邪で休んだ翌日の練習で空転し損ない、首の後を打ち気絶してしまった。傍にいた橘先生が「活」を入れて、私は息を吹き返した。すぐに佐藤先生が駆け付け、いきなり私の

頬を叩いた。手の跡が頬に残るほどの強さだった。それは私を心配するあまりに怒った行動で、私にも納得の行く「愛の鞭」であった。

また明星学園は遠足にも力を入れ、学年別に行き先を決めてよく奥多摩方面に出かけていた。佐藤先生はそんな時、生徒を引き連れてしばしば迷子になり、「またゴリちゃんが行方不明だ」といわれたものだ。どこかユーモラスで憎めない先生だった。

何年生のことであったかは忘れてしまったが、近くの多摩川に夜行軍と称して徒歩で行き、リュックに砂を詰め、寝ないで歩いて学校に帰ってきたこともある。

当時の明星学園は、他校と違い、ランドセルの代わりにリュックサックを背負わせていて、よく人から「遠足学校」と言われていた。



また、音楽の時間は、敵国語の「ドレミ」を禁止されていて、一般には「ハニホヘトイロ」と発音させられていたが、明星学園ではおげん先生が「ツェー、デー、エー、エフ、ゲー、アー、ハー」とドイツ語で教えていた。

小学生の私たちの非常時の習慣として、「空を見上げる」という行為があった。昼間の「空襲警報」の時には、青空を悠然と飛ぶ大きな敵機B29に、日本の小さな戦闘機が体当たりをし、飛び散った機体と翼がヒラヒラと光りながら白い雲間に散る場面に出会ったこともある。届きもしない高射砲の弾がB29の下で破裂し、破片が落ちていった。しかし、そんな虚しい空中戦を見ながらも、私たちはレーダーを遮るためにB29からばら撒かれた銀色の紙や、日本の降伏を呼び掛けるチラシを夢中で拾い回った。楽しみの少なかった子どもたちにとっては、とても興味深く、空から降ってくる宝物にも思えたのだ。

警戒警報、空襲警報の回数も次第に増え、勉強どころではない日々が続いていた。

ある日学校に大勢の相撲取りが来て、防空壕を掘ってくれた。学校で空襲警報が鳴ると、その防空壕に椅子を持って避難するのだが、ある時私は椅子を忘れて飛び込んでしまった。椅子を取りに教室に戻ると、近くの航空母艦から発進したのであろう艦載機が、学校周辺にあった軍需工場を銃撃しに来たところだった。人間を見ると機銃掃射をしてきて、私をめがけて、操縦士の顔が見える程の低空から撃ってきた。あの時の操縦士の赤い顔を、私は今でも忘れていない。

私の母は、1945年3月8日、駒沢の病院で亡くなった。姉、兄、私、弟、妹の5人の子どもを抱え、家族の食料を工面する必要から母は買い出しに走り回っていた。我が家は田舎に親類が無かったので、母は自分の着物をリュックに詰めてはその重い荷物を背負い、食料と交換しに出かけなければならなかった。あまり丈夫でなかった母はそうした買い出しの疲労が度重なったこともあり、入退院を繰り返していたが、この日発作を起こし、息を引き取った。母の臨終に立ち会えなかった私は、母の死をどうしても信じることが出来ず、今にも「ただいま」と言って帰って来るような気がしてならなかった。

母が亡くなった2日後の3月10日、東京の下町はアメリカ軍による大規模爆撃によって焼野原になった。東京大空襲である。この日の空襲によって10万人の死者が出た。

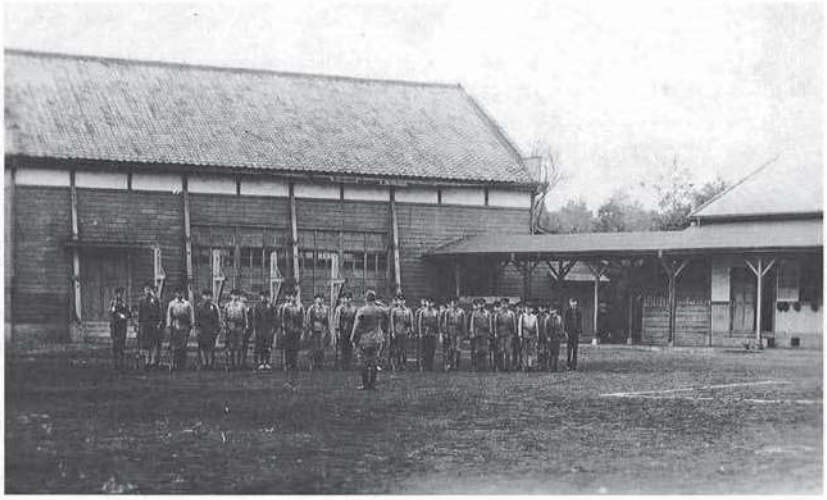
空襲の激しさに、東京を離れて田舎に疎開する生徒も多くなり、学校は寂しくなっていった。配給はあっても、食料はもちろん、何もかも物資が足りなかった。明星でもこの頃、女学校の庭の一部を畑にし、さつま芋を収穫して皆で食べたものだ。

そして広島、長崎へ原爆が投下され、敗戦を迎えた。

終戦の玉音放送の内容は、子どもである私たちには、難しくてよく解らなかった。しかし、「戦争に負けた」そのことだけは、周囲の大人たちの反応で解った。

昭和20年は私にとって2つの大きな衝撃をもたらした。母の死と敗戦だ。打ちひしがれた私は、茫然自失の態であり、記憶も言葉もない状態だった。

しかし、そのような悲しみを抱えながらも、先生方と友人たちの温かさや和やかさの中で、私は思い切り素のままでいられた。明星学園での12年間は、私にとってかけがえのない時代であった。（本誌作成にあたり寄稿）



三鷹市は戦後40年を経て、戦争の記憶が風化しないようにとの願いから、市の事業として体験記を募り本にまとめた。

明星学園の元教師・理事だった原田満寿郎先生は、戦時中の学校日誌や私記を市に提供した。以下はその私記。なお、文中の「時限爆弾」というのは、投下されて一定の時間が経過すると、自動的に爆発するように装置した爆弾のことである。

(6)戦時体験の断片——原田満寿郎

時限爆弾投下の夜半から未明（1945年4月2日）

空襲警報を耳にして学校警備のため家を出た。井の頭御殿山のソロの林の道は、10年来歩みつづけている明星学園への通勤路であるが、灯火管制下、一度森林の中に入ると、全く手さぐりの状態。3～5分で通過するところを20～30分もかかって、やっと牟礼の街道に出て学校にたどりついた。

連日の東京空襲に脅えて用務員が郷里石川県に疎開して留守となった用務員室に、照井猪一郎

初等部長が数日前から24時間、昼夜ここで籠城していた。

職員室の前庭に椅子を出して、照井先生と私は、極度に悪化してきた戦況と日本の将来を語り、最悪の予想こそ口にしなかったが暗黙のうちにこのことを意識して、学校、子どもたち、家族の行方を、静寂な暗闇の中で言葉少なにしんみりと語っている時、B29一機が南西から北東に爆音を残して消え去った。

「サァー」と、何か落としたようにも感じられたが、爆発音もなく火焔もおこらず、B29の去ったあとは再び不気味な静けさで更けていった。

「おかしい、今夜の空襲。B29の動き」と照井先生と話し、空襲警報解除のサイレンを待って、3時ごろ学校を出た。

帰路は、大盛寺前の弁財天堂参道を経て、石段を下り、弁天堂わきの梅林の坂道を上がって吉祥寺の我が家に。

ゲートルしたままのゴロ寝。足が冷えきって眠れず、ウトウトまどろむことしばし。突然の大音響（6時ごろ）に目がさめ、何事かと近所の方と語りながら、音響のあった方向へと急いだ。

公園のプールの南側と、先刻歩いてきた弁財天堂参道に、摺鉢状に作裂した穴が大きな口をあけていた。

3時間前に歩いていたところ。時限爆弾が投下されたその上を歩いていたのだ。「知らぬが仏」とはいうものの、いのち拾いをした幸運を心からかみしめた。…中略…

この日、中学部の「学校日誌」には——

4月2日（月）　晴　午前2時より5時近くまでB29一機または二機ずつ、吉祥寺・三鷹・田無方面へ。時限爆弾。午前5時半ごろより正午ごろまで爆発に驚かされる。午前9時一機、正午一機。

時限爆弾が投下され爆発したところ。——上連雀1丁目、明星学園の北の雑草地、大盛寺前の弁天堂参道、井の頭公園のプール、七井の池の北辺、吉祥寺南町1丁目にかけて。

P 51 の機銃掃射（1945 年 4 月 19 日）

警戒警報があって、空襲のサイレンがまだ鳴らないのに、P51数機が超低空で、女学部の平屋の屋根すれすれに、学園の南、千代田光学工場の隣接の森に向かって機銃掃射。児童たちはすでに防空壕に駆け込んでいた。

職員室から飛び出した私は、4、50メートル先の運動場の防空壕に全力疾走した。走りながらP51の乗組員の顔が見えた。瞬間、グラウンドに突っ伏した。その時、右足首の裏に衝撃を感じた。“やられた！”と逆上し「死」を思った。1、2秒後、痛みのないことを意識し、“助かった！”とホッとした。

衝撃は、機関砲の薬莢（弾丸を発射する筒）が落下して足首に当たったのだった。

P51は、千代田光学の工員たちの避難する群れを見て、掃射したらしい。工員何人かの軽い負傷ですんだのだった。

この日、中学部の「学校日誌」に——4月19日（木）　よく晴れていた。B29三機の飛来とP51二十機からの機銃掃射あり。新校舎に一発当たる、との記事あり。

児童たちはB29の時は壕の入口に顔を出して、銀翼をながめ、「きれいだなあー」の私語もあるが、P51の機銃掃射のダダダ……とピュピュピュ……と一緒になった音、それに低空飛行の烈しい飛行音には、みんな壕の中で息を殺し、歯をくいしばってうずくまっていた。

（原田満寿郎・学園元教師『いま語り伝えたいこと——三鷹戦時下の体験——』三鷹市、1986年）

2　戦時下の高等女学校

昭和3年に生まれた女学部は、戦後の学制改革まで21年間つづいた。しかしながら長引く戦争の影響を受けた後半の7学年は過酷な学生生活を送らざるを得なかった。創立時の精神が教育に生かされ具体化されたのは、ぎりぎり12回生までであった。では、それぞれの年代の女学部はどのような様子だったのか。

「昭和10年代・女学校の5年間」をテーマに、明星学園を応援する「輝け！明星学園」の会〈※1〉は、2008年（平成20）5月18日、小学校・いちょうのホールで第4回講演会を開催し、赤井英乃さんと岸すみれさん〈※2〉に女学部時代の体験を語っていただいた。お二人のお話からは、当時の女子学生のいきいきとした日々がうかがえる。

(1) 昭和10年代の女学校の5年間

1) 学校生活で学んだこと —— 赤井 英乃（8回生）

女学校入学は1935年（昭和10）4月でした。1クラス16名、小学校から上った生徒が9名、他の小学校から入学した人が7名で、卒業まで数人出入りはありましたが、卒業時も16名でした。

クラス担任は佐々木アヤ先生、色白で素敵な方でした。担任といっても小学校のように一日中教室に居られるのではなく、クラスのまとめの必要な時だけ教室に来られました。佐々木先生の教科は数学で、代数・幾何などむずかしい学科でした。

むずかしいのはまず英語、これは青木ふみ先生の指導でした。現在のように英語が日常語のように通用している時代とは異なり、アルファベットから覚えなければなりません。青木先生は大変優しい先生でしたが、授業中の私たちは顔を上げることも出来ないほどコチコチになって先生の言葉を聞いておりました。身動きをしたら指されると思っていましたから。ある冬の日、例によって私たちがコチコチに固まってうつむいておりましたとき、青木先生は「この教室は寒いですね、もっとストーブをお焚きなさい」とおっしゃいました。それほど身じろぎ一つ出来ない英語の授業でした。

国語の副読本の指導は吉田賢次先生でしたが、授業の内容は記憶にありません。国語の授業のほかに吉田先生に教えて頂いたのは、クラシック音楽の解説でした。毎週土曜日と雨の日は、女学生全員が広い理科室に集まり、クラシック音楽のレコード鑑賞をしました。

この時に解説をなさったのが吉田先生で、ベートーヴェン、モーツァルト、シューベルトなど、当時は都内の音楽会でしか聴かれない曲を聴かせてもらいました。これらのレコードは校長室に置かれている蓄音機の横に並べてあり、希望者には1週間位貸出して下さいました。人気のある曲、例えばベートーヴェンのヴァイオリンソナタ、「ロマンス」などは順番待ちするほど希望がありました。このレコードを借りるために、生徒は校長室に自由に出入りしていたのです。校長室は北向きの狭い部屋で、しかも生徒の静養のためのベッドも置いてありました。隣室は職員室でした。


女学校4回生

教科の中で自然に関することは、多湖実輝先生

〈※1〉 卒業生を中心とした、明星学園を応援する会、2006年創設
〈※2〉 赤井英乃（8回生）小・女学校卒業、創立者赤井米吉の三女
岸すみれ（10回生）女学校卒業、新制中・高等学校国語科教諭

にたくさん教えていただきました。女学校1年生の時、1年生16名を多湖先生お一人で引率され、江ノ島へ行きました。江ノ島の海に向いた側は崖になっており、洞穴には弁天様がまつられていました。そこで洞窟の中を観察して戻る時、私たちは貝がら拾いより、道の両側に並んだ土産物店の品を買いあさって、あっちへウロウロ、こっちへウロウロして、大変時間がかかりました。多湖先生は「10分で戻れるところを1時間かかったよ」とおっしゃっていましたが、叱られもせず楽しい遠足でした。

多湖先生には夏季生活の軽井沢沓掛寮でも、たくさん教えていただきました。寮生活の中で、浅間山が活火山であることを話していらっしゃる折も折、「ドカーン」と噴火して、先生は「それ来た！」と真先に駆け出して、山のよく見える所へ、私たちを連れ出して下さいました。噴煙がもくもくと立ち昇って見えました。暫くすると、サーと音がして、「アラ雨が降って来た」と言っていると、雨ではなく、砂でした。砂が雨のように降って来たのです。この砂は今、地面の底から噴き出したのだ、と教えられ感動しました。ある日“鬼押出し”まで観察に出かけた折、多湖先生は一人草むらの中に入って行かれ、何かつまんでいらっしゃる。「あるよ、たくさんあるよ」と先生が楽しそうに食べていらっしゃるのは、野苺でした。私たちが帰ろうとすると「まだまだたくさんあるよ」と草むらの中で楽しそうにしておられました。


軽井沢での多湖先生

教室で教科書を読みながら学ぶ以外に、実習を伴う料理、お割烹は大変愉しみな勉強でした。1年・2年・3年生までは3週に1回、4年・5年生は2週に1回の実習でした。当番は前日に材料の注文に店へ行き、野菜やお肉などを届けてもらいました。当日は3時間目からお割烹室に入り下ごしらえをし、調理を教えていただきました。最初の指導は料理専門の先生がいらっしゃらず、英語の青木ふみ先生に習いました。1年生ではじめての料理は「炒り卵」一品、これを在校生と先生方全員が、裁縫室に座っていただきました。食卓は和裁の裁ち台を並べ、先生方もお座りになられて、皆で味わいました。2回目は、牛ひき肉のそぼろ煮で、大変美味しく、それぞれが、家庭でもよく作ったという評判でした。

お裁縫の指導は、渋谷直先生でした。まずミシンの使い方、簡単なドレスが縫えました。和裁は、浴衣で基本を習い、単衣の着物、羽織、帯も教えていただきました。

一方運動は、竜崎恭子先生にバスケットボールやバレーボールを習い、先生のテキパキとした言動に魅せられて、皆体育の時間を待ち兼ねていました。

音楽は関口典之先生に歌唱の指導を受け、後任の森民樹先生には先生ご自身がオペラを唱われるので、教室でも「君よ知るや南の国」など素敵な歌を教えていただきました。

当時、すでに日中戦争がはじまっていました。戦争で傷ついた兵隊さんの着る病衣（白無地の単衣）を女学生の私たちもあてがわれて、一針一針丁寧に縫いました。当時は“日支事変”と言い、“戦争”とは言いませんでした。

私たちが卒業した1940年（昭和15）3月頃はまだ、おだやかに暮らしておりました。

2）女学校の興味深い先生方の授業――岸 すみれ（10回生）

●多湖実輝先生の「生物」

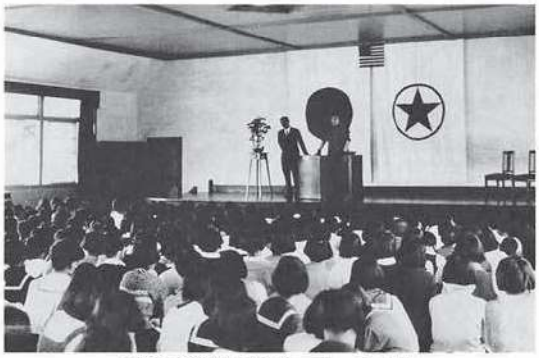
先ずは1937年（昭和12）の春、現在の小・中学校前のバス停広場は一面の菜の花と麦畑。 最初の観察授業で絵に描きとった菜の花は十字花冠植物と覚え、麦の実りの秋は初夏であるところから、この時期を「麦秋」と言い、逆に春のような日和の訪れる頃を「小春」と呼ぶなど、季節を表わす日本語の美しさを、早い時期に教え下さったことが今も有難く懐かしい。当時もうご年配で、やや白い口髭を蓄えていらした先生は、声の大きいことで有名でした。また「明治の文学青年」という風格のエッセイを女学校発行の機関誌『明星』誌上に寄稿されるなど、生物学の大家以外の面も印象に残った。

●赤井米吉先生の「修身」

私たち10回生が入学する前の年の1936年（昭和11）、先生は第7回世界新教育会議へ日本代表として渡英された。帰途、欧米各国の教育視察を経て来られて間もない頃だったから、毎週必ず新鮮なお土産話が展開された。先生の話術の巧みさは、「公民」の杉山清先生と双璧で、非常に魅力的なのだった。私たちはどんなに視野が広がり、多くのものを吸収し得たことか。

後年他校出身の人たちが、「『修身』と『公民』ほど退屈でつまらない授業はなかった」と言うのを耳にした時は、明星では全く正反対だった……と誇らしく思ったものである。

また先生によって初めて日本の教育界に紹介された“ドルトン・プラン”の提唱者、米国の教育学者ミス・ヘレン・パーカーストが来校、先生の通訳で講演の会があったことも、遠い記憶だが残っている。



講堂で講演するパーカースト氏
左は通訳する赤井学園長

各学年に担任の先生が居られたが、赤井先生は全生徒の一人ひとりをよく把握してくださっていて、少人数だったからでもあろうが直接の面談の時間もあり、私たちは校長先生に受け持たれているような実感があった。

●金子金治郎先生の「国語」

たった2年間だったのに、先生との絆が強かったのに驚くことが多々ある。以前から研鑽を重ねておられた成果の「連歌の研究」により、後年“学士院賞”受賞の功績を残された方で、当時から生徒たちの尊敬を得ておられた。

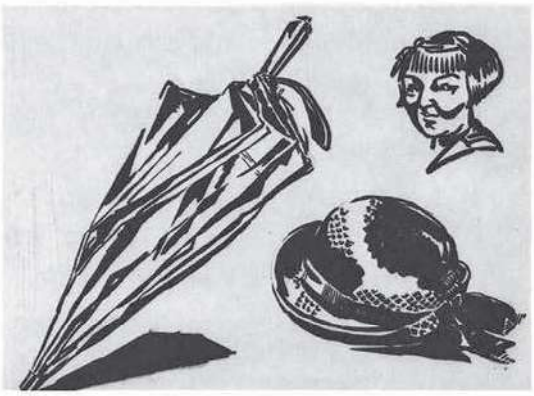
私たちが1年の学年末のこと、先生から提案があった。新学年から『花屋日記』ともう1冊（覚えていない）のどちらを読もうか決めておこうとのこと。内容も判らないというのに私たちは勝手に、当時少女小説で有名な吉屋信子の『花物語』を連想し、とっさに声を揃えて「ハナヤニッキー！」と叫んだものだ。その結果、2年生（13歳）になって手渡されたのが、意外にも極薄ながら岩波文庫！ 実はもう、それだけで感動的だった時代。急に大人扱いされた気分で、明星ではこういうこともあり得るのだ、と。ただし、頁を開くとそれはまさしく日記ばかりの古文体。「えーっ？」と困惑しつつも毎回読み進んだ末に我々の脳裡にイン・プットされた中身と言えば、「松

尾芭蕉という人は、とにかくおなかをこわしてこわして、それがもとで死んだのだ……」ということだった。俳諧の頂点に立つ人の最期を、多くの門人たちが様々な想いを胸に見守る日々の記録なのだった。

今は、この作品を私たちの学年に選ばれた先生の意図はなに？ の思いと共に、何はともあれ辛抱強く一冊を読み終えたのは、ひとえに先生の力量の賜物と敬服のほかなく、これが古文の世界を覗いた最初の段階であった。

●岩瀬富士雄先生の「美術」

常に新しい体験が出来てワクワクした時間。素描などでも、鉛筆ばかりではなく、竹や割箸などの先を削ったものや筆で、墨汁を含ませて光と陰を表現したり、絵具も既成概念にとらわれることなく、見たまま感じるままの色を置いて行くという描き方。



岩瀬先生指導による、岸すみれさんの素描作品

眼を開かされたおかげで私には生涯の傑作（！？）「丹ちゃんの肖像」が生まれ、さらに4年生（15才）のとき、クラス全員で作り上げた『蕪村句集』という木版画集が現存しており、この二つは今も尚、私にとっては無二のお宝である。特にこの版画集というのは、芭蕉の死後、俳諧の中興の祖とも評された与謝蕪村の作品を、クラスの一人ひとりが一句ずつ与えられ、句の文字と内容にふさわしい絵とを2枚の版木に思い思いに彫り込み、人数分の和紙に刷っては順繰り送りにして製本まで、総て手作りで仕上げたものである。



しかも最終段階の、和綴じの直前に至って初めて私たちは自分の受け持った句は、あの国語の金子先生が選ばれたものだということを知ったのだった。表紙に貼る題名と、目次に当る見出しは、岩瀬先生の手で、“金子金次郎氏撰”と彫られていた。



いったい2教科の先生の間で、どういう話合いがされていたのだろう。芭蕉の終の記を読んだ学年に、2年後さらに蕪村が用意されていたなんて。

それにしてもこの作業は“製作過程”が実によかった。自分の受持った句や絵のほかに、友人たちの句は憶え、構図には触発され、

(元々蕪村は画家として大成した人でもあったから、句にも絵画的・物語的な作が多く、面白い創作の画が沢山添えられた) そして最終的に、それぞれ自分の1冊を仕上げたことが、皆で同時に達成感を味わったことに通じるわけで、“一生分の楽しい授業を受けた”ことの一つに間違いない。

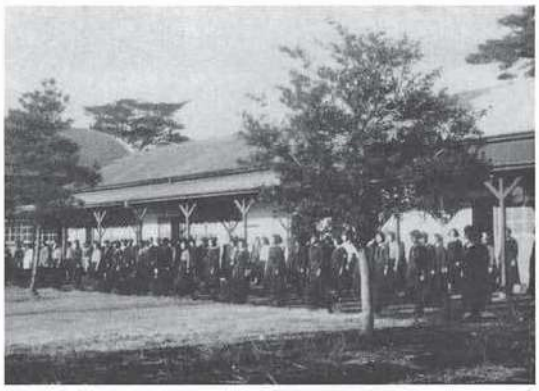
昭和10年代半ば、戦争の影響がしだいに色濃くなってきたこの時期にあっても、明星学園での授業は少人数教育を活かしたユニークさがあり、生徒たちは音楽、演劇、美術、文学なども豊かに与えられた。戦争の足音が聞こえてきた時代の女学部で、創立時からつづく伸びやかさを体験した最後の世代の学校生活はどのようなものであっただろうか。

(2) 文化・芸術に恵まれていた女学部 —— 御喜(北川)晶子(11回生)

●学園の生活

学園生活の一日は朝礼で始まります。5つ並んだ1年から5年までの教室の前庭、芝生と歌壇のある場所で、朝の挨拶、明星学園行進歌を歌い、ラジオ体操をするのが日課でした。

雨天の日は全生徒が広い理科室に集まり、クラシックレコード鑑賞。聴く前の吉田賢次先生の解説が実に楽しみでした。先生の話は、その音楽の生まれた頃の歴史的背景、音楽史の中での意味、作曲者のエピソードなどでした。



●授業について

文部省で決められた正課はすべてありました。少人数の利点で実験のようなこと、また生物の場合は、周辺の自然の中から採集すること、蛙の解剖など楽しいことがたくさんありました。英語は週4時間を5年生まで続けられたのが不思議なことでした。つまり昭和17年度までです。1941年 (昭和16) 12月8日の開戦で敵国語である英語は廃止、または削減のはずでした。明星では2時間だけを正課にし、あと2時間を選択制にしました。英語を選択しない者は、技能科のように美術工芸をしていました。

家庭科の授業で、今調理といわれているのが、大好きな「お割烹」の時間でした。出来上がった料理を先生・生徒全員で、裁縫室に裁縫台をずらーと並べて食べました。上級生になるにつれメニューは豊かになり、ビーフシチュー、グラタン、シュークリームなど、4時限にはそのにおいにわくわくしたものです。

●正課外のもの

音楽、演劇の活動は盛んで、それらの発表会はしばしば講堂で行われ、時には音楽家の演奏もありました。女学校ではコールロココ〈※3〉という合唱団が昭和13年、4·5年生22名でスタートし、のちに3年生以上がメンバーになりました。日比谷公会堂での合唱コンクールにも出場しました。

ロココを創められた音楽の森民樹先生が、1·2年生向けヴァイオリン課外授業も始められまし

〈※3〉『明星の年輪−60年のあゆみ』82頁に詳しく書かれている

た。長くは続きませんでしたが、こんな中から現在もマリ室内楽団を主宰する梶原マリ（黒田眞子）さんも生まれました。ヴァイオリンをご両親に反対され、その傷心ぶりを見かねて赤井先生が楽器を買い与えてくださったのでした。

音楽については、学外へ出かける定期演奏会がありました。

新交響楽団（現N響）の「青少年のための音楽会」へ土曜3時限終了後、日比谷公会堂へ連れて行ってくださいました。

●学校行事について

- ◆ 春：遠足　富士山麓、三つ峠、日光など。
- ◆ 夏：軽井沢杳掛寮の合宿、10日間。
  落葉松林の中の小さな山荘で全校生徒、食事は女の先生方と5年生が作って下さり前庭の木のテーブルで頂きました。先生方のお話をきいたり、楽しい時間でした。遠出は鬼押出し方面、星野温泉、軽井沢など。忘れられない楽しい日々でした。自然についても多く学びました。
- ◆ 秋：美術館へ。日比谷公会堂の場合と同様に土曜日3時限終了後、上野へ。公園でお弁当を食べて、美術館へ入りました。
- ◆ 修学旅行：行き先は日光、東北などでしたが、やがて上高地に定着しました。
  宿　泊／五千尺旅館
  コース／明神池、梓川、徳の沢方面、前穂高の麓の雪渓、焼岳登山
  日　程／11回生は昭和17年6月8日～10日
  ※これが女学部で実施された最後の修学旅行となりました。

●特筆すべきこと。教室内本棚

1年から5年まで並んでいる教室の後壁面に本棚がありました。それぞれの学年に合わせた本がギッシリと並べてあり、教室で読んでも、持ち帰って読んでもよいというものです。持ち帰る時はノートに記名するだけ。本の選択は先生方ですが、日本文学と外国文学の割合や興味の持たせ方が見事なものだったと、大人になって思いました。2年で第一次『クマのプーさん』ブレーク。英国のファンタジーに魅了されたものでした。3年で翻訳ものが急速に増え、シェークスピア、トルストイ、そして内外の詩も。

4年でドイツ、ロシア、フランスの文学作品が増え、私は4年の夏休みに読んだトルストイ『戦争と平和』を忘れることができません。強い印象でした。5年でドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』を見つけて、感動したものでした。

このシステムは学校に図書館がなかったためのものでしたが、図書館よりむしろはるかに強い影響力を生徒に与えたことはたしかです。私たちは何十年経っても、友だちとその話題で楽しい時間を持つことが出来るのですから。

その当時、学校では講演会がしばしばあり、保護者の文学者とか政治家とかが来てくださったものでした。この講演会に前述の『クマのプーさん』の翻訳者・石井桃子さんが来てくださったことがあります。彼女はこの本棚の図書館に深く感動されました。明星の昭和の少女たちは、これらの本の中で夢を見、育っていったのでしょう。

上田八一郎先生の書かれたものの中に「松を梅に変性せしむることは出来ないように、教師も

生徒の個性を変えることは出来ない。個性に、良い方向を与えしむることにあるのみ」とありました。明星学園で少女期をすごした私たちは、勉強することで学問を身につけ、同時に実に豊かな情感を与えられて、日々を送っていたと思います。（本誌作成にあたり寄稿）

御喜さんたち11回生が卒業して3か月後の1943年（昭和18）6月、政府は「学徒戦時動員体制確立要綱」を決定。これ以降、軍需工場への動員が本格化した。

明星学園では翌年4月から、女学校3・4・5年生が学業を放棄して軍需生産に従事した。

11回生の花園のような学校生活にくらべて、次に紹介する馬場さんたち13回生の体験は、わずか2学年ちがうだけなのに余りに過酷なものであった。

(3)戦時下の女学生の生活 ——学徒動員を中心に —— 馬場(志村)洋子(13回生)

私は、1940年（昭和15)、明星学園女学部に入学しました。小学校は公立です。1927年（昭和2)、横浜で生まれた私は、5歳のとき吉祥寺へ越してきました。父の勤務先が昭和恐慌で倒産したので、未だ開発途上の吉祥寺駅前通り（現サンロード）で古本屋を始めたのです。

当時、文化人と呼ばれる方々が来店なさり賑やかでした。赤井米吉先生、武者小路実篤先生のお宅へ本の買入れに伺うとき、私もついて行きました。

そのようなご縁もあって、兄が1938年（昭和13）中学部へ、私が40年女学部へ入学しました。1学年1クラスで小さな学校でした。

入学式の日から、上級生と芝生に座ってお話ししたり、担任の青木ふみ先生も静かで優しくて、明星大好きになりました。

初めての教科・英語は青木先生でした。先生は最初の授業のとき、「私の英語はロンドンの標準語です」とおっしゃいました。その通りで、発音ははっきりと分かり易く、リーダーの勉強に入ってからは毎時間、ディクテーションの小テストをして下さいましたので、スペルを覚えるのによかったと思います。

音楽の末綱卓一先生も忘れられない先生です。愛称はドンちゃん。明星の卒業生で、みんなが大好きな先生でした。コールユーブンゲン、コンコーネなどの後、教科書にないコーラス曲を沢山教えていただきました。「美しく青きドナウ」「流浪の民」「ハレルヤコーラス」「グローリア」「アイーダ」「タンホイザー」他にもクラシックを数多く歌わせていただき幸せでした。

喜びが急に悲しみに変わりました。私たちが2年生のとき、突然、急病でお亡くなりになったのです。お葬式で私たちは号泣いたしました。

演劇部の活動も楽しかったです。恩地先生ご指導で、クラスメート、小平さん創作・脚色の「森の仲間」「ミンチン先生」「ポールとヴィルジニー」等、放課後、暗くなるまで稽古しました。バスケットも盛んで、学年対抗試合をやりました。

3年生から「割烹」の授業が加わり、育ち盛りの私たちは、美味しいお料理がいただけるので待ち遠しい時間でした。お米は配給制度になっていましたので、各自1合ずつ持ち寄りました。最初の授業は、お味噌汁、桜御飯と他に1品でした。裁縫室で先生方と一緒にいただくお食事は格別の味でした。

秋の運動会は初等部、中学部、女学部合同でいたしました。兄は運動神経抜群で走るのが速く、「シムコ（私の愛称）のお兄さまー」の声援を受け嬉しそうでした。

3年生になると、戦争の影響が少しずつ出てきました。

1931年（昭和6）の満州事変から、1937年（昭和12）日中戦争、1941年（昭和16）太平洋戦争とエスカレートし、1945年（昭和20）8月15日まで15年も戦争が続きました。

戦争が拡大するなか国内では「国民総動員法」「大政翼賛会」「大日本産業報国会」など、国民生活は戦争協力体制にしっかり組み込まれていきました。

女学部3年生になった1943年（昭和18）からは勤労奉仕が義務になり、井の頭公園、宮城（皇居）の清掃などいたしました。

1944年（昭和19）1月から3月まで、近くの三鷹航空社員寮の掃除、社員の昼食作り等も加わり、授業を受ける時間は少なくなっていきました。

体操の時間に薙刀が加わり、デンマーク体操も教えていただきました。音楽の授業で「海行かば」を歌い、初等部の体育では「八日は大詔奉戴日」の歌を太鼓に合わせて歌い、体操をしておりました。

英語の授業は禁止されましたが、青木先生は勤労動員されるまでは教えて下さいました。

「勤労動員」とは？　少し説明します。

「戦争の拡大に伴って、戦況はきびしさを増していった。青年、壮年男子の大部分が軍人や軍属として徴用されて戦場へ行き、大学生の徴兵延期の停止（学徒出陣）や徴兵年齢の一年繰り下げ（19歳から）も実施された。そのため国内の労働力不足は決定的なものとなり、『国内必要勤労対策』として『女子挺身勤労令』『学徒勤労令』が閣議決定された。現在の中学生・高校生に当たる生徒たちも、戦力の一端をになう貴重な人的資源『産業戦士』としてお国のために働かされたのである。これを『勤労動員』という」。〈※4〉

1944年（昭和19）4月、私たちに勤労動員が発令されました。女学部3・4・5年生は立川の昭和飛行機株式会社で、飛行機作りを命令されました。14歳から16歳の少女たちです。5、6名ずつ班を作り班長（社員）指導で、エアーポンプでタイヤに空気を入れる。電気ドリルでの穴開け、リベット打ち。私は、電気コテでのハンダ付けを、またダグラス輸送機や九九式艦上爆撃機等の製図をした班もありました。作業中に空襲警報が鳴り、慌てて防空壕へ走ったり、間に合わないときは作業台の下に潜り、身をひそめ、警報の解除を祈ったりしました。

昭和飛行機は中央線立川から青梅線に乗り換え、昭和前（現在のＪＲ昭島駅）下車、すぐのところにありました。立川飛行場の広い敷地のはずれでしょうか。飛行場側の電車の窓は、ベニヤ板で塞がれており、軍事機密だということが解りました。

昭和飛行機への動員学級は数が多く、青梅線はダイヤが少なかったため、毎朝の通勤は恐怖を感じるほどの混雑でした。息が止まりそうになることもあり、女学生の悲鳴をきかない日はありませんでした。

当時は食糧事情が日増しに逼迫し、お米の配給も滞りがちで、食べ延ばすため、重湯にお米粒が少し浮いている、というような食事しかできなかったのです。育ち盛りの女学生、中学生が栄養失調状態で、お国のために飛行機を作っていたのです。当然、カルシウム不足で骨も脆くなっておりました。車内で女学生（明星ではないのですが）が肋骨を折りました。私たちは「明日は我が身」と不安でした。

数日後、ついに来るべきものがきました。やはり明星ではないのですが、女学生が圧死する……という最悪の事態になったのです。

明星学園では私たちのために、すばらしいご配慮を下さいました。青梅線昭和前から下り二つ

〈※4〉『Story日本の歴史』日本史教育研究会（山川出版社、2000年2月）

か三つ目の駅でしたか、福生に急拵えの寮を用意して下さったのです。

恩地邦郎先生は動員に付き添っていらしたので、事情をご存知で、逆コースでの通勤を学校に提案して下さいました。福生の農家を探し歩き、木村さんの家の蚕室を借りて下さいました。2階建ての大きな蚕部屋は、1階が食堂、2階が寝室と分けられ、仕切りのない広い部屋には畳が敷き詰められました。私も入寮しましたが、体を悪くしたため長くは居られませんでした。食事は？入浴は？　等の記憶がはっきりしません。毎週土曜日に家に帰り、月曜日に寮に戻る生活でしたので、洗濯物は家に持ち帰り、入浴は家ですませる、ということだったと思います。火の気がなくて冬の寒さはこたえました。私たちは大勢で車座になり、足を投げ出し、沢山の脚が集まったところへ、掛け布団を何枚も掛けて「ワー、人間コタツだー」とはしゃぎました。

一番不安だったことは、情報が殆どないということでした。新聞もラジオもない。電話もない。福生は空襲を免れましたが、夜、寮の庭で、立川方面の空が真っ赤になっているのを見たとき、みんな同じ心配をしたと思います。「中央線が空襲されている！」私たちは不安で泣きそうでした。

工場の朝礼のとき、各学校の出席率が公表されるようになり、明星は殆ど最下位でした。「お国のため」とか、「一億一心」「進め火の玉」「撃ちてし止まん」「米英撃滅」「欲しがりません、勝つまでは」などの標語が巷にあふれていました。

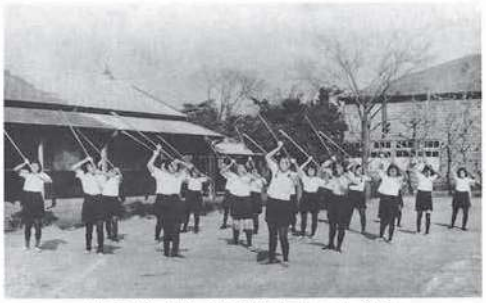
私は脚気がひどくなり、心臓脚気になりましたが、毎日工場の診療所で注射を打ち、なんとか続けておりました。

恩地先生が声をかけて下さったのは、そんなときでした。「顔色が良くないよ。無理をしないで休みなさい。こんな時代は、自分の体は自分で守らなければネ」とおっしゃって下さいました。出席率最下位の理由がわかりました。先生たちは非国民のそしりを恐れず、私たちを守って下さったのです。

1945年（昭和20）3月21日、学校で卒業式。1年下の14回生も繰り上げで、一緒の卒業式でした。卒業後も専攻科と呼ばれ、敗戦の日まで動員は続きました。3月31日まで昭和飛行機、4月からは学校工場として再び三鷹航空の仕事を教室でいたしました。私は4月に疎開をしましたので、8月15日、敗戦の日の明星学園の様子はわかりません。戦争の影響を強く受けた私たちは、学力不足のまま大好きな明星学園とお別れいたしました。

創立90周年は戦後69年です。戦争中、日本の教育が子どもたちのためのものでなくなり、戦時体制にすべて支配されたことを怖ろしく思います。戦後はその反省から出発したはずですが、年月と共に政治の介入が酷くなり、全国の良心的な先生方が苦しんでいます。

大正デモクラシーの中で創立した明星学園は、教育の自由を標榜し、先生方は生徒たちの成長のために研究・実践を重ねていらっしゃいます。私は動員中に、先生が国策に抗って生徒を守って下さったことに感謝し、二人の娘の教育もお願いしました。明星の先生方は、自由な教育の実践者として、日本の教育に明かりを灯していただきたい。後輩の皆様が学ぶ喜びを奪われるような時代にならないよう祈ります。（本誌作成にあたり寄稿）



薙刀（なぎなた）訓練をする女学生

3 戦時下の中学校

戦時中、中学校以上の男子校には陸軍の現役将校が教官として配属され、軍事教練を行うことが義務付けられていた。明星の教育を目の仇にして赴任した配属将校を、明星教育のよき理解者、上田先生信奉者に変身させた話は今も卒業生の間に語り継がれている。

次の名物教師の一人が語る上田校長の魅力も味わい深いものがあろう。

杉山先生は旧制中学校、高等女学校の公民、新制高校の社会科の教諭。

(1)私が明星で習ったこと —— 杉山 清(元教諭)

明星は、私においては、教えた学校であるよりも習った学校のような気がする。それほどに明星は私にアット・ホームの雰囲気を与えてくれる。上田先生が、「杉山君は明星へ気晴らしに来ている。君が来ると喧しくて仕事が出来ん」と、時に笑われるが、まさにその通りであろう。しかし、これは私にだけの現象ではない。昔、軍事教練はなやかなりし頃、ある教官が、「自分は某学校に行くときには、家の玄関を出る時から威張って行くが、明星に来るときには、どうも精神がなごやかすぎて困る。遠くの方から『先生お早う』などと声をかけられると、『なぜ敬礼せんか』と怒鳴ることを忘れて、つい『よう、お早う』と答えてしまう」と話したことがある。事実、この教官先生、やかましい例の査閲〈※5〉の時、査閲官から「気を付けの姿勢がなっておらん、訓練が足りん、眼がきょろきょろしとる」と叱られたが、昼食懇談の時、査閲官に向かって、「お叱りの通りですが、明星の子どもは可愛くて可愛くて自分の子どもに向かって号令を掛けるようでどうもうまく行かんです、ハァ」とおそるおそる釈明陳弁これ努めたのであった。ここらに明星の雰囲気があり、それが私に気晴らし講義をさせる所以(ゆえん)であるかもしれぬ。

大体、こういう雰囲気は、もともと上田先生ご自身の創られたものと、先生には諦めていただきたい。というのは、昔、上田先生は、8時になっても朝礼の鐘を鳴らせなかったからである。鐘を持ったお爺さんを引き連れて、今も同じに有るか無しかの校門に仁王立ち——というのには少ししなびているが——背伸びして、「爺さん待て、今頃来るやつは、朝飯噛み噛み飛び出して来る。鐘にあわてて走ると、胃が悪くなる。横腹が痛くなる。まあちょっと待ってやれ、……もう橋まで来た、もういいだろう」カランカランカラン……。これが先生の毎朝の人情行事であった。このヒューマニズムに非常にしばしば救われた愛すべき先生もあった。

しかし、この人情を甘くみてはならぬ。今日、甘く見ている学生も無きにしもあらずと、気晴らし先生かも知れぬが、私は正直なところ嘆きもし怒りもしている。爺さんの逸話を書こう。この爺さん。若い頃は出生地界隈の利け者(きものもの)で、誰一人立ち向かう者もなく若いときから怖いと思った人は一人もなかったという。その爺さんが「上田先生だけは怖くて怖くてたまらん。腹の底まで見透かされているようで」、と何回となく私に述懐した。「わっしゃ、年をとって先生に救われて、初めて真人間にかえれたから、明星のためなら命をも捨てるが、字が読めなくちゃ明星の小使として相済まんから勉強する」と文字通り何十かの手習いを始めたのである。そして、時に「先生、アルゼンチンなんてどこにあるんですかね」などと、



旧制中学校の生徒たち(15回生)

〈※5〉 査閲—学校の軍事教練の成績を査閲官が実地に調査すること。


玉川上水の新橋にて（15回生）

私は、新聞の字を聞かれるほかに新聞に出る地理をも尋ねられることがしばしばあった。

学生諸君、ここだ。上田先生は「親しむべくして馴れるべからざる人だ」。明星のヒューマニズムに、逸脱のない節度を欲しいとつくづく思う。

話を戻して鐘のことに関連させるが、昔、明星には朝礼の鐘はあっても、時間の始まりや終わりを催促する鐘はなかった。鐘のない学校はおそらく日本中に一つもあるまい。その鐘のない学校も、明治以来の自由競争教育に新たに再吟味を加えて、天下に真の自由教育の警鐘を打ち鳴らしたのだから愉快じゃないか。当時は「何年生はじまり」と漢文の先生が教室の入口で怒鳴ると、角笛に応ずる子羊のように、学生たちがぞろぞろ集まって来るのであった。鐘のない学校の真の鐘は「人間は英・国・数の点数で割り切れるものではない。人間には必ず一つ優れた所がある。それに信頼し、それを伸ばせばよい。それが教育だ」というのである。明星卒業生で、このプリンシプルによって救われ、そして社会的に立派に活躍している人々が沢山ある。ありがたいことと思う。

以上のようなことは、明星が私に直接教えたものではないが、私が昭和7年の12月1日から、明星で身にしみて習ったところのものである。

そうそう、もう一つある。昔の明星では、喧嘩をして負けた子どもは教員室に逃げ込んで、入口の戸をガランピシャンと閉めて中から押さえていた。「開けろ」という外からのの声に、「馬鹿野郎、開けるかい」と頑張って押さえていた、ところが、声の主は喧嘩の相手であっても、入ろうとする主が先生で、ダーとなる悲喜劇も沢山あったが、どうせ、教員室に逃げ込む方が弱虫なのだから、入口の戸は必ず強虫によってこじあけられる。そして、強虫弱虫は、必ず、今もある円卓子の周りを2、3回ぐるぐるやる。追いつめられて、いよいよかなわないとなると、弱虫は上田先生の身辺にピタリと寄り添う。上田先生は、寄りそわれてよろめきながら、にこやかに煙草をポカリポカリ。それで喧嘩はゲームセット。

こういったような雰囲気は、未だに明星に残っている。最も伝統に忠実な者が最も厳しい改革者でありうる。最も保守的なものが最も進歩的でありうる、という言葉もある。明星の伝統や精神はどこまでも生かし、かつ新しい時代にふさわしく伸ばしたいものである。

最後に、これは淋しく習ったもの。皮肉や、ひがみと思わずに、虚心に同情をもって考えてもらいたい。それは、昔、私が父母との会合で感じたことである。子どもが非常に優良であると、インテリの母親は「それは、私の生んだ子ですもの」と言いたげである。子どもがちょっとぐれたり親の意――その中にはヴァニティもある――にそぐわなくなると、「友達が悪い、学校が駄目だ」と言いたげである。教育と個性の問題は、勿論この私には分かろうはずもないが、右のような淋しさに真に耐えうるもの、汝の名は先生なり、という気がしてならない。その淋しさに一生耐える者こそ、「先生といわれる程の馬鹿」であろうが，そういう馬鹿がいないとまた世の中は困るものらしい。明星はそういう馬鹿者の集まりであるかも知れぬ。

我々先生は、淋しくても、人間には必ず一つ良いところがある、という確信をもって、それを育むことを考えよう。父母の皆様には、先生の淋しさに同情していただきたい。そして学生諸君には、明星のヒューマニズムに、もっともっと気品あらしめていただきたい。

（文芸部『明星　25周年記念』1949年11月15日　所収）

(2)『星雲時代』から ——中学校生活の断面——

旧制中学校の校友会誌『星雲時代』は、中学校の国語科教師・内野健児の指導によって、1932年（昭和7）11月に創刊された（P.74参照）。

「創刊の辞」は高らかに謳っている。

「此処は僕らの談話室であり、討論場であり、鍛練場であり、文苑であり、詩歌の花園である。星雲時代の我若人の群は此処から出発して、やがて成長した数々の麗しい星の群となって世界の空に輝き出るであろう」。

しかし、もともと「校友」同士が課外活動、親睦、厚生などを行う団体である校友会は、高等女学校ともども、1942年（昭和17）から「皇国民ノ基礎的修練」を目的とする「報国団」として再編成され、国土防衛と勤労作業にも動員されることになった。クラブの名称も「××部」から「××班」に変わった。それでも『星雲時代』の発行はつづけられた。

ここではまず、20号（1935年3月）から50号（1943年3月）までに掲載された記事のなかから、中学校の主な行事、クラブ活動、催物等を拾い出してみる。

- 遠足・旅行・登山——馬頭山、秋川渓谷、村山・山口貯水池、狭山丘陵、長瀞、富士山、大島、陣馬山、大菩薩峠
- 見学——慶應義塾大学病院、東京慈恵会医科大学、貴族院議院、裁判所、朝日新聞社、中央郵便局、東京中央電信局、製氷工場、三鷹内燃機工場
- クラブ活動——演劇部、音楽部、美術部、科学部、陸上競技、籠球、剣道、銃剣
- 催物——演劇発表会、音楽会、美術展、科学展、レコードコンサート、写真展
- 教練査閲

つぎに、上記のもののなかから、いくつかの記事を紹介する。

①東京慈恵会医科大学見学 5年・林 春二（7回生） 38号：1938年（昭和13）7月

6月24日、第5学年及び第3学年は多湖実輝・越智忠良両先生に引率されて、愛宕山下の慈恵医大の正門にはいった。階上の1室に通された。多人数で狭い室にはいったので少々蒸し暑かった。

西丸先生が出て来られて、30分間ぐらい「血液及び循環器」について話され、次いで、「えらい学者はすべて、ちょっとした事柄に細心の注意を払い、熱心と“See and Do”で物事を考え、世界文化に貢献してきたと思われます」という意味の話をされ、「諸君はもっと科学に興味を持たれ、大いに世界文化に貢献せられんことを望みます」と講話された。

次に僕達は標本室に導かれた。室にはいって、そこの先生に陳列してある骨格や人体の部分部分について説明を聞いた。また、姿勢の正悪を骨格の標本によって注意された。標本室を出て、上の実験室に行き、顕微鏡で「蛙の毛細管」「赤血球・白血球」「腎臓の一部」や「蛙の心臓の鼓動」を見た。帰りには雨が降り出していた。

②レコードコンサート 5年・市田 嵩（7回生） 38号：1938年（昭和13）7月

曲目：「セレナーデ」「水上の音楽」「王宮の花火の音楽」「道化師」

そういう曲目が、この日（6月18日）の2、3日前に掲示された。吉田賢次先生や末綱卓一先生の解説のあることも、誰かに聞かされて知っていた。

吉田先生の解説が始まる。ちょっとそこらに転がっている本には出ていそうもない、いわゆる「通」のそれである。感心して聞いているうちにレコードが始められた。

ヘンデルの組曲「水上の音楽」、ハミルトンハァティ指揮、ロンドンフィルハーモニックオーケストラ。典雅な音は教室に流れ始めた。

後ろの方に内野先生その他スゲエ4・5年生が5、6人、今までさわいでいたあの蛮声とエネルギーを何処に置き忘れたのか、目をつぶったり外を眺めながら神妙に聴いている。

4面のレコードが終わりを告げると、また吉田先生のお話が始まる。そしてまたヘンデルの音楽が始められる。この間、恩地君は針をかえたりネジを巻いたり世話をする。

この集まりに尽力した平林君も座を前の方に占めて熱心に聴いている。これがすむと、2、3人室を出て行った。

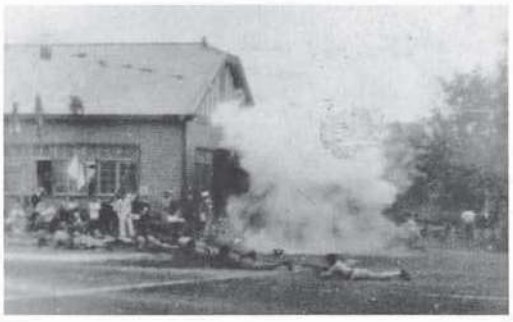
吉田先生のお話が始まった。お話が終わると、モーツァルトの「セレナーデ」、ブルノワルター指揮が始まる。

音楽の先生を真中に、皆で譜を指す先生の指を追いながら、流麗な「小夜曲」のメロディーをたどるうちに、2枚のレコードは終わってしまった。

その次に末綱先生の御説明があり、歌劇「道化師」が始まった。その力動的な歌曲にびっくりしているうちに、この日のコンサートは大団円となった。

レコードは吉田先生提供4枚、恩地君提供2枚、末綱先生提供2枚。ごく少人数で聴くことが出来た。

③教練査閲について　5年・田畑 志摩夫（11回生）　49号：1942年（昭和17）11月



今年度の査閲は10月27日、秋晴れの下に第2部隊より一本中佐殿を迎えて挙行された。

午前8時過ぎ、赤井先生の号令一下、台上の査閲官殿に一斉に注目。かくして査閲の幕は切って落とされた。続いて閲兵および分列行進。5年生は年功を積んでいる故か良好と批評されたが、4年以下には多少の注意があった。女学部と小学部の代表も中学部の後に続いて閲兵分列を行ったが、査閲官が大層よく出来たと言われたので、判っているが皆一応憤慨。それから、3、4年生の行軍部隊は直ちに出発し、1年生より各学年ごとに教練開始。

我々5年生は一番初めの種目が銃剣術直突訓練であったので、助教になる者大いに張り切ってすぐ裸になり、防具を着けて待機して居ったところが、査閲官殿のお目に止まり、上着を羽織って居れと言われ恐縮してしまった。

さて、1・2・3・4年の教練であるが、私はあいにく5年生であるから、4年以下のことはよく覚えていない。後略…

④科学班報にかえて　5年・大木 保太郎（11回生）　50号：1943年（昭和18）2月

昭和17年度校友会は発展的解消をなし、新たに全国の学校と繋がりを持つ報国団として誕生しました。これにつれて我が科学会も名称を「明星学園中学校報国団科学班」と改めて、報国団の一部門として新しく出発しました。

我が科学会は昭和12年、支那事変突発の直後、多湖先生の御援助により、川上元郎、霜田光一、清水育夫君等、数名の者によって創設され、それより6年間、科学展覧会、模型電車運転会、昆

虫採集会、天体観測会、その他工場及び博物館の見学会を行って来ました。

今年は、科学班としての第1年目なので、大いに頑張って盛んにしようと思いましたけれど、機械部を受け持って下さる藤原君の病気の為に計画が狂って、自然科学部が数度の採集会を開いただけで、秋の科学展も小さなものになってしまった。

我々は、新しい言葉で「科学する心」、明星古来の言葉で「独創的精神」を持って科学についての研究を行って行く。

⑤報国団の活動——学徒銃剣道大会　5年・増田 隆雄（11回生）　50号：1943年（昭和18）2月

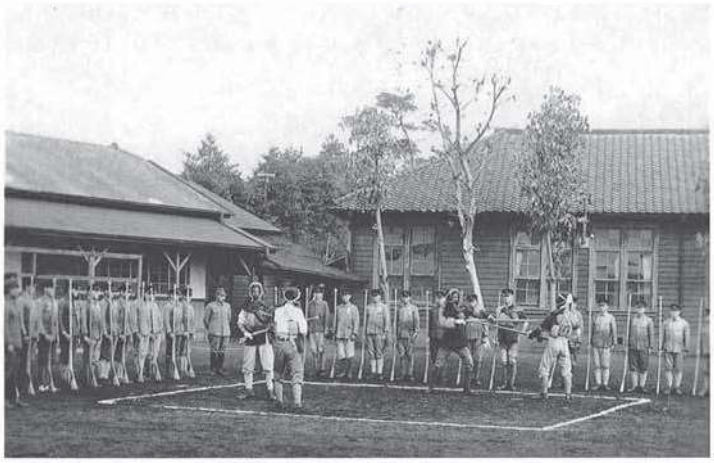
11月22日、我々は学徒銃剣道大会参加のため、陸軍戸山学校へ行った。この日、天は晴れ雲一片もないが、冷たい風が吹いて我々の膚の底まで沁み込んで来る。

午前9時半、大東亜戦争下若い学徒の意気も高らかに熱と技との敢闘譜、いよいよ大会は開かれた。突如と起こる戸山軍楽隊の音。おお、それは陸軍行進曲！　益々我々の血潮は高まって来た。国旗掲揚、国民儀礼に次いで会長松村府知事の式辞、読売新聞高橋副社長の挨拶、豊島近衛師団長の祝辞、昨年度の優勝校湘南中学、埼玉中学、大泉師範から優勝旗返還があって、直ちに各班の競技を開始した。

［このとき軍楽隊の「君が代」吹奏のうちに、畏くも賀陽宮殿下には、会場へ御台臨遊ばれた。感激した我々は、一層奮励を以て大君のため醜の御楯となって我が身を捧げ奉らんという気が起こって来た］…中略…

我々明星隊第1班（試合）、第2班（仮標刺突）、第3班（空間刺突）は、互いにしっかりやろうぜと言って分かれた。キャーッ、ワァーッ、エーッ、オーッ等の掛け声が次第に起って来た。私の属していた我が明星隊第2班の第1回予選試合の相手校は第二市立中学校。まず小谷、野崎、増田、林、志村の順序で、突撃精神烈々燃えて力いっぱい戦った結果、ついに3対2、もう少しのところで敗れた。

かくて我々の3回の総点は7点であった。惜しくも1点の差で決勝出場資格は得ることは出来なかった。初出ながらも我々は精いっぱい戦ったことをせめてもの満足とした。しかし尊い幾多の経験を得たことを忘れてはならない。後略…



中学時代に出会った1冊の本が人生の一里塚となることがある。ファーブルの『昆虫記』に出会った（しかも訳者はあの大杉栄）金澤少年は、やがて京都大学農学部で森林生態学を学び、卒業後は教育者として環境教育に大きく貢献することになる。

(3) 戦時下の旧制中学――読書体験を中心に――　金澤 康（13回生）

〈1〉 学園での生活

――入試面接で――

1940年（昭和15）3月。入試面接――“どうやって、この学校まで来ましたか？”に私は答えていた。「帝都線の井の頭公園駅で降り、池を右に見ながら歩いて、桜の木の角を南に向かって5、6分。家が少なくなったくぬぎ林の道を通り抜けると、玉川上水の流れる土手に出ました。上水の橋を渡って左手に校舎がありました」。

私の話に耳を傾けていた面接の先生の、眼鏡の奥が笑っていた。それは“こんなに細かく正確に説明する珍しい生徒”と認めた笑顔であったようだ。この先生こそ、全ての生徒の敬愛の念を一身に集めておられた上田八一郎校長であった。

――中学校生活――

当時の中学部は正門側のほかは塀も垣根も無く、野原や畠に囲まれた広い校庭の一隅に、木造校舎が2棟、渡り廊下を隔てて建てられていた。この校庭では毎朝、全校生徒160余名（1学年30余名の5学年生徒数）が集まって朝礼が行われ、校長先生が5分足らずの珠玉を磨くような話をされるのが常であった。

〈2〉 日米開戦後の学園

――戦争と平和と――

1941年（昭和16）12月8日。遂に来たるべきものがやって来た。日米開戦である。先生方の殆どは戦争に進んで加担はしなかったが、「修身」の時間に、真珠湾攻撃の成果（？）を誇り快哉を叫んだ先生には驚かされたものだ。それというのも、私には親譲りの平和思想が深く根付いていたからである。

私の父、金澤常雄は内村鑑三の七人の高弟の一人で、日支事変（日中戦争）以来、平和思想の故に何度か警視庁に呼び出され、日刊個人雑誌の発行停止処分を受けていた。

翌年から3年生にも配属将校による教練が課され、私どもはゲートルを巻き銃を持って参加することとなった。匍匐（ほふく）練習や駆け足行進など単純苛酷な訓練であった。ただ、2学期から配属されたS中尉は、訓練もそこそこに生徒を校庭に坐らせ、「戦争は善か悪か」、「人生とは何ぞや」など、話を続けることがしばしばであった。（私共は分からないながら、何か大事なことを教えられたものだった。後にこの配属将校がアッツ島で「玉砕」したとの報を受けた）。

――勤労奉仕始まる――

4年生の2学期から勤労奉仕が課せられ、午前の授業を早めに終え、昼食後に福生（ふっさ）にある海軍航空技術研究所（現在、米国の横田基地）に派遣された。私共は研究所構内の松林を伐り倒し、根を掘り出して松根油を抽出する労働を続ける日々であった。夕刻、仕事を終えて戦闘帽にゲートルをつけ、整列して研究所の正門を出る時、これが戦争の一部か（？）との想いを深くしていた。

一方、家に帰れば隣組が中心になり東京空襲に備えて防空訓練に励んでいた。夜になると電球を黒い布で蔽った弱光のもと、無性に本が読みたくなったものである。やがて、5年生は"勤労動員"され休校となった。

〈3〉 読書体験

——読書の世界——

私の中学生活に実りある新しい世界——読書の世界が現われたのは、2年生の終わり頃であった。その扉を開いてくれたのは級友、多賀求君と、渥美昭夫君である。とくに多賀君は"歩く百科事典"といわれた博識の持ち主で、岩波文庫を愛読し、毎週月曜日になると、渥美君と二人で「先週は＊印5つ読んだ」「僕は4つだが、とてもよかった」と競い合っていた（当時、岩波文庫はおおよそ100頁で＊印が1つ記してあった）。

やがて、私もその会話の中に入り、多賀君のすすめる本を図書室に入って借り出すようになった。そこには、それまでに見たこともない宝がおさめられていたのである。

それはちょうど、濃い霧に包まれた山中で、急に霧のヴェールが取り払われると、忽然として青い空や足許のお花畠が見え始め、それと共に、「自分」の存在がはっきりと確認される。そんな経験に似たもの。ある驚きをもって迎える新しい「世界」と「自己」との出合いを味わったものである。

——面白い本・友となる本——

魅力ある本にもいろいろあるが、はじめに興味をひく面白い本について記したい。『家なき子』『地下鉄サム』『怪盗ルパン』など読み進むうちに、『モンテ・クリスト伯』に出合った。ナポレオン時代に、無実の罪で14年間をシャトー・ディフの地下牢に入れられたエドモン・ダンテスが、獄中の老法師の助けで牢を脱出し、やがて富豪モンテ・クリスト伯に変身し、かつて罪をきせた人々に巧みな復讐を遂げてゆく……。

手に汗握るストーリーの進行に胸躍らせたものだった。小説の終わりに記された言葉が鮮やかに甦る。「待て、しかして希望せよ」と。

つぎに、友となり心の糧となる本がある。『絵のない絵本』『ナンセン伝』『ジャン・クリストフ』……。その中で出会ったのは『デミアン』（高橋健二訳）。その始めにある文「すべての人間の生活は自己自身への道であり、一つの道の試みである。ついに人間になれない者もいるが、各人は人間に向かっての自然の一投である」。分からないながらも、ヘルマン・ヘッセの「内なる自己」への脱皮の思いが、しばらく私をとらえて離さなかった。

——ファーブルの『昆虫記』——

中学生活の最後の年、学校の図書室で入手した待望の書は大杉栄訳『ファーブル昆虫記』の第一巻だった。今、手もとにない原本の代わりに、私の抜粋帖から書き出しの部分を記してみよう。「みんなは熱情のこもった知識欲を湧き立たせる若者たちだった。サンザシの縁どる小道を歩いていくと、もうハナムグリが甘い香りに酔っていた。私たちはスカラベ・サクレ（こがねむし）がもう高原に現れて、古代エジプト人にとって地球の像であった糞玉をころがしているかどうか見に行ったのだ……」。

糞虫が神聖虫（サクレ）だとは。そして糞玉に産卵する巧妙な習性をはじめ、虫たちの素晴らしい生態が

緻密な観察と野外での実験によって、つぎつぎと明らかにされてゆく。狩人蜂、かまきり、毒ぐも等の昆虫たち。

あの実物大、図版入りの部厚い書籍（ザラ紙であったためか）。その中から当時（戦後であるが）ワラ半紙を綴じて抜き書きした2冊の雑記帖。その終りに下手な字で記してある――「THE END 一月三十一日、感激を以て」と。

この本によって私は、冒険小説やＳＦに見られる面白さとはまた異なる、真に知的な面白さを体験することが出来たのである。（本誌作成にあたり寄稿）

松本唯史さんは16回生。旧制中学校の卒業生であり、またのちに新制となった明星学園高校では英語科教師として後進の指導に当たった。太平洋戦争の終焉を中学3年生のときに迎えた松本さんの経験もまた、現在の同年代の少年からは想像もできないものであった。

(4)戦時下の中学生の生活 ―― 学徒動員を中心に ――　　松本 唯史(16回生)

私は16回生、83歳。明星学園の創立90年史に70年以上前のことを書けとの注文。記憶というものの頼りなさを痛感させられ、引き受けたことを後悔しながら書いたものなので、記憶違いも多々あると思う。そのことをご承知の上でお読みいただきたい。

私は旧制中学校の5年間を明星学園で学んだ。学んだと言っても、まともに授業を受けたのは、1、4、5年生の3年間だけで、2年から3年の夏の第2次世界大戦の終戦までは、勤労動員で学校ではなく工場に通った。

変な話だが、私は、自分が何故明星学園を受験したのかを知らなかった。父は「横浜事件」という出版社、編集者等への弾圧事件で逮捕されて不在だったし、母は父が留置されている横浜刑務所に妹を背に通ったり、まだ3歳だった上の妹の世話その他で多忙を極めていて、私の進学まで手が回らなかったのだろう。恐らく刑務所の父が母を通して、父が日本評論社の前に勤めていた平凡社の社長、下中彌三郎氏に明星への紹介を依頼したのである。

その頃、私たち一家は西荻窪の家から、新宿で空襲に遭い亡くなった画家柳瀬正夢氏の牟礼のアトリエに移り住んでいた。西荻窪より少しは安全だと思ったからだろう。徒歩で通学できることを理由に私は明星学園旧制中学校を受験した。入学試験は内申書と面接だけで、上田八一郎校長が「キミは何が好きか」と訊かれたので、ついうっかり「メジロとタナゴ釣りです」と答えると「小鳥は可愛くてエエ、釣りは楽しいナ。はい、よろしい」と、たったそれだけで面接は終わりで、入学は許可された。

1年の時の授業は思っていたより楽しかった。英語は上田校長、国語は船山博彦先生、歴史は堀淳二先生、数学は田口武丸先生その他で、それぞれ個性的な授業だった。それに軍事教練なるものがあった。風貌からガマさんと呼ばれていた中年の陸軍将校と、そして途中から立川の刀剣屋の息子だという若い陸軍将校に兵隊ごっこを習ったが、両人ともかなり不熱心で、軍事教練は苦にならなかった。

中学に入って私には気になることがひとつあった。それは、父親がいないのに、他校よりいくらか高いという学費をどうやって納めるのだろうということであった。母にそれを尋ねると、絶対に他言無用とクギをさされた上で話してくれた。それによると、後に東京芸術大学の学長もされた小塚新一郎氏が、当時日独文化協会という団体の会長をされていて、父と親しくしており、

父をその協会の職員ということにして給料を出してくれているから心配するなと言われ、ほっとしたことを憶えている。

しかし楽しかった中学生活は1年で中断された。正確な月日は憶えていないが、2年になったある日から授業がなくなり、工場で働かされることになった。日本無線の子会社、舶用無線が動員先であった。舶用無線は船舶用無線機を作る会社で、恐らく軍艦や輸送船の無線機を作っていたのだろう。当時すでに成人男子はかなりの年齢のものまで徴兵され、工場の人手不足が深刻で、中学生までも使わざるを得なかったのだ。中央線三鷹駅北口から徒歩5、6分のところだったが、今そのあたりはすっかり変わってしまっていて、舶用無線の工場がどこにあったかわからない。恐らく、現在横河電機のあるあたりだったと思うが、自信はない。

私たちは月曜から土曜まで毎日、軍服色の上着を着て、長ズボンにゲートルを巻き、鉄兜を背に工場に出勤した。登校するのは何曜日だったか忘れたが、たった半日、それも軍事教練をやるだけだった。工場では、工作機械、組立て、配線の3部門に別れて働いたが、私は手先が器用そうだからという理由で配線部に入った。組み立て部から回ってくる無線機の裏側に、色とりどりのエンパイアチューブに通された銅線をハンダ付けする作業だった。無線のことなど全く知らない私は、ただひたすら工員が教えてくれる通りに作業した。監督という立場だっただろう、船山先生が毎日工場へ来られていた。

工場での座りっぱなしの仕事は辛かったが、雑穀入りとはいえ、米の昼食が食べられた事と、給料が貰えたのは嬉しかった。いくらだったか忘れたが、学校から貯金という名目でいくらか天引きされても、日曜に浅草へ大好きな軽演劇を見に行くには充分だった。4才になっていた妹の手を引いて、浅草の金龍館、常盤座などへ、シミキンこと清水金一のアチャラカ芝居をよく見に行った。しかしそれも2年生の10月頃までだった。

その頃日本の敗色は濃厚で、B29というアメリカの、当時とすれば大型爆撃機の空襲で、東京の中心部は半ば焼野原になりつつあったからだ。三鷹も、舶用無線近くの飛行機会社の工場は空爆を受け破壊されていた。舶用無線はまだ無事だったが、仕事の量が減りだし、3年生になるあたりで全く無くなってしまった。材料が無くなったからだ。その後私たちがやらされた仕事は、さすがに文字に残すのを控えざるを得ないような汚れ仕事もあったが、まずは防空壕掘りだった。会社の敷地内では危険だということで、徒歩で10分程離れた雑木林の中に壕を掘った。どの位の広さで深さのものを幾つ掘ったかは、とても辛かったのに憶えていない。アメリカ空軍の爆撃は日増しに激しくなり、警戒警報が鳴ると防空壕に走り、空襲警報になると壕の中でうずくまっていた。それが毎日数回あるので、工場と防空壕の往復が私たちの仕事になった。

夏も近づいたある日、悲しい出来事が起こった。グラマンというずんぐりした小型戦闘機の機銃掃射で友人の一人が負傷したのである。すでに2百万を越す戦死者が出ていたので、この事件を当局は無視した。その後、彼がどうなったか、私は知らない。

8月に入ると、日本の敗戦は決定的だったのに、軍と当局の大本営発表では、まだ本土決戦になるから竹槍でアメリカ軍を迎え撃てなどと言っていた。しかし8月6日に広島に、8月9日に長崎に原子爆弾が投下され、その間の8月8日にソ連が対日宣戦布告をするに至り、日本政府もポツダム宣言を受諾せざるを得なくなり、8月14日に無条件降伏をした。8月15日の昼、私たちは船山先生と一緒に舶用無線内の広場に立ち、玉音放送なるものを聞いた。抑揚の強い天皇の言葉は、13歳の私には殆ど理解できなかった。耐えられない程の暑さで苦しかったことだけが記憶に残っている。

戦争が終わり、明星学園に戻った私たち3年生は、4年生、5年生と一緒に教練で使った小銃その他の武器をアメリカ軍に引き渡すため揃えたり、工場の倉庫にでもなっていたためだろう、油だらけの教室の掃除などをする日が続いた。授業はあったのかどうか、よく憶えていない。

しかし4年生になると楽しかった。1年生の時の授業に加えて、横川武先生の美術、戸塚（富永）三郎先生の音楽、多湖実輝先生の生物が面白かった。木造平屋建ての旧校舎の教員室の南側の校庭をテニス愛好者で掘り返し、ローラーをかけ、石灰でラインを引き、軟式テニスに打ち込んだ。恩地先生、横川武・尚先生兄弟、そして掘先生までも生徒と一緒にテニスを楽しんだ。5年生になってもテニス中心の楽しい生活は続いたが、ここで難問が待っていた。旧制から新制に移行するので、旧制5年で卒業するか、新制高校の3年に入るかという選択を迫られたのだ。迷った挙句5年で卒業することに決め、受験勉強らしきことをしながらもテニスは続けていた。そして翌年3月、私の明星生活は終わった。（本誌作成にあたり寄稿）



旧制中学校の軍事教練（富士演習場）

第３部　戦後教育改革期と明星

1945年(昭和20)～1970年代



校庭でフォークダンス（1959年）

第1章　新制度による再出発

1 「6・3・3制」と男女共学

(1)敗戦直後の教育再建

混迷のなかで

天皇がラジオを通じて戦争終結を告げた1945年（昭和20）8月15日。日本国民の多くが茫然自失し、虚脱状態に陥っていたその日、鈴木貫太郎内閣が総辞職した。2日後の8月17日、皇族の東久邇宮稔彦王（ひがしくにのみやなるひこおう）が内閣を組織し、文部大臣には前田多門が就任した。

1887年（明治14）大阪に生まれた前田多門は、立教中学在学時にキリスト教に入信し、第一高等学校時代に新渡戸稲造と出会い、その思想と人格に傾倒し多大な影響を受けていた。大学卒業後は内務官僚の道を歩み、やがてジュネーブの国際労働機関（ＩＬＯ）に日本政府代表として駐在した。帰国後は自由主義路線の朝日新聞に入社し、論説委員として軍部や右翼勢力の拡大を食い止めようとした。しかし、軍部に詰め寄られて新聞社を辞し、ニューヨークに新設された日本文化会館の館長を務めた。かつて師・新渡戸稲造は「われ、日米の橋とならん」と言ったが、遅蒔きながら自分も「日米の橋」となることを決意したのである。だが、志なかばで太平洋戦争が始まり、交換船で帰国しなければならなかった。

1945年5月25日の東京大空襲で東中野の家を焼かれ、軽井沢の山荘に移り住んでいた前田は、敗戦の詔勅を聞き、廃墟の上にどんな日本を打ち建てるか、果たして新日本が打ち建てられ得るかを考えていた。そんな矢先の文部大臣就任であった。「敗戦は悲劇だが、今後、軍国主義の圧迫のないところで、予て、新渡戸先生の言って居られたような教育の理想を行えるなら、働き甲斐もある」と考えて、決意したのであった。〈※1〉

連合国軍はまだ日本進駐を始めていなかった。

前田文相は8月27日の夕刻、ラジオを通じて、子どもたちに、「さあ、新しい元気で、いい体、知恵を磨きましょう」と語った。〈※2〉「知恵を磨くためにはまずなんでもよく調べて見ることが大切です。先生に教わったことをそのまま暗記するという事ではなく、常に頭を働かせて『ハテナ、その訳は』と自分で一応考えて見て解けないところはよく調べ本当に自分の考えを練るのが知恵を磨く道であります」と呼びかけた。

ここで、「ハテナ、その訳は」と自分で考えることが大切だと述べているが、後日の回顧のなかで、これは「私の独創ではなく、恩師新渡戸稲造先生が常にのべられていたところであった」と言い、「ハテナ」と考える訓練が日本の教育に最も欠けていたと指摘している。

「青年学徒に告ぐ」

3日後の8月30日、連合国軍最高司令官マッカーサーが神奈川県の厚木飛行場に到着した。さらに3日後の9月2日、アメリカ戦艦ミズーリ号の艦上で降伏文書の調印が行われた。

この時期、日本の教育改革に関する占領軍の指令はまだ何ひとつ出されていない。

降伏文書の調印から1週間後の9月9日、前田文相は「青年学徒に告ぐ」という放送を行った。〈※1〉

まず、「私は、あなた方の先輩の一人として、吾々、先輩のやり方が悪かったために、諸君を、この窮状に陥れたことにつき、深く自責の念に駆られ、御詫びをしなければならないのであります」と詫びた。そして、青年学徒の戦時中における働きに感謝するとともに、敗戦後の新時代に

〈※1〉前田多門『山荘静思』（羽田書店、1947年）
〈※2〉前田文部大臣「少国民へ、さあ新しい元気で」、朝日新聞（1945年8月28日）

生きる日本人としての心構えを説いた。
「新時代とは、如何なる時代であるか。日本の往く道はただ一つ。武器を持たぬかわりに、文化で行く、教養で行く、ほんとうの道義日本として、世界の進展に寄与する。…中略…それには、真の教育を、益々盛んにしなければならないのであります」。「要するに、上っ面で物を考えるということは、一切やめたい。一番排斥すべきものは世の中の流行不流行で動いて、本当に各自が自分の心で、自分の責任で、物を考え抜かぬことである。…中略…全体主義が流行する時は、それに軽々しく便乗し、また、今度のような時代になると、何の反省も思慮もなく、漫然、歯の浮いたような皮相の米英追随主義に早変わりするという如き軽薄なことでは、到底、立派な国民にはなれない。連合国側と雖も、心ある者は、さような不見識の追随を喜ばぬであろう。どうか、心の奥で、物を考えるようにありたい」。

それにつけても、第一に考えねばならぬことは、国体の護持である。第二に、戦いに負けても、捨ててはならないのは自尊心である。第三に、科学を重んじることである。第四に、宗教的情操を養うことである。そして、最後に、「真理を愛する心、それが、学徒の心でなくてはならぬ」と述べ、つぎのように結んでいる。
「親愛なる学徒諸君、本来、元気に充ちた諸君の心身も、永い戦争の苦労と、最近の精神的衝撃で、さぞかし、疲れた割り切れない気持ちにあるであろうと御察しする。どうか、幾重にも、健康に気をつけ、心境を整理し、捲土重来、日本新使命のため邁進して頂きたい。日本今後の隆替は、全く、諸君の双肩に懸っているのである」。

この放送をするに至った事情は、前田多門の長女で精神医学者、文部大臣の父を援けて私設秘書をつとめた神谷美恵子の日記に、つぎのように記されている。
「9月3日（月） 昨夜父と二人で上野まで電車に乗ったとき、学生たちがいかにも疲れきっている様子をみて、父は、これはどうしても元気づけなくてはいけないと思ったと言う。それで昨夜2時まで『青年学徒に告ぐ』という原稿を書いていた」。〈※3〉

赤井米吉と前田多門

連合国軍の日本占領からまもない1945年（昭和20）10月の初め、赤井米吉は連合国軍最高司令官総司令部（ＧＨＱ）の教育顧問となった。その経緯は、ＧＨＱ当局から前田多門文相に、日本の教育改革を行う上で自由に懇談できる人物を何人か推薦してほしいという要望があり、前田が赤井をその一人として推薦したからであった。

赤井米吉と前田多門は旧知の間柄であった。赤井は成城時代に、前田の長男・陽一（のち東大教授・フランス文学）を教えたことがあり、二男の寿雄は明星の旧制中学年を卒業していた（10回生）。また、金澤義一（10回生）・康（13回生）兄弟は前田の甥（妹の子）であった。

家族ぐるみの交誼を始めた1930年頃、前田は東京朝日新聞社の論説委員として健筆をふるっていた。赤井は自由教育運動の指導者のひとりとして活動していた。前田は赤井より3歳の年長だが、ともにまだ40代なかばの壮年。熱心なキリスト教信者として自己を形成してきた二人であった。そして明治生まれのリベラリストらしく、天皇を崇拝し、教育勅語を教育の根本理念とする考えをも共有していた。

〈※3〉『神谷美恵子著作集 第6巻』（みすず書房、1981年）

「日本的民主主義」

1945年10月に入り、東久邇宮内閣に代わって、幣原喜重郎（しではらきじゅうろう）を首班とする内閣が成立した。文部大臣には前田多門が留任した。

この時期になって、ＧＨＱは日本政府に対し、つぎつぎに指令を出してきた。マッカーサーは憲法の自由主義化と人権確保の5大改革を指示し、そのなかで婦人の解放、労働組合の育成、秘密審問司法制度の撤廃、経済機構の民主化と並べて、教育の民主化をあげた。

ついで、ＧＨＱは、つぎのような「日本教育制度に対する管理政策」を示した。

(1) 軍国主義的および極端な国家主義的イデオロギーの普及を禁止し、軍事教育・教練を全廃すること。

(2) 議会政治、国際平和、個人の権威の思想、集会・言論・信教の自由など基本的人権の思想に合致する諸概念の教授と実践の確立を奨励すること。

11月から12月にかけての帝国議会で、前田文相は「教育の方針」について繰り返し語っている。要約すれば、まず軍国主義と極端な国家主義を教育面から払拭し、「個性の完成」を教育の目的として、さらに「個性の完成」を通して国家社会に奉仕する。また、極端な画一主義を教育界から除去し、健全な民主主義、自由主義を育成する、というものであった。

前田文相は「日本流のデモクラシー」、「日本的民主主義」による平和文化国家の建設を考えていた。天皇を上にいただき、民衆が政治に関与し、政治は「権力」というよりはむしろ「奉仕」に重きを置く。これが日本的民主主義の特長であると述べ、「国体護持」の理念を明確にした。

しかし、国内には一方で、天皇制批判や天皇の戦争責任論も高まっていた。そして、前田文相のような日本的民主主義の主張は天皇制の地金をかくす「ごまかしの論理」だという批判も強かった。

その年、1945年（昭和20）も押し詰まった12月23日、前田多門は幣原首相から突然の呼び出しを受け、天皇が自らの神格を否定するいわゆる「人間宣言」の草案を書くようにと言われ、執筆にとりかかった。〈※4〉この詔書は翌1946年（昭和21）1月1日に発表され、その日の新聞は第1面で大きく報道した。

時代は大きく動いていた。焦土の街に映画『そよかぜ』の主題歌、並木路子が歌う「リンゴの唄」が流れていたが、非情の風も冷たかった。

天皇の「人間宣言」から3日後の1月4日、ＧＨＱが発した軍国主義者等の公職追放の指令によって、前田多門は文部大臣の職を退いた。敗戦直後、「敗戦は悲劇だが、今後、軍国主義の圧迫のないところで、予て、新渡戸先生の言って居られたような教育の理想が行えるなら、働き甲斐もある」と思い、文部大臣に就任して5カ月間の在任であった。

(2) 教育基本法と6･3･3制

アメリカ教育使節団報告書

連合国軍総司令部（ＧＨＱ）は、戦後日本の教育改革を進めるために、1946年（昭和21）1月、すぐれた専門家によって構成する教育使節団の派遣を本国に要請した。その結果、46年3月の初旬、ジョージ・Ｄ・ストッダード（イリノイ大学名誉総長、ニューヨーク州教育長官）を団長とする27名の教育使節団が来日した。

〈※4〉前田多門「『人間宣言』のうちそと」『文芸春秋』(1962年3月号)

いっぽう、ＧＨＱは日本政府に対しても、教育家の委員会を組織して使節団に協力することを要請した。日本側の委員は、南原繁（東京帝国大学総長）を委員長とする官民の教育家29名で構成された。

アメリカ教育使節団は、滞在約1カ月の間に、ＧＨＱに置かれた民間情報教育局（ＣＩＥ）の係官、日本側の教育家委員会、各界の日本人などから可能なかぎりの知識を得た。また、さまざまなタイプの学校を訪問し、教育の実際も見た。その上で、協議の結果を報告書にまとめ、3月末にマッカーサーに提出した。（教育使節団は1950年にも来日したので、両者を第1次、第2次と区別している。）

ＧＨＱは、4月中旬に報告書を公表し、日本の新しい教育制度の重要な指針となる勧告であることを明らかにした。

使節団はまず、自分たちの基本的立場をつぎのように述べる。

「われわれは、決して征服者の精神をもって来たのではなく、すべての人間の内部に、自由と、個人的・社会的成長とに対する測り知れない潜在的欲求があると信ずる、経験ある教育者として来たのである。…中略…われわれの最大の希望は子供たちにある。子供たちは、まさに未来の重みを支えているのであるから、重苦しい過去の因襲に抑圧されるようなことがあってはならない。だから、われわれは、悪い教育を止めさせるばかりでなく、できる限り、子供の心情を硬化させることなくその精神を啓発する教師や学校を準備し、教育の機会均等を計るようにするつもりである。後略…」〈※5〉

そして、日本の教育の特徴として、極端に中央集権化された教育制度、複線型の学校体系、画一的な詰め込み教育、無条件の服従や自己犠牲などをあげ、「民主主義の生活に適応した教育制度は、個人の価値と尊厳との認識をその基本とするであろう。それは、個人の能力と適性に応じて、教育の機会を与えるよう組織されるであろう」という。

具体的な内容として、学校制度では、男女共学を基礎とする6年制の小学校の上に、男女共学・3年制の義務制下級中学校を、その上にやはり3年制の男女共学・無月謝・無選別の上級中学校を設けることを勧めた。高等教育については、大学の門戸開放と女性への機会均等を実現することが強調されていた。また、教育行政の地方分権化を提言し、都道府県ごとに政治的に独立の、一般投票によって選ばれた代表市民によって構成される教育委員会が設置されることも勧告した。

この報告書によって、その後の教育改革の方向が示されることとなった。しかし、この文書が連合国軍による占領という特異な政治的状況下で作成されたという事情から、戦後の教育改革が連合国（実質はアメリカ）から押しつけられたとみるのは一面的だろう。

なぜなら、まず、日本側の教育家委員会は、使節団が来日する前に会議を開いて検討を重ね、改革上の諸問題についての意見を報告書の形にまとめて準備していた。使節団との会合で、双方が意見を十分に述べ合い、共感したり、一致する見解がいくつもあった。とくに6・3・3制の教育制度の創出には日本側の意見が大きく貢献した。

また、アメリカ教育使節団も、日本の教育についてよく研究し、一定の理解を共有していたことである。中野光氏はつぎのように述べている。

「使節団のメンバーは1920年代から30年代にかけて日本の教育に展開された国際的新教育運動につながる学校改革への自主的な運動についても一定の理解を有していた。1919年（大正8）デューイが来日したこと、Ｈ・パーカーストらが三度来日し、明星学園園長・赤井米吉らと親しく研究交流をしたことなども知っていたものと思われる」。〈※6〉

〈※5〉 村井実 全訳·解説『アメリカ教育使節団報告書』（講談社学術文庫、1970年）
〈※6〉 中野光「国際的視点からみた日本の学校改革」『学校改造の史的原像―「大正自由教育」の系譜をたどって―』（黎明書房、2008年）

赤井米吉の教職追放

敗戦の翌年、1946年の11月3日。その日は明治天皇の誕生を祝う「明治節」〈※7〉であった。また、この日、新生日本の柱となる日本国憲法が公布され、各地で新憲法公布記念祝賀会が盛大に挙行された。前田前文相の推薦によって連合国軍総司令部の教育顧問となり、教育再建のために尽力していた赤井米吉にとっても、この日は大いに慶賀すべき日であった。

しかし、この慶事は一夜にして暗転した。翌11月4日、赤井はＧＨＱではなく、教育職員適格審査委員会において不適格と判定され、いっさいの教職から追放されたのである。前田多門が公職追放の身になってから10カ月後のことであった。

赤井が教職追放とされた判定理由書にはつぎのように書かれていた。

「戦時中時局に迎合して著書『新世界観と教育』等に於て所謂日本的世界観に基く教育を強調し、全体主義的教育理論を鼓吹した。

共同省令別表第1第1項第6号後段の規定に該当

教育職員適格審査委員長　山崎匡輔」

赤井をよく識る中野光氏は、「赤井が教職から追放されるという処置が妥当であったかどうかは、立場によって見解が分かれるだろう」と書いている。「追放令そのもの、あるいはそれに誰が該当し、誰がまぬがれたか、ということをみてみても、そこには矛盾があった。おそらく赤井にも異議があったにちがいない。占領軍内部でも赤井を識るものの中で助命運動をする動きがあったようである。しかし、赤井はあえて異議を申立てず、いさぎよく教職から去った」。〈※8〉

彼の良心は自分の過去をいつわることができなかったのである。（第1部25頁参照）

教育基本法の制定

政府は、アメリカ教育使節団に協力するために組織された日本教育家委員会を、1946年8月、教育刷新委員会へ改組し（委員長安倍能成（よしなり）。47年11月から南原繁）、教育改革を進めさせた。教育刷新委員会のメンバーは、日本教育家委員会の委員だった人のほかに、各界で活躍する知識人をも加えていたが、その主流は自由主義的知識人であった。教育刷新委員会は、精力的に活動をつづけ、重要な改革提案を何回も行った。これらの改革提案にもとづいて、教育基本法や学校教育法などを中心とする教育関係法が整備された。

1947年3月に公布された教育基本法は、国の教育に関する基本的な理念と原則とを、戦前のように天皇の名において詔勅の形式によって確定するのではなく、国民の代表によって構成される国会において法律として定められた。また、法律の形式としては異例の前文を置き、あえて日本国憲法の理念を踏まえて教育の理念を宣言した。「異例」の前文を掲載しておく。

> われらは、さきに、日本国憲法を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである。
>
> われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない。
>
> ここに日本国憲法の精神に則り、教育の目的を明示して、新しい日本の教育の基本を確立するため、この法律を制定する。

〈※7〉明治天皇の誕生日で1927年（昭和2）制定、1948年（昭和23）廃止。

〈※8〉「教育者としての赤井米吉」赤井米吉『愛と理性の教育』（平凡社、1964年）所収

教育基本法が「占領下」という特殊な状況で制定されたことから、自主制定性に疑問をはさむ意見がある。しかし、それは妥当な見解とはいえない。立法を推進した田中耕太郎文相も、貴族院議員として憲法改正草案の審議に参画し教育刷新委員会の副委員長として尽力した南原繁も、教育基本法制定の過程に大きく貢献している。また、ＧＨＱの方針の伝達や文部省への指導・助言を行ったＣＩＥ（民間情報教育局）は、男女共学規定の成立などに積極的な役割をはたしたが、総じてそれは部分的であり、結果として文部省の教育基本法構想や教育刷新委員会の決定した大綱の枠を出るものではなかったといわれる。

6・3・3制のスタート

教育基本法の原則を具体化するために、基本法と同じ1947年（昭和22）3月、学校教育法が公布された。この法律によって、6・3・3・4の新学制が成立した。これが一般的に「6・3・3制」や「6・3制」と呼ばれ、それ以前の学校制度を「旧制」、以後を「新制」と呼んでいる。

新教育制度は公布されたが、経済的裏付けはまったく見通しがなかった。とくに大都市では、戦争によって学校施設が破壊され、焼失していた。新制中学校は新規につくらねばならない。文部省の予算請求は大幅に削られ、都道府県、市町村の財政負担は急増した。当初から懸念されたとおり、計画はにっちもさっちも行かず、いったんは6・3制実施の延期が濃厚となった。

教育刷新委員会は、ＧＨＱの承認をとりつけ、「六三義務制度実施断行に関する声明」（1947年2月20日）を発し、祖国再建のため万難を排して6・3制を実現させるよう政府と国民に強く要望した。政府もついに2月26日、新学制実施を最終的に決定した。この決定が、新年度開始の4月1日を目前にした、2月26日であったことに注意したい。

こうして、どうにか6・3・3制はスタートしたものの、新教育とは名ばかりで、「青空教室」や2部授業、3部授業が常態であった。校舎建築が間に合わなかった多くの新制中学校では、小学校に間借りして、机や椅子を自宅から運んだり、一つの机を3人で使ったり、二つの椅子の間に板を渡して腰掛けるなどの工夫をした。

いっぽう、新制高等学校は翌1948（昭和23）年度に発足した。高等学校は旧中学校の施設を活用し、教職員人事を改編して対応したが、新制高等学校設置にあたっては学区制、男女共学、総合制の3原則が求められた。この3原則にもとづいて旧制中学校（男子校）と旧制高等女学校の統廃合も行われたが、地方によっては若干の混乱が生じた。

私立の高等学校は3原則に拘束されないため、男女別の学校が少なくなかった。中学校を併設して6年間の一貫教育を行う学校も多かった。

上記のことは6·3·3制スタート時の一般的な状況である。明星学園の場合については後述する。

2　敗戦直後の明星学園

(1) その頃　明星学園では

天皇がラジオを通じて戦争終結を告げた日から5日後の8月20日、初等部では2学期の授業が開始された。しかし、空襲で焼け出されたり、通学が困難だったり、地方に疎開している者もあったりで、欠席者が目立った。その日、明日21日午後1時から父母総会を開催し、「時局に対する学校の見解と教育の将来について」お話ししたいというお知らせを出した。

翌21日、父母総会が開催されたが、あまりにも急なことで出席できない父母が多かった。出席した父母も、学校側の決意と真摯な取り組みを聞いて、ひとまず安心はしたものの、これからの日本がどうなっていくのか、不安を隠すことはできなかった。

学校にも、家庭にも、いますぐ取り組まなければならない仕事が山積していた。それで学校は月末まで休業することにした。

2日後の8月23日、初等部の教師・原田満寿郎は、学校に行ってびっくりした。裏門から初等部の職員室へ行く途中に井戸がある。その井戸端で、7、8人の兵士が炊事の支度で動き回っていた。原田はわが眼を疑い、まわりを見回した。ここはまぎれもなく、初等部にちがいなかった。

各教室と講堂には兵士たちがたむろしていた。グラウンドの西南隅に、竹棹と藁縄でつくられた1坪ほどの立方体の空間があり、その中に一人の兵士が立ち、外では銃を持った二人の兵士が監視していた。それも初めて見る光景であった。

原田は近くに住む照井部長宅に行った。聞けば、昨日の午後6時頃、陸軍見習士官らしい者4名が照井部長宅に来て、厚木部隊130名の宿舎として当分のあいだ校舎を借用したいと言う。隣の千代田光学の寮にも分宿するというので、承知したのだということであった。原田は、近日中に連合軍の先遣部隊が厚木に進駐するというので、急遽、厚木とその周辺の部隊の撤収が命じられたためだろうと思った。

グラウンドの隅の異様な光景は、昨夜、講堂に宿泊した一兵士の失火で天井の一部を焦がしたため、罰として仮設の重営倉（罪を犯した兵士を拘禁する施設）に入れられていたのであった。

この部隊が学園に搬入した物資の主なものは、ガソリンのドラム缶3本、味噌、メリケン粉、大豆と数百枚の軍用毛布であった。〈※1〉

音楽科と事務を兼任していた照井げん教諭がつけていた初等部の『学校日誌』には、つぎのように書かれている。

8.31（金）部隊、漸く引上げた。
9.1　（土）部隊引上げたあとが、ひどくよごれたので、大掃除す。
9.2　（日）日曜日だが昨日に引きつづいて大掃除を行う。
9.3　（月）兵隊の教室あらしには、驚くの外なし。敗戦の原因又ここにあり。

ちなみに、初等部で本格的な授業が始まったのは、翌4日からであった。

3日後の9月7日、照井猪一郎は、初等部父母につぎのようなお知らせを出して、父母たちの奮起をうながした。

〈※1〉原田満寿郎「明星学園で――戦時体験の断片」『いま語り伝えたいこと―三鷹戦時下の体験―』（三鷹市、1986年3月）

お知らせ

今回政府が議会に於て敗戦への歩みを率直大胆に発表されたのを聞いて、国民の誰もが今更のように愕然とし、呆然とし、さらに唖然としたに違いありません。

下世話にいう「知らぬが仏」で、本土決戦で最後の必勝を信じていた昨日の我々を思えば冷汗背に露うを禁じ得ません。

同時に無条件降伏の実に余儀なき措置であったことを何人も納得したことと存じます。しかし覆水は最早盆にはかえりません。徒らに過去を呪ったり現在の屈辱感に憤慨したりしている時ではありません。

大詔の御喚発とともに干戈は既に収りました。丸腰となった我々は、大国民の名誉にかけて国際正義の旗じるしの下に、武器なき熾烈な文化戦に勝ち抜かねばなりません。よし行く手は累々たる荊の道であろうと、三千年の伝統に気負う我等の彼岸には、新生の大光明が燦としてその到達を待っております。堪え難き屈従と痛手の中から立上がった我々の努力が大きければ大きい程、それへの苦難の道程が短縮されるのであります。

敵来らば一億特攻の体当りというあの闘魂を転用して、必死の精魂を日本再建の一本に打込みましょう。かくして万一私達一代で未完のものとしても、後に続くこの子供達、その孫達が継続して、かつての皇国に幾十倍した躍進を完成することを確く信じます。

これがためには私達はより速かに私達のかつての過誤と失敗を精算し、是正し、盤石の礎を固めて、以後を子孫に俟たねばなりません。

この負荷の大任は、一に教育の力によって育成せられねばなりません。教育こそは更生日本の聖業であり、救国救民の大使命であります。

師たる者、父たる者、母たる者、兄たる者、姉たる者、よろしく思いをここにいたし、相寄り相助けてこの大任を果すことこそ、皇国の将来をして世界に輝く金字塔を建てしむる所以であります。

いささか学校当局の所感を述べて各位の奮起と協力を求める次第であります。

昭和20年9月7日　明星学園〈※2〉

(2) 新制高等学校の発足

戦後日本の教育改革により、明星学園も1948年（昭和23）4月1日、従来の中学校と高等女学校を統合し、男女共学の新制高等学校として発足した。初代高等学校長・上田八一郎は、この改革の経緯を次のように記述している。

戦後に於ける本学園高校教育の概観——上田 八一郎（1954・昭和29年記）

昭和20年8月15日（水）の教務日誌（抄）に次の如く書いてある。

「今朝6時警戒警報発令、直ちに空襲警報、艦載機3面より波状攻撃、延190機、8時解除、報道に曰く『本日正午大詔が煥発されます、天皇陛下御自ら御放送を行われます』……」

かくして正午を境にして旧日本を送り、忍従苦難の新日本を迎えることになった。其の翌日から当時の旧制中学部3・4・5年生は工場には出勤せず、家庭にて待機。一方配属将校会議の決議により教練に関する検定原簿、考科調書、考科資料其他兵書一切は焼却することになった。

9月中旬になっても終戦前から学校に疎開していた三鷹航空は中々撤退せず、従って授業の準

〈※2〉『赤井・照井両先生 生誕百年誌』(1988年)所収

備も一向に進捗せず、授業らしき授業を始めることが出来たのは10月下旬頃であったと思う。其間体練科に関する改正が行われ、剣道、柔道、弓道其他軍国的遊技は一切中止すべしとの指令が出た。

終戦前一時、中、高女共に4年制となったものが、21年2月を迎えて再び5年制となり、特に希望する者には4年で卒業することを得、という特例が示された。しかもそれは卒業記念写真を撮影した数日後の改正であったので、洵に複雑怪奇な様相を呈したのである。洵に雑然たる学校生活で、1日として落着かざる状態のうちに従来の修身、歴史、地理の教科書が回収されることになり、職員が附添い、生徒20余名に府中町の国民学校に運搬させるということもあった。

とにもかくにも、21年4月からは多少落着きを取り戻した形であったが、しかし其の当時の食糧事情は甚だ悪く、午前中で授業を打切った事もあり、教室の窓ガラスの盗難が頻発して、ガラス1枚1枚にエナメルでマークするといったような洵に陰鬱な状態が続いた。其の当時のガラスが今も可なり残っている。

6・3・3・4制移行

これより先き、21年3月、米国教育使節団が来朝し、約1ヶ月間日本の教育状況を視察し、日本教育改革の資料として報告書を提供され、それによって所謂6・3・3・4制が採択され、当時財政経済が異常な窮境にあったにも拘らず、国際社会に於ける日本の信用回復の契機となることを信じ、新憲法の実施と同時に新学制実施も発足することになったのである。(教育基本法、昭和22年3月31日、学校教育法、同)

この学校改革の基本方針は、従来の誤った過激な国家主義、画一的形式主義の弊を打破し、人間性の開発を目ざし、民主的平和的な国家及社会の形成者として真理と正義とを愛し、相互の人格を尊び、勤労と協和とを重んずる心身ともに健康な国民の育成を期す事にあった。

かくして昭和23年度から本学園中学校、高等女学校が男女共学の新制高等学校として、発足することになったが、しかし考えて見れば、新学制の基本方針は本学園の創設以来の学園教育方針と何ら変る所なく、万事極めてスムースに移行することが出来たのである。

カリキュラム

このようにしてわが高校の教育を如何に進めて行くべきかに就て、職員一同は相当な時間をかけ、数回の会議を経て出発したのであるが、まず第一に着手せねばならなかったのはカリキュラムの問題であった。従来の旧中学校は男生徒ばかりであり、しかも将来殆んど全部が上級学校への進学希望者のみであったので、カリキュラムも極めて簡単であったが、男女共学の実施と個性伸長のための幅広い科目選択制と、其の運営上の単位制採用により、従来の学年別固定学級は解体され、教科時間ごとに離合集散する教科別集団や、学校生活の根拠となるＨＲ集団が編成されることになった。教科学習のほかに特別教育活動が時間割に組込まれ、教科課程は全人的教育のための課程となり、教育課程と呼ばれるようになった。

この教育課程とその運営とは学制改革前のものに比べると極めて大きな変革であって、しかもその変革が実験的研究や準備期間を経ないで急激に行われたわけである。われわれはこの変革に適応するために異常な努力を払ってきたが、大幅の選択制による教養の偏り、狭義の受験準備化の指導、普通課程卒業後就職する者の職業教育をどう行うか、単位失格者の取扱、転校者の取得単位の調整など、多くの面倒な課題は山積したのである。

最近においては現行教育課程の全体に対する再検討が加えられようとしている。更にまた地理歴史教育、道徳教育など輿論としての社会の要望が、いずれも、我国の自立を契機として新たな教育課題として提起されている。

本学園に於てもこの選択制と単位制につき、出発当初に於ては選択制を極めて広範囲に実施して来たが、設備と担当教師の問題で、数次に亘り変更を余儀なくされたが、現在（29年度）は次の如き形で実施している。

	必　修	選　択
1年	英語 生物・保健体育 一般社会・解析（1） 国語（甲）・（乙）	家庭・芸能・その他
2年	英語 保健体育 世界史・幾何 国語（甲）	家庭・芸能・その他 化学・国語（乙）
3年	英語 保健体育 日本史 国語（甲）	家庭・芸能・その他 人文地理・地学 国語（乙）・物理・解析（2）

前にも述べたように、個々の生徒に自由に科目を選択させることは運営を至極困難にならしめるので、最近は将来の進路に応じた科目選択の組み合せ（コース）の例を示し、示されたコースのどれかを選択させる、所謂コース制を採用しているが（全国でも約3割の高校は本校と同じである）、尚選択制の教育課程では固定学級は解体すべきだが、管理上の困難から固定学級を作り、これをホームルームとしている。（この形をとるもの全国で約3割）

結局、現行教育課程の長所は選択制によって、生徒の個性、能力、将来の進路に即した教育が行われるが、短所としては、①教養が偏る、②安易な教科を選択する、③選択が功利的で友人関係に支配される、④選択能力が不足である、⑤学習集団の構成員が変り教室移動が多いので安心感をもたない、などである。

然しながら、短所と見られる点は学校当局の指導によって漸次改善され得ると考えているので、只今の処、矢張り本校としては選択制を引続き実施せんとするものである。

ガイダンス

選択制の関係上ホームルームが出来ているが、勿論ホームルームの1時間や2時間では訓育と生活指導が出来るものではない。最近青少年の不良化が特に注目されているが、勿論子供の先天的素質や身心の欠陥から由来することもたしかにあるが、終戦後の混乱が未だ癒えず、家庭や社会の悪い環境が青少年の心に大きな影響を与え、素質の弱さや欠陥のある生徒には特にはげしく作用するのが認められる。米国の学者は青少年の犯罪の原因について70%が家庭の影響と述べている。

ガイダンスは指導することである。但し先頭に立って率いることでもなく、指揮することでもない。子供に協力してやることである。助力を必要とする個人に自己決定、自己指導が出来るように助力が与えられることである。ガイダンスの領域を考えると、①学業及進学指導、②精神的健康の指導、③余暇指導、身体の健康指導、④社会性指導、其他色々あるであろうが、結局は個別指導がガイダンスの中心であるし、ガイダンスは先ず教師自らが健全な精神を持つことから始まる。骨の折れる、恐ろしく難事業と思われるが、本校では教職員一致協力、漸次ガイダンス事業の効果をあげつつある事は洵に喜ばしい。

男女共学

本学園では終戦後直ちに男女共学制を採用した。日本では明治24年に男女別学が規定されたが、思えばもう65年前の事である。現在生きている大部分の日本人は誰も彼もが男女別学の教育を受けて来たものばかりであるだけ、最近に於ける共学の実施は期待も持たれているが、一面相当の不安も持たれている事は事実である。然し現在に於ては、世間で心配されたようなものでなく、案ずるよりは生むが易し、と見ている。男女共学の目的は、将来男女の協力によってすぐれた社会を建設するための訓練にある。

即ち、女子あっての男子、男子あっての女子として、御互に深い理解の上に各々が個性的にその性情を充分発達せしめ、御互に社会の完全な一員となる事を理想としている。共学の最後の目的は、社会生活に於ける一夫一婦制の確立への準備でなければならぬ、と信ずるものであり、その理想に向って努力を続けねばならぬと思う。

従来学校に於ては、男女交際は厳禁されていた。そしてその禁制を破ることは罪悪とされていた。其の禁が解かれたために、世の中には漠然たる不安が起って来たのである。勿論節度を失うかに見える場合がないとは云えないが、共学に経験なき者の取越苦労も手伝い、父兄も教師も戸惑いしているのが実情で、生徒の側から見れば案外笑止の沙汰かもしれない。本学園は従来の中学校・女学校を共学の中学校・高等学校に編成したのであるが、男女共学は異性を正しく知性的に理解する事によって、各々の長短と任務を認識するようになり、同一家族内の兄弟姉妹関係に見られるように、終には御互に関心を持たないようになるのではないか。

しかし野球にルールがあるように、男女の交際に於てもルールがなければならぬ、即ちエチケットの指導が教育的になされねばならない。

其の指導に就て考うべきは、

① 男女2人だけの交際は相互の家庭の了解がなければならぬこと。

② 異性を正しく知性的に理解させることが凡ての困難な問題の発生を防ぐ鍵となること。

男女共学が最も其の効力を発揮するのは自治会（生徒会）活動である。男女が同じものであると同時に異なったものであることの理解と、其の故に協力が必要である事を実際に学び、男女の共同生活を建設する目標に向って進ましめる事が出来る。学校新聞、雑誌編輯、其他劇、音楽、体育会、文化祭等に於ける男女協力の機会を出来る限り多く与える事にある。

かくして、男子の女子に対する偏見、つまらない自己優越感と女性蔑視の感情は改まりつつある。男性が女性に対する尊敬もふえ、男女協力の社会建設が彼等の深い理解によって営まれる希望が持たれる。

性教育に就ては簡単に実施は出来ない。しかしそれに当る教師の養成、再教育は英語や国語のそれにくらべて容易ならざるものがある。其の教師の人格、識見、年齢などを考えると恐ろしく困難な問題である。校内に於ける生徒の信望最も篤い教師でなくてはならぬ。更に社会科や生物や家政などの課程をも修得した人物でなくてはならず、更に医学にも一通り通じていな



高校文芸部・20回生（1951年11月）

くてはならぬ。

要するに性教育は、家庭に於ける賢明なる両親の手で行われなくてはならぬ。学校に於ける性教育は単に生殖の事実を教うるものではなく、正しい性的行動をするように知育、情育、意育を施すものであるとするのが正しい考え方であると信ずる。結婚前の問題の多くは、知識階級よりも所謂労働者階級に多いと云われるが、即ち富の差よりも教育の差であって、学生生活の長き者は交友範囲もひろく、知性的に異性を見る機会に恵まれているからではないか。この意味に於ても高等学校に於ける男女共学は意味深いものがあると云わなければならぬ。

高等学校の教育課程改訂案に就て

最近現行教育課程の全体に対する再検討が加えられようとしている。更にまた地理歴史教育・道徳教育など輿論としての社会の要望が、いずれも我国の自立を契機として新たな教育課題として提起されている。文部省の教育課程審議会の発表した高校教科内容の大幅の改訂案に対しては、各方面から反論を呼んでいるが、実際は高等学校のみ切り離して考えるべきものであろうか。小中はもとより大学も連関して考えねばならぬ大問題と思う。

今回発表された内容を見ると、必修科目をふやすことによって選択制度が大幅に制限されたこと、コース制を設けることによって文科系、理科系の進学コースと職業コースが分けられること、社会科では一般社会時事問題がなくなって、倫理などを加えた新科目がおかれること、この3点に要約される。しかも文部省ではこの答申に基いて昭和31年度から高校教育の改訂をするという。果してこんなことが出来るだろうか。

第一に、選択科目制は高校生の自主性を尊重する建前から実施されたが、改定案により必須科目がふやされると、また昔の詰込教育となって生徒の負担が多くなるばかりである。高校教育の目標は国民として誰でもそなえておくべき一般教養を高めるにある。これを文理の両系統に分けることによって、大学への受験地獄を再発する恐れがある。

高校教育が人間完成の教育である本質的な目標を失うことなく、改訂案は更に深く検討されねばならぬことを含め、青年の将来のために、当局はもっと現職教員の批判に耳を傾け、慎重であるべきことを希望するものである。

現行のままで漸次改善の方法を講ずることは出来ないものだろうか。いたずらに朝三暮四や朝四暮三のやり方では、教育者も被教育者も落着を失し、マイナスの結果が得られるに過ぎない。改訂はあく迄も慎重でなければならぬ。〈※3〉

＜文責・構成：依田 好照＞

〈※3〉 1954·昭和29年記、『上田八一郎先生 生誕百年誌』(1991年)所収

(3) お知らせに見る終戦直後の明星学園小学校

終戦直後、日本社会は極度の食糧不足という問題を抱えていた。学校では保護者の協力のもと、食料を調達し、配給するということを頻繁に行っていた。取り扱った品は、乾燥リンゴの粉末、リンゴジュース、昆布、うどん粉、スルメ、食用油などであった。お弁当を持ってくることのできない子どもたちもいて、授業の打ち切りもやむを得ない状況であった。学用品や靴に至るまで学校が取り扱う必要があった。その中でも、教師たちは、安い給料で、懸命に、子どもたちの教育にあたった。学力不足の子への補習、川での総合学習、校外に出ての見学行事も行われた。1946年（昭和21）、学校から出されたお知らせの一部を紹介する。

◆1946年（昭和21）4月17日　教科書及び学用品　児童の服装

一、教科書および学用品について

教科書の一部が配給されましたが、16頁分を1枚刷りにしたもので、1種が50何回かに追加されて1冊を完成するのでせうが、仮に読本1冊分だけでも150頁として4円から5円ちかい定価となり、各科がそろったら大変高いものになるわけです。そのくせ色彩もなく紙質も粗悪でよほど大切にしないと使用にたえません。だんだん綴じこんでいくように表紙でも工夫して気持ちのいいものにしてやってくださいますよう。

もとは日本一やすいものは児童の教科書でしたが、これでは日本一高いものになってしまいました。教科書がこんなですから、学用品に至っては驚くべきもので、クレヨン12色入12円、ケシゴムが3円、限定品の雑記帳40枚綴り紙質の薄いものが2円50銭など法外の値段です。雑記帳などはザラ紙を切って綴じるなり、使い余りの古帳面なり何でもかまいません。間に合わせてください。今までのように学校が一手に買い入れて、使用させるなどはとてもできそうにもありません。ただし、コンパス、三角定規、分度器、そろばん、ルーペ、ものさし、クレヨンこれらの他高価なものは一人一人買い整えては負担が大変ですから、100人分なり150人分なりを学校にそなえつけて、共同で使用させるようにいたしております。はっきりとした見通しはつきませんが、差し当たりこうした教科書代・学用品代として全学期児童1名10円お預かりしてこれに当てます。18日にお納めください。（「二、」は略す）

三、児童の服装、装備について

あらゆる障害を克服して児童の体位と知力を向上させたいと思います。

体操については女子はランニングとパンツと髪を抑えるのに適当な帽子、男子はパンツ一つと決めてありますから、いつでもこの単装となりえるようにご配慮ください。

いつの父兄会でも申し上げますように学習も訓練も教室内や校庭内に限ったものではありません。学校を中心にして7、8キロくらいのところはすべて足で行動範囲以内で大切な学習の場ですから、必要に応じていつでも臨地学習に出かけていきます。常の学習であることと、その都度特別な心配をなさることを避けるためいちいち通知はいたしません。…中略…出歩くのは晴天の時に限っているわけですから、履物は何とかご工夫ください。お天気の日に高足駄や、ゴム長靴などをはいてくる子も見受けますが、なんとかなりますまいか。水筒と弁当はこれも従来通り、いつでもルックに入れて何時でもサッと出発できるよう一段のご協力をお願いします。

◆1946年（昭和21）5月25日　食糧事情困難深刻化

食糧事情困難の度が次第に深刻味を加えてまいりました。お子様のお弁当についてもご苦心の

色が濃厚に思われます。これに対する危機突破対策は全都民の愁眉の緊急問題で例外も含まれないことはもちろんであります。

学校でもこの際、児童の教育はいかに対応し臨機に善処すべきかについていろいろと考慮を重ねてまいりましたが、こと食糧に関する限り教育の力を持って直接打開する方法とてはあり得ません。唯消極的ながらいささかにても家庭における食糧事情を緩和し得る方法ありとしたら、それはどうしたら適切であるかをお話合いしたいと存じます。

来る27日（月曜）午後1時父兄会を開催しますから漏れなくご参集願ひあげます。

◆1946年（昭和21）5月28日

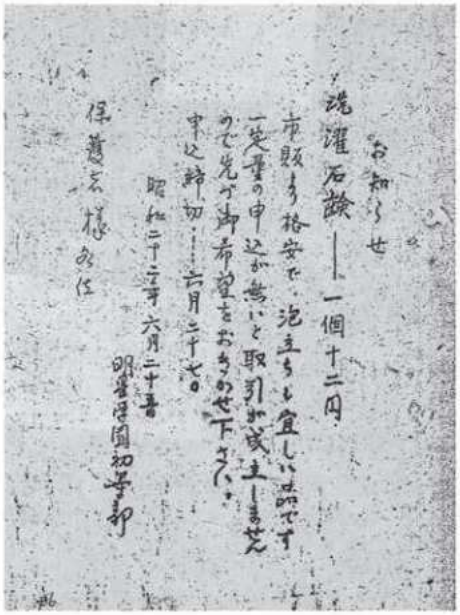
昨日は多数ご来集有難う存じます。この際申し上げました通り、本日より10日間試験的に11時15分にて授業を打ち切り、昼食を家でとるようにいたします。この結果改めてご希望を承り次の処置を考えることにします。…中略…

配給品について

一、一級品甘藷粉　1貫目130円

二、大麦の胚芽粉　1貫目120円　甘み強くこのままウドン粉の代用になり栄養価大

三、ドン栗粉　1貫目　60円　30日に限りお申し込みを受けます。代金は現金引換えのこと。



◆1946年（昭和21）7月6日　食糧事情緩和対策

6月7日付をもって授業時数についてのご希望を取りまとめました結果、ご回答家庭数200中下記のような内訳となりました。

全授業継続	午前にて打ち切り	全1ヶ月休業	任意食疎開
25%	71.95%	3%	0.05%

5月27日全父兄会開催以後10日間の試行期間を経過した今日、食糧事情はますます緊迫の一路をたどってまいったことは、授業半日打ち切りのご希望が絶対多数を占めた統計が雄弁に物語っております。

ただし食糧事情の一事のみのために、日本の将来を決する児童の学業に大きな支障を来すことは、何としても忍び難いことであります。

教育道の上からしても、たとえいかなる事態に阻まるとも毅然として、教育の本道から転落することなく、あくまで時限を克服して半歩一歩でも国家再建の道に前進することこそ救国の任務としなければなりません。

「飯が足りないから授業を操短する」のではなく「飯が足りなくても積み上げられて行く学習」が工夫されねばなりません。ですから食糧不足の期間の暫定処置ではなくて、食糧充足後といえども継続に値する学習案、系統案でありたいと思ひます。

この意味で私たちの今後の計画としては、児童の自立活動を強化し、自学自習の態度を確立し、家庭と学校との連携を一層立体化し「教師なき学習」「家庭なき生活」にまで児童の生活を最大限に指導能動化するよう指導に努力せねばなりません。その一案として当分下記の方法によって学習の体系を作り、即時実施することにいたします。

学年を三つに分かち、各組とも1ヶ月中10日間は全授業を受け、他の20日間は午前打ち切りとします。全授業の日程は、

第一組　1日より10日まで
第二組　11日より20日まで
第三組　21日より月末まで　後略…


小学校の遠足

◆1946年（昭和21）11月　多摩川強歩行

一、来る21日（土曜日）、下記条項に基づき多摩川往復の強歩訓練をいたします。空襲が激しくなってからというもの、子どもたちは家と教室に軟禁同様の生活を強いられてまいりました。

終戦となっても、食事情の不如意や交通機関の不備と混乱などのために、せっかく解放された自由な生活もこれを享受する術なく、初等部伝統の体位向上施設ももち腐れのまま、脾肉を嘆じつつ今日に至りました。

せめて足のみに頼れる地点までででも、久しぶりに子どもたちを連れ出し、心行くばかり実り豊かな大武蔵野の秋の景観を満喫させたいものです。

学校からわずか往復16㎞、高学年の子どもたちには聊か物足りない歯痒さを感じましょうが、未鍛錬の転入児童もございますので、今回はほんの小手調べの意味で手近の地点を選びました。

世間なみな行楽漫歩の遠足ではなく、どこまでも学習し訓練するための行事ですから、装備、弁当などついても絶対に学校の指定に従われとう念じます。

＊目　的　武蔵野および玉川を主題とした地理学的臨地学習と、心身の鍛錬
＊コース　学校より新川、野崎、大沢、車返を経て、京王閣下の多摩川原に至る約8㎞
＊集　合　7：30までに校庭集合、8：00出発
＊解　散　2年以上は15：30学校解散、1年生は帰路京王電車利用につき15時学校着、同時に解散
＊準　備　靴ばき軽装（特に破損注意）
＊携帯品　1食半の弁当、水筒、手ぬぐい、ちり紙、主食以外おやつに類するものは一切携行を許さず
＊費　用　1年生に限り電車賃1円50銭、20日までに学校納めの事。

二、運動靴

今回児童1名1足宛、運動靴を配給します。
価格はこれまでに比して10倍以上で、一足15円以下、各文数によりそれぞれ差があります。
ただし、市販に比して問題にならぬ廉価で、しかも純綿良質のゴム底です。

就いては予約中の運動靴はこれをもって代用せられたく、ひとまず解消してお金を返金いたします。後略…

◆1946年（昭和21）11月　教員の待遇

時局下教育の危機はまず教職員の待遇問題にかかっていることは、各方面の与論に徴してすでにご承知のことと存じます。

学園においても、これまで皆様のご配慮のもとに不十分ながらも教職員生活を負担してまいりましたが、元より一般公務員より比較すべくもない薄遇で、昨今の高物価内にあってはもはや破綻の危機に瀕している実情であります。

就きましては、来年3月まで5ヶ月間の臨時措置として、三部とも従来の後援費を30円に増額し、本11月より月謝20円共、都合児童一人当たり50円づつ御収め頂くことによってこの窮境を切り抜けたいと存じます。

ただし、それとても教員一人宛にすればいくばくの増給ともならず、結局はやや世間の学校並みに近づく程度の待遇予算が計上し得るくらいのものでございます。もとより優遇などいふ筋合にはまいりませんが、現在の窮状を緩和する援助となることは申すまでもありません。切り詰められたご予算の中、これだけの控除は容易ならぬことは万々お察し申し上げますが、こと教育の問題にかかっております。なにとぞ職員とともにその苦をおわかち下さらんことを重ねてお願い申し上げます。

明星学園長　赤井米吉

◆1946年（昭和21）12月23日　新年会

久しい間、子どもたちにはクリスマスもお正月もおとぎの夢の国でした。

どこの家の部屋にも門にもクリスマスツリー1本、門松1対ない年がつづいても、子どもたちはやっぱりくる年もくる年も夢のない望みをお正月にかけて、何のくったくもなげに明るい憧れを続けました。大人の目にはそのいたいけな姿がまたなく傷心の極みでした。

よし今年こそ……誰の心にもこうした親心の燃え上がるのは当然と思います。

求めれば与えられる今のことです。久しぶりにお正月らしいお正月を子どもたちに迎えてやりたい——幼い心をも、目をも、耳をも、舌をも——十二分に満足させてあげたいものと、今私たちは準備にとりかかっております。

大体のプランは前便でお知らせいたしました。元日の式はもちろん、催し物のコース、福引や景品の分配、会食の世話、これらの総ては彼ら自身の手で取りさばかれていくことも、彼らを一層明るく楽しい雰囲気に導く計画に相違ありません。以上の企てについて一応ご了解を頂いておきたいことを申しますと、

一、日本の慣習として、一年に一度の親の心を込めた子どもへの贈り物に、お年玉というものがあります。このプレゼントの一部を、学校がご家庭に代わって、福引の形で元旦に分けてやりたいと思うのです。帰りに捨ててしまうような際物でなしに、相当役立つものをあげたいと思います。それにしても今のことですから、1人宛5円以上の品を予定して買い集め中であります。お年玉を学校に頼んだお積りで、児童1名ごとに5円だけをご出費を願います。

二、今回、都の教育局から学童用白飴26匁（3円90銭也）が配給になりましたが、これは学校で一括購入して元日の景品に添えるつもりでおります。後略…

＜構成：一瀬 清＞

(4)花ひらく明星祭

第二次世界大戦後、明星学園の高等学校に学んだ人であれば、「明星祭」の想い出を鮮やかに胸に刻みつけているであろう。

終戦後に始まった明星祭は、年々歳々、さまざまな工夫を重ねて、多彩に展開されてきた。戦後11年を経た1956年（昭和31）、高等学校自治会の機関誌『星雲時代』編集者たちは、明星祭の生い立ちとその変遷を特集し、教職員に寄稿を求め、誌上に紹介した。

そのなかから、上田八郎（理科教諭）と上田八一郎校長の文章を転載する。

明星祭の生い立ち——上田 八郎

長い戦争の疲労と敗戦の渾沌状態の中にあって、豚の飼料よりも悪い食料、ボロボロの衣服、焼けトタンに囲まれた住居、夜はといえば、停電ばかりの文字通り暗い生活の中にあっても“平和”という明るい灯に、人間らしい人間としての生活が出来るという希望と期待に人々が燃えていた時に、“明星祭”が生まれました。

“明星祭”という名の名付け親は末光深海氏（卒業生で当時の先生）です。カーキ色の作業服を先生も生徒も着て、栄養失調の蒼黒い顔をしてボサボサしていた時でしたので、ひとつ景気づけに何かやろう、それには音楽と寸劇の会でもしたら、という事になったわけです。初めは文化祭とも考えたのですが、内容が文化的より明星的の方がピッタリするので“明星祭”と名づけたわけです。今では“祭”という字に対して何の感慨も浮びませんが、長い戦争の間、祭りといえば武運長久・必勝祈願しかなかったあとですから、ことさら魅力的なあたたかな感じがしたものでした。

☆

第1回は音楽とスタンツだけでしたが、第2回目からは、展覧会と本格的な演劇が加わり、その後、運動会も含めて明星祭と呼ぶようになりました。

第1回明星祭（昭和20年11月3日）〈※1〉の記録が残っていないので（ワラ半紙でさえ高価なものでプログラムを作ることもできませんでした）、くわしい事は覚えていませんが、唯一つ先生方が男声コーラスをやりました。メンバーは船山、横武、富永、恩地、末光の各先生と小生。いずれも昔とった杵柄と、たった5分ばかりの練習をして本番、その中に船山先生の2秒ばかりのソロ？があり、その美声が会堂を沸かした事を覚えています。

この第1回の明星祭を契機として、明星の文化活動はもともと下地が充分ありましたので、ものすごい勢いで立ちなおりました。なかでも演劇とコーラスの復活はすばらしいものでした。もっともこれ等明星の伝統は戦争中工場に動員されながらも続いていましたが、本当に当時の先輩諸兄姉の文化活動に対する熱意はすごいものでした。

明星の演劇に初めて照明が使われたのが2回目の明星祭のときでした。丁度戦争中、学校に工場が疎開していたので、その残物を利用したのでしたが。小学校の講堂を暗くするのに暗幕がありません。それで古新聞を集めました。当時はまだ夕刊が無く、2頁版が主で時々4頁があり、新聞紙1貫目の値段が1カ月の購買料以上していました。その貴重な新聞紙4、5枚を、配給のこれまた貴重なメリケン粉で作った糊で貼り合わせて、暗幕の代用品をつくりました。あの講堂のガラス窓全部を新聞紙で暗くするという、万里の長城的な大仕事を黙々として全員の協力によって仕とげた事が、強く印象に残っています。

〈※1〉 田中一水氏（16回生）の記述では、同年「12月1日」とされている。



1951年(昭和26)

コーラスも盛んでした。男女7、80名が、いつも先生がマイクでどならなくても集まりました。したがって相当難しい曲までやる事が出来ました。当時は男の方が熱心で、野球部の猛者が楽譜片手に大きな口をあけて歌っていたのが今でも眼にうかびます。朝日の合唱コンクールに全国の学校で初めての混声で出場し、明星の出現は将に合唱界の明星であるといわれたのも当時の事でした。それが暁の明星と同じようにだんだん消えかかって行くのはまことに残念なことです。

運動会の仮装も明星祭の呼びものの一つです。仮装の最初は昭和23年で新制高校が発足した年からですから、高校第1回生から続いているわけで、今年は仮装の9回目になると思います。この9年という年月の間にいくつかのすぐれた作品が出て、いまだに話題にのぼるのがあります。これ等すぐれた作品は皆クラス全員の熱意と団結による事は言うまでもありません。クラスの創意と工夫による共同の仕事をすることによって、クラスの団結が更にかたまり、新しい友を知り学校生活の楽しさと意義を知り、卒業後も学校がなつかしく、毎年多数の卒業生が後輩達の仮装を見るためにあつまって来ます。2回目の仮装の時、横尚先生が神主姿でクラスの先頭に立ち、見事第1位を獲得して以来、先生が仮装に加わったり、先生を使ってはいけないという原則が出来ました。

美術、工作、手芸、染色の展覧会、浅間山を中心として毎年拡がって行く浅間附近の地形図の事、時々話題を投げるオペレッタ、人形劇、また各部活動の報告と展示等、述べなくてはならないものが沢山ありますが、残念ながら紙面の都合で紹介出来ません。

散漫になりましたが、明星祭は、明星で学んだ事、得たことの収穫祭とも言われています。そして明星祭はその始めから生徒諸君の創意と工夫と活動によって行われています。このよき伝統を残されん事を願います。〈※2〉

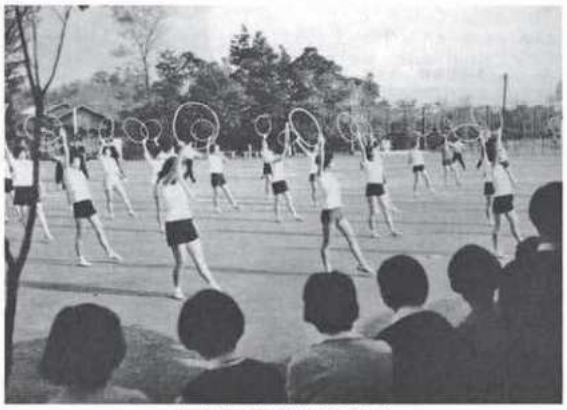


仮装行列・20回生(1952年)

〈※2〉 高等学校自治会機関紙『星雲時代』Vol.1-No.6(1956年11月18日)

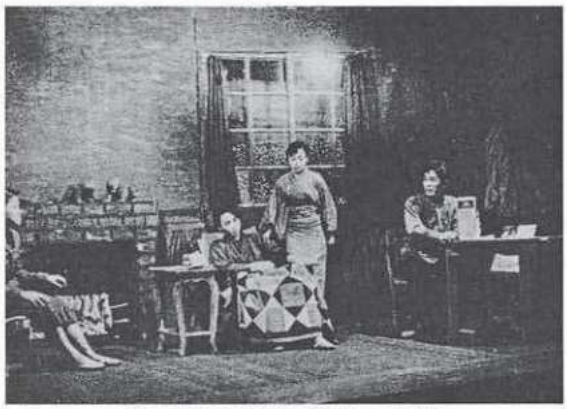
明星祭を回顧する——校長：上田八一郎

終戦後、文化祭と言う名で、どこの学校も色々の内容を含む行事を実施する様になった。そしてその学校に於ける教科並に自治会（または生徒会）活動の総合的発表と、全校生徒の協力・親和を発揮する機会としたのである。わが学園も上記を目標として文化祭を行って来た。ところが昭和25年頃から文化祭とはいわずに明星祭という名を用いる事になった。数日間にわたって行われる明星祭を、その内容に従って「運動の日」「音楽の日」「演劇の日」などと呼んで華やかに展開されるようになった。矢張り25年頃からかと思うが、小の運動場が狭くなったので、小中と別れて高だけ高の校庭を使って「運動の日」を持つ事になった。


中学生の体操（1951年）

そして第1回の「運動の日」は僕の記憶に誤りがなければ、午前は球技決勝戦、午後は障害物、百足競争、マラソン、仮装等、夜はキャンプファイヤー、ジングルベルなどで面白く過した。午前の部、球技決勝というのは、バスケット、バレー、ピンポンなど決勝までは普通の日の午後、放課後各ホームルーム対抗で試合を行い、決勝は「運動の日」に廻し一般の人々特に父兄母姉に見て貰うことにしたが、生徒数が少ないので午後の部だけで手一杯、疲労量がかなり多いので次の年からは球技決勝は「運動の日」に行わず、普通の日に行うことにした。但し高校の秋の明星祭としては、球技は最も重要な行事であると考えている。また夜の部は校門もなく垣もなかったので、外部の人が勝手に出入したため色んな小事件が起り、次の年からは夜の部は廃止することになった。

明星祭は学園主催の行事であるが、高校では自治会の自主活動に一任している部分が多い。従って生徒特に役員に選ばれた者の努力は並大抵のものではない。また一方、陰の指導者、先生方の心労も言語に絶するものがある。其上仕事によっては、小、中、高各部の連絡会議も必要となって来るので、先生、生徒の苦労もまた並大抵ではない。しかし、小さい子供であれば先生の指揮で動かねばならぬ部分が多いが、準備から当日の進行に至るまで一切合切自分等の手で運ばねばならぬ高校生はまことに尊い経験を持つわけで、将来いつ迄も懐しい思い出となって残るであろう。各部が電燈の下で遅く迄工夫し研究製作している姿はまことに美しい。此等頼もしい若人達と乙女達に告げる。古人曰く「青年時代を失う者は人生を失う」と。


創立30周年記念演劇「樹氷」1954年

今年は各部に新校舎が出来、運動場もひろげられた。そして今年の明星祭行事は一遍に面目を一新したように思う。2、3年後の明星祭は体育会も劇も音楽会も展覧会もどこまで進展して行くだろうか。〈※2〉

〈※2〉高等学校自治会機関紙『星雲時代』Vol.1-No.6（1956年11月18日）

(5) さまざまな体験(卒業生の体験談)

戦後間もない時期のさまざまな体験について、当時在学中だった卒業生に寄稿していただいた。

私の小学校時代——出口 一彦 (24回生)


寒川先生とのひととき

私の小学校入学は昭和20年、敗戦という節目の年に当っている。

4月初めの入学式の当日に、急遽家族疎開に旅立つことになり、式には出席していない。東京の夜空が真っ赤に染まった3月10日の下町の大空襲をはじめ、連日の米軍による無差別空爆が三多摩まで迫ってきたことで、家族のギリギリの判断であったのだろう。8月15日の敗戦は北海道の僻地で迎え、ようやく11月に帰京し編入させてもらった。その時迎えて下さったのが、この間学園を守りぬいた照井先生ご夫妻をはじめとする諸先生であり、担任は慈愛あふれる照井げん先生で、50人を超える生徒を抱えるクラスの一員となった。木造の小さな校舎は幸い焼け残っており、建学20年目の由緒あるものであった。

それから、先生方も次々に復員されたり新たに加わったりされたのだろう、2年時、3年時と小刻みに担任の先生が変わり、ようやく4年時から3年間、寒川道夫先生にじっくり担任していただくことになった。

寒川先生は昭和23年4月、明星学園の教師となった。故郷新潟の小学校で大関松三郎を見出すなど児童詩、つづり方教育の実践はもとより、戦時中は会社勤めの経験をも有する、38歳にして多彩なキャリアーの先生であった。学園の創立精神とその時迎え入れた校長照井先生の人格に引かれ、加えて新教育にそれまで情熱を注いでこられた赤井先生の著述と実践に感銘を受け、明星での教師生活を始められることになった。その最初の教え子であった私を含む50人にとって何物にも代えがたい3年間であった。

今思い返して申し上げるならば、寒川先生の明星での教育の柱は、一つに表現力を中心とする国語力の充実であり、もう一つは集団生活の中での人としての生き方の問題であったのではないかと思う。作詩、作文の不出来な私に学級新聞の下働きの仕事をさせてくださったのは印象的であった。休みの日に何人か、新築間もない山小屋風のご自宅に呼ばれ、与えられたマスの中に先生の書かれた文章を、先生の特徴ある字体をも懸命に真似てガリ版で書き込んでいく。偶(たま)に添削を受けた自分の書いた小さな記事を載せてもらった時の興奮は今でも忘れられない。50人の生徒一人一人をその力量、特徴に応じて何とか言語力とそれを通じての考える力を養わせようとして下さったのだと思う。

寒川先生から薦められた吉野源三郎氏の『君たちはどう生きるか』は、今も私の座右の書となっている。中学生の主人公コペル君が友人を裏切り自責の念に駆られる有名な場面は忘れがたく、今もってつきつけられるものがある。卒業して後に寒川先生をご存じの何人かに、私が不肖の教え子であることを話した時「それは君、大変な財産だよ」と言われたことが多々あった。

当時校長であられた照井先生から直接教えを受けたことはなかったが、学園の行事には欠かさず参加され、楽しみな高尾・御岳・丹沢への山行や、千倉での臨海学校ではいつも先頭に立って見守って下さった。先生の温顔は今でも目に浮かぶ。

敗戦前の苦しい時期、創立同人である赤井・照井・上田先生を支えた同志の橘先生、原田先生等をはじめ、戦後すぐに明星教育に参加された諸先生方は、結束を固め新しい時代に相応しい明星教育を進めていく意気に燃えておられた時代ではなかったかと思われる。

寒川先生はその時期から20余年学園に在籍され、多くの教え子を送りだされたが、晩年は校長等の管理職としての仕事に忙殺されることになる。先生が学園を辞する時の一文を読ませていただくと、建学の同人である照井先生、上田先生がお亡くなりになった前後から、学園の規模の拡大とともに新たな教師も加わり、学園の中は教育研究校としての研究が深まる反面、教師間の対立によって大きな混乱を招いた時期でもあった。これがひいては保護者にも動揺を与え、生徒数に影響を及ぼし、財政的にも困難な状態を招いたが、その間校長職を務められた寒川先生の悲痛な訴え、改めて学内で一致協力して明星教育の原点に返れとの主張には胸を打たれる。創立者亡き後、教育集団としての組織を守っていく難しさのなか、そのような身を削るご苦労があって今日の学園があることを改めて認識させられる。いずれにしても私の小学校時代は建学の同人の方々の大きなふところに抱かれていた、ある意味で幸せな時代であった。(本誌作成にあたり寄稿)

終戦まもない明星、子どもたちの学校生活——田中（迫水）祥子（21回生）

第二次世界大戦が終わった8月15日、私は9歳であった。その翌日、集団疎開先に母が現れ、私を連れて焼け野原の東京に戻った。国民学校4年生だった私はその時「ああ、助かった」と小躍りしたい気分であったことが忘れられない。

集団疎開の1年間、私はいじめにいじめられた。私は一人っ子で、病弱で、一番年下の3年生。ひ弱な私を心配して、寮母さんや先生がことのほか大事にしてくれたことが、却って子どもたちの嫉妬心に火をつけた。子どものいじめは残酷なものである。先生や寮母さんに言いつけたら陰でもっといじめられるのだ。この1年間の筆舌に尽くしがたい体験が私にいろいろなことを教えてくれた。苦しみの経験は人間を成長させる。人の痛みのわかる人間になれたことには感謝しているが、その時私をいじめた子どもたちの名前は一人も覚えていない。

敗戦後2日目に東京に帰ってきたものの、学童疎開で都会を離れた児童の多くはすぐには戻って来られず、国民学校は事実上休校状態だった。そこで私は、卒業生で母と仲の良かった二村さん（10回生）の紹介で明星学園の試験を受けることになった。母は私を1年生のときから明星学園に入れたかったが、3月生まれで病弱なチビに荻窪からの電車通学は不可能だと考えて近くの国民学校へ通わせたそうだ。戦争が終わり、私は4年生になってやっと明星の門をくぐったわけだ。

明星の編入試験問題を2つだけ覚えている。そのひとつ、「花より団子の意味とは？」という問いで、私は楽しい気持ちになった。もうひとつの課題「体育館の端から端まで聞こえる大きな声で自分の名前をいうこと」。それは吃音だった私が初めて大声を出した瞬間だった。初めて触れた明星学園の雰囲気は、心身ともに萎縮していた私をのびのび解放させるものだった。当時の私は、疎開先で出来た頭のおできが治らず、そこに虱（しらみ）が巣を作っていたので、撲滅のために坊主頭にされていたが、明星には丸坊主の私をいじめるものは誰もいなかった。

なんだか勇気がわいてきた。初めて学校が楽しいところとなった。個性的な先生に囲まれ、制服のない自由な雰囲気。教室では6人1組のグループで机を囲み、みんなで意見を出し合って考えながら授業が進められた。いじめられっ子だった私が初めて体験する助け合いのムードである。仲間が支えあっている、本当に心地よい空間だった。

私が明星の生徒になったのは終戦直後だが、そこで同級生になった仲間たちの中には、戦時中も東京に残り戦時下の学校生活を体験した友人もいる。国民学校（公立小学校）が学校ぐるみで地方に疎開したせいか、2・3年生から明星に転入してきた児童が多かったそうだ。彼らに当時の様子を尋ねてみた。その一人竹内瑛君の記憶によれば、国民学校では朝礼の集会で校長先生による教育勅語の拝読、全校生徒で宮城遥拝などが行われていたのに、明星にはそれがなかったそうだ。「今思えば大正自由教育の学校としては当たり前のことだったのだろう」と述べている。二宮金次郎の銅像もなく、厳しい戦時中とはいえ子どもたちは先生に守られて明るい学園生活を送っていた。また「明星の生徒は防空頭巾を肩にかけ、リュックサックを背負って学校へ通ったので、人から“遠足学校”とからかわれた」と山口純一君が話す。ほかの同級生たちもみんなそろってこの話をするので、子どもたちにとってもよほど印象深かったのであろう。

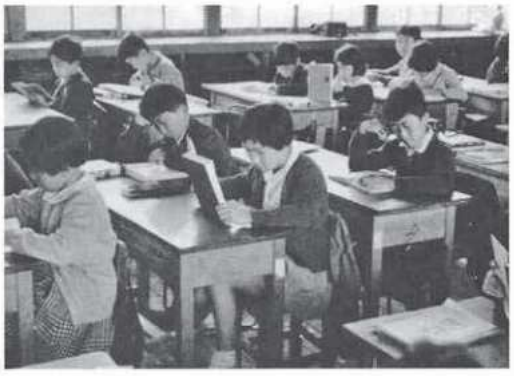
2年で編入した江國誠介君(2000年完成の小学校校舎の設計者)は明星に授業参観に来たときに、大平馨先生が源義経の「ひよどり越え」の話をジェスチャーたっぷりにするのに魅せられてその場で転校を決断したそうだ。大変魅力ある先生だったのだろう、皆が口をそろえて「彼は教師の鑑(かがみ)だった」と言う。残念ながら私が編入した時にはすでにやめておられた。

戦時中でも電車通学の児童が多く、1～6年生混合のグループをつくり一緒に登下校したことが当時の下級生にとっては楽しかったという話も聞く。それは戦時下の緊急事態に対応するための「帰宅編成部隊」であったのだが、あこがれの上級生たちに守られながらの通学が楽しくないはずがない。上級生はしっかり下級生の持ち物、防空頭巾、ボタンがちゃんととまっているかまで点検してくれたそうだ。また緊急時の練習と言って、電車通学の子どもたちみんなで阿佐ヶ谷ぐらいまで歩いて帰ることも多かったという。それ以上遠くに帰る子は阿佐ヶ谷、高円寺あたりから電車に乗ってよかったので、学校に近い西荻あたりに住んでいる人がうらやましかったとか。どんな話をしながら通学したのかなと想像するだけで楽しくなる。

当時の国民学校では原則的に男女は別クラスだったのに、明星の小学校は共学だったことも転入生には驚きだった。当時の腕白なガキ大将の一人竹内君は、頼まれもしないのに、大人っぽいアメリカ帰りの同級生の女の子をエスコートしていて、不良っぽい明星の中学生に捕まって、自分も一緒に学則違反のボートに乗せられたというほほえましい話をよくする。

戦中、戦後、食べ物がなく、お弁当を持って来られない子もいた。お弁当のおかずをガキ大将の女の子に取られた男の子もいる。食べ物の恨みは恐ろしい。彼女は70年経ったいまでも、集まるとみんなからそのことでからかわれている。

戦時中には学校の防空壕のところでB29からの機銃掃射にあい、殺されそうになったと桑原晃君は語る。勤労動員で中島飛行機に行っていた私の母も、操縦士の顔が見えるほどの低空飛行で、アメリカ人が笑いながら銃を撃って来て、近くの防空壕に飛び込んだことをよく話題にしていた。多くの同級生は楽しい思い出の方が多かったようだが、中には「私は学校へ行くのがつらかった。私の経験はみんなと違うから言いません」という人もいる。そんな人の話こそいつか聞き出してみたいと思う。



大勢の兄弟姉妹全員が明星生という家庭が私の同

級生だけでもたくさんいる。平山家、二村家、山之内家、杉浦家、田中家、山口家、山根家、瀧本家等々。学年は違うが、小島家、服部家、河角家、井野家等、なかには7、8人の子どもを通わせていた家庭もあった。私は一人っ子であったが親戚に8人明星生がいて、同じように「親族一同揃って明星」という人たちも多い。このような私立学校はまれでないだろうか。

創立当時から現在まで、明星のユニークな教育に賛同して子どもを明星に託した知識人、芸術家は数多い。例えば恩地孝四郎氏（版画家・装幀家）、武者小路実篤氏（小説家・詩人）、與田準一氏（児童文学家・詩人）、壺井栄氏（小説家）、丸山眞男氏（政治学者・思想史家）、遠山茂樹氏（歴史学者）、松居直氏（福音館書店社長・児童文学家）、三善晃氏（作曲家）、筑紫哲也氏（ジャーナリスト）など。

明星の教育は教師と父母と、そして大正自由教育の賛同者によって展開されてきた。そして多くの卒業生がボランティアとして臨海学校、林間学校に携わってきた。先輩と過ごした軽井沢寮、千倉寮の生活の中で、知らず知らずのうちに彼らから明星精神を習ったような気がする。

終戦から30年が経ったころ、私は大学の教員になっていた。教え子の一人の出身地が、私の疎開先だった温泉地であることがわかり、彼女のおかげで親切にしてくれた寮母さんの消息を知ることができた。そこから、温泉宿の女将さんになっていた「寮母さん」との文通が始まった。さらに20年ほどたったある冬、戦時中アメリカで収容所生活を強いられた日系二世の友人と二人で、その温泉宿を訪ねた。それは終戦から50年後の、奇しくも12月8日（太平洋戦争開戦の日）だった。違う立場で戦争を経験した3人は朝まで語り明かし「No more war！」、戦争のない世界を目ざすための活動を続けて行こうと約束した。どもりで小心だった私が、このように人生を謳歌できるのも明星学園の教育の成果といって過言ではない。明星は21世紀に必要な教育の場であると確信している。（本誌作成にあたり寄稿）

兵隊服と坊主頭だったころ——田中 一水（16回生）

疎開から7月にもどり、再び明星の生徒（旧制中学3年）に復帰したのは敗戦の年の11月1日だった。

東京の街は廃墟と化していたが、学園の雰囲気は案外にのびやかなもので、12月1日にはすでに第1回の、翌年5月18日には第2回の文化祭が開かれている。

とはいっても物資は極端に乏しく、私はいつもカーキ色のよれよれの服と戦闘帽を着用、古い布製の肩掛けカバンの中に、新聞紙同様の紙でできたパンフレット状教科書、混りものの多い飯にささやかなオカズの入った弁当箱を入れて登校した。

校舎はボロな木造平屋、破れたガラス窓には竹で補強された油紙を張るしかなかった。教室に照明がないのが常識だったから、天気の悪い日には黒板の字も殆どみえなかった。上履などというゼイタク品は使えなかったので、霜どけの烈しい冬には、教室はどろだらけとなった。

しかし学生生活そのものは大変楽しかった。今の高校の敷地にわずか数クラス、互いに知らない者などいなかった。お昼には、そばの田圃のあぜ径や玉川上水べりの草の上で、友人と談笑しながら食事をした。明星には垣根というものが、そもそもなかったのだ。

それに映画以外に、校外での楽しみが存在しない時代である。授業がすむと、いち早くできた野球、テニス、美術、音楽、演劇などの部活動を楽しんだものである。今のような専門学的訓練を要求されなかったので、一人でいくつもの部に入れた。特に音楽は混成合唱で、練習が女学校（今の小・中の敷地）で行われるというわけで、野球部のツワモノはみんな音楽部に入っていた。

当時、知力と体力のトップクラスは殆ど野球部に集中していたから、その合唱もなかなかのもので、度々コンクールにも通り、著名公会堂の舞台にものぼれたのであった。

文化祭や運動会も同様な理由（小・女学校と一緒）で大きな楽しみであり、ダシモノの方で全く無能な私は、上田八郎先生の指導で専ら放送、照明、また展示、司会等の雑務に精出していた。電源は会場に来ておらず、アンプも電線も暗幕もまともなものがない頃である。その準備や後片づけは、現在では考えられないほどの大仕事であり、またやりがいがあったといえる。

昭和23年3月、旧制中学5年終了、その制度も終りとなった。それで卒業してもよかったが、私はそのまま残り、4月に高3（新制高校第1回生）となった。明星はこのときはじめて、創立以来の念願である全園共学の学校として出発したのである。

先生の陣容もととのい、自治会もできた。だが、一人の少女に対する熱い想い（当然片想い）、友人達によって開眼された文学の世界を中心に私の学校生活はまわりはじめ、さきは生物にしようか独文にしようかと悩む日々であった。

昭和24年2月末日が授業の最終日、3月5日が卒業式。古い兵隊服と坊主頭の生活とも、これを機会にお別れとなった。〈※3〉

敗戦と明星——こき かほる（18回生）

私は昭和7年生まれで、昭和20年4月に明星学園の女学部に入学した。

明星は中央線吉祥寺駅から井の頭公園を抜け、しばらく歩いていく。それまで中央線にはあまり乗ったことがなかった。自宅は西武線の鷺宮で、中央線の阿佐ヶ谷駅まで2キロほども歩かねばならなかった。井の頭公園を抜けて学園までもかなりの道のりだった。一緒に初等部に入った4つ違いの妹も連れて歩いたので、通学には時間がかかった。私はそんな遠くで誰一人知っている人もいないところに入ったことが嬉しくなかった。小学校で仲良しだった友人たちのことを思い出して悲しかった。

小学校では6年生のとき、集団疎開があった。私は参加しなかった。卒業間近になって疎開した人たちは帰ってきたが、体の弱かった一人は亡くなり、戻ってこられなかった。仲良したちとはやっと会えたが、卒業式もなく卒業証書も貰わず小学校を出た。そして、親がアレコレ考えて選んだのが、遠い明星学園だったのだ。

1ヶ月程は気持ちが浮かず、親にグチを言ったりした。しかし親は優しく笑っているだけで、何も言わなかった。父親は「良い学校に入れたんだから、いいじゃないか」と笑いながら言った。が、一日一日を過ごすうち、本人にもわからない状態で気がついたら良い友達の中にいた。それからアッという間に終戦になった。

夏休み中で、昼間家族で天皇のラジオ放送を聞いた。天皇の声を聞くのは初めてだった。何と言っていたのか母親に訊くと、戦争に負けたのだという。親たちはもう知っていたらしい。子どもたちがそれを知ったらどんな気持ちになるか、可哀相な気がして知らせられなかったとも言った。その頃の細かいこと、詳しいことはみな忘れてしまったが、しかし子どもなりに辛く複雑だった。天皇の放送の後、学校に行った日も、それからすぐだったか、夏休み明けだったのか、特定の日だったかも全く覚えていないが、なんとなく不安を持ちながら中央線に乗っていた。

その日は広い校庭で朝礼があるという。私は遅刻寸前だったから慌てて列の後ろから自分の位置に追いついた。朝礼は毎日やるわけではなかった。先生方もみな前のほうに並んでいらした。

〈※3〉明星学園PTA会報『道』No.105（1983年3月1日）

園長先生のお話があるのだという。敗戦になったからだな、と思った。園長先生の話はすぐに始まった。冒頭に、「戦争に負けたが、しかし日本は変わらず神国である……」と切り出したのだ。「え？」と私は思った。話はそれからずっと続いていたが全然頭に入らなかった。反発したのでもなく、安心したのでもなく、ただ正直意外だったのだ。

そして私はそのあと、生まれて初めて脳貧血で倒れた。その頃はよく脳貧血で倒れる者がいた。その集会でも何人かが倒れて、友達や先生に支えられて教室の方へ戻っていったりしていた。その頃はみんな栄養状態もよくなかったからだろう。私はすぐに気がついて友達に支えられて起き上がったが、それからは何事もないいつもの明星の時間が流れた。その日のこと、そのときの校庭の風景はずっと記憶に残った。

明星生活は相変わらず楽しく続いた。あるとき社会科の授業で終戦をむかえた感想を書かされた。そのとき、私はどう書けばよいかわからなくて、園長先生が発した神国に関わって素直な気持ちを書いた。自分はまだ何もはっきりとは解らないこと、明星で友達や先生方に触れているとき、天気もよく明るい青空の下で、ふと空がひと皮むけたような眩しさを感じたりする。終戦前に晴れた青空は疑いなく本当の青空と思っていたが、そんなとき、もうひと皮奥にあったのかという気もしたりした。民主主義とかデモクラシーとか、保守とか進歩的といった言葉も、あるいは学校を抜け出してメーデーに行くとかいうことも、みんな今すぐには考えられない……。人間の中身のある姿というものは毎日毎日の長い積み重ねで、自ずと出来上がっていくものではないか、といったふうに、拙い言葉で書いた。

それからしばらく経って、新しく出来たらしい社会科の勉強会に入っている人から、その会で私のレポートのことが話題になったと聞かされた。そして、また少し経ってから、私が仲良しの友人等と教室の前で遊んでいるとき、社会科の先生が寄ってきて、新しく始めている勉強会に入らないかと誘ってきた。私はちょっと考えて、首を横に振った。先生はしばらく黙って私の顔をみていたが、「なぜ？」と言う。私はあらためて考えても気が向かなかったので「そういうの、嫌いなんです……」と答えた。先生は私の顔を見ていたが、黙って去って行った。私は友達のところに戻った。

明星生活は楽しく過ぎていった。やがて日本に進駐軍が入ってきた。私たちは学校帰りも友達と大勢で喋り合いながら井の頭公園を抜けて吉祥寺駅へ向かった。春などは池の辺りの緑地に進駐兵がたくさん「パンパンガール」と呼ばれた女性を引き連れて歩いていた。彼らとすれ違いながら駅へ向かって歩いていった。彼らのための掘立て小屋もたくさん作られていた。80歳の今から思うと、そんな状態をよく親たちも先生方も注意するでもなく、公園を通ってはいけないと言うでもなく過ぎたものだと思ってしまう。しかし、何事も起こらなかった。

女学部の3年が終わると、男子生徒が学んでいた校舎で、男女共学の高校生活が始まった。明星の友達は男も女も、いまだに「チャン」付けで呼び合い、80歳になった今も無邪気に真剣に付き合っている。（本誌作成にあたり寄稿）

新制中学発足の頃——松本（大類）陽子（20回生）

私がここに記すのは、1946年、女性が初めて選挙権を得た頃の話である。私は、戦時下にあった国民学校を1947年に卒業した。その4月から学制が新制になり、国民学校は小学校に、旧制中学校（男子）・女学校の3年生までが、男女共学・義務教育の新制中学校に変わったため受験は必要なくなった。

国民学校を終えた私は近くの公立の新制中学校へ入学するはずだったが、公立中学校は小学校と同居の授業で、教室不足から早番、遅番の2部授業になるなど、劣悪な教育環境を懸念した両親が、明星学園の受験を薦めてくれた。既に姉（12回生）が戦時中に卒業し、兄（16回生）が在学していたので何の抵抗もなく受験した。

そのとき初めて目にした明星学園には、戦時下のどの国民学校にもあった奉安殿（教育勅語の巻物が納められていて最敬礼を強いられた）や二宮金次郎像はなかった。校舎は素朴な木造平屋建てで玄関がなく、校庭から直接教室に出入りできるのが珍しいと思った。

入学試験は、先生方数人による、グループ形式の面接だけだった。国民学校では、先生は怖い存在であったから、言いたい事も率直に言えなかったが、明星の先生の感じは全く違った。どこか長閑で優しそうなのだ。会っただけで何でも話せそうな雰囲気で、受験生の私たちを緊張させなかった。「明星をどんな風に感じるか」という質問に、「明るい感じがする」と答えたら、「どんなところが明るいと感じるのか」と問い返され、「男女共学というところ」というと、先生方が笑ったので、つまらない事を言ってしまったと思い恥ずかしかったが、今では当たり前の男女共学が、実に新鮮に思えたのは事実である。

入学が決まり、自由奔放の垢抜けたお坊ちゃま、お嬢様（そんな風に見えた）たち初等部からの入学者約40数名と、身も心も硬くした地味な私たち公立校からの入学者約50数名が顔を合わせ、明星学園の新制中学、最初の1年生（20回生）になった。私たち中1だけ2クラスで共学だった。中2（19回生）以上の学年は、女子は旧制女学部のまま各学年1クラスで、男子はまだ川向こうの旧制中学校の校舎で授業を受けていた。教室は戦時中工場として使われていたためか機械油の臭いがところどころに残っている元女学部の校舎だった。原田満壽郎先生の記録によると、軍からガソリンを預かったこともあったらしい。

明星の教室には教壇がなかったので、先生との距離感がなく、丁寧な敬語も使わずに親しく話しができた。中1の2クラスは、講堂に一番近い2教室を使っていたので、音楽の授業にも使っていた講堂から、毎回聞こえてくる女声コーラスの「流浪の民」を覚えてしまったと、同級の濱田眞男さんはいう。

翌1948年には新制高等学校が発足し、中3（19回生）も共学になり、高1（18回生）・高2（17回生）・高3（16回生）の女子は、女学部から共学の新制高校生となって、元の旧制中学部の校舎へ移って行った。新制中学1・2・3全学年が2クラスずつの共学となり、教室も、1・3年生は元女学部の校舎、2年生の私たちは、校門に近い道路側に増設された新校舎の2教室に移った。

教科は国語、社会（修身、地理、歴史が廃止）、英語、数学、図画工作、音楽、体育、家庭だった。教科書は実に粗末で、新聞紙を折りたたんで綴じたようなものや、A5版程の分厚いものなどさまざまで、教科書の有無さえ憶えていない教科もある。数学、英語、音楽などは、先生手作りのプリントが多かった。初めての英語の担当はミス吉（よし）こと吉川喜美代先生で厳しかったが、先生が教室に入るなり“Good morning everybody”というと私たちが“Good morning Miss Yoshikawa”と返す挨拶から始まる耳からの英語の授業が新鮮だった。教科書の“Jack

and Betty" が懐かしい。理科は宮田金太郎先生と羽鳥文雄先生、講師の高木先生（電気専門）で、宮田先生の、蛙、兎、鶏などの解剖の授業が印象深い。国語は橘正薫先生、岸すみれ先生、鈴木満男先生で、その頃発行された文集『明星』はこの3先生方が編集された。音楽は高校と兼任の富永三郎先生、後に小笠原良一先生で主に混声合唱だった。図工は恩地邦郎先生と木村鐵雄先生。恩地先生（ピアノ、ウクレレ、歌が得意）は音楽を担当することもあった。数学は、染谷誠一先生、須藤亀蔵先生、山岡幸子先生だったが、教員不足だったのだろうか、1年の時の数学は、社会の原田満壽郎先生から習った。また、社会の角館喜和先生が、英語（19回生の）を担当したこともあった。体育は榎本法達先生で、デンマーク体操をタンバリンを叩きながら指導され、熱心に叩くあまり、ついているシンバルが飛んできたこともあった。中2の冬休み、希望者だけだったが、講堂で榎本先生の体操教室があり参加した。例の体操や跳び箱、マットワークを皆が楽しみ、寒さも気にならず年末年始も休まず通った。最終日、皆で教員室の達磨ストーブを囲んでいると、照井校長が「これ、皆で食べろ……」と言ってつるし柿を縄ごと目の前に放り出してくれた。参加者への褒美だったような気がする。中学の体育では、ほんの一時期だったが、女子だけ山下和子先生からモダンダンスを習い、運動会に発表したことが一度だけあった。家庭科は高須いち先生。主食がさつま芋や進駐軍の放出物資の小麦粉や豆という食糧難の時代で、割烹の時間は、先生が教材に苦心されたのだろう、さつま芋の茶巾絞りを習った。その間、男子は草取りや校舎裏の掃除をしていた。

昼食は各自持参のお弁当で、白飯の人がいたかも知れないが、殆どの人がさつま芋や小麦粉、豆を使った代用食だった気がする。先生方も同じような昼食を、私たちと一緒に教室で摂った。担任の恩地先生のお弁当がさつま芋ではなくてジャガイモだったのが、何だか洒落ていると思った。

当時、校庭は中学校の校舎前の中庭と、現在と同じ初等部校舎西側の校庭があり、野球やソフトボール、全園運動会（午前中は競技、午後は仮装行列）等に使った。

中庭には今は見上げるほどの大木になったプラタナス（当時は苗木ほどの大きさで、プラタナスであることも知らなかった）があり、その辺りは戦時中、野菜畑であった名残りで、でこぼこして荒れていた。でもそんなことは誰も気にせず、ほんの僅かの休み時間もそこでキャッチボールや縄跳びなどを楽しんだ。時には、講堂の脇にあった運動用具置き場から、古びたラケットやボールを探し出してきて、先生たちとネットなしのソフトテニスをしたりしたが、金ぶち眼鏡のお洒落な英語の講師片桐先生が、当時としては特定の人しか経験できなかった硬式ボールのテニスを教えてくれたこともあった。

夏休みが近づくと、「サマースクール」と称して、好きな教科を選択して全学年一緒に学習し、その成果を発表し合った。私は絵画と英語を選択したが、好きなことを思い切り学習できたので、その夏休み前の1週間は満ち足りた気分だった。そして中2の夏休みに、「戦後初めての試みなので、とりあえずクラス委員だけで試験的に寮生活をしてみる」という先生の説明があって、2・3年生のクラス委員だけが軽井沢の上野原寮で1週間の夏季生活をすることになった。出発の前日、各自最寄の駅から沓掛（現中軽井沢）駅まで、当時のチッキ便（鉄道手荷物輸送）で寝具等を送ったりした。上野原寮は、照井先生が懇意にされていた堀込さんという地元の人が留守番をし、何かと世話をしてくれた。炊事は3食とも自炊した。寮の脇を流れる小川の水を汲んで天秤で担ぎ、風呂桶に運んだりもした。


軽井沢・上野原寮での生活

この夏季生活がクラス委員だけだったのが、64～5年経った今になって何故か不思議に思え、記憶違いかと、共に同じ立場で寮生活を送った同級の上田（水野）和子さんに聞いたが間違いなかった。東京はまだ焼け跡が残り、一軒二軒とバラックが建ち始めた頃だったから、木造平屋建ての寮の庭の唐松越しに見える浅間山、郭公の鳴く、唐松や白樺の林の軽井沢の自然が夢のようだった。浅間山麓の峰の茶屋まで往復歩き、明治の頃、欧米人によって拓かれたという旧軽井沢へも寮から歩いて行った。そこの高原の森に点在する別荘というものに目を見張り、2つの老舗ホテルやゴルフ場は進駐軍に接収されていたが、異国情緒豊かな旧軽街道の近くにある教会やテニスコートは都会のそれとは違った趣きを見せ、軽井沢は私にとって衝撃的であったし、自然と一体化した寮生活に感動したのだった。この夏季生活の結果に先生方が満足されたのか、次の週から中3の2クラスが交代で寮生活を送り、翌年から中学校の修学旅行として軽井沢で夏季生活を行うのが恒例となった。後に増築され、部活でも寮を利用するようになった。

部活といえば、新制中学に変わった当初は、野球部、美術部、文芸部、演劇部、新聞部として高校生とも交流をしながら活動していたが、予算がありコーチや顧問が決まっているような組織だった部活動ではなく、活動日も決めずに、自由に趣味を同じくするものが三々五々集まって、自主的にそれぞれの活動を楽しむという形だった。当時、野球部でピッチャーだった同級の岩佐陽さんが「特訓こそなかったが、対外試合は何回か経験した。ある時、どこかの大学付属の中学校硬式野球部と軟式で試合をしたが相手のボールが早くて打てなかった」と野球部の活動の一端を話してくれた。

中学の新聞部は、1級上の小森黎さんが中心になって、森清涼子さんらと新聞部を立ち上げ新聞名を明星行進歌の歌詞から『黎明』としたと、編集長本人が言っている。最近、学園で整備中の資料編纂係りから、原稿の参考にと見せられた創立25周年記念の『青雲』と『黎明』の合併号に、中学校の編集兼発行責任者の一人として私の名前も載っているし記事も書いているので、私も『黎明』の仲間だったかもしれないと思ったが、中学校時代、放課後は絵ばかり描いていたのでその記憶がなく、我が目を疑った。暫く考えた末、中3のある日、『青雲』の編集責任者だった高2の本谷昭さんから合併号の原稿を依頼され、何だかよく分からないまま引き受けてしまい、作文が大の苦手なので困り果てた記憶が甦った。

その頃、高校新聞部が発行していた『青雲』は、自主的な活動をしながら自治会機関紙の役も担っていたようだ。発行者に自治会長・柴田芳男さん（17回生）や同じく山川貞雄さん（18回生）の名がある。小森黎さんがいうには、「高1になって新聞部に入ったが、自治会の副会長に選出され、機関紙の編集もするように言われたのをきっかけに、『青雲』という新聞名を、明星の星の字を一字取って『星雲時代』にし、やはり機関紙の役目もしながら編集した」ということである。しかし、創立60年誌『明星の年輪』によると、戦時下の旧制中学の頃も『星雲時代』と題して、生徒間で新聞なのか文集なのか定かではないが、発行されていた記録がある。1949年最後の『青雲』第6号で、発行者らが、復刊『星雲時代』として、部員や作品の募集を呼びかけているのが、

その証だと思う。旧『星雲時代』が新制高校になって『青雲』になり、小森黎さんが編集長になって『星雲時代』と題したのは偶然のようだ。


PTAバザーで自治会活動のPR

新聞部の件で、高校では自治会という言葉が出てくるが、私が中3の時（1949年）、クラス委員がいたのは確かだが、クラス委員会が開かれた記憶がなく、自治会としての活動は高校へ行ってからの記憶しかない。しかし、定期的ではなかったが、講堂で生徒集会が開かれた。これは先生側が召集したので、生徒が自主的に集まったのではなかった。でも議長と副議長は自分達で全学年から選出し、議長に同級の岩佐陽さんが選ばれ、課題は忘れたが自由に発言し討論した。先生方は遠巻きに見ていたが、角館先生は盛んに発言した。それに対し、同級の川元良夫さんが「自分達の問題に、先生は喋りすぎる……」と鋭く発言した。それを議長がどう治めたか忘れたが、あの時期での川元さんの発言が印象にある。角館先生は「自分の目で見、自分の耳で聞き、自ら行動して欲しい……」というような話をされたと思う。会が終わって講堂を出るとき、誰にいうでもなく「人間、批判の精神がなくてはだめなんだよな……」と呟かれた声が耳元に残っている。

私の中学校時代は、正に戦後の復興期、先生方は多大なご苦労を背負って教壇に立たれ、生徒の自主的な自治活動も前進を試みられていたに違いない。（本誌作成にあたり寄稿）

よき市民としての教養——高見澤 たか子（21回生）

中等部のとき、なぜか突然、学園の畠でとれたというサツマイモがおやつに出たことがあった。「どこの畠？」と一瞬不思議な気がしたが、みんな喜んで食べた。深刻な食糧難の当時、母親たちは毎日の弁当をどんな思いで作っていたことだろう。“欠食児童”もいたかもしれない。あのお芋は、もしかしたら先生方の必死の心配りだったのではないか……

そんなことに気付くのも、大人になってからだ。あの困難な時代、先生方は可能な限り「不安」や「差別」とは無縁に、子どもたちが育っていくことに力をふりしぼられた。

高校に進んだのは1951年。日本がまた戦争に巻き込まれるのではないかという不安が社会をおおっていた。前年には朝鮮戦争が勃発。翌月には警察予備隊が創設された。講和条約は、中国、ソ連など共産圏をはぶきアメリカとのみ。戦後輝かしい民主主義をもたらしたアメリカに対して、疑問と不安がつのっていた。

落ち着かない気分は、思春期の子どもたちにも少なからず影響を及ぼしていた。米ソの対立が深まり、再軍備の不安が高まっている、そうした問題をどう受け止めればいいのか。初めてぶつかる悩みだった。私にとってその突破口になったのが、文芸部の活動だった。

手元に、薄みどり色の表紙でB5横サイズ、細いリボンで閉じた謄写版印刷の文集が1冊残っている。奥付には「明星　第5号　昭和27年4月12日　明星学園高等学校文芸部発行　文芸部員　井出潔、志賀公栄、高見澤隆子、永島純代、服部道夫、浜田真男、藤井孝一、丸山雄三、柳沼美紗子、古木瑞子、佐藤遥子」とある。



『明星』は、昭和24年の創立25周年記念号以来、1回も発行されていなかった。そのことに気づいた部員たちが発奮して、編集にとりかかった。2年生と1年生の急ごしらえのメンバーだったが、その仕掛人が押川昌一先生だった。

押川先生は国語を担当されていたが、私たち1年生は最初の授業で度肝を抜かれた。黒板に漢詩を書かれ、よく通る声で読み上げられた。「われは北斗の星にして千年ゆるがぬものなるを　君が心の天つ日や　あしたは東暮れは西　つまり恋の歌です……」

私たちは、口をあんぐり開けたまま、このロマンチックな漢詩の解説を拝聴した。その押川先生が、いつ私たちに『明星』の再刊を呼びかけられたのか、もう覚えていない。だが、先に挙げたメンバーが集まり、文集は完成した。

文集トップの頁は、アメリカの高校生への呼びかけ文で、日本語と英語で書かれている。

> アメリカの友達へ
>
> 私達は日本の東京郊外にある明星学園高等学校文芸部の者です。私たちは今、若き情熱と友愛をこめてこの手紙を君達に送ろうとしています。
>
> 諸君達、私達と同じアメリカの少年少女達は今どんな事を考えているのでしょうか。
>
> …中略…今の世界情勢を見ると、国と国との信用が薄くお互いに理解しようと勉めないで、勝手に他国の悪口を言い合っています。そしてそうした無理解のために戦争も起こりやすい状態なのです。…中略…激烈な戦争の後に来る静かで豊かな平和などと言うものは考えられません。廃墟と埃だけが残るでしょう。
>
> ですから私達はどんな名目であろうとも平和と人類の幸福を奪い去る戦争を断じて避けるべきです。私達のこうしたささやかな手紙が遠い距離にある人間同志を理解と信頼に導き、やがてその事から今後の戦争を防止する為幾分でも役立つようなスタートラインを発見することが出来るならどんなに幸福なことでしょう。（原文のまま）
>
> 1952年3月　文芸部員

アピールはソ連の高校生たちにも送りたかったが、まずは手がかりのあるサンフランシスコのロイヤル・ハイスクール他数校に送った。この文集を作り上げるまで、私たちは押川昌一先生を囲んで、幾度となく討論の機会を持った。「どうすれば、戦争を回避して、よりよい社会を作ることができるのか」ということを主題に論争をした。武蔵野の自然の中でのんびり育った私たちが、初めて遭遇する社会との接点、おそらく青臭い議論の連続だったと思う。だが押川先生は対等に向き合ってくださった。当時先生は劇作家として、次々に作品を発表されていて、中でも明星学園らしき高校を背景にした『雨宮ちよの処分』は、幾度も上演されていた。劇中、上田八一郎先生そっくりの校長先生が登場するが、それは、上田先生に対する押川先生の深い尊敬の念の表れだった。

『明星』第5号は、冬の寒さの中での作業で、暖房のない教室はコートを着たままでも寒かった。照明もなかったので、用務員のおじさんが気の毒がって、ろうそくを持って来てくれたこともあ

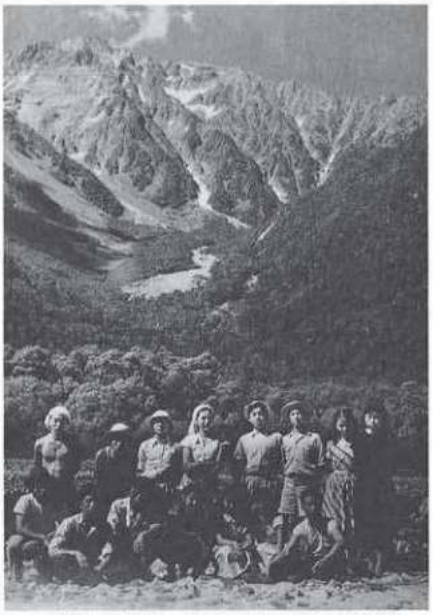
った。いまでもあのろうそくの火の輝きをはっきりと思い出す。

文芸部の枠に留まらず、押川先生が仲立ちをされ、「会談」と称して学年を超えて、数人で話し合いの場を持った。「会談」を申し込んだ中には当時、"政治活動"が原因で都立高校を停学になり、明星に転校してきたツワモノもいたが、会って話してみれば、私たちよりずっと温和な常識人で、「世の中の判断って、案外あてにならないな」とつくづく思った。

こうして私たちは、社会のこと、世界のことを自分に引きつけて考えていく習慣、あきらめず対話を続けていく努力、いわば"よき市民としての教養"を、身につけたと思う。そしていまでもそれは、私の生きる力になっている。(本誌作成にあたり寄稿)

高校山岳部秘話——小森 黎 (19回生)

高校2年の春、新任の加藤信夫先生が無類の山好きと知り、すぐに顧問になって頂いた。その最初の山行で、とんでもないハプニングが起きてしまった。部長の伊藤先輩の発案で、それまで経験の無かった沢登りを決行することになり、丹沢山塊の雄峰である大山を目指す水無川遡行が選ばれた。


山岳部、上高地→穂高(1951年7月31日)

6月下旬の早朝、小田急線の渋沢駅に降り立った一行は、水無渓谷入口の大倉へ急ぎ、沢登りを開始した。登山口からジグザグに山道を歩き、尾根伝いに山頂を目指すのは体力を消耗するが馴れたものだ。しかし、緩やかな流れに沿って遡る沢歩きは楽すぎて勝手が違い、果たして頂上に辿り着けるか戸惑いが生じた瞬間、大きな滝が現れた。

滝の高さは10メートル位あり、加藤先生が登り方の手本を見せてくれた。滝の左右どちらかをロッククライミングの要領で、両手両足を上手に使いながら攀じ登る。水しぶきを浴びながら滑らないように登攀するのはスリル満点だった。滝を登りつめると再び沢の遡上が始まる。下界を見下ろしながらの山歩きとは異なり、両側に聳える山を見上げながら進むのは未知の世界だった。

三つか四つの滝を越えた頃には、みんな鼻歌まじりで登攀していた。最後に現れたのは高さ15メートル以上ある巨大な滝で、これを越せば沢の遡上は終わりだった。加藤先生が先頭を切り、下級生、上級生の順で後に続いた。半分ほど登った頃、突然すぐ横をワァーと叫びながら落ちていく姿があった。ドボーンと大きな音が滝つぼから聞こえると同時に「加藤先生が落ちた！」という声がした。

さいわい怪我ひとつ無く、ズブ濡れの着衣を乾かしながら、一同申し合わせたのが「このことは内緒にしよう」という約束。60年以上も前の秘密で、とっくに時効だろうからここに明らかにする。

ささやかなアクシデントをもうひとつ。毎年3月には恒例の卒業生送別山行が雲取山頂上で行われる。その年は前夜、スキヤキパーティを雲取小屋で催すことに決まり、のちに信濃毎日新聞編集局長を務めた多賀清雄君とふたり、麓の町で牛肉や野菜を調達したあと、先行の岳友たちを

追った。

東京都最西端の雲取山は標高2,000メートル余。この季節、山頂付近はかなりの積雪量で冬山装備が必要だ。雪を踏みしめながら進むこと数時間、ふと気が付くと母から借りたロンジンの婦人用時計が腕に無い。まだ時計が高価だった頃ゆえ、ふたりで雪道を引き返して探したがなかなか見つからない。行きつ戻りつするうちに暮色が迫り、激しく雪も降り出した。山の夜は急速に訪れ、懐中電灯の明かりだけが頼りだ。



高校山岳部、槍ヶ岳の肩にて（1951年8月2日）

行けども行けども山小屋の灯は見えず、雪量が増えて行く手の山道はさだかでない。そのうち誰か通ったような足跡に気付いた。「こんな時間に誰だろう」と呟くと、多賀君が「僕たちの足跡じゃないか」と叫んだ。靴を合わせるとピッタリ。なんと峰の周囲をグルグル廻っていたのであった。

ふたりとも厳しい寒さで震え出した。雪洞を掘るしかないと覚悟を決め、山側の雪を掻き分け、小さな穴を作って滑りこんだ。からだを寄せ合い眠らないよう努めていたが、知らぬ間にウトウトしていた。夢の中で犬がワンワン吠えていると思った時、「大丈夫か」と声を掛けて山小屋の主人が現れた。

「やれ助かった」と雪洞から這い出て登ること僅か200メートルで雲取小屋に到着した。なんと山小屋の直下に雪穴をこしらえていたのであった。先着していた一行は「吹雪で登頂をあきらめたのだろう」と全員就寝中。主人いわく「あんまり犬が吠えるので、もしやと探しに出た」。戌年の私が犬に救われた次第である。（本誌作成にあたり寄稿）



山岳部、谷川岳ガレ沢口にて
（1952年7月22日）

＜構成：依田 好照＞

3　小・中・高一貫教育への始動

(1)学園一体化への志向

新体制の発足

敗戦の翌年、赤井米吉理事長・学園長が教職追放によって学園を退き、理事のなかから市村今朝蔵氏が推されて理事長に就任した（1947年）。市村氏は明星の元保護者で、学園寮の建設用地として軽井沢の土地を寄付された功労者であった（第1部94頁参照）。戦後も大山郁夫の後をうけて早稲田大学で政治学を講じながら、学園経営に尽力されていた。

学園長は置かず、照井猪一郎が小学校と新制中学校の校長、上田八一郎が新制高等学校の校長に就任することになった。

1947年（昭和22）に新制中学校が発足、翌1948年（昭和23）に新制高等学校が発足して、創立以来の宿願だった男女共学体制はひとまず達成された。

その年、1948年の5月、小・中・高全園の職員会議で、明星学園の教育方針が新憲法・教育基本法と照合しながら再検討され、創立以来めざしてきた教育理念と基本的に異なるものではないことが確認された。以後、学園全体に関わる重要案件は全園職員会議で討議されるようになった。

一方、全国的に高まった民主化運動を背景に、この年6月、教職員組合が結成され、教職員のほとんどが加入し、中学校の橘正薫が委員長に選ばれた。全園職員会議の定例化と教職員組合の発足は、玉川上水をはさんで校地が離れ、日常的な交流が少なかった小・中・高の教職員を結びつける役割をはたすことになる。

また、戦時中は中断していた軽井沢上野原寮、南房総千倉寮を宿舎とする夏季生活が復活し、明星祭も復活して以後盛大に行われることになる。

このような動きのなかで、教職員のあいだに小・中・高一体化の論議が高まり、10月には三部（小・中・高）機構改革準備委員会が発足した。

しかし、この時期の学園は順風満帆というわけではなく、いくつもの喫緊の課題を抱えていた。新制度に対応する施設・設備の補充、老朽校舎の改築の問題。また、公立学校教職員の半分近くか、せいぜい3分の2程度という劣悪な教職員給与の改善、等々。今日とちがい、私立学校に対する国や東京都からの補助はなく、必要とする資金の調達は保護者にお願いするしか途はなかった。保護者も裕福な家庭ばかりではなかった。いや、それどころか多くの家庭は、敗戦後の深刻な経済情勢のなかで、なんとか家計をやりくりしながら、我が子の教育のために授業料を工面しているというのが実情ではなかったか。

学校日誌の記録によれば、この年の9月、高等学校には生徒や教師の靴の修理のため週3日、靴職人が来校する。10月には高校新校舎のガラス54枚が盗まれる。そういう世相であった。

『明星 創立 25 周年記念』

翌1949年（昭和24）は学園創立25周年の年であった。11月、中学校のクラブのひとつ文芸部と、高等学校の文芸部との共同編集による『明星 創立25周年記念』が刊行された。編集発行者代表は中川日出男、高等学校3年生（17回生）。編集委員として中川をはじめ高等学校1·2·3年生14名、中学校2・3年生14名の名前が記載されている。

作品は全147篇。小学生の詩・作文・日記、中・高生のエッセイ・詩・短歌・批評が主体で、ほかに卒業生・元教師と現校長が寄稿。さらに、寄稿をお願いしたと思われる父母（保護者）の



なかの著名な人たち、たとえば坪田譲治・武者小路実篤・武田祐吉・古谷綱武・松本正雄・片山敏彦・舟木重信・與田準一など各氏の詩文が掲載されている。

巻頭の照井猪一郎小・中学校長の文章は、本誌『明星の年輪』にも一部転載されている「明星誕生ものがたり」の初出全文。また、記念文集に収められた上田八一郎高等学校長の「二十五周年の回顧」は、これも本誌に資料として使われている。

さらに留意すべきは「編集委員一同」の名で書かれた「編集を終って」の内容である。

冒頭「われらの明星学園は創立二十五周年の日を迎えた。自由な明星を愛するすべての人々に、この書をおくる」として、つぎのように述べる。

> 私たち文芸部が記念誌の計画をはじめたのは、夏休み前の6月だったから、本書が出来上がるまでに正確に5カ月の月日がたった。その間、照井、上田両先生をはじめ編集印刷の方面を指導された橘、押川両先生、そのほかの諸先生から有形無形のあたたかい激励と支持とをあたえられた。この記念誌「明星」の一貫したねがいは、初等部、中等部、高等学校の所謂学園三部生徒の友愛と協同とを、ほんとうに現実にかちえようとしたものであったから、生徒作品の選定などの煩雑な仕事の多くを、各部の先生におねがいしなければならなかった。

「橘、押川両先生」はそれぞれ中学校、高等学校の国語科教師で、それぞれの学校の文芸部の指導を担当していた。「両先生」は生徒にも信頼が厚く、教職員間では着実に小・中・高一体化を進めていこうとする運動の中心的人物であった。

「編集を終って」の引用をつづける。

> この記念誌が、いたずらな追憶のために計画されたものでないのと同じに、私たちも編集の思い出に耽ろうとは思わない。ただ、私たちは知った。考えられた全体の予想を、生きた形にまで作り上げるには、こまかい部分に対する日常の着実な実行がほんとうに大事なのだということを。
>
> 全体と部分の関係——それは、未来に対する現実の大切さと云いかえることが出来よう。百頁にみたない「明星」の編集が教えてくれたこのことを、私たちは学友諸君に告げる。
>
> より大きい全体、さらに遥かな未来に向かって、いま明星は出発しようとしている。学園に祝福あれ。私たちは、明星のあらたな未来に向かって、本書をささげる。

いま、この「編集を終って」を読むと、敗戦から4年後のこの時期、学園が「より大きい全体」「さらに遥かな未来」に向かって出発しようとしている息吹が、教職員だけでなく、在校生、少なくとも高校生のあいだにも強く自覚されていたことを教えられる。

父母に支えられて

1950年（昭和25）6月、市村今朝蔵理事長が大学の講義中に倒れて急逝した。早稲田大学政経学部葬には明星学園からも全教職員が参列した。

市村理事長を失ったことは大きな痛手であったが、翌1951年（昭和26）2月、元学園保護者の神田五雄（かずお）氏が後任の理事長に就任された。神田氏は、毎日新聞の主筆という多忙な身でありながら、学園の経営に尽力され、教職員の待遇改善と施設増強が急務であることを父母に訴え、窮状を救ってくださったのである。



中学・高校の文芸部発行『明星』

全国で新制中学校・高等学校が発足した頃から、私立中・高のなかでは再起不能の学校が続出していた。大学の付属校として吸収された学校もあり、とくに中学校では休校あるいは廃校を余儀なくされたものが数十校に及んだ。

明星学園がきびしい財務状況のなかで存続し得たのは、歴代の理事会・教職員の忍耐や努力でもあるが、それを支え励ましてくださった学園関係者、とくに父母の皆様のお蔭であることは改めて言うまでもない。

以下、明星学園における父母の貢献のひとつの例証として、ＰＴＡの誕生の経緯をたどってみたい。

学園創立3周年目の1927年（昭和2）、「明星学園母の会」が生まれた。それは父母会でも後援会でもなく、母親たちの自主的な会で、学園の援助もするが、自分たちの文化活動をするのが主目的であった。そして、学園が中学校・高等女学校創設の問題に悩んでいたとき、この「母の会」が父親たちを動かして、中・女学校設立の資金づくりを目的とする「明星学園後援会」を発足させたのだった（第1部60 ～ 70頁参照）。

その後、戦争中は活動の機能が中断していたが、戦後2年目の1947年（昭和22）6月、「明星学園後援会（第2次）」（会長：二村鍾氏）と「母姉の会」（会長：神田亀代枝氏）が結成され、「母の会」は解消した。結成の当初の目的は、当時学園が最も急を要した、新制中学校の4教室増築を含む第1期事業計画を後援することであった。

2年後の1949年（昭和24）は創立25周年に当たっていた。第1期事業計画も一段落し、つぎの第2期事業計画に発展する気運も生じたので、「後援会（第2次）」と「母姉の会」を一本立てに改組して新組織をつくることに意見一致して、「明星学園父母と教師の会（ＰＴＡ）」が新たに発足した。「ＰＴＡ」はもともと1946年にアメリカ教育使節団によって導入が提唱され、ＧＨＱ（連合国軍総司令部）による指導のもと全国的に組織化されたもので、発足した当初の明星のＰＴＡも外からの貰い物の感をぬぐえなかった。父母と教師の熱意と努力によって、学園にふさわしい組織に改組され、新発足したのは1952年（昭和27）6月であった。

新会長に就任した高田止戈夫（しかお）氏は、新発足に際して、つぎのように述べた。

> いうまでもなく学園は、その根本である教育の面に於て特色のある性格のもとに、ゆるぎのない地歩を印していることは疑いのない事実でありますが、実に将来に向ってこの存在を強固にし、より大いなる発展を期するためには、ＰＴＡの側面的な活動を必要とすることは

申し上げるまでもないところであります。

最近その必要を痛感する声が父兄並に職員の両面から期せずして高まり始め、今回新たな組織の編成と共に従来の在り方を一擲し、ここに全く改まった精神のもとに新発足をすることになりました。まことに清風颯々の感があります。

学園創立以来の歴史から見ても、父兄と学園側とが緊密に一体をなして今日の成果を遂げた訳で、従ってそこに他の学校には見られない学園独自の性格を形成して来たのであります。今回特に父兄側から積極的な発言が顕著になったことも、言わば本来の姿に還ったものと申すべきでありましょうが、何れにしてもかかる機運に向ったことは御同慶の至りに存じます。後略…」〈※1〉

新発足のＰＴＡでは、Ｐの側としては小・中・高校の各学級から2名ずつ代議員を選び、その代議員のなかから各学校3名、計9名の常任委員を選んで常任委員会を構成した。高田会長は会報を通じて、ＰＴＡの活動の基盤は各学校・各学年・各クラスの父母会であって、常任委員会はその父母会の意見を集約してこれを実行に移す執行機関にすぎないことを強調し、父母会の活性化を呼びかけた。

また、文化部、編集部、厚生部という3つの専門部を設け、各学級から1名ずつ選ばれた部員によって構成した。

文化部は講演会・講習会などの企画、コンサート・観劇会など会員相互の親睦をはかるための仕事を担当した。編集部は会員名簿の作成、会報の編集・発行をおもな仕事とした。会報には学校行事の報告や父母・教職員の投稿も増え、制服賛否の論議や小・中・高の教師と父母の座談会の記録など、多種多様な内容が掲載されていく。厚生部は児童・生徒の厚生、保健、養護の改善を援助したり、文化部とも相談してバザーその他の収益事業を行い、会員の親睦をはかるとともに会の財源を豊かにすることにも努めた。

これらの活動は、その後も時代の変遷とともに修正・改善を加えられながら、継続されていくことになる。

(2) 三部合同劇『杜子春』

青年教師たちの気勢

旧い卒業生や教職員の間で、小・中・高合同の行事のひとつとして語り草になっているものに、『杜子春』の上演がある。

卒業生（5回生）で後に高等学校長を務めた恩地邦郎も、劇の上演に情熱を傾けていた青年教師の頃をふり返り、1952年（昭和27）、創立記念日の祝賀行事として小学校、中学校、高校の三部合同劇『杜子春』を上演した時のことを回想している。

ことの次第は吉祥寺の街からはじまる。戦争が終わって数年、当時の吉祥寺は大きなビルもなく、駅の北口の広場もなく、いまは「サンロード」となっている「駅前通り」はバスが軒をかすめて通っていた。南口の井の頭公園側も、まだ武蔵野の野趣をとどめ、静かなたたずまいを保っていた。

恩地は語る。

〈※1〉 高田止戈夫「新発足に際して」『明星学園PTA会報』No.1（1952年6月）

この頃、吉祥寺駅を利用する教師は多く、北口に越え、源来軒という中華料理店か、カストリ横丁といわれたマーケット内の飲み屋に寄っては人生、教育、学校運営など談論風発、時に激論に及ぶこともあった。そんなある時、三部の合同の劇をやろう、芥川の『杜子春』だ、一挙に盛りあがった。

この提案は当時小学校の中心的教師であり劇作家でもあった佐藤加寿輔さん（1992年物故）が突然持ち出し、数人の青年教師の情熱に火をつけることになったのだ。〈※1〉



酒の勢いもあったが、職場の現状に対する日頃の鬱積した感情が爆発したというのが実情であった。新制度になって組織が整えられ、小・中・高の連携も進んだかにみえる。しかしそれは形式的・表面的なことであって、現実はそうではない。肝心の照井・上田両校長の関係は、反目というほどではないが、依然としてしっくり行っていない。したがって、学園の教務運営は小・中・高三部主任連絡会が行い、その主導によって全園職員会がときおり開かれるが、日常的な実践の交流はないに等しい。小・中・高の教職員の多くは依然として小は小、中は中、高は高、それぞれのタコ壺に籠っている。この状況をぶち破るために、力を合わせて、ひとつ、創造的な実践をやろうじゃないか。演劇好きの青年教師たちはこうして立ち上がったのである。

脚本は中学校の恩地邦郎が書き、演出は新進劇作家としても知られる高校の押川昌一。音楽劇とするために作曲家・富永三郎氏に参加してもらった。富永氏は卒業生（3回生）、元高校の講師で、当時はＮＨＫ映画音楽などの作曲家として知られていた。高校合唱団20名と、富永氏の委嘱した弦楽四重奏団が参加し、演奏は厚みを加え、劇効果も上がった。合唱練習を直接指導したのは中学校の小笠原良一。同じ中学の木村鐵雄が舞台装置を手伝った。

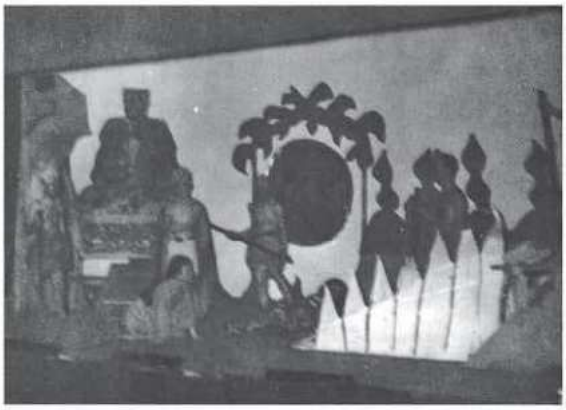
ほかに数人の教師が協力し、参加した児童・生徒は100名を超えた。主人公の杜子春には、高校1年生の富永一矢（22回生）が起用された。

2月になると練習に入ったが全体的な練習はなかなか出来ない。3月からは日曜日に集まり3月の期末休み、そして5月の連休を総練習にあてた。

5月18日上演に漕ぎつけた。わずか7メートルの奥行、そのホリゾントの前の桃畑に向かって杜子春が歩き出すと、幕が引かれ、会場になんともいえぬざわめきに似た感動が漂っていた。

（会場となった講堂は1964年、現在の中学校校舎建築の際撤去されたが、南北に約15メートルの長さに建っており、体育、儀式、演劇、音楽会などに使われていた。）〈※1〉

〈※1〉 恩地邦郎「合同劇『杜子春』のこと」『明星学園報』No.42（1994年1月）



上演のあとで

「この行事について称賛、批判、交々であったが、特筆すべきは発足して間もなかった高等学校自治会が正常な活動ができないということがあり、劇が上演された後、抗議を申し入れてきたことであった」と恩地は書いている。

抗議の内容については、別の機会にこう語っている。「終わってから高校の自治会から10人ぐらいやってきて、厳重抗議を申し込まれたんですね。今度の劇の上演は小学生も、中学生も、高校生も、自治活動としてやったんじゃない。演劇部の活動でもない。生徒の意見も聞かないで、先生が何人か組めばなんでもできるなんて、そんなばかな話はないと。発足して間もない自治会で、元気がいい生徒たちでした。」〈※2〉

やり方については教職員の間にも批判があった。そこで翌1953年には、小・中・高三部の指導者が執筆・指導を分担し、宮沢賢治の「やまなし」「注文の多い料理店」「よだかの星」などを四幕にまとめ、『イーハトーヴォ物語』にして上演した。小学校からは退職した佐藤加寿輔に代わって鈴木満男と寒川道夫、高校からは武者小路穣も加わった。寒川だけが40代半ば、鈴木も武者小路もまだ30代はじめの青年教師であった。

以上の事実から重要な事柄がいくつか読み取れよう。

ひとつは、この時期、小・中・高校の若手教師たちが、閉鎖的な職場の壁を打ち破り、協働して創造的な実践をつくり上げようとこころざしたこと。そして、これらの若い力が演劇のみならず、やがて学園の一貫体制を築くうえでの牽引力になったことである。

また、恩地が頼もしげに語ったように、発足間もない生徒自治会が、学園の自主自立の精神を体得しつつ、教師をも堂々と批判する力をもつに至ったことである。

それから、この演劇体験が一人の生徒に、その後の生き方を左右するほどのインパクトをあたえたという事実である。杜子春を演じた高校1年生の富永一矢（22回生）は、この体験を通じて演劇の道に進むことを決心して俳優となり、後に俳優座劇場の支配人を務めることになる。

明星学園教育と私——富永 一矢（22回生）

1942年に大森の国民学校に入学した私は、家の事情で翌年の秋、明星学園に転校した。

初登校日の朝、母親に「今日は遠足ではないよね」と何回も念を押して出かけたのだが、学校に近づくとみんなリュックサックを背負っているではないか。だからあれだけ念を押したのに……と意気消沈して教室へ向かった。なんと、普通の学校と違って教室の入口が直接校庭とつながっている。びっくりしている私を、担任の大平馨先生は「なんだ、君は一人で来たのか」と呆れ顔でご覧になった。この学校では教科書などは学校に置いておき、リュックサックで弁当と水筒を持ってくるのだということを知ったのは通い始めてからだった。

こうして明星学園での生活が始まったが、私は仲間とうまく調和できず、駆け足をしてもビリ、手旗信号を読むこともできず、先生に指されれば黙り込む、今で言う落ちこぼれそのものだった。想い出としては大平先生がボール紙でお作りになる蒸気機関車の模型が印象に残っているぐらいだ。

そうこうしているうちに空襲が激しくなり疎開。戦後はまた明星に戻るのだが、疎開中ほとん

〈※2〉 恩地邦郎「明星学園の芸術教育」、明星学園史研究会第6回（1999年11月）

ど学校に行っていなかったので、1年下の学級に編入されることになった。学校としては問題児が戻ってきたのでなんとかしなくてはしょうがないということで、佐藤加寿輔先生が「火口箱と兵隊」というアンデルセン童話から芝居を創り、私を主役の兵隊役に選んだのだった。そこで私は初めてみんなの前で言葉を発し、そして皆は私の言葉を一生懸命に聞いてくれた。あんなに嬉しかったことは初めてだった。

中学に進学し、恩地邦郎先生との出会いで私はさらに演劇に熱中していくのだが、その前に体操の榎本法達先生との出会いがある。

榎本先生は日本にデンマーク体操を導入された斎藤先生のお弟子さん。「あの子は跳び箱1段上がることもできなかった子で、とても体操は無理」という両親を説き伏せ、体操部に入部させてくださった。私にとってこの転機は本当に大きかったと思う。徒手体操は勿論のこと、マット体操、器具を使用しての空中転回などもこなすようになり、リーダーの訓練も受け、ひ弱だった身体も、痩せてこそいたもののしっかりしてきた。

何より大きく変わったのは自分のしていることに自信が持てるようになったことだ。これがあらゆることを大きく変化させた。

1952年、中学3年生のとき、創立記念日の祝賀行事として小・中・高合同の演劇を上演する企画が、佐藤加寿輔先生の発案により立ち上がった。

芥川龍之介の『杜子春』を中学校の恩地先生が音楽劇として戯曲化し、高等学校の押川昌一先生が演出。音楽は前年まで高校で教えていた作曲家の富永三郎先生、演奏はプロの音楽家のみなさん。合唱練習は中学校の小笠原良一先生が指導し、舞台装置は中学校の木村鐵雄先生。他にも数人の先生が関わり、参加した小・中・高の生徒は100名を超えるという全校挙げての大事業となった。

演出の押川先生は国語の先生だが、劇作家でもありプロの劇団に所属された経験もある方で、それはそれは厳しい指導だったことを覚えている。

忘れられない想い出がある。

それはある日の稽古中のことだった。不思議なことが起きたのだ。

あっちへフラフラ、こっちへフラフラと歩き回った挙句、いま大きな川のほとりに立って、滔滔と流れる水を見つめる憔悴しきった杜子春。この流れの中に身を投ずれば全てが楽になると思い前へ行こうとするのだが、怖くて足を踏み出すことができない。そのとき、背中に視線を感じて振り向くと、大きな木の下に不思議な風体をした老人が立っている。思わずその脚にすがり付き「死にたい！ 死にたい！」と叫ぶ杜子春。老人は、そんなに死にたければ死ぬが良い、と言って剣を渡してくれる。剣を受け取ったところ、氷のように冷たく鉄のようにずしりと重く、思わず恐怖に駆られて落としてしまった。剣はガチャンと音を立てて転がった。次の瞬間、私は「死ねない！ 死ねない！」と言って老人の脚にしがみついていた。



老人は高3の相崎由秋先輩（20回生）、杜子春は高1の私。相崎さんはあっけにとられた顔をなさって私を見つめておられた。鉄のように重

く感じた剣はボール紙でできていたのだ。



このとき、押川先生は「君が体験したことは貴重なことです。ただ芝居は1回こっきりではなく何回でも繰り返し上演されるものです。今、君が感じたことを明日も同じように感じなければなりません。そのためには何をしなければいけないのかがこれからの問題です」とおっしゃった。

私が芝居の世界に進もうと決心したのはこの時だった。

残念ながら俳優業は途中で断念したが、70歳まで演劇界に身を置くことができたことは心から幸せだったと感謝の念に堪えない。

その私も77歳を迎えた。出来損ないの子どもで終わってしまったかもしれない私を、なんとか一人前に育ててくださった明星学園の教育に心から感謝すると同時に、現代こそそのような学校教育が必要とされている時だと思っている。(本誌作成にあたり寄稿)

(3) 第1回教育研究集会

創立 30 周年を機に

戦後8年目の1953年（昭和28）6月、赤井米吉が理事長に就任し、毎日新聞社から人事院に転じた神田五雄（かずお）氏は理事に退いた。翌1954年（昭和29）、創立30周年記念事業として明星学園振興事業計画が発足した。振興事業計画は、老朽化した校舎を改築し施設・設備面を充実させるとともに、教育内容を一層充実させようという計画であった。教育環境の整備と教育内容の充実は車の両輪の役割を担っていた。

その年、小・中・高から選出された人たちで構成する教育研究推進委員会が発足し、12か年を通したカリキュラムの編成、校外見学・旅行の系統プランの再編成の検討が始まった。これらの作業は、推進委員会の原案をもとに全園会議で討議し、さらに小・中・高それぞれの部会（職員会議）に持ち帰って検討するという手続きをとった。

11月、小・中・高合同の研究会が開かれ、各教科の教科目標、教科課程を発表し合った。これは翌55年度もつづけて行われた。

いっぽう、振興事業も一歩前進し、まず55年度の事業として高等学校の運動場3,670㎡の拡張が実現した。また、56年度には小学校校舎、鉄筋コンクリートブロック平屋建6教室（ジグザグ校舎前列）が完成。中学校木造校舎2階建9教室が完成した。さらに講堂の移築、高校体育館の取り壊しが行われた。

学園の外に目を転ずれば、1955年8月、鳩山内閣の与党・日本民主党が、『うれうべき教科書の問題』というパンフレットを配布し、現行教科書がいちじるしく「偏向」していると非難した。これをきっかけに検定を強化することをねらったものであった。その年11月、自由党と日本民主党が合同して自由民主党を結成。翌年、教育委員会が公選制から任命制にきりかえられ、また、教員に対する勤務評定制が導入されるなど、一連の政策を通じて教育に対する国家統制が強められていく。これに対して、日本教職員組合（日教組）は勤務評定反対闘争を展開し、教育課程の

自主編成の運動を進めた。

教師の教育運動には組合運動だけでなく、民間教育研究運動とよばれる運動があり、さまざまな民間教育研究団体が「教育とは何か」を問い、「何をどう教えるか」を研究する活動を進めていた。おもな民間教育研究団体には次のものがあった。

数学教育協議会（数教協）、科学教育研究協議会（科教協）、歴史教育者協議会（歴教協）、教育科学研究会（教科研）、日本作文の会（日作）、文学教育研究者集団（文教研）、新しい絵の会など。明星学園の教師のなかにも、これらの研究団体に所属する者があり、とくに小学校・中学校に多かった。

第１回教育研究集会

1957年（昭和32）11月、小・中・高合同の第1回教育研究集会が実施された。この研究集会が実施されるに至った経緯について、準備委員会の中心となっていた武者小路穣（高等学校社会科担当）がＰＴＡ会報『道』にわかりやすい言葉で報告している。

> 教師が教育にたずさわっている以上、その内容なり技術なりについて研究をすることは当然であるし、またそれぞれの教師がめいめいで研究をつづけてはいる。しかし、どこの学校でもそうらしいが、みんなが一しょになる時間というものがなかなかとれないので、当面した問題をそのときどきで話しあうことはあっても、同じ教科のものが一つの課題で研究をするということは容易ではない。まして、他の教科と、あるいは他の段階（小・中・高という段階＝引用者注）との共同研究ということは、とかくお題目におわりがちである。それじゃいけないんだということは切実にわかっていても、だれかがしじゅう運営にあたるのでもなければ、とても実行できない。明星でも、むしろこういう学校だからこそ、ほかより一そう必要性があるので、この問題は従来もなんどかとりあげられ、教科編成のたびごとに会議がひらかれ、その成果は活用されてはきた。が、どうもいつでもそのとき1回かぎりでとぎれてしまう傾向は否定できない。そこで、昨年組合の新執行部が選出されたときから、懸案の全体集会を、今度こそぜひ継続してやろうじゃないか、という方向がうちだされ、2学期になって準備委員もえらばれた。〈※1〉

組合の委員長は小学校の無着成恭。『やまびこ学校』の実践で一躍有名になった無着は、編入学した駒沢大学を卒業後、生活綴方の先輩・寒川道夫の紹介で照井校長に会い、1956年（昭和31）4月から小学校に採用された。それから1年足らずの1957年2月、組合の執行委員長の選挙のとき、無着は「明星学園寺子屋論」をぶって、四十数名出席したなかの26票もの票数で委員長に選出された。

ちなみに、副委員長は学園第1回生で高校美術科担当の横川武、書記長は高校国語科担当の押川昌一。初代委員長の橘正薫は中学校の校務主任になっていた。

無著は退職後に刊行した著書のなかで、こう書いている。

〈※1〉 武者小路穣「第1回教育研究集会始末記」明星学園PTA会報『道』41号（1858年2月）
『明星の年輪―明星学園50年のあゆみ』183～184頁所収

私が明星学園に勤めるようになってから、明星学園はにわかにウルサクなったといわれるが、それは私一人の責任などではなく、当時、私より2か月早く、島田厚（教育科学研究会会員）がきていたし、私が組合の委員長になった年、上川淳（歴史教育者協議会会員）や鈴木五郎（新しい絵の会会員）、そして、佐藤文夫（科学教育研究協議会会員）などの各氏が、ぞくぞく明星学園に勤めだしていたからである。

私が組合の委員長として第1回の校内研究会をはじめたのは、1957年（昭和32年）であった。とにかく明星学園の小学校・中学校・高等学校の教育内容を一貫させて、日本における新しい学校教育のあり方を探求し、ここに実現させてみるんだ、というぐらいの元気があった。〈※2〉

当初、児童・生徒を1日休みにして研究会を行うという組合執行部の企画を、照井校長が許可するかどうか懸念された。だが、それは杞憂だった。照井校長は、「このような研究会は、組合が主催すべきことではなく、学校がやるべきことである」と言った。つまり、明星に限らず戦前の私立学校が築きあげてきたすばらしい遺産は、戦後になって日本の教育のなかに普遍化された。それは日本の教育のためによろこばしいことではあるが、私立学校にはもはや誇るべき遺産はない。明星の教師たちは一致団結して研究に励んでもらいたい。そして、新しい明星学園の教育をつくってもらいたい、というのである。

こうして、組合とは別に研究集会を開くための準備委員が選ばれて、開催に向けての実務を担当することになった。

さきの武者小路穣の報告をふたたび引く。

何回かの準備会で、課題は最近各方面で話題になっているいわゆる「基礎学力」を中心とすることになった。この「基礎学力」というコトバはあいまいだが、どの学科でも共通する話題となりうるし、あらゆる方向に発展する可能性があるので、もっともよかろうということになったのである。それから各学科の協力をえて実施方法が討議されたが、資料としての実態調査にしても、全体集会の開催にしても、全学園の教務計画のなかでおこなわなければならないので、照井校長の指示のもとに、今年からの学園の年次計画による行事ということになり、準備委員はそのまま職務を継続することになった。その結果、開催されたのが、すでに通知でご承知のこととおもうが、昨年11月25日の第1回教育研究集会である。〈※1〉

何が話し合われたか

それでは、当日の研究集会はどのように行われたか。また、研究集会の成果は何だったのか。各教科のやや詳しい報告は前掲『道』に記載されているが、ここでは紙幅の都合で武者小路穣による報告を引く。

当日は、9時、照井校長のあいさつで開会され、資料の配布整理ののち、9時40分から11時まで、各学科ごとの分科会にうつった。分科会では、各学科ごとの予備討論で提出された問題点と資料のプリントを材料として、小・中・高通じての討議と問題整理がおこなわれた。つづいて、11時10分から13時10分まで、昼食を間にはさんで、国語・数学・体育科からの報告があり、以後15時30分まで、報告についての質疑討論と、のこりの学科の問

〈※2〉 無着成恭『無着成恭の昭和教育論』（太郎次郎社、1989年）197～198頁

題点説明があった。詳細は、報告書として整理、編集される予定なので、いまここでは要点だけにしておく。

- 国語――中・高でおこなった識字・読解能力の調査をもとにして、当面している教授上の困難の指摘。小学校の国語教育との関連。
- 数学――現在の教科編成上の矛盾、重複の指摘。中・高を通じての教科編成試案。
- 体育科――集団訓練の問題。

以上はごく一部にすぎないが、講師をまじえての全員の出席のもとに、きわめて活発な意見がだされて、討論の収穫はすこぶるおおかったとかんがえられる。

終了後は、グランドで大正組対昭和組のソフト試合、および茶話会を開いて、懇親をふかめ、のこった問題を談笑のうちにはなしあった。

では、今回の教育研究集会の結論は何か？ ということになると、実は結論はない。というのは、この集会の準備にあたって一つの目標としたのは、りっぱな結論をださない、ということにあったからである。はじめにもいうように、教育研究の要点は継続にある。従来何回かおこなわれた集会の欠点は、ある課題についての結論をまとめ、一つの整然とした教科案ができあがることでおわってしまうことにあった。そこで、今回は、とにかくみんながよりあって、各科でぶつかっている困難をたがいにみとめあうこと、そして今後の協力体制をみんなの意識のなかにもちこむこと、そして各科では次年度の課題をそこから発見すること、つまり次の前進の用意をすることを目標としたのである。集会はその年度のまとめでなく、次年度の出発である。これが準備委員のくりかえし強調したところである。したがって、第1回の集会の成果は、各学科が次の行動でこたえるわけである。ただし、これも性急にもとめられてはならない。ようやく小・中・高での共同研究の体制が糸口についたとかんがえていただきたい。生徒に教育の成果を性急にもとめてはいけないのと同様、われわれのしごとも忍耐が必要である。第2回、第3回へとひきつづいていきさえすれば、それがまず一番の成果なのである。そのためには、ここで資料の蒐集とか、今後の継続へのよりよい方向の示唆とか、いろいろな形でのご助力をおねがいしておきたい。〈※1〉

＜文責：依田 好照＞

〈※1〉 武者小路穣「第1回教育研究集会始末記」明星学園PTA会報『道』41号（1858年2月）
『明星の年輪―明星学園50年のあゆみ』183～184頁所収

第2章　4・4・4制の軌跡

1 「4・4・4制」発足

(1)教育内容の一貫化をめざして

教科課程案の共同研究

1957年（昭和32）11月に実施された第1回教育研究集会で、教科ごとに時間をとって話し合ったことの成果は、決して小さなものではなかった。それぞれの教科がぶつかっている問題を確かめ合うこともできたし、それぞれに努力しながらどれだけむだをしてきたかということもわかった。

次の1年間は、第1回目の集会で見出した問題点を掘り下げることになり、教科ごとの分科会で検討し、秋の全体集会までにまとめることになった。

分科会を進めていくにつれて、期せずして、一貫教育の教科課程案づくりという仕事が各教科の共通の課題になってきた。しかし、この仕事は口でいうほどに簡単ではない。児童・生徒の発達段階を考え、何を、どのような方法で教えていけばよいのかを考え、低学年から積み上げていかなければならないのだ。

これまでにも教科課程を統一する計画が立てられたことは何度かあったが、一部の人の手になる机上プランで終わってしまった経験がある。同じ轍を踏むことはできない。

各教科ともいろいろと困難な課題につきあたりながら、教科課程案をつくる作業にとりくんでいった。この段階では、どの教科も現行の6・3・3制の枠組みを前提としていた。

ところが、秋の全体集会の少し前になって、小・中・高12年間の教科内容を考えるならば、全体の学級編成をも考え直し、12年を4学年ずつの3グループに分けたらどうかという提案が一部から出された。いわゆる「4・4・4制」の提案である。

4・4・4制の提案

この提案は「教育推進に関する教育研究所試案」として出されたが、実質はその年4月に小学校から高等学校国語科に転じた島田厚の提案であった。

これに先だち、第1回教育研究集会後、小学校の教師たちが照井校長を所長として明星学園教育研究所〈※1〉を設立し、教育研究所の主催で勝田守一（かつたしゅいち）先生〈※2〉を招き、一貫教育についての知見を広めるための研究会がもたれていた。勝田先生は諸外国の事例を引いて、学校制度や教育内容・方法には多様な考え方があることを示され、4・4・4制も一例として紹介された。とくに4・4・4制が望ましい枠組みだと言われたわけではないが、島田厚はこれについてさらに熟考を重ね、小・中・高校のだれかれをつかまえて議論しながら、提案を練り上げていったのである。

島田の提案は、おおよそ次のようなものであった。

(1) 小・中・高12年を4・4・4に区切り、それぞれを前期2年、後期2年に分ける。

(2) 小学校段階（1年～4年）では生活経験学習にあて、とくに現在1年生の課程を大幅に削減し、言語読解力の育成をはかる。

(3) 中学校前期（小学校5～6年）では生活経験学習から漸次系統学習への転換をはかる。適当な英語学習を開始し、国語・数学を学級担任、その他の学科は教科担任制とする。中学校後期（1～2年）では現在の中学課程のうち可能なかぎりを修得させる。

〈※1〉 1959年3月、就学前の子をもつ親向けに『古い教育・新しい教育』作成。それを元に芸術教育研究所と合同で同年11月、『1年生誕生』（門書店）刊行。

〈※2〉 1908～1969　東京大学教育学部教授。教育科学研究会の初代委員長。

(4) 高校前期（中学3年～高校1年）では現在の高校課程のうちもっとも基礎的なものの深化をはかる。後期(高校2～3年)では進路別により教科課程に大幅なバラエティを与える。特に芸術科コースには、校外の教育機関と密接な連携をはかる。

この提案が出された背景には、いくつかの理由があげられる。

第1に、子どもたちの心身の発達の度合が、小学校の5・6年とそれ以下ではかなりちがうということである。教科の内容も、5・6年あたりからかなり高度になり、学級担任が全教科を受け持つには困難が生じてくる。小学校5・6年では、もう中学校と同じように、教科担任制がある程度とりいれられてもいいのではないか。

第2に、教科内容のむだな重複である。現行の文部省指導要領とそれにもとづく検定済教科書は、小学校6年と中学校1年、中学校3年と高校との間に重複が多い。これは中学卒業者の全員が高校に進学する本学園の場合、もっと整理することができる。

第3に、中学校3年間、高校3年間はどちらも短かすぎて、中途半端な活動を余儀なくされる。ことに高校の3年間は、それぞれの生徒の適性を見出し、個々の能力を十分に伸ばす段階なのに、とかく受験勉強に押されて、生徒の自主的な活動が不活発になっている。そのためにも、4年間をひとつのグループと考えることは、広い意味での学習にとって有効ではないか。

これらの理由から、小学校1年から4年まで、小学校5年から中学校2年まで、中学校3年から高校3年までの3段階に分け、さらにそれぞれの段階を前期2年、後期2年に分けるのが妥当ではないか。

この提案は、1958年（昭和33）11月、秋の全体集会に提出された。

4・4・4制発足へ

全体集会での議論は、当然のことながら、4・4・4制の問題に集中した。

現行の6・3・3制の編成を変える必要はない、という意見はもちろんあった。玉川上水をはさんで校地が離れている現状では、むしろ6・6制に切り替えるほうがいいのではないか、という意見も出た。しかし、全体としては、各教科の内容の整理が検討されてきて、おのずからこの案を支える方向に進んでいたので、6・3・3制という区分はそのままで、教科課程の編成上の区分としてこの案を採用しようという意見が大勢を占めた。

その後、翌1959年（昭和34）1月の討議で、相当に問題を含むとされたが承認の方向に傾き、3月になって全園職員会議で4月からの実施が承認された。各教科部会が頻繁に開かれ、教育推進委員会はそれらの検討内容をまとめ、全体計画の具体化を急いだ。さらに、校務・教務はそれにもとづいて人員を配置し、時間割を編成するというやっかいな仕事に取り組んだ。こうして、4·4·4制はいくつもの課題をかかえながら、とにかく1959年（昭和34）4月から発足することとなった。

もちろん、学校運営上の重要事項は、最終的に理事会の承認を必要とする。教育現場が一貫教育の教科課程づくりをはじめた1958年（昭和33）、高齢の赤井理事長に代わって新理事長に就任した市村寅之輔氏〈※3〉は、教職員の熱意にエールを送り、4・4・4制は理事会で承認された。

新しい教育計画は父母総会で説明がなされ、ＰＴＡ会報『道』No.46にも明星学園教育推進委員会が計画の概要を載せて理解を求めた。同誌にはＰＴＡの新会長に就任した松井憲紀氏の挨拶が掲載されたが、そのなかで松井会長は、学園の新しい教育方針の理解を深めたいと期待を寄せている。〈※4〉

しかし、それでめでたし、めでたし、となったわけではない。この年（1959年度）は4・4・4

〈※3〉元理事長·市村今朝蔵氏の弟。学園の保護者。請われて実業界から理事長に就任した。
〈※4〉PTA会報『道』No.46(1959年6月27日)2頁

制の初年度なので、教科代表で構成されている教育推進委員会は、毎月一回の教科部会で討議された問題を持ち寄って、秋の全体集会で行う4・4・4制の進行状況を整理していた。その上で開かれた秋の全体会では、運営上さまざまな問題が噴出して、前年度よりも激しい討論が行われた。もう一度6・6制について検討したらどうか、という意見も出てきた。しかし、授業の面で理想を達成しようとすれば、ある程度の困難はあっても、学校全体をその方向に進めなければならない。

生徒にも、家庭にも、学園の計画をのみこんでもらわねばならない。そこで、これも全体会で論議しながら、学年の呼称を1年から12年までとし、4・4・4の3つの段階の呼称もそれぞれ、低学年部・中学年部・高学年部とした。

教育課程編成の基本

当時考えられていた4・4・4制に基づく教育課程の基本は、次のようなものであった。

○低学年部（1～4年）

認識発達の段階に応じた指導基準を軸とし、生活的な単元の設定により、総合的学習から漸次系統性・分化性をもたせた学習へと進め基礎学力をつける。

［前期］1～2年

生活単元に立つ総合的な学習により、創造性・活動性・集団性の基礎を養う。

［後期］3～4年

音楽·体育などは専科制を加え、現実生活に立った思考力をのばすための基礎学力を養う。

○中学年部（5～8年）

各教科の特質に応じ、漸次その独立性と系統性を強化し、専科性を加える。

［前期］5～6年

社会的集団性を組織的に進め、そのなかで創造的·論理的な思考力を養うことを根幹とする。

［後期］7～8年

いままでの基礎の上に、さらに学習態度の高度化・自主化を拡充して、基礎学力の整備と充実に主力を注ぐ。

○高学年部（9～12年）

生徒各自の能力・個性・進路を考慮した適性別コースを設定し、勉学の努力と研究の自由を助け、将来の志望を達成するため、やや専門的な学力を身につけさせる。

［前期］9～10年

適性別コースに基づいた指導をする。

［後期］11～12年

進学・進路をも加味したコースを設定し、将来の志望達成の自信を養うよう、学力の発展と充実を期する。

(2)4・4・4制の反響

新聞報道にみる論評

1959年（昭和34）4月から漸進的に始めた4・4・4制は、翌1960年の4月から全面的に実施される。その年は、日米安全保障条約改定反対の闘争が全国的規模で展開された年で、新聞は連日“安保”に関する報道をつづけていた。それらの記事にまじって、明星学園の4・4・4制が報道され、さまざまな論評が加えられた。

たとえば、毎日新聞（1960年2月10日、朝刊）は、「私立明星学園（三鷹）で実験教育　初、中、高等の四、四、四制に　教育課程組替え　新学期から踏切る」という見出しで、4・4・4制の概要を報じ、これに対する文部省の態度と市村理事長の話を伝えている。

内藤文部省初等中等局長の話はこうだ。

> 名目はどうでも実質的に4・4・4制をとるのは現行制度を否定することで法違反だ。指導要領や教科書などすべて6・3・3制のワクを無視するようなことは、私立学校でも許されない。学校教育法に違反すれば、小中高校として扱うことはできず、洋裁学校や塾なみの各種学校としての扱いしかできない。

これに対する市村理事長の話は以下のとおり。

> 学校教育法、教科書法など法のワクはあくまで守っているし6・3・3制を頭から無視しているものではない。ただ12年間、一貫した教育を合理的に進めるためには、どうすれば一番よいかと考えて4・4・4制にふみきった。初等部の4年で小学校の6年分をやってしまうというむちゃをやるわけではなく、学習効果をあげるため、やりやすい形にするだけのことで、これを違法とするのは見解の相違だ。

同紙には東大・勝田守一教授と東京教大・梅根悟教授のコメントも掲載された。

> 勝田守一教授の話
>
> 教育効果を高めるため、学校内の問題として4・4・4制をとってもさしつかえないと思う。12年間で教えることを11年間で達成し、残る1年を有意義な教育期間として利用することができればそれ自体、進歩ではなかろうか。私はまず先生たちの熱意と努力を高く評価したい。暖かく見守り、成果を期待する。学校教育法がどうのこうのというのは筋違いだ。
>
> 梅根悟教授の話
>
> 6・3・3制がよいかどうかいろいろ問題がある。小学校5年にあたる中等部から教科担任制をとることは、学力水準も上っていることと、現在でも5、6年生の教科を一人の先生で教えられないことからみてもよいことだ。このような実験教育は大いに歓迎すべきで、自由奔放にやらせるべきだ。いまの制度をやかましく守らせるだけでは教育に進歩がなくなる。

照井小・中学校長は語る

2日後の2月12日、同じ毎日新聞（朝刊）の「時の人」欄に、照井小・中学校長が「4・4・4制を実施する人」として登場した。全文を転載する。

いまの制度のワク内で、私立学校の自主性を主張し、小学校から高校まで12年間の一貫教育を実現するため、新学期から初、中、高各4年の4・4・4制を実施することになった。現行の6・3・3制にあきたらないものを感じていた父兄は、全面的に支持したが、6・3制の手直しが問題になっているときだけに、大きな反響を呼んだ。

「6・3・3制の長所をのばし、ムダをなくすのがねらいです。いたずらに異端をとなえ、快サイを叫ぶものではありません」とあたり前のことのように説き続ける。

歯槽膿漏が悪化し、すでに2ヵ月近く病床にあるが、相手が納得するまでくわしく説明しようという、真面目な校長先生である。「教師は合理的な教え方をくふうする任務があります。こんどの4・4・4制も、明星学園の生徒たちに、もっとも適した教え方を研究し、実行しただけ。カリキュラムのこまかい点では、文部省の指導要領と異なるところがありますが、全体としては、国の方針に従っています。6·3·3制を破壊する意図などは、全然ありません。"教え方の自由"は、私立学校の特色という意味から、ある程度認められるべきで、その範囲内で4・4・4制をとって差しつかえないでしょう」という。

私立順天中（東京）を卒業し、16歳のとき郷里の秋田県で代用教員になった。その後、秋田師範付属小、成城学園小の教員をつとめ、大正13年、秋田時代に知り合った赤井米吉氏（現武蔵野市教育委員長）と、いまの明星学園を創立した。

当時は、先生4人、生徒19人、寺子屋に毛の生えた程度の、ささやかな学校だったが、自主性に富む社会人の育成を校風として発展し、いまでは、教職員80余人、生徒1,400人の学園になった。「4・4・4制の骨組みができあがるにはこれから5年かかる。静かに成果を見守ってほしい」と言葉を結んだ。73歳。

6・3制是非論のなかで

読売新聞（1960年2月20日、朝刊）は、「6・3制にかわるもの」として、明星学園の4・4・4制、兵庫県の私立三田学園の2・3・1制、東京都立世田谷工高の6・6制教育の実践を紹介し、6・3制是非論に一石を投じている。ここでも、文部省の内藤初等中等局長は真っ向からこれらの改革案に反対しているが、お茶の水女子大の波多野完治教授は、次のように4·4·4制を高く評価している。

いまの子どもはむかしとくらべて、アクセレレーション（発育加速現象）が強いといわれている。また学習内容も科学技術が驚異的に進歩している現在、なるべく早く抽象的に物事をつかむことを教える教育をやる必要に迫られている。15年前につくられた6・3制を改革するのは当然のことだ。

しかし、東大教育学部の海後宗臣教授は、次のように教育制度改革の熱意は認めながらも、全途は多難であることを暗示していた。

6・3・3の12年をどう区切ったらいいかについては、いろいろな考え方があり、4・4・4制が絶対正しいとはいえない。だがいずれにせよ、これらの試みはあってよいもので、行

政当局はあまりやかましいことはいわないほうがいいと思うが、問題は教育の中身だ。教育課程を再編成して新しいものを作り、それでやっていこうというのなら大きな教育的意味があるが、ただしその場合は文部省がいうように学校教育法に基づく正規の学校ではなくなることを覚悟しなければなるまい。

投書にみる意見

毎日新聞（1960年2月22日、朝刊）の投書欄には、4・4・4制に関して、教育学者ではない人たちの意見が集められている。投書欄担当者の分類にしたがって、それらの意見を追ってみる。

むしろ実験校として生かせ

◇明星学園の新企画4・4・4制の成果を期待する。現在の6・3・3制下の中学、高校の3年間は短すぎる。予備校的存在になるのもそこに原因がある。また新学習指導要領にうたわれた科学技術教育の振興にしても、現行制度ではどれほど成果があがるか疑問である。さらに小学高学年の教科担任制が叫ばれながら公立校ではなかなか実施できないでいる現状からみて、5・6年を中学に組入れて教科担任制下におくなど、新企画は意義ある改革というべきだ。

◇これを文部省では学校教育法違反だといっているが、愚もはなはだしい。むしろ実験学校として指定してもいいくらいである。少なくもこの際、6・3・3制について再検討すべきであろう。（埼玉・一教員・25）

6・3・3制の欠点を救うもの

◇新学制がしかれてすでに十余年になるが、長年その現場で働いてきた私の感じとしては、6・3・3制の最大欠陥の一つは、青年前期の中学教育、青年後期の高校教育がいかにもあわただしく落着きが得られないことにあるようだ。中学も高校も数字の上では3年でも、実際には卒業年の1年間はほとんど進学準備のために費される状態である。どうしても中途はんぱを余儀なくされる。したがって師弟の親密さも、人格的なふれ合いも、またじっくり研究調査する興味も非常に薄いものとなっている。こうした欠陥を痛感するだけに、私は明星学園の新企画に全面的に賛成し、その成果を期待したい。（武蔵野市・元学校長）

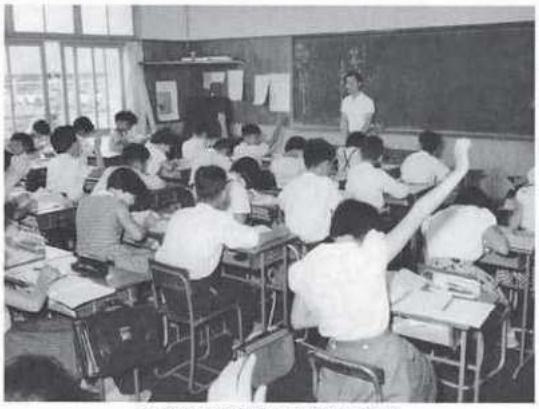
◇私も教育現場で中学生を10年間みてきたが、4・4・4制には全く同感である。中学1、2年と3年との間には、成育の段階に大きな差異を認めざるをえない。心身両面でそうだ。だから3年を高校につけることは、むしろ“成育段階に即した”ものといえよう。他方、小学5・6年特に6年と中学1年との差異は極めてわずかである。これらをまとめて4年制にすることは決して無理ではない。合理的な教育は4・4・4制こそ適当だろう。（千葉県・教員）

にわかには賛成できぬ

◇普通、社会で修業年数をいう場合は中学、高校と区別せずに、通算して何年というのが実情である。区切りは一般のものと違っても、通算して12年になれば、高校卒として同じであり、必ずしも6・3・3の区分けによる必要なしともいえよう。

だが私は、転校や進学の問題を考えると、横に連絡のつかない教育課程をもつことにはに

わかに賛成できない。問題の4·4·4制を意欲的だとする意見もあるようだが、むしろ6·3·3制のワクを守りながらその中でどうやったら教育成果が上るかを検討し努力することこそいまは大切であり意欲的だと思う。(東京杉並区・勤人・36)



中学校の授業風景(1959年)



鈴木満男先生と語らう(1960年)



高校校舎の前で



高校校舎と体育館の間

<文責：依田 好照>

COLUMN 5

小学校のジグザグ校舎



小学校の旧校舎は、そのユニークな形態から“ジグザグ校舎”と呼ばれた。

この校舎は、創立30周年記念事業として立案された、小・中・高校舎全面増改築計画の一環であった。

前列（校門側）の6教室は1956年（昭和31）8月に完成、後列の6教室は2年後の1958年（昭和33）に完成した。

設計者は、梓建設事務所の清田文永氏。夫人の宏子さん（旧姓・安田）は学園の2回生。ひとり娘の雅子さんは1年生からの在校生で、校舎完成時には中学1年生（29回生）であった。施工者は藤木工務店の湊裕氏で、こちらも卒業生（14回生）であった。

設計者の清田氏は、PTA会報No.32に「明星学園の新築計画について」という一文をよせ、次のように書いておられる。

> 照井先生や赤井先生にお目にかかる度に、噂に出ていた学園新築のことについて、この度、正式に御委嘱を受けたことは父兄の一人として、また、建築家として、甚だ光栄と考える。しかもその建築費の殆どが、学校債によるものだけに、責任は大きいと自覚している。一片の木材、一本の釘に至るまで、技術上の齟齬は影響するであろう。設計の巧拙もまた、内に住む子供達の日々の営みを大きく左右するかもしれない。だが、果して子供等にとっていい環境となり得るかどうか、それは、無心のうちに彼等に判定を下されることとなろうが、私はとにかく、一定の条件下でこの新計画を考えることにした。〈※1〉

一定の条件とは、①新築は、授業を中断させないために、使用中の既存校舎に影響を与えないこと。②極めて限られた工事費（学校債募集要項所載）による整備。③明星学園教育の伝統の尊重と、新しい進展に応ずる建築的処理、などであった。

②の学校債は「学園債」とも呼ばれ、学園が保護者に通常の学費とは別途にお願いする「借金」のことである。③に関して、子どもたちの学校生活に対する理解を深めるために、善方先生、原田先生、船山先生、横川（武）先生たちからいろいろとご指導をいただいたと書いておられる。

清田氏は、また、PTA会報No.33に「学園新築工事のこと」と題して、この計画で教室をジグザグにしたわけを解説しておられる。〈※2〉文言をわかりやすく改めて、以下に紹介する。

〈※1〉 PTA会報『道』No.32（1956年2月23日）8頁
〈※2〉 PTA会報『道』No.33（1956年6月11日）12頁

1. ブロック構造としての合理化によるローコスト化
   ・工事費の関係で、鉄筋コンクリート構造は採用できなかった。
   ・平屋建築を採り、コンクリートブロックを主体として、工事費を節減できた。
2. 教室を南向きにさせて得る、よりよい日照条件
   ・一年を通じて、各教室がなるべく均等に長い日照時間を得るようにと考えた。
   ・また、教室の南側の高窓の外部には、木製で傾斜のついた遮光板を数枚、組む設計になっている。これは、東京の緯度から計算して、傾斜板には一定の角度を与え、入射角の大きい夏季光線は遮り、入射角の小さい冬季光線は、教室の奥まで通して、なるべく照度の均等化や輻射熱の調整をする意図から来るものである。
   ・工事費が許せば、この傾斜板の角度を自由に調整できるようにしたかったが、残念ながらできなかった。
3. 夏季の通風をよくする
   ・東京の夏季に一定の方向に吹く風は南北である。湿度も上昇するので、夏季の通風は必須の要件。そのため教室の南側は大きく開けた。
   ・また、屋根の鉄板と天井の間に若干の空間と換気孔、断熱材も少々用いてある。
4. 各教室の前庭の独立性
   ・各クラス専用の遊び場となり、とくに低学年の子どもたちには、自分たちだけの楽しい遊び場ともなろう。
5. 各教室間の騒音伝達の防止
   ・教室間の騒音は、コンクリート壁でもかなり遮音できようが、突き出た隔壁は、さらに若干の効果をあげるものとなろう。
   ・また、教室の前庭とは反対の北側に、廊下を開放して設けたことは、土と連絡する現校舎の外廊下形成を残すと共に、廊下の騒音を教室から遮断し、また、軽構造として工事費のローコスト化を図ったものである。

上田八郎元高等学校長によれば、設計者の清田氏は西ドイツで見たジグザグ校舎と、子どもたちが教室の外の土のスペースで日光浴をしたり、楽しく遊んだり、勉強している姿に心を動かされ、校舎建築のあり方に大きなヒントを得たらしい。〈※3〉

日本の校舎建築は兵舎が原型だと、何かで読んだ覚えがある。それはともかく、明星の小学校のジグザグ校舎は、当時としてはたいへんめずらしく、建築関係者をはじめ見学に来る人も多かった。また、わが子の学校選びに訪れた夫妻のなかには、南向きに開け放した明るい教室や、教室とつながっている前庭で遊んでいる子どもたちの様子を見て、「わが子の学校はここだ！」と決めた人が、毎年度、何組もあったという。

あの校舎で、毎日、子どもたちとさまざまな日常の“ドラマ”を演じた室谷先生、善方先生、広川先生、岸いわお先生、伊藤先生、吉田先生など大先輩の風貌姿勢を思い出す。

＜文責：依田 好照＞

〈※3〉 上田八郎「校舎雑感」『明星の想い出』（明星会企画·編集、明星学園発行2000年9月20日）

2　教育研究活動

(1) 公開研究会の始まり

1960 年度の動き

明星学園が4・4・4制を全面的に実施した1960年は、歴史的に見れば日本中が大きく揺れた“60年安保闘争”の年に重なる。後に「団塊の世代」と呼ばれる戦後ベビーブームの子どもたちの多くは、この年、小学校6年生になっていたはずである。

4・4・4制実施につづく公開研究会への歩みをたどるうえでも、まず学園の1960年度の出来事をふりかえってみたい。

4・4・4制一貫教育体制により、4月8日の小学校入学式には小学校児童だけでなく、中・高の生徒代表も参列した。夏季行事は、中学年部前期（5・6年）は従来どおり千倉、後期（7・8年）は軽井沢、高学年部は上高地・裏磐梯高原・軽井沢で実施。いっぽう、9月には、4・4・4制に即応した振興事業を後援するために、武者小路実篤氏を会長とする明星学園後援会（第三次）が発足。その月、管理棟・特別教室棟建設に着工している。

大々的に行われたのは恒例の明星祭であった。「明星学園教職員一同」による「父母各位　来賓各位」への招待状には、つぎのように記されている。

> 明星祭は学園の重大な、そしてもっとも待たれる年中行事の一つであります。学園全般にわたる教育活動の報告祭であり、児童生徒の学習収穫展示祭でもあるのです。
>
> こうした機会には、いつもあえて児童生徒と限らず、およそ学園教育に関係深い家庭はもちろん、各方面の個人と言わず団体と言わず全部この祭典に参加していただくことを原則としております。祭典という言葉の意味もそこにあります。後略…〈※1〉

明　星　祭　日　程

☆　10月9日（日）　低学年・中学年　体育会。（雨天順延）
☆　10月16日（日）　高学年　体育会。（雨天順延）
☆　10月22日（土）　高学年仮装大会。
☆　10月30日（土）　展覧会。演劇会。
　低学年校舎 —— 低・中・P.T.A・幼稚園（招待）
　高学年校舎 —— 高学年展覧会。P.T.A 展覧会。
　本校講堂 —— 低・中・高　スライド。8㎜。
　高学年演劇。
　明星台幼稚園 —— 都下幼稚園（招待）
☆　11月20日（日）　音楽会
　本校講堂 —— 低・中・高音楽会
低学年，中学年の演劇会は明年3月に行います。

明星祭の行事は10月9日（日）から11月20日（日）まで、ほとんどの土・日曜日に開催されていた。

さらに年度末の翌年3月には低学年部、中学年部の演劇を行うという熱の入れ様であった。

3月、高等学校の卒業式には高校生だけでなく、小・中の教職員とともに児童・生徒の代表も参列した。もうひとつ、この年、1961年3月には特記すべき行事があった。春休み中、千倉寮に低・中・高の教師が全員集まり、2泊3日の日程で合宿研究会を実施したことである。

〈※1〉明星祭招待状『明星の年輪—明星学園60年のあゆみ』139頁

全園の合宿研究会


小·中学校校舎·管理棟

千倉寮での合宿研究会は、すでに1956年から小学校の教師たちが行い、中学校の教師たちも1960年から行っていた。しかし高校の教師を含めた全園の合宿研究会は、今回が初めてであり、画期的なことであった。

この研究会では、新年度の教育の基本的な案件を検討し、自主的学習態度を形成するための方策について話し合った。それとともに、低・中学年部の教師から出された、授業の公開を含む公開研究会開催をめぐる論議が熱っぽく行われた。高学年部からは、各教科が分化して専門的になるので、授業の内容について共同で討議するのはむずかしい。思春期の生徒たちに公開授業はなじまない等々の意見があった。低・中学年部の教師のなかにも、時期尚早、個々の教師の実践の成果が共有の財産になっていない。まず学園の父母を対象とすべし等の意見があった。また、恒例の明星祭の教育的意義や、その方法についても再検討が行われ、その結果、明星祭についてはおよそつぎのような結論に達した。

1) 低・中学年部では、従来のような規模での明星祭行事を廃止する。体育会・展覧会・音楽会・劇の会などは年間に分散して、適期に無理のない規模で行う。従来明星祭に注いだ労力や時間は日常的な営みのなかで消化し、その集積を「明星教育研究発表会」に表現する。
2) 高学年部では、生徒自治会活動として従来行われてきた「明星祭」を十分生かして、本年度も大体例年に近い形で実施する。低・中学年部の研究会には教職員が参加する。研究会当日の授業は普通に行う。

また、夏休み中の8月末には、奥多摩の御岳で2泊3日の合宿研究会（高学年部は1泊参加）を実施し、秋の公開研究会の具体案の検討、教育内容とその組み立てについての研究討議を行った。

これら春と夏の合宿研究会を通じて、公開研究会の方向性が少しは見えてきた。

公開研究会をなぜ開いたか

明星学園が公開研究会を始めた理由については、人によってさまざまな説明がなされている。たとえば、高齢で病床にあることの多くなった照井・上田両校長を補佐し、学園全体の運営に砕身した全園教務の橘正薫は、わかりやすい言葉でこう語っている。

> ひとつには学園が戦後、外部に向かっての授業の公開とか、教育理論における外部との討論といったことが、まったくなかったわけです。そこで今回はこれを一般に広く公開して外部からの批判を仰ぎたいということがあったわけです。それから、学園としての教育方針、あるいは主張といったものをさらに強化していきたい。それには学園の内部だけでやっていたのではだめで、外部からの声を聞き、自己反省をして、さらに発展させたいと考えたわけです。

また一方では、いま教育界で問題になっている教科構造の問題について、われわれもまだはっきりしたものをもっていないので、これについてのさまざまの分析検討が今後の教育の現代化にとって必要ではないか。

さらには、学園を組織している教師、子ども、父母の三つの要素のうち、とくに父母との共同の意識をもって教育をすすめていくということを日常化したいと考えました。〈※2〉



公開研究会、佐伯先生の授業

また、当時低学年部にいた上川淳は、次のように書く。

日本の子どもが、将来どのように育っていくか、そのことと切り離して明星の子どもの未来を考えることはできないし、また、日本の教育がどのような方向に進むかを無視して一明星学園の教育を考えることはできない。

このような観点にたつとき、学園のせまいわくの中だけで、教育のあるべき姿を吟味するのではなく、広く、日本が現在直面している教育の課題を反映させ、日本の教師がいだく問題意識をくみとりながら、大胆に且つめん密に、教科の現代化と、生き生きした授業の創造をめざして教育研究をつみあげたいと念願するわけである。

これが、今回、公開の教育研究発表会を開くにいたった趣旨である。〈※3〉

また、同じく低学年部にいた無着成恭はつぎのように書いている。

明星学園の第1回の公開授業と研究発表会は、1961年（昭和36）11月、2日間にわたって行なわれた。テーマは、「教科の現代化と生き生きした授業の創造をめざして」というものだった。「教科の現代化」は遠山啓先生を中心とする数学教育協議会の呼びかけに応じたものである。

戦後の経験主義教育が、日本の競争を原理とする教育体制におかれると、結局、戦前の教師中心の、国家目的に見あった教科書の内容を記憶させていくやり方よりも、さらにひどいこまぎれの知識の暗記主義に転化していった。戦前と戦後の教育は、やり方は正反対なのに、科学を教えないという点でまったく共通していた。私たちは、数教協が指摘するように、教科の内容を科学的なものにしなければならないと結論したのだった。このことを「教科の現代化」とよんだのである。

全国から千人ちかい先生がたを集めて、授業を公開することになれば、いくら明星学園の先生がたでも、授業研究をしなければならなくなるし、自分の授業を組み立てる原理をもたなければいられなくなるだろう。私たちのねらいはそこにあった。公開授業は、授業者こそがずばぬけて成長することになるはずであった。〈※4〉

〈※2〉 PTA会報『道』No.55（1962年3月1日）27頁
〈※3〉 上川淳「教育研究発表会をもつ意義」『明星の授業 1961』23頁
〈※4〉 無着成恭『無着成恭の昭和教育論』（太郎次郎社、1989年5月）205～206頁

縁の下の力持ち

第1回公開研究会は、1961年（昭和36）11月22日、23日の2日間にわたって実施された。それに先立ち、ＰＴＡ会報『道』No.54〈※5〉には、橘全園教務による公開研究会を開くにいたった趣旨と、父母へのお願いが掲載された。

そのなかで橘教務は、「これは単に学校側だけの労作ではなく、教師と父母の合同労作であるという受け取り方で協力と鞭撻をお願いしたい」と述べた。具体的には、できるだけ多く授業参観をして隔意ない意見を提供していただきたいこと、大会当日はなんらかの形で仕事の分担をしていただきたいというのである。

父母側の協力体制は、すでに松井憲紀ＰＴＡ会長を中心に入念に準備されていた。

ＰＴＡ会報『道』No.55は誌面のほとんどを公開研究会の特集にあてている。文字通り父母側の編集部と教職員側の企画委員会との合同労作である。そのなかから、編集部による「ルポルタージュ　研究会見てある記」の冒頭部分、「縁の下の力持ち」を引用してみる。



第1回公開研究会

「雨だ！」

研究会第1日目というのに、雨。しかも、みぞれにでもなりかねないほどの冷たい雨が降っているとは、あまりにもひどい。「天は、われらに味方せず！　か」。まあ、神様はどうでもいいけど、受付はどうするんだろう、参観者は寒くはないだろうか。とにかく、何かの係に当たった人も、参観にくる人も、この冷たい雨では大変だ。そんなことを心配しながら校門に着く。

途中で逢ったＡ先生の奥さんの言。

「うちの人は、まるで遠足の日の子どものよう。暗いうちから起き出して、雨だ、雨だ、どうしよう。ぶつくさいいながら、学校へ出かけるまで、外ばかり見ているんですよ。」

「明星学園研究集会」と大きく切り抜いた文字板が、中学年部の校舎の2階廊下の壁に、冷たくけむっている。そこを、ちょうど雨よけのようにして、受付係のお母さんたちが活躍している。手袋をはめた人、コートの襟を深々と立てた人、みな寒そう、冷たそうだ。けれども、つぎつぎとつづく参観者の対応は、テキパキと処理されている。

「お名前をお書き下さい」

「ＰＴＡの方は、あちらの方で」

「お昼の食券はこちらです」

「もしもし、資料をお持ち下さい」…中略…

雨の中の受付ほど、みじめなものはない。寒いのか、不精なのか、参観者の中には手袋をはめたまま名前を書いている人もいる。紙が動いてうまく書けない。受付のお母さんが、紙をていねいに押さえてあげている。ちょっとした心づかいだが、参観者の心を和やかにする。後略…〈※6〉

〈※5〉 PTA会報『道』No.54（1961年11月4日発行）
〈※6〉 PTA会報『道』No.55（1962年3月1日発行）4頁

公開研究会のながれ

2日間にわたる研究会の主な内容はP.212 ～ 213のとおり。両日とも午前中、朝の会のあと、研究授業を2校時まで行った。教師全員の指導案は206頁にわたる資料『明星の授業 1961』にまとめ、参会者に配布されていた。

第1日の午後一番は、講堂における音楽の会。まず教師たちの合唱、「樅の木」。ついで子どもたちの合唱と合奏。それが終わっての全体会では、照井小・中学校長の挨拶と、それにつづいて先輩格の橘正薫、原田満寿郎、広川孝から明星の教育プラン、教科構造や授業についての発表があった。

照井校長の挨拶はきわめて簡潔で、そのことが公立学校に勤める参会者には新鮮な驚きだったと、のちに『道』編集部に感想を寄せている。配布資料『明星の授業 1961』の冒頭で、照井校長はつぎのように述べていた。



中学校の教師たち(1959年)

> 教科の研究、授業のくふうは教壇に立つものの当然の任務であり、責任であります。
>
> 特に私立学校の場合にあっては、それぞれ建学の理念に基づく信条のもとに、それらが進められるものであります。
>
> しかし、その教育が単なる特殊であるならば、それは論外であります。窮極において一般に通用しない“特殊”は、それは特殊でもなんでもなく、奇型と言うべきでしょう。わたしたちが求めてきた教育は、まさに、人間がする教育として最も正しく、最も豊かなものを目指していたものであります。人間の子どもに、否、日本民族の子どもに“なにを”“どのように”教えなければならないか、考えさせなければいけないか、その一点にかかわっているのであります。
>
> 今回は御案内の通り1年から8年（中2）までの低・中学年部の全員が全領域にわたって授業し、皆さまの御参観をねがうことにしました。ほんとうに日常そのまま、いわばふだん着の姿であります。しかしその中に私たちの現実と、求めてやまない真実があると思います。
>
> どうか皆様もざっくばらんなお気持で御覧になり、かつまたお教えにあずかりたいと心から願っております。〈※7〉

第1日の分科会は「教科構造の確立を目指して」というテーマで、夏の合宿以来つづけてきた芸術教育部門、科学教育部門での研究をそれぞれ発表し、討議を深めた。

第2日は快晴。午後はまず、完成してまもない高学年部体育館で、三枝博音氏(横浜市立大学教授)の特別講演「現代の科学と教育」。つづく分科会は、「授業の創造をめざして」を総合テーマにして四つの分科会がもたれた。

さきの「ルポルタージュ　研究会見てある記」は、「正直のところ、研究授業の1時間、1時間よりも、この分科会においてこそ、明星の教育の成果と欠陥について話し合われるのだ、と思ってはみたが、やはり、母親にとって、とっつきにくい集まりという感じはぬぐえなかった。学園と外部の先生方の話し合いの、たとえ10分の1、100分の1でもわかりたい、そんな気持ちが、多

〈※7〉照井猪一郎「研究発表会について」『明星の授業 1961』5頁

くの母親たちを分科会に参加させた」と書いている。

また、「むずかしいことはよくわからない。しかし、自分たちの信頼している先生方が、日ごろの教育研究の成果を、腹を割ってみんなの前にさらけ出し、真剣に討議する。その空気が、先生方に対する母親たちの信頼をさらに強めている。分科会の成果を一口にいえば、こんなことになるだろうか」とも書いている。

第１回公開研究会を終えて

第1回公開研究会は、授業と日頃の研究成果を公開して批判を得るという趣旨で実施された、学園始まって以来の大きな経験であった。2日間の研究会ふりかえって、全園教務の橘正薫は次のような感想を記している。

> 第1日は午前中冷たい雨の中で、お母さんたちは、受付・接待・連絡など、後顧の心配がないように世話してくださったから、私たちは全力を授業につぎ込んでいくことができました。
>
> 来会者は第1日は延べ600名、第2日は延べ700名に及び、都下・近県はもちろん北海道や四国などから遠来の客もあるというわけで、このことからだけでも、集会が決して徒労のわざでなかったことと意を強くしました。
>
> いまの教育界の情勢を、多くの人は「まさに教育の危機」と呼んでおります。その理由はいくつかあるにしても、教育の中央集権化が進行中であることはまちがいのない事実であります。
>
> 教育というしごとは、現場の教師、教育研究家、学者、文化人、その他専門家という広範囲の人々の手による総合的な力が昇華して、進められていくものであることは歴史の物語るところであり、中央集権に吸い取られたとき委縮沈滞していくこともまた歴史が物語っております。
>
> いまこそ、私学は冷厳な姿勢をもって、教育の自由を守り抜いていく努力を、はっきりと実践の上に示すべきではないでしょうか。ややもすれば、それは上すべりな運動めいたことに堕する心配があるといわれますが、そんなことはあるはずがないでしょう。何となれば、それはまさしく本質を追究し、日々の授業に沈潜し、何より生き生きとした児童・生徒の活動を促し、学力をつけさせていくこと自体ですから。
>
> さて、どんな外的事情があるにせよ、私たちは毎日の授業に心根を打ち込み、教育内容と組み立てをより効果的に改革し、一歩でも前進をしようと不退の努力を続けるべきであることにはいささかの変わりもないはずです。
>
> それはまた独りよがりや安価な妥協で進められてはなりません。合理性の支えと創造的なエネルギーとの相まった上に立たなければなりません。同時にまた、第三者の批判と善意に基づく支持とによる客観性が付与されていなければなりません。
>
> 今回の企画に対しては、時期尚早の声もありましたが、多くの強い批判はそれだけ栄養価が高いのだという見解のもとにあえて実施を決意しました。
>
> 一面には、明星学園の父母層こそ私たちの真意をわかってもらえるという自負と、この学園の教師でこそ団結と決起が果たされるのだという確信めいたものを持ってぶつかりました。
>
> 今年は一応成功だったといえましょう。明年については、また深い内省と慎重な計画により、本年と必ずしも同形態でないにしても、全園的規模で実質的成果を一歩一歩築きあげる方向で企画を持ちたいと思っています。〈※8〉

〈※8〉「PTAニュース」No.3、『明星の年輪―明星学園50年のあゆみ』185頁所収

(2) 公開研究会のあゆみ

公開研究会の初めの3年間分の要項をここに転載する。〈※1〉

第1回 ……1961年11月22日～23日

目　　標

○教科の現代化と生き生きした授業の創造をめざして。

○授業との対決――私たち教師の毎日はそれにかかっています。どのようにしたら子どもたちを授業に集中させることができるか。授業の裏側にひそむものは何か。

○教科構造の究明――教育実践の上でこそとらえられる問題であります。しかし、それは常に科学的な分析と現代社会の要求と、子どもたちの実態把握とによって支えられていなければなりません。

明星学園は12年一貫教育の上に、この問題の解明と構造化を目ざして毎日の歩みを続け、いまもなおその途上にあります。この度、そのままの姿を公開し、皆さんの御批判の中に自らのよりよい糧を求め、また正しい教育の位置づけのためにもいささかの役割を果したいと思います。お忙しい折からでしょうが、お繰合わせの上御来会くださるようお待ちしております。

参 加 費

・200円（資料代を含めて）父母側は別にする。

特 別 講 演

横浜市立大学教授　三枝博音

――現代の科学と教育――

全 体 会

主旨について……〈校長〉照井猪一郎

明星学園の教育プラン……橘　正薫

教科構造の確立をめざして……原田満寿郎

授業について……広川　孝

分 科 会

Ⅰ（22日）〈教科構造の確立をめざして〉

芸術教育部門

1. 芸術教育における技術について　　発表：小笠原良一、木村鉄雄
   司会：世古一弥、本間雅夫
2. 子どもの感動と表現　　発表：鈴木五郎、太田幸雄　司会：乙部武光、桑田　孝
3. 鑑賞と創造について　　発表：荒川有史、無着成恭

科学教育部門

1. 自然科学教育の現代化　　発表：松井幹夫、佐藤文夫
   司会：庄司和晃、中原正木、竹内丑雄
2. 言語教育をどう進めるか　　発表：寒川道夫、三橋和正　司会：馬場正男、遠藤豊吉
3. 歴史地理教育の系統性について　　発表：上川淳　司会：吉村徳蔵、永田時雄

分 科 会

Ⅱ（23日）〈授業の創造をめざして〉

〈※1〉『明星の年輪―明星学園50年のあゆみ』(1974年)190～198頁
第4回以降は『同50年のあゆみ』『同60年のあゆみ』『同70年のあゆみ』等を参照。

1. 学級づくりと授業　　発表：佐伯昭定　司会：加藤和信、福田和
2. 教材研究と授業　　発表：依田好照　司会：岩浅農也、清水晴男
3. 子どもの創造性を養う授業　　発表：岸いわお　司会：森瑤子、佐藤和男
4. 教師の生活と授業　　発表：田中一水　司会：山根啓作、大沢勝也

第2回 ……1962年11月22日～23日

基本テーマ　　教科で何をどう教えるか、その基本的な構造と本質の究明

昨年は一貫教育の体系の上に、授業の研究と教科構造の究明を進めることを基調として研究発表会をもちましたところ、多数の御参加を得て、私たちの予想を超えた成果をみることができました。

本年もまた別記のような規模で研究発表会を開くこととなりました。秋の諸行事を了え、これから授業の充実に専念されようとする時期に、貴重な時間を割愛願うことは恐縮ですが、まげて御来会の上御討議、御批判、御指導を頂くことができたらまことに幸いであります。

参 加 費

・350円（資料代を含む）本校父母は別

基 本 提 案

昨年の「教育構造の究明と授業の研究」においては、「科学教育とは何か、芸術教育とは何か」「教材の再整理に当って基準はどこにおくか」について現場授業と討議の中で探り出そうとしました。いつ終着点につくとも知れぬ大きな問題でありながら、是非果さねばならない問題でありますので、昨年についで本年も標記のテーマをふまえて、以下のような提案をもって研究討議を進めていきたいと思います。

教科と教育……無着成恭
社会科学と教科……上川　淳
自然科学と教科……遠藤　豊
国語教科と教材の自主編成……寒川道夫
芸術と教科……鈴木五郎

分 科 会

- 国語　教材の自主編成
  1. 言語の機能と、子どもの認識思考の発達とはどうかかわりあうか。
  2. 子どもの発達に対し、国語教育の負うべき分野はどういうものか。
  3. 読み方教材の持たねばならぬ言語要素の性格はどういうものか。
  4. われわれの求める単語、文字、文、文章の性質および作品内容はどういうものか。
- 数学　量の指導の体系化

  量を体系的に指導することは、水道方式による算数教育の支えになっていると考える。また、理科教育の基礎にもなると考える。タイルを活用した基礎計算、量をもとにした新しいかけ算わり算の指導法、小数の加減をかけ算九九の前に導入すること、面積・体積でcm×cm＝cm²、cm²÷cm＝cm、cm²×cm＝cm³をどのように指導するか、重さの加法性は、子どもにとって自明ではない、これをどう指導するかなどの実践を検討して頂きたい。
- 理科　正しい理科の体系と教授法

  わたしたちは「理科は自然科学の基礎を体系的に教える教科である」という立場から、科

学の論理にあった教材の組織化をすること、および内容では、その細案と具体的方法を提案し、討論の中で深めていきたい。

- 体育　体育の授業で何を与えるか
  われわれは日常の学校生活の中で子どもたちの身体を如何に見つめており、かつ体育の授業で何を考えるのかを反省し、運動文化の追求と獲得に努力すべきだと考える。特に内包する技術の認識と、自己の身体を認識させることを子どもの動きの内で与えることによって、未来の社会生活への基盤を意識付けることが大切であり、現状の教材配列と運動分析により未発達の子どもたちを如何に指導すべきか等、広い範囲の問題をとり上げて検討したいと考える。
- 美術　芸術的表現と認識の発達
  子どもの創造的表現は、視覚的・空間的認識の発達とどのようなかかわりをもつのか、そうした認識の発達が子どもの創造的表現を阻害するともいわれているが果してそうだろうか。それらを中心に究明していきたい。
- 歴史・地理　現代史と地理
  歴史と地理の学問的体系が、子どもの認識とどうかかわりあいを持つかその点を追究しながら、教授内容の系統性を考えていきたい。討論の焦点を「現代史と地理」と設定したのは、歴史と地理を併行して検討するあしがかりをここにおこうとしたからである。
- 生活指導　都市の子どもと集団づくり
  都市の子どもたちのゆがんだ主体性に正しい姿勢をとらせ、自主的協力的な生活態度の形成を助成していきたい。
  それには、教師と子どもの1対1または1対多数の感化教育依存では大きな死角を生ずるだけで信頼がもてない。共々に、より民主的な集団づくりの営みの中での、教師集団と生徒集団とのかかわりあいが追求する、もろもろな過程の上にこそ正しい民主的性格がみのっていくのではなかろうか。

あいさつ・報告

（校　　長）照井猪一郎
（学園教務）橘　正薫

日程

22日（木）	
8:30	受付開始
9:00	朝の行事
9:20～10:10	授業
10:20～11:10	授業
11:20～12:10	全体集会（基本テーマ）
13:30～15:00	全体集会（基本提案）
	質疑・討論
16:00	終了

23日（金）	
8:30	受付開始
9:20～10:10	授業
10:30～12:00	分科会
13:00～16:00	分科会
16:30	閉会

第3回 ……1963年11月22日～23日

授業で子どもをかしこくする

基本テーマ　教科の論理と授業の論理

教育という仕事は意図的、計画的なものであるかぎり、その内容と方法を明らかにできるものでなければならないと考えています。

しかもそれを明らかにしていくうえで最も重要な要素は「何を」「どう教えるか」ということです。

また教える内容や順序や方法が正しいかどうかということも、それらは単に教える内容や順序についての実践的検討が不十分であったというような問題ばかりでなく、そのような内容、方法、それ自体が、その教科を成立させている科学観や芸術観、あるいは、科学や芸術がもつ論理と深くかかわり合っているのだと考えています。

もちろん教育という仕事の中には、時にはことばにもいいあらわせないくらい複雑な内容がはいっていることはたしかです。だがわたしたちは、その中で最も重要な要素である教科の骨ぐみと、それを子どもの身につけさせるすじみちとを明らかにすることによって、次第に他の要素をも分析し、統合していこうと考えているのです。

今年もまた多くの方の御支援と御参加をお願い致します。

会費

・400円（資料代を含む）



22日

全体会

■あいさつ　　理事長　市村寅之輔
　　校長　照井猪一郎
　　ＰＴＡ会長　徳武敏夫

■明星学園の教育研究に期待する

■発表　明星学園の教育研究……原田満寿郎
　教科の論理と授業の論理……遠藤　豊、無着成恭

◇授業と授業研究

各教科にわたって公開授業があります。

授業終了後、教科毎に、その日の授業について、教材の把握のしかた、授業のくみ立てかた、子どもの組織のしかた等、授業を中心に研究会をもちます。

◇研究発表

わたしたちが教科をどのように考え、内容をどう組織し、どんな方法で子どもの身につけさせようとしているかについて、教科別に発表会を持ち、皆さんの御批判を頂きたいと考えています。

研究発表

1. 国語科の内容と方法

発表：無着成恭
司会：遠藤豊吉、野村篤司
講師：奥田靖雄

国語教育は一般にきわめて混沌としている。そのため、まず何を教えるかを明確にしなければならない。われわれはことばが現実の認識との媒体であるという観点から、事物とことばの対応を明確にし、ことばで事物、現実をとらえ、思考し、また表現できる力を育てることを国語教育の仕事だと考える。ここから、低学年では、①日本語指導　②読み方指導　③表現指導で、その基本能力を育てる。

高学年では、①体系的な言語指導と、②文学教育になると考える。なお、文章表現活動は、各教材をすすめるとき、事実の認識、思考、論理など構造的に把握するための重要な手順の中に組みこまれると考える。

2. 導入期における英語教育の内容と方法

発表：渡辺慎晤、迫水祥子
司会：兼子淳吾
講師：井上正平

英語を生きたことばとして把握する。

そして、楽しく、のびのびと学べる雰囲気をつくる。

従来のように頭だけで学ぶ英語ではなく、すべての機能を使って習得できるように努めなくてはならない。そのためには？

そのために、私たちは、英語を、ある文が使われるsituationと結びつけて学習できるように努めている。

具体的には、Audio-Visualな教材を工夫、製作し、それをフルに活用している。そして、それらのプログラムを発表する。

3. 数学における量の指導と計算体系

発表：松井幹夫
司会：野沢　茂
講師：長妻克亘、遠山　啓

「数の計算はよくできるが、応用問題が解けない」ということをよく聞きます。それは量の指導がほとんど行なわれていないからです。液量、長さ、重さ、面積、時間……などの量が数値化されるまでのプロセスはみな同じではなくそれぞれの量のもっている性質や法則に応じた指導法を確立しなければならないと考え、実践しています。一方、数計算の体系的学習方法としての水道方式が、どうして学習能率を高めるものを持っているかという点についても、わかっていたことを発表し、検討していただきたいと思います。

4. 自然科学教育の体系と授業の方法

発表：遠藤　豊
司会：三井澄雄、玉田泰太郎
講師：真船和夫、林　淳一
　　小野　周

わたしたちは、子どもがほんとうに理科がよくわかるためには、その内容と方法が、自然科学の事実、法則とその論理を、正しく反映した形で組織されていなければならないと考えている。

そしてこのような仕事が、自然科学の教育に深く関心をよせている学者や研究者、及び熱心な現場の教師たちの共同研究などによってかなりの程度に具体化されてきていることも事実である。

こんどの研究会では、わたしたちが自然科学教育の内容や方法を、どのような考え方のもとに組織し、どんな方法で授業を行なってきたか、実験の方法などもいれながら具体的な形で報告し、みなさんの御批判を頂きたいと考えている。

5. 社会認識を育てる基盤とその系統

発表：辻本猪一郎
司会：木本　力、本多公栄
講師：入江敏夫、高橋磌一

小中学校において社会科学的認識を育てるには、人類の発展を法則的に明らかにしていく歴史の授業と、空間的領域における生産活動を分析していく地理の授業が、主たる役わりをになっている。だが、それが教科として成立する条件は小学校高学年の段階であろう。それでは低学年はほうっておいてよいのだろうか？

わたしたちは、従来の歴史、地理教育の反省の上にたって、社会認識を育てるために、何がどう積み上げられなければならないか、その系統性を追究しながら教材研究をすすめている。

6. 教材としての美術教育

発表：太田幸雄
司会：岡島健太郎
講師：井手則雄、橋川高明

子どもの自由な創造的表現活動は授業という組織づけられた枠の中だけで行なわれるとしたら芸術的創造の理論とムジュンする。例えば子どもはいつもきまった時間に感動したり描きたい衝動がおきたりはしないからだ。

しかし、そうした描きたい衝動やイメージはなんらかの積重ねによってなされるのではないだろうが、とすれば一時間、一時間の授業においては子どもの芸術的諸能力の開発のための基礎を教えるための体系づけられた教科としての美術教育でなければならないのではないか。

7. 徒手体操、リズム教材の体系と授業

発表：吉田　登
司会：亀村五郎
講師：正木健雄、野口三千三

体操は科学的思考の産物であって、合理性を基礎とするものである。しかし一方には体操は子どもたちや青年の欲求にこたえるものを持っていないというような批判もある。

体操は、果して体育の教材として不適当なのであろうか、子どもたちがおもしろくない、教師は進歩の度合がわからないなどの単なる直観的評価だけでほうむってよいものだろうか。

人間のからだを生理学を基盤に分析し、合理的な動きを意識的に行なうことによってから

だをつくってゆくように組立てられた体操が、子どもの要求や、体育の要求にこたえないとすれば、それは教師の体操教材の把握や、組織のしかたに問題があるのではないだろうか。

分科会では、この点を中心に研究し、徒手体操教材の意味と位置と指導法を明らかにしていきたいと思う。

23日

分科会

1. (1) 低学年の国語教育　(2) 文学の授業

発表：佐伯昭定、無着成恭
司会：遠藤豊吉、野村篤司
講師：奥田靖雄

国語科の内容を次のように考えている。

A　低学年の国語（1年から3年まで）

①言語指導　②よみ、かき指導・読み方教育・つづり方教育

わたしたちは、1年生から3年生までは文学教育といえるほどの文学教育はできないと考えている。

B　高学年（小学校4年生以上）

①体系的な言語指導　発音←→文字・文法・語い・文体

②文学教育　鑑賞・創造

2. 英語教育の方法

発表：渡辺慎晤、迫水祥子
司会：兼子淳吾
講師：井上正平

中学生の段階になると、日本語なくしては物を観察したり、考えたりすることができない。そのような情況のもとで英語を学ぶのであるが、英語を習得するためには、どのような方法が最も効果的であるか？ この問題は、英語教育が何をめざしているかという問題と密接にかかわりあっている。分科会では、この方法を中心に討論を進めて行きたいと思う。

3. (1) 数概念づくりと基礎計算　(2) 数学教育で量をどう扱うか

発表：小森澄憲、松井幹夫
　　伊藤　迪
司会：野沢　茂
講師：長妻克亘、遠山　啓

(1) 数を導入する場合、順序数から集合数へという従来の道すじより、集合数から出発する方が、たしかな数概念をつくる。そして、筆算の土台である数の十進構造をつかませることができる。この具体的な指導プログラムと、そこで発揮されるタイルという教具の役割と使い方について、提案する。

(2) 数学教育であつかわなければならない量の指導には、2つの大きなねらいがある。

①量（液量、長さ、重さ、体積……）そのもののもっている性質や法則を理解させること。

②量をもとにして、数や計算を導きながら、度や、率のような、高次の量をつかませること。この観点から量指導のプログラムを検討する。

4. (1) 低学年における自然知識の内容と方法 (2) 物質概念の形成 (3) 力学教材の検討

発表：佐藤文夫、町田熊吉
遠藤 豊
司会：三井澄雄、玉田泰太郎
講師：真船和夫、林 淳一
小野 周

自然科学教育の内容や方法を、真に具体的なものとしていく上での問題点は、まだたくさん残されている。物質概念形成の問題、それと数学における量との関連、電気や力学等の教材を原子論的立場からどのように組織するかという問題、化学や生物教材の組織のしかたや授業の方法など。……そして4年、5年からはじめる体系的な学習への準備として、低学年では、どのようなことを自然から学びとらせておいたらよいかという問題など……。こんどの分科会では、これらのうちのいくつかについて提案し、討論をふかめたいと考えている。

5. 歴史教育における教材の系統化（小学校と中学校の授業を対象として）

発表：上川 淳、依田好照
司会：本多公栄
講師：高橋磌一

歴史の学習を科学的にすすめることは困難が多いといわれている。子どもに理解されにくい内容が多くて複雑すぎるなどということである。だが、そうした困難さの根本に、教材が論理的に整理されていないということがないだろうか。教材の配列がただ時代の順序を追うというだけだったら、授業の積上げの意味をなさないし、科学的な思考を育てることも困難となろう。

教材の組みたてにはどういう系統を考えたらよいか、この点を中心に討議をすすめたい。

6. 地理教育の系統

発表：広川 孝
司会：木本 力
講師：入江敏夫、関根鎭彦

地理学習を通して社会認識を育てるためには、次の立場と方法が必要であると考えている。(1) 地理学習は歴史学習、政経社の学習とともに、社会を科学的に考察していくための一分野である。したがって、生産所得という基礎概念を軸に学習の系統をくみたてる必要がある。(2) 地理学習においては、とくに各地域の多様性と共通性を把握することが重要である。そのためには、現代社会の認識をたすけるための地域区分を設定し、学習の順序を系統だてることが必要である。

7. 造形表現の論理と法則性

発表：鈴木五郎
司会：世古一弥
講師：箕田源二郎、橋川高明

子どもが自分の感じたこと、見たこと、思いうかべたことを造形的表現として形象化するには、いままでいわれてきた感動即表現といった図式だけでは達成することはできない。又、対象の把握ができればすぐさま表現になるようにもいわれてきたがそれだけでは不十分であ

る。つまり、造形表現の技術や論理をくぐりぬけなければ造形的表現として形象化することはできない。又、どのように造形表現の技術や論理を獲得するのか。又、どのように獲得させなければならないのか。その内容と方法について討論する。

8. ソルフェージュの体系　　発表：小笠原良一
司会：田中一水

従来のソルフェージュという解釈の仕方は単に譜を歌うということであった。しかしこれはもっと広義に解釈されるべきものである。

ソルフェージュは音楽の基礎全般にわたるものであり、音譜と実音がよく結びつきその音楽的進行を音楽的リズムによって感じとることができるようにしなければならない。そしてその書かれたものを再現（演奏）し又はその相違を感じることができるようにしなくてはならない。このような見地から学校におけるソルフェージュをもっと系統だてていくことを検討したい。

9. 体育教材をどのように組織したらよいか　　発表：人見進夫
司会：亀村五郎
講師：正木健雄、野口三千三

子どもの身体的諸能力を全面発達させるためにはどうしたらよいか。体育では「どんなからだを育てるか」を原則として、教材の系統性を研究してきたが、いろいろの種目の「要素」を分析し「発展系列」を明らかにしていくなかでぶつかった問題点を捉え教材の体系化について討論する。

ダンスの体系と授業

ダンスはリズムを通して身体の動きを美しく自由に感情表現しなければならない。そのためには動きとリズムが調和するようにリズムを使いこなすことが大切である。

①そこでリズムをダンスに必要な側面から分析し動きの中で理解させる。
②また表現運動として模倣表現、感情表現などを型の上でよりよく表現できるようにする。
③他の作品や小さな動きなどにわたって鑑賞する力をやしなう。

この点から問題を検討していきたいと思う。

10. 家庭科における食生活教材の検討　　発表：高須いち
司会：坂本初枝
講師：村田忠三

食生活は家庭生活の機能を発揮する上に大きな役割を持っている。現在の生活は科学の進歩につれて、生産技術・食品加工法・生活様式・国民栄養・青少年の体位の問題等食生活に関連の深いことが急激に変化している。家庭科はこれ等の外部的な要因をどのように受けとめるか——将来のめざましい進歩に対しても土台になる技術や食生活の問題を解決する知識と意欲を持たせるためにはどのように教材を組立てるかを検討する。（以下略）

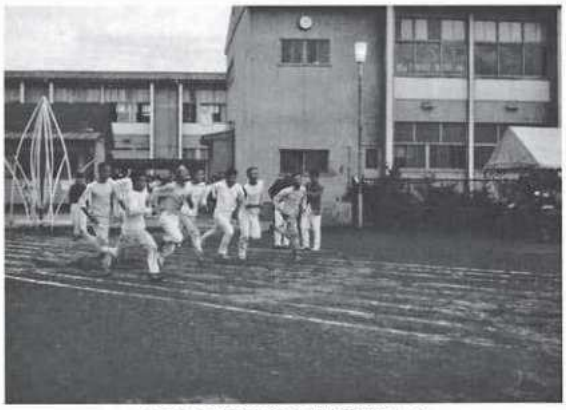
(3) 高学年部の教育研究

そのころ、高学年部ではどうしていたか。ＰＴＡ会報『道』No.59に、「高学年部教育研究企画委員」の次のような報告がある。

全園の教育研究会が開かれるようになってから、もうだいぶたった。教師が教育の研究をするのはあたりまえのことだが、この時代のなかで一人一人の教師の孤立した善意や才能だけでは、どんなに名人芸をきたいしあっても、それが生徒の成長に役に立たないことがあきらかになってきたところから、「全園の」研究会がはじまったのだ。12年の教科プランも、新しい編成も、そこから生まれてきた。毎年春夏秋の研究会は、その成果をさらに推進していくものである。ことに高学年部は、これからだんだんに新しい成果を身につけた生徒をうけとるだけに、いよいよ本格的な研究段階に入るわけである。

高学年部のばあい、各教科のなかでさらにいくつかの課目が分化し、かなり専門的なものをふくんでいる。また、生徒のがわも、一人一人の発達がかなりちがった面をしめしてくる。そのため、これまでは全教科での公開研究授業という形式はとっていないが、春、夏の全園の研究会はもちろんのこと、秋の研究授業も教師は参加して、低・中と共通のテーマで討議するとともに、高学年部独自の問題を話しあってきた。客観的には牛歩のそしりもあろうが、昨年度の経過と今年度の計画をここで報告しておく。

昨年春の全園の研究会で、「教師集団と生徒集団のかかわり」、「生徒の自主的学習」などの問題が、他のいくつかの問題とともに提起された。高学年部では、さきにもいうとおり、各課目が分化して専門的になるために、授業の内容について共同の討論がむずかしい面があるかわりに、一人の生徒を多勢の教師がみるという利点がある。したがって、「生徒の自主的学習」という点に光をあてれば、共通の討議がすすむし、いやおうなしに「教師集団と生徒集団」はかかわりあう。そこで、この二つを一年間の研究課題とし、「集団による指導」・「自治会活動」・「ホーム・ルーム活動」・「教室学習」の四部門にわけ、各教科部会・学年部会・全体会議をかさねながら、話し合いをすすめた。はじめのうちは、けっきょくそのむずかしさを話しあうところからということで、そのなかでそれぞれの考え方のくいちがいもあきらかになり、それだけに共通の課題として論じあわなければならない細目もひろいあげられてきた。夏休みには、御岳で、一日は高学年部部会、もう一日は低・中とも合同で研究会を開き、ひろげてきた問題点をしぼった。その結果が、10月21日、仮装大会の日の午前に報告された「明星の教育(2)」である。高学年部のなかで、仮装大会はホーム・ルーム運営上その集団指導のための有効な手段でもあるので、この日に報告会をおこなって、その一部をみてもらうことにしたのである。



1963年(昭和38)高校体育大会

この日の参会者はあまり多くなく、報告書もかんたんなものであるが、高学年部の教師にとって、そこで提出された宿題はか

なりおもいものだった。とくに、教室学習をどう充実させるか？ という問題は、停滞する自治会活動の問題とならんで、次年度への具体化が要求された。そこで、本年度は当然その路線の上で予定がくまれなければならない。しかも、大学の入試・文部省による指導要領の改訂など、外的条件は理想的な教育体系を実現していく上にいろいろなひずみを加えてきている。

春の研究会では、この外的条件に対処しつつ、われわれの教科内容をどう編成するか。それを授業の上にどう展開していくか、という問が投げかけられ、今年は教科部会を中心にしてすこしずつでも解決していくことになっている。この秋には、いくつかの教科を例として討議をする予定である。もう一つの課題の自治活動については、ＰＴＡと同じで、必要性を感じながら自分が役員になるのはゴメンだという会員大衆を前にして、どの部門から火をつけるかと考えているところであり、これはもう少し気を長くしていくかまえである。この概要報告では意をつくさないが、質問・批判はいつでもよろこんでうけたまわり、ご協力を得て、成果を一人一人の生徒の上にみていきたいと思っている。（高学年部企画委員）〈※1〉



1962年（昭和37）高校卒業生（29回生）

＜構成：依田 好照＞

〈※1〉 PTA会報『道』No.59（1963年7月10日）

3 低・中学年部の実践

(1)教科書の自主編成

1960年代、明星学園では教科書づくりがさかんに行われ、各教科で教科書や資料集、実践記録集などがつくられた。ここでは公教育にも大きな影響を与えた『にっぽんご』と『わかるさんすう』を取り上げる。

明星学園の教師たちは創立以来、「教育の内容と教育の方法は一体のものであらねばならない」と考え、教育内容の自主編成を行ってきた。学園が創立した大正末期、日本の多くの学校では国定の教科書に依存した教育が行われていた。これに対し、照井猪一郎を中心とする明星の教師たちは、現場での実践をもとに『新読本』全5巻をつくりあげた。第1巻が発行されたのは、創立から2年後の1925年（大正15）であった。

この『新読本』の発行をはじめとして、明星の教師たちは長年にわたって教育内容を整備することに取り組み、より良い教育の方向を日本の教育界に提案し続けてきた。「私立であっても、“社会立”の学校をめざす」と述べた創立者赤井の精神と情熱は、後年の学園教師たちにも連綿と引き継がれてきた。実際、明星の自主編成教科書の内容は、長い時間の経過の後、つぎつぎと検定教科書に取り入れられていった。明星の教育研究は、民間教育研究の成果に学びつつ、さらにその推進力となる役割も果たしたのである。



1968年(昭和43)砂場ができた!

自主編成教科書『にっぽんご』

『にっぽんご１　もじのほん』(1年1学期用) は1964年4月むぎ書房から発行された。つづいて『にっぽんご２　もじ　はつおん　ぶんぽう』(1年2学期・3学期用) は同年8月、それにひきつづいて日本語の文法の基礎を指導するための『にっぽんご 3』『にっぽんご 4の上』が出版された。

いずれも学校に言語学者の奥田靖雄氏を招いて指導を受けつつ、小学校の国語部会の教師が連日夜遅くまで議論しながら作り上げていったものである。その経過を追う。

1962年11月に開かれた第2回公開研究会の基本テーマは「教科で何をどう教えるか、その基本的な構造と本質の究明」であった。国語科の教師たちは「教材の自主編成」を掲げて公開研究会に臨んだが、参加した研究者・教師から厳しい批判を受けた。公開研究会を主導し、低学年部の国語の授業を発表する立場にあった無着成恭はこの批判を謙虚に受け止め、学園として講師を招き、教師たちが指導を受けることを決めた。この時、講師として招いたのが言語学者の奥田靖雄氏であった。

国語科では週1回奥田氏の講義を受けることになった。そして、それが4、5回つづいたころ、1年生の担任であった辻木猪一郎が、「1年生の国語の授業というのは一体何をどう教えたらよいのかさっぱりわからん」と言い出し、それを受けて奥田氏は「1年生ではかな文字の正書法を教えるのだよ。それでは1年生の教科書を作ればいいのではないか」と言ったのだった。そこから教

科書『にっぽんご・もじのほん』づくりがスタートした。



文部省の指導要領に準拠して作られた検定教科書は、「話す、聞く、読む、書く」の4領域にわけ言語を使用することで、日本語が自然に身につくことを期待していた。子どもたちは日本語そのものについての知識を教えてもらえないので、丸ごと暗記するしかなかった。具体的に言えば、検定教科書では1年生の最初にいきなり、「はい」「せんせい」という単語が出てくる。このふたつの「い」には単音としての「い」、長く伸ばす音（長音）に対応する「い」の違いがある。その2つがいきなり一緒に出てくるのである。正しい知識を持たない子どもたちは同じような文字の書き間違いを繰り返していた。これは指導法の問題だと明星の教師はとらえた。言語そのものを教えることと、言語活動を教えることを区別して教えることの大切さに気づいたのであった。

日常業務を抱えた教師たちが教科書を作りあげるまでには、並々ならぬ苦労があった。放課後週3日、午後6時から原稿制作に取りかかり、作業が終わるのは深夜12時過ぎだった。明星の国語科教師であった内藤哲彦は、『にっぽんご』教科書づくりの様子を次のように伝えた。

「放課後、奥田先生の講義を受けながら、壁に貼った模造紙にマジックインキで文章を書き込む。みんなで一字一句検討して修正を加えていく。ときに研究協力者の先生が交代で参加する。終電に間に合うギリギリまで頑張って、深夜の井の頭公園を駅に急ぐ。徹夜になることもある。共働きだった私は学校で徹夜して、朝一番の電車で家に帰り、子どもを保育園に送りとどけてから、その足で登校し授業に臨むこともあった。」

このようにして『にっぽんご』シリーズは発行された。それには多くの人たちの協力があった。言語学者でのちに宮城教育大学教授となった奥田靖雄氏をはじめ、それぞれ音声、文法、言語心理、国語研究、語彙などの専門分野の研究者（上村幸雄氏、鈴木重幸氏、鈴木康之氏、高木一彦氏、高橋太郎氏、根本今朝雄氏、宮島達夫氏ら）、全国各地の学校現場で実践している教育科学研究会の仲間たち、さらには教科書づくりにも参加したむぎ書房の浅川満氏、教科書の挿絵を描き、明星の保護者でもあった箕田源二郎氏、装丁を担当し、明星の美術科教師でもあった安野光雅氏などである。

検定教科書と『にっぽんご』の大きな違いはどこか。検定教科書の多くは単語や文章を読ませ、その時々におぼえこませて、かな文字を表記させている。このような丸ごと暗記させる方法を「語形法」という。この方法だと、「オハヨー」という単語を文字表記するとき、なぜ「おはよう」になるのかはわからない。子どもたちは「う」と書いて「お」と読むときもあるのだと漠然と受け取るしかない。それに対し、原則として1音1文字という規則を持った日本語のかな文字を、体系的に教えていく方法を「音声法」という。『にっぽんご』シリーズは音声法に基づいており、「おはよう」の「う」は長音の法則にのっとってつけられた「う」なのだと、子どもたちに理解させる工夫が盛り込まれている。子どもたちをさらに苦労させるのが、助詞の「てにをは」である。「ヤマエイク」は「山へいく」と表記され、「ホンオヨム」は「本をよむ」と表記される。『にっぽんご』では単語と単語を結び付けるときの文字を「くっつき」と呼び、「くっつき」は発音通りではなく、「え」は「へ」、「お」は「を」と文字表記する規則があるのだと教えていく。「なんでもいいから覚えなさい」ではなく、規則は規則として教えていくのである。

新潟の公立小学校の教師であった須田清は、『にっぽんご』の教科書が出版されることを知った。彼はこの教科書で教えたいがために、妻子と共に上京し、明星の教師になった。彼は明星の子どもたちに『にっぽんご』を教えた実践記録をまとめて、『かな文字の教え方』（1967年むぎ書房）という本を記した。具体的な教材・教具まで掲載され、教師たちの指導書にもなっている名著である。

例えばこんな場面がある。日本語の文字表記を使い慣れた大人たちでさえ「おう」と書くのか「おお」とかくのか迷うことが多い単語がある。王様は「おうさま」なのか「おおさま」なのかと。この本では基本的には「おう」と表記するが、例外として次の単語は「おお」と表記されるとし、1枚の絵を掲げる。「遠くの、大きな、氷の上を、多くの、オオカミ、十ずつ、通る」が絵であらわされ、子どもたちは山を歩く狼の絵とともに、この「規則」を歌のように覚えてしまう。そしてその後はこの歌に照らし合わせて、「これはお、こっちはう」と判断することができるようになる。

このように、『にっぽんご』は日本語の体系について順序立てて学習していくための教科書なのである。

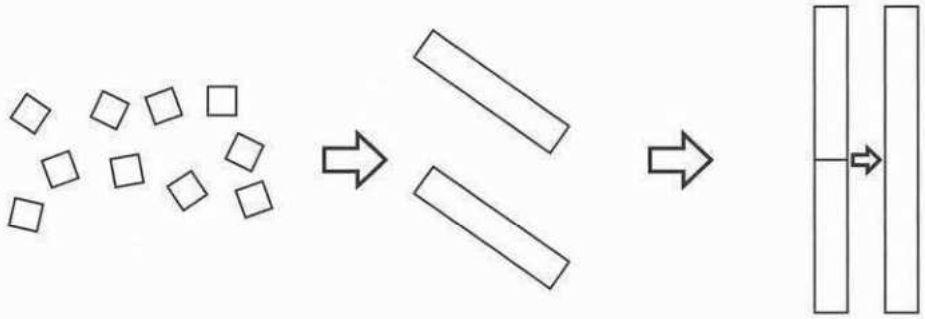
自主編成教科書『わかるさんすう』



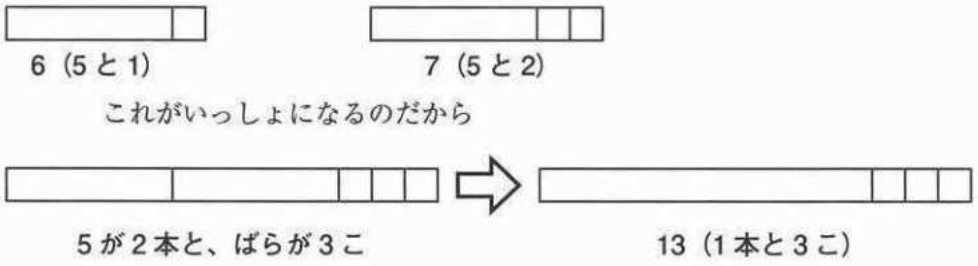
1950年代、民間研究団体がたくさん結成され、教育の内容と教育の方法の研究が盛んに行われるようになった。「歴史教育者協議会（歴教協）」「新しい絵の会」「科学教育研究協議会（科教協）」「日本作文の会」「教育科学研究会（教科研）」「数学教育協議会（数教協）」など、多くの教師が集まり活発な議論が展開された。明星学園の教師の多くはいずれかの研究団体に所属し、民間教育運動の活動家でもあった。1951年、遠山啓氏らによって結成された数学教育協議会（数教協）の研究の成果の上に、明星学園での実践を裏づけとして作られた教科書が『わかるさんすう』（1965年むぎ書房）である。『にっぽんご』は明星学園・国語部会著になっているが、『わかるさんすう』は遠山啓氏の監修で、編集委員として明星の教師・松井幹夫、野沢茂が入っている。『にっぽんご』が教科研国語部会の全国の教師によって実践され改定を重ねたように、『わかるさんすう』もまた全国の数教協の教師たちによって実践され改定された。この二つの教科書は、子どもたちの「なぜ」に答える内容をもち、学んだことが積み重なって、わかりやすく、子どもたちの支持を得た。それゆえ、やがてその内容の一部が検定教科書に取りいれられていった。検定教科書のなかで、数をあらわす具体物が「おはじき」から「タイル」に変えられていったのはその具体的なあらわれである。

『わかるさんすう』と検定教科書との主たる違いを紹介しよう。

1年生の繰上りの学習「6+7」を例にとってみよう。『わかるさんすう』では十進構造を教えるのにタイルを使う。タイルには「1」をあらわす「ばらタイル」、ばらタイルが5個集まった「5タイル（5のかんづめタイルとよぶ）」、ばらタイルが10個集まった「10タイル（ぼうタイルとよぶ）」とがある。



5以上の数を扱う時、子どもたちは、6は5と1からできていることをイメージとして持つ。同じように7は5と2からできている。「6+7」を考えるとき、子どもの頭は

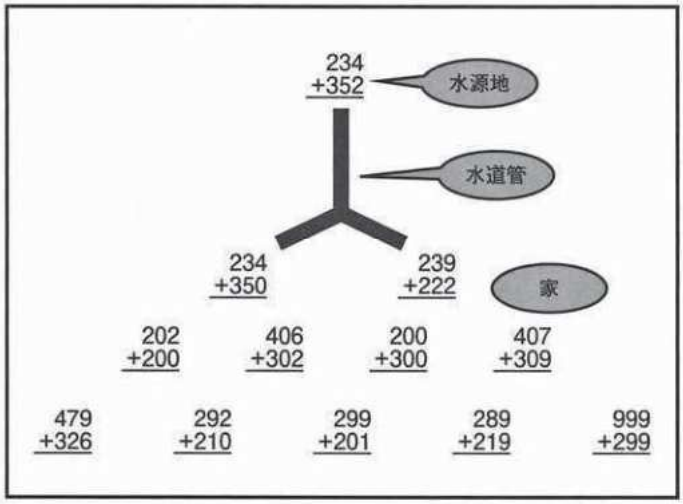


「5と5で10、とび出している1と2を足すと3、だから13になる」と理解し、自信を持って説明できるようになる。教師は教える必要はない。子どもたち自らが学んだことをもとに、さらに新しい事柄に踏み出すのである。「13以外の答えはないのだから教えるのは簡単だろう」と思うかもしれない。だが、その答えに到達する過程が発展性を持っているかどうかは重要だ。1年生といえども、なぜそういう答えになるか、自分の言葉で説明できるのである。前の学習が生きているということは、子どもたちの意欲を喚起する。これは検定教科書の“おはじき”ではできない。教材としてのおはじきは、数を「かたまり」としてみる観点（5のタイル、10のタイル）を持っていないからだ。「6+7」が理解できればほかのたし算、「5+8」も「6+8」も容易に理解できる。繰り上りのある計算の仕組みが理解できると、2ケタと2ケタの計算も1年生で学習可能になる。検定教科書では一つひとつの単元をつながりのない別々のものとして学ばせていくのに対して、『わかるさんすう』では学んだことが次に生かされ、自らが考えて発展できるように仕組まれているのである。

『わかるさんすう』では四則計算をするとき「水道方式」と呼んでいる学習をする。遠山啓氏はその著書『数学の学び方・教え方』〈※1〉で「水道方式」について次のように記述している。

> この図はちょうど都会の水道設備に似ています。水源地がいちばん高いところにあって、水道管でしだいに枝分かれして、各家庭の台所まできています。だから私はこれを研究するときに、半ば冗談に「水道方式」という名前をつけてやっていたら、いつの間にかそれが本名になってしまったのです。

〈※1〉 遠山啓『数学の学び方・教え方』（岩波新書、1972年5月31日）



あまり偉そうな名前ではないけれど、水道は多くの家庭にはいっているし、だれでも使えるものですから、その水道のようにこの教え方が普及してほしいという願いもこめられています。

例えば3ケタと3ケタの足し算の計算を学習する。全部の計算をやるとなると81万題になる。81万題の問題を解くには1日に100題やっても20数年かかる。これをあまり時間をかけずにやるとなったらどうするか？子どもは一つできると似た問題は出来るようになっている。だからこれだけの問題を型に分類する。型分けができたら次にどんな順序でやればいいか順序づける。型分けの原則は、

① 繰り上りのないものから繰上りのあるものへ。

② 0がないものから0の含んだものへ。

「水道方式」は子どもたちが計算を進めていけばいくほど自信を持って答えを出していく方法なのである。

検定教科書では『わかるさんすう』のタイル図は取り入れたが、いまだに数の分解、合成の自由な操作に有効だというタイルの良さが生かされていないことは残念である。

(2) 夏季行事

4・4・4制が実施されていた1960（昭和35）年代、中学年部前期の5・6年生は水泳を主内容とした千倉寮で、後期の7・8年生は山岳を主とした軽井沢・上野原寮で、それぞれ集団生活を実施している。

1) 千倉行事のとりくみ

卒業した子どもたちに「小学校時代で一番覚えていることは？」と尋ねると「千倉の海」と答える子が多い。それだけ、印象深い行事である。明星学園では千倉の行事を夏の生活学校と位置づけている。大自然の中の1週間。寮生活はみんなで作るみんなの世界。明星の精神を育てる場所であった。自主、協同、研究、規律が大事にされた。1963年、ＰＴＡの機関紙『道』に佐伯昭定が「千倉臨海生活1963年」と題して千倉夏季行事のことを掲載している。〈※1〉

「千倉臨海生活1963年」　低学年担任　佐伯昭定

明星の子どもたちにとって、ここ千倉の生活はよほどのさびしがりやでない限り、この上なく楽しいもののようです。親元から遠く離れて1週間も集団生活するということは、たぶん大部分の子どもが初めての経験でしょう。

〈※1〉 PTA会報『道』No.60（1963年10月31日）2頁

今年は7月17日から30日まで、2つの班に分かれ、13人の先生の指導のもとに臨海生活が行われました。

○部屋

寮の中では、子どもたちは10の部屋にわかれて生活をします。それらの部屋には、それぞれ名前がついています。「さざえ」「くらげ」「ひとで」などは男の子の部屋、「あわび」「たから貝」などは女の子の部屋。いずれも男の子らしい、女の子らしい感じのするような名前であるよう配慮されています。



1963年(昭和38)千倉、佐伯先生と子どもたち

「5年生の時来たのとちがって、リーダーという仕事も今度はついてきている。5年生はみんないい子だけど、きゃあきゃあうるさい。自分たちも去年はこうだったのかと思うとおかしくなる」。

6年生の田中千恵さんの感想です。5・6年生がいっしょに部屋を作り、6年生は去年の体験を生かしながら部屋を運営していくのです。

○進級テスト

進級テストは潮の引きぐあいによって、浜でするときと、磯でする時とあります。赤帽や白帽たちは浜でする進級テストをよろこびます。浜では背の立つところでテストが行われるからです。だから、苦しくなれば容易に立つことができます。ところが苦しくなくても立ってしまう者もいます。ほんとは苦しいのかもしれないけれども、とことんまでがんばるという気力に欠けているからでしょう。ところが、その反面、ぜひとも白帽をとりたいと思って、テストを受けるのだが、どうしても途中で沈んでしまう。「先生、もう1回やらせてね」といって再び試してみる子が、また失敗してしまう。5、6回繰り返すうちについに涙が出てきて、泣きながらテストを受けている子もあります。そういう子は1週間も終わり頃になると、たいてい2本線にぐらいになっています。

さて、磯で行うテストとなると、ちょっと状況が変わってきます。まわりが岩でかこまれていて、プールのように波は静かだが、背が立たないのです。だいたい、3メートルから5メートルの深さです。泳ぐ前に、とび込むことにまず勇気がいります。とび込んで2かき3かき泳ぐようすを見れば、泳ぎきる力を持っているかどうか、だいたい見当がつきます。ところが、体力よりも気持ちの方が先に参ってしまう者があります。背の立つ浜でのテストでがんばって泳ぐ練習をしていない子は、ここで試練にあうわけです。「助けて、センセー」などと力強い声で悲鳴をあげている間は、先生たちはまわりの岩に立って見ているだけです。とにかく、そういう子は泳ぐ力は持っているのです。



1970年代の千倉行事のようす

その日の子どもの日記に「わたしはおぼれて死にかけているのに、先生たちはニヤニヤ笑って見ていた」などと書かれてしまうのはそんな事のあった日です。

そういう体験を経てきただけに、進級して新しい帽子をもらった時のうれしさはまた格別でしょう。

○遠泳

遠泳といってもせいぜい450メートルくらいのものです。3本線だけが参加します。波打ちぎわから少し離れた沖合を海岸線に沿って泳ぎます。

この遠泳に参加するほどの者は、さすがに悲鳴をあげたり、わめいたりする者はいません。誇りがあるからです。5メートル間隔に一列に並び、その列の中に数人の先生が入ります。列から少し離れたところに監視の舟がおり、ゆっくりついていきます。スピードが落ちてくる者があれば列の後ろにつかせます。それでも進まなくなると、陸にあがるよう注意されます。もちろん、ほとんどの参加者が泳ぎ切るのが普通です。

この遠泳に成功することは、いわば1級の上、特級に進んだともいえるでしょう。そういう誇りを子どもたちは持つのです。





○食事

だれのおなかに何がはいっているか、このことは集団生活をする上において、健康管理上重要なことです。部屋ごとに一つの食卓に向かい、部屋担当の先生もいっしょに食べながら、そのことに気を配っています。だから、どの子のハラの中も、みんな先生たちにはわかっているのです。

1週間分の献立はできているが、その日の天候、子どもの体のつかれ具合、前の食事のようすなど考慮しながら、北川、高須両先生が食事を作ってくれます。

だいたい肉類を好み、魚、野菜ものが残されるようです。魚などの食べ方のわからない者が意外に多いのが目立ちます。



○ゼイキン

「今日、出したか」　「出しました」
「どれくらい出た？」　「3本です」
「かたさは、どうだった？」「中っくらい」「よし」

この会話は先生と子どもがしているのです。排便のようすを先生が子どもに質問しているところです。寮では排便のことを「税金」といっています。これは食事と同じ程度に重要な問題です。

寮生活3日目ぐらいに腹痛をうったえ出てくる子どもは、たいてい税金滞納者です。納入状況はいち



1970年代の千倉行事のようす

いち聞かなくても、日記の中にそのことを書く欄ができています。だからはずかしがりやの女の子でも、すぐにわかるようになっています。つまり、記録することが義務付けられているからです。

滞納者の処理は専門の看護婦さんがしてくれます。こういう子どもは年々少なくなってきています。今年などは2、3人でした。

○うつぼ

これは魚の名前です。別名「なまだ」ともいいます。磯に住んでいて、ヘビに似たうす気味悪いかっこうをしています。それが時折、岩の割れめなどに潜んでいることがあります。こちらから手を出さない限り、おそいかかるようなことはないが、うっかりかみつかれるようなことにでもなると、肉のひとかけらぐらい持っていかれてしまうそうです。千倉の磯にいるうつぼは毒は持っていません。もりでつくと、柄にヘビのようにからみつき、竹の柄を折ってしまうこともあります。明星では、この魚に向かっていけるのは吉田先生ぐらいのもので、たいていの者は見ただけでちぢみ上がってしまいます。なにしろ、首のあたりまで口が裂け、するどい歯を持ち、それが、さざえを取ろうとしてもぐったすぐ目の前にいた時など……。

岩によじりのぼった後でも、5、6分は胸の動悸がおさまりません。今まで、これにかみつかれた者は明星にはいませんが、その恐ろしさだけはみんな知っています。

寮の先生のいる部屋は「うつぼ」となっています。

○先発隊

夏になって、寮開きが行われる前に、毎年何人かの先生が、先発隊となって千倉に出かけます。今年は吉田先生をリーダーとして、他2名の先生が5日前に出かけました。しかし、5日間、3人の先生が夕方おそくまで仕事をしても、尚残る仕事があったのです。

その仕事、先発隊の仕事とは、まず寮のまわりの草むしりから始まるのです。砂を運び、セメントをこね、ちりを払い、ふとんをほし、たたみを入れ、30キロに近いコンクリートのおもりをかつぎ、よしず張りの小屋をたて、監視台を作り、今年の海の流れを調べ……。とにかく、そういう仕事があるのです。





1970年代の千倉行事のようす



千倉寮全景

＜文責・構成：一瀬 清＞

2) 夏季生活と子どもたち

明星学園の夏季生活の歴史は古い。学園開校式の翌年、1925年（大正14）7月21日、小学生が10日間の夏季生活へ旅立っている。場所は三浦半島の三戸海岸だった。

創立直後の体制も完全でないなか、小さな児童を親元から離して長期間引率するために、どれだけの準備と配慮がつくされたか…… 教師たちの苦労はいくばくかと想像される。

この年以降もあらゆる困難を乗り越え、戦争中の一時期を除き、各学年の夏季生活は毎年続けられている。これは、夏季生活が明星教育のなかでも重要な位置をしめていることの表れである。

子どもたちは共に過ごす日々のなかで、虫や花にふれ、山や海の大きさに包まれながら汗をかき、時に集団生活のがまんを知り、離れた家を思う。しかられ、励まされ、素の教師と生徒は、そして上級生と下級生は、立場を超え学年差を忘れて次第に一体となっていく。"自主·協同·研究·規律"を学び、明星学園の精神を育てていくことが目指されているのだ。

教師たちの入念な準備と見守りのなか、生徒たちはどのような生活をし、何を感じていたのか。ここで1960（昭和35）年代の生徒たちの声を掘り起こしてみたい。

千倉夏季生活より

房総半島の先端近く、人口3万人の町·千倉（1960年代当時）。その町はずれの海辺に「千倉寮」がある。

中学年部前期5·6年生は、2～3班に分かれ、1週間にわたって臨海生活をおくる。

水泳の進級テストや地元小学校との交流など、期待と緊張の入り混じった毎日の様子を、1965年（昭和40）11月24日発行の『道』No.69に掲載された「赤帽タイムス」という壁新聞から抜き出してみる。

「赤帽タイムス」というのは、千倉夏生活（5·6年）の記録です。毎日1枚ずつ、こういう壁新聞が食堂にはられてゆきます。

赤帽タイムスNo.1　1965-7-19　明星学園千倉寮

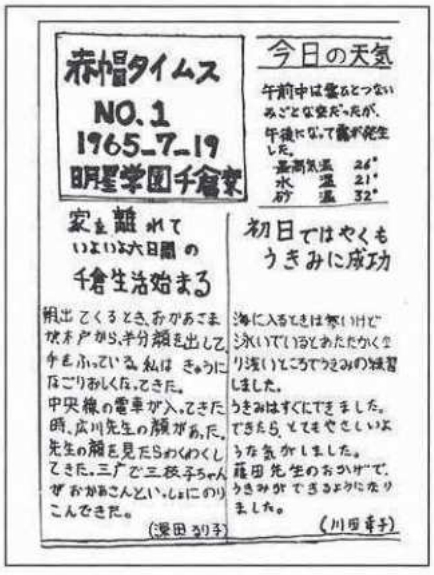
今日の天気　午前中は雲ひとつないみごとな空だったが、午後になって霧が発生した。最高気温26°／水温21°／砂温32°

家を離れて いよいよ6日間の千倉生活始まる

朝出てくるとき、おかあさまが、木戸から半分顔を出して、手を振っている。私はきゅうになごりおしくなってきた。中央線の電車が入ってきた時、広川先生の顔があった。先生の顔を見たらわくわくしてきた。三鷹で三枝子ちゃんがおかあさんといっしょにのりこんできた。（深田るり子）

初日で はやくも うきみに成功

海に入るときは寒いけど、泳いでいるとあたたかくなり、浅いところでうきみの練習しました。うきみはすぐにできました。できたら、とてもやさしいような気がしました。藤田先生のおかげで、うきみができるようになりました。（川田幸子）


赤帽タイムス
NO.1
1965_7_19
明星学園千倉寮

今日の天気
午前中は雲ひとつないみごとな空だったが、午後になって霧が発生した。
最高気温 26°
水温 21°
砂温 32°

家を離れて いよいよ6日間の 千倉生活始まる

朝出てくるとき、おかあさまが、木戸から半分顔を出して、手を振っている。私はきゅうになごりおしくなってきた。中央線の電車が入ってきた時、広川先生の顔があった。先生の顔を見たらわくわくしてきた。三鷹で三枝子ちゃんがおかあさんといっしょにのりこんできた。（深田るり子）

初日では やくも うきみに成功

海に入るときは寒いけど泳いでいるとあたたかくなり浅いところでうきみの練習しました。うきみはすぐにできました。できたら、とてもやさしいような気がしました。藤田先生のおかげで、うきみができるようになりました。（川田幸子）

赤帽タイムスNo.3　1965-7-21

今日の天気くもり　最高気温26°／水温22.5°／砂温27°

千倉人民共和国主催　“第52回砂の芸術コンクール”盛大に開催！

1位　ゆめ見るオットセイ　（部屋：くらげ）
2位　怒れるたこ　（部屋：あわび）
3位　笑うわに　（部屋：いそばな）

砂の芸術コンクールについて…佐伯昭定氏いわく…
大変うまくできました。どれもこれもすばらしくて、1位とか2位とかをきめることは心苦しいことです。そのことはどうかわかってほしいとのことでした。たしかに我が千倉人民共和国の芸術の水準は昨年にくらべて、ぐっと向上したことをどの大臣も認めました。



家をはなれるときに感じた不安が、先生や同級生の顔を見たことで、寮生活に対する期待へと変わっていく様子、初めてできた海での浮き身、また、部屋対抗で行われた砂のオブジェ作りなど、いきいきとした子どもたちの感想がつづられている。

赤帽タイムスNo.3　1965-7-27

とれたぞ白帽！

今日の水泳で私はかんぜんに白帽になった。きのう1本線から白帽にさがって、今日赤帽の人の白帽になる進級テストがあった。たちばな先生が「このテストをやらないと赤帽にさげますよ」とおどかしたので、1本線が赤帽になってくやしかったので、ゆう気をだして泳いだ。でも出発前いやだとにげまわっていた。そのうちに泳ごうと決心したので、こんど私の番？ときながらスタートした。まわりのみんなが応えんしているようだけど、ひっしになって前の方ばかり見ていたのでわからなかった。先生たちはもう少しといっているが、まだ半分ぐらいしかついていなかった。はじめはふるえていたけど、およいでいるうちになんともなかった。泳いでいるとちゅうに小さな島があった。そこでやめてしまおうかと思ったが、たちばな先生が応えんしてくれたので、がんばってさいごまで泳いだ。とうとう白帽。かんぜんな白帽だ。あーよかった。（田中則子）

水泳の進級テストは、学内にプールを持たない学園にとって、千倉生活における最も重要なカリキュラムといってよい。5級から1級まで、5つの段階の級がある。

水泳初心者の5級は、水泳帽が赤いことから通称「赤帽」と呼ばれていた。25m泳げば「白帽」になり、さらに白に1本線、次に2本線、そして300m泳げる1級は3本の黒い線。だれもがあこがれ、目指している「3本線」である。子どもたちが、水泳帽の色や線の本数にどれだけの思いを込めていたか……。自分の弱い心に打ち勝ってクリアしたテスト後の笑顔が目に浮かぶようである。

その他、見出しだけ取り出してみても、寮生活の楽しさや暮らしぶりが伝わってくる。

「千倉人民共和国憲法第一条」
大統領の許可なく海水をのんではいけない
「舟で太平洋を一周」
「寮にばけねこが出た」
「こわい進級テスト」
「赤い花のえいがを見て」
「6年女子ドッチボール　健田(たけだ)小を制圧」2対0
すごい明星っ子のうでと頭は完全に健田小を破った。
「5年男子ソフトボール　連続勝利」8対3
5年男子チームはすごいファイトで戦った。ねばりと技術がものをいった。



「赤帽タイムス」は、日を追うごとに明るくたくましくなっていく子どもたちの様子を伝えているが、毎朝寮に貼り出されていたというこの壁新聞は、どのように作られていたのか。「赤帽タイムス」を掲載した『道』〈※2〉の最後の部分には、次のように書かれている。

社長兼印刷は、鈴木五郎先生と佐伯昭定先生です。
赤帽タイムスの記事は、子どもたちの日記から取材します。
子どもたちが寝静まった夜の10時から輪転機がまわり出し、11時頃刷り上ります。
ときどき、輪転機はコップで油を流しこみます。
7色刷の新聞が刷り上ると、批評家が悪口をたたきます。
さあ、どうぞごらん下さい。

上野原寮　「浅間の生活」より

長野県中軽井沢に広がる海抜1,000mの高原。浅間の山麓まで達する落葉松林に囲まれた沓掛の台地に「上野原寮」がある。

中学年部後期7・8年生は、3～4班に分かれ、1週間から10日間の山の生活が実施された。7月の20日前後に第1班が軽井沢へ出発し、次々と交代で寮を訪れた。

参加にあたり、生徒側は家族旅行などとぶつからないよう、各家庭の都合に合う日程の班を選ぶことができた。

しかし、なぜか各班は2学年が半々になるよう、また同じクラス同士がかたまらないようバランス良く分けられていた。引率の教師に加え、大学生になった卒業生も助手として参加しており、初めて出会う大先輩から名前も知らない上


軽井沢·上野原寮

〈※2〉 PTA会報『道』No.69(1965年11月24日)

級生、そして他のクラスの生徒たち……さまざまな年代の新しい顔ぶれで、共同生活が行われるのだ。

寮でのプログラムは、自然の具体的な事実や現象にふれる研究グループ活動と、登山に重点をおいた野外活動が中心であるが、サイクリング・フォークダンス・キャンプファイヤー・風呂炊き・洗濯・食事の手伝いなど、盛りだくさんの内容であった。そして千倉生活と同様に、必ず日記をつけることが義務づけられていた。


林の中で勉強

当時の生徒が書いた生活日記を、『道』No.60〈※3〉のなかから紹介する。

冒頭には、寮生活を終え、その成果を実感している教師の文がある。


鬼押出しまでサイクリング

ヤッホー　風のうた声
――中学部　山の生活日記から

いずれ、7・8年の山の生活を、文集にする予定である。

今は、生徒の書いた日記を並べるていどしかできないが、この少数の日記、詩の中からも、寮生活で得たなにかを感じられるのではなかろうか。

2学期の生活にも、軽井沢での経験が生かされてきている。うれしいことだ。寮生活をやってよかった。

7月30日（火）晴れ（Aコース・高見石小屋で）
8年　和田 良信（35回生）

朝、4時30分起床。とても気持ちのよい朝だ。高見石に登り、御来迎を見た。太陽の頭が出てからは、みるみるうちに昇った。僕は船田先輩のとなりでゆっくり見た。

2日目の登山に出発。丸山を一気に登り頂上をふみ、麦草ヒュッテに降り、そこから白駒池へ。

いよいよ「にゅう」の頂上に着いた。菅野先生が脱帽を命じ、いおう岳の方に向かせた。僕は、このとき直観的に遭難者に対しての礼だなと思った。だが、まさか僕達の先輩だとは思わなかった。船田先輩が、そのときどんな気持ちだったかを知りたい。

それから待望の昼食。みんなでカンヅメをあけ、「家族」全部でたべた。

稲子湯までずっと下り。ひざがガクガクになり、やんなっちゃった。そのあいだ、ずっと荒川有史先


にゅうの頂上

〈※3〉 PTA会報『道』No.60（1963年10月31日）

生と、明星の過去と現在、先輩と後輩との関係、これから僕達がやっていかなければならないことなど、話しながら歩いた。とても楽しく、ためになった時間だった。

帰りの、小諸までの電車の中では、船田先輩とねむりっこをした。小諸で氷を食べてから、なつかしい国道18号線をバスで帰った。寮に着いて、コールをかけ、リーダーの胴上げをした。風呂にとびこんでから夕食。こんどは3ばい！

フォークダンスのあと日記を書いている。あっ、田中一水先生が「日記を出す時間だ」と言いに……。おっ、こんどは荒川先生が集めに。ふ——、書きおわった。〈※3〉

山の生活日記には、この日記を読んだ船田雅男先輩からの返信文も載せられている。山の頂上での脱帽は、学園を卒業後、遭難した山仲間への礼であること。そして「山で死んではいけない。自分自身、仲間たち、見ず知らずの人々も。そのように心掛けることが、不幸にも山に逝った人たちへのはなむけになると思う」とつづられている。

登山は、生徒それぞれの体力に合わせて参加できるよう、3つのコースが用意されていたが、上記の日記にも出てくる高見石小屋へは、毎年学園の生徒が1泊し、2日がかりの登山を行っている。以下は、その高見石小屋のご主人が寄稿してくれた文章である。

「明星学園の皆は素晴らしい食欲だったな」「いやあれは俺の名コックの味付けだ」と手伝いの学生達の私話。皆が歩いた八ヶ岳の山旅も今実感が醸酵、ろ過されて、話題は尽きない事と思います。山小屋での一夜、団体生活を身につけている君達は私達小屋にいる者に心良い印象を与えてくれました。

これが先生引率による、授業の成果ならば、今後個々に登る山にも、他の登山者との接触に、適要して山の持つエスプリと相まって、今後共に素晴らしい印象を持つ事が出来ると思います。〈※3〉



高見石小屋を出発

ボランティアとして参加し、寮生活を共にした卒業生の文章からも、日々の営みや成長していく生徒たちの様子が浮かんでくる。

「八ヶ岳紀行」 船田 雅男（23回生）

色とりどりのシャツとブラウスとスカートが、輪を作って私の目の前を通り過ぎて行きます。真直な脊椎、長く形の良い足、太くたくましい腕、それ等が、まだまだその持主達の成長の可能性を示しています。

もうすっかり仲良しになった顔が、白樺の若木の蔭から現れ、落葉松の幹の蔭に消えて行きます。八ヶ岳の岩稜をカモシカの様に跳ね登った彼、少し疲れたので皆におくれ、倒木に腰を降ろして一緒にシナガワマキを食べた彼、ファイアーセレモニーの薪を一緒に集めてく

れた3人組、ライスカレーの食べ比べで私を負かしたおチビさん。

1週間の寮生活で、すっかり大人——自分のためばかりでなく、他人の為も考える事の出来る——になった君達、全く不完全過ぎる私に、センパイとしての自覚と喜びを与えてくれた小さな紳士、淑女たちに、心底から敬愛の意を表します。〈※3〉


寮の庭でフォークダンス

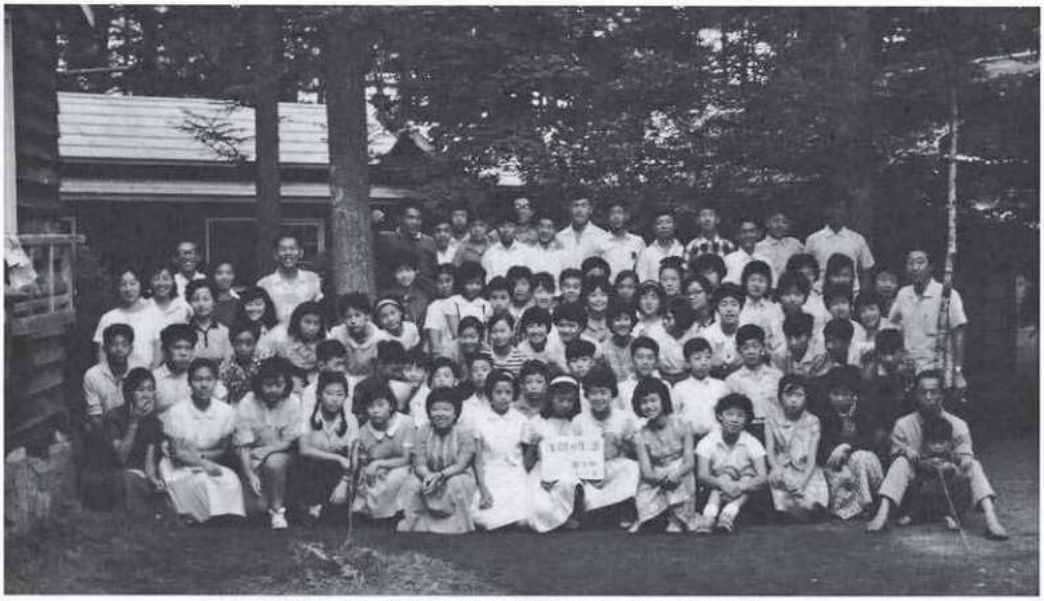
1週間の寮生活に終わりが訪れ、室内外の掃除の後、閉寮式が行われる。そして入れ替わりで次の班が到着し、また、新しい寮生活が始まるのだ。

8月1日（金）晴れ　8年　田中 秀和（35回生）

荷物がかたづけられ、部屋がきれいになった時、「いよいよお別れか」と、心にジーンときた。最期のフォークダンスをしていると4班がきた。向かい合って並んでみると、なんとなく感じがちがった。それは、4班に対する家族的な気持ちがなかったからだ。こっちが家族ならば向こうはお客といった気持ちだった。しかし友達は友達だ。やはりなつかしい。

リュックをしょってバスに乗る。さっきとは反対に、こちらが見送られた。バスが出発した時、彼らはすでに寮生活をはじめている。僕達はもう寮生活が終わるとなると、彼らがたまらなくうらやましかった。

バスの中では、寮生活のことばかり考えていた。あの、「いつかある日」の歌は、いい思い出だ。他にも、考えれば考えるほど、「たのしかったなァ」と感じた。


閉寮式後、全員で記念撮影（35・36回生）1963年7月

〈※3〉 PTA会報『道』No.60（1963年10月31日）

7時、僕は家の玄関にはいった。その時、寮生活のすべてを終えたのだ。
人間は、過ぎ去ったことを甘い思い出を持って考えるものだ。僕は今、せめて「あのバスの中だけでも、もう一度」とさえ思うのだ。〈※3〉

集団で過ごす寮生活や厳しい登山を経験するなかで、先生・先輩・新しく増えた仲間を「家族」と呼び、充実した毎日をおくった生徒たち。多くの思い出とともに帰京し、2学期を迎える。
秋になると、明星祭や音楽会などの行事が行われたが、学園には夏休み前とは違う一体感が漂っていた。クラスの枠を超え大きな輪が広がっていたのだ。
そして数十年経た後も、同窓会の話題に必ず登る夏季生活。「社会に出てからも、あらゆる場面で、ふと、あの時の楽しかっただけではない何かが思い出される」と、多くの卒業生は語る。
今から約70年前に、ある教師が学級通信によせた文章を引用する。

およそ教育という名のつくものは、生産的な仕事とことなって、今日の投資が、明日には利じゅんという形になって現れる程、短時間で決着出来るものではありません。5年も10年も、ひょっとしたら20年先になって、社会のよき形成者として、又指導者としての基盤を、この夏季生活の体験を核として盛り上げ、つみ重ねてつくられるであろう。そして、その子どもたちによって、明星の教育を社会に問う日の必ずあることを期待しています。〈※3〉



1963年(昭和38)中学年部の教師たち

＜文責：串田 妙子＞

4　高学年部の実践

4・4・4制を実施していた1960年(昭和35)年代、高学年部はどのような情況だったのか。多様な学校生活の様子を、当時発行された『道』〈※1〉、『星雲時代』〈※2〉などから抜きだしてみる。

(1)教育研究「夏休み教育研究会から(高学年部)」

昨年と同様、夏休みの終わりに研究会を実施した。ただし、旅館が思うようにとれなかったので、高学年部は学校に集まり、湯河原には教科代表と有志が合流して、低、中学年部の研究会に参加する形となった。考えてみれば、研究会をスタートさせてからもうかなりの年月になった。そのわりには牛歩の感もなくはないが、教育という毎日の営みの中で、一つの方向に向かってきたということはたしかだ。ことに高学年部としては、あたらしい低・中・高の編成ができてからの新しい指導のつみあげを受け取る時期になっただけに、問題がはっきりしてきたというべきだ。

今年は昨年秋の集会の結果を受けて、教室学習の充実に主点をおき、各教科ごとに具体的な検討をすすめることになった。今度の研究会では、予想される問題点が提起されたが、それは次のようなことである。

第一に、これは高学年部では常に論議の中心となることだが、大学入試との関係である。明星は予備校ではない。理想とする教育をキチンと受ければ、大学入試はおそるるところではない。これは正論であるが、具体的な内容となると、口で言うほど簡単なことではない。大学入試にもたえうる力（学力も精神力も）を、どのような具体的な内容と方法をもってつけていくか。しかも、それが必ずしも同じ方向をめざすものばかりでなく、かなりの幅の適性の違いを、しかも明星ほどの少人数の中で示している場合、それはどのようなものとなるか。議論はいつも堂々めぐりをしているようだが、一学年ずつの授業の内容を検討していくことで、だんだん明瞭なものになっていく方向だけはでてきた。ここから、逆に低・中学年部のつみあげの内容にも、高学年部としての批判・要求もでてくるはずだ。これを今年は、主として9年についておこなう予定。

第二に、この教室学習の充実と並行して、生徒の生活指導の問題がある。これは、昨年秋の集会で明らかになったように、車の両輪である。しかも、高学年部では、低･中学年部とちがって、教室学習即生活指導とならない部分が多い。授業内容もかなり高度なものになるにしたがって、自己の学力が追いつかない、というよりも追いつかないといわれたり、自分で思ったりすることから、教室外の行動に問題が生じやすい。その上、悩みの多い青年期に入る。そこで、個人の内的な要求に答えてやらねばならず、またそれを集団としてどう組織し、自主的活動のエネルギーをどう引き出してやるか、という問題が加わる。この点に関しても、まだつみあげに十分でない点があるのではなかろうか、そういう疑問も出てくる。まだ、われわれの一貫性がつかみたりないところがあるようだ。それも話し合おうということになっている。

教育は、いわばつねに実験といえば、実験かもしれないが、生徒の立場からは実験という態度は許されない。それだけに、しんどい仕事であるのだが、まさに根比べだ。生徒にも、教師にも、いろいろな性格、能力があるとしても、それが一緒にやるのが学校だ。ここまで高学年部としてはまとまってきたのだから、これからもこの歩みを進める以外ない。秋の集会も、したがって、あまりはなばなしいものではないかもしれないが、この討議を深めるだけである。〈※1〉

〈※1〉 PTA会報『道』No.60(1963年10月31日)
〈※2〉 高校自治会機関紙『星雲時代』(1963年3月19日)

(2)生徒の状況と自治会

①「生徒に一言」宮川 幸三（中・高生物教諭）

敗戦後もう18年になる。幸か不幸か諸君は戦後の混乱の中で幼児期を過ごしてきた。 敗戦によって受けた親たちの自信喪失は諸君が知るすべもないが、物質的困窮はもちろん、精神面での虚脱感は大きかった。国家観、社会観、倫理観にいたるまであらゆる面で頼るべき秩序を失ったのだから、かくして気の毒ではあるが諸君は頼りない親のしつけのもとに育ってきたのだ。いまさら高校生にもなって幼児と同じようなしつけをしようとしても滑稽である。諸君の自覚を促すのみである。近頃の生徒には先生に「あいさつ」をしないものが多すぎる。挨拶はした方が良い。一般に礼儀は人間の社会に欠くべからざるもので、封建的でもなんでもない。「遅刻」はやはりすこぶる無礼である。劇場で、「上演中の入場はご遠慮願います」とあれば、学校で「授業中の入室はご遠慮願います」としてもおかしくない。…中略…いくら楽しくてもけじめがなければいけない。「今度はA先生の時間だ。あの先生はうるさいから早く行かなくっちゃ」「今度はB先生だ。あの先生はゆっくり行っても平気だ」人を見て行動するとはなんと自主性のない事よ。諸君の間でよく言われている自治会の不活発の原因はこの自主性のなさ、無気力さに容易に見いだすことが出来る。諸君、生徒は教師のあやつり人形で満足しているのか。正面から教師にぶつかってきたまえ。無責任さが横行している当節ではあるが、気力ある人間は皆少なくとも自己に対しては責任を持っているのですぞ。自己に対してすら無責任な、真剣さがないものは「生きている人間」とはお世辞にも言えますまい。…中略…つい欠点を評することになってしまうが長所をほめるのは非常に難しいし紙面も限られているので無数にある諸君の長所についてはここでは触れない。悪しからず。「生きていく活力」は行動を禁止することから生まれてくるものとは思えない。何かやりたいことがあったら全精力を傾けてやりたまえ。ファイトを燃やして、そこから生きがいを感じるはずだ。若さあふれる諸君の奮起を望む次第である。〈※2〉

②「学年別自治会誕生」

自治会は、今年4月から新形式となった。
それは、「学年別自治会」である。
だが、自治会の存在を知っている人が何人いるか？
自分たちのことは、私たちの手で治めたいものである。
自治会再認識と、今後の発展を切に望む

＜経過＞

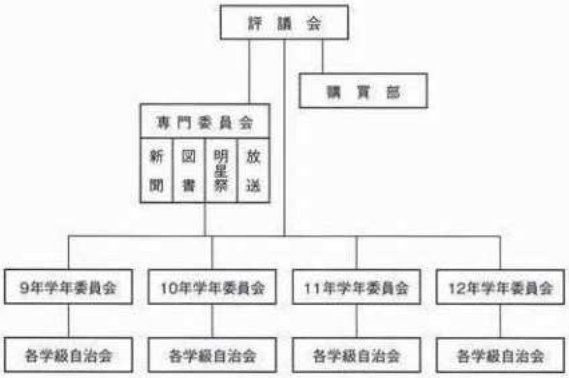
今年の1月頃から、自治会で一番権限のあるはずの中央委員会が、組織力を欠くことになってしまった。というのは、流会が多くなり、各専門委員会もそれに乗じて活動が停滞してしまったからである。それは、それまでも会員が会員としての意識を持っていなかったことに拍車をかけることになり、会員と自治会幹部は遊離した。そんな中で3月21日に総会が開かれた。そこでは次期正副委員長の選出が行われ、推薦候補の中から多数決で決められた。ところが、選出された新委員長が家の都合で、任務に就くことが出来ない旨を申し出てきたが、代わりの委員長を見つけ出すことも不可能であった。このような事も原因の一つとなり、その頃の自治会は崩壊寸前であった。そこで自治会を正常に戻さねばならない、という意見が出た。それが以下三つの案である。

一、宇年別自治会という新形式で、共通の問題を持って自治会を活発にする。
二、自治会解散論。

〈※2〉 高校自治会機関紙『星雲時代』(1963年3月19日)

三、形式はこのままで、一部を修正し活動しやすくする。
その結果、4月の総会で「一」の学年別自治会が承認され、現在にいたっているわけである。
後略…

学年別自治会組織



〈※3〉

(3) 修学旅行

1)「12年の修学旅行」12年担任　村崎 洋（中・高理科教諭）

例年東北旅行になっているので、一つこの辺で新コースを拓こうというので、旅行委員を各クラスから4名ずつ選び委員の初顔合わせをしたのが2月、寒い実験室のストーブの周りに集まって先ず候補地探しをやった。(1) 内海航路の船旅 (2) 南紀 (3) 能登半島 (4) 北陸、立山登山 (5) 東北 (6) 北海道等が出た。3月12日交通公社の意見を聞いてみたら…中略…結局可能なのは二つしかないわけだ。HRに持ち帰って説明したところ、別に騒ぎにもならず、あっけなく東北に決

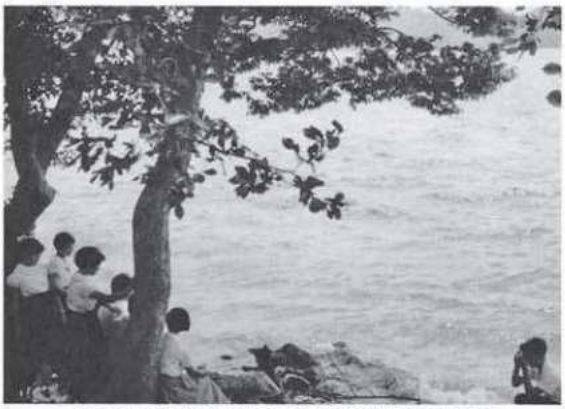


1965年 東北旅行 小岩井農場(33回生)

〈※3〉 高校自治会機関紙『星雲時代』(1963年7月13日発行)



1967年 東北旅行 八幡平(36回生)



1959年(昭和34)十和田湖修学旅行(27回生)

まってしまい例年通り男鹿、十和田、八甲田のコースにおちついた。静かで、湖水と芝生の丘と、残雪のある山の旅というのが生徒にとって魅力的なのだろうか。…中略…7月17日は秋田地方は大雨だったそうで、18日はひどい霧、展望台は無望台になっていた。18日も霧で寒風山は展望台に登っていく生徒の声だけが聞こえていた。足下に咲いていたミヤコ草も霧でぴしょ濡れ、十和田湖は晴れているのだろうと思ったらここも霧で、写真でよく見る発荷峠の十和田湖は灰色の霧の底深く沈んでいた。19日は辛うじて午前中薄陽。散歩、ボート、モーターボート、水泳等、それぞれ楽しむ。午後は又霧で標高1,000メートルの傘松峠は音もなく打ち寄せる怒濤のような中を越える。酸ヶ湯は丑の湯祭りで東北らしい素朴な演芸会で賑わっていた。21日は時々晴れ、希望者を連れて、高山植物の咲き乱れる緑の山八甲田大嶽に登る。標高1,585メートルしかないのに、色も姿も実に美しい山であった。期待していた北海道は霧で見えなかった。13時30分酸ヶ湯発、バスで青森に下る。途中萱野高原の広々とした緑の丘は最後の訪問地として、又休息地として真に相応しい所であった。岩木山遠望所というところを通ったが薄霧で山は見えなかった。最後まで霧の旅であったが、病人もなく頗る元気で帰京することが出来た。旅行委員は実によく動いた。一晩を過ごす車内を清潔に保つ苦労や、リクリエーションの準備から後片付けまで自分の時間を割いて働いていた。それでも事、志と違い、こんないやな旅行はないと、大挙して私の所に不満をぶつけに来た。帰京したら早速旅行委員一同から一通の葉書が来た。それには、こんな楽しい旅行はなかったと書いてあった。〈※4〉

2)「チョットマテ！」 12の1 桜本 慶子 (32回生)

高校生活最後の修学旅行も、今では楽しい思い出となってしまいました。旅行でまわったコースは十和田湖、奥入瀬渓流、沼などきれいなところが沢山あった。十和田湖で遊覧船から先生を落とすなんて言っていたけれど、落とすにふさわしき先生がいなかったのか、落とそうと計画する生徒がいなかったのか、残念ながら落としませんでした。去年は宮川先生が落とされたとか。皆が落とそうとしたら宮川先生は平然と「チョットマテ」といって服を脱いで落とされたそうです。後略…〈※5〉

〈※4〉 PTA会報『道』No.60(1963年10月31日)
〈※5〉 高校自治会機関紙『星雲時代』(1964年9月25日)

(4) クラブ活動

「バスケット部」　35年度卒　雫 正侑（28回生）

我々が現役の頃、丁度3年前のことであるが現在のように体育館があるわけでもなし、だからといってそれに相当する諸設備が完璧に整っていたわけでもなかった。しかもこの運動場（バスケットコート）は畑を埋め立てしたものであるため地盤沈下が激しく、職人を入れて整備されたコートも一ヶ月を過ぎると砂は風に吹かれ、石ころは顔を出す。地面には亀裂が入り、雨が降ろうもんなら水たまりが必ず2、3カ所出来る。そうかといって晴れの日が続くと、割れ目が大きくなり、ちょっと靴のひっかかりで、ぼろぼろ土が石ころぐらいのかたまりでむけだす。おまけに冬の霜、春の突風、夏は炎天下で日光を直射に受けての練習と、まあ色々あげれば悪条件は数え切れない。が、なにしろ我々はこのような条件の中で歯を食いしばって部活動に精進した。…中略…卒業して今はコーチをやっているが、今年に入って4月から部員約30名と明星始まって以来ふくれあがった。…中略…ふくれた理由は簡単だ。すばらしい体育館が設置されたということと、スポーツ面での部らしい部は籠球部であるからだ。山口先輩以下我々は毎週火、木か土の練習に顔を出し、部員にとっては憎まれ役となりながらせっせと体育館に足を運んだ。第1の問題として、9年、10年、11年をいかに練習させるかで考えた。まず中学3年生と高1、高2の体力の差、技術の差があること。中学3年生は初めてボールに手を触れるという状況を考慮しなければならない。…中略…

8月21日～29日、場所、明星学園高校において籠球部合宿、監督柳沢先生。

朝7時起床、さあマラソンに行くぞといってから、約15分後に半パン、ランニングの姿で校門のまえに集合する。連日の練習でランニングはヨレヨレ、おまけに籠球部特有の臭いをまき散らしながら上水端を走って行く。勿論誰一人としてこの臭いに気付く部員はいない。感じるのは最後に自転車に乗ってついていくＯＢだけだ。おかげで眠気もすぐ覚める。朝露に濡れた草を踏み倒し、深い緑の林を抜け、井の頭の公園を一周する。途中公園の広場で軽い体操をする。そしてまたもとの道を引き返してくる。この間、たえずかけ声を出し、やめるときがない。おかげで目覚まし代わりになったわと上水端の稲垣さんに言われたときは恐縮した。…中略…

〈フロ〉

通称ハッチ（田中）「金くれよ」「いくらいるんだ」って聞くから「千円もあれば足りるだろう」言ったら、「バカヤローちゃんと頭数かぞえて計算してから請求しろ」「ええっと今日はＯＢ、現役、合わせて28名だから、一人19円と、まあ毎日の風呂代が大体540円」とうとう最後まで団体割引はしてくれなかったが、思う存分彼らは洗い流した。

彼らの1日の楽しみの一つとして風呂屋があるのだ。午後8時50分に練習が終わり、前もって用意しておいた洗面具を持って出かけるのである。30名が一団となって風呂屋に入っていくと、気持ちよさそうに湯船につかっていたオッサン連中、こりゃあかんとばかり、ろくろくしずみもせずあがってしまう。また風呂屋の前まで来て様子を察してまた逆戻りする近所のオッサンもあった。…中略…

〈評価〉

とにかく我々はこうして1週間の合宿をした。運動部における合宿練習というこういうやり方は、明星においては初めての計画であった。だから今年の籠球部の合宿はこれからの明星の運動部、スポーツ活動の在り方について一つの方向を与えるという意味を持つと同時に新しい段階へと足を踏み入れた、いわば画期的な試みであったわけだ。後略…〈※6〉

＜構成：渡辺 京＞

〈※6〉 PTA会報『道』No.60（1963年10月31日）

(5)明星祭——仮装大会

明星祭の始まりは、終戦直後の1945年（昭和20）11月。音楽とスタンツが発表された。物資はなくとも文化活動に対する熱意は並々ならぬものがあり、創意工夫に満ちた心に残る会だったと伝えられている。その後、展覧会、演劇会、運動会も加わり、多彩な行事で構成された明星祭は、明星生の力を広範囲に発表する場として現在まで続けられている。

仮装大会は、第1回明星祭の2年後、運動会でのプログラムの一つとして仮装行列が行われたのが始まりである。それは、1947年（昭和22）、新制高校が発足した年であり、その後形式は変化しながらも高校第１回生から続く明星ならではの行事の一つとなっていく。〈※7〉

明星創立35周年にあたる1959年（昭和34）、仮装大会は、明星祭のなかで丸一日を費やす一つの行事として実施されるようになるが、その経緯を高校自治会機関紙『星雲時代』〈※8〉に掲載された教師の文章から引用する。

> 今年も明星祭のシーズンを迎え各方面に期待が持たれているが、丁度今年は、明星創立以来35年目に当たるので、10月8日小学校を中心に中・高各部合同の体育祭によって幕を開け、11月中旬まで毎日曜日ごとに多彩の行事が予定されている。…中略…
>
> 35周年、明星祭といっても生徒側は特別意識していない。したがって、今年の明星祭も今までに先輩が作り上げた明星祭の行事に新鮮味を加え、良き伝統を築き上げようと努力している。そのいい例として、明星祭委員会唯一の出し物である仮装大会もここ数年マンネリズムに陥っているとの声が強いことから、今年は、仮装大会の日を一日別に設け（25日）高校グランドで行い、十分に仮装の雰囲気を楽しんでもらおうということになっている。高校全生徒の出演だけに張り切っているわけだ。後略…

明星祭は学園主催の行事であるが、高校自治会の運営にゆだねている部分が大きく、特に仮装大会は各クラス選出の明星祭委員会が主体となり、計画・運営にあたっていた。

4・4・4制が実施されていた1960年代、高校は9年から12年まで4学年で構成されており、団塊の世代の頃は1学年5クラス、4学年を合わせた生徒数は相当な数にのぼった。そのため全体をまとめる委員会の負担は大きかったが、行事としての盛り上がりもそれに比例して盛大だったといえるようだ。

仮装大会とは、どのような内容だったのか。『星雲時代』第3号〈※9〉、教師による「採点報告」のなかに、次のように書かれている。



> 春の合唱コンクールをアポロ祭とするなら、ちょうど仮装大会がデュオニソス祭にあたる。合唱がある形式の中で参加し調和と規律を作り出すものなら、一方は一人一人の個性と相違を集団のエネルギーとして表現するものだろう。…中略…
>
> 終戦後始められたこの行事は多くの先輩から引き継がれ他のそれらとは異なる二つの特色がある。一つは仮装を工夫して行列

〈※7〉 上田八郎「明星祭の生い立ち」高校自治会機関紙『星雲時代』(1956年11月18日)4頁
〈※8〉 高校自治会機関紙『星雲時代』(1959年10月18日)
〈※9〉 高校自治会機関紙『星雲時代』(1964年11月25日)

するいわゆる仮装行列だけではなく、何か表現目的を持った短い時間にきりつめられた集団演技であること、したがって一般的なきれいごとだけではなく、百姓も出れば乞食も出るといったひろさを持っていること。もう一つは長い間の経験から30項目からなるかなり厳格なルールがあることだ。又主旨としての委員会の呼びかけにも「この行事はわれわれ全員が、自主的に行うものであり、各ホームルームを協力努力によって充実させ団結しファイトをもやして、われわれ学生が語るべきことそれを語りあおうではありませんか」とある。後略…

仮装大会は、9年から11年まで、各クラス単位で一つの作品を制作・発表し、教師の審査によって順位が決定される。発表内容に関しては。規約が設けられていた。

各クラスの出費は4,000円以下の事／火を使用してはならない／動力を使用してはならない／先生が援助してはならない／演技は10分以内の事／など、その他細かく規定され、規約を破った場合は減点された。

発表の場所は高校グラウンド。360度・円形状に観客（来賓、教師、保護者、卒業生、在校生）が見守るなか、グラウンド全体を使い、クラス全員で毎日放課後遅くまで残ってつくり上げた成果を10分間の中に凝縮し、披露するのだ。

作品そのものの主題・構成・演出・衣装・舞台道具・音響効果・演技・踊りなど総合的に採点・評価され順位が決定する。受験を控えた12年は採点対象外・有志参加だったが、毎年多くの12年生が本気で参加するという熱気ぶりであった。

当時を物語る資料には、「素晴らしい天気に恵まれた仮装大会」「仮装はいつも秋晴れでさわやかな日である」などの記述が多く、残された写真には雲一つない抜けるような空のもと、はじける笑顔が溢れている。『道』No.48〈※10〉に掲載された「明星祭うらばなし」に次のような記述がある。

明星祭の生徒委員が日程を組んでみたところ、仮装の日に雨がふられると、後の日程がたたない。苦慮した上、ついに当日は雨が降らない事を決議した。

このような決議ができるほど、例年の開催当日は相当なる晴天率だったようである。

晴れることを願いながら本番に向け、各クラスは喧々諤々、紛糾を繰り返しながら、準備を重ねていく。そして迎えた大会当日、全クラス及び12年有志の演技が終了すると、順位の発表があり、大道具、衣装など燃やせる物をグラウンドの中央に積み上げ、キャンプファイヤーの炎が上がる。その炎を囲み、フォークダンスで手を取り合い、共に合唱する生徒たちの頬は夕焼けに染まっていた。

悲喜こもごも各クラスは教室に戻り、後片付けをして仮装大会は終了する。準備期間から大会終了まで、生徒たちの思いはどのようなものだったのか。当時の記録から抜粋する。

「楽しかった1週間」　9年2組　中田幸子（30回生）

練習に使ったあの1週間はほんとうに楽しかった。当日の成功、不成功よりもその1週間の方が、私にはとても重大な有意義なものであったと思う。初めてのことで最初はとても不安だった。事実我々のクラスはあまりまとまりがあったとは言えなかった。でも男子が恥ずかしがらずにやってくれたのでうれしかった。

当日、自分達が終わってからみんなは早速上級生のを見に行った。だけど、私は、一人ポ

〈※10〉PTA会報『道』No.48（1959年12月21日）

ツンと教室にのこっていた。胸がいっぱいで動く気もしなかった。〈※11〉



「無題」 10年5組 浅野 史子（39回生）



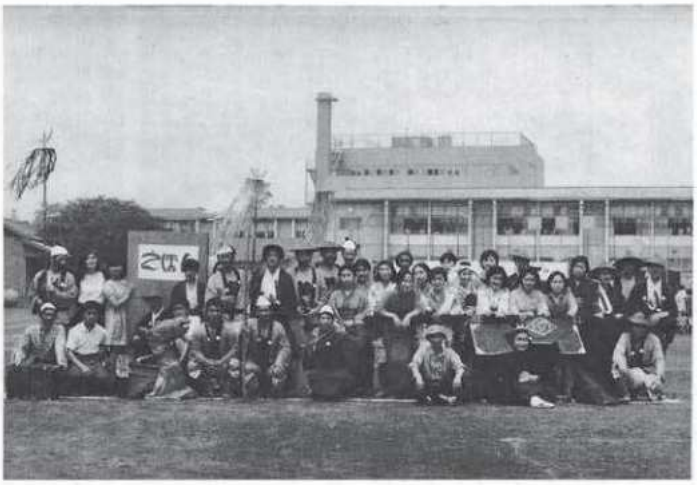
内部進学者と、わたしたち外部進学者とでは、いろいろな面でずいぶん違っていた。先生にまるで友達同士のように話しかけたり、数えあげればきりがない。そんなわけで、なかなかなじめず、とまどってしまう事が多かった。そんな私達を見かねて計画された秋川での一日は、私達の間に築かれた壁を大部分取り去ったように思えた。そして私達をいっそう親しくしてくれたのは、仮装大会だった。

初め、いったいどうすればいいのか見当もつかなかった。私はこんな状態で、クラスが団結して、何か作り出すことができるのだろうかと、非常に不安だった。

しかし、できばえは予想外によく入賞することまでできたのだ。1週間の準備期間に得たたくさんの経験は、なんらかの形で、私達にプラスになったと思う。そして、私達の間にあったわだかまりもすっかり消えてしまった。〈※12〉

〈※11〉 PTA会報『道』No.61（1963年12月23日）
〈※12〉 PTA会報『道』No.82（1969年7月12日）

「来年も有志として」　11年2組　渡辺 進（33回生）



毎年行われる仮装に、僕達11年2組が優勝した。　なにしろ11年と言うと、仮装大会をやるのは最後なので、この喜びは、ひと一倍だった…。順位の発表後、フォークダンス、合唱とやった後で我らは、我らの教室に入り、祝賀パーティーとしゃれた。優勝杯の中に、お酒ならぬ、コカ・コーラを入れ、回して飲んだ。この時のコーラの味は格別だ！　友達大勢と話しながら公園を抜けて、家路につく。歩きながら、僕は来年の仮装について考えた。来年も有志として出てやろう。そして来年の11年生や、10年生を励まそう！　翌日、賞状にクラス全員の名前を書いた。僕達が学校を卒業しても、また学校に来て、賞状を見て「あの時のこと」を思い出そう……　サッ！　来年は、どのクラスが優勝かな楽しみだ。〈※13〉

「明星祭委員会から」　11年3組　伊東 啓一（33回生）

明星祭委員会は、夏休みに入る前から仮装大会の準備を始めた。こんなに前から始めては、そのうちに仕事がなくなってしまうのではないかと、心配していたのだが、それは大きなマチガイだった。後から後から仕事がふえ、仮装大会が近づくにつれ、忙しさが身にしみて分かってきた。

また、委員会の統制力はすばらしかった。11年という中心となるべき横の関係も、10年や9年と結ぶ縦の関係も実に強く、11年が忙しくなれば、10・9年がそれに代わって働くといった具合である。

また、先生方の力に負うことも大だった。放送の会場整備など、先生方のお力ぞえが無かったら、仮装大会などとうてい開くことはできなかっただろう。こうして25日、ついにその日が来た。空は晴れ上がりまっ青。大会はどうやら無事にすんだ。ホット一息といった感じである。後略…〈※14〉

「みんなにアリガトウ」　12年1組　寒川 龍彦（31回生）

仮装大会の目的は何か。と聞かれたら皆はこう答えるだろう。「各クラスの団結個々の信頼感を深めるため」。仮装大会はそれを主要目的としなければ意味がない。遊びでも祭りでもない所はここにある。仮装大会が始まる1週間前と終わった時自分達のクラスをみくらべて見て、自分の悩みを打ち明けることのできる家庭的なクラスとなっていれば仮装大会が成功の証拠だと思う。（今回12年の仮装の内容は）あまりにリアルすぎたがやって良かった。胸がスウとした感じだ。灰色ムードの受験生。こういう言葉は明星生にあてはまらないとい

〈※13〉高校自治会機関紙『星雲時代』（1964年11月25日）
〈※14〉高校自治会機関紙『星雲時代』（1964年11月25日）

うことを我等の父上、母上に声を大にして言いたい気持ちだ。12年有志から、我等の仮装に理解ある態度を示してくれた父上、母上、先生方。また微力ながらもいろいろと手伝ってくれた野郎共。みめうるわしき女性に、有難うございました。〈※15〉



上記は、1960年代のＰＴＡ会報『道』、自治会機関紙『星雲時代』などに掲載された文章から要約・抜粋したものだが、初参加でとまどいながらも全力投球の9年生、高校受験を経て初めて参加する生徒も多いなか、一体感を強めていく10年生、3回目となり、掘り下げまとめあげる力をつけた11年生、有志参加ながら高校時代の喜び・苦しみをすべてぶつける12年生まで、仮装大会を通して成長していくそれぞれの姿が浮かび上がってくる。

4学年にわたる生徒たちが一堂に会することで得られた盛り上がり、そして4年間という経験の積み重ねが生み出す成果など、4・4・4制の利点が最大限生かされた行事だったと言えるのではないだろうか。

一方、「年々規模が小さくなってつまらない」「マンネリ化した仮装に終わっている」「放送や進行に問題が多かった」など、反省や批判の声も多く載せられているのだが、教師から寄せられた文章を最後に引用する。

「若さのエネルギーの爆発」 海津 修（高 英語科教諭）

毎年、仮装が近づくと楽しい。それというのも皆がかってないほど真剣に討論し題目を決め、一線となって動く、そこに青年の美しさがあるからだ。

年々マンネリズムになると言われ、おびただしい時間の浪費を指摘されることはあるが、これ以上よいホームルームの結束があるのか、対策はあるのか、退屈なのは見る人の考え方と、目の覚めるような力の不足ではないかと思い、私達も今年こそはと期待している。…中略…

11年生は仮装の内容も立派だった。協力と表現の光っていた10年、よく考えた9年と、縦の自治会さえあったら、規約にしろ熱意にしろ徹底していて、若さをたたきつけた12年のリードと共に、本当に全員が団結できたのではないか。

仮装は入賞しようと選外だろうと、それを契機にして各ホーム・ルームが知的にも高まり、強く団結し、若さがここにあることを確認することに意味がある。勝負は実はこれからだ。だからこれからの皆に期待したい。集団の力を強め、質を深め、個々勝手にぶらぶら歩き回ることが自由ではなく、一致協力した若さこそが皆の自由であると。〈※14〉

＜構成：串田 妙子＞

〈※15〉PTA会報『道』No.61（1963年12月23日）

COLUMN 6

1960年代の明星学園　　井部 高志（元高校英語科教諭）

●プロローグ　安保闘争

私が明星学園に奉職する前の1960年は、70年近くになる日本戦後史の中でも突出した年でした。つまり安保闘争。5月19日、政府・自民党が安保特別委で質疑打ち切りを強行。翌日には新安保条約を自民単独で強行採択。その結果は連日の国会を取り囲む「アンポハンタイ・キシタオセ」のシュプレヒコール怒号。6月15日には全国で580万人がデモに参加。東大生樺さんが死亡するという異常な事態に。大学4年の私はちょうど教育実習の期間、それでも国会周辺の騒擾（そうじょう）に幾度も身を晒したものでした。

そのような状況での大学生活は、今とは違い就活は四次の9月が解禁。卒論の締切を控え暗澹たる思いをしたのは勿論私だけではない。

●4・4・4制

列車100本が立ち往生、乗客15万人が車内で越年という豪雪で明けた翌年61年。何の縁故もなく、やっとのことで明星学園高校に職を得た私は22歳の若輩でした。

明星という名は知らぬわけではない。前の年のある時、偶然ある本屋でたしか『サンデー毎日』をめくってみると、明星「4・4・4制」という文字が飛び込んできたのです。

さて、4月。教師として初めての新学期。希望に胸を、などは別世界の言葉。鬱々たる気分でどこの馬の骨ともしれぬこの身を拾い上げてくれた奇特な学園とはいかなものかと臨んだ担当授業は、晴れて（？）この年高校に組み込まれることになった9年生（中学3年）と11年生（高校2年）。危惧していた通りの出来映え。気を晴らすべくアルコールやタバコに手を出したのもこの頃のことでした。生徒側に難があったわけではない。責は私の力量不足。生徒たちは状況を運命（？）と受け入れ、勉学に臨む姿勢は健気でさえありました。

それから4・4・4制はどうなったか。残念ながら1973年10月15日、翌年より9年生は中等部へ移す、との決定が父母にも知らされることになりました。挫折といえば挫折。小・中学校対高校の間に種々軋轢があったのは厳然たる事実として認めざるを得ない。生徒に因があったわけではない。因は専ら教職員間の相互理解の欠如と相互不信に有ったと改悟すべきでしょう。言い換えれば、明星は世に先んじて困難な海に舟を乗り入れたものの、それを操縦する術を乗員全体に滲透しえなかった、と自戒すべきではないでしょうか。しかし、海は無限であり、4・4・4制の火種は彼の世のものになったわけではない。

●東京オリンピック

1963年になるとケネディ大統領暗殺、翌年にはベトナムのトンキン湾事件が起きている。そして64年（昭和39年）には東京オリンピックの出番。

昭和20年の敗戦より日本がどのようであったかは各人の記録と体験に任せるしかない。湯川博士のノーベル賞、黒澤明「羅生門」のグランプリ受賞、朝鮮戦争を一つの契機としての景気浮上、等々により、日本も捨てたものではないとの世相に迎えられての五輪開催でした。私が初めて担任を持ったのもこの年。初めて授業を持ったあの9年生が11年生になったその

学年でした。

忘れもしないその年の10月。高校の生徒全員で競技を見に行きました。所は駒沢、サッカーの試合です。その前の試合で強豪アルゼンチンを下していただけに期待されたのですが、その日はガーナに1－2で敗戦。盛んな応援の中で、引率の某教師が冗談で「その黒ん坊、踏み殺してやれ！」と叫ぶと、「先生、やめてよ。みっともない」とお諫めの声。礼節あるその声。別に4・4・4制の成果とは申しませんが。

さて、ここで行事について一言。当時から行事は多彩でした。その中で生徒が最も力を注いだのはクラス対抗の形の仮装大会だったでしょう。この学年は9年のときにも初体験にもかかわらず充実したパフォーマンスを披露し、今回も期待されましたが、なんと私のクラスが1位となり生涯に一度の胴上げと相成った次第です。翌12年次には修学旅行。この頃は夏休み前に行うのが恒例で、この年も東北地方へ出掛けました。十和田湖、奥入瀬等の風景が懐かしく蘇ってまいります。

さて高校生活の締め括りは進学問題。いわゆる受験校を標榜せずとも大半の生徒が大学・短大を目指すのが現状でした。

大正13年の創立。大正デモクラシーの世相を反映した「自由・個性尊重」を掲げながらも個性に適った学科を選び、それに相応しい学風を有する大学に進学するのは当然のことです。この学年は9年時より英・数でコース制を採用し、模擬テストも数回実施しました。結果は推薦以外にも現役で東工大、慶応それに早稲田、上智などにも複数の合格者を出すことが出来ました。

●エピローグ　再び安保闘争

前後して1965年7月に高校の初代校長上田八一郎先生が逝去され、盛大な学園葬が行われ、同年恩地邦郎先生が次期校長に。70年には内部機構の混乱を治めるべく鈴木満男先生が小・中・高の校長を兼務することになる。他方、社会では65年に米軍による北ベトナム空爆。69年には機動隊が東大安田講堂封鎖解除。同年アポロ11号初の月面着陸等があり、70年を向かえることになりました。

その年昭和45年には日米安保条約が自動延長され、反安保運動が再燃することに。7月には全国で77万人がデモに参加。当校の生徒たちも敏感に反応、授業ボイコットのクラスも出る始末で、職員室は連日対処に苦慮を強いられたものでした。

そうこうするうち世間の瞠目を集める事件が起きる。11月25日、三島由紀夫がライフワークの『豊饒の海』を書きあげた後、市ヶ谷の自衛隊総監でアピール演説、その後割腹自殺を遂げるというショッキングなものでした。学園とは無関係の出来事ではある。しかし気になることが一つ。彼が「これまでの左翼運動は終焉した」と語ったことです。ここで三島の思想と行動を賞揚する気はない。

ただ一つの感慨が残りました。……教育という海はすべてを呑み込み、それが陰に陽に反応し合ってやまない。70年代の初頭、一歩退いて教育を見返す機会を与えられた。そのような感慨である。（本誌作成にあたり寄稿）

5　試練の時

(1) 相次ぐ訃報

1960年代前半は、教育・経営の両面にわたり、とくに大きな試練の時であった。

1963年（昭和38）に全園教務の橘正薫が急逝。以後、照井小・中学校長、市村寅之輔理事長、上田小・中・高校長の逝去がつづき、その間、横川武事務局長の病気による退職。この2年余の間に、学園は教育・経営の首脳部をつぎつぎに失ったのである。

橘全園教務の急逝

橘正薫は1904年（明治27）、山梨県に生まれた。山梨師範学校卒業後、県内の小学校に在職し、早くから県教育会の国語研究部委員として活躍していた。1933年（昭和8）に上京し、1年半の教師生活の後、千葉春雄の東宛書房に入社した。

千葉は戦前期の生活綴方運動の指導者のひとり。国定教科書や保守的な教育界を批判して東京高等師範学校付属小学校を去り、在野の教育ジャーナリストとして活動していた。彼は退職後まもなく厚生閣の編集顧問に迎えられ、『教育・国語教育』の編集を任され、執筆者に国分一太郎をはじめ多くの青年教師を起用して育てた。また、自ら東宛書房を興して、子ども向けの雑誌『綴り方倶楽部』を主宰し、さらに教師のための雑誌『教育東西南北』を創刊した。橘は気鋭の編集者として精力的に働いた。

しかし、1937年（昭和12）、日中戦争の拡大とともに言論統制がきびしくなり、『綴り方倶楽部』も経営難のため休刊を余儀なくされた。橘は、すでに明星に在職していた原田満寿郎の熱心な勧めにしたがって東宛書房を辞め、1938年（昭和13）4月、明星学園に就職して1年生を担任した。原田とは山梨師範学校で4年上級で、ともに陸上競技の選手として汗水流して以来の盟友であった。〈※1〉



原田先生（左）　橘先生（右）

当時、小学校のクラス担任は1年から6年まで持ち上がり制となっていた。だが橘は25年間の在職中、単年度のクラス担任を除き、6年間のクラス担任をしたのは17回生だけであった。学園の情況が教育現場での実践に専心することを許さなかったからである。

まず、赤井米吉・照井猪一郎・上田八一郎という強烈な三つの個性を結びつけ、明星学園というひとつの共同体の意志として方向づけていく仕事を担わねばならなかった。とくに戦後の改革期には、小学校、中学校、高等学校を一体化することが急務だと考え、心ある人たちと全園職員会議を置く運動を始め、一貫教育体制を確立することに献身した。また、研究が進むなかで生じた教職員間の対立のまとめ役として、互いに謙虚に学び合うことの大切さを説いた。ＰＴＡとの連携にも細やかな配慮を尽し、さらに最近では来年に控えた創立40周年の行事と記念事業の問題に忙殺されていた。

1963年（昭和38）6月4日、橘はＰＴＡ常任委員会の会議中に発病し、10日余りの自宅療養の後、同14日、脳溢血のため急逝した。行年58歳。あまりにも早すぎる長逝であった。

〈※1〉 原田と橘の「盟友」関係と、橘の長男・橘昭多の「親父を想う」（PTA会報『道』No.59初出）は、『明星の年輪―明星学園60年のあゆみ』108～113頁参照。

葬儀は6月16日、小金井市桜町の自宅で執り行われた。参列者は1,300人にのぼり、故人の人柄が偲ばれた。

7月1日、学園で追悼式が行われた。式は葬送行進曲とともにはじまり、上田八一郎高等学校長、生徒代表·塩入祐里子の弔辞、照井小·中学校長以下の献花とつづき、最後に全員で合唱を捧げた。

高学年部の自治会機関誌『星雲時代』(1963年7月13日)は、橘全園教務の追悼を特集した。そのなかで、最後の担任のクラスだった卒業生(21回生)で英語科の教師・田中(迫水)祥子は、いつも物静かで温かくつつみこんでくれる父親のような先生だったと語っている。

ＰＴＡ会報『道』No.59〈※2〉には特集「橘正薫先生を悼む」が組まれ、照井校長をはじめ、ＰＴＡ会長・徳武敏夫氏、教職員、卒業生などの弔辞が掲載された。そのなかから、ひとつ、照井校長の弔辞を転載する。

弔辞　　照井猪一郎

霊前に捧ぐ

学園創立以来、あらゆる忍苦の中にも終始希望と喜びを共にして来た君が去った。

永久に去った。

君は元来寡黙の人であり、誠実の人であり、一面また激情の人でもあった。学園40周年を期しての行事企画、諸般の事業——それ等はすべて私学の先駆としての明星の指標であり、世紀の要望にも一致して居る。この実現には一にも二にも職員の熱意と父兄の協力の裏付けが期待される。その複雑な企画案件の焦点に君はあったのだ。定めし日夜をわかたぬものがあったであろう。今更ながら涙を新にする。

やがて来るべき君が待望の40周年祝典——その晴れの場に、空しい君の椅子を涙なしに誰が見られよう。

天を仰ぎ、地に伏して慟哭やまず。

ただ祈る。切に祈る。

君よ——眠り安かれ。　　昭和38年6月16日

照井校長も逝く

橘正薫全園教務が急逝して半年後、1964年(昭和39)2月25日、照井猪一郎小・中学校長が他界した。76歳10か月であった。

近年、体調をくずし、3か月前の第3回公開研究会にはぜひ出席したいと頑張ったが、ついにかなわなかった。3か月先の創立40周年記念式典に列席することもできなかった。

学園葬は3月2日、簡素ながらも盛大に行われた。ＰＴＡ会報『道』No.63〈※3〉は「照井先生追悼特集号」として発行され、多くの人たちの弔辞や回顧録が収められた。

教職員代表として霊前に立った上田八一郎校長は、冒頭、照井猪一郎の筆になる「明星誕生ものがたり」の一節を朗読して、4人の創立同人の息吹をつたえ、“かげの人”茶郷基氏の遺徳を偲んだ。そして、「先生の人格は決して権力に迎合しない、徹したリベラリストで、私立学校の自由な教育精神を防ぎ守った方です」とたたえ、「つきせぬなごりを胸にひめながら、照井先生、学園を代表して、さよなら！」と述べた。

明星学園理事・赤井米吉は、照井との出会いから共に歩んできた足跡をふり返り、つぎのように述べた。

〈※2〉 PTA会報『道』No.59(1963年7月10日)
〈※3〉 PTA会報『道』No.63(1964年5月15日)

創立10周年の時わたしは照井先生を紙くず籠にたとえて、学園教育のくず、わたしの失敗、非難を一身に受けとって下さったことを謝したのです。その後いままでその通りです。

毎年大みそかの夜、すべての仕事がすんだとき、二人で学園へ来て運動場を歩きまわりながら、しみじみと1年を回顧し話し合い、除夜の鐘を静かにきき入ったのであります。真実の人でした。情味の人でした。


照井先生学園葬

先年わたしが理事長を辞めたとき、照井先生も校長を辞めるといってきかないのを無理に止めると間もなく、発病されて、信州の山奥に閉じこもらねばならないことになりました。それから数年、一進一退の状態で終に逝かれたわけです。

御苦労な一生でありました。最後のお別れをしたとき、この一言を申し上げたのです。今もそう思っています。

御苦労な一生でした。何卒安らかに眠って下さい。

日本私立小学校連合会会長の佐藤瑞彦氏〈※4〉は、照井が明星学園の発展に尽力しただけでなく、私立小学校連合会結成の当初からその中心にあり、小学校のみならず全私学の興隆に貢献したことを述べ、次のように語っている。

私学を愛しその伸長を希いしこと、君の如く強かりしはない。官権におもねらず、むしろこれを正しく抗して私学独自の境地を拓き進むことに若人の如き情熱を燃やした。

思い起こす、あの戦争のるつぼのただ中にありて、当時の文部省当局が私学撲滅の暴挙を敢えてせんとした。この時の君の姿を昨日の如く鮮やかに想起する。君すなわち一文を草して檄文となし、われら同志の結合と正しき抗争のよりどころとなした。この檄は君の名をわれらの中に永久に残す大文章であった。この一文の中に君の私学魂が脈々としてこめられていた。〈※5〉

これにより、事実上、今日の私立小学校はありえたのである。

私はこの事について君と浜野重郎君〈※6〉と併せて忘れることが出来ない。正に私立小学校興隆の恩人である。後略…

〈※4〉 日本私立小学校連合会第2代会長。元自由学園初等部主事。「照井」「みっちゃん」と呼び合う仲であった。
〈※5〉 本誌115～116頁「国民学校令と私立小学校」参照
〈※6〉 日本私立小学校連合会初代・第3代会長。元清明学園初等学校校長。

創立40周年と市村理事長の逝去

照井小・中学校長の学園葬から2か月ほどたった1964年（昭和39）5月15日、創立40周年記念式典が行われた。そのときの模様を、高学年部の新聞『星雲時代』（同年5月20日）はこう報じている。

ほんとうに記念式典にふさわしく、五月晴れのすがすがしい天気だった。低学年部の寒川先生の司会で、全員が祝歌を合唱した後、壇の上に立たれた上田校長から祝辞が述べられた。…中略…この後、音楽部による合唱が静かに行われた。

40年の歴史を歩んできた明星学園は、4人の先生方の力強い熱意と、清らかな精神のもとに創立されたものであることは、誰もが知っている通りだ。4人の先生方のうち、この日出席されたのは、げん先生と赤井先生のお二人。そして、現在高知で学校長をしておられる山本先生は、ご用事のため出席できず祝電が届けられた。この3人の先生ともう一人の先生――去る2月25日にお亡くなりになられた照井猪一郎先生のお姿を見ることができなかったことはさみしい気持ちであった。

おげん先生からは「明星のタネ」というお話があった。続いて赤井先生が、創立当時の思い出として「ムギのつぐない」というお話をされた。この話は二つとも、私たちの心に何かほのぼのとしたものを感じさせた。

生徒からは、代表として12年の矢野和夫君から祝辞が述べられた。続いて、3年生の本多勝君の可愛らしい作文朗読に、あたたかい微笑がおくられた。…中略…

山本徳行先生から寄せられた祝電。

「ソウギョウノ　ムカシヲシノビ　イニシエノ　フミコエシ　40ネンノ　イギョウヲ　タタエ　シュクイヲ　ヒョウシマス　ヤマモト」

本来この記念式典を主宰するはずの市村寅之輔理事長は、式典の直前に体調をくずして入院中であった。式典には出席できなかったが、当日配布された小冊子のなかで、「愛する子どもたちを信頼して託する、このすばらしい学園の一大飛躍を願うことは、現在のわれわれ役員に与えられた使命と考えています」と決意を述べている。

もともと実業界の人だった市村氏は、兄・市村今朝蔵氏〈※7〉のすすめで子どもたちを明星学園に託して以来、照井校長の人格にすっかり傾倒し、1957年（昭和32）、照井校長の懇願に応じて理事長に就任し、経営を担当することになった。市村理事長は毎日のように学校へ出て、授業を参観したり、職員室で教職員と談笑したり、議論をしたり、低・中・高学年部の施設・設備の状態を点検して回った。創立40周年の年は、創立30周年記念事業の最終段階である現中学校4階建校舎の建設が進行中で、市村理事長は10月に開催される東京オリンピックとともに、年内に完成予定の中学年部新校舎の実現をたのしみにしていた。

しかし、40周年記念式典から2か月後の7月24日、市村理事長は中学年部新校舎の完成を見ることもなく、静養先の軽井沢で逝去した。62歳であった。

後継の理事長には学園の元保護者で弁護士の衣笠武夫氏が就任した。9月に入って市村前理事長の追悼式が執り行われた。

〈※7〉 第1部94、186頁参照

上田校長の逝去と次期校長問題

1965年（昭和40）7月16日、かねて療養中であった上田八一郎校長が肺炎を併発して永眠した。行年75歳。

2日後の7月18日、高学年部体育館で学園葬が執り行われた。学園葬の様子は、明星会会長・岡崎健児（1回生）の弔辞とともに『明星会会報』No.8（65・夏）に詳しく報じられている。

> 朝から曇りがちであった空から大粒の雨がぱらぱらと落ちはじめ、心配された梅雨あけの猛暑はさけられたが、時間とともに雨ははげしく屋根に音をたてて降りつづけた。
>
> 葬儀は定刻12時、遺族・親族の入場、僧侶読経によって開式され、やがて教職員を代表して旧制中学時代より長く上田先生を補佐してきた舩山先生が別れのことばをささげ、10回生三浦さん（旧姓瀬尾）の長男、三浦進君（高校2年生）が生徒を代表し、ＰＴＡ会長、友人代表として赤井先生とつづいた。間奏の生徒合唱団による祈りとわかれの2曲が演奏された。晩年でも音楽会だけは欠かさず出校して喜んでおられた先生の霊をおなぐさめするため、1日でまとめられたものであったが、落ち着いたよい合唱だった。後略…



上田八一郎校長

異色の弔辞は、広島高等師範学校付属中学校時代の教え子のひとり、富士製鉄（新日本製鉄）社長・永野重雄氏のもので、英語の発音はＰが大切だと教えられた話から始まり、旧師の人となりを語って参列の人々に感銘をあたえたことも書かれている。

ここまでみてきたように、学園はわずか2年の間に、橘全園教務を失い、照井校長・上田校長と二人の校長を失った。今や、照井校長逝去のときから懸案となっていた次期校長をどのようにして決めるかが焦眉の課題となってきた。

理事会は上田校長逝去の翌17日の緊急理事会で、次期校長が決まるまで赤井が校長事務取扱となることを議決した。これに対して教職員からはさまざまな意見が出たが、学園葬の翌日からつぎつぎと夏季行事が控えていたので、これらの行事の終了後、8月14日に校長問題をテーマとする全園職員会議を開催することになった。

8月14日の全園職員会議では、校長選考委員会を発足させること、選考委員会での推薦者を全園教職員による選挙または信任投票で決定すること、理事会はその結果を尊重し任命すること、という提案が出された。その後、4か月の間に、校長選考委員会をはじめ、常任理事会、理事有志、教職員有志等による会合が開かれ、12月19日の第3回の全園職員会議で校長選考委員会案が承認され、暮れも押し詰まった12月27日に小学校長に寒川道夫低学年部長、中学校長に上川淳中学年部長、高等学校長に恩地邦郎高学年部長が任命された。

赤井学園長の逝去

1974年（昭和49）2月26日、赤井学園長が逝去した。86歳8か月であった。

臨終前後の様子は、三女の赤井英乃さんが抑えた筆で書き記している。〈※8〉それによると、前年の秋から極度の貧血のため、三井記念病院に入退院を繰り返していたという。

2月15日のひる頃、また容態が急変し、三井記念病院まで運ぶことができず、救急車で近くの森本病院に入院した。

2月19日、夜半に一時呼吸が停まり、当直医師、看護婦が交替で人工呼吸を繰り返し、辛うじて夜が明けた。そのうち僅かずつ呼吸が戻り、手足も動かすようになった。

前夜神戸からかけつけた次女信代さんが、「おじいちゃん！」と呼ぶと、大きな声で「だれじゃ！」といたずらっぽい笑顔をみせた。

以下、英乃さんの手記を抄録する。

> 何という強い生命力に家族も付き添いの看護婦も只々驚く。
>
> しかしこれも一時の小康であって、全身の衰弱は刻々と加わり、意識混濁し、声も出なくなり言葉が聞きとれなくなってきた。
>
> 「カミ」「エンピツ」と云い書くしぐさをする。もはや目も殆ど見えないらしく、片かなの一字一字が形にならず、判読に苦労していると、何回でもひったくるようにして書く。大きく力いっぱい書いた字は「キヌカサ」「イッテコイ」。「衣笠先生（注：理事長）に来て頂きますか」というと、やっと聞きとれるような声で「ハヤク……」「ハヤク……」という。
>
> 私は三階の病室からかけ下りて電話にとりついた。
>
> 幸い衣笠先生は御在宅で、すぐお出で下さるとのこと。…中略…
>
> 衣笠先生がお出で下さった時、父はもうろうとしていたが、「衣笠先生がお見えになりましたよ」というとハッと気がつき、先生のお姿を探すように見廻した。
>
> 先生は父の両肩を抱くようにして大きな声で「赤井先生！ 赤井先生！ しっかりして下さい！」と叫びかけて下さると、かすれて出ない声をふりしぼって「明星……明星……明星……」、あとは云う力なくききとれず、衣笠先生の方を向いて合掌するだけ。
>
> 衣笠先生は「先生！ 明星は大丈夫です！ 明星は心配ありません！」と何度も大声でおっしゃると、父は何とも云えぬ安堵の顔色となり、閉じた瞼から涙がにじんでいた。…中略…
>
> 次第に心臓の衰弱が加わり、24日の夜からもう何も云わず眠りつづけ、2月26日朝、静かに静かに何もかも燃えつきるようにして逝った。後略…

しめやかに学園葬

学園葬は3月9日、落成したばかりの第2体育館で、午前中の学内の追悼式につづいて、ご遺族の希望もありキリスト教式で執り行われた。

司会は瀬川和雄牧師（6回生）。故人も愛唱した讃美歌「神ともにいまして」につづいて祈祷、故人の履歴の紹介があり、「明星学園の歌」（赤井米吉作詩・吉原規作曲）が高校合唱団によって歌われた。この歌は、北原白秋作詩・細谷一郎作曲の「明星学園行進歌」ができるまで歌われていたので、古い卒業生が声を出して一緒に歌っていたのは印象的であった。

鈴木満男校長の弔辞につづいて、明星会を代表して小松絢子副会長（1回生）が弔辞を捧げた。友人代表として創立同人のひとり山本徳行氏の弔辞があり、合唱団の歌があって、成城学園時代

〈※8〉『明星会会報』No.14（1974年·秋）

に担任した梅組を代表して遠藤欣一郎氏が弔辞を述べた。船山博彦先生も梅組のひとりであった。

上田忠雄金沢女子短期大学学長の弔辞の後、和光大学の中野光教授が大正自由教育研究者の立場から赤井先生の業績について述べられ、参会者に大きな感銘をあたえた。

明星学園行進歌斉唱のあと、終祷、遺族ならびに代表の献花があり、葬儀委員長・衣笠武夫理事長の挨拶があった。理事長は挨拶のなかで、赤井学園長の最期に学園のことを頼むと言われたことを披露し、理事長としての決意を述べた。



明星会代表の弔辞

『明星会会報』No.14（74年・秋）には小松絢子（旧姓福沢）さんの弔辞も収められている。全文を転載する。

弔　　辞

私共卒業生が明星学園に入学しました日から卒業するまで毎日の様に呼び馴れたお名前です。園長先生も校長先生ともお呼びしないで、いつも赤井先生でした。パーカスト夫人のダルトンプランのエキスを取り入れた新しい教育をなさるべく、赤井先生に共鳴なさった数人の先生方と共に理想に燃えて明星学園をお建てになった時に、すでに今の様な新しい自由な教育をなさったのでした。

熱心なクリスチャンでいらした先生が、生徒にはキリスト教のお話をなさるでもなく、一週一回の修身の時間にはイソップ、アンデルセン、イノックアーデン等外国の名作、また芥川龍之介、夏目漱石の物等、学年に応じて読んで下さるので、私共はその日を楽しみに待ちました。また、各学年別に二、三人ずつ時々先生のお宅へ泊めて頂き、その夜はお家の中で一緒に遊んで下さったことなど、楽しみながら知らず知らずの間に人間愛、または人間として何をしなければならないか、何をしてはいけないかということを、子供心にしみ込ませて下さったことは、成人してはじめて成程と有難く噛みしめて居ります。

先生はまた、どの様な環境にあっても其の中の最上の者になるという事を説かれました。そして先生はただ真直ぐに正しく一筋の道を歩み通していらっしゃいました。私共は先生を誇りに思っております。

先年あの大病を克服なさって、すっかり御回復なさいました強い信念と精神力に驚いたものでございます。

昨年御入院の時も、先生は心がお強いからきっとまた元気にお成りの事を思って居りました。

病院へお見舞いに上りました時、「来年の五十周年記念はなかなか素晴しいものになりそうだ」と心から嬉しそうに仰っていられました。「先生の米寿のお祝いもございますよ」と申し上げると「うん」と深くうなずかれておりました。その後、退院のお葉書を頂き、それにも記念日の事をお書きになり、5月15日を心からお待ちになっていらしたかをお察し致します。

先生が創立当時から常に仰っていらした三位一体という事、先生、父兄、生徒が一体になって築き上げた五十年の成果を、またこれから先の明星学園を、何とぞ天国からお守り下さるようお願い致します。

先生の御冥福を卒業生一同、心からお祈り申し上げます。

5月9日

明星会代表　第一回卒業　小 松 絢 子

(2) 3校長の辞任

1965年（昭和40）12月に就任した寒川道夫小学校長、上川淳中学校長、恩地邦郎高等学校長、いわゆる“3校長”の時期は、学園財政の危機が深刻化した時期であった。

とりわけ寒川校長の場合、心ならずも事務局長として財政問題に取り組まねばならなかった。

学園は財政立て直しのため、保護者代表の協力も得て経営の健全化を図ろうとしたが、刷新案はなかなかまとまらなかった。教師間の対立、不統一も激しくなり、学園内は一層混乱した。保護者は何を信ずべきかに迷い、学園への不信を強め、入学者は激減し、退学者も続出した。それがさらに教師間の対立を深めるという悪循環を生んだ。

こうした混乱の責任をとって、1970年（昭和45）2月1日、3校長は辞任し、鈴木満男高校長が小学校・中学校の校長を兼任することになった。

次頁の文章は、寒川道夫小学校長が退職時にペンをとり、ＰＴＡ会報『道』No.84に掲載した「星章をはずして」の抄録である。貴重な教訓を汲み取ることができると考え、ここに転載する。

ちなみに、寒川道夫は1910年（明治43）、新潟県に生まれ、高田師範学校卒業後、小学校教師となり、県下の小学校で生活綴方教育に力を注いだ。太平洋戦争開戦直前の1941年（昭和16）11月、治安維持法違反の嫌疑で検挙され、教職を追われるとともに、懲役2年執行猶予4年の判決を受けた。戦後、志垣寛主宰の雑誌『国語創造』（1946年創刊）の編集者として教育界に復帰し、1948年（昭和23）4月、明星学園の教師となった。1977年（昭和52）8月17日、病没。

編著に『山芋　児童詩指導とその作品　大関松三郎詩集』（百合出版、1951年）のち『大関松三郎詩集　山芋　解説と指導記録』（講談社文庫、1979年）、遺稿集『人間教師として生きる』（新評論、1978年）ほか多数。

星章をはずして　　寒川道夫



2月15日　日曜　晴

昨日、校長解職の辞令が届けられたので、今朝、照井先生の胸像お写真の前で、洋服の襟から学園のバッジをはずした。…中略…　思えば22年間、この胸につけて来た星章だ。何と可憐、優美、諧調のあるバッジであろうか。これをはずすのは大いに心残りがする。しかし、今ははずさねばならぬ時だ。

そして、はずして下におくと、これでホッとしたという気持ちにもなった。

2月15日の日記の冒頭にぼくはこう書きました。ぼくのこのバッジに象徴される学園を非常に愛します。だから昭和23年4月10日に明星学園へ来てこのバッジを戴くと、どこへ出かける時もこれを胸にし、誇りにし、学園と共にぼくの言動があり、思想があると思っていました。子ども達に話している時も、力のこもった時は、いつの間にか左掌がこのバッジをしっかりおさえているぼくに気がつくのでした。

その明星学園――そこに学ぶ子ども達の大いなる未来への光を祈りながら、ぼくはこのバッジを胸からはずします。…中略…

明星学園が時流に先んじた教育研究校であったことは、今さら言うまでもありません。それは今度毎日出版文化賞を受けた『大正自由教育の研究』（和光大学教授中野光著）でも顕著に出ている所ですが、赤井先生の物凄い勉強ぶりと情熱とは、他を圧している観があり、それらは赤井先生の著述の数々を見ても十分に肯けることであります。これが明星学園の生命であり伝統なのです。新教育は真教育として探究され実践されて来たのです。これは学園の持つ最高の誇りというべきでありましょう。

戦後は、日教組をはじめ各種民間教育、教科研究が進むと共に、学園の勉強家がその中心的実践家として活動するに至ったことは、まさに学園の伝統に生きた実にすばらしいことだったと思います。明星学園は純粋に民間教育研究実践校なはずです。それは赤井先生、照井先生に脈々と流れている血脈です。…中略…

しかし、学園は大変混乱して今日の事態に至りました。その最大原因は、研究の深まりと共に、互いの間に対立が生じたということです。（一つは研究が個別教科の研究に深入りせざるをえない過渡的現象でもありますが）それは学内のみならず、外の民間教育諸団体の間にも現出して来たのですが、研究からのおちこぼれ者は別として、その依拠する基礎科学や補助科学が違うことから生ずる成果の違い、また、自分の成果を誇り広めようとする競争心から、自説のみを主張するに急で、他の研究に耳を貸さぬ偏狭さ、そこから来る排他性、傲慢性が、研究会そのものを成立させないということが、しばしばありました。それがそのまま学園内に持ち込まれたのです。それに対して、学園教育の統体性一貫性の上から、互いに謙虚に学び合うように進めることが、ぼくの任務だったにもかかわらず、遂にそれは何の成果もあげえず、対立を深めるのみということになりました。…中略…

要は、教師たる人間、そのものの持つ大きな深さ、そして人間としてのあたたかさ（そこに歴史人として社会人としての全てを含めての）が子どもを育てる力を持ち得るのです。

そういう資格は、絶えず勉強している教師のみが持ちうるのです。子どもと遊び、子どもと苦楽を共にし、子どもに学び、のびる教師にしてはじめて獲得できるのです。

ぼくは以上のような観点から、いわゆる教育研究派といわれた人達の傲慢不遜と思われるような研究態度をきびしく戒めたいと思います。しかし、それをせめると同時に、その人達のなしとげて来た成果をも無視してはならぬことを言いたいと思います。…中略…

そういう意味で、明星学園の教育研究はまだまだうんと謙虚に誠実に、孜々として続けられねばならない全教師集団の大課題です。

しかし、教育研究は、決して研究のための研究ではなく、実践のため、一人一人の子どもを、その能力にふさわしいすばらしい人間に育てるための確かなすじ道、支えを探り求めることにあるはいうまでもありません。

教育は、学校は、絶対に人間を傷つけるところではありません。ふとした失敗、マイナスがあっても、獣たちはどんな傷でもなめ合っていたわり癒すといわれてるように、あたたかくやさしく育て合うところです。

「善人なおもて往生す。いわんや悪人おや」は『歎異抄』中のことばに終らせてはならない。教育の場こそ、皆が、教師がこの心で力を合わせ、子ども達に臨む、あたたかい、外敵不可侵の場でなければなりません。

「教育基本法」さえ、「如何なる不当なる支配にも屈することなく」あることが正常な教育としているのです。これは明星学園創学の精神でもありました。教育の真生命は自主的自律的な協働社会人を育てることにあります。子ども達をそのように育てるためには、先ず何よりも教師自身が、何物にも依りかからず、侵されぬ自主自律性を持たねばならぬこと、いうまでもないことであります。そういう意味においてぼくは、明星学園教師職員が、一致協力して自主的にこの教育的原点の恢復に奮起すべき時だと思うのであります。

今日の混乱をひきおこした責任者として、ぼくは既にその発言の資絡は失っていますが、熱愛する学園、そして子ども達のため、あえて乞われるまま最後のことばを走り書きしました。長い間、この至らぬ人間に本当に有難うございました。皆さまのあたたかい聡明なご理解とご援助に心から感謝し、それを十分に生かせなかった自分を恥じ、おわび申し上げます。ここで蟄居しながら、今まで空虚になっていた勉強をとりかえして自分を恢復していきたいと思っています。

洗心掬七泉　　こころを洗うに七泉をくみ
吟詠托白雲　　吟詠して白雲に託す

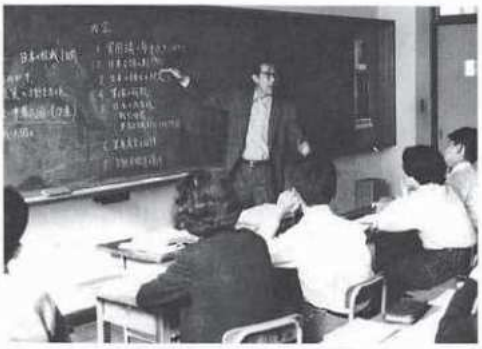
※七泉は七井の泉　井の頭の池水のこと

この頃こんな心境でおります。学園の前途はなおきびしいでしょう。しかし、発展を信じいのり、子ども達がすくすくのびるよう、また皆さまがご健康でいられるようと祈ります。なかなか擱き難いペンですが、ここで擱きます。机上の赤いバッジをこよなく愛しいものに思いながら。(2月16日　夜)〈※9〉

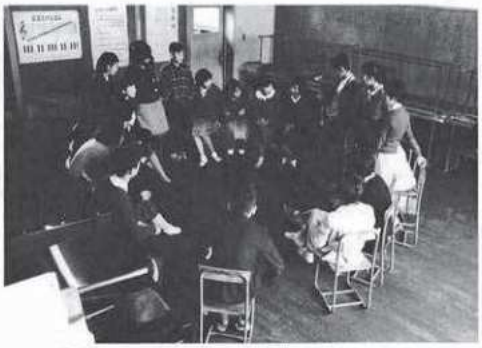
＜文責：依田 好照＞

〈※9〉 PTA会報『道』No.84(1970年3月15日)

1960年代の生徒たち



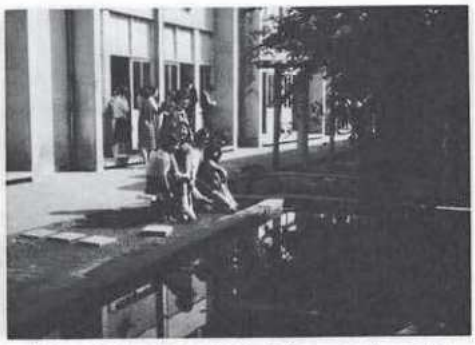
上川淳先生　歴史の授業



音楽室でESSCのクラブ活動(36回生)



中学校グラウンドにて、後ろは中学校舎と職員室(36回生)



高校の教室と藤棚、手前は手作りの池(33回生)



スキー教室　志賀高原　熊の湯



スキー教室　志賀高原　ブナ平

第４部　一貫教育の新たな展開

1970 年代～ 1990 年代



中学校卒業式の全校合唱　1979 年（昭和 54）３月

第1章　教育をめぐる状況と明星

1　子どもと学校の状況

(1) 1970年代の風潮

明星学園が創立50周年を翌年に控えた1973年(昭和48)、日本は「オイルショック」に見舞われた。ガソリン・紙などの品不足の噂が流れ、スーパーマーケットにトイレットペーパーを買いだめする客が殺到した。オイルショック以後、日本経済は高度成長から低成長に転じ、それぞれの企業は生き残りをかけて競争の時代に移っていく。

この時期、子どもたちの間に、いじめ、不登校、自殺などがかつてなく増えた。生徒の校内暴力が教師に対する暴力へとエスカレートし、それに対抗するように教師による体罰と管理による抑圧も進んだ。苦悩する教師も多くなった。

いっぽう、1975年（昭和50）には、高校、大学への進学率はそれぞれ94%、35%に達し、受験競争が激化した。受験産業が急成長し、偏差値による高校・大学のランクづけが進んだ。受験のための競争は低年齢化し、小学生のうちから塾に通う子どもたちが増えた。東京などの大都市では、夜遅く、塾のカバンを背負った勉強帰りの小学生が電車に乗り込んでくる光景が見られた。

こういう風潮のなかで、全国の教師たちの間で、「学校は何をするところか」と改めて学校を問い直す営みがつづいた。

(2) 学校改革への実践

学校の再生をめざす教育実践は、全国各地で多様に展開されていた。そのひとつ、1960年代から70年代初めにかけての山梨県巨摩中学校の実践は、公立学校における創造的な学校づくりとして知られた。

生徒手帳に書いてあった56項目の「生活のきまり」を、生徒総会の議題としてとりあげ、議論をかさねて全廃する生徒たち。作文、合唱、演劇などの表現活動に主体的にとりくむ生徒たち。検定教科書におんぶしていた授業を捨て、自分たちで教材・教具を工夫し、子どもたちと苦楽をともにしながら授業を創る教師たち。12年間の学校づくりの記録は、久保島信保著『ぼくたちの学校革命—山梨県巨摩中学校の記録—』〈※1〉にまとめられている。

この巨摩中学校に明星学園の生徒も訪問し、教師とともに交流を深めた。

しかし、全国的に注目された巨摩中学校の公開研究会は、1974年（昭和49)、行政の方針変更により突然中止され、当時の教職員は教員異動のため、その後の3年間で巨摩中学校にはひとりもいなくなってしまった。これは公立中学校での自主的な学校改革が、この後いかに困難になっていくかを如実に示している。

明星学園は、次の第2章でみるように、小・中学校、高等学校それぞれに改革を進めながら新しい実践を積み上げていく。しかし、小・中・高全体の教職員の力で克服していかねばならない問題をもかかえていた。

〈※1〉久保島信保『ぼくたちの学校革命—山梨県巨摩中学校の記録—』(中公新書、1974年)
久保島は元巨摩中学校教師で、のちに明星学園小・中学校でも美術を教えた。

2 「4・4・4制」と9年の問題

(1)4・4・4制の手直しは必要か

1960年代末から70年代初めにかけて、学園財政の危機が絡んで混乱を重ねた校長問題の背後には、4・4・4制と一貫教育をめぐる論議があった。

たとえば、上川淳中学校長は、ＰＴＡ会報『道』№80〈※2〉に、「一貫教育と学校体制―3校長の意見―」と題して、10年ほど前に発足させた4・4・4制の概要とその成果、欠陥と思われる点を書いている。

成果とみられること

1）最初の4年間と次の4年間との切れ目は、子どもの成長段階からみても、教育的要求（教科内容を体系的に順序だてて教える）からみても適切であった。他の学校においても、5年からの教科担任強化の傾向は強まっている。
2）小学校から中学校への教科の積み上げは、教科課程の編成からいっても、整備され、実践的にも効果をあげている。
3）最後の4年間がまとまったことにより、高校では、生徒を把握する上で、大変やりやすくなった。
4）高校の部活動が充実した。
5）全園の研究交流が、教科課程や、授業面、訓育（生活指導）などで、活発とまではいかないまでも、少しずつ行われてきている。

欠陥と思われる点

1）10年生（高校1年生）で大量の編入があるため、9年生の位置づけがむずかしくなっている。
2）世間一般の体制とちがうため、当初から予想されたことであるが、事務的取扱いや編入生の組み入れに矛盾が出ている。（とくに7年生の場合、1クラスだけ別のクラスをつくっている）
3）中学校の部活動、自治活動に矛盾が出ている。（たとえば対抗試合など、他の中学校としにくい）
4）全体にわたって切れ目があいまいになり、節がなくなっている感じがする。

そして、上川校長はこう付け加える。

最近、明星では9年生をどうするかで、とかくの意見が出ていますが、もし手直しを必要とするなら、12年間全体を見通して検討すべきことで、教科課程の上で8年生の上につなげておくべきだというのだったら、10年前にもいえたことです。義務教育の最終段階の一般的区切りを尊重すべきだということだって、やはり10年前にいえたことです。…中略…

“大岡さばき”の子どものとりあいのような、やり方はいたしません。

この点をわたくしどもは、はっきり申し上げ、皆さんのご協力をお願いいたします。以上は3校長が話し合ったことをもとにまとめたものです。〈※2〉

〈※2〉 明星学園PTA会報『道』№80（1968年11月25日）

(2) 9年生は8年生に続けるのがよいか

遠藤豊中学校教頭は、同誌に「教科からの視角—明星教育発展の方途を探る—」と題する長文の論考をよせ、末尾に近いところで次のように述べている。

> 「9年生をどうするか」という問題と、学校制度として、4・4・4制がよいとか、6・3制がよいとか、6・6制がよいかという問題は、多少異質な問題を含んでいる。
>
> 結論を先にいえば、9年生は8年生に続けて教育するシステムをとるほうが現在の情況ではよいのではないかと考えている。そして、まず9年を1ラウンドとして教科のプログラムをくむことをまず第1段階として実現すべきである。
>
> それは、9年生の問題は、単に、9年生の教育内容について、くわしく打合わせをすればよい、初・中等部が9年生の教育プログラムをつくって、高等部に送りとどけるようにすればよいというような名目だけの処置によって解決のつく問題ではないからである。そうではなくて、すじみちだった知識の習得をどのようにして保証し、正しい世界観やしっかりした判断の基礎をもった子どもを、実質的にどのようにして現実のものとするかという問題だからである。だから9年生担当の教師が、中等部の校舎にきて、初中等部の教師といっしょに教育実践にとりくみ、10年生にもちあがるという方法がとれればいちばんよい。…中略…
>
> 10年生から途中編入の生徒が5分の3近くもあり、生徒の学校生活にそれぞれの節をもたせることなど、いろいろな条件を考えると、わたし個人は、9年生を8年生に続けて1ラウンドとして教育できるシステムの方が現実的だと考えるのである。だがそれは必ずしも4・4制を学校の制度としていますぐ6・3制にもどすということを意味しているのではない。〈※2〉

9年生を8年生に続けて9学年までを1ラウンドとするという主張は、遠藤教頭のいる中学校の教職員に多かった。教育研究、とくに公開研究会に参加してくれる人たちを含めて、全国の教師たちといっしょに同じ土俵で研究を進めていくためには、8年生（中学2年生）までては中途半端で、どうしても9年生（中学3年生）までを1ラウンドとする必要があった。

しかし、学内では4・4・4制継続が主流であり、6・3制の見直しが各所で論じられているときに後退する必要はないというのが大勢であった。一方で、高校の若手教職員が集う「若者会」は、4・4・4制の問題を原点から明確にしていこうと呼びかけていた。

これらのさまざまな論議がからんで、いわゆる「9年生問題」はなかなか決着がつかなかった。

(3) 9年生は中学校へ——鈴木校長の提案

1970年（昭和45）2月、寒川道夫・上川淳・恩地邦郎の小・中・高3校長の辞意表明にともない、鈴木満男高等学校校長が中学校校長・小学校校長を兼ねることになった。3校長から1校長への移行である。鈴木校長は、全園教職員が一致協力して教育経営に尽力することを強く訴えた。

2年後の1972年（昭和47）、鈴木校長は、12年一貫教育をくずすことなく、区切りの問題として、9年生を8年生に続くものとするという校長提案を小・中・高各部に提出した。この提案は各部ごとに検討された上で、5月31日、全園教職員会議にかけられた。全園の会議には学園教育顧問の金沢嘉市氏も出席された。

鈴木校長は二つの提案を行っている。

〈※2〉明星学園PTA会報『道』№80（1968年11月25日）

［提案1］12ヶ年一貫教育の一層の推進を計ると共に、現行4・4・4制の区切りについては、教育上、経営上の両面から検討し、既往にこだわらず常に柔軟な姿勢で対処して行く。
［提案2］現在の中・高の区切りについては、昭和48年度、49年度のいずれかの時期に9・10年の間に移行させる。

提案の理由は下記のとおり。

(1) 4・4・4制の出発当初、比較的僅少であった10年の編入生数が、近年諸般の事情により増大し、それにともない8年から9年への移行によって生ずる環境変化、9年から10年への進学時におけるクラス編成替え等による環境変化が重なるため、8・9年間の区切りについて検討する必要が生じた。
(2) カリキュラム編成上、9年と10年以上の学年では異なった要素があり、その両面を高等部として充実させて行くことは、生徒数の増大等の理由も加わってかなり困難である。それよりむしろ9年については、学年の構成員が同じである8年の延長とし、中・高共同してカリキュラムを整備し、高等部は多くの新入生をむかえる10年をもって新たな出発点とし、10年、11年、12年の3学年の教育内容の一層の充実を計ることが急務ではなかろうか。
(3) 高等部の近年の生徒数増大にともない、施設、設備の面でも飽和状態に近づいている。さらに、来年度の新10年を1学級40名、6学級編成とすれば、現行区切りでは収容能力が限界に達する。

以上の提案を検討した結果、［提案1］については全員一致で承認され、［提案2］については理事会の意見をも勘案した上で校長の結論に一任することが承認された。

その上で、保護者にはその年10月15日付のお知らせで、上記の内容と、来年度から9年生を中等部へ移すこと、そのためのカリキュラム、人事、施設・設備を整備中であることを通知した。〈※3〉

こうして、1973年（昭和48）4月、4・4・4制は廃止された。9年生が移った井の頭キャンパスは明星学園小・中学校、牟礼キャンパスは明星学園高等学校と呼ばれるようになった。



中学校校舎玄関脇の池（井の頭キャンパス）

〈※3〉『明星の年輪―明星学園60年のあゆみ』201～204頁

3　内部進学問題

(1) 基礎学力の問題

4・4・4制の廃止後、高等学校では、のちにみるように新教育課程の編成、学校運営体制の改革を進めながら、自らの実践を再検討するための「教育総点検運動」を行った。その過程で問題になったことのひとつは、内部進学の生徒と高校から入学してくる生徒との基礎学力の差が大きいという問題であった。

1976年（昭和51）、高校は明星学園の中学から進学する生徒について、「高校の主体性において内部進学テストを実施する」ことを提案した。しかし、この提案は中学校側の合意を得ることはできなかった。

次いで1978年（昭和53）、高校は総点検運動の続きとして、明星学園高校の教育課程の履修が可能か不可能かを早期に把握し、内部進学を含めた適切な進路指導の判断資料とするという趣旨で「予備テスト」の実施を提唱した。この予備テストは、英語・数学・国語の3教科の問題を高校と中学校の教師が作成し、11月に実施された。

1979年（昭和54）になると、高校は、これまでの基礎学力や予備テスト等の結果や追跡調査等の資料に基づいて、著しく基礎学力不足の生徒は再度中学において教育してほしいという要望を出した。小・中学校側はこれを受けて内部進学の在り方について検討した。その後、小・中・高校から委員を出して、内部進学協議会が発足した。そして予備テストについては、中・高で英語・数学・国語のテスト問題を作成し、12月に実施することになった。

同予備テストの実施後、高校は中学担任との話し合いを経て、「テストの結果、数名の生徒は高校の課程を履修するのに困難と思われるので、高校進学を認められない」旨を提示した。しかし、内部進学に関して教師間の合意が十分ではない、父母への趣旨徹底が不十分という実情を考え、再度面接することによって全員の進学を認めた。

(2) 内部進学に関する合意

1980年（昭和55）3月12日、恩地邦郎高等学校長と遠藤豊中学校長の責任により、内部進学に関する合意が成立した。この件は同年3月18日の理事会に両校長から報告され、『明星学園報』第2号（1980年4月）を通じて次のように発表された。

> 3月18日理事会において両校長より教育問題に関する報告が行われた。従来中学校より高校への進学に関する取りきめが明確でなかったが、3月12日の両校長の合意のもとに次のような取りきめが行われた。
>
> (1) 1980（昭和55）年度4月初めに内部進学に関する協議会を発足させ、5月末を目途に結論を出し父母にもその結果を公告して、1980年度から協議会の結論にもとづいて、実施できるようにする。
>
> (2) 内部進学に関する協議会の運営とその内容については、内部進学に関する2年間の高校教職員会議の決定を十分に尊重する。
>
> (3) 1980年度から、内部進学の予備テストを12月1日から10日までの間に高等学校が行い、進学の適否を判断し、適当と認められたものを中学校長が推薦する。

(4)小・中学校においては、不合格者を出さないよう学力を高めることにいっそう努力する。なお、具体的内容は5月末に公示する予定である。

(3)内部進学問題のその後

内部進学問題は、その後、ＰＴＡ等の反対運動を引き起こした。〈※4〉また、高校と小・中学校の教職員間に廃止か存続かの論争が絶えず、相互の対立、不信を増幅させる要因ともなった。

この問題の収拾策は、はるか後年、1995年（平成7）になって松井・依田両校長に一任され、終結をみた。〈※5〉



小学校ジグザグ校舎



高校中庭(1983年球技大会)

＜文責：依田 好照＞

〈※4〉『明星の年輪―明星学園60年のあゆみ』206～212頁参照
〈※5〉本誌300頁参照

第2章　1970～80年代の明星

1　小・中学校の実践

(1)教育研究体制の確立

1970年代の明星学園の教育実践は研究体制の整備確立とともにあった。1957年、第1回教育研究集会を機に民間の教育研究団体の成果を取り入れ、全校的にその実践に取り組む学校として実績を積んだ。教師たちは、「今の公教育の教育内容は、羅列的な知識の寄せ集めである」という批判的な意見を持っていた。そして教科を学問や芸術の成果と結びつけて体系的につくりかえ、教育内容を新しく創りだすことに意欲を燃やしていた。民間の研究団体に属し、全国各地のすぐれた教育実践者に学び、科学者、芸術家、教育研究者の協力を得ながら日々実践の質を高める努力を惜しまなかった。

学園の教育の進展にかかわってくださったのは、数学の遠山啓氏、銀林浩氏、国語の奥田靖雄氏、国分一太郎氏、理科の真船和夫氏、玉田泰太郎氏、音楽の園部三郎氏、美術の井手則雄氏、体育の中森孜郎氏、正木健雄氏、英語の渡辺慎晤氏、教育学の勝田守一氏、保護者でもあった金澤嘉市氏、遠山茂樹氏、丸山眞男氏、霜田光一氏、小野周氏、三善晃氏、箕田源二郎氏らであった。

子どもたちの認識の発展を保証するよりよい教科の構造を創りだし、それにふさわしい授業の方法を開拓する必要があった。そのために学内の研究体制の強化が図られた。毎週教科部会を持つ教科もあった。全校で隔週「授業研究」が行われた。1クラスの授業を全教師が見て、授業改善のための議論を行った。教材の提示の仕方はよかったか、子どもたちは意欲的に取り組めたか、出された意見がクラス全体のものになったか、授業は厳しく吟味された。教師たちは教科を越えて学び合った。共同研究の成立である。そして、「実践者であると同時に研究者であること」を自分の信条にしていた。

(2)明星学園小・中学校の方針

4・4・4制の廃止に伴い9年生が井の頭キャンパスに移り、「明星学園小・中学校」と呼ばれるようになった。小学校と中学校の教員組織は一つとなった。遠藤校長、無着教頭の主導のもとで、教材の精選、体系化を重視した教科カリキュラムを作成し、「人間教育の追求」というテーマが打ち出された。1978年秋に発刊された『明星の教育　創刊号』において、遠藤豊校長は教育実践をもとに、小・中学校がめざす教育の理想を語っている。

> 今日の教育は、わずか3、40年まえのそれとはまったくちがった課題のまえに立たされているといえます。高度に発達した産業社会がつくりだした文明汚染と環境の汚染とが、子どもの内的な諸力を侵してしまっています。くわえて、競争と序列づけによる選別の教育が、子どもの人間的な成長を低い段階に押しとどめてしまっています。現代の子どもの無気力、神経症、積極的な意欲や集中力の衰弱などの徴候は、このような害悪のもたらしたものだといってよいでしょう。
>
> これからの教育は、ほんものの科学と芸術的達成とをしっかりと学びとらせることと、積極的な行動の意欲や能力を育てることを統一してすすめるしごとを実現していかねばなりません。

そのことによって、教育のなかに、人間性、全体性を回復することが急務になってきています。（創刊号　刊行のことば）〈※1〉


小学校、民舞「ソーラン節」

「人間教育の追求」と題して掲載された論文は次のような趣旨内容を持っていた。

教育は本来、人間が長い間にわたって創り出し蓄えてきた文化や知識や技術を創造的なしかたで学びとらせることによって、ひとりひとりの子どもを、すぐれた知性と豊かな感情と健康なからだの持ち主に育てることにある。その目的を果たすため、授業は教師が一方的に教えこむというのではなく、教師と子どもがいっしょになって創り出すものである。子どもたちは教材を自分の課題として受けとめ、自分のことばで、自分のからだで表現する。そのことのなかで学び合う。そして、子どものなかに深くしまい込まれていた可能性が引き出され、子どもたちは自分の生き方を創っていくのである。

こうして教育方針を次のように4つ上げ、ことあるたびに具体的な事例をあげて保護者につたえた。

明星学園小・中学校の教育方針

(1) ひとりひとりの子どもを、くっきりとした個性と自由な精神の持ち主に育てる。
(2) 基本的な知識を、より発見的、より形成的に学びとることによって知性をみがく。
(3) 芸術による教育を重視し、表現活動を充実させて感動を豊かにする能力を育てる。
(4) 実践的・実技的な諸活動を強めて、頭とからだのはたらきを結びつけ積極的な行動への意欲や能力を育てる。

教科の編成と週当たり授業時数

小学校

教科／学年	国語	社会	算数	理科	総合	音楽	美術	工作	体育	計
1　年	8		5		2	3	2		3	23
2　年	8		5		2	3	2		3	23
3　年	8		5		2	3	2		3	23
4　年	7	3	5	4		2	2	2	3	28
5　年	7	3	6	4		2	2	2	3	29
6　年	7	4	6	4		2	2	2	3	30

※総合は「生活」の内容をふくむ

中学校

教科／学年	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	木工・工芸	保健体育		英語	特別活動	計
								体育	保健			
7　年	4	4	4	4	2	2	2	3	0	4	1	30
8　年	4	4	4	4	2	2	2	2	1	4	1	30
9　年	4	4	4	4	2	2	2	2	1	4	1	30

授業時数の１単位時間は、小学校45分、中学校50分

〈※1〉『明星の教育』創刊号（1978年8月1日）

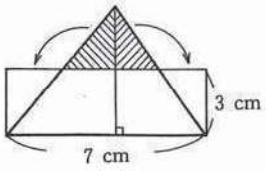
(3) 授業を創る

教師が説明して教える、子どもたちは覚えて、テストで確かめる。こうした授業を明星学園では「授業を創る」とは言わなかった。子どもたちの主体的な学びを保証し、共同して課題に取り組む授業を「授業を創る」と言った。明星学園の授業は、まず、子どもたちが課題に対してそれぞれ自分の言葉で意見をまとめる。そして多様な意見を出し合い、議論をする。自分の意見は共感されたり批判を受けたりする。どの考えが正しいか実験や資料で確かめ、わかったことを整理する。こうした授業を「課題授業」と呼び、明星学園の授業スタイルが確立されていった。ここではそのいくつかの授業例を紹介する。

〈三角形の面積を求める授業〉 算数の授業

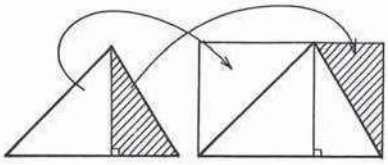
5年生を担任した飯田達彦は「三角形の面積を求める」授業を行った。

まず、子どもたちひとりひとりに1枚の三角形の紙を配り、「今日はこの三角形の面積を求めよう」と課題提示をした。さっそく子どもたちは折ったり切ったり貼ったりして、自分なりの答えを見つけ出していった。およそ15分後、個人で考えるのを中断することを宣言し、意見を出し合うことにした。意見のある子どもは黒板の前で自分の意見を説明した。こんな意見が出てきた。



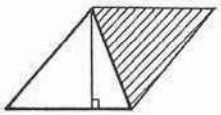
ここをこっちに持ってきて…と説明。

「あ！おんなじ」と声を出す子、「似てるんだけど違う」と言って手を上げる子がいた。その子の意見を、またみんなで聞いた。



「2枚の三角形の一つをふたつに分けて、ならべたらこうなった。2枚分だから後で2で割った。」

「こうやってもできるよ。」「2枚のうち1枚を裏返にしてくっつけるの。そうしたら平行四辺形になったよ。平行四辺形は底辺×高さだからその半分。」



こうして三角形の面積は底辺×高さ割る2であると納得のいく結論に達した。子どもたちは共感したり、工夫したりするなかで、考えを深めていったのである。「発見する」、「学び合う」このことを大切にする授業であった。

〈見出しづけの授業〉 中学の国語の授業

中学校国語科の池田修次から、文学作品の読み方の一つの方法が提起された。この方法はその後の国語の授業を大きく変えた。それまで文学作品の読みは、教師と子どもとの一問一答形式が多かった。この形式では、教師の読み取りに、子どもがついていくことになりがちであった。子どもが積極的に読みに向かい、教師はその援助にまわれないかという授業が模索されているなかで、池田は文学作品を、あるひとまとまり（エレメントという）に区切り、そこにみんなで小見出しをつけていくという方法を考えた。新聞の見出しのように、言わんとすることを短い一文に表すのだ。小見出しをつけるということは、子どもたちにとって、明確な目標があり、だれでも意見を持つことが可能である。「この部分では何が一番大事なことか」と読み取って、見出しを

つけるのである。出された小見出しは当然ながら、友達の小見出しとは違う。それぞれがどこに重点を置いて読んだのか、文章に立ちもどって議論していく。授業では、必ずしも一つの見出しに集約できないこともあるが、議論の過程で読み違いや浅い読みはどんどん修正を余儀なくされていくのである。エレメントは相互に関係を持っているので、読み進むごとに作品の全体像・主題に迫っていくことになる。

「子どもが積極的に読む」といっても、教師の側が教材分析を深めておかないと、授業でよいリードができない。そこで土曜日ともなれば教師が寄り集まって読書会をもち、互いに議論を通して作品の読みを深める作業を行った。

池田はまた、9年生で、大佛次郎の「詩人」という作品を教材とし、見出しづけの授業を展開した。1977年2月、読みを深めた子どもたちの間に、劇にしたいという機運が高まった。卒業制作として「詩人」を劇にすることにし、希望者を募ったところ、なんと80人を超える生徒が手を挙げた。そこで、劇づくりでの役割（シナリオ、演出、音楽、美術、照明、衣装、大道具、小道具）をすべて子どもたちで分担し、劇に取り組んだ。この演劇は嵐のような拍手を受け、子どもたちは深い感動に浸ったのだった。

「マット運動・側転の授業」体育の授業

明星学園の体育は、「からだを動かすことで自分のからだを知る」という大きな目標がある。からだを動かす喜びとは、できる喜びである。「できる」とは、自分のからだを自分の意志で動かせることである。授業では、友達の動きを見ながら、できない原因を探す。できるようになりたいという意思が、意識的にからだを動かすことを導き出すのだ。こうした目標を達成させる教材として、「マット運動」に多くの時間を割いた。技の習得だけでなく、音楽を背景にして連続技を行う表現活動へと進んだ。

体育科の依田節夫は、マット運動「側転の授業」を次のように展開した。

彼は側転ができるまでのステップを綿密に立てる。マット運動の基本は倒立にあるという。逆立ちすることで、自分の体重を腕で支える感覚をつかむことができるし、自分の体重がどのように移動していくのか感じることができるからだ。

側転を始めるとき、マットに手の位置を赤いチョークで描く。練習をするとき、目に見える目標になる。早くできる子どもが必ずいる。また、重要な点を見落としているために、できない子どももいる。子どもたちの様子を見ながら、1時間、1時間、目標を定める。そして、その目標に関わった動きをしている子どもを見つけ出す。側転の場合、手のつき方がわかったら、次は最初につく足の着地が問題である。できない子どもは足が腰を受け止められなくて、倒れてしまうのだ。



マット運動

子どもたちを集める。そしてできない子どもを指名する。依田は言う「わたしは平気でできない子どもをみんなの前にひっぱりだす。しかし、そのとき必ずみんなの見ている前で、できるようにさせる。そのことによって、できていく過程を知り、みんなが課題を持って、意識的に練習するからだ」と。こうして、できる子どもを次々と増やしていく。できないのにみんなの前に引っ張り出された7年生の中桐君は、作文でこう書いている。

ぼくはこの間まで側転ができなかった。この間、できるようになったんだ。…中略…

この間の体育の時間だった。先生は前から側転をやると言っていたから、僕はいやだなぁと思っていた。そして予想通り、体育の授業で側転をやることになった。僕はおそるおそるやってみた。やっぱりできなかった。と、同時に、先生は「はーい。あつまって」と声をかけた。僕は「あー、しまった」と思った。

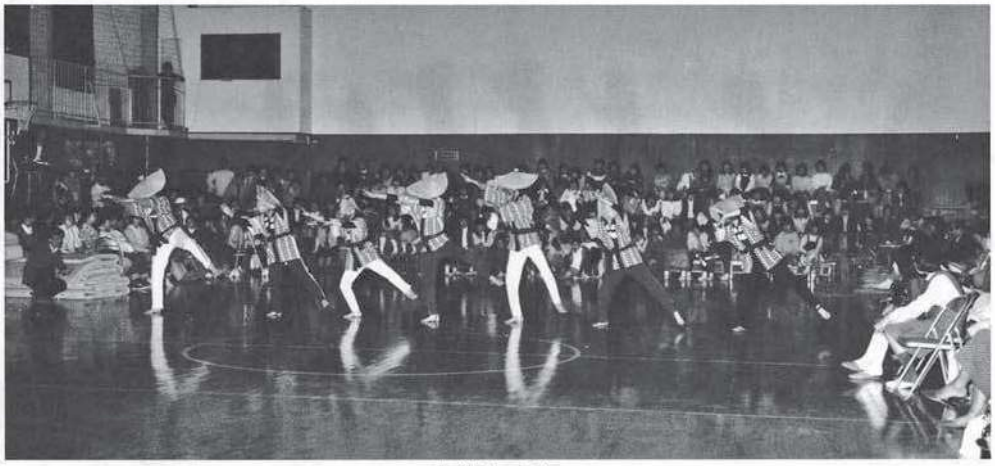
僕の予想は大当たりだった。先生はみんなを集めると、「中桐ちょっとこい」とぼくを呼び、できない側転をやらせた。先生は、着地の足の向きが反対だということを教えてくれた。そして、次に補助してくれた。側転をやらせると、ちょうど逆立ちの状態でぼくを止めて、足をつかみ、正しい方向に変え、ゆっくり立たせた。

ぼくはそのとき、すごく不思議な気がした。ぼくはもう一度同じことを繰り返してから、補助なしでやってみた。手をつくと、また、不思議な感じがして立った。ちゃんと立っていたのだ。

先生の顔を見たらにこにこして「もう一回やってみる？」といった。ぼくはもう一回やってみた。そしたらやっぱり不思議な感じがして立った。胸がドキドキした。はじめはできなくてドキドキしていたのに、側転ができたドキドキだった。そのことが不思議だったのだ。

はじめ、先生に呼ばれたとき「あー、いやだなぁ」と思っていたのに、その後3分でぼくは側転ができるようになった。今は「先生に呼ばれてよかった」と思っている。

このように、自分の言葉で、自分の体で表現すること、友だちと学び合うことを大事にする授業が展開された。授業は子どもを変える。そのためには、技の本質を理解し、がんばる子どもたちをよく見る目をもつことが必要である。教師もまた1対1で格闘しているのだ。



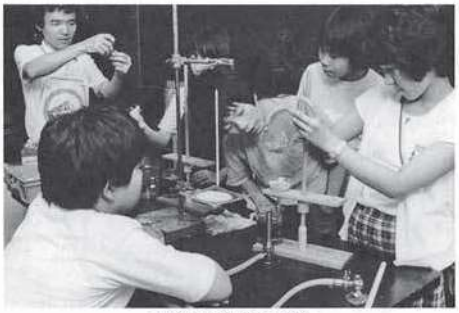
中学生の民舞

(4)『明星の教育』

明星学園の小・中学校の教育実践は、1年に1冊刊行される『明星の教育』として、多くの人に報告された。1号から4号の目次を紹介する。

明星の教育 創刊号 目次 1978・秋

人間教育の追求 …… 遠藤 豊
1年生を教えるなかで
くずさないとひけないよ ——くりさがりのあるひき算—— …… 佐藤 文夫
チョッキづくり …… 柳沢 茂美
1年生と体育 …… 依田 節夫
マット運動 …… 根本 美愛
特集 教育における表現の問題
「みて描く」授業から「自由表現」への実践 …… 太田 幸雄
合唱をつくる—— 音楽教師としての二年間—— …… 大友 昭
音楽と私と明星と …… 埴原 美枝子
身体表現の教科としての体育 …… 依田 節夫
「詩人」の授業と演劇 …… 池田 修次
理科授業論メモ
書くこと・綴ることをめぐって …… 玉田 泰太郎
玉田さんの実験室をたずねて—— …… 和田 武久
続・化学指導ノート
原子記号・分子式・化学反応式の指導 …… 三井 澄雄
算数指導ノート
かけ算のイメージとシェーマ …… 松井 幹夫
旅は道づれ世は情（木工の教育） …… 山内 国任
織物の授業 …… 井上 紀子
連載 詩の授業（1） …… 無着 成恭
フランス革命を教えて …… 川手 晴雄
オーケストラとあわせて …… 遠藤 春幸
検流計をつくる …… 和田 武久
生徒の作品・科学の家族 デーヴィッドの贈り物 …… 牛尾 友美



中学校理科の授業



中学校美術の授業

明星の教育　第２号　目次 1979・秋

「明星の教育　2号」のはじめに …… 遠藤　豊

特集　教材の新しい構成と展開

教科の可能性・授業の可能性 …… 遠藤　豊
英語ぎらいをつくらない授業を …… 塚本　ふさ
動物とたまご ――分類の授業―― …… 和田　武久
立体づくり …… 一瀬　清
図形教材の新しい構成 …… 野沢　茂
〝ものつくり〟の授業 …… さとう　ふみお
世界地理をどう教えるか …… 川手　晴雄
運動量で動力学を教える …… 遠藤　豊

指導ノート

算数　算数マラソンの苦しさと楽しさ
――習熟過程の一つの方法―― …… 松井　幹夫
国語　1、2年生のための文法の授業
名詞の指導をめぐって（1） …… 須田　清
技術　木工の授業 …… 山内　国任
1年生のよみ・かき …… 柳沢　茂美
音読から朗読へ ――「あか」の授業から―― …… 杉谷　繕子
ひとりひとりのよさをみとめあう教室を ――学級づくりの記録―― …… 一瀬　清
演出する子どもたち　ドキュメント「第16回公開研究会」 …… 依田　節夫
連載　詩の授業（2）　草野心平の「春の歌」 …… 無着　成恭
口絵の解説 …… 太田　幸雄

明星の教育　第３号　目次 1980・秋

特集　小学校　前期の教育

豊かな体験と感覚の中の論理を …… 遠藤　豊
総合的な教育を実践する …… 横森　サチ子
『コイ』の教材づくりと指導計画 …… 辻木　猪一郎
『面積』をこう教えた …… 柳沢　茂美
M君の絵について ――子どもの表現におけるリアリティー―― …… 鈴木　五郎
対談「うたと1年生」 …… 秋野　憲治・柳沢　茂美・横森　サチ子
物語『モチモチの木』の絵について …… 吉田　登
にっぽんご(1)「もじのほん」と検定教科書 …… 須田　清

指導ノート

算数　通分と最小公倍数 …… 松井　幹夫
技術　木工の授業 …… 山内　国任
英語　単語から句そして文へ ――入門期の英語教育―― …… 江本　清弘

授業と子ども

子どもと教師と教材のであい ――絵が描けた―― …… 太田　幸雄
『ぼくは報道する』をこう読ませた …… 古川　博資
7年生の音楽と教材 …… 遠藤　春幸
『省エネのり』 ――デンプンの授業から―― …… 佐藤　文夫
授業と表現 …… 木幡　寛

教室から

松村君の成長の記録 …… 9年　松村　高宏
理科マンガノート …… 生徒
作文 …… 生徒
学級通信から …… 一瀬　清

みどりがめはどこにいるのがしあわせか ……横森 サチ子
私の授業
温度と熱 ……和田 武久
側転の授業 ……依田 節夫
発音とローマ字を教えて ……無着 成恭
運動力学をこう教えた ……山本 豊
連載 詩の授業(3) ……無着 成恭
今 授業をつくるとは ……遠藤 豊
口絵の解説 ……太田 幸雄

明星の教育 第4号 目次 1981・秋

口絵の解説 ……太田 幸雄・重吉 起佐子
特集 子どもが深く学ぶ授業を求めて
授業の可能性について ……遠藤 豊
よろこびのある授業をめざして ……横森 サチ子
授業における課題と自由表現 ……太田 幸雄
木を彫る ――実材ととりくんで―― ……重吉 起佐子
「正負の数」の授業 ……大友 裕市
「圧力と分子運動」の授業 ……山本 豊
「コイ」の授業 ……辻本 猪一郎
失敗した授業に学ぶ ……一瀬 清
指導ノート
国語 品詞の指導について ……須田 清
算数 倍数メガネの活用法 ……松井 幹夫
理科 バランスボールをつかった実験 ……和田 武久
体育 マット運動 ……人見 進夫・依田 節夫
授業と子ども
9年生と組曲へのとりくみ ……遠藤 春幸
理科のノート「金属の酸化」 ……6年 雨宮 一朗
合唱をつくる ……源田 俊一郎
生徒の感想を大切にする授業づくり ……古川 ひろし
教室から
大小数物語 ……木幡 寛
生物のレポート「さかなの食事」 ……7年 八幡 麻衣子
作文集から ……3年1組
「わらび座」体験旅行 ……9年生部会
授業研究
「課題」の適確な設定と「授業」 ……佐藤 文夫
連載
よしのずいから…… ――木工の授業―― ……山内 国任
「課題」としての「自分の名前」 ……無着 成恭

(5) 公開研究会

「教育は公開を原則とする」と考えていた教師たちは、日常的には保護者に授業を公開したが、年に一度全国の教師・研究者を対象に公開研究会を続けていった。

第1回から第13回までは教材の内容構成と授業の方法を中心に研究会を持った。

そして1976年、第14回公開研究会から、授業公開とともに朗読、合唱、民舞など、児童・生徒たちの表現活動を公開した。グラウンドでは「ソーラン節」「さんさ踊り」「春駒」などの民舞が発表され、体育館では中学生女子による平安時代の発音による「竹取物語」が朗読された。中学生全員460人による大合唱も披露された。

そして翌1977年、第15回は、生徒たちが主体的にかかわる公開研究会になった。表現活動に参加することにとどまらず、生徒の実行委員会を結成し、役割分担をして教師とともに公開研究会に臨んだのであった。

翌1978年、第16回では、1日目に授業公開・分科会があり、2日目は生徒主体で行う表現活動の発表があった。体育館では理科の授業「運動力学」をどう学んだかの発表があり、体育の授業「マット運動」の発表もあった。午後は「ソーラン節」「都南さんさ」「越中おわら」「春駒」の躍動感ある民舞が校庭で行われ、のち会場を体育館にうつして、学年合唱、全校合唱が披露された。音楽教師・大友昭の指揮による「グローリア」「沖縄」などの大合唱には、驚きと感動の大拍手がわきあがった。北は北海道、南は沖縄からも教師が参加し、その数約1,600人、体育館に入りきれないほどだった。感動の余韻で参加者は立ち去りがたく、生徒たちは達成感に沸いた。教師と子どもたちに一体感が生まれた日でもあった。第16回公開研究会の要綱を紹介する。



全国から参加した人たち

第16回……1978年11月11日～12日

明星の公開研究会も16回を迎えることになりました。

わたしどもは科学と芸術とを教育のなかでしっかりと結びつけることによって、すぐれた教材を開拓し、より高い授業や行事をつくりだすようにつとめてきました。そして、知性と表現力の豊かな子ども、学ぶことの喜びやすばらしさを感じとれる子どもを育てようと力をつくしてきました。また、実践的・実技的な諸活動を強めて、手と頭のはたらきを結びつけ、積極的な行動の意欲や意志の力をのばしていくようにつとめてきました。そのことによって、真の意味の「人間教育」を、この地上に表現したいと希っているのです。

わたしどもの実践はまだまだ不十分なものですが、ことしもつぎのようなやり方で実践を公開し、みなさんの批判と検討をうけることにしました。どうぞ多数ご来会くださいますようご案内申しあげます。

テーマ　「人間の教育」の追求
日　程

日　時	9:30		10:30 11:30	12:3013:30		16:30
11日(土)	受付	公開授業	公開授業 分科会	昼休み	教科別・学年別分科会	
12日(日)	受付	全体会(教師と子どもの発表)			全体会(表現活動の発表)	懇親会

分科会（11：40～16：30）

分科会	提案・実践報告	講　師	司会者	会　場
小学校前期の教育	①かけ算のシェーマ（松井幹夫） ②物つくりと教育（佐藤文夫） ③低学年の工作（吉田登） ④マット運動（根本美愛） ⑤合唱指導（秋野憲治） ⑥図画（鈴木五郎）	横森さち子（山梨・貢川小） 栗岡英之助（大阪・清高小） 小島靖子（八王子養護学校）	鈴木五郎（跡見女子大）	明星台 幼稚園
国語	①ごんぎつね（杉谷縉子） ②大きな白樺（時任重孝） ③電報（佐伯昭定） ④くるみ割り（池田修次） ⑤峠（無着成恭） ①にっぽんご４の上　指導法（30時間で教えるには）（内藤哲彦）	国分一太郎 篠崎五六	無着成恭 須田　清	体育館
社会	①授業を通じて子どもの意識がどう変ったか（依田好照）	入江敏夫（東経大） 本多公栄（歴教協）	野口　淳（明星学園高）	7-1
算数・数学	㊎幾何の指導体系について（遠山啓） ①小数のかけ算（松井幹夫） ②図形（飯田達彦、伊藤迪） ㊥幾何の指導体系について ①多面体（村岡篤） ②投影図（百瀬弘） ③円（野沢茂）	遠山　啓（数教協） 銀林　浩（明治大）	砂賀嘉治 白石勲司（法政一高）	図書室
理科	理科の授業づくり 運動力学をどう教えるか（和田武久）	小野　周（東大） 三井澄雄（浦和工高） 中村敏弘（宮城教育大）	玉田泰太郎（長谷戸小）	理科室Ａ
音楽	合唱の授業をどうくみたてるか（大友昭、遠藤春幸、秋野憲治）	埴原美枝子（山梨・芦安中）	大友　昭（明星学園中）	小音楽室
美術	空間描写における諸問題（久保島信保） 自由表現（太田幸雄）	井手則雄（宮城教育大学）	小武海正司（正則高）	㊥美術室
保健・体育	マット運動における子どものつまずきと指導法（依田節夫、根本美愛）	川野　洋（東京航空大） 中森孜郎（宮城教育大）	人見進夫（明星学園中）	㊥音楽室
工作・工芸・技術	技術・工芸・工作科の内容と実践の展開（山内国任・岡本紀子）	正木健雄（東理大） 池田三四郎（㈱松本民芸家具）	山内国任（明星学園中）	工芸教室
英語	入門期の英文法（大草繁、塚本ふさ）	佐々木達夫（岩手大）	斎藤省三（開進一中）	8-1 教室

2日目の日程と内容

①教師と子どもの実践報告と発表（9:30 ～ 12:30）

種目と内容	発表者・報告者
「人間の教育」の追求	遠藤 豊（小・中学校長）
物つくりと教育	佐藤文夫・山内国任・井上紀子……（小学校前期）
運動力を学ぶ	9年の子どもと理科・数学の教師
マット運動を中心に	1・2・3年と9年の子ども
合唱	1年・2年・3年の子ども

②表現活動の発表（13:30 ～ 16:30）

種　目	内　　容	担　当　者
民　舞	3年、7年「ソーラン節」8年「サンサ踊」9年「越中おわら節」などの発表	体育及び学年の教師
合　唱	4年～9年までの子どもの学年合唱、学級合唱、詩の朗読、及び全体合唱	音楽及び学年の教師



遠藤豊小・中学校長



無着成恭小・中学校教頭

(6) 評価のあり方を変える

1976年3月、教職員の合宿研究会で、遠藤校長は評価の在り方を変えるという提案をした。それから2年の時が流れ、1978年3月、学期末に出していた5段階の成績表を変更するということが運営委員会より提案され、了承、実施されることとなった。

子どもの成績を点数で評価することは、子どもを点数で序列化し選別することにつながると考えた。段階評価の成績表は「学習の記録」にとって代わった。各教科での子どもたちの自己評価に、教師は時間をかけて文章評価をし、それを合わせて綴じて表紙をつけ、「学習の記録」にしたのである。日常的には「学習ノート」を教師と子どもの交流の場とし、学習状況を知る資料に位置付けた。以来、親や教師の間で異論もあり、形式の変遷はあったものの、「学習の記録」という評価方法は長く続いていくこととなった。

＜文責：一瀬 清＞

2 高等学校の実践

(1)「4・4・4制」の廃止

1968年（昭43）から表面化した「9年生問題」は中学校から提起された。9年生を中学校キャンパスに位置づけ、9年間でひとまとまりとして再編成することは、公立学校と共通の区切りにすることで、教育研究を進めるねらいもあった。

当時、若手教職員たちは「若者会」に集い学園の活性化を図っており、他にないユニークな4･4･4制を支持する意見も多かった。しかし全体から見れば、4・4・4制の存在意義が教職員の共通認識となっていない弱点があった。

学内対立の収拾のため学園一校長体制をつくり、鈴木満男校長のもと、高校では教育課程小委員会が、自由度の高い選択制導入を中心としたカリキュラム改革の検討を始め、以後の教育課程の方向性を定めていくこととなった。

高校側は学内での混乱を忌避して、3年間の教育体制確立に力を注ぐべきとの意見が大勢となり、高校部会にて9年生を中学校キャンパスへ移すことを決議し、1973年（昭和48）をもって4･4･4制は廃止されることとなった。

(2) 高校の改革

1) 新教育課程（1973・昭和48年）の編成

教育課程の検討は、1970年（昭和45）に起きた「全中闘事件」（下記参照）の際に行われた全校的なクラス討論において、生徒からの教育内容に対する批判や提起を受けとめることで、質的変化を遂げた。生徒の興味や関心とは無関係な画一的な授業を変えていく努力が始まった。先進的な都立上野高校での改革から学びつつ、3か年の検討の末、明星独自の教育課程編成表（次ページ）として結実した。このカリキュラムは、

① 必修授業の削減、教科内容の精選
② 選択授業の維持・強化
③ 10年生ではクラス授業を中心に、学年が進むにつれて漸次選択授業を多くしていく

という3本柱（原則）が確認された。さらに選択授業もその内容と形態から必修選択、演習、講座の3種類を設置した。演習や講座についてはその後、学年の枠を取り払った複数学年制（ノングレード）を取り入れた授業も生まれた。

「全中闘事件」
1970年、安保条約自動延長に反対する運動が学生中心に広がった。学生運動内の一派閥である「革マル」系学生中心につくられた「全国中央闘争委員会」（略称・全中闘）が、明星高校内にも組織された。6月、「全中闘」主催決起集会の会場とし高校の体育館を貸してほしいとの要望をめぐり学内で議論となった。学校側は拒否し、生徒・自治会でも議論の結果「集会延期」を要請することとなった。しかし、「全中闘」側は納得せず、当日、高校正門前に多くの学生たちが集まり、鈴木満男校長の制止を振り切り一部が乱入したが、「全中闘」代表と学校・生徒自治会が話し合い、集会は中止となり事態は収拾された。

教科課程編成表（1973・昭和48年度） 明星学園高等学校

	高1		高2（予定）				高3（予定）			
	必修		必修		選択		必修		選択	
	科目	単位	科目	単位	科目	単位	科目	単位	科目	単位
国語	現代国語	2	現代国語	2			現代国語	3	現代国語	1
	古文	2	古文	3					古文	3
									文学史	1
									漢文	1
社会	日本史	4	日本史	3			日本史	3	日本史	3~4
	世界史		世界史				世界史		世界史	
			地理				地理		地理	
			政治・経済	2			倫理・社会	2		
数学	数学Ⅰ	6	数学Ⅱ	5	数学	2			数学Ⅲ	6
									数学	4
理科	物理Ⅰ	3	物理Ⅰ	3	物理Ⅱ	3			理科Ⅱ	3~6
	化学Ⅰ		化学Ⅰ		化学Ⅱ				物理	2
	生物Ⅰ		生物Ⅰ		生物Ⅱ				生物	2
			地学Ⅰ						化学	2
保・体	保健	1	保健	1						
	体育 男	4	体育 男	4			体育 男	3		
	体育 女	2	体育 女	2			体育 女	3		
芸術	美術史	1	美術Ⅰ 絵画	2	美術Ⅱ 絵画	2			美術Ⅲ 絵画	4
			デザイン		デザイン				デザイン	4
			工芸							
	音楽	1	音楽	1	音楽Ⅱ 歌唱	2			音楽Ⅲ 歌唱	4
					理論	2			理論	4
外国語 英語	講読	2	講読	2			講読	2	講読	2~4
	文法	2	文法	2			文法	2	文法	2~4
	作文	2	作文	1						
家庭	一般家庭	2	一般家庭	2					食物	2
									被服	2
	ホーム・ルーム	1	ホーム・ルーム	1			ホーム・ルーム	1		
単位計		31		29		2~3		19		8~15
総単位数（必修クラブを除く）										89 ～ 99

講座科目名一覧表

屋内球技	囲碁	近代日本文学	児童文学（英）
屋外球技	将棋	中世日本文学	英文講読
軟式テニス	連珠	児童文学	音楽の世界
硬式テニス	落語	地域史研究	バロック音楽
卓球	自動車	社会科学	美術講座
ゴルフ	手芸	教育	デザイン
剣道	華道	地域史	哲学
器械体操	料理	学校周辺の自然	日常の経済
	園芸	PSSC物理	
		CBA化学	

必修クラブ活動（本校では従来のクラブ活動との混乱をさけるため講座と呼ぶ）
本年度は高1のみ必修、高2・高3は希望者だけ

2) 運営委員会体制と教育研究部の新設

1974（昭和49）年度3学期に、カリキュラムを実践し発展させていく上でも不可欠な新たな学校運営の改革が提案され、実施された。それまで数人のみで担当していた学校運営の各分野に、全員が所属する専門部体制が生まれた。

教務・総務・生徒指導・募集対策・進路指導部に加えて教育研究部が新設された。専任教員は各教科とともにいずれかの専門部に所属することとなり、これにより一人一人が授業と学校運営の両方に責任を持つ組織とした。専門部の各部長＝運営委員が選挙で選出され、校長・教頭の下で運営委員会を週1回定例化して方針を作成し、高校部会に諮って教育実践を進める、民主的な学校運営をめざした。

明星のみならず、総じて高校では教師の専門分野が細分化され、いわば「一国一城の主」として共同での教育研究が成立しにくい状況があった。教育研究部の新設はそれを克服するべく「教育研究の組織・推進」を掲げて活動を展開した。

教育研究部での検討を基に、学内研究会が1975（昭和50）年度から1980（昭和55）年度にわたり計12回開催された。研究会準備のための「討議資料」や研究紀要『明星の高校教育』も発刊され、一定の教育研究のスタイルが定着した時期であった。

5年間の研究会テーマ

1975年度	(1)	7月	明星の高校教育について
	(2)	9月	私たちの目ざす生徒像
1976年度	(1)	6月	明星高校におけるカリキュラムの問題点
	(2)	6月	生徒の置かれている現状に教師はどう対応しているか
	(3)	9月	カリキュラムの自主編成をどうすすめるか
1977年度	(1)	6月	①第１回基礎テストのまとめ
			②教育総点検運動について
	(2)	9月	教育総点検運動中間報告
	(3)	11月	生徒の学習習慣をいかにつけるか
1978年度	(1)	4月	①明星学園創立の精神(理念)とその現代における役割
			②評価の問題
			③上川、堀両先生のお話
1979年度	(1)	9月	各教科、各科目の年間計画と授業実践の検討
1980年度	(1)	4月	①行事について
			②カリキュラム問題について
	(2)	7月	カリキュラム再編成いついて

3) 生徒指導と教科外カリキュラム検討

研究会の中でも生徒の学習意欲の低さ、遅刻や怠学、生活指導上の問題（飲酒・喫煙）等の克服が何度も取り上げられた。特に、教師によって指導や対応がばらばらで生徒からの不信感が強いことが指摘された。こうした検討の最中、1975年（昭和50）5月、一人の女子生徒を学校近くの森へ呼び出し、同学年の女子数人が集団でリンチを加えるという教師・生徒とも大きな衝撃を受ける陰惨な事件が起きた。加害生徒には厳しい指導が行われた一方、教師は自らの反省点も含

め深夜まで及ぶ長時間の緊急部会を行い、検討内容を一斉ホームルーム等で全生徒に説明することとなった。

生徒に配布された当時の生徒指導部長であった高橋昭八起草の文章は、全教師の討議を踏まえ、暴力を許さない決意を示すとともに、管理強化でない指導を進めようとした明星教育の原点を示すともいうべき一文であった。

真の自由を保障するために　　明星学園高校生徒指導部

今回の事件をふりかえりながら、将来有為な生徒諸君を多数事件にまきこませてしまったことについて、教師一同、深刻な反省をしています。それは、この学園で、自由で安全な生活を、といって生徒諸君をおあずかりしたのに、これを全く逆の結果に導き、生徒・父母を裏切ることになってしまったからです。

いわゆる明星の自由が一部放縦に流れ、人間の自由や尊厳とは正反対の種類の事件を生み、しかもそれに関係した諸君は、一人ひとりすばらしい未来をもつ青年であることが苦痛に耐えない点なのです。

一人ひとりはすばらしい生徒であり教師である明星という一つの集団が、このような事態を生み出した原因は何なのでしょうか。それぞれ個としてはすぐれていても、組織・集団として自由を保障していく力が弱かったといわざるをえない状況がそこにあったに違いないのです。

われわれは自由を保障するためのルールを持たなかったのではありません。「よりよい学園生活のために」というルールを持っていました。誠実にして力あふれる若者の、学園生活に参加する全員が、それぞれの全力量をかけた生活をするために、集団として守らねばならぬルールだったのです。

このルールが、あってなきが如き様相が部分的に生ずると、次第に方向は見失われ、学問・精進の生活とは無縁な光景が生まれました。遅刻、服装、上ばき等、一見ちっぽけに見えるルール無視が、次第に他人の迷惑になり、他人の自由を奪う、いろいろな暴力となりました。明星の自由のすすり泣きが聞こえるようです。

しかし今、明星の生徒と教師にとって、大切なことは落胆ではありません。今手にしている明星の自由を守っていく仕掛けをフルに発動させることです。

毎朝、遅刻なしにさわやかに登校する。このスタートから、最後の授業、クラブ活動まで、自律的な集団のルールで一貫させる。他人の迷惑になる、あらゆる形の暴力を一掃する。これはいわば心の革命であり、日常生活のすばらしい変革を生み出す力をもつはずです。

教師一同は、事件→なおざりの注意→また事件、の逃げ道のない循環を断つ決意をしました。

さあ、生徒諸君。ともに起ってあらけ、暴力から真の自由の満ちあふれる明星を作り出す努力を、今日から始めようではないか。

一方、教科外カリキュラムとしての行事（修学旅行、体育祭、明星祭、音楽祭など）についても生徒指導部を中心に検討が加えられて、1977年（昭和52）の総点検運動において、新たな構想を作成していった。

(3) 新校舎建築と教育総点検運動

1) 基礎学力問題

老朽化した木造校舎に代わる念願の新校舎は、1976年（昭和51）着工、翌年の春に完成した。先進的な教科型を構想して設計されつつ、完成間近の部会討論で従来型のホームルーム教室を残すこととなった。新たにＬＬ教室と、選択授業（演習・講座）のための各ゼミ室がつくられ、新しい語学授業や少人数選択授業などが可能になった。これらの新しい形式の授業展開が、高校の特色を作り出していった。


高校、英語の授業

一方では4・4・4制廃止後、高校では内部進学生と高校からの入学生との基礎学力の大きな差が問題となった。背景として4・4・4制時代には、9年生の1年間を高校の学習に取り組むための準備期間とし、10年生からの入学生との学力差を縮小させ、高校の授業形態に慣れることができたが、4・4・4制廃止と私学ブームによって受験者数が急激に増えた時期とが重なったこともあり、内部生と外部生の学力差がより顕著になったことがあげられる。高校から中学校側へ「内部進学テスト」の提案がなされた時期でもあった。

大学側の共通1次試験（センター試験の前身）が実施されようとしていた前年の1977年（昭和52）、高校では英・数・国・理・社5教科の基礎学力テストを実施した。その結果、各教科で改めて予想以上に基礎学力がない現状がわかった。日常の学習、家庭学習の習慣を身につけさせる必要ありとの報告がなされた。

2) 教育総点検運動

同年秋、運営委員会からこうした状況の下で、全専門部・教科での現状分析と改革方向を検討すべく「教育総点検運動」が提案され実施した。短期間で成果を得ようとしたが「内部進学問題」が深刻化した時期でもあったため、各分野での点検の視点や分析の深さがバラバラで、十分な結果を収められなかった。しかしこの取り組みが、指導要領改訂を機とする新教育課程作成に生かされていった。

(4) 新教育課程（1984年度実施）

1) 新教科カリキュラム

混乱した時期であったが、指導要領改訂にともなうカリキュラムの検討は4年間に及んだ。中野光（あきら）和光大学教授、田代三良（さんりょう）氏（元都立戸山高校教諭、岩波新書『高校生』1970年刊著者）を講師に招くなど、学力向上の課題と明星の特色をどうカリキュラム上で結合させていくかを主題に検討された。その結果、1973（昭和48）年度の選択制を発展させた新カリキュラムが、1984（昭和59）年度から実施された。

明星学園高校の教育課程について（1984年度「明星学園入学案内」より）

本校の教育課程は、生徒が自主的に勉強していくにはどうしたらよいか、という考えが基本になっています。自主性の育成が、同時に教育の目標にもなるわけですが、生徒諸君が積極的に進んで勉強するということを中心にして、必修と選択の授業でそれを追求しよう、というのがこの課程の大きな構造です。ですから、諸君は、必修と選択の授業を取得して、11年（高2）、12年と進む課程で、どんどん成長してほしいと思っています。以下高校の授業とはどういうものなのかを、順を追って説明します。

≪授業の形態について≫

1　必修授業

これは、ある教科の基礎になる内容で組み立てられる授業です。例えば、国語なら、教科の内容として、文章表現・現代文・古文・漢文等がありますが、本校の必修国語では、それらの分野の基礎になっているものがすべて含まれて構成されています。ですから、必修国語は、11年・12年と進むに従って、国語の選択科目としてある文章表現・現代文その他のすべての選択教科の基礎になっているので、必修国語でしっかりと、文章の読み方や理解のしかた、あるいは表現のしかたやこころを養っておかないと、のちのち支障をきたすことになりますから、きちんと取組みましょう。

こういうことは、すべての教科にあてはまることです。必修の授業とは、明星の高校に入学したすべての生徒がクラス全員で学習に取組んで、将来自分で発展させるように必ずものにしていく授業と考えていて下さい。

2　選択授業

ある教科の基礎が固まったら、その基礎のうえに、どんどん発展しなければなりません。教科の内容は、幅広く深いもので、段階をふんで、系統的にやってゆかなければならないからです。これも例を挙げて説明します。

社会科では、現代社会を必修としています。現代社会の内容は地理と近現代史で組み立てられ、この世界の社会が、空間と時間から成り立っていることを学習したあとこんどは、専門的に、いわゆる世界の歴史や日本の歴史、社会そのものを対象とした社会学や、人間の考え方を学ぶ哲学などに発展させて学習します。それらを各自が選択して、系統的に学習していく科目が、選択授業です。

3　自主選択

この選択は、教師の指導もありますが、基本的には、生徒が自主性をもって授業を形成することを、大きな特色としています。生徒も自主的、教師も自主的に取り組む授業、これはどんな授業でもそうで当り前ですが、それを強く自覚して進取する姿勢が望まれるのがこの選択です。

内容は、教科の発展したもので、必修や選択では触れられないもの、範囲の特殊なもの、興味のあるもの、専門的なもの……等々、深く自主的に追求する授業です。

このように、広く深く様ざまな形で、“学習”を形成してゆけるのが、わたしたちの私立の高校のよさでもありましょう。学習を通して、教材をなかだちとして、教師と生徒との関わりが生まれ、ともに学習に対して自立した姿勢を確立してゆこうとするのが、その目ざすところです。

学習課程一覧表（1984・昭和60年度実施）

学年	10年（高校1年）		11年（高校2年）		12年（高校3年）		自主選択
	必修	選択	必修	選択	必修	選択	
国語	国語Ⅰ 4		国語Ⅱ 2	国語表現 2		国語表現 2	現国講座 2
				現代文 2		現代文 2	古典講座 2
				古文 2		古文 2	基礎国語 2
						漢文 2	受験現国 2
社会	現代社会 2		日本史 2	世界史 2	政経 2	世界史演習Ⅰ 2	哲学 2
	世界史 2			日本史 2		日本史演習Ⅰ 2	地域史 2
				倫社 4		倫社演習 4	
				地理 2		地理 2	
						日本史演習Ⅱ 4	
						世界史演習Ⅱ 4	
数学	基礎分析 3		基礎分析	代数幾何 4		微分積分 2	基礎数学 2
	数Ⅰ 2		及び数Ⅰ 3			数学演習 2	数学演習 2
						（理系）	確率数Ⅰ 2
						数学演習 2	
						（文系）	
理科	理科Ⅰ 3		理科Ⅰ 3	化学 4		物理 4	物理実験 2
				地学 4		化学 4	化学実験 2
						生物 4	生化学実験 2
						地学 4	天文 2
							生物 2
体育	体育 3		体育 3		体育 3		バスケット(男・女) 2
	保健 1		保健 1				ソフトボール 2
							ソフトボール 2
							ハンドボール 2
							剣道 2
芸術	美術史 1			デザイン 2		デザイン 2	美術一般 2
				絵画 2		絵画 2	油絵 2
						美学技術 2	版画 2
						美術一般 2	オペラ 2
						作品鑑賞 2	鑑賞 2
	合唱 1			歌唱 2		歌唱 2	合唱 2
				器楽 2		器楽 2	音楽史 2
				音楽一般 2		音楽一般 2	
						音楽史 2	
生活	生活 2			被服 2		被服 2	華道 2
				食物 2		食物 2	染色 2
				家庭一般 2		家庭一般 2	女性史 2
							手芸 2
							料理 2
外国語	英語文法 3		英語文法 3	英語演習 2	英語文法 3	英語演習 2	英作文演習 2
	英文講読 2		英文講読 2		英文講読 2		英会話 2
							国際英語 2
							基礎英語 2
							スエーデン語 2
							中国語 2
HR	1		1		1		1
学年計	30		20	2 × a	11	2 × a	2 × a
	30 + 2 a		20 + 2 a		11 + 2 a		
計	80単位以上						

2）学年単位の実践の展開――合宿旅行

高校では「総点検運動」の中で検討された行事の改革がすすんだ。とくに正・副担任12人の学年教師集団がそれぞれの分野を担当し計画・実施した合宿旅行は、毎年魅力ある内容となっていった。

高校合宿旅行一覧

年度	10年生				11年生		
	入学時オリエンテーション	担当・引率	秋合宿	引率	夏・秋合宿	引率	備考
	全体または各ホームルームにて、高校集団生活の規律、教科概要等	各担任 学年主任			(7/17-28) ホームルーム別 ①能登・金沢 ②四国 ③東北 ④上高地 ⑤佐渡 ⑥上高地・高山	堀 / 加賀谷 / 鈴木（雅）/ 安部 / 土屋 / 山田 / 井部 / 斉藤 / 工藤 / 上川 / 松本 / 清水	
1975 （昭和50）	〃	〃			(7/21-26) ホームルーム別 ①能登・金沢 ②立山黒部・飛騨 ③四国・倉敷 ④津和野・萩 ⑤能登・高山 ⑥高山 費用¥20,000	高橋（昭）/ 松本 / 鈴木 校長 / 井口 / 木原 / 加賀谷 / 溝口 / 葛城 / 清水 / 黒川 / 高橋（幸）/ 大平 / 斉藤 / 内藤 / 吉川 / 竹内	
1976 （昭和51）	〃	〃			(9/1-9) 2班編成 飛騨高山合宿 ・地域学習 ・全員が係・仕事を分担 費用¥35,000（内¥10,000は積立）	野口 / 武者小路 / 黒川 / 鈴木校長 / 上田八郎 / 大伴 / 山田 / 加藤教頭 / 岸 / 高橋（幸）/ 椎名 / 土屋 / 加賀谷 / 清水 / 渡辺京 / 松本 / 木原 / 柳沢 / 角谷	1976年 新合宿旅行発足
1977 （昭和52）	〃	〃	(9/2-8) 千倉３班編成（各班千倉寮に２泊３日）、アスレチック・フィールド、シーワールド行、海水浴 費用約¥10,000	井部 / 高橋（幸）/ 角谷 / 上川 / 武者小路 / 葛城 / 土屋 / 加賀谷 / 大平 / 田崎 / 佐藤（教務）/ 看護婦 / 内藤（生指）	(9/2-9) 2班編成 能登・金沢 費用約¥40,000（内¥10,000は積立）	安部 / 木原 / 渡辺（信）/ 松本 / 鈴木（雅）/ 大伴 / 山田 / 田中 / 西島 / 黒川 / 清水 / 吉川 / 井口 / 加藤 教頭 / 原田 / 工藤 / 荒川	1977年 高校総点検運動
1978 （昭和53）	〃	各担任副担任 （2人制） 学年主任	(9/3-9) 千倉3班編成 （ホテル望洋宿泊、各班2泊3日） オリエンテーリング 行川アイランド行	内藤 / 清水 / 柳沢 / 松本 / 田中 / 丸 / 野口 / 竹内 / 椎名 / 荒川 / 木原 / 横田 / 田崎 / 岸	(9/2-9) 2班編成 八幡平・十和田湖	井部 / 加賀谷 / 角谷 / 佐藤 / 土屋 / 葛城 / 大伴 / 西島 / 斉藤 / 吉見 / 武者小路 / 桜井 / 加藤教頭 / 山田	
1979 （昭和54）	〃	〃	(9/2-8) 千倉３班編成 （各班千倉寮に２泊３日） クラス毎テーマ討論会 費用約¥15,000	井口 / 桜井 / 安部 / 松本 / 黒川 / 吉見 / 大伴 / 工藤 / 横田 / 竹内 / 清水 / 上田	(9/2-8) 7クラス、2班編成 三重県合歓の郷 フィールド・ワーク （各種スポーツ） 費用¥42,840	内藤 / 谷口 / 田中 / 瀬野 / 野口 / 丸 / 椎名 / 荒川 / 木原 / 渡辺（京）/ 田崎 / 岸 / 柳沢 / 加賀谷 / 加藤 教頭 / 武者小路 / 山田 / 土橋 / 間宮	
1980 （昭和55）	〃	〃	(9/2-8) 千倉千倉寮宿泊 グループ毎テーマ討論会 オリエンテーリング 行川アイランド行	丸 / 大平 / 鈴木（雅）/ 加藤教頭 / 角谷 / 桜井 / 高橋（幸）/ 竹内 / 坂本 / 椎名 / 長田 / 斉藤 / 渡辺（信）/ 溝口 / 西島	(9/1-8) 2班編成 飛騨・高山 明治村見学 高山→フィールド・ワーク（各種） 街並・寺・円空・焼きもの・焼岳登山	武者小路 / 高橋（龍）/ 黒川 / 瀬野 / 大伴 / 上田 / 横田 / 松本 / 清水 / 土屋 / 安部 / 土橋 / 恩地校長 / 山田	
1981 （昭和56）	(4/10－11) 高尾山薬王院 全員参加１泊合宿開始、各教科説明と学習法、生活の基本について HRノートまとめ ¥10,000	椎名 / 土橋 / 野口 / 大平 / 内藤 / 谷口 / 柳沢 / 大橋 / 工藤 / 岸 / 瀬野 / 田崎	(9/7-9) 伊豆富士見ランド 全員オリエンテーリング 野外炊飯 HRノートまとめ ¥17,000	左記に同じ	(9/2-9) 2班編成十和田 サイクリング、焼岳登山、ハイキング（奥入瀬、八甲田山麓）登山（八甲田山）、弘前行、等	渡辺（信）/ 高橋（幸）/ 鈴木（雅）/ 村田 / 角谷 / 土屋 / 竹内 / 高橋（龍）/ 長田 / 溝口 / 丸 / 斉藤 / 加藤教頭 / 森田（養護）	1981年新10年 入学時 1泊オリエンテーション開始
1982 （昭和57）	(4/9－10) 高尾山薬王院 全員参加1泊合宿 ¥10,000	高橋（幸）/ 土橋 / 田中 / 東川 / 溝口 / 井部 / 渡辺（京）/ 横田 / 村田 / 清水 / 田崎 / 井口	(9/4-9) 群馬県嬬恋村 国民休暇村鹿沢高原 キャンプと自炊 ¥12,000	左記に同じ	(9/5-8) 全クラス 近江八幡フィールドワーク（テーマにより30～40班） 費用¥57,400	椎名 / 大伴 / 野口 / 加賀谷 / 内藤 / 庄 / 柳沢 / 大橋 / 工藤 / 諏訪 / 瀬野 / 高橋（龍）/ 上田校長	
1983 （昭和58）	(4/10-11) 八王子サマーランド1泊（現地集合） 漱石『創造と模倣』読ませて感想文まとめ ¥7,000	安部 / 武者小路 / 大伴 / 長田 / 大橋 / 東川 / 斉藤 / 丸 / 井部 / 松尾 / 鈴木 / 奥西 / 森田	(9/5-7) 群馬県六合村野反湖 キャンプと自炊 オリエンテーリング キャンプファイヤー 登山 ¥14,500	左記に同じ	(9/5-8) 全クラス 佐渡島フィールドワーク（コース・グループ毎に島の生活、地域の特色等） 鬼太鼓・人形芝居 能楽「葵上」 費用¥40,000	渡辺（京）/ 井口 / 高橋（幸）/ 田崎 / 村田 / 土屋 / 横田 / 清水 / 溝口 / 角谷 / 田中 / 高橋（龍）/ 恩地校長	

＜文責：野口 淳＞

3) 男女共修生活科

歴史と共に生きる共学生活科——大平 初枝（元高校教諭、本誌作成にあたり寄稿）

「先生が実践された生活という教科は、どんな内容の授業だったんですか？」

あるとき教え子の男性からこんな質問を受けた。1955年（昭和30）に卒業したこの教え子にとっては在学中、体験したことのない教科だったのだ。「ボクたちのころは、男子は保健。女子は家庭科でした」という教え子の記憶とともに、私の脳裏にこの教科が誕生するまでの道のりが鮮明に蘇っていた。いまでも共学「生活科」は、その細目まですべてが私の頭の中でたくさんの引き出しとともに、分かりやすく説明できるように整理されている。

明星学園に「生活科」が男女共学の形で実現したのは、1975年（昭和50）だった。それでも、国連主催の「女子差別撤廃条約（1985年批准）」以前であり、平成6年になってからの文部省制定を考えると、明星学園が先取りしてスタートしたこの教科は、一層感慨深い。


鹿沢キャンプ(52回生)

私が新設保健科と家庭科の教師として明星の教壇に立ったのは、昭和23年。戦後の傷あとをいたるところに残し、日本国中が必死になって復興を目指した時代だった。同時に歴史的に大きな変革をもたらした時代でもあり、その一つは教育の改革。旧制中学校、女学校が新制高等学校として発足し、家庭科に関しては女子のみの教科として位置づけられていた。

時代の流れ、世の中の推移とともに男子、女子の生き方も変わっていくはずなのに、家庭科が女子を日本独特の家族制度に適応させるためのものであるとする考えが、なぜ旧態依然なのか。裁縫、料理、手芸、道徳などを学び、良妻賢母として男性に従う女性を育てることを目的とする「家庭科」に、私は大きな疑問を持ちつづけていた。と同時に、「新しい家庭科」そして、男女が共学する新しい教科への立案作成と取り組んでいた。

まず試みたのは、女子・家庭科の自主編成授業。これは、グループごとにテーマを決めて学ぶやり方で、次のような内容だった。

- ◆ 日本の服装史（なぜ、男女の服装が違うのか。なぜ、時代とともに変化したのか。流行は、だれが何のためにつくるのか）
- ◆ 日本女性史（家族、家庭はどのようにつくられたのか。男女の差別は、どのようにしてできたのか。婚姻の歴史、日本の結婚は戦後、どのように変化したのか。女性と職業）
- ◆ 保育（性と愛、母性保護。妊娠、出産のメカニズム。人工妊娠中絶、保育所問題）

この学習の中で、バラ色の夢のように描いていた結婚にも歴史的な発展過程があること、女性の地位はその時代の仕組みや社会的生産、労働、政治、経済との関わりが深いことなどを理解していくことになる。

＊当時のメモから、その1

生徒たちの、家庭科に対する認識の変化が手応えとして伝わってくる。「男子と一緒に学べば、お互いの受け止め方が変わってくるし、より多くの効果があると思う」という感想も非常に多い。男女共習の実現に教師がもっと頑張って、という声も日増しに高まってきた。そんな生徒たちが放課後、家庭科室に集まって「女性史」を学ぶ自主ゼミを開始した。男女共習は、私の教師としての信念でもある。

このような道のりを経て1972年（昭和47）に女子のみの家庭科を「男女共学生活科」とする設定案を職員会議に提出した。その提案資料の骨子を要約すると、次のようなものだった。

Ⅰ.生活科の基本的な考え方（家庭科教育の現状と問題点）

戦後の教育改革は、すべて新しい視点に立って男女が同等の教育を受けることから出発した。しかし、家庭科は男女別学という矛盾した形でしか実践できなかった。これは家庭科が学校教育の一教科として存立して百年、長い間の封建諸制度を背景に「家」中心の良妻賢母育成を目的とした「家事、裁縫」教育が脈々と続き、知性を啓発、主体性を確立するものではなかったことに起因する。



明星祭

家庭は生命を維持するための営み、また新しい世代を生み育てるためのさまざまな機能を担う。現実に人間の存在を支える根幹であり、文化や思想、行動の原点でもある。単なる衣食住についての家事処理技能を支柱とした家庭科教育では、現代の家庭生活を社会、政治、経済、世界、国家との生活単位とする認識は生まれない。「家」への奉仕を教える家庭科ではなく、男女がともに平等な人間としてのあり方を学ぶ教科としたい。

現在、明星の生徒たちが陥りがちな現実認識の甘さ、観念的思考から脱皮するためにも現実生活から題材を取り上げ、現実に則した社会認識を発展させることが重要であり、このような視点に立つ「生活科」の創造は、明星の教育の中では有意義だと考える。

Ⅱ　教科の構成、その基本的な観点

具体的な現実の家庭、家族問題を取り上げるが、時事問題に限定しない。日常の社会生活（家族生活も含む）を見つめさせ、その実態認識から問題の矛盾や、その原因などについて考えながら、生徒ひとりひとりの生活に対する主体性を回復させることが必要だと思う。



明星祭・後夜祭

＊当時のメモから、その2

新設教科「生活」の基本的な考えと構成についての資料を職員会議で配布し、先生方の意見を聞いた。反応は、さまざまだった。無関心、よく分からない、内容が問題だ、女子だけの良妻賢母教育でいいのでは、などなど。男性教師の多くは、諸手をあげて賛同するにはやはり抵抗があったのだろう。だが女性教師の中に、婦人部への働きかけに努力してくださったり、会議の席でも「女子のみの家庭科の差別は、男子への差別でもある」と女性ならではの心強い発言、後押しもあった。私が教師としての信念を曲げないかぎり、新教科実現の機運は高まっていくはずだ。

1975年（昭和50）、待望の男女共学「生活科」が2単位必修で実現した。提案資料の提出からおよそ3年の年月を数えた道のりは厳しかったが、男女共学の実践校の諸先輩や先生方のアドバイス、父母たちの支えと理解が心強く、うれしかった。

と同時に、それからが私にとっては負けられない日々だった。周囲の方々のご指導と励ましを受けながら、さらなる具体的な授業案と時間割り、単元構成表などとの取り組みが細部の手直しを重ねて続いた。

新設の男女共学の「生活科」とは、実際にどんな授業だったのか。2単位必修の高校1年生のそれを例に挙げてみる。

＜1学期＞　家族史

1. 生活科を男女共学で学ぶ意義と、その内容
2. 私たちをとりまく諸問題
   ・現在の家庭生活に見るさまざまな問題点について、具体的な事実を通して認識させる。
3. 民主的な家庭
   ①　家族の移り変わり
   ・原始社会、古代社会、封建社会、近代社会の形態、構造、機能の推移と、それぞれの社会における生産様式との関係。今後の展望。
   ・歴史の流れの中で、社会の変遷が「家」と女性に及ぼしてきた影響。
   ・女大学の女性観、結婚観、性愛観など。
   ・日本の近代史に見られる家庭生活の特異性（戦前、戦後の相違に重点をおく）
   ②　家庭生活と法律
   ・新憲法、新民法制定の意義（男女差別撤廃を眼目とした教育基本法と学校教育）、旧法との比較。
   ・法律は不変のものではなく、国民の力で前進させることもできるという認識。
4. 夏休みの課題（二学期の保育学習に備えて、各自が「生育史」を書く）

＜2学期＞　保育・教育

5. 保育教育（法的に婚姻年齢に達していない生徒たちに、子育てではなく、自分自身の問題としてとらえさせる）

① 性愛の現状と問題点

・性愛の歪みの現状と実態の理解。
・男女差別、性の商品化の背景。
・資料などを与え、生徒に自分の意識についての感想を書かせる。

② 母性保健と胎児の発育

・妊娠の生理的しくみ。
・母体の変化、発育上の傷害。
・分娩と、それに伴う異状など。

③ 母性保護

・その現状と問題点。
・原理と方法。

④ 発育の原理

・保育とは、教育とは。
・心身の発達法則。
・脳の進化と発達。
・発達の歪み。

⑤ 保育問題と、今後の課題

＜3学期＞　家庭経済

6. 家庭経済と国民経済

① 家計の現状

・家計調査（5段階階層別の統計）などから、実態の把握。
・家計不安の実態。賃金、収入の現状と低賃金のしくみ。

② 国の財政（三学期は国家予算が発表される）

・国家予算の中で特に身近な教育、住宅、福祉など、生活関連の予算について考える。

③ 貯蓄

・なぜ、日本は貯蓄率が高いのか。
・国家財政や社会保障制度との関係。

④ 社会保障の現状

⑤ 消費者問題

・有害商品、不当表示、不当価格の事例と、暮らしを守るための消費者運動。なぜ、そのような商品が生産されるのか。

＊当時のメモから、その3

5月の連休明けのある日、つい1ヶ月前に入学したばかりの男子生徒Aくん、Kくん、Sくんの3人が、授業を終えて教室を出ようとする私の前に立って「あのさ～」と話しかけてきた。「4月に配られた年間授業案をいうのに性愛の現状とか、性の商品化の背景なんていうのが

あるけどさ、そんな授業、早くやってよ。チョ～興味があるんだ」その超、興味があるという授業は二学期の「保育・教育」の中で触れるのだが、保育とは出生後の子育てだけでなく、それ以前の受精から始まる。それは男女の性と愛、そして男女のあり方と深く係わっていて、いまなお残存する性の商品化などについても、正しく理解させなければならない。

そのためには現代に限らず、歴史をさかのぼって家族史、婚姻史、女性史などを学び昔話や文学作品、また新聞などによる日々新たな教材などから性愛の正しい知識、男女が平等に相手を尊重し、自分の行動に責任を持つ精神を自覚させる必要がある。単に良いこと、悪いことで片づけるのではなく、なぜ、どうしてという認識を歴史の中から学ばせたい。

前期の必修授業と並んで、つぎのような男女共学の選択科目（2単位）も編成した。

(1) 食物、被服（2年、3年選択）
(2) 家庭一般（3年受験コース）
(3) 女性史、染色、華道、手芸、食物（ノングレード）

私は、この「生活」の授業を通し一貫して生徒の自主性、主体性を植え付ける努力をした。単なる表面的な知識、答えだけを頭に詰め込ませても、それは一過性のものでしかない。その背景、経過、現実を理解してこそ、正しい認識として身につけることができる。

「食物」の授業で、米（こめ）を炊くことを考えさせた。お粥をつくった生徒もいれば、すし飯、赤飯をつくる生徒もいた。型にはめた1つの答えではなく、ものごとによってはいろいろな考え方、プロセスがあることを理解したはずだ。

大学受験に関わりのない新設の必修教科という一部の偏見を背に出発した「生活科」は次第に生徒たちの反応を呼び、「オリジナル教科」「ユニークな授業」という受け止めかたをされるようになった。スタート当初に見られた男子生徒の拒否的態度もなくなったが問題点がまったくなかったわけではない。

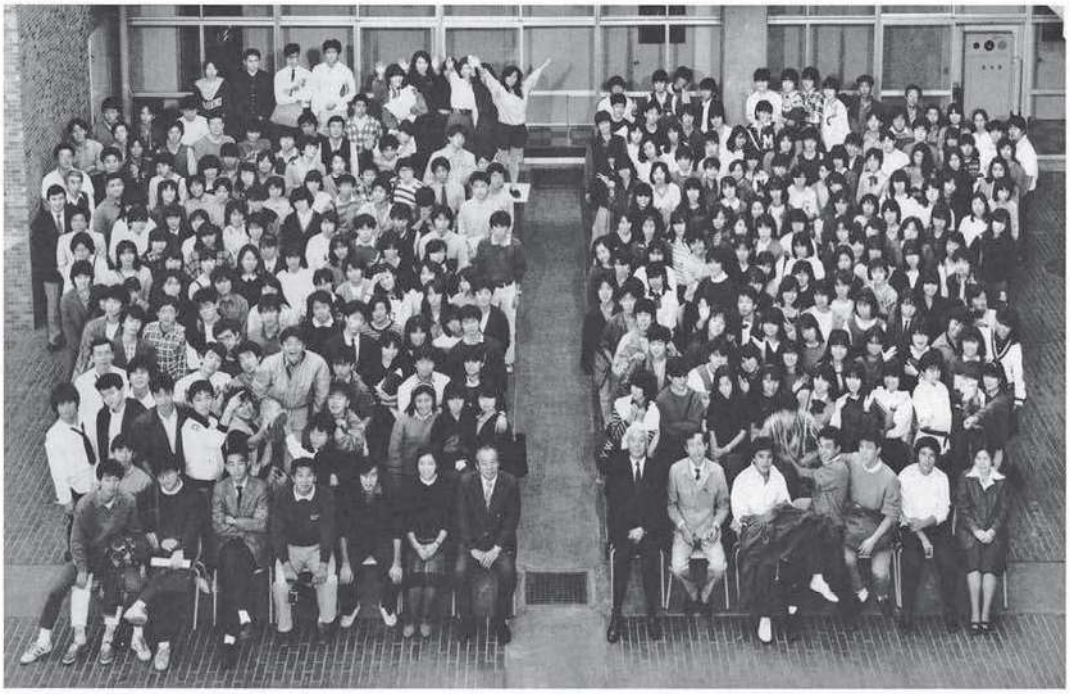
授業の内容は理解しながら「しかし、ボクは違います。男は、やはり女よりエラクならなければならない」「私は結婚して、彼のためにツクス女性になりたい」という生徒が、少数だが存在した。この生徒たちが、テストでは高得点を取っているケースもある。

これは一教科の問題ではなく、学校全体、あるいは家庭、テレビ、映画、マスコミなどの影響、そして教育行政とも無縁ではないだろう。

それでも、封建的な色彩の中で女子だけが学んだ家庭科から自主性、主体性に富んだ共学「生活科」への変革が、明星教育の中で重要な役割を果たしたことは間違いない。

私の教師生活の縮図ともいえる、この「生活科」を振り返るとき、学園の歴史の素晴らしさに触れずにはいられない。大正デモクラシーの波の中で「個性尊重」「自主自立」「自由平等」の教育理念を掲げ、戦中・戦後と貫いた創立者の精神が卒業生たちに培われ、教師や父母たちへ脈々と受け継がれてきたのだろう。学園の教壇に立った一人として、この私学としてのあり方を誇りたい。

「共学・生活科」を通して生徒と真剣に向き合い、自分もまた多くを学んだ明星学園での日々。それは私の宝であり、半世紀以上を経たいま、私の中で元気に生きつづけている。



1984年度高校卒業生(52回生)



高校生通学風景



1983年度マラソン大会

第3章　新体制下の明星

1　新体制の発足

(1) 学園の危機的状況

1970年代の学園の教育と経営の状況は、『明星の年輪―明星学園60年のあゆみ―』と『同 ―70年のあゆみ―』に詳しく記述されている。この時期、小・中・高一貫教育の進め方や教育観の相違にもとづく教職員間の対立、遠山啓氏を学園長兼高等学校長に招聘する問題をめぐる理事会と教職員との対立、さらに学園経営の在り方をめぐる理事会と評議員会との対立など、さまざまな問題が噴出していた。また、そういう混乱した内部事情のため、学園は明星会（同窓会）や後援会からも積極的な支持を得られない有様であった。

この時期の学園の財務状況に目を転ずれば、1973年（昭和48）から1980年（昭和55）までに積もりに積もった累積赤字は、3億9,000万円に達していた。学園の財政は破綻状態に陥っていたのである。〈※1〉

(2) 新理事会の発足

1979年（昭和54）11月、経営責任をとって校長を除く全理事が総辞職し、板橋宗市理事長代行（学園元保護者）、真田三喜彦財務理事（元保護者）の下で人選が進められ、12月、松井憲紀氏を理事長とする新理事会が発足することになった。

新理事会の構成は下記の通りである。このうち、常務理事は理事長以下、恩地邦郎高等学校長、遠藤豊小・中学校長、手塚光雄氏（財務担当兼法人事務局長）の4名に限られている。これは前理事会が理事の過半数を超える8名の常務理事で構成されていたのをみて、このような構成では理事会は正常に機能しないと判断したからであった。

理事長・常務理事	松井 憲紀	学識経験者	前横河電機製作所社長、会長・元保護者
高校長・常務理事	恩地 邦郎	校長	5回生
小・中学校長・常務理事	遠藤 豊	校長	
事務局長・常務理事	手塚 光雄	学識経験者	昭和電工(株)理事・関連事業部長、等松青木監査法人推薦
理　事	平出 宣道	学識経験者	明治学院大学学長、6回生
理　事	木下 武彦	学識経験者	住友商事(株)効率化推進部課長、現保護者
理　事	花岡 建夫	学識経験者	杏林大学助教授、現保護者
理　事(1980年1月辞任)	藤沢 武夫	学識経験者	本田技研(株)最高顧問
理　事	谷井 精之助	学識経験者	明星会会長、(社)日本民間放送連盟著作権部長、7回生
理　事	原後 山治	学識経験者	元ＰＴＡ会長、日本弁護士連合会理事
理　事	渡辺 嗣	評議員選出	代々木学園総務部長、16回生
理　事	上田 八郎	評議員選出	高校教諭、7回生
監　事	鍋島 仁		等松青木監査法人、代表社員
監　事	広田 寿徳		岩田合同法律事務所、弁護士

〈※1〉『明星の年輪―明星学園70年のあゆみ』203頁

(3) 松井理事長と明星学園

松井憲紀氏は1909年（明治42）の東京生まれ。中学時代、物理の先生の授業にひかれ、技術で身を立てようと決心し、山梨高等工業学校電気工学科（現山梨大学工学部）で学んだ。卒業後、横河電機製作所（現横河電機株式会社）に入社し、やがて同社の社長、会長、常任監査役を歴任した。のち1986年（昭和61）2月、理事会主催の喜寿を祝う会での挨拶のなかで、明星学園との関わりを次のように語っている。

昭和22年、長女玲子が就学年齢となり、川越の小学校に入りました。その年の後半に、私どもは川越から三鷹市牟礼に移り、三鷹の小学校に転校させたのですが、校舎不足の時代のため2部、3部の授業が普通で、行ったと思ったら帰って来るような状況でした。私立明星学園を知ったのはこの時期です。学園を訪れ照井校長にお目にかかり、教育についての先生の信念を伺い、先生と生徒のやりとりをながめてスッカリ感心し、子供をここに転校させたいと考えるに至りました。この明星への転校が面白いのです。

まず、次女の紀子を1年生に入学させてから、姉妹関係ということで姉の玲子を編入させていただけたのです。続いて三女佳子、四女美樹がお世話になりました。サラリーマンの家庭から私立へ通わせる経済的負担は並たいていではありませんでしたが、子供たちのかけがえのない1年1年を悔やむことなく成長させるためにふんばったわけです。戦後、家内が病弱であったので、父母会、ＰＴＡなどに出席することもありましたためか、ＰＴＡの役員を仰せつかり、文化部長、会長などを承ってしまいました。



1･2･3年生と中学生の応援合戦

昭和54年、理事に就任してもらえないかとの打診がありました時、会社の方も引退し責任のない立場になりましたので、4人の娘たちがご厄介になった学園に何らかの貢献ができればと思い、会社の社長の諒解を得てお引き受けいたしました。〈※2〉

以上のように語っているが、じつは学園の理事にはそれ以前にも就任している。会社の取締役として多忙な身でありながら、ＰＴＡ会長を1959年（昭和34）4月から3年間務めた。4・4・4制発足の時期である。さらに市村寅之輔理事長逝去後の1964年（昭和39）9月から1967年（昭和42）11月までの3年余、衣笠武夫理事長と原田満寿郎全園主事、寒川・上川・恩地3校長を援け、学園理事として尽力している。

そして今回は、莫大な累積赤字の解消、不信と不和の渦巻く学園の正常化という大きな課題に向かっての挑戦であった。70歳を超えた松井理事長の胸中には、余人の想像も及ばない、なみなみならぬ決意と覚悟があったはずである。

松井憲紀氏は、理事長を引き受けるにあたって、二つの条件を示した。ひとつは、無報酬であること。もうひとつは、建学の精神に基づいて経営を行うこと。したがって、学園に建学の精神から逸脱するようなことがあれば直ちに辞める、というものであった。

〈※2〉『明星学園報』№19（1986年4月）所収

新理事会は、松井理事長の方針のもとに、焦眉の財政危機の回避、「和」の拡大、良識の回復を訴え、精力的に活動を開始した。松井理事長は、対話をもって全園の力を結集することを図り、教職員組合、明星会（同窓会）、評議員会、ＰＴＡ、後援会、千倉明星村、教職員有志等と積極的に会談を行い、それらの行動を通じて現実的な指導方針の理解を深めてもらうよう務めた。

また、対話をもって全園の力を結集するためには、情報の共有が不可欠であると考え、恩地校長の発案により1979年（昭和54）12月、『明星学園報』を発刊し、毎年3回発行することとした。

(4)「明星学園・建学の原点を求め明日への出発」

1981年（昭和56）8月、理事会は学園運営の基本方針として「明星学園・建学の原点を求め明日への出発」と題する方針を確定し、松井理事長名で『明星学園報』第4号（1981年10月）に発表した。この文書は、過去の学園史にも掲載されているが、重要な記録と思われるので、全文を本誌にも転載する。

明星学園・建学の原点を求め明日への出発

昭和56年8月18日

理事長　松井憲紀

学校法人「明星学園」は建学以来57年の年輪を重ね、亭々とした大樹となり、一つの校風を確立し、社会からも評価をうけております。

数年来、学園はいくつかのトラブルを経験してまいりましたが、今日こそ、全学園が建学の精神に立ち戻り、小学校・中学校・高等学校が一つの路線に合一して、明星教育を実践していかなければなりません。そして、児童生徒のかけがえのない一年一年を実りあるものとして父母の付託に応え、あわせて、学園の充実・発展をはかり、社会に寄与すべき大切な時期であると思います。

学園が建学の目的に専念し、明日へ向って一体となって進むため、次の考えを申し述べます。

［Ｉ］建学の原点よりの発展

1. 学園は四人（赤井・照井夫妻・山本の各先生）の同人によって創立され、その後、幾多の先輩の方々の努力によって築き上げ、受け継がれてきた「個性尊重」・「自主自立」・「自由平等」の教育方針を正しく捉え、「強く・正しく・朗らかに」の校風を明日へ継承し、さらにこれを発展させるために学園の総力を結集する。
2. 学園に入学する児童生徒は本学園の教育に耐えうるものとし知・徳・体のバランスのとれた教育を実践するために、一貫したカリキュラムを再構築する。児童生徒がその学齢に応じた力を持ち、望む道を選べられる実力をつけるようにする。
3. 「テスト・評点」はあるが、これによって児童生徒の人間としての価値に差別をつけないことも建学以来の校風であり、これを受け継いでいく。
4. 学習態度の確立と習熟による理解の徹底をはかるため、計画―実施―点検を実施していく。
5. 建学の精神は常に変わることはないが、これを実践するための手段・方法・技術については時代に応じ、創意工夫して按配されることは当然である。これを学園の外に求める

ことも時として必要であろうが、明星学園の教育として着実に消化し、かつ発展させるもの以外であってはならない。(教育理論というものは実践の結果から検証されなければならないことは当然である。)

[Ⅱ] 明星に働く人

1.二人以上の人が一つの目的に向って協力するための前提条件は信頼関係の厚薄・有無であり、信頼の基礎となるものは相互信頼と人格である。学園に働く人人は一層、人格と信頼を高め、学園機能の高度化をはかり、学園の付託に応えてほしい。

2.建学精神をふまえ、教育について教師間で活発な議論が行われ、相互理解・相互信頼が高まることは望ましいことである。近時、議論や相互理解不十分から合一した結果が得られないまま、これを教師間以外の者の前に露呈し、あたかも二つの流れが存在しているかの如きことがあった。こうしたことは学園の信頼関係を失うものであるから今後あってはならない。

3.教育技術あるいは教育論に優れている人でも実践者としての人格、品位を高めることに努力され、公人としての自覚をもち学園内部の諸問題に対しては一致して解決に当たるべきである。

4.意志疎通をはかり、相互信頼を高めるために、例えば、

イ) 小中高教師の相互間の授業や行事などの見学・参加および討議。

ロ) 父母を対象とした教育の研究会などの設置による父母と学園との意思疎通。

ハ) 小中高全園一丸となった明星祭等の実施。

などの実現を期待したい。

5.また、一貫教育の徹底と学園の持てる人材の一層の活性化をはかるため定期的な人事の交流・異動を行いたい。

[Ⅲ] 財　政

1.現在の学園の財政は健全であるとはいえない。将来、学園が何かを決定し、資金が必要になった時、最も大切なものは学園の「信用」と健全な財政(学園の体力)基盤である。このため、学園の消費支出においてそのバランスを採りつつ、逐次、財政基盤の強化をはかり、信用を高め、将来の発展に寄与できるよう努力する。すなわち、現在の累積赤字は過去10年くらいの結果であるので、これを短期間に解消することはむずかしいが、1980年代中に正常化するように努力する。

2.学園の将来のため中・長期の計画を策定する必要がある。経済情勢の動向、就学人口の推移、立地条件などをふまえ、また学園の社会的評価を更に高める努力とあわせて、明日にそなえる計画をたてる。

3.創立60周年を数年後にひかえ、これを実施することを含めた中期計画(1985年＝昭和60年くらいまでの)を本年度中に毎年見直すローリング・プランとして弾力的なものを策定する。〈※3〉

〈※3〉『明星学園報』第4号(1981年10月)

COLUMN 7

「学園のお金は父母と都民からいただいている」

松井理事長は、1995年（平成7）11月、86歳で亡くなるまで16年ものあいだ、学園にひたすら献身された。悲願だった累積赤字の解消は、教職員の人件費や施設設備費を抑えることなく、懸命な経営努力によって9年間で達成した。また、その間、いつもの温顔で「和」の拡大に努め、ＰＴＡ、明星会、後援会からも強い支持を得られようになった。その蔭には、発足時の理事会メンバーのほか、漸次交代した理事たちの尽力が大きく貢献したことも特筆に値する。

いわゆる“松井体制”の理事のなかには、善方国男氏、加藤信夫氏のように学園の古くからの教師で、学園の歴史をよく知っている人もいた。企業人や弁護士でわが子を明星に学ばせた保護者の津田謙二・石原憲一・伊藤哲郎・安藤道久の諸氏。また、企業人や弁護士・大学教授で卒業生の佐藤雄二（16回生）・松本唯史（16回生）・井上隆（35回生）・渡邉実（35回生）の各氏など多士済済であった。

定例理事会は初期の頃は年に20回前後開催されたが、その後はほぼ毎月1回を原則とした。夕食は各自済ませて出校し、真摯な論議は時に深夜に及ぶこともあった。

この項の筆者として、個人的なエピソードをひとつだけ記しておきたい。

大企業の役員だった頃の松井さんは車で送り迎えだったろうが、明星の理事長になってからは定期券を買い、小田急線の向ヶ丘遊園駅から電車で通勤した。歩いた方が健康によいからと言われたが、それは表向きの理由だったろう。毎週もたれる常務理事会のあとは、たいてい常務理事で事務局長の手塚さんが車で送った。定例理事会、評議員会や、組合との交渉などで夜おそくなるときは、自宅に電話しておよその時刻を指定し、一番下のお嬢さん（美樹さん）に車で迎えに来させた。私は帰る方角が同じなので、便乗させてもらったが、仕事をもつ美樹さんにしても、同じ道を引き返して練馬まで帰る手塚さんにしても、たいへんだろうと思った。

そこである日、帰りはタクシーを使ったらどうですかと進言したところ、「今はそんな贅沢が言えるときではない。学園のお金は父母のみなさんと、都民のみなさんからいただいているんですよ」と厳しい口調でたしなめられた。

往復にタクシーを利用するようになったのは、86歳の1995年（平成7年）4月、高等学校長を兼任してからのことであり、その7カ月後に急逝されたのであった。

12月16日、第3体育館（高等学校）で、学園葬がしめやかに執り行われた。

＜文責：依田 好照＞

(5) 遠藤校長、無着教頭の辞任

1980年（昭和55）、「明星学園が埼玉に新高校をつくるということがいわれているが、どういうことなのか」と多方面から理事会に問い合わせがあった。また、明星学園教職員組合は独自に調査し、理事会へ公開質問状を提出した。

理事会で調査した結果、本件は学園理事会にはまったく秘密裡に、①明星自由学園設立準備委員会を発展的解消した学校法人遠山塾設立準備委員会が、埼玉県日高町に、学校法人篠井学園（長野県）の名のもとで「遠山塾高等学校」を設立する計画であったこと、②退任した当学園の元理事数名と、当学園の現職の校長と教頭が主要な立場で参加していること、などが明らかになった。

理事会としては、現職の常務理事でもある遠藤校長と無着教頭が参画していたことにつき、理事相互の信頼関係にもとる行為であること、学園関係者に不信感をあたえたことについて訓戒した。遠藤校長は遺憾の意を表明し、明星学園の教育に献身することを約束した。

その後、1982年（昭和57）6月、遠藤豊校長は、「啓学園の設立準備委員会代表・遠藤豊吉氏から校長就任の要請を受けたので、来年3月末で辞職したい」旨の文書を理事長に提出した。理事会で審議の結果、この申し出を受理することを決定した。

遠藤豊小・中学校長は1983年（昭和58）3月末日に退職し、同時に無着成恭小・中学校教頭も明星学園を去った。

(6) 恩地・依田両校長の就任

話は少しさかのぼる。前年の6月、遠藤校長が辞意を表明した際、上田八郎高等学校長も同時期（1983年3月末）に任期満了となるので辞意を表明していた。上田校長は、「この際、教職員一人ひとりが全園的立場に立って学園の教育・運営をどうすべきかを考え、意思統一をはかることが肝要。理事会は教職員とも十分に時間をとって、小・中・高の新校長を決めてほしい」と述べた。

その後の経緯は、手塚事務局長の筆により、『明星学園報』第8号（1983年1月）に詳しく報告されているのでここに抄録する。

さきの上田校長の意見を受けて、松井理事長は7月初旬、全園職員会議に出席し、さらに文書をもって教職員に問題提起を行った。——多くの問題をかかえ、さらに数年後に迫りくる私学の危機に対応し、全学園がひとつの方向で協力していくために、いま為すべきことは何か、校長の分担はどうあるべきかを含めて、夏休み中に一人ひとりが考えてください、と。

2学期早々、理事長は問題をより明確にするために、試案として小学校長1人、中・高校長1人制を教職員に問うた。端的にいえば、中・高間の内部進学問題に見られるように中学と高校との間にギャップがあり、校長が別であることがひとつの要因をなしている。中・高ひとりの校長として解決に努力してもらいたい、というものであった

これに対して、教職員からは、校長の分担の変更よりも、教育と信頼の内実を高めることを実践を通じて行うことにより、理事長の意図も自ずから達成されるので、理事長提案は今後も検討するが、当面、現行の体制で努力させてほしいという答申があった。

理事長は、この間、教職員有志との懇談会、運営委員会との話し合いなどと幾度も会談を重ね、教職員の意とするところについて直接把握した。そして、校長の分担は教職員の考えでよいが、校長候補者の推薦については、現状の諸問題を解決するにふさわしい人を推薦してほしい旨、10月4日改めて要請した。

① 私学の校長は、学校教育法上の公的地位を有すると共に、学園の経営に当たる人であること
② 100パーセント明星に尽力できる人
③ 過去将来を通じて小・中・高の信頼関係樹立に積極的な人であること
④ 理事会との信頼関係に立ち得る人

その結果、小・中学校職員会からは中堅世代の依田好照が推薦され、高校職員会からは元校長の恩地邦郎が推薦された。理事長はそれまでの経過から見て、学園での経験が長く学園の過去・現在をよく知る恩地にお願いするのがよいと考え、すでに別の生活設計を考えていた恩地を説得して三度目の校長を引き受けてもらった。

以上の経過をふまえて、11月25日、理事会で正式に選任が決定した。

2 教育現場の運営

(1) 全園校教務会

1983年（昭和58）4月、小・中学校、高等学校それぞれにおいて、新校長を中心とする学校運営が始まった。

小・中・高教職員の相互理解、相互信頼を高めるために、組織運営上のさまざまな改革・実践がなされたが、全園校教務会の活動もそのひとつであった。当初のメンバーは、高校の恩地校長、加藤信夫教頭、田崎中（とおる）教務部長、井口芳雄生徒指導部長、小・中学校の依田校長、佐藤文夫教務〈※1〉。学校運営の中核に位置するこの種の会は、名称は異なってもどこの学校にもあり、明星にも組織としてあったが、不幸にも前校長の頃はほとんど機能していなかった。これを反省して、原則として毎月1回開催、小・中・高各部の情報交換、実践報告、協議事項の検討が行われた。

第1回（4月27日）の概要は、

① 内部進学問題を解決するために何が必要かを協議。継続協議となる。
② 児童・生徒募集は従来のように小・中・高別々に行うのではなく、全園的観点で一体化して進めること。
③ 教科によっては久しく途絶えていた全園教科部会を復活する。6月1日午後2時から高校で行う。今回は目標を親睦程度とし、ざっくばらんに実践の交流を行うことにする。なお、英語・数学・国語の三教科部会には、内部進学問題をも話題にすることを要望すること。

第2回（5月18日）。高校からの報告は、生徒指導部による生徒への呼びかけ文「授業を充実させよう」。自治会入会費・年会費の増額。体操部優勝（都大会）。小・中からは、募集の一環としての「就学前教育研究会」（近隣幼稚園の教師によびかけての研究会）実施計画の報告。予算措置の要望。

協議事項は、

① 6月1日の全園教科部会の会場（部屋割り）、運営、部会報告提出の件。内部進学問題についても話し合うこと。終了後の親睦の深め方は各教科部会に任せること、などが話し合われた。
② 内部進学テストについて。

この日の話し合いで、内部進学問題はこれからも続く問題であることが再認識された。中・高各部での責任を明確にさせ、それを互いにわかり合えるようにしていくこと、内部進学問題は「教育」の問題であることを確認し合った。

〈※1〉小・中学校では当初、「教頭」は置かず、運営委員会を中核とする「各種委員会」による集団的運営を実施した。（各種委員会には、教育研究・行事・自治的活動・施設設備・予算・防災・募集・人事があった。）

(2)「内部進学テスト」の廃止

1980年（昭和55)、恩地邦郎高等学校長と遠藤豊小・中学校長の合意により実施された「内部進学予備テスト」（その後「内部進学テスト」）は、ＰＴＡ等の反対運動を引き起こしたこともあり、教職員の間でも廃止か存続かの論争が続き、相互の不信、対立を増長させ、一貫教育体制の着実な進展を阻害する要因にもなっていた。

これらのいわゆる内部進学問題の収拾策は、1995年（平成7）4月、加藤信夫高等学校長のあとを承けた松井憲紀理事長が高等学校長を兼務するに至って、松井高等学校長と依田小・中学校長に一任された。両校長は時間をかけて慎重に協議を重ね、合意確認の上、同年9月20日付の文書「内部進学について」を全園の教職員に発表した。

内部進学について

明星学園高等学校長　松井　憲紀
明星学園小・中学校長　依田　好照

小・中学校長と高等学校長に一任された標記の件について、両校長は検討協議を重ねてきた。
両校長は、従来の内部進学制度を改め、下記のように合意決定したので知らせる。

1. 総合学力テストについて
   (1) 本年度をふくめて当面3年間実施する。
   (2) 当面、国語・数学・英語の3教科とし、11月中に実施する。
   (3) テスト問題は、一貫カリキュラム（とくに中・高の接続）の完成をめざしながら、中・高で十分に検討して作成する。
   (4) テストの結果は直ちに内部進学の適否を判断する材料とはせず、個々の生徒および全般的な学力を把握し、さらに学力向上をはかるためのデータとして活用し、蓄積していく。
2. 小・中学校は、基礎学力の充実と向上、学習・生活習慣の定着に一層努力し、その実績を示していく。
3. 中学校長は、生徒一人ひとりの学習および生活の状況を総合的に判断し、適切な進路指導を行い、内部進学の生徒を高等学校長に推薦する。
4. 高等学校長は、中学校長の推薦する生徒を全員受け入れる。
5. 高等学校は、生徒が持てる能力を将来に亘って伸ばしていけるよう、教育面、生活面を通じて援助していく。
6. 小・中・高は一貫教育の実をあげるために一致協力して研究・実践を進め、向こう3年間で一貫したシラバスを完了し、父母はもちろん生徒にも説明し、理解を得ることとする。

また、依田中学校長は9年保護者に対して、お知らせ「明星学園高等学校への内部進学について」を通知した。こうして、内部進学テストは廃止された。

＜文責：依田 好照＞

3 創立60周年

(1) 記念式典・祝賀会

1984年（昭和59）5月13日（日）、創立60周年の記念式典と祝賀会が催された。式典に先立って、9時から10時まで、小・中学校では依田好照校長の話があり、高等学校では東京大学名誉教授・霜田光一氏（6回生）とシルクロードの紹介者として著名な写真家・並河萬里氏（17回生）の講演があった。講演後も、生徒たちは両氏を囲んで1時間ほど懇談した。

記念式典は小・中学校体育館で行われた。11時35分、器楽合奏に次いで実行委員長・善方国男理事の開会のことばがあり、物故者への黙祷が捧げられた。

松井理事長の式辞の後、東京都学事部長・迫田穣氏、東京私立初等学校協会会長・人見楠郎氏、東京私立中学高等学校協会会長・吉田盛次氏、三鷹市長・坂本貞雄氏が祝辞を述べられた。

つづいて、中・高アンサンブルクラブと高等学校式典合唱団によるワーグナーの「タンホイザー」より入場行進曲が演奏された。アンサンブルクラブは、昨年から中・高の同好の生徒によって組織され、音楽科の教師と新たに講師となった田中隆英（44回生）の指導によって、ようやくオーケストラの内容を整えた。また合唱は、多年、ＮＨＫ合唱コンクールに挑戦して昨年東京都優秀校となった高校音楽部合唱団に、生徒有志とOBが加わった式典合唱団によるものであった。


松井理事長（左）と原田満寿郎先生（右）

その後、多年にわたり教諭、理事として尽力され、また学園史資料の収集と創立50周年・60周年の記念誌編纂に尽力された原田満寿郎先生に感謝状の贈呈があり、つづいて30年・20年勤続者の表彰があった。表彰された人たちを代表して、岸いわお教諭から感謝の言葉が述べられた。

引きつづき、祝電披露があり、最後に明星学園行進歌が歌われ、善方理事の閉会のことばで終了した。なお、式典の司会・進行は高校教諭の柳沢義明・瀬野卓志であった。

式典につづき、会場を高校体育館に移して祝賀会が盛大に行われた。学園を代表して依田小・中学校長の挨拶、つづいて安藤道久ＰＴＡ会長からのお祝いのことば、谷井精之助明星会（同窓会）会長の発声で乾杯、と会が進められた。司会・進行は高校教頭の加藤信夫と高校の渡辺京教諭が担当した。



永年勤続者へ花束贈呈

(2)「新しいルネサンスを切り拓く明星へ」

記念式典で、東京の私立小学校を代表して列席された人見楠郎氏（昭和女子大学理事長、小・中・高校長）はまだ若い頃、私立初等学校協会の活動のなかで、照井猪一郎理事の薫陶を受けて育った私学人のひとりだった。人見氏はお祝いのことばを次のように始められた。

人生では60年というと還暦を心からお祝いするわけですが、学校教育の場合では60年はちょうど一区切りでありまして、やっと土台がしっかりしてきたところだと思います。

明星学園のスタートは大正13年。明治期以来、教育が国の指導のまま一方的にひきずられていったなかで、ほんとうの教育を求めて成城学園の澤柳政太郎先生と同志たちが築いていった、新しい教育の風潮がありました。そのなかで、赤井米吉先生をはじめ4人の先生方が明星学園を創られました。これは私たち私学人にはたいへん貴重な歴史でございまして、この歴史を学ぶことなくして私学を語れないのであります。

照井猪一郎先生が筆になさった『呱々の声』を読みますと、私は私学人として心がふるえます。きょうは、昔をしのびながら新しいルネサンスを切り拓こうという明星学園の皆さん方にも、思い出していただければと思って読ませていただきます。

そう言って、『明星誕生ものがたり』の冒頭部分を朗読された。4人の創立同人が「明星学園建設地」と墨書した一本の標木を打ち立てた場面であった。

読み終えた人見氏は、次のようにつづけられた。

これを読むと私の心はふるえます。心がしびれるというのはこのことでしょうか。

私は中学生のころは府立2中、今の立川高校に通っておりまして、昭和4年から9年まで、中央線で明星の生徒ともよく顔を合わせました。吉祥寺から乗ってくる同年輩の中学生や、小学生を見ていますと、ほんとに豊かで、のびのびしていて、話している内容がまことにふくよかで、読んでいる本も高度ないい本でした。畑で穫れた赤カブをハンカチに包んで家に持ち帰ったりしておりました。

そういう中学生、小学生がどういう学校に通っているのか、当時私も子どもですから知らなかったのですが、今ふりかえって資料を読ませていただくと、澄みきった心境、燃えた情熱をぶっつけられた創立当時の4人の先生と、それをかこんで心をひとつにして進まれた先生方の学園であったからこそ、あのようなすばらしい子どもたちが育ったのだと、つくづく思います。…中略…


人見楠郎氏

赤井先生は、創立のときに、「明星学園は私が代表者になっているが、私のものではない。4人が創ったのだが4人のものでもない。明星学園は社会のものだ。形式は私立だが、私立ではなく、もちろん公立でもない。社会立といった方が正しいだろう。この社会立の教育の理想に賛同する者は、すべてわれわれの仲間だ」とおっしゃったということです。これは、私にはびっくりするよ

うな教えでした。

明星学園は戦前、戦中、戦後を通じて、明星の精神を貫き通しました。60年の歴史の中には、私たち私学人として感謝してもしきれない宝がたくさんあります。…中略…

そして、人見氏はこう結ばれた。

これからいよいよ、明星学園の第2期が始まります。創立者が示されたものを守り通し、小・中・高の先生はもちろん、児童・生徒諸君、卒業生や父母の方々が一体となって進まれるならば、きょうのお祝いの会が将来に対しての大きな記念碑になると思います。今後のご発展を心から祈ってやみません。〈※1〉

(3)美術展と協賛展

創立60周年記念行事のひとつとして、5月11日から15日まで、東急百貨店吉祥寺店で児童・生徒の美術展（6階）と卒業生・元保護者など学園関係の美術家による協賛展（7階）が行われた。この企画は東急側の全館あげての協力に加え、新聞報道の影響もあって入場者は予想をはるかに超え、大きな好評を得た。

児童・生徒の作品は、絵画・デザイン150点、木工・工芸9点。協賛展には下記の各氏の作品が出品された。

棟方志功、加藤清美、恩地孝四郎、佐藤多持、清水多嘉示、渡邉豊重、四田昌二、横田善夫、正木隆、西島直紀、田中岑。（敬称略）

『明星学園報』第13号（60周年記念特集号）には、この美術展と協賛展に出会った人々の感動が綴られているが、ここには指導者のひとり、中学校美術科・太田幸雄の感想を再録する。

60周年記念行事の一つとして子どもの作品展を企画していただいたことは、私たち教師にとって幸せな事だったと思います。

一同に陳列した子どもの作品の前に立った時、それは子ども自身の創った作品であると同時に私たち教師の姿がそこに在り、否応なく数年間にわたる教育実践の証となるからです。…中略…

私たち教師は、決して「子どもの芸術性を育てる」という途方もない目標など持ちあわせていません。ただ一人一人の子どもが、自分の感じたこと・考えたことを精いっぱい画面に語りつくせたかどうか—その事だけが教える側の支柱でありました。

ともかく今度の「美術展」は地元デパートという好条件もあって、学園関係者はじめ数多くの方々に観ていただきました。

2時間以上もメモを取りながら熱心に観てくれた教師らしい婦人。十数年ぶりに中学生のとき描いた自分の作品と偶然対面し、「私が描いたといったら主人認めてくれるかしら」といって感激していた卒業生。「美術クラブの生徒たちが描いた絵ですか」「この絵はほんとうに1年生が描いた絵ですか」といってとても普通授業で描いた作品とは信じられない様子でみてゆく人たち。「私の娘の絵があるの」と手放しで喜ぶお母さんは家族総出で観にきてくれました。

しかし私たちは、そんないい出会いにばかりひたってはいられないのです。

“もしかしたら自分の絵が展示されているのでは”と期待をもって観にきてくれた子ども

〈※1〉『明星学園報』No.13（1984年6月）

もいたと思います。その事を想うと、何か大きな過ちをおかしているのではという痛みを感じないわけにはゆきませんでした。

なぜなら、出品されたほんの一握りの作品（150点）は、私たちの手で選択したのですから。〈※1〉



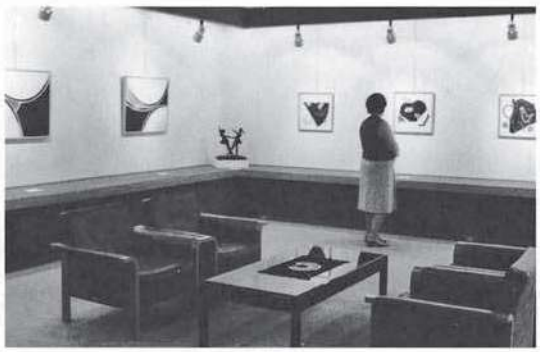
60周年記念美術展



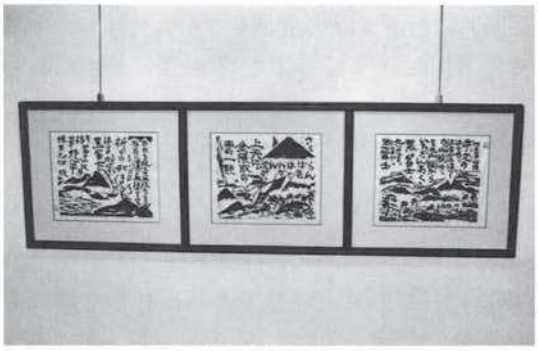
児童生徒の絵画、木工作品など



太田幸雄教諭（左）・恩地邦郎高校長（中）・
藤浦敏雄先生（元成蹊美術）（右）



協賛展



棟方志功氏作品



清水多嘉示氏作品

＜文責：依田 好照＞

〈※1〉『明星学園報』第13号（1984年6月）

(4) 実践記録の発刊

依田好照小・中学校校長のもと運営委員会が構成され、各種委員会が持たれた。その一つ、教育研究委員会を中心に3年間休刊していた『明星の教育』を1984年11月、『明星の教育5号』として再出発させた。この年以降特集号を組む形で『明星の教育』を発行するようになった。『都市を描く子どもたち』と『みる　つくる　かんがえる』は出版社の求めに応じて作成された。また教師仲間で自主的に編集された『授業をつくる』という冊子（創刊号から4号）もつくられた。このころの実践の多くは「課題授業」と呼ばれるもので、理科教師・佐藤文夫の論文がベースとなっていた。その趣旨は、「授業は1時間、1時間ひとつの課題をもってつくられる。それが順序良くつながって認識を深めていく。子どもたちは課題を主体的に受け止め、討議することで学び合っていく」というものだった。〈※2〉

80年代～90年代にかけての実践記録を一覧にすると次のようになる。

	発行年月	書　名	編　者	発行元
〈1〉	1984. 11	明星の教育　5号	『明星の教育』編集委員会	明星学園小・中学校
〈2〉	1986. 11	都市を描く子どもたち	太田幸雄	現代美術社
〈3〉	1983. 3	画集　みつめる目	太田幸雄　倉橋正美 鈴木五郎　重吉起佐子 柳沢茂美　横森サチ子	明星学園小学校
〈4〉	1991. 4	みる　つくる　かんがえる	一瀬清　辻木猪一郎 横森サチ子	ぎょうせい
〈5〉	1991. 10	明星の教育　一時間の授業 中学校編	飯田達彦　平山勲 柳沢茂美　平野康弘 和田武久	明星学園小・中学校
〈6〉	1992. 10	明星の教育　一時間の授業 小学校編	飯田達彦　平山勲 柳沢茂美　大草繁 河住貴夫　和田武久	明星学園小・中学校
〈7〉	1994. 10	明星の教育　保健体育編	河住貴夫　剛力正和 根本美愛　森村卓	明星学園小・中学校

「授業をつくる」自主グループで発刊

1)『明星の教育』

小・中の教員らによる実践記録『明星の教育』のなかから、目次を抄録する。

『明星の教育』5号（1984年11月）

小学校の実践記録
低学年での文学教育 …… 横森　サチ子
カタツムリ …… 大野　映子
アリの観察 …… 江頭　有子
とうふつくり …… 柳沢　茂美・一瀬　清
小学校の指導プラン
文学作品の読み方指導 …… 内藤　哲彦
中学校の実践記録
美術　子どもの表現と課題 …… 太田　幸雄
中学校の指導プラン
理科　運動力学 …… 山本　豊
数学　数学における文字の指導について …… 百瀬　弘
英語　中学一年の構文論 …… 大草　繁

〈※2〉 佐藤文夫、「課題」の的確な設定と「授業」（『明星の教育』4号・1981年）等

『明星の教育　1時間の授業　中学校篇』（1991年10月）

7年生の授業

ヤン・ドルタ著「ダイナマイトの番人」
——第4段階の見出しづけ—— ……亀山　平九郎
豊かな国、貧しい国 ……川手　晴雄
「ルート数」——面積5㎠の正方形の1辺の長さを表わす数は？ ……山口　一郎
遺伝のしくみ——分離の法則 ……和田　武久
「聖者の行進」を笛で、歌で ……遠藤　春幸
点対称からなる模様 ……重吉　起佐子
ハードル走——F走とH走の足跡から ……根本　美愛
デザイン：新しい商品を開発しよう ……吉村　直樹
主語と述語——述語の種類 ……姫野　英二

8年生の授業

文学作品「詩人」の授業 ……時任　重孝
オランダの東インド社会 ……古川　博資
変換と図形の幾何的性質 ……百瀬　弘
イオンと化学変化——イオンの導入 ……岡本　博行
「こわれたもの、つぶれたものたち」から ……太田　幸雄
呼吸と血液循環のしくみ ……河住　貴夫
型染 ……倉橋　正美
家具をつくる——斧・金矢・ナタと製材 ……山内　国任
受動態 ……大草　繁

9年生の授業

平家物語 ……堀内　雅人
世界恐慌の始まり ……飯田　啓介
座標幾何——デカルト座標の導入 ……平野　康弘
モルと化学変化——気体反応の法則 ……山本　豊
バレーボール——守備フォーメーション・守備システム ……熊坂　衛
織りの授業——すかし織り ……岡本　紀子
準動詞（to不定詞） ……井上　成雄

『明星の教育　1時間の授業　小学校篇』（1992年10月）

1年生の授業

算数　数の合成・分解 ……河住　由美
美術　「帽子をかぶる先生」 ……柳沢　茂美

2年生の授業

国語　「スーホの白い馬」 ……大野　映子
総合学習　和紙つくり ……一瀬　清

3年生の授業

国語　「賢太郎」 ……横森　サチ子
算数　角と角度 ……福田　純一
体育　マット運動 ……河住　貴夫
美術　春という題名の絵を描こう ……吉村　直樹

4年生の授業

国語　「ごんぎつね」 ……根岸　あずさ
体育　ハンドボール ……根本　美愛

5年生の授業

国語　「あか」……高瀬　真次
算数　三角形の面積の求め方……飯田　達彦
理科　動物と食べ物……江頭　有子
体育　バスケットボール―2人の攻撃……剛力　正和
美術　「靴を描く」……太田　幸雄
工作　木彫りのスプーン……佐藤　晃
音楽　「旅立ち」……面木　由利子

6年生の授業

国語　漢字指導……内藤　哲彦
理科　金属の酸化……平山　勲
音楽　「未知という名の船に乗り」……秋野　憲治

明星の教育　保健体育の授業　理論と実践（1994年10月）

Ⅰ．体育科教育総論……文責　根本　美愛・河住　貴夫

1. 球技運動

● 球技の技術構造……剛力　正和

実践報告

● ハンドボール……河住　貴夫
● バスケットボールの実践……剛力　正和
● サッカー……根本　美愛

2. 器械運動

● 器械運動の技術体系……文責　根本　美愛

実践報告

● マット運動……森村　卓

Ⅱ．保健

● 保健……文責　河住　貴夫

実践報告

● 人体の機能と構造……河住　貴夫
● 生殖……森村　卓
● 体を守るしくみ　―免疫―……河住　貴夫

Ⅲ．スキー

● スキーの技術構造……文責　河住　貴夫





2)『都市を描く子どもたち
―明星学園中学校、生活の絵
・10年間の記録』(1984年 現代美術社)

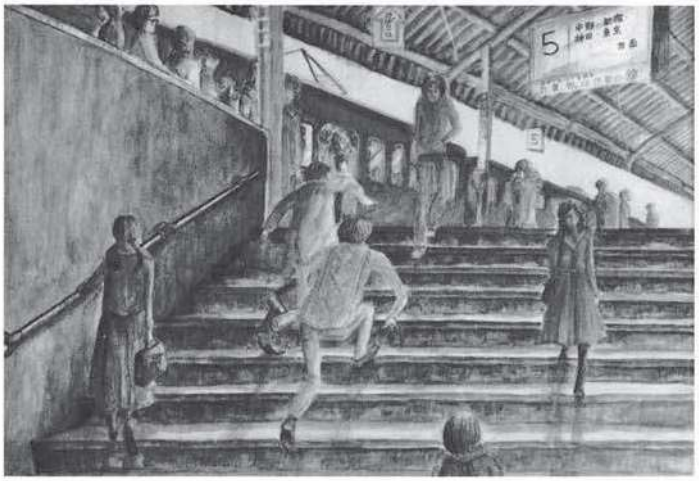


明星学園中学校の美術の授業は一つ一つの課題に明確な意図をもって絵を描いている。例えば「ビンの写生」や「皿の写生」では透明感や質感のある描き方を学び、『最初の絶望』という詩を絵にする課題では、具体的な形象と心理とのかかわりを学び、有名な画家の模写ではそっくりに描くことで構図や色づかいを学ぶというように。そして9年生ではその集大成として卒業制作に取り組む。自分のテーマを持って絵を仕上げていくのである。

都市の絵を指導した太田幸雄は次のようにその意図を考えた。

子どもの表現にとって日常的な生活の中から、自らの感性を通して、感じ、思い、考えたことを一枚の絵に凝縮していくことは大事な仕事である。人間と人間、人間と自然、人間と物というかかわりの中で、都市の断面を切り取る。「都市」というテーマは幅広い絵が可能であるので、子どもたちにとって取り組むのにふさわしいテーマである。事実、子どもたちは「都市」を多様にとらえた。駅の階段を上っていく人、団地の近くにあるごみ、裏小路でゴミをあさる犬、アクセサリーを売る女、高層ビル、ビヤホール、昼下がりのビジネス街、無限な廃棄物など。対象をしっかりみつめ、描くことでその目が深くなっていくのである。





3)『画集　みつめる目―明星学園小学校の実践』(1989年 明星学園小・中学校)



明星学園小学校の美術授業で描かれた子どもたちの絵を一冊の本にまとめた。明星の教師たちは「子どもの絵はその子ども自身の心の投影である」という事実を思い返しながら授業を行っている。この本を発行した動機について次のように述べている。

このたび美術の授業に携わっている私たち教師が中心となって絵の作品とその実践を記録としてまとめたいと考えました。

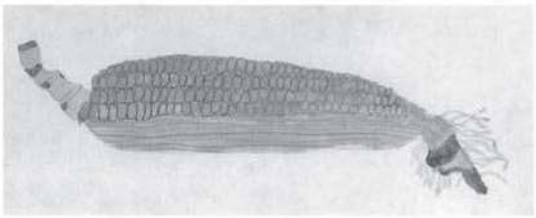
というのは、この数年間、私たちの授業の基本的考えは少しも変わってきたとは思えないのに、日々子どもたちが描く絵を見ますと、子どもたちの対象を見る目が時とともに微妙に変わってきていることが絵肌を通じて感じられます。

それは自然のことかもしれません。確かに長い時間のなかで、私たちの子どもへの対応の仕方は決して直線的ではありえないことは事実ですが、それ以上の大きな力、つまりあまりにもスピーディな生活環境のなかで都市と人、人と人、人と自然のかかわりようは、目まぐるしく変わってゆくことの影響を見逃すことはできません。

このような時、子どもの作品を記録することによって，今の教育実践の証とし、これを起点に私たちのこれからの美術教育のあり方を検討したいと考えるものです。

(「はじめに」より　太田幸雄記)

明星の美術の授業は大きく分けて三つの領域がある。



一つ目は自然・人物・物などを観察して描く。

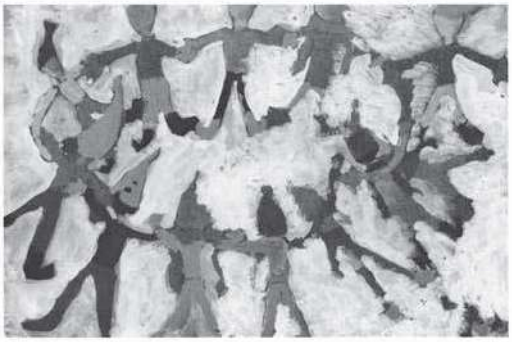
モデルを前にして、そのモデルから色、形、質、量、空間について観察して描く。子どもが目でとらえたリアリティがはっきり見えてくる。

「3年生　とうもろこし」

二つ目は物語の絵。

豊かな文章表現に刺激されて、自分で想像して描く。

「1年生　子どもの好きな神様」





三つ目は生活を題材に描く。

自分の体験した事柄を、記憶や想像力を総動員して描く。

「3年生　朝の駅と私」

4)『みる　つくる　かんがえる―明星学園小学校の総合学習』(1991年 ぎょうせい)

1989年学習指導要領改定によって小学校低学年では「理科」「社会科」が廃止され、新たに、「生活科」が特設されることになった。明星学園では低学年での「自然や社会の認識」は、早くから「読み方」、「やってみよう」というかたちで学び、後に「総合学習」として週2時間特設されていた。「総合学習」は子どもたちに自然や社会の事柄について個別的事実認識を増やすことで、高学年での法則を学ぶ学習（理科、社会）へとつなげていくものである。菜の花はさいた花の下に実ができている。ぺんぺん草はハート形の実を開くと小さな種が入っている。タンポポは綿毛をつくって種を飛ばす。そうした個別的な事実をたくさんストックすることで、「花と実（種）は関係があるのかな？」という疑問を抱える。どんぐりが種だと知った子が、「じゃあドングリに花はあるの？」と疑問を抱くのである。こうしたストックは高学年での「どんな植物も花を咲かせ、実がなる。花は子孫を残すためにあること」を確信をもって認識していく。



明星の「総合学習」は「生活科」と接点は持つが、目標は似て非なるものである。私たちは事実を知らないで環境に働きかけることはできないという考えを持っている。「生活科」に移行する必要なしと判断し、「総合学習」の充実に努めた結果をまとめ本にした。「生活科」のハウツー本が多い中に一石を投じた。

次頁に、『みる　つくる　かんがえる』の目次を抄録する。

『みる つくる かんがえる』(1991年) 目次

第1章 明星学園の総合学習 …… 佐藤 文夫・辻木 猪一郎・横森 サチ子・一瀬 清
1 生活科の問題点
2 明星学園の総合学習
[1] 理科・社会科と総合学習
[2] 総合学習の方法
(1) 読み方 (2)「ものづくり」(3) 自然観察 (4) 表現的な活動
3 総合学習の教材について
[1] 教材一覧にいついて
[2] 領域区分について

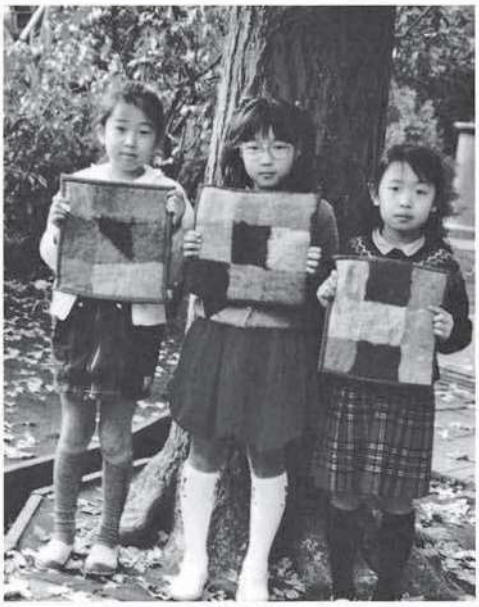
第2章 自然をみつめる
1 散歩 (2～3年) …… 横森 サチ子
[1] 学習の概要
[2]「春をみつけよう」
(1) 導入 (1時間) (2) 散歩 (4月12日、2時間)
(3) 散歩のまとめ (4月13日、2時間)
[3]「春をみつけよう」(その後の変化を追う)
(1) 散歩 (5月24日、3校時) (2)「見つけたよ」の記録 (1時間)
(3) ヘビイチゴからキイチゴへ発展 (4) 夏の終わりに (5) 秋をみつけた
2 自然観察 …… 柳沢 茂美
[1]「自然のたより」(1年)
(1) ムラサキダイコン (2) オタマジャクシ (3) うめ (4) ツバメ (5) 文字で書く
[2]「アゲハチョウの観察」(3年)
第3章 文章を手がかりに
1 コイの授業 (3年2学期：17時間) …… 辻木 猪一郎
[1] 学習の概要
(1) 教材について (2) テキストの扱い方 (3) 指導計画
[2] 実践の記録
(1) 第1課 授業への誘い (2) 第2課 井の頭池と水族館でコイを観察する
(3) 第3課 コイの食べ物とすみか (4) 第4課 コイの頭部にある器官とその働き
(5) 第5課 コイには歯があるか (6) 第6課 コイの内臓
(7) 第7課 コイの体は泳ぎやすくできている (8) 第8課 体を支える背骨、体を動かす筋肉
(9) 第9課 ひれの働き (10) 第10課 うきぶくろの役割
(11) 第11課 コイの呼吸 (12) 第12課 音の聞き取り方
(13) 第13課 うろこの働き (14) 第14課 まとめ―「あとがき」
(15) 第15課 杉浦先生のお話
[3] 学習を終えて
2 カタツムリの学習 (2年1学期：10時間) …… 大野 映子
[1] 学習の概要
(1) 教材について (2) 指導計画
[2] 実践の記録
(1) 自由観察 (2) 文章「カタツムリ」を読む
[3] 学習を終えて
3 ドングリの学習 (1年2学期：10時間) …… 柳沢 茂美
[1] 学習の概要
[2] 実践の記録
(1) ドングリを拾う―校庭で (2) ドングリで遊ぶ (3) ドングリの形の違いは木の違いであること
(4) 秋の木の実を拾う―井の頭公園の散歩 (5) ドングリは種であること

(6) 学校のなかのクヌギの木を探す (7) ドングリはたくさん落ちるのに、ドングリのなる木が少ないのはなぜ？
(8) ドングリを食べる
4 歯のはなし——自分の体の成長を知る (3年3学期：6時間) ……柳沢 茂美
[1] 学習の概要
(1) 学習のねらい (2) 教材について (3) 授業課程
[2] 授業の内容
(1) 歯は何のためにあるのか (2) 歯の形、歯の働きについて (3) 乳歯と永久歯について
(4) 虫歯について (5) お父さんとお母さんの書いた歯の作文を読む
5 地図学習 (2年1学期：5時間) ……河住 由美
[1] 学習の概要
(1) 教材について (2) 学習のねらい
[2] 実践の記録
(1)『おっかなどうぶつえんの ちず』(2) 地図探検
第4章 ものづくり
1 ビー玉すべり台づくり (1年2学期：5時間) ……一瀬 清
[1] 学習の概要
(1) 教材について (2) 目標 (3) 目標計画
[2] 実践の記録
(1) どんな遊びかイメージする (2) 紙に設計する (3) 板にビー玉の通り道をマジックでかき込む
(4) 線にそってくぎを打つ (5) ビー玉すべり台で遊ぶ
2 ポシェットづくり (1年3学期：18時間) ……横森 サチ子
[1] 学習の概要
(1) 教材について (2) 目標
[2] 学習活動
(1) 導入 (2) 道具づくり (3) たて糸かけ (4) 織る (5) 感想文を書く
3 染色から糸つむぎまで (1～3年) ……横森 サチ子
[1] 学習の概要
(1) 教材設定の理由 (2) 教材設定のための留意事項
[2] 染め紙づくり (1年1学期：24時間)
(1) 目標 (2) 学習活動
[3] ビー玉絞り染め (1年1学期：4時間)
(1) 目標 (2) 準備 (3) 学習活動
[4] 泥染め (1年2学期：14時間)
(1) 教材発見まで (2) 実践 (3) 実践のあとで
[5] 板絞り染め (2年2学期：15時間)
(1) 教材について (2) 材料 (3) 目標 (4) 活動
[6] Tシャツの絞り染め (2年2学期：6時間)
(1) 教材について (2) 目標 (3) 学習活動
[7] 羊毛を染める (1) (2年1学期：10時間)
(1) 教材について (2) 目標 (3) 学習活動
[8] 羊毛を染める (2) (2年2学期：18時間)
(1) クサギの実との出会い (2) 羊毛を染める
[9] 糸つむぎ (3年1学期：8時間)
(1) 目標 (2) 学習活動
[10] つづれ織り壁飾り (3年3学期：18時間)
(1) 目標 (2) 学習活動 (3) つづれ織りについて補足
4 フェルトづくり (3年2学期：11時間) ……一瀬 清
[1] 学習の概要
(1) 教材について (2) 目標 (3) 指導計画
[2] 実践の記録
(1) 草木染め (2) カーディング (3) フェルトづくり

5 和紙づくり（3年2学期：14時間）……深谷 あずさ・一瀬 清
[1] 学習の概要
(1) 教材について (2) 目標 (3) 指導計画
[2] 実践の記録
(1) 紙は何からできているか調べよう (2) 和紙と洋紙 (3) 和紙のつくり方 (4) 和紙づくり
6 ナイフづくり（3年3学期：7時間）……一瀬 清
[1] 学習の概要
(1) 教材について (2) 目標 (3) 指導計画
[2] 実践の記録
(1)『ナイフを作ろう』（テキスト）を読む (2) ナイフづくり
[3] 資料『ナイフを作ろう』
7 パンづくり（2年2学期：6時間）……辻木 猪一郎・大野 映子
[1] 学習の概要
(1) 教材について (2) 目標
[2] 実践の記録
8 大豆の勉強ととうふづくり（5年2学期：10時間）……高瀬 真次
[1] 学習の概要
(1) 教材について (2) 目標 (3) 指導計画
[2] 実践の記録
(1) 栄養素とその役割 (2) さまざまな大豆食品
(3) みそ・しょうゆ・納豆のつくり方 (4) とうふについて (5) とうふのつくり方
(6) とうふをつくる (7) とうふ屋さんの話を聞く



とうふづくり


フェルトづくり

＜文責：一瀬 清＞

5）高等学校研究紀要発行

昭和40年代に発刊された高等部紀要は不定期刊であったが、新設された教育研究部が編集主体となり、教科研究のみならず専門から離れた一人一研究的な幅広い原稿が収録されたところが特徴であった。1年に複数号が発行される年もあり、教職員の研究を緩やかに交流するスタイルが確立された時期であった。以下に創刊号ほか、いくつかの目次を抄録する。

◆「明星の高校教育」・創刊号・目次（1975年12月）

発刊の辞 …… 鈴木　満男
高校教育の志向するもの
　対談・明星の高校教育を語る
　――カリキュラム編成の基本的な考え方について―― …… 佐藤　嗣男・生徒
　生徒指導の来し方行く末 …… 高橋　昭八
　進路指導をめぐって …… 井部　高志
　教育社会 …… 上田　八郎
　募集対策をめぐって …… 恩地　邦郎
授業・H.R・クラブ
　数学は何故必修なのか？ …… 鈴木　雅子
　H・Rの年間計画がほしい …… 岸　すみれ
　バスケット部の内側から
　――自由と規律―― …… 上川　淳
私の研究
　科学史点描
　――寛文の円周率―― …… たさき　とおる
　第5次野尻湖底発掘調査について …… 村崎　洋
　国府施政下の台湾 ……
渡邊　伸之
随想
　ヨーロッパ・トイレット談戯 …… 恩地　邦郎
短信 …… 野口　淳

◆「明星の高校教育」・第2号・目次（1977年12月）

巻頭言 …… 加藤　信夫
明星教育の志向するもの
　〈生活〉教育の課題 …… 大平　初枝
　資料・教育研究部ニュースの歩み
私の研究
　関根正二と青春 …… 西島　直紀
　カルロ・クリヴェリについて
　〈ゴシックとルネッサンス、
　その交差するものの反映として〉 …… 恩地　邦郎
　台湾小史
　――1945年8月まで―― …… 渡辺　伸之
　超越的契機と関係性
　――「浅茅が宿」試論―― …… 鴨　顕隆

◆「明星の高校教育」・第3号・目次（1978年5月）

「論」……鈴木 満男
私の研究
明星生の体力並びに運動の実態
——運動能力、運動意識、運動の実施状況に関する研究——……高橋 幸悦
科学史点描 その2（和算における円周率）……たさき とおる
教科書にみるソビエトの生物学教育……米原 ゆり
台湾の教育……渡辺 伸之
高校教育の志向するもの
「言語科」教材の自主作成を目指して……佐藤 嗣男
生活科「生いたちから学ぶ保育園」……大平 初枝
社会科研究ノート（1）……野口 淳
数学の授業の工夫……鈴木 雅子
随想
校内放送から考えること……田中 一水
継母日記……高橋 昭八

◆「明星の高校教育」・第4号・目次（1978年12月）

「よだかの星」から……恩地 邦郎
明星の伝統……堀 淳二
歴史教育と民衆……上川 淳
芥川文学にける“迷信"との対決……荒川 有史

◆「明星の高校教育」・第5号・目次（1979年7月）

現代の音楽……土橋 光彦
科学史点描 その3（和算における円周率）……たさき とおる
中国語講座をなぜはじめたか？……渡邊 信一
〈生活科〉保育学習……大平 初枝・鷲谷 美子
明星にきて……坂本 武

◆「明星の高校教育」・第6号・目次（1980年7月21日）

御門訴事件と古賀定雄……野口 淳
現代の音楽（2）……土橋 光彦
ティーム・ティーチング その1……谷口 慶子
アメリカの小・中・高の教育……鈴木 雅子
科学史点描 その4（和算における円周率）……たさき とおる

◆「明星の高校教育」・第7号・目次

抽象と具体……斎藤 顕隆
感じたことと考えていること……東川 ゆう子
著書案内……（研究部）
指数と実数の話……加賀谷 俊夫
コンピューター研究会の1年……大橋 弘忠
シベリアにおける皆既日食……武者小路 知行

◆明星―明星学園高校紀要 8（1986 年 3 月）〈※ 1〉

現代を生きる人間の課題 …… 田崎　中
明星性の健康度・生活意識・生活状態について …… 高橋　幸悦
男女共学「生活科」への実現に至る経過 …… 大平　初枝
中国語研修台湾旅行報告 …… 渡辺　信一
詩集　塔 …… 井部　高志
明星の思い出 …… 土屋　浩
給料と教育 …… 葛城　八十雄
時事英語二年目のイメージ …… 吉沢　真人
これでいいのかしらん？ …… 森田　小夜子
開高健「裸の王様」論
「行列」を一次変換で …… 鈴木　雅子
教育研究ニュース第11号～ 17号

◆明星―明星学園高校紀要 9（1987 年 9 月）

ゲーデルの不完全性定理について …… 鈴木　貴之
フランシス・プーランク …… 間宮　かおる
COMUNICATIVE SYLLABUS FOR TEACHING
BEGINNINNG ENGLISH CONVERSATION …… Tim Mclean
国語表現の授業をめぐって …… 村田　修二
生化学実験にとりくんで …… 後藤　紀子
発声 …… 松尾　健市
屈折しなお已まぬ理想＜自分の中の大正デモクラシー＞ …… 恩地　邦郎
国定忠治　一幕四場 …… 脚本　斉藤　顕隆

◆明星―明星学園高校紀要 10（1989 年 1 月）

現代社会と国際関係―私はなぜ言語問題を教えるのか― …… 瀬野　卓志
走る …… 中村　豊
THE TIME OF "M c Carthyism" …… 山内　佳子
古代における自我の史的考察 …… 井口　芳雄
金環日食観測隊沖縄遠征 …… 武者小路　知行
「実験化学」の授業から …… 工藤　一義

◆明星―明星学園高校紀要 11（1991 年 6 月）

鴨長明伝 …… 岡田　恵子
玉川上水べりの植物 …… 田中　一水
現代アメリカ文学にみる青少年像 …… 花尻　恭子
私の明星学園高校戦後昭和史 …… 柳沢　義明
戦後明星学園エピソード史（1）上田八一郎校長編 …… 柳沢　義明

＜構成：野口 淳＞

〈※1〉8号以降は名称を変更し発行が続けられた。

第4章「学校週5日制」

1　学校週5日制

明星学園では小学校・中学校において「学校週5日制」を1997（平成9）年度から実施した。「明星らしい学校5日制」をめざし、教職員、理事会、保護者で6年かけて検討した結果、実施に至ったのである。その考え方、その過程を追う。

公立学校ではすでに2年後の1999年、完全5日制を実施することが決まっており、それまで隔週5日制となっていた。社会的には、労働条件改善の社会的・国際的な要請として、官庁・企業では週休2日制が実施に移っていた。教育の問題としては文科省の方針「ゆとり教育」をめざし、指導要領も教育内容の削減の方向性であった。私学においても、公立に合わせて5日制にするよう、行政からは強い要請があった。当時、高等学校は週6日制であって、教師は日曜日以外に1日の研究日があった。授業時数の確保、選択授業の維持は重要な問題であったので、週5日制には移行できないと考えていた。一方、小・中学校では、土曜日は休みという保護者が増えたこともあり、土曜の休みは可能と考えていた。理事会は学園内での統一を考えていたが、小・中学校での週5日制を認める判断に達した。こうして、小・中学校は、「明星らしい5日制」を目指したのであった。

1996年4月17日、明星学園小・中学校5日制委員会は、保護者あてに、次のような主旨の手紙を配布した。1997（平成9）年度からの学校5日制実施に向けての準備に入ること、家庭でもＰＴＡでも保護者会でも議論を進め、より豊かな5日制となるようにしていきたいという報告であった。次のような考え方がベースとなっていた。

学校5日制の主旨――学校・家庭・地域の分担

子どもたちの成長にとって、家庭・地域・学校のはたす教育力は、それぞれが質の違いを持っています。

明星学園では、独自に編成した教科課程にのっとって、文化の諸分野における体系的な知識を、子どもたちの認識のレベルに合わせて伝えることを目標としてきました。そのことが学校というものの基本的な役割であると考えるからです。そしてそういう学習の中で、自ら考え、発見していく能力をも身に着けてほしいと願っているのです。

しかし子どもたちが真の意味で生きる力を身に着けるには、それだけで十分とは言えません。学校・家庭・地域それぞれが持つ教育力が発揮されることが重要であると考えます。今何よりも問題なのは、今日の子どもたちには、遊び、自然体験、社会体験、生活体験が著しく不足していることです。またかつてのように働く親の後ろ姿から人間の生き方を学びとり、生活の範囲内でほぼ社会の原型をつかむことができた時代とちがい、今日の子どもたちの学校を中心とする生活の範囲内では、社会を構成する諸分野にどんなものがあり、またその諸分野の有機的な関連がどのようなものであるかをイメージすることはできなくなっています。

もちろん学校には、見学、遠足、修学旅行などの行事もあります。しかし、時間と空間が限定された学校行事でそれを補うことは非常に困難です。

5日制によって生まれる時間的余裕を子どもたちが主体的に活用し、自己の世界を広げていくために役立ててほしいのです。家庭とともに、または友人や地域の人たちと一緒にあるいは自分一人で、ふだん学校の授業や学校生活ではできない体験を積んでいくことを期待し

ています。

一方で、5日制を実施するということになれば、学校では、各教科のなかでいかに教育していくかという本来の学校のあり方が、これまで以上に問われることになります。後略…〈※1〉

こうした基本的な考えのもと、課題を整理し、具体的なことを検討していくことになった。

1. 時間数が減少する教科の対応について
   教育内容の再編成と教材の精選、授業の方法の工夫を行うことで対応していく。学ぶべき教材の内容変更は行わない。習熟は日常的な活動として組織していく。教材の構造的な理解（「わかる」ということ）によってその習熟は高まる。これまでの教材研究、授業研究の積み重ねがそれを可能にする。
2. 授業時数の確保について
   ① 6時間目の授業を行う日を増やす。
   ② 1学期、2学期、3学期の始業日をはやめる。
   ③ 始業式、終業式、卒業式、父母参観日、運動会、公開研究会、発表会などの行事を土曜日に行うこともある。その場合、代休日を設けない。
3. 土曜日の取り扱いについて
   ① 原則としてクラブ活動は行わないが、公式戦や発表会等の活動を認める。
   ② 教師の自発的な活動、父母やＰＴＡの自発的な活動を保証する。申し出があれば学校施設を開放する。具体的には、登山、ものつくり、サッカー、釣り、キャンプ、鑑賞会、講演会、読書会などの企画が検討されている。
4. 教師の労働について
   教師は土曜日、日曜日を休日とする。

このような考えのもと、小・中学校では1996年7月に保護者に対して5日制に関するアンケート調査を行った。

アンケートを集約した結果、おおむね賛成の結果が得られた。寄せられた記述意見は次の通りであった。

① 子どもにゆとりがあることは賛成。子どもたちは通学、人間関係で疲れている。好きなことをやる時間、家族と一緒に過ごす時間があるほうがいい。
② 父母は毎週子どもにつき合いきれない、地域に受け皿がないという不安がある。
③ 土曜日にクラブ活動、ボランティア活動をしてほしい。
④ 学力低下が心配である。大学進学への配慮をお願いする。
⑤ 小・中学校の子どもと教師の接触が少なくなってしまう。

こうして1997年実施に向けて準備が進められた。理事会は5日制には賛成だが、6・6体制の移行と並行して行われるべき、高校も含めて全学園的な体制をとることを要求。実施時期に関して教職員と意見の食い違いがあった。

1997年1月31日、5日制に関する全園父母集会が開催された。その中で、理事会から「試行」

として1997年度4月より5日制を開始し、毎年見直しを図っていくことが表明された。

資料として報告された主な内容は、

① 授業時間確保のため従来より学期の始業日を早め、終業日を遅くすることで授業日数を確保する。
② 父母参観日、運動会、公開研究会、学習発表会を土曜日に行い、代休日を取らない。
③ 6時間授業の日を増やす。
④ 小学校は国語、算数、体育、美術が週当たり授業数減、中学校は国語、理科、社会が週当たり時間数減とする。
⑤ 土曜日の扱いについては学校を開放する。その運営に当たっては「学校開放運営委員会」を設置し、企画運営していく。土曜日に教師の日直を置く。

こうして1997年4月より、小・中学校は週5日制となった。5日制は「試行」であり、年ごとに見直していくこととなった。

2年目の総括の主な内容は以下のようになり、「明星らしい5日制」が少しずつ形になっていった。

① 5日制にともない始業を早めた授業時間数に変更のない教科は授業時数が増えた。授業時間数減の変更のあった教科では、カリキュラムの変更はせず、教材の精選、授業方法の改善が進んでいる。
② 土曜日の活動がいくつも具体的に展開され始めた。
ＰＴＡや父母有志、教師と父母が主催する、在校生・卒業生対象のサークル活動が盛んになってきた。
ものつくり教室／読み聞かせの会／朗読クラブ／親と教師のドル平水泳教室／親のバレーボール／近郊の山に登る会／明星フットボールクラブ／ファミリースキー教室／学級親子お楽しみ会／理科教室／楽器の練習
③ 学校の施設、グラウンドはフル運転状況である。
④ ＰＴＡの活動は土曜日に集中して実施された。

その後、小学校は週5日制を継続しているが、中学校は中学・高等学校一貫化にともない、2006（平成18）年度から週6日制となっている。


ものつくりクラブ


明星フットボールクラブ合宿

＜文責：一瀬 清＞

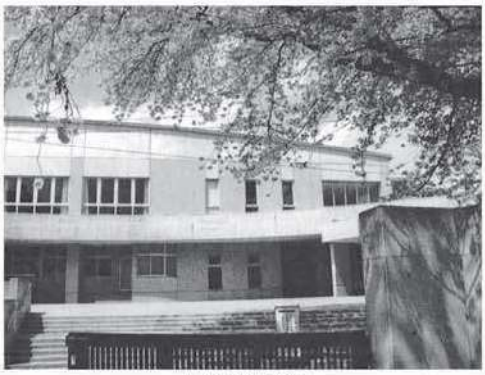
〈※1〉 5日制委員会 1996年4月17日付 保護者への手紙

2　小学校校舎建築

(1) 新校舎建築

小学校校舎及び特別教室棟の改築は、1994年、創立70周年の記念行事の一環として計画された。当初、中学校校舎建て替え、引き続いて小学校校舎を建て替える予定だったが、1998年「21世紀構想委員会」の答申により、小学校校舎建て替えを優先して進めることになった。中学校の高校敷地への移転の決定と小学校校舎の老朽化のための対応だった。小・中建築委員会、学園建築委員会（委員長安藤通久理事）のもとで本格的に改築工事に向けて活動が始まった。

1999年7月17日、旧校舎を取り壊す工事の直前、校舎とのお別れイベント「さよなら校舎」が明星会（同窓会）主催で開かれた。在校生から卒業生まで幅広い年代の「明星生」が集まった。久しぶりに母校を訪れる人もたくさんいた。コンサートやフットサル大会、講演会、タイムカプセル発掘などが行われた。なかにはお泊まり会も企画され、夜の校舎に集まった子どもたちはわくわく、ドキドキの連続であった。


小学校新校舎

「壊してみると、旧校舎は頑丈にできていたことがはっきりわかった」。学園建築委員長の安藤氏の言葉であった。巨木に成長したプラタナスの木を残し、いちょうの木は移植された。

建築に当たっては子どもたちの健康を守ることを最大限考慮した。シックハウス症候群への対応に真剣に取り組んだ。設計や施行段階で建築資材を吟味したり、施工技術の工夫がなされた。このことには保護者の要請と強力な支援があった。内装となる木材を、間伐材にすべく手配、仮設校舎に空気清浄器を寄付、ホルムアルデヒドの測定器を寄付して下さった。着工と同時にモデルルームを設け、VOCとホルムアルデヒドの測定を専門業者に依頼した。シックハウス症候群の臨床と研究の第一人者である北里大学研究所病院の宮田幹夫先生に来校していただき、評価していただいた。教室内の有害物質の濃度はガイドラインの半分以下であるという評価をいただいた。新校舎の特徴は次の6点があげられる。


小学校新校舎

1. 旧校舎の特徴であるジグザグ校舎の形を残した。
2. 教室の壁は杉のムク材、教室の床と廊下は桧のムク材とし、ホルムアルデヒドを極力抑えた。木のぬくもりのある内装となった。
3. 教室前にウッドデッキを設置、子どもたちが外に出やすい工夫を行った。
4. 1時間に3回半、外気と入れ替える能力を持つ空調換気システムを取り入れた。
5. 1、2年生の教室は平屋とし、3、4年生の教室の上に5、6年生の教室を配置し、2階は回廊とした。
6. いちょうのホールをつくり、小集会、小公演が可能となった。

＜文責：一瀬 清＞

(2) 旧校舎お別れ会

旧校舎とのお別れイベントにおとずれた学校関係者から、その後、主催した明星会（同窓会）にたくさんの報告や感想が寄せられた。明星会会報に掲載されたなかから、明星で過ごした子ども時代を思い出しつつ記された、卒業生の一文を紹介する。

「さよなら」よりも「ありがとう」　増田 太郎（54回生・ヴァイオリニスト）

当時のクラスメートとの待ち合わせは、あのころと同じ井の頭公園駅の改札口。朝の光の中、ランドセルを背負って通った通学路を、晴れた夏の静かな午後に並んで歩く。何年ぶりのことだろう。当時お医者さんだった場所が駐車場に、自転車屋さんやパン屋さんもレンタルビデオ店やコンビニへと姿を変えていた。やはり歩く速さもあのころとは違うのか、体が覚えている時間よりも早く、ぼくらは学校の近くまでやってきた。


正門広場のフリーマーケット

この日のイベントが、ついに数日後に取り壊しをひかえた校舎にお礼とお別れを言うことのできる最後のチャンスだったので、現役の小学生からおじいちゃんおばあちゃんまで、学校はたくさんの人たちでごったがえしているらしく、にぎやかな声は校門のずいぶん手前から聞こえていた。

校門を入ってすぐ、当時のクラスメートにばったり遭遇。一言あいさつしただけで会ってなかった時間はふき飛んだ。「やっぱみんな来てるんだ」妙にうれしく、妙に納得したりしながら、小学生のころには信じられないことだけど、土足のまま教室に入る。

「こんなにちっちゃかったっけ？！」

椅子や机が運び出された教室の真ん中に立って、真っ先に感じたのはこんなこと。


アンサンブル部の喫茶店

そりゃそうだよな。あのころとっても大きく見えた、当時教育実習に来ていたお兄さんより年上になったぼく。

妙にやわらかく感じる板張りの床。体育の時間には机と椅子をガラガラと引きずりながら下げ、床に先生がチョークで円を描いて土俵を作り、そこで相撲を取った。クラスの女の子がしちゃったおもらしも、授業中あまりにも騒がしくしていて、先生に一本背追いで投げ飛ばされた悪ガキも、時にははやし立て、時には絶句しているぼくらの足元で、木の床は静かに受けとめていた。放課後に床に白いワックスをまいて、モップをもって教室中走り回るのも、掃除というより遊びみたいで楽しかった。ぼくはこの、なんでも受けとめてくれるような、やわらかくてあたたかい木の床のある教室が好きだった。やっぱりなつかしいなぁ。

「壁新聞を貼り出しだのはこの辺だったよね」

4年生のころからだったかな。ぼくと友だちと二人の名前を取った「まだあめ新聞」を、放課後に作っては教室の掲示板に貼り出した。そして壁新聞ブーム到来。ぼくら男子は「凸凹新聞社」を結成。「凸凹スポーツ」なんてスポーツ紙まで含め、さまざまな壁新聞を発行。ぼくはそこの社長に就任した。


教室で開かれた暮らし方講座

そんな中、クラスでもダントツの発行部数を誇っていた「のじはじ新聞」を作っていたのじ君が転校してしまうことになり、彼が登校してくる最後の朝のホームルームでは、その偉業に対して凸凹新聞社から感謝状を手渡した。のじ君とはこの十数年後に再会することになるのだが、その時彼が今でも感謝状を大切にしてくれていると聞きとってもうれしかった。


教室の前庭でタイムカプセル発掘

そして数年前、幹事のぼくらも驚くほどの出席率で開かれたはじめての同窓会に合わせ、「凸凹新聞」が復活。十数年前、小学生の手書きの絵と文字が藁半紙の上で踊っていた壁新聞は教室の掲示板を飛び出し、パソコンを駆使した電子新聞へと形を変え、今では画面読み上げソフトを搭載したパソコンを使っているぼくの耳へも、掲載写真説明の文章付きという「スペシャルメール版」としてしっかり配達された。スピーカーから流れてくる、記事を読み上げるパソコンの音声はたしかに無機質ではあったけど、頭の中であのころの出来事や色鮮やかな映像と空気感、ともだちの声、その他さまざまな記憶を呼び起こし、ぼくをわくわくさせるには充分すぎるものだった。

木造校舎取り壊しが決まった時もあめ君とのじ君は現地取材を敢行。「凸凹新聞特別号〜さよならわれらのジグザグ校舎〜」を作り上げ、なつかしいエピソード満載で届けてくれた。そこからは育ててくれた母校や校舎への強い愛情と誇りも伝わってきて、なんだかぼくもいっしょにあのなつかしい校舎の周りを歩いたり、キンモクセイの木の下に立っているような気持ちにさせてくれた。



「先生の机はこのあたりにあったよね」

遠足で行った登山についての作文をさっさと書き上げ、当日休みが重なってついてきてくれていた父が撮った写真を友だちの机まで配って歩いていたら、教室のすみでぼくの作文を読んでいた先生に呼ばれた。

「まだ作文書いてるヤツに、どうしてお前は写真なんか配るんだ。そっちが気になってちっとも作文に身が入らなくなっちゃったじゃないか。どうするん



だ、お前の責任だぞ」。この時の「責任」という言葉の重さ、今でもズッシリと胸に残っている。きっとその時ぼくに写真をもらい、作文を書き上げるよりもそっちに夢中になっちゃった娘はもちろん、ぼくを叱った先生も、そんなことがあったなんて覚えてはいないだろうけれど、こんな思い出たち、つまり今のぼくをつくってる成分が、いっぱい、いっぱいつまってる。いわゆる授業科目以外にも、ほんとうにいろんなことを教わった。

音楽室に入ると、20人くらいの人たちがなにやらピアノの周りで声を出している。ただ「歌」ってるというよりはなにかを探ってるって感じ。そこにいた音楽の先生に「どうしたの？」とたずねると、「最後にみんなであのころ習った〈沖縄〉を合唱したいのだけど譜面もないし、誰も伴奏できないんだ」とのこと。「コードくらいならわかるから、ぼくがピアノ弾こうか？！」そんな言葉が思わず口をつき、生まれてはじめて合唱の伴奏なんてものをやってしまった。ここに置いてあるピアノの音色は大好きだったから、休み時間や放課後に何度も弾いて遊んだっけ。こんな形でまた弾くことができるなんて、なんて運がいいんだろう。

ピアノの前に座り、オリジナルのキーで伴奏しようとしたら、四方から飛んでくる「そんなに高かったっけ？！」という声。あれからどれだけ時が流れたかということを思わぬ形で再認識したりして。卒業してからはその曲を歌うことなく過ごしてたけれど、歌詞もメロディもちゃんと思い出せた。みんなピアノの周りに集まって、ソプラノやテノールなど、当時習ったパートをそのまま歌っている。中学校卒業以来、十数年ぶりに感じるハーモニー。それは今音楽室で歌えているよろこびや感謝、誇り、そして愛情にあふれていた。



音楽室で上田八郎先生のお話

ぼくも自分が音楽室最後の合唱伴奏者になったことを、光栄に感じずにはいられなかった。そこにいたみんなの時間の流れはリズムに乗ってひとつになり、うねりとなって曲のフィナーレへとなだれ込んでいった。

最後の和音はDのコードだった。それが鳴りやむと同時に音楽室は拍手に包まれた。みんな笑いながら歓声を上げている。伴奏したぼくにお礼なんて言ってくれる人もいたけれど、お礼を言いたいのはこっちの方だ。みんなこの数分間だけ結成されたこの時限りの合唱団のメンバー一人ひとりに、今日また新しい思い出をくれた音楽室に、そして今ここにい



木工室前で

る自分自身に拍手をしているみたいに見えた。もちろんぼくもそんな中の一人だった。


旧女学校教室で原田満寿郎先生のお話

ほんとうにたくさんの思い出をくれた校舎へのお別れとお礼を胸に、何年ぶりで偶然顔を合わせた元クラスメート数人と即席同窓会へとなだれ込む。イタリア人と結婚してデザイナーやってるヤツ、クラシックの声楽家になったヤツ、子連れで参加してるヤツ……。みんな笑っている。

この日井の頭公園駅でぼくと待ち合わせた、いっしょに壁新聞を作っていたあめ君は、取り壊される校舎の廊下の柱についていたベル2個と、教室の下駄箱に敷いてあった簀子(すのこ)を大事そうにかかえながら飲み会に参加している。「いくらなんでもそこまでしなくっても……」とは思ったけれど、彼の並々ならぬ校舎への愛情を感じずにはいられなかった。そんな彼は勤めていた会社を辞め、いまでは明星の先生だ。

サルサの流れる居酒屋で、ぼくらはビールを飲みながら、「あの頃」ではなく、現在進行形の自分の話をした。あちこちから笑い声が聴こえる。やっぱいいもんだな。

大好きな教室や校舎。今はもうなくなってしまった。

でもだいじょうぶ。ぼくは胸を張って、あそこで経験したこと、あそこで出会った人たちのことを、これからもいっぱいしゃべりまくるから。

「あのころ過ごした教室は、もうぼくらには狭い場所になったから、これからはもっと広い世界に飛び出して、その中でみんなとつながっていけばいいんだ」

これがあの教室で、ぼくが最後に学んだことかもしれない。

なつかしさだけじゃなく、今でも刺激をくれ続ける愛すべき木造校舎、ほんとうに、ほんとうにありがとう。〈※1〉


校舎への感謝と子どもたちの明るい未来を願って「さよなら校舎 お泊まり会」の夜に行なった祭り

＜構成：大草 美紀＞

〈※1〉『明星会会報』2000初夏第2部(2000年5月31日)掲載、本誌転載にあたり筆者が加筆修正

第５部　原点をみつめ未来をひらく

2000年～90周年（2014年）





第1章　6・6制への道のり

1 「6・6制」の構想

現在実施されている小学校6年、中・高6年の学園運営体制は、2006年4月から始まった。中学校と高等学校がひとつの組織体（1校長・2教頭）となり、新たに出発したのである。1994年に当時の学園理事会（松井憲紀理事長）による「中長期の運営方針」に謳われた12年一貫6・6制は、当初の予定であった1997年から12年を経て、ようやく端緒についたのである。中長期の運営方針では実施まで3年と想定されたことが、実際はその4倍もの年月を要した。

ここでは、方針の提示から実施までの12年間の歩みとともに、学園を取り巻く時代状況、学園内部の情勢の中で、多くの課題を克服してきた過程を整理する。

(1)6・6制検討委員会(1995年6月～1996年1月)

「中長期の運営方針」とその背景

1994年10月12日、学園理事会（松井憲紀理事長）は、「一貫教育達成のため6・6制を3年かけて実施していく」を主内容とする「中長期の運営方針」を教職員に提示した。

その柱は、

1. 小学校は現地点に建設する
2. 小学校は3クラス制とする
3. 中学校は高校キャンパスに併設することを目標とする
4. 全体のクラス数、学内定数の検討をする

の4本であった。

この運営方針が示された1994年の時点では、高校は、「基本方針として賛成、細部は今後検討する」とし、小・中学校は「明星教育の本質にかかわる問題であるから教職員の考え方を十分尊重してほしい」という立ち位置を表明したのみであった。

この運営方針により、理事代表と教職員代表による「6・6制検討委員会」が設置された（1995年6月）。

「6・6制検討委員会」の経過と結論

中長期運営方針の背景と学園の危機的状況と展望、学園の現状と問題点、今後の展望、学園の他校にない良いところの検討、小・中・高の教育観とその違いについて議論があり、最後に答申が作成された。

答申（1996年1月16日）

① 「明星学園の教育の目指すもの」では社会に期待される「明星生像」を明らかにするべきこと

② 「定員確保と質の向上」では、教育の質の向上と全学園的な募集態勢の必要性

③ 「6・6制について」では、小中と高のギャップの大きさに戸惑いながら、生徒の幸せは小・中・高のベクトルをひとつにしなければかなえられないとして、まず、合同教科研究会などのできることから始めてギャップを埋めていく提案となった。

④ 6・6制を推進するために「6・6制推進委員会」を設置する。

しかし、6・6制検討委員会の答申を迎える前に、松井理事長兼高校長が逝去し、理事会・高等学校の運営体制は変更を余儀なくされ、「6・6制推進委員会」を設置する答申も実行されず、1997年を迎えた。

答申の意義

「明星生像」の確立が重要という指摘は本質的に重い意味があった。小・中・高12年を貫いた教育でどのような人間像をめざすのか。その過程にある小・中・高それぞれ、どのような生徒像を描くか。生徒像は学園像と切り離せず、また、それなしに、教育目標やカリキュラムを構築することもできないからである。他の項目についてはすぐに具体的な成果は望めないが、答申に応えようとする機運は高めたといえよう。

(2)21世紀学園構想委員会(1997年9月～1998年9月)

新理事長の就任にともない、「中長期の運営方針」(1994年)は構成メンバーを改め、検討されることとなった。以前の「6・6制検討委員会」と比べて、PTA代表、評議員代表を新たに参加させたことが理事会の姿勢の変化を表していた。それはこの間、父母・卒業生らの発言力が強まり、理事会がそれを受け入れた証左でもあった。松井理事長の後を引き継いだ手塚光雄新理事長は「この委員会は、理事会の『中長期の運営方針』を原案として検討するため、理事会が提案し教職員の賛同を得て、評議員会、PTAの代表をも含めて発足した、まさに全学園的な委員会でした」と述べた。〈※1〉

この委員会は1997年9月12日に第1回目の会議を持ち、以後、16回の会議を経て、全園教職員会議に5項目の提案を含む「学園構想」を提案、そこでの採決を得て、1998年9月11日に理事長に答申をした。

答　申

I. 校舎建築について
   ① 当面、小学校2クラス体制を基本として、現小学校校舎と現木造の特別教室の建築に着手する
   ② 現高等学校敷地に10年次の学力充実を目的とした8クラス編成のための教室増設を必要に応じて行うことができる

II. 近い将来中・高を同一キャンパスとし6・6制を実現する
   そのため2003年（平成15）3月までに具体的な案を作成する

III. 12年一貫教育の実現に向けて
   ① 人事交流の実施
   ② 系統的なカリキュラムの作成を行う
   ③ 合同の教科会、委員会、校教務会を定期的に行う

IV. 学園の教育運営体制については当面2校長2教頭制とする

V. 6・6制を目指し中・高建築委員会（仮称）を新たに設置し準備する

〈※1〉「21世紀学園構想委員会の答申を受けての学園運営方針」、1998年(平成10)10月7日

答申は付帯事項によって達成すべき年月を明記し、具体的な取り組みを強く促すものとなった。たとえば、Ⅲの①、人事交流の実施については、2001年3月末（2000年度末）までに具体案を考える、Ⅲの②、系統的なカリキュラムの作成については、完成までに三段階おき、完成を2000年度末までとした。Ⅴの6・6制を目指すため、新たに中・高建築委員会を設置し、2003年3月までに校舎建築に関する見通しを検討し提案、報告するなど、である。

中間報告を経て、最終的に、全園教職員会議で採決が行われ、6・6制が採択された。



中学生の木工作品

(3)社会の情勢と明星学園

まず、児童・生徒確保をめぐる少子化の影響を述べる必要がある。少子化が進むなか、私立の高等学校は、新規に中学校を作り、受験は中学だけで、その後6年間の教育で希望の進学をかなえる中・高一貫教育に方針を変えようとしていた。これは、高校受験をしなくて済むという点、中・高6年かけてじっくり教育するという点で、親や受験生に評判がよく、中・高一貫という謳い文句も旧制中学の文化を想起させて、世間に受けたのである。他方、新たに小学校をつくり、初等教育段階から生徒を確保しようとする傾向も顕著になってきた。さらに、少子化の波は伝統のある男子校、女子校を共学化に踏み切らせていく。

一方、国・公立の高等学校のなかにさえ、中等教育学校と称して、中・高の一貫化を目指すところもでてきた。これらは、私学に生徒を奪われる危機感の反映といえた。こうして、1990年代半ばに入ると、児童・生徒というパイをめぐる激しい争いが急速に加速していったのである。

教育の面では、国際化、経済のグローバル化の進行で小学校の情報教育、英語教育の導入が焦眉の課題になっていった。

児童・生徒募集は変革期を迎えていた。学校が児童を選ぶのではなく、親が学校を選ぶ時代になろうとしていたのである。父母は学校選択に対して、前もって十分に資料をそろえ、熟読し、その上で説明会に臨むように変ってきていた。しかも、インターネットを利用する層が増えてきた。したがって、親の知りたいことが的確な言葉で文章化され、視覚に訴える学校案内パンフレットの作成やウェブサイトの開設が求められていた。明星学園でも、学校案内パンフレットをより学校像がわかりやすいものに変えた。イメージ写真中心だったものから、学校の方針、教科のコンセプト、授業の様子を簡潔に表すものに一新した。また、小・中・高統一した学園のウェブサイトを立ち上げた。児童・生徒を募集する活動を「生徒募集」から「入学広報」へと名を変えたのも、実態に即したものだった。

小学校の英語授業開始

今でこそ、小学校の英語授業、中学校のオーラル授業、海外への短期留学は当たり前になっているが、しかし、小学校英語教育導入への路は非常に厳しく、開始は2002年度まで待たねばなら

なかった。

小学校への英語教育導入をめぐって、学内では激しい議論があった。英語を学習する前に日本語の学習を重視すべしという意見、小学校で英語は不必要という意見、現在ある教科の時間数を減らして英語を新設することに反対という意見など。一般社会でも小学校英語の是非の論議はあったが、どのような英語教育をやるべきかという論議は未成熟であった。その事情は明星でも共通であった。

難産ではあったが、英語教育の開始は2002年度と決まった。当時はまだ一般化されていなかったが、1年生から開始し、週2時間、2人体制、内1人はネイティブという授業が始まった。説明会と組み合わせた授業参観の日、英語の授業見学に集まる父母の数が多かった。

小学校で英語の授業が始まると、翌年から中学でオーラルの授業が開始された。そして英語圏への短期留学行事や、高校に来ている留学生と小･中児童生徒との間の交流授業や交流行事が始まった。

先に述べた小学校の英語教育導入により、小・中・高の英語科は、英語教育の12年一貫カリキュラムをどのように構想するか、という課題に向きあうことになった。小学校では、耳でネイティブの英語になれ親しみ活動するのだとすれば、文法中心だった中学段階での英語教育の中でオーラルはどうするのか、などの課題があった。

ネイティブの講師とともに教えるスタッフとして、中学や高校から英語科の教員が小学校の授業に参加するようになった。その結果、小学校の児童・教員とネイティブの講師、中学や高校からの英語科の教員との交流が始まったが、それは自然の成り行きといえる。

国際交流の間口も、この小学校の英語教育導入により、広がった。国際化では先を行っている高校から留学生が英語の授業に参加したり、交流会が持たれたりするようになった。小学生の海外短期留学体験もスタートした。

高校の対応

4・4・4制の廃止以来、高校は二つの大きな問題を長期間抱えていた。ひとつは、生徒募集上の危機感であり、もうひとつは、生徒の大幅な学力差であった。しかし、この大きな問題は、同時に、高校の教育運動・制度改革・教育改革の契機にもなった。

在籍する生徒が充実した教育を受け、希望する進路を実現できるよう、また、入学広報の面では、学校の魅力をどのようにアピールできるか、継続した努力が行われた。

教育改革の面では、基礎的学力を固め、好きな分野の学習を掘り下げていくために、必修授業のカリキュラム精選や選択授業の制度改革、内容の充実を目標とした。

学力差への対応として英・数・国の必修授業で少人数制あるいはコース制を実施した。また英語のネイティブ講師の専任化も実現し、情報教育では、コンピューターを使った授業を拡大し、コンピュータールームを生徒に開放した。

海外研修旅行や国際交流活動の充実を図るとともに、明星独自の交換留学制度も実行した。この分野では、明星学園後援会（川連拡子会長）より財政支援をいただき、継続することができた。

生徒募集の面では、得意科目推薦と、奨学制度を新設した。

新たに、インターンシップ（職場体験）を始め、PTAや卒業生の協力を得て、明星生に、仕事場で働く大人の人たちとの出会いの場を設けた。

こうした改革を進めてきたが、公立高校の大改革、中・高一貫化や、近隣への私立大学附属校の移転などの影響を受け、生徒募集は安定しなかった。

問題の基本的な解決とさらなる発展のためには、内部進学問題を解決し、小・中・高を軸とした12年一貫教育のいっそうの充実が重要であることが明らかになった。

(4)学校像の構想

21世紀学園構想委員会の答申を受け、中・高建築構想委員会ができたのだが、校舎建築の前にはっきりさせねばならないことがあった。明星学園がどのような学校なのか、12年一貫教育の構想を明確にする必要があった。それは、中・高校舎建築委員会の仕事ではなく、校長と教頭の連絡機関である校教務会に委ねられた。

2001年9月、校長・教頭会は、「6・6制12年一貫校としての明星学園像、12年一貫教育の基本的理念を基に、明星学園のイメージチェンジをめざして」と題する原案を報告した。明星学園イメージチェンジのポイントは「よく勉強する、高学力の生徒の多い学校へ」、「安全で規律があり、自由で楽しい学校へ」の方向を表明し、その内実として、「どの学年でも充実感があり、進級するに従い、自己の成長が実感できる学校」、「自分の得意分野、強い興味関心がある分野を持った生徒のあふれている学校」を謳った。

「学校改革の構造と目標」では、児童・生徒募集の改革と卒業時の進路実績の目標明確化、それを実現するための教育改革について述べた。授業を始めとするさまざまな教育活動のなかで、学園に受け入れた児童・生徒の豊かな人格を育て、しっかりとした学力を保障し、その人間的成長の結果としての進路実績を向上させると表明したのである。

そして、学校における教育活動を「4つの場」に設定してそれぞれの場での教育活動のトータルとして教育目標が達成されると構想した。「4つの場」とは、1.学びの場としての学校、2.出会いの場としての学校、3.交流の場としての学校、4.居場所としての学校であった。

2002年6月、校長・教頭会は教職員に向けて「12年一貫6・6制の構想と各6年間の教育目標」を報告した。教育目標を構想するにあたり、校長・教頭会は、21世紀の社会状況を、国際化・情報化の進行する社会と捉え、その中で、人は豊かな感性・知性、確かな技術、専門分野の実力、コミュニケーション力を基に主体的に生きることを求められると捉えた。また、子どもたちの現状は、「将来が見えにくい社会のなかで夢・希望・自信を喪失している」、「社会や学校・家族などへの所属意識の薄弱化と他人との距離のとり方が下手である」とした。その上で、明星学園の歴史・伝統を踏まえつつ、大幅な学力差、集団生活のルール・マナーに対する意識低下といった現在の問題点を克服するべく構想した。

明星学園の教育理念「個性尊重・自主自立・自由平等」を堅持しつつ、学園が目指す人間像を「未来に夢と希望を持ち、主体的・創造的に力強く生きる人間」とした。ここに6・6制12年一貫のベースになる考えは固まった。



高等学校正門の八重桜

2 「6・6制」開始へ向けて

(1)6・6制開始年度の決定

2003年6月、黒川・和田両校長は全園教職員会議を開催、その場で3つの方針を提案した。

1. (1) 2005年度より6・6制に移行する
   (2) 中学校校舎を高校敷地に建設し、中学校を全面移転（2005年度着手、2006年度完成）
2. 明星学園6・6制と「新しい魅力」を持つ中・高一貫校の迅速な実現
3. 運営組織・体制の迅速な統一

21世紀学園構想委員会の答申では、2003年3月までに6・6制の具体案を作成することが決まっていたが、その3月を過ぎても、具体化ができないなか、生徒募集に強い危機感を持った両校長はこの方針を不退転の決意の下、提案したのである。すでに答申から5年が経過し、他校は次々と中・高一貫校として再出発していた。その一方、明星学園の6・6制検討は停滞していた。特に校舎建築問題は行き詰っていた。しかし、両校長にとっては、6・6制は中・高同一キャンパス以外考えられなかった。キャンパスの狭さと過密は当面、しのいでもらう以外にない。それより早い実施が焦眉の課題であり、すでに時期を失いかけているとすら感じていた。

2003年11月に方針1.をめぐっての全園教職員会議が開かれ、以下のように決定された。

① 2006年度より6・6制へ移行
② 中学校校舎の高校への全面移転は当面凍結
③ 理事会は①の進行状況をみて責任を持って建設について判断する

2005年開始はならなかったが、6・6制の開始を2006年とすることを、教職員全体が確認した意義は大きかった。

ここから先は2006年からの開始に向け、新たに組織され発足した6・6制推進委員会が推進母体となり、残った課題を整理していくことになった。それらは教育理念・教育目標、教科カリキュラム、5日制・6日制、週授業時間数など学校カリキュラム、組織運営体制、行事・自治的活動、入試と進路指導、入学広報などであった。

(2)6・6制の具体化

6・6制開始年度の決定を受けて、2004年2月、校長・教頭会は新たに「6・6制推進委員会」の設置を提案した。短期間に課題を解決するためにこの委員会では検討した事項に最終的な決定権が与えられることとなり、6・6制の骨格となる事項の検討はスピーディに進められた。まず取り組んだのは、教育理念、教育目標、教育方針の策定であった。すでに校長・教頭会から出された原案があり、それを練って文章化した。それは以下のような内容であった。

明星学園の学校像

(1) 建学の教育理念「個性尊重・自主自立・自由平等」
(2) これからの明星学園の教育のめざす人間像
　未来に夢と希望を持ち、主体的・創造的に力強く生きる人間
(3) 明星学園の教育目標
　①基礎的・本質的な知識・技能を教え、教養として育む
　②自ら考え、判断し、行動する力を育む
　③豊かな感性を育み、自ら表現する力を育む
　④自分と他者を大切にし、協同できる社会性を育む
　⑤将来の夢を持ち、その実現に向けて努力する意欲を育む
(4) 教育目標を実現するための教育指針
　①生徒一人ひとりを大切にする
　②授業を大切にする
　③生徒の自主的な活動を大切にする
　④進路を選択し、それを実現していくための援助をする

6・6制推進委員会では、教務関連部会、生徒指導・学校行事部会、入試と進路指導部会の三作業部会を設け、そこに委員を割り振った。一貫カリキュラム（学校カリキュラム、教科カリキュラム）、教務関係（時間割・日課表・選択授業・教務規定・進学・留学など）は教務関連部会の担当である。6・6制推進委員は、両校長、両教頭、小2名、中2名、高3名、それに新たに決まる中の教頭で構成されることになった。会議は平均週1回の割合で開かれた。

教務関連部会

教科のカリキュラム検討作業

推進委員会（村田修二委員長）の決定を受けて発足した教務関連部会、略称「学習に関する作業部会」（村田修二部会長、委員は小：一瀬清・秋野憲治、中：亀山平九郎（後⇒平野康弘）、高：黒川実・横田逸郎）は学校カリキュラム、教科カリキュラムなどを検討した。

小・中と高の間で、「いわゆる学力観の違い」がこれまで取りざたされてきたが、6・6制推進に当たって、学園を代表する推進委員会の教務関連部会がはっきりと、「学力」を規定したのは画期的なことである。これは、明星学園の歴史のなかでも、初めてのことである。重要な資料なのでここに再録しておく。

学力とはなにか

一般的に述べれば、それは、教科内容を「理解」した上で「習熟」することであるといえる。「理解」するとは、知識を単なる「暗記」とせず、その知識が意味づけられ、関連づけられたものとして認識されることである。そして、その知識が子ども・生徒の身につくことが必要である。またここでいう「習熟」とは、さまざまな場面において理解した内容が適用できることや、表現できることを指す。

この「学力」に加えて、「読み書きそろばん」の能力（国語・算数・数学のような「基礎

言語能力」）の養成と学習の仕方（学習方略）を獲得させることが必要である。

また、学習指導要領との関係についても、従来、ともすれば対立の種であったものを明確にしたことも重要である。

学習指導要領について

学習指導要領が提示している単位数や内容に迎合することなく、明星学園として価値ある教育内容を作り上げていくべきだと考える。ただし、教科内容の独自性が「独善」とならないよう内部で検討すると同時に、内外に対して、学習指導要領と本学園のカリキュラム内容の対比が示され、本学園のカリキュラムの持つ内的な論理が説明されなければならない。（略称：学習に関する作業部会、2004年12月13日）

5日制・6日制問題と学校カリキュラム

2004年4月2日、30日の両日にわたり、表記の問題についての全園教職員会議が持たれ、両校長は最終判断を以下のように報告した。

- 小は学校5日制、中・高は学校6日制とする。
- 小学校は現行の維持であるが、基礎学力の定着、中学へのステップのため、高学年を中心に時間増の方向で検討する。
- 中学校は学校6日制に変更し、積み重ねが大切な教科の時間増、5日制実施にあたり削減した教科の時間増、LHR（ロングホームルーム）の新設、実技科目は現状を下回らない時間数とする、総合的な学習の時間はグループ研究、体験旅行等で代替する。
- 高校は学校6日制を維持し、10年生までは基礎教養として大部分の教科時間数を必修科目とする、11・12年はコース制を基本とし、必修とコース選択、自由選択で構成する。

かつて、大論争の渦の中で始まった小・中学校の学校完全5日制だったが、9年を経て、中学校は再び6日制に変わることになった。

教科時間数の決定

推進委員会の教務関連部会は教科時間数について各教科会、各部会に検討をゆだね、その結果を推進委員会でなお検討、決定し、2004年10月全園教職員会議で以下のように発表した。

小学校の週当たり時間数

	国語	算数	社会	理科	総合	英語	音楽	美術	工作	体育	計
1年	7	4			2	2	3	2		2	22
2年	7	4			2	2	3	2		2	22
3年	7	5			2	2	3	2		3	22
4年	6	5	3.5	3.5		2	2	2		3	27
5年	6	5	3.5	3.5		2	2	2	2	3	28
6年	6	5	3.5	3.5		2	2	2	2	3	28

現行との変更点：算数と社会が4・5年で0.5ずつ増、体育が3・6年で1ずつ増。社会科は日本史通史の学習の完成、算数では各学年で習熟を図る。小学校段階での身体活動の大切さを考え体育は時間増。

中・高等学校の教科時間数

● 7・8年

	国語	数学	社会	理科	英語(OC含む)	体育		音楽	木工・工芸	美術	特活	計
7年	5	4	4	4	5	3		2	2	2	1	32
8年	5	4	4	4	5	体育2	保健1	2	2	2	1	32
現行との変更点：国語3.5⇒5、理科3.5⇒4、社会3⇒4、英語4⇒5と合計4時間の増。												

● 9・10年

	国語	数学	社会	理科	英語(OC含む)	体育		音楽	木工・工芸	美術	特活	計
9年	5	5	4	4	5	体育2	保健1	2	2	2	1	33
現行との変更点：国語3.5⇒5、数学4⇒5、理科3.5⇒4、社会3⇒4、英語4⇒5と合計5時間の増。												
10年	6	5	4	4	6	体育3	保健1	2		2	HR1	34
現行との変更点：国語5⇒6、保健0⇒1と合計2時間の増。												

● 11・12年

	国(古)	数Ⅱ	英	日史	体	理	保健	情報	HR	計
11年	2	5	4	2	3	2	1	2	1	22
現行との変更点：国語選択必修から必修、理科選択必修から必修、保健2⇒1、総合1⇒0										
文・理・実技系のコース選択／コース選択の例										
文　系	現代文4	歴史4または数学B4＋必修＋自由選択（0～4）								
理　系		理科6～8、数学B4＋必修＋自由選択（0～2）								
実技系		実技4＋必修＋自由選択（0～8）								
12年必修	英	体	HR	総合						
	4	2	2	1						
必修選択　国・数・理・社から4以上／コース制を基盤にした自由選択										

教育研究体制

6・6制移行後の教育研究・授業研究の重要性に備え、各教科での授業研究・テキストづくり・シラバスの作成研究のほか、各段階における教育・授業研究、学校全体での教育・授業研究を学校として検討していく必要があるとされた。従来、小・中で行われてきた公開研究会は、中・高体制の下では、凍結された。

入試と進路指導部会

（河住貴夫部会長、委員は小：照井伸也、高：渡辺京、黒川実、小・中：和田武久）

小学校では、2002年度入学の児童から推薦入試制度を導入したので、この時点ではその他の制度変更はない。

中学校では、従来2月1日、1回のみだった受験日程を複数回受験にして、どちらも受験できるようにすること、受験科目から描画を除くこと、出願書類から報告書をなくし、通知表のコピー

でよいとする変更をおこなうことにした。どれも、受験しやすくするためである。

高校は、従来から改革を進めてきたこともあり、一般推薦、得意科目推薦、一般入試に学園独自の奨学制度を加えた入試制度を継続した。

行事・生徒指導関連作業部会

（安部喜史郎部会長、委員は小：秋野憲治・森村卓・渋谷淑恵、中：堀内雅人・比嘉ちひろ・姫野英二、高：簗賢治・奥西克昌・阿部芳子）

検討を進めている課題は、生徒組織と自治的・自主的な活動、宿泊を伴う学習旅行、オリエンテーション合宿（7年･10年）の実施、職場体験（8年）、インターンシップ（11年）、自分史（6年）、卒業研究（9年）、卒業論文（12年）など総合学習関連、海外留学やインターナショナルデイなど国際交流、生活指導、年間日程表である。

広報プロジェクト関連部会

（渡辺京委員長、委員は小：一瀬清・坂本直穏枝・福田純一・和田武久、中：卜部三奈子・亀山平九郎・河住貴夫、高：黒川実・山領直人・横田逸郎）

学校説明会や体験入学、入試制度など、学内における広報活動の検討を進め、2006年、6・6制開始に向けた2005年度の活動計画を練る、学内企画部門と6・6制実施に向けたパンフレット、ウェブサイト制作など対外広報活動部門に分かれて仕事を進める。2005年春の完成をめざして、教務関連や行事・生徒指導関連と緊密に連携しながら作業を進めた。

この後も、6・6制推進委員会はいくつもの作業部会を設置し、2006年4月の6・6制実施に向け、新体制の準備を一つ一つ積み重ねていった。6･6制推進委員会は2005年8月をもって活動を終了し、2006年度の中・高の校務分掌、担任、運営委員などの決定は校長・教頭会に委ねられた。

(3)6･6制スタート

2006年4月、12年一貫6・6制が始まった。まだ入学式を終えていない7年生を除き、8年生から12年生までが一堂に会して、中学・高校の始業式が牟礼キャンパスで行われ、初代中・高の校長となった黒川実が挨拶を行った。

この4月、中・高間の人事交流が実現し、高校から体育の安部喜四郎、社会科の渡辺京が中へ、中学から体育科の根本美愛、社会科の川手晴雄、英語科の井上成雄が高校へ異動した。それ以前にも小学校の英語授業を中学と高校の教員が教える交流は始まっていたが、職場を異動しての交流は6・3・3制に変わって以来、この時初めて実現したのであった。

人事交流は「21世紀構想委員会」の答申（1998年）でも掲げられていたことであったが、なかなか実現できなかった。6・6制体制が現実に始まって、やっとその一部が実現できたのである。後でも述べるように、人事交流はその後も継続し、特に中･高の実践をつなげる上で大きな意味を持った。

2007年度には黒川・和田が任期を終え退職。小は一瀬清校長、中・高は渡辺京校長が6・6制を引き継ぐこととなった。

＜文責：和田 武久、黒川 実＞

第2章　6・6制開始後の新たな取り組み

1　新たな運営体制

2004年10月の全園での決定に従って、2校長（和田武久小学校長、黒川実中・高等学校長）3教頭（小・一瀬清、中・河住貴夫、高・横田逸郎）体制がスタートした。校長・教頭会での連携を密に、中・高は共通の専門部を設置し合同専門部会を開くなど、現状認識・課題の共有を通じて実践の交流を図った。また、新任採用時の人事委員会は小と中・高で設置され、中・高では共同で新任採用を行うこととなった。

その後、一瀬・渡辺体制になって、中・高では運営委員会の構成に学年主任を加えるなど、一部変更があったが、基本的な方向は継続された。小・中・高で専門部の課題は違う点ももちろんあるが、できる限り共通課題を見つけ、12年間を通じて追求していく姿勢が徐々につくられていった。小さなことだが、小・中・高共同の年間日程表が作成された事もその一例である。2013年3月に行われた小・中・高の合同専門部会は各専門部とも活発な議論が行われた。

生徒指導部会では「生徒の自治的力をどう育てるか」を中心課題とし議論され、内部進学の生徒をリーダーとして育てることの重要性を再確認した。入学広報部会でも、全学的な募集難を学園としてどう乗り切るかが話し合われるなど、各部の交流と課題の明確化に向けて前進した。

中・高でキャンパスが違うことは校長の動き方を複雑にしているが、2013年度からは新校長（平田和孝小学校長、河住貴夫中・高等学校長）のもとに各部副校長制（教頭は廃止、副校長とする）をしき、校長の役割を一部副校長が負うことによって、運営の円滑化を図ることとなった。

(1) 内部進学制度

中・高一貫体制実施後、中学から高校への内部進学については、6・6制推進委員会の最終報告で「両校長が2006年度中に決定する」ことになっていた。その結果、2007年3月、全園教職員会議で、和田・黒川両校長から次のような決定が報告された。

> 決定内容
> 「対立の内部進学から信頼・協力の内部進学へ」という基本姿勢の下、以下のように決定する。
> 2007年度7年生以降の内部進学については、本人（保護者）が高校への内部進学を希望するものは全員入学を認める（いわゆる全入制）こととする。ただし
> (1)　原則として授業日数の1/3以上の欠席がある場合は入学を認めない。<注1>
> (2)　全入制をより良いものにするために環境を整える。<注2>
>
> 注1　欠席日数が1/3前後の生徒については、中学校で本人の状況を分析し慎重に検討すること。
> 注2　この点については、中学校では様々な分野で改革が始まっており、環境は整いつつあると考える。後略…〈※1〉

中学で学力保障のための補習や中間試験の実施等、進路指導を8年次または9年の1学期に行うな

〈※1〉全園会議資料「2006年度7年生からの内部進学制度について」(2007年3月20日)

どの取り組みを紹介した。その後も中学では引き続き授業研究や評価表の改善、進路指導の強化、生徒指導の経験を共有するデータ作りなどが行われ、中学での課題を明確にし、「信頼・協力の内部進学」の質を高める努力が続けられ、高校での内部生の評価は大きく変化してきている。

(2) 人事交流

前述したように、2006年の6･6制開始より、中・高の所属を超えた人事交流が行われはじめた。これまで抱えてきた中・高の教育実践上の「違い」は、スムーズな人事交流を阻害してきたし、6・6制実施後も多くの困難をともなった。しかし、次第に人事交流の成果と意味を多くの教員が実感するようになり、授業の持ち合いも含め大きく前進した。2010年6月に渡辺校長より出された人事交流・一貫教育の「総括」には次のように述べられている。

①これまでの人事交流・授業の持ち合いについて

◆人事交流

	中⇒高	高⇒中
2006年度	根本（体育）、川手（社会）	安部（体育）、渡辺（社会）
2007年度	大石（英語）、亀山（国語） 山口（数学）	奥西（英語）、村田（国語） 新坂（数学）、高橋（社会） 井上（理科）
2008年度	新坂（数学）、森村（体育）	鈴木（数学）、中村（体育）
2009年度	鈴木（数学）、土器屋（社会）	大橋（数学）
2010年度	大橋（数学）、村田（国語）	山口（数学）

★7年から12年まで6年間を通じてを担当した教員：川手・安部・大石・奥西・村田・山口・森村・土器屋

◆授業を持ち合っている教科

中・高⇒体育、国語、美術（2009・2010年度）、数学

小・中⇒音楽、美術、木工

②人事交流・授業の持ち合いの目的

2006年以降、特に中・高のつながりを重視する体制（6・6制）が始まり、授業時間数や運営体制（中・高1校長、小・中・高の専門部体制、運営委員体制の共通化など）を整えてきた。また、「6・6制推進委員会」が整理した創立理念に基づく教育目標（「教養・自己表現・社会性」をつけるべき学力とした）を確認してきた。後は、目標を確認しつつ、各部が教科・教科外で実践的に何をどのようにすれば目標が実現できるか具体化していくことである。そのためには教科・教科外のカリキュラムの整備が必要だが、カリキュラムができたとしても、それは日々の実践の中で何年かごとに検討し続けなければならない。

いま、一貫教育を進めるために明星学園の教職員に必要なことは、「小・中・高各部が抱えている問題を教職員が共同して実践的に取り組みつつ、目の前の入学してきた子どもたちをどう育てるか」であり、各部の実践を基本的には信頼し、内部進学してきた子どもを中心に実践を組み立てることであろう。そのために様々な違いを超えて共同して仕事をすることが出来なければ、

信頼には繋がらない。



校舎の位置や体制の違いは共同して仕事をする上で障害にはなるかもしれないが、工夫できないことではない。小・中・高が同一キャンパスにはできない以上、教員が移動し、共同して授業や行事に取り組む仕事をやり続けなければならない。

小・中の現状を見ると、同一キャンパスにあっても共通理解を深める努力が必要である。人事交流や授業の持ち合いはカリキュラムを検討する前提としての共通認識・信頼関係を深めるために必要なことだと考える。

「カリキュラムが一貫しなければ人事交流すべきでない」との意見があるが、それは結局「人事交流はしない」と言うことと等しい。「カリキュラムの一貫」は単に課題項目の整理や発達段階に沿って並べることだけではなく、実際に子どもたちを教え、課題を共有し合い、検討し続けることで初めて一貫の内実をつくることになる。〈※2〉

一貫教育の前進

人事交流も含め、「6・6制推進委員会」の課題も、「12年一貫教育の推進」である。この間、人事交流で「人が動く」事によって少しずつだが一貫の方向での変化が起きてきている。人の交流は情報の交流を促進し、共通認識の拡大に役割を果たしている。

〈教科の側面から〉

国語の独自テキストの作成（7年～12年）
英語の中学独自テキストの作成
数学の中学復習問題集作成への検討（一部作成）
体育で高校中心に保健教材検討研究会がもたれている
美術で山領（高校）が中学の授業をもつ（2年目）
中学校での中間試験の実施（2学期は全体・1学期は学年判断）
その他、いくつかの教科で合同研究会や合宿研究会がもたれている等

2010年以降の人事交流は以下の通りである。

	中学⇒高校	高校⇒中学
2011年度	中村（体育） 比嘉（社会）	長野（体育） 姜（英語） 川手（社会）
2012年度	平野（数学）	新坂（数学） 繁田（社会）

しかし、これまで行われてこなかった人事交流をスタートさせるに当たって、問題点も抱えていた。現状では校舎の位置・各部のカリキュラム・実践のスタイルなどの違いから、人事交流や授業の持ち合いができにくい状況があることも、スムーズな交流を妨げている。また、教員の適性・希望は考慮される事が望ましいし、教科が授業内容の検討を積み上げていくためには、異動しない人事の必要性も充分考慮しなければならない。さらに、人事交流は出来る限り長期的な見通しを持って進められるべきだが、様々な事情による休職や退職など、予測できないことも多く、

〈※2〉中・高部会資料「人事交流・一貫教育の総括」(2010年)

必ずしも計画通り進まないことも踏まえ、今後のあり方を検討する必要がある。

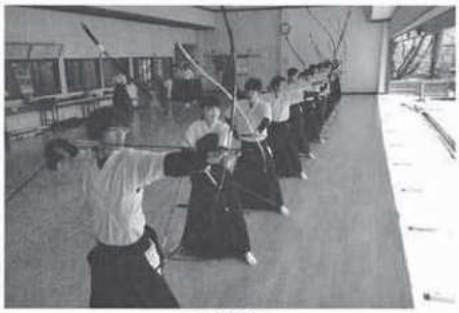
カリキュラムの一貫化はまだまだ多くの課題を抱えているが、「できることから一貫させよう」という思いから教科外活動で大きく前進した。特にクラブ活動では多くの中・高合同クラブがうまれ、なかには、中･高の和太鼓部、小の日本の芸能クラブが合同で「定期演奏会」を行うなど、12年一貫の新しい動きにも発展した。主として中・高の動きを見る。

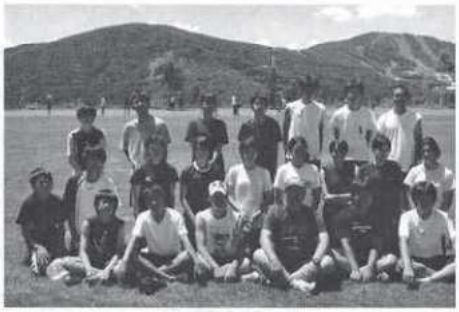
中・高合同始業式の実施
音楽祭への9年生の参加
明星祭への中学参加（2010年度より段階的に、2012年度全面参加）
中・高合同クラブの拡大　和太鼓・弓道・サッカー・アンサンブル・陸上
器械体操・剣道・卓球・バレーボール・サンバ

高校生と一緒に行うクラブ活動は、対外試合・コンクール・作品展などを通じて、中学生も外へ向けての意識が強まり、レベルを高めることにつながった。その結果女子バスケット部（全国大会38回出場・準優勝8回）だけでなく、全国レベルの大会への出場クラブが続出した。

和太鼓（2009 ～ 2012年度）　写真部（2009年度）
ダンス部（2010 ～ 12年度）　弓道部個人女子（2011年度）
アンサンブル部（2013年度）


和太鼓部


弓道部


陸上部


女子バスケットボール部

＜文責：渡辺 京＞

2　中学校校舎建築へ向けて

(1) 中学校校舎建築

全園建築委員会発足

2006年、6・6制はスタートしたが、中学校舎建築については、2003年の全園会議決議によって「(中学校舎) 全面移転は当面凍結する」こととなっていた。

2006年6月、理事会において中学校校舎建築方針が決定され、全園建築委員会（正式名称:「中・高一貫化に伴う中学校校舎建築委員会」）が発足。2009年度、現高校敷地に建設着工、2010年3月完工、予算7億9千万円（3億円は借入）を目標とすることとなった。メンバーは、委員長黒川実、常務理事6名、小・中・高教頭、総務部長、中・高教務部長、事務局2名で発足した。

2007年4月全園建築委員会の下部組織として中・高建築小委員会が発足。全園建築委員会と中・高教職員の橋渡し役として、中・高の意見を取りまとめ図面化することなど中学校校舎建築に向けての具体的作業に入った。メンバーは委員長村田晴海、中・高教頭、総務部長、教務部長、生徒指導部長、事務局1名。

この検討と並行して、高校グラウンド西に隣接する4軒分の買収を行い高校敷地の拡大を行った。

企画案提示

2007年10月～2008年1月、複数の企画案が提示された。

既存高校校舎の改修も考え別棟を増築する案と、既存高校校舎はそのままで、中学校校舎のみ増築する案などが検討された。

建築制約条件から計画可能床面積はおよそ3,000㎡～3,200㎡であることが分かった。建築制約条件：第1種低層住居専用地域、容積率80%。建蔽率40%、第1種高度地区：高さ制限10メートル。

長澤悟氏（教育環境研究所長・東洋大学教授）のアドバイス

2008年1月～3月、建築小委員会メンバーを中・高から選出された代表に変更。委員長村田晴海を中心に活動を始めた。小委員会では新たに、学校建築の専門家として、長澤悟氏（教育環境研究所長·東洋大学教授）を招き、学校建築の考え方、実績を聞き感銘を受けた。学園基本方針、学校カリキュラム、時間割、校舎データなどを長澤氏に提供し、建築の基本構想作成を依頼することとなった。

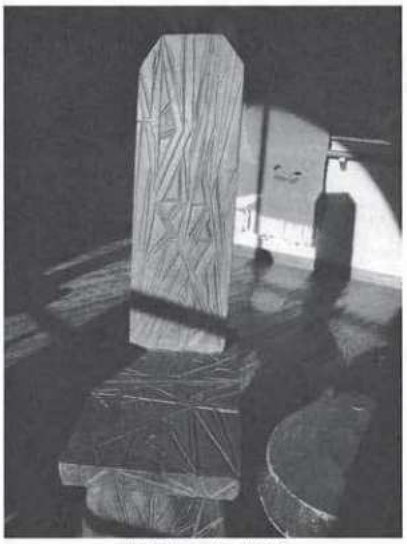
2008年度に入り、理事交代に伴い全園建築委員会のメンバー構成も変更。委員長渡辺京、理事6名、小・中・高教頭3名、小・中・高代表各1名、事務局2名で再スタート。

5月に入り、長澤悟氏講演(学校建築の考え方、モデル例など）を企画、その後長澤氏・教育環境研究所から全教職員へのアンケートおよびヒアリングを実施。6月には、中・高の各部署代表（教科、養護、図書、事務など）+建築小委



小·中学校図書室

員が集まり、長澤氏からアンケート・ヒアリングのまとめが報告、たたき台（図面）の説明、意見交換を行った。その後、建築小委員会で検討課題の整理、方向性について意見交換をおこない、中・高の運営方式として「教科教室型」で意見一致したが、資金の問題、着工時期の問題、体育授業、現中学校舎をどうするかなどが心配事としてあがってきた。全園建築委員会において小委員会から経過を報告。長澤氏から校舎移転に関しての検討課題、事業費、法的条件などが提示された。9月には、教科教室型モデル校としてカリタス女子学園視察を行った。


中学生の木工作品

具体案の検討・中・高部会での論議

2008年7月～9月、全園建築委員会において常務会と小委員会から工事費用の大幅超過、小中施設の利用等について報告された。小中施設の利用可能性については都庁で確認、生徒移動については安全面の確保が必要、移動を伴わない授業については校舎が離れていても可とのことであった。全園職員会議において建築小委員会の検討案を提示するとともに、資金面の問題（建築資材、コストの高騰。高校既存校舎の改修。地代値上げ要求。耐震工事、水路問題など）があり、当初予算を大幅超過となる見通しが報告された。これについて中・高職員会議分散会をおこない、校舎建築に対する意見聴取を実施。小委員会で分散会資料、常務会報告などを検討し、今後について意見交換を行った。

建築小委員会の見解

① 人口密度の問題：建築可能延床面積3,000～3,200㎡、10m（3階）を限度とする高さ制限により過密緩和の方法として考えていた校舎づくりが難しくなった。過密による避難経路の危険性も指摘されている。

② 施設利用の問題：井の頭キャンパスを使わざるを得ない。中・高校舎一体化（新校舎を高校校舎と廊下などでつなげる）は不可など。

③ 予算の問題：一貫のための高校校舎改修に加え、建築資材の高騰、地代の値上げ、耐震工事が緊急課題としてあがってきたことにより、当初予算を大幅超過（7.9億→14億）。

2008年10月、建築小委員会として、与えられた枠の中で校舎建築を進めることは難しいと判断。校舎建築問題は理事会に預けることとなった。

＜文責：村田 晴海＞

(2)特別委員会の設置

「特別委員会」の設置と討議経過

校舎建築問題が「理事会預かり」(小委員会報告)となり、2009年10月全園会議で理事会は「新提案」を行った。「新提案」では「2006年、学園教職員会議の決議を経て、理事会で決定した中学校舎の牟礼キャンパスへの移転建て替え計画は、いわゆる過密問題が移転後の生徒の学習・生活環境を著しく損なう恐れがあること等からここに白紙に戻し、改めて代案として現位置、井の頭キャンパスにおいて建て替えを目指すことに切り替え」2014年度の完成を目指すこととした(10月21日「中学校舎建て替え計画に関する変更について」)。再度11月に開かれた全園会議では、理事会案に対する「対案」が出され、採決の結果以下のような内容の「対案」が可決された。

12年一貫教育を推進するために、小・中・高各部から選出された委員による委員会を立ち上げ、現状の明星学園の問題点・教育の方向性とその実現への具体的な方略を検討し、それにともなっていわゆる「キャンパス問題」についても検討を行う。従って「キャンパス問題」についての決定を保留する。

2010年3月、全園の意向を受け理事会は「中学校建て替え・12年一貫教育推進検討特別委員会」(以後「特別委員会」と略)の設置を決定、特別委員会では「中学建て替えキャンパス問題」・教科カリキュラムの一貫等の「教育ソフト問題」の検討を託された。2010年4月に発足した「特別委員会」のメンバーは両校長、各部教頭に各部から選出された2名の代表によって構成され、委員長は工藤圭輔が就任した。その後9ヶ月の議論を経て2011年1月の全園会議で次のような報告がなされた。以下一部を掲載する。

教職員各位　　2011年1月19日

中学校建て替え・12年一貫教育推進検討特別委員会

特別委員会報告書

2010年4月に理事会の招集により発足した「中学校建て替え・12年一貫教育推進検討特別委員会」は、「中学建て替え」をどうするか、「12年一貫教育」をどうするかということを理事会に答申するために、これらの問題に関して様々な角度から議論を重ねてきた。「中学校を改築(リフォーム)するのか、それとも新しく建築(建て替え)するのか」、「建て替えをするならば、井の頭・牟礼どちらのキャンパスに建築するのか」、「どちらのキャンパスに中学を建築したとしても、その中でどのように12年一貫教育を作り上げていくのか」ということを中心に据えて行われてきた議論は、未だ最終的な答えを出すことが出来ていないが、どのような議論を行い、またどのような意見が出てきたかということについてここで報告したい。まず発足当初議論の俎上に上がったのは、それまでに12年一貫6・6制に取り組んできた内容の総括と児童生徒数の推移に関してである。12年一貫6・6制の取り組みの総括では、主に「これまでの人事交流のメリット・デメリット」について意見交換を行った。大きく分けると、「これまでの人事交流では、12年一貫を進める上での成果を出すことはできていない」というものと、「これまでの人事交流は、充分とは言えないものの一定の成果を上げているので、今後も検討しながらも継続していくべきである」という二つの意見が出された。他にも一貫カリキュラムを作り上げていく上で、「中・高の合同教科会の頻度は現

状では不十分である」という意見も出された。次に前建築委員会において議論されてきたことを確認した。…中略…

以上のような特別委員会発足までの様々な流れを確認した上で、具体的に中学校校舎をどうするかという議論へと進めていった。その中では大きく分けて次のような案が出された。「中学校校舎を牟礼キャンパスに新築する」、「中学校校舎を井の頭キャンパス内で新築する」、「現中学校校舎を改築（リフォーム）する」、「9年生だけを牟礼キャンパスに移動させる」という四つがそれである。

各案の議論と並んで、学校規模・定員・クラス数等についても議論され、「現状では特に変更を行わない」ということで結論づけた。また、多くの委員が「子どもたちの発達段階の面では1～4年、5～8年、9～12年の4・4・4制が望ましい」との考えを持っていることも確認された。その上で報告書では次のように結んでいる。

もちろんそのためには小・中・高が単体で研究体制を敷くだけではなく、5・6年生の教員と7・8年生の教員が、9年生の教員と高校の教員が共に研究する時間と場所を保証していくことが必要不可欠となる。しかしそれを成し得ること、つまりソフト面での4・4・4制を作ることが中・高だけでなく12年一貫を作っていくことに繋がり、これからの明星学園を創っていくことになるという結論を特別委員会は出した。


中学生の木工作品

校舎建設位置は結論を出さず

しかし、中学校舎をどちらのキャンパスに建設するかについては議論は平行線をたどり、結論には至らなかったと報告された。2011年4月再度出された報告書では

① 12年一貫6・6制に対し部分的な修正を行い、内実においては今後4・4・4という区切りを持ってカリキュラムを構築していく

② 12年一貫を推し進めるための全園的な研究組織の必要性

が確認されたが、「井の頭・牟礼、どちらのキャンパスに中学校校舎を建築するか」という案件に関して、3月19日の全園教職員会議に於いての議論を踏まえた上で最終判断を行い、それを理事会に答申するとし、結論は持ち越された。その後再度開かれた特別委員会でも見解は一致せず、あえて多数決で意見をまとめることを避け、各委員が意見書を提出することで「最終答申」（4月13日）とした。

特別委員会答申後の理事会判断

その後、理事会では「特別委員会」の報告および各委員の意見書を検討し、2011年11月、全園会議で出口一彦理事長は次のような報告を行った。

建て替え場所については

「高校牟礼敷地への移転はこれまで指摘されてきた数々の過密問題のほかにも、現井の頭敷地の特別教室の利用ができなくなること、加えて近い将来狭い牟礼敷地での高校校舎の難しい建て替えに大きな制約を与えることを考えたとき、さらには今後憂慮される直下型地震等の防災面をも考えるならば、分散配置としての井の頭敷地での建て替え案が妥当であると考えざるを得ない」

規模・敷地内位置については

「井の頭敷地内での建て替え位置は、当初考えていた現位置でのそのままの建て替えでは、現在の日影制限等の新しい規制下（既存不適格）にあって、2階建てしか許可されないことから、今回改めて総合的に検討を行い、日影規制をクリアしやすく4階建ても可能でグラウンド等も広くとれる敷地南側の現管理棟、体育館側に建設する別案についても併せて検討した。その結果、体育館、管理棟を含めた一括建て替え案が理想的ではあるが、当然のことながら建設費が多額になるため、そのステップ案として、体育館を除いて中学校舎と同じく老朽化が進んでいる管理棟までの南側一帯建て替え案を選択する方向で成案を得た」。〈※1〉

そして、目標完成時期は、平成30年（95周年の前年）とし、中学校舎建て替え積立金・大規模修繕費、さらには全園的な募金運動を実施し、借入金を最小限に抑える資金計画も報告された。また、一貫教育の「現状と課題」については「寸胴型」でなく、7年・10年で外部生を導入する明星学園固有の条件を踏まえて「小・中は明星固有の初等・中等教育の伝統にたち、なおかつその土台の上に高ではその先の進路教育の徹底も図り、その中で明星固有の開放的な一貫教育を完成させる」ことを課題とした。

中学校舎建築が、当初の計画から遅れ、さらに7～8年先になることから、当面、玄関口・トイレ・内装等必要な補修が行われた。また、2013年度より上記募金が開始された。

＜文責：工藤 圭輔＞

3　教育相談委員会の活動

スタートは 2006 年

小・中・高の教育相談委員会は、2006年の4月からスタートした。

もともとは高校内だけで、保健室担当の養護教諭・森田小夜子と村田修二（国教科）が「生徒のメンタルケアに関する委員会」という名称で活動を行っていたものであった。高校では、思春期という時期のせいもあり、いわゆる「心の病」で苦しむ生徒がいて、そのケアを外部の医療機関とも連携して、対応していくことを試み始めていた。

教育相談委員会の目的と活動

その試みを、小・中・高全体で行うことを提案し、2006年から全園の「教育相談委員会」として立ち上げることが出来た。基本的に小学校・中学校・高校の養護教諭と村田で組織し、現在に到っている。立ち上げの時の提案文書では、「教育相談委員会」の主な仕事として、以下の2点をあげている。

〈※1〉「中学校舎建て替え問題の最終決着について～特別委員会答申を受けて」

(1) 心理的に「問題」のある生徒に対して、担任や保健室に任せきりにせず、教員のチームをつくって対応する。必要に応じて外部医療機関との連携もはかる。
(2) 小・中・高で生徒の状況について情報交換・連絡をとる。

また、その具体的な仕事の手順として、

① まず教育相談担当者で相談・情報の共有
② 関係者からの情報の収集
③ 以上をもとに相談担当者で方略を練る
④ 必要があれば管理職に報告
⑤ 方略にしたがって、関係者とのチームを作る
⑥ 必要に応じて外部機関との連携をはかる

としている。

それ以来、小・中・高とも各学年の担任教師の協力も得て、上記の方針のもと、活動を続けてきた。年度によっては「軽度発達障害」「心の病」を持つ児童・生徒の存在や、人間関係からくる「心理的トラブル」が多発するなど、うまく教育相談委員会が機能できないときもあった。しかし、時には部会の時間を使って、専門家を招いての研究会や生徒の具体的な問題を出し合ってのカンファランスを行ったりして、少しずつ学園の中に、教育相談というものが認知されていった。

毎年最低一回は、心療内科医などの専門家を招いて、教職員対象の講演会を行ったり、具体的に各教員が抱えている「問題を持つ児童・生徒」の事例を提示して、どのようなサポートができるのか、研究会などを行っている。

教育相談のこれから

現在の社会状況の中で、この明星学園といえども、子どもたちはさまざまな圧迫を感じたり、閉塞感を感じたりしている。友達づきあいの下手な子も多くなってきた。そんな中で「心の悩み」を抱えたり、人間関係のトラブルを抱える子どもたちの数は少なくない。そのような子どもたちに対して、個々の教員が抱え込んでしまうことなく、学校の教員集団全体の力で包みこんでケアし、指導していきたいと考えている。

明星学園では今まで特にスクールカウンセラーというものを置かないで来た。学内にはそのような役割を持つ専門家を置いたほうがいいのではないかとの声もあったのだが、教職員間ではさまざまに議論を重ね、指導やサポートの主体はあくまでも私たち教職員であり、専門家の方には外部にいて助言をもらったりして連携していこうと結論を出した。それは、学内にカウンセラーを置くことによって、「問題ある生徒」をその役割の人に任せっきりにしてしまうという、他の学校で聞く問題を回避したかったからであり、また個々の生徒の「心の問題」であってもそれは教員と生徒のつくる集団の共同性の中でできるかぎり解決していきたいと考えたからでもある。

専門家の力を借りつつも専門家に任せっきりにしない、また担任一人がその生徒を抱え込んでしまうこともないように、生徒一人一人をよく見ていくこと、大事にすることを中心にこれからも活動をしていく必要がある。

＜文責：村田 修二＞

4　公開講座

明星の文化力を広めるために〜「公開講座」の開始

85周年を機に、より多くの人々に明星学園が培ってきた教育・文化を知ってもらう方法として「公開講座」を企画することが提案され、在校生・保護者・卒業生・教職員が一堂に集まる機会を得た。当面する募集活動への影響は勿論、明星の文化力を共有し共に楽しめる機会として、また、長い夏休みを地域の子どもたちと一緒に過ごしにくい明星の小・中学生の体験の場としての必要性も検討され、2009年8月、公開ワークッショップ「夏の教室」が企画された。
「目的」「ねらい」として以下の点が掲げられた。（実行委員会報告より）

目　的：伝統ある明星学園の教育・文化を多くの人と共有し、広める
ねらい：① 明星の持てる文化を発信することで、積極的に地域と交流し地域に貢献する
② 学園の存在を広め、学園への入学者を増やす
③ 明星学園の教職員・児童生徒・保護者・卒業生が協力し合うことで共同体としての意識を高め、よりよい学校をつくる
④ 職員の知識と経験を深め、質の向上を図る

一瀬 清（小校長）実行委員長を中心に、小・中・高の各部と常務理事会・事務局から選出された実行委員11名で2009年5月から準備が始められ、8月8、9日の2日間、16講座が企画された。一瀬 清・渡辺 京両校長をはじめ、現役教職員が得意分野を生かし講座を開設した。9日には「メイン講座」として「わたしの表現と明星学園」と題し、卒業生で活躍中の古屋兎丸（漫画家・53回生）、中島たい子（小説家・56回生）、唯野未歩子（女優・映画監督・脚本家・59回生）の3氏に明星学園時代を語って頂いた。暑いさなかであったが、延べ478人が集い、未就学児や50人近い地域の方々にも参加して頂き、大きな成果を上げた。

保護者の協力・地域への拡大

実施にあたっては、学園周辺の家庭への宣伝用チラシ配布、地域幼稚園・保育所・コミュニティセンターへの宣伝等の努力が効果を発揮した。9月の総括会議では、「継続すること」「学校をあげた取り組みにすること」「準備を早く始め、宣伝をしっかり行うこと」が確認された。2年目の2010年度は常務理事・事務局・各部教職員20名の実行委員に加え、教職員協力者・事務局全員が当日協力、この年から保護者ボランティアも延べ54人に協力して頂き、企画・実行された。


「夏の教室」卒業生の講演会

講座数20、「メイン企画」には、オペラ歌手の藤澤真理氏（卒業生）を中心に芸大生・アンサンブル部・音楽部による「音楽の夕べ」を開催し150人を超える参加者を得た。地域の方からは「貴校の校風を知る事が出来て楽しい体験でした。今まで近所でありながら未知の世界でしたので」「目から鱗！ び

っくり！ 質が高い！」等の感想を頂いた。この年は申込総数633名、外部の方293名となった。


本校教諭による講座

夏・秋２回の講座開設へ——対象・性格の明確化

3年目の2011年度は、講座の性格を明確に、講座数は厳選し、夏と秋の年2回開催することを決定した。全体実行委員長に渡辺 京（中・高校長）、「夏の教室」責任者に河住貴夫（中学教頭）、「秋の教室」責任者に山領直人（高美術科）とし、それぞれに「メイン企画」を設置、「夏」「秋」で、対象や性格の違う講座を設置する方向で準備した。

「夏」のメイン企画は昨年好評だった「音楽の夕べ」を、「秋」は、精神科医の香山リカ氏（卒業生の夫人）の講演を企画し、全体として「夏」356名、「秋」254名、計610名の応募者を得た。

4年目の2012年度は、これまで「夏」に実施されてきた野球やサッカー、剣道などが独自に継続企画として発展し、日常的な企画として実施されることとなり、公開講座の企画からははずれることとなった。

「夏」は未就学児・小学生を中心に体験的な講座を設置、「秋」は中学・高校生や大人を中心にアカデミックな講座を設置した。

「夏」のメイン企画は、この年学園に就職した若い音楽科の教師中心に現役教員・音楽系クラブの生徒による「音楽の夕べ」(3年目）を実施した。

教員が授業だけでなく、大人や地域の方に自分の専門を発表し、評価を得る貴重な場としても、公開講座の取り組みは大きな意味があることが、体験を通じて教職員にも認識されていった。

「秋」には卒業生の保護者である、東大大学院教授・政治学者の姜尚中氏の講演をメイン企画とした。姜尚中氏の講演は受け付け開始後まもなく締め切りになる状況で、当日の感想にも「連続してやってほしい」等好評を得た。

回を重ねるごとに、卒業生や保護者の協力の輪が広がり、あらためて学園への熱い思いを感じると同時に保護者や卒業生の多彩な活躍を知る機会ともなった。地域にも少しずつ定着してきており、継続することで地域や入学希望者の参加も増加し、明星でなければできない企画として発展している。

講座内容と担当者（2009 年～ 2013 年）

2009年度　第1回（2日間の「夏の教室」）

8月8日　「おもしろ計算」福田純一（小教員）
「親子で踊ろう」伊野文子（小教員）
「藍染教室」尾島徑子（染織家）一瀬清（小校長）
「小学生フットサル大会」細井卓磨（高教員）
「初めての和太鼓」奥西克昌（中教員）
「暮らしに活かすデザイン」雨宮一朗・山領直人（高教員）
「ユニット折り紙入門」小野健太郎（小教員）

8月9日　メイン企画・卒業生対談「わたしの表現と明星学園」

古屋兎丸（漫画家）中島たい子（小説家）唯野未歩子（59回生・女優・脚本家・映画監督）
「書くこと・生きること」中島たい子（56回生）
「漫画を書こう」古屋兎丸（53回生）
「イメージからストーリーへ」大久保亜里（高教員）
「石を磨いて作品をつくろう」佐藤晃（小教員）
「書を書こう」三浦枝里子（高職員）
「秩父困民党・革命をめざした人々」渡辺京（中・高校長）
「集まれ！！ 野球小僧」森村卓（高教員）・村山義浩（高職員）
「Let's enjoy songs and games」入江潤・平野篤子・James Levick（小教員）

2010年度　第2回（2日間の「夏の教室」）
8月7日　メイン企画「音楽の夕べ」藤澤真理（46回生・オペラ歌手）他
アンサンブル部・音楽部生徒
「サッカー教室」細井卓磨（高教員）
「パッケージをデザインしよう」雨宮一朗・大久保亜里（高教員）
「三鷹文学散歩」堀内雅人（中教員）中村二三男（保護者）
「親と子のためのコミュニケーション・ワークショップ」村田修二・山本路子（高教員）
「剣道」伊野文子（小教員）安部喜四郎（中教員）簗賢治（高教員）
「学びなおしの対数」（7・8日）山口一郎（中教員）
「演劇入門ワークショップ」村田修二（高教員）
「ウィルス・細菌・寄生虫の感染戦略と人間」高橋幸悦（高教員）
「絵本をつくろう」一瀬清（小校長）
「昔話は生きる源」池田信子（ストーリーテラー）

8月8日　「有機農業を知ろう」田下隆一（46回生・農業）
「森のつみき広場」石原真弓（保護者紹介）
「和太鼓」奥西克昌（中教員）
「野球を楽しもう!!」森村卓（高教員）村山義浩（高職員）
「陶芸で器を作ろう」冨平園子（61回生・陶芸教室主宰）
「親子で踊ろう」伊野文子（小教員）
「インテリアとしての書を書こう」三浦枝里子（高職員）
「仏教入門」色摩真了（61回生・僧侶）
「万華鏡の魅力」山見浩司（48回生・万華鏡作家）
「バラ折り紙入門」小野健太郎（小教員）
「若い卒業生によるコンサート」三谷陽子（72回生）・対馬哲男（75回生）
清水千絵（75回生）・三好駿（77回生）
宮崎あゆみ（74回生）・高橋みどり（73回生）他

2011年度　第3回（「夏の教室・「秋の教室」の開設）
8月7日　メイン企画「音楽の夕べ」藤澤真理（46回生・オペラ歌手）他

「野球を楽しもう!!」森村卓（高教員）村山義浩（高職員）
「剣道」安部喜四郎（中教員）簗賢治（高教員）
「サッカー教室」細井卓磨（高教員）
「親子で踊ろう」伊野文子（小教員）
「森のつみき広場」石原真弓（保護者紹介）
「和太鼓」奥西克昌（中教員）
「ユニット折り紙入門」小野健太郎（小教員）
「藍染教室」尾島徑子（染織家）一瀬清（小校長）
「太陽って何色？」堀口隆士（高教員）
「砂金を採る」薬師大五郎（高教員）

11月23日　メイン企画「混迷する社会をどう生きるか」
香山リカ（卒業生家族・精神科医）
「芥川『藪の中』と黒澤『羅生門』」堀内雅人（中教員）
中村二三男（保護者）
「生きる営みとしての言葉」中山俊秀（保護者・言語研究者）
「国際級協力の現場から」高橋珠洲彦（中教員）
「新型ウィルスの恐怖」高橋幸悦（高教員）
「算数の中の不思議」増島高敬（中教員）
「こえ・ことば・身体」村田修二・山本路子（高教員）
「好きな言葉を筆で書こう」三浦枝里子（高職員）
「現代版『臨終行儀』～死の作法」色摩真了（61回生・僧侶）

2012年度　第4回（「夏の教室・「秋の教室」）
7月28日　メイン企画「音楽の夕べ」
間宮かおる・岡戸淳・町田健児・天野茜（教員）
「親子で踊ろう」伊野文子（小教員）
「親子で草木染め」一瀬清（小・校長）
「オリジナルフォトフレームを作ろう」坂本直穏枝（小教員）
「タダサトシの絵本が出来るまで」多田智（54回生・絵本作家）
「長縄飛びの世界を楽しもう」剛力正和（小教員）
「SAMBAを叩こう」フランシス・シルビア、亀山平九郎（高教員）

11月18日　メイン企画「姜尚中氏の講演」姜尚中（卒業生保護者・東京大学院教授）
「漆と金箔でMy箸を作ろう」吉野明日香（中教員）
「哲学」瀬野卓志（元高教員）
「特別な一文字を筆で書こう」三浦枝里子（高職員）
「カウンセリング入門」村田修二（高教員）
「意外なほど日本に似ている？ イタリアの素顔」
羽石宏美（46回生・旅行雑誌記者）

「粒子から見た世界」平山勲（中教員）
「ボランティアって楽しい」村上拓（72回生・医学部学生）

2013年度　第5回（「夏の教室」「秋の教室」）
7月27日　メイン企画「音楽の夕べ」
間宮かおる・岡戸淳・町田健児・天野茜・山崎聡・川松泰美（教員）
「剣道教室」安部喜四郎（中元教員）・簗賢治（高教員）
「親子で踊ろう」伊野文子（小教員）
「和太鼓をたたいてみよう！」奥西克昌（高教員）
「サッカー教室」細井卓磨（高教員）高サッカー部員
「エイサーを踊ろう！」冨田秀和（小教員）
「数と形であそぼう」福田純一（小教員）
「オジリナルフォトフレームを作ろう」坂本直穏枝（小教員）
「演劇ワークショップ」高瀬真次・川松泰美（小教員）
「はじめての楽器体験」山崎聡（高教員）アンサンブル部員

11月17日　メイン企画「平和はつくれるか？」伊勢崎賢治（東京外語大・元保護者）
「身体表現（ダンス）基礎ゼミ」水然みき（67回生・ダンサー）
「漆と金箔でMyスプーンを作ろう！」吉野明日香（中教員）・吉野貴将（陶芸家）
「水・土・日で地学を学ぶ」堀口隆士（高教員）
「“祭り”の力を取り戻せ」西嶋一泰（71回生・大学院生）
「数学『数列・級数の実感』」平野康弘（高教員）
「僧侶と語る、いのちの問答～現代を生きる智慧」
色摩真了（61回生・僧侶）・前田宥全（僧侶）・繁田真彌（中教員）


「Let's enjoy songs and games」


音楽の夕べ

＜文責：渡辺 京＞

5 春の研究会

(1) 小･中･高の課題共有に向けて

2008年3月から、毎年度末の3月に「全園研究会」を開くことになった。これまで多くの対立を抱えてきた中・高のつながりを強め、中・高6年間で大人の基礎をしっかり身につけさせ、社会に送り出すことが6・6制変更に伴う大きな課題であった。しかし、あくまで「12年一貫」の後半の課題であり、明星学園が大きく目指すは小・中・高の12年一貫であることは常に目標とされねばならない。そうした問題意識を持って、1年に1回、全園の教職員が集い、学園の課題を確認し、情報や意見を交換する場として「春の研究会」は内容や形態を工夫しつつ、毎年開かれることとなった。研究会の内容は、校長・教頭会で検討、学園の課題を「基調報告」として両校長から報告され討論した。また、課題に沿った外部講師を招いての講演会や、小・中・高の教員が分かれて参加する分科会も設定された。分科会では、テーマに沿って各部の実践報告がなされ、議論・検討された。「基調報告」や分科会の内容は、その年々の課題や問題意識を反映したものとなった。

明星の原点に立ち返る

初年度（2007年度）は、大正自由教育の研究家であり、明星教育の良き理解者でもある中野光氏に「明星学園の原点」をテーマに講演をしていただき、明星学園の教育史上の位置・役割を全教職員で確認する場となった。その後、校長・教頭会から両校長の基調報告があり、午後は各部の実践報告と意見交換を行った。両校長の「基調報告」を配布プリントより一部掲載する。

基調報告 1　　一瀬 清（小学校長）

「たくましい自己確立」をめざして　つけさせたい3つの力

教育の状況は「ゆとり教育」から「学力低下問題」へ大きく振れながら、さまざまな模索がなされている。また、明星学園の周辺をとってみても中・高一貫公立校、小・中一貫公立校ができ、私立大学が中学校、小学校をつくっていくというような学校再編がおきている。こうした中でしっかりとした理念の下で、意図的な教育実践を積み重ねないと明星学園は生き残っていけないと思われる。明星学園では6・6体制への変更があって、新しい試みが生まれてはいるが、全体として、今までの教育実践の延長線上にあると言える。「自由な発想を持っていて、なおかつ力が付いている」と本人及び保護者が自信を持てるような学校にしたい。そのために、学校カリキュラム作りの土台となる考え方をより共通にしていく作業が不可欠であろう。理念と目標、それと具体的実践とを取り結んでいく考え方を議論しながら固めていきたい。その上で発達段階に応じた具体的方法を考えていくのである。みんなが共通の意識を持って意図的な教育実践を積み重ねたとき、子どもたちの成長はめざましいものになるだろうし、学校の評価は上がる。「積み重ねのある実践」は子どもたち一人一人の成長をはかれるばかりではない。小学校で育った子が中学校の中核となる活躍をし、高等学校にお



中学生登山

いても下からの子が中核的な活躍をすることを望むことが可能になり、がっちりした芯の通った学校となれるのである。…中略…

83年の歴史の上で、明星学園はひと言で言えば「“たくましい自己確立”をはかる学校」として教育実践を行ってきた。明星学園は小学校から高等学校を持つものの、大学を持っていない。12年生までに自分らしい生き方への方向性をきちんと作って卒業させたいというのは、みんなの共通した想いであろう。学びは大学受験で終わりではなく、学びは続くのである。本人がこういう道に進みたいと思ったとき、情報は単に転がっているものでなくなり、自分に引きつけて考えられる有効な情報になるのである。自己確立のためにどういう力をつけていかねばならないのだろうか？「教養」「自己表現」「社会性」という3つの言葉にそってまとめてみた。

1. 自然や社会の法則を理解し芸術を楽しみ技術を習得する、あわせて「学び方を学ぶ」
……このことを「教養」と呼ぶことが出来る
2. 表現することの喜びを知り、自分らしさを発揮すると共に、他人の表現を大切にする。
……このことを「自己表現」と呼ぶことが出来る
3. 社会を構成し、運営し、そのなかからよりよい社会に作りかえる行動力をつける。
……このことを「社会性」と呼ぶことが出来る　後略…

この3つの力は学校での教育活動全般（授業、行事、特別活動、クラブ活動、自治活動）においてねらいとして持つべきものであり、総体がつけるべき「学力」であると考える。

基調報告2　渡辺 京（中・高校長）

問題意識の共有と課題の具体化について

6・6制を実施するにあたって私たちは新たに教育目標として「教養・自己表現・社会性」を生徒につけるべき学力として掲げた。入学してくる全ての子どもたちがこうした学力を身につけるために、子どもたちの現状と取り組むべき課題を、学園の教職員が共通認識とすることが必要だと考えている。また、こうした「学力」は小・中・高の各部が共通した具体的目標をもって、教育活動を行うことで大きな成果を上げることが出来ると考えている。ここでは教育目標を実現する上で、私たちの課題となると思われることを大きく3つの視点から提示してみたい。

① 全ての子どもたちにしっかりした「基礎学力」を保障しているか。
入学してくる生徒は、高学年になればなるほど「学力格差」や「学習意欲格差」が大きくなっている。高校では「学習意欲」がある生徒は、教科外活動（クラブや行事）にも積極的に参加し、「学習意欲」が無い生徒は学校生活に消極的になっていく傾向がある。また、特に「書く力」や「聴く力」は学校での学力形成に大きな影響を持っているが、こうした力が全体として低下傾向にあると考えられる。高校では一部「到達度別授業」を導入しているが、こうした授業の検証と同時にクラス授業にどのような工夫や努力が必要なのか、もう一度全学的な実践を検討する必要があろう。明星学園が12年間でつけるべき「学力」は、高校卒業後の進路を切り開くことが出来る学力でなければならないし、「教養・自己表現・社会性」という目標自体が広く社会に、強いて言えば世界に通用する学力を意識している。どうすれば「学力格差」や「学習意欲の差」を乗り越えるられるのかという問題は明星学園だけではなく、多くの学校で取り組むべき課題となっており、日本の教育界の課題でもある。PISA（OECD主催の学習到達度調査）の結果からも、教育のあり方の問題として世界的に関心が高まりつつある。広い視野で教師も学び、一致出来ることは取り

入れる事も必要であろう。…中略…

② 全ての子どもたちが心地よく学習し生活出来る環境を保障しているか。
生徒たちはクラブ活動、行事、HR活動などの学校生活などをつうじてできる友人関係が学校生活の大変重要な要素になっている。特に内部進学の生徒にとって、一貫校での友人関係は一生の宝になる事もあるが、うまくいかない場合は他校へ転出してしまう最大の要因ともなっている。あからさまな暴力まではいかないまでも、個人の物を隠す・盗む・壊すなどの行為、言葉やメールなどによるいがらせなど、友人関係を損なう行為をなくすことは出来ていない。教師が友人関係のトラブルを解決するために指導するだけでなく、自分の意見や気持ちをしっかり他人に伝える事の大切さや、他人の立場に立って自分と違う価値観や意見を持つ人を理解することの意味を、生徒自身の経験を通じて学べる状況を作ることが必要だ。…中略…

③ 卒業後の進路を積極的・意欲的に考え、実現できる力を保障しているかどうか
明星学園は高等学校が最終学年であり、その後は自分で考え切り開いていかなければならない。高校までの時期に自分の進路を真剣に考え、自分と向き合うことは人生にとって大きな意味を持っている。私たちは常に生徒が社会に出て行く事を意識して行かなければならない。明星で学ぶことは生徒が卒業後社会に出て生きていく糧になる事が求められ、現代の日本や世界が抱えている問題に敏感であり、自分なりに問題意識をもてることが必要である。生徒は、授業や日常の生徒との交流を通じ、教師自身の価値観や人生観を学んでいる。私たち教師自身が広く社会や世界の状況を常に意識し学んでいく努力が要求されている。

校舎問題と教育実践（2008年度）

こうした「報告」は、次年度の各部の教育方針･実践に具体化されなければならないが、「報告」がそれだけに終わってしまっている傾向にあった。

2007年4月から検討を重ねてきた「中学校校舎建築委員会」による「2010年中学校舎移転」計画の延期が決まり（2008年10月理事会判断・別項目で報告）高校敷地への中学校舎移転は延期となったが、より一層一貫の内実をつくることが大きな課題となった。2008年度の研究会は、それを受けて開かれた。

この日（2009年3月19日）の課題は以下のように設定された。

1. 校舎のあり方を含む明星学園の中長期計画を立てる
2. 一貫教育の内実を充実したものにする
3. 教師相互の意思疎通をはかる

第1部は「校舎建築問題」の教職員会議となった。第2部は全教員が4つの分科会に別れて意見交換を行った。分科会のテーマは以下の通りである。

(1)「学力格差をどう克服していくのか」　司会進行　渡辺　京・福田純一
(2)「思春期の子ども達にどう向き合うのか」　司会進行　一瀬　清・村田修二
(3)「社会性・自治能力をどう高めるのか」　司会進行　河住貴夫・簗　賢治・姫野英二
(4)「教師の学び合いをどうつくるか」　司会進行　村田晴海・高橋幸悦

課題の具体化・実践の共有へ（2009年度）


小学生のマット運動

これまでの研究会が「意見交換」にとどまり、具体性に欠け、研究会の成果が見えにくいとの反省もあり、2009年度は、掲げてきた理念や教育目標を実践の中でどう具体化するのかがテーマとなった。両校長からの「基調報告」で具体的には次の5項目が示された。

要旨は次の通りである。

① 2011年に12年間の新たなカリキュラム集を発行
- ・2011年をめどに、現行カリキュラムを検討
- ・持続的検討を可能にする体制→全園的組織（「教育研究部」など）の設置

～全園的公開研究会実施に向けた検討・日常の合同教科会・各部教科会、合同専門部・各部専門部の保障・研究紀要の発行等を行う

② 「自分で学ぶ」姿勢の確立・「学んだ結果」の定着～「場」や指導の計画化
- ・自主学習のよりどころとなる教材（自主テキスト・復習問題集など）の作成
- ・ノート整理・宿題を放課後学校でやる場を提供→教室・援助者の設置

③ 全園で文章表現能力の強化
- ・教科でレポート指導など「文章表現力をつける事」を重点に取り組む
  →明星での文章・論文指導カリキュラムを作成
- ・文章を書く・仲間に言葉等で発表する機会を増やす

④ 教科外活動の位置づけの明確化
- ・自治活動への指導・援助
  中学での「特別活動」やクラス代表者会議、高校での「ロングHR」・自治会の活動を計画的に充実、小学校でのHR・「生徒会」の検討
- ・異文化理解教育・国際交流の系統化

⑤ 各部間の人事交流・部を越えた授業の持ち合い等、人の交流を促進
- ・特に中・高間の人事交流の原則を作る
- ・小中の交流→5・6年の授業の専科化を進め、中学教員が持てる体制の検討

後半はテーマ別分科会がもたれた。5つの分科会テーマを以下に示しておく。

第1分科会「評価のあり方」	司会・報告者　一瀬　清
第2分科会「研究活動をどう進めるか」	司会・報告者　福田 純一
第3分科会「自治活動をどう進めるか」	司会・報告者　渡辺　京
第4分科会「教科外活動の系統性」	司会・報告者　村田 晴海
第5分科会「明星の良さをどうアピールするか」	司会・報告者　河住 貴夫

4月に入り、分科会の報告書が全員に配布された。

2010年度（2011年3月19日）は、「12年卒業後の進路」「内部進学」「9年生による卒業研究発表」を予定していたが、3・11の東日本大震災のため、中止せざるを得なくなった。

明星学園の目指す「学力」とは？（2011年度）

2011年度は、この間議論になってきた「学力」の中身を掘り下げて考えるため、外部講師を招いての研究会を企画した。同時に昨年来大きな課題となってきた防災問題での意思統一を含め研究会は実施された。講師は佐貫浩氏（法政大学キャリアデザイン学部教授）、講演テーマは「人間としての力をエンパワーする学力とは何かを考える～生きることと学ぶことの統一を」というものであった。とくに社会の変化の中で歪められた「学力」のあり方が紹介され、「生きる力」と「学力」を明星の教育に照らして構造化していただいた点、「習熟」の本質的意味を語っていただいた点は、実践的に大きな刺激となった。また、2つのキャンパスと、高学年になるにしたがってクラス数・生徒が増える（中・高で外部生を募集）という、「特殊な一貫校」である明星学園が抱える課題を魅力に変える実践とは何かを追求する機会となった。以下「校長報告」を一部紹介する。

3月21日全園職員会議一瀬小学校長報告

私学にとって大変厳しい状況を迎えている。少子化、不況、就職難などの社会情勢に加えて、震災や公立の中・高一貫、小中一貫校設立などの要因はあると思われる。募集活動も大事だが、より根源的には私たちの教育実践の向上、そして、それを広く知らしめることを全員の意思のもとに実践していかないと危機を乗り越えることはできない。6・6の体制をとってから6年、中・高の交流、中・高クラブの活発化など成果を上げている一方で、小中のつながりが薄くなっていることは否めない。12年一貫6・6体制であったのであり、もう一度一貫教育のイメージの共通化を図り、一人一人が12年一貫のどの部分を担当しているのか、各々の実践が全体の中でどう位置づけられているのかを意識化し、より意識的・計画的な営みとなるよう実践をしていきたいと思う。…中略…


小学生の合唱

発達段階において指導の内容と方法、あるいは力点の置きどころは違いがあっていい。大事なことはその違いを認めつつ、協働して、ことに当たるということである。小学校で「体験・感動」が重視され、中学校で「探究的学び」が重視され、高等学校では「進路を選択する力」が重視されることは当然のこととしていくのである。「違いの是正」「一致」「こうであらねばならない」を議論するより、明星学園は子どもたちの多様な価値観を認め、多様な能力を個々に伸ばしていく努力を協力して行う学校という考えを共有していきたい。「こういうことを学んでこういう仕事に就きたい」と思えるような自分の将来に夢と希望をもった子どもたちを送り出していこうではないか。

具体的な方針

(1) 教育実践力を高めるために小・中・高一貫の教科教育の実現。
「合同教科会を開き、各学校各学年での到達目標をはっきりさせる」「研究誌として全校一冊の『明星の教育』をつくる」「評価の在り方を討議し実践する」などを提案。
(2) 子どもの成長過程をデータ化し、各部で共有する。
(3) 行事・教科外活動の一貫を進め12年一貫の「学校カリキュラム」をつくる。
(4) 明星学園を広く社会に知ってもらう努力をする。
1) 「夏の教室」(7月28日・土)「秋の教室」(11月18日・日) のより一層の充実を図る。(後略・別項参照)
2) 学園ウェブサイトの充実。
3) 現保護者・元保護者・卒業生への働きかけを強化する。
(「ボランティア制度を拡充」、「協力者の名簿作り」等)
4) 明星の教育活動を知ってもらう場を出来るだけ多くつくる。
(「PTA主催で行っている「明星の学び」の会、「小さな単位でも教育活動を知る機会」)
(5) 募集活動の改善に取り組む。
(6) 災害への備えの強化 (河住貴夫教頭報告)

(2) 全園研究会(春の研究会)の意味と今後の方向

2012年度に入り、研究会で提起されたいくつかの点で具体化されている。9年卒業論文は、全員が文章を作成し、プレゼンテーションソフトを使って発表し始めており、内外から高い評価を受けている。今後、12年間を通じて「書く力」を育てるプログラムの具体化に向けた取り組みが必要であろう。研究誌『明星の教育』は小・中・高の教務部が中心に具体化され、3年ぶりに小・中・高の研究誌として2012年度末発行された。「評価」の点でも、中学で「学習の記録」にA～Eの5段階評価を各教科が加えるなど、保護者や生徒が自分の位置や課題がわかりやすく、努力目標が設定しやすい評価の工夫がなされている。一方高校では「努力してもテストで結果がなかなか出せない生徒」をどう評価し、どう指導していくかが、評価と併せて議論されている。「内部進学」に対する教職員の意識変化も大きく、小学校から明星学園のめざす「学力」をしっかり身につけた子どもたちが、中学・高校で中心になって学習・行事・クラブ等で活躍する「一貫」の姿を求める声が強まっている。

1年に1回だが、「春の研究会」は少しずつ日常の実践課題を進めていく上で役割を果たしつつあるといえよう。2013年度は校長交代など新たな体制の出発となることから、新年度方針を示す「全園教職員会議」として開催された。今後は、ここで示された課題や方針を各部で実践・研究し、その結果を持ち寄り全園的に検討する場として、計画的・意識的に開催されていく必要があろう。

＜文責：渡辺 京＞

第3章　新たな社会を生き抜く力

1　原点をみつめ未来をひらく

豊かな自己確立に向けて

2011年、東日本大震災は原子力発電所の事故を引き起こし、科学技術の進歩が必ずしも人間を幸福にするものではないことを示した。大量の電気をつくることができる原子力発電は、一方で人間の力では処理することのできない核のゴミを生み出す。地球温暖化による気象の変化は予想を超えて大きな自然災害をもたらしている。新型インフルエンザのような目に見えない恐怖にもさらされている。

行き先の見えにくい不透明な時代に私たちは生きている。社会は自然との共存に舵を切り、地域社会から世界を見直していくことが始まりつつある。

子どもをめぐる社会に目を転ずれば、情報化・国際化社会が進み、子どもたちは雑多な情報をシャワーのように浴びせられる中で、その場限りの刹那的な文化に流されている。自分の生活しているのがどのような世界なのか実感できないという困難な時代を生きている。子どもは大人より世界の先端を敏感に感じ取っている。他人への関心が薄れる一方で、ひたすら嫌われないように気を配ることで自分を失ってきている。他人と合わせないといけないと思い込み、携帯端末を肌身離さず持ち、1分1秒を争うメール交換などは、その具体例である。肉体的、精神的ひ弱になりつつある子どもの世界もまた、見直していく必要があるだろう。これからの社会を豊かに生き抜くには、自ら考え、行動するという「主体的な学び」を通して、豊かな自己を確立していくことが重要である。国際化社会の中にあって異文化を受け入れ、世界に発信ができる人間に成長するためにも個の確立は欠かせない。

明星学園は創立90周年を迎える。創立当時、多くの学校は国に奉仕するための国民の育成を目標とし、雑多な知識の詰め込みに汲々としていた。そんな時、「人間の価値」、「生き方の追求」、「個の幸せ」という大正デモクラシーを背景に明星学園は誕生した。一般的には早く大人になるための訓練・練習が柱であった教育の流れに抗し、「子どもには子どもの世界がある」という新教育の考えを柱にした。子どもの感性を土台とした知識づくりである。「個性尊重」「自主自立」「自由平等」を教育理念に据えたのだった。以来その教育理念は今日まで引き継がれ、ゆるぎない伝統となっている。この理念に基づいて、教育実践されてきた視点・姿勢は以下のとおりである。

主体的な学び

明星学園を特徴づけているのは「主体的な学び」である。いまだに雑然とした知識、知識の量のみを追い求める風潮に対し、実践を通じてあるべき方向を示している。明星ではバラバラな知識の寄せ集めでなく、「ひとまとまりの世界」を理解するために系統立てた授業を展開している。1時間に一つの課題（テーマ）にとりくみ、新しい知識を得る。得た知識が次の課題に取り組む土台となり、より発展した課題に進むよう教材が工夫されている。授業での教師の発言は、全体をリードする役割に徹している。一人一人が課題に対して自分の考えをまとめる。それぞれの考えを出し合い、友達と討論をするなかで争点をはっきりさせていく。そのうえで実験や資料によって結論を得て、なるほどそうだったのかと納得するのである。

明星学園に転校してきた子が「このことについて君はどう考えたの？」と聞かれて戸惑ったと

いう。こうだと教えられて、それを覚えて、答え合わせで確かめていくのが学習の仕方だと身についてしまっていたのだ。新しい課題に対して自分の考えを出す（仮説を立てる）というのは、いわば新しいことに1歩踏み出す「心の冒険」である。そのことで対象は身近なものとなり、自分の言葉がつむぎだされる。主体的な学びは問いを育てる。わかればわかるほど新たなその先へと進みたくなるのである。たとえば、算数で2ケタ÷1ケタを勉強した3年生はわられる数を3ケタ、4ケタ、5ケタとふやし、ノート1ページでは書き切れないほどの計算をやってのける。わり切れないわり算では商に小数をつけてわり進みたくなる。こうした未知への踏み込みを「探究的な学び」と呼んでいる。知識を得る過程が大事にされる日々の学習は、知識を得ることだけではなく、「学び方も学んでいる」のである。

「探究的学び」は小学校では1年生の自然のたより「みいつけた」に始まり、6年生の「12才の主張」へと発展し、さらに9年生の卒業研究へとつながっていく。自分で決めたテーマを深く掘り下げて文章化していくことで、言語の力は飛躍的に伸びるのである。

表現

明星学園では「表現」ということを広い意味で使う。子どもたちの「表現」はその子の生き方であり、突きつめていけば存在そのものである。「個性尊重」というが、個性とは表現することを通してしか自覚化できない。表現したことが評価として自分に戻ってきて、人は自分らしさに気づくのである。

明星学園では小・中・高で、合唱、絵画、マット運動、民舞、木工・工芸・デザインなどの芸術教科をとても大事にしている。そこでの達成感は子どもの成長にとって欠かすことのできないものである。「表現」は芸術教科ばかりではなく、すべての授業、教科外活動の中で大事にされる。朗読、詩や短歌、文集・レポート集、新聞づくり、演劇、論文など、子どもの「表現」を読み取り、集団の力でさらに豊かな「表現」に導いていく。「つめこむ」「おしつける」「答えを性急に求める」と「表現」は引っ込む。反対に「好奇心」に依拠し、「発見する」「学び合う」ことを大事にすると「表現」は飛躍的に伸びるのである。子どもたちは一人一人それまでに培った感性が違う。また積み上げられた知識も違う。だから一つの課題に対して多様な「表現」が生まれ、そして共感が成立する。聞いてもらえる、見てもらえるという友の存在が表現意欲をかき立てるのである。教師は「表現」は教えられるのかという問いに悩む。確実に言えることは多くの機会をとり、精いっぱいの表現を促すことで表現のレベルを上げることができるのである。例を挙げよう。詩人まどみちおの「まめつぶうた」をまねて、3年生が次のような短い1行の詩を作った。そこには大人には思いつかない発想がある。

「波」 こんにちは　さようなら（女子）
「風」 おいかけても　おいかけても　つかまらない（男子）
「箸」 ふたりは　なかよし（女子）
「扇風機」ワレワレハ　ウチュウジン（男子）

これらの表現は1年生の時からの言語経験と大きくかかわっている。詩を暗唱したり、朗読したり、詩を作りかえたり、言葉遊びをたくさんしてきた。そのことの蓄積の中からひょいとこんな表現が生まれるのだと思われる。子どもが心を開いている適切な時期に適切な表現を経験することが望まれる。

体験


桜の落葉染め

明星学園では体験を通して学ぶことを大事にしてきた。すぐれた詩や文学作品は、まず読み取ることから、朗読、演劇へと進む。縄文時代の学習では実際に粘土を手に入れ、縄文人になったつもりで土器を作って、野焼きする。奥阿賀や沖縄ではホームステイして自然体験をする。とかくバーチャルな世界に浸りがちな子どもたちにとって、頭と体を結びつける体験的な学びは、身近な世界を体で実感するだけに、強烈に自分の中に入ってくるのである。

ひと時代前には働く大人たちがすぐ近くにいて、「背中を見て育つ」ことができた。生産の現場を目撃できたのだ。しかし、今は見えにくい。普段口にする豆腐でさえ、何か工場からポトンと生み出されてスーパーに売っているものと思えてしまう。だから現代の子どもたちにとって、ものつくりの体験は貴重なものとなる。自然を原料とし、道具を使って作り変え、生活に役立つものを実際に作るという体験は働くことの意味を実感する。働いている大人と出会って、一緒に仕事することはやはり働くことの意味を実感するのである。子どもたちが「本物に出あう」という機会をたくさん持つことが重要なこととなる。

卒業時に

「自由ってほんとうは厳しいものだ。選ぶことの自由は、選んだ自分が自分で責任を負うということを含んでいる」。これは高等学校卒業式で卒業生の代表が自分の体験談として、在校生に残した言葉である。明星はよく自由な学校だといわれる。「自己確立に向かっての自由」、「他人を視野に入れての自由」、創立同人の考えは、お題目にならずに、子どもたちの中に息づいている。「成人式を高等学校でやろう」。一人の思いつきはだんだんに広がり、それが今では毎年恒例のこととなった。ここで自分は友達とともに成長したのだという確かな思いがあるのに違いない。ここに高等学校の教師たちがまとめた「卒業時のあるべき姿～どんな力をつけて卒業させたいか～」という4項目がある。

1. 自分で考え自分で行動できる人間
2. 総合的な視野を持てる人間
3. 文章で自分の考えをしっかり表現できる人間
4. 自分で進路実現・問題解決していく人間

明星学園は大学を持っていない。持っていないからこそ、そこまでに自分の進む方向を自分で選ぶ。世間では大学のランクで大学を選ぶ生徒が多い中にあって、明星の高校生は「何が学べる大学か」「どんな教授がいる大学か」という選択基準を持っている。大学合格がゴールではなく、生涯にわたって学び続けるのである。

教育研究

大正自由教育の指導者であった澤柳政太郎氏が掲げた4つの目標の一つに「科学的研究を基とする教育」というものがある。明星の創立同人はこの考えを忠実に実行に移した。赤井米吉は「私学といえども社会立の学校をめざす」と発言、明星の教育が独善とならず、公教育を視野に入れ

るべきだという方向性を示した。教育の方法ばかりでなく、教育の内容も研究の対象にすることを明言した。照井猪一郎は『新読本』をつくり、実際に公教育に影響を与えた。こうした考え・実践を原点に持つ明星学園は、絶えず教材研究、授業研究を重ねてきた。今日、教師たちが子どもたちの前に差し出す教材は研究によって生まれ、実践によって育ってきた教材である。明星学園では教師に教材開発の自由がある。しかし、一人が開発した教材は常に公開され、「本質的内容を持つものなのか」「子どもたちが主体的に取り組めるものなのか」という視点で吟味される。よきものだけが残り、引き継がれていくのである。明星の教師たちは「教師は実践者であると同時に研究者である」ことの自覚を持っている。

一人の教師の研究は共同研究となって高められ、共同研究されたものは一人の教師の実践に帰っていく。明星の「主体的学び」は教師にとっても日々学びの連続なのである。

こうした教育理念は、今日も色あせることなく、むしろますます重要になってきている。実践を積み重ねてきた伝統が、今こそ力を発揮するときなのである。



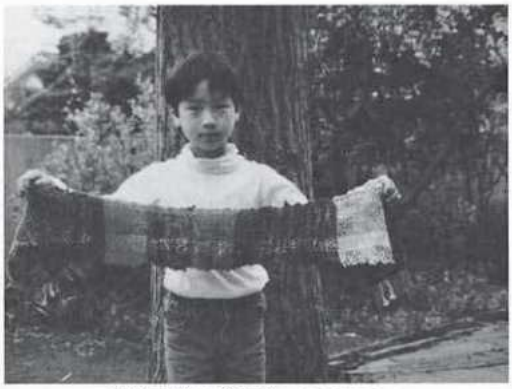
羊毛からフェルトをつくる



海辺で集めた砂鉄から鉄をつくる



土器の野焼き



自作の織り機で織ったマフラー

＜文責：一瀬 清＞

2 小学校の実践

(1) 自らの思いを自らの言葉で綴る—卒業論文「12歳の主張」

小学生の子どもたちにとっての6年間というのは、大人が感じるそれよりもはるかに長い。保護者に手をひかれながら不安そうに門をくぐった子どもたちが、6年後には、自分自身を見つめ、思春期への道を踏み出し始めているのである。明星の教育が、ひとりひとりの個性を尊重し、自由で自立した人間を育てることを目指すのであれば、この区切りとしての12歳の時に、自分の考えを自分の言葉で表現できる人間として小学校を巣立ってもらいたい。誰の真似でもなく、自分らしい言葉を駆使できること。しかもひとりよがりでなく、周囲の人と言葉により相互理解を深め、連帯して生きていけること。それこそが、自由で自立した人間には必要だからである。

従って「12歳の主張」では、自分の生活を見つめてテーマを決め、自分が感じたり考えたり調べたりしたことを、周囲の人（多くは仲間としての読者）にわかりやすく伝えることに主眼をおいている。これは、入学時から始まる「みいつけた」の活動の中にすでにその基盤をもち、さらに日記等さまざまな日常生活を綴る活動を続ける中で、6年間かけて積み重ねてきた力の集大成ともいうべき取り組みである。言いかえれば、日々の生活の中から価値あるものを見出し、表現を通して認識を深め、学び合うということなのである。

では、具体的にはどのようにこの活動に取り組んでいるのかについて述べよう。

①テーマ（主題）を決める

前述したように、自分の生活に根ざしたテーマを選ばせたい。そこで、夏休み前にはテーマ探しに入ることを予告し、自分が今もっとも書きたいと思うことをよく考えて決めさせる。

②構想を練る

テーマに向かっての文章の論理構築、いわば全体の設計図を組む。書き出しはどのように工夫するか、主張へと向かう道筋に何をどのようにおいていくか、結論をどう導くのが効果的か、等、論理的な構想をあらかじめ見通しておくのである。

③下書きをする

「12歳の主張」は、本やネットで調べたことを書き写すのではない。自分の言葉で文章を綴るということだ。これは、大人でも大変であるから、ここが一番辛いところである。6年間で学んだ文法・作文の知識、優れた文芸作品から学んだ描写や表現の技術など総動員して綴っていく。何度も読み直して推敲を重ね、練り上げるのに2ヶ月以上かかることもある。

④清書する

できた文章は自分の字で清書する。ここまでくればあと少し。製本して文集が一冊に仕上がるのを待つのみである。

⑤読み合う

こうして、卒業生全員のまとまった卒業論文集ができあがる。この一冊を教室で読み合うことで、さらに学び合う。友達の主張に共感したり、新たに考えを広げたり、深め合ったりするのである。それは、自分の中に新しい視点を取り入れることのみならず、友達を再認識したり、尊敬し合ったりということにもつながる。

取り組みの概要は以上である。卒業生が巣立つ前に渾身の力をこめて綴る作品は、文の上手下手を越えて、ひとつひとつ全てにものがたりを感じさせ、胸を打つ。文章を読むだけでそこにそ

の子が立ち上がってくるようで、愛おしい作品ばかりである。その中からひとつの作品を紹介しておこう。

作品の題は「全ての人が地域で暮らせるために」というもの。2005年度の卒業生が綴った作品である。障がいを持つ弟が、どうすれば差別されることなく、この社会で幸せに生きられるかと考えて綴った作品だった。


小学生卒業論文「12歳の主張」

この論文は、スタート時からドラマティックだった。テーマを決める時、いちばん伝えたいことは何か、という質問に彼はこう書き記してきた。

「自閉症の人を差別していいのか！！ 100人に一人は自閉症といわれるが、その一人をバカにしていいのか！！ 自分は自閉症の弟が一人立ちできるかどうか不安だ。自分は自閉症の人と平和に共存できる日を待っている」。

私はこの時、正直言えば戸惑った。彼はよく教室で弟のことを話題にしており、学級の仲間にはそのことに対する偏見や差別意識はなかった。しかし、文集にすることは、学級内だけでなく、隣の学級、いやもっと広く公に文章を提出することである。私は、親御さんの許可も必要ではないかと思った。彼とその件について相談し、テーマはもう一つ考えておき、親御さんのお返事を待つほうがいいと助言したのである。「そうだね」……彼は素直に二つ目のテーマを考えつつ返事を待っていた。3日後、悩んだに違いないご両親からのお返事が来た。「そこまであの子が考えているとは思わなかった。書かせてやってほしい」と——。その上、ご両親は障がいに関する資料まで渡してくださったのである。私は頭が下がってしまった。お返事を頂き、彼は生き生きと綴り始めた。弟と自分の日常から始まり、日ごろ感じていることや、資料を通して調べたこと、考えたこと等をみごとにまとめあげたのである。

「皆さん、もし街の中で自閉症の人を見つけた時は、その人の話を聞いてあげてほしい。外国人が道を聞いてきたら丁寧に教えるように。『この人は何が言いたいのか』を考えて、話し相手になってほしいのだ。

このように、皆さんが自閉症やそれ以外の障害の人とも支え合えば、山奥なんぞの施設に送らずにすむことができる。

みんながお互いに支え合えば、ぼくの弟を含めて、全ての障害を持つ人が地域で暮らせるようになると思う」。

彼の「12歳の主張」のまとめの部分である。彼の優しさと真面目さと、そして純粋に社会を見つめるまともな判断力を感じ、私は涙がこぼれてしまった。これをテーマに選んだ彼自身はもちろん、「書かせてやってほしい」と息子を信じて資料を託したご両親にも脱帽である。

さらに、これを読み合った時の学級の仲間のことも忘れられない。教室内に自然と湧き上がった大きな拍手。彼らは、この文章をまっすぐに受け止めていた。（以下友達の感想）

- とてもいいと思う。自閉症の人々は地方にかくりされ、私たちと同じ人であるのに差別を受ける。病気を持っていたってその人にはいいところもあると思うし、自分にはできないこともできると思う。でも地方に病気の人々を行かせている。彼の言うとおり、病気を持っているからと差別しないで、障害を持っている人たちとみんながお互い支え合って生き

ていければいい、と思った。

- 私は「自閉症」という名を聞いたことがあるだけで、実際にはどういうものか知らなかった。だからこの卒論を読んでよくわかった。そしてこの卒論を読むことでたしかに施設に送るのはよくないと同感した。これからの世の中は「障害を持っているから」というだけの理由で差別があるような世の中にならないといいと思う。
- 今までどんな病気かも知らなかったが、読んでみてよくわかった。障害があるからといって差別したり施設に送らないで、一人一人支え合う、という主張がよくわかり、とてもよかった。
- たとえ自閉症でもぼくたちと同じ人間だ。だから自閉症の人たちといっしょに暮らせるようになりたい。施設なんか作ったら、差別だと最後に思った。

仲間のこうした感想を、彼は静かに微笑んでうけとめていた。

では、最後にその全文を掲載させていただく。私が拙文を書くより、はるかに多くのことを物語ってくれる作品だと信じるからである。

全ての人が地域で暮らせるために　　高橋 良輔

ぼくの弟にはいろいろなこだわりがある。朝ごはんは冷凍食品のピザしか食べないとか、炊飯器のスイッチは自分で押さないといけないとか、ごはんは食べないとか、ごはんの前にはフロに入らなければいけないとか……。これはほんの一部である。こんな風だからぼくの弟が変だと人が思うのも無理もない。

だってぼくの弟は自閉症という障害を持っているのだから。

では自閉症とはなんだろうか？

一言で言えば、人とのコミュニケーションがうまくできない障害である。現在のところ原因不明の病気である。

特徴は6つぐらいある。ひとつ目は言葉の発達の遅れ。2つ目は周囲の人との関係をつくることがむずかしい。3つ目はアンバランスな感覚、例えば身体を触れるのはいやがるがけがの痛みには平気だったりする。4つ目は活動や趣味の範囲が狭い。5つ目は知的機能がアンバランスである。時には普通の人よりむしろすぐれた才能を持っている人もいる。6つ目は変化に対する不安や抵抗があり、時にはパニックを起こす時もある。これらが自閉症の特徴である。

日本では24万人が自閉症といわれ、1,000人に1.5人から2人の割合で自閉症だと言われている。弟もそのうちの一人である。つまりそう数が少ないわけではなく、あなたの身のまわりにもたくさんいるということである。

それなのになぜ自閉症を知らない人が多いのだろうか。

それは日常生活の中で共に生活することが少ないからではないだろうか。例えば学校の中で同じクラスに自閉症児の友達がいることはほとんどない。だから、一緒に遊べない。また、大人になったら遠いところにある施設へ入らなければならないということもある。実際施設を調べてみると、北海道や北陸地方や中国地方に多くあり、都心にはほとんどない。まるで強制収容所みたいだと思った。

こんなに離れているとますます理解ができなくなり、ますます差別されるのではないかと心配になる。

だから自閉症を理解するには、まず触れ合わないといけないとぼくは思った。

例えば弟にはこんな面もある。いろいろとこだわりがあって、ちょっと困るところもあるけれど、水泳が得意だ。一緒に海へ行った時、遠くまで泳いで行ったことがあった。それは単純に、すごいと思った。自分も負けるものかと思った。

それ以外には自分の行きたいところや、好きなレストランの名前をすらすら言うことができて、すごいと思った。レンタルビデオ店に行った時には、借りたいビデオなどがすぐに選べるからすごい。なぜすぐに選べるかというと、どこにどんなジャンルの棚があるかと記憶し、しっかり覚えているからだとぼくは思う。だからすごい。

他にもぼくが何かをやっていると、笑っている時もある。そういう時はぼくも楽しくなる。つまり一緒にいれば、けっこうおもしろいこともいろいろあるのだ。

どのみちどんな障害でも、触れ合えればたいして気にならないものである。

どうして差別をしたり、施設に送ったりするのだろうか。皆障害はいっさい自分とは関係ないと思いがちだが、事故を起こしてけがをしたり、老化が進んで階段の昇り降りができなくなってきたりすれば、誰だって障害者になるものである。

そういう人たちを遠くに送るのはおかしいし、よくないとぼくは思う。

でもどうして施設へ送るのだろうか。これはぼくの考えだが、大人になって家族の手に負えなくなったりするとか、世話ができなくなったということが理由だと思う。でもぼくは、そんな山奥に送るのではなくてもっとにぎやかな場所で、一緒に暮せる方がいいんじゃないかと思う。

ぼくたちの住んでいる町の中で、もっと自閉症の人たちと触れ合ってほしい。そして楽しいことを感じて自閉症のことをたくさんの人にわかってもらいたいと、ぼくは本当に思っている。でも現状を考えれば実現できるかどうか難しいが、何とか実現してもらいたいと思う。

そのためには、自閉症の人が大人になって働けるかどうかが大切だ。自閉症の人でも働くことはできる。できるけれどそのためには、ぼくらが自閉症のことを理解せねばいかんのである。

自閉症の人が得意なジャンルは人にもよるが、形や量がはっきりしていることだそうだ。例えばパンなどを作る（成型）や、梱包、物品の仕分けなどの、終わりや目的がはっきりとしている仕事が得意らしい。人それぞれではあるが、わりと苦手なことは、「掃除」である。どこからが「きれい」で、どこまで「きたない」かがうまく把握できないからである。そして、これらの仕事をするには、言葉で説明をするだけでは把握できないので、絵や文字で書いたものを見せれば、自閉症の人もうまく把握できるみたいだ。

皆さん、もし街のなかで自閉症の人を見つけた時は、その人の話を聞いてあげてほしい。外国人が道を聞いてきたら丁寧に教えるように「この人は何が言いたいのか」を考えて話し相手になってほしいのだ。

このように、皆さんが自閉症やそれ以外の障害の人とも支え合えば、山奥なんぞの施設に送らずにすむことができる。

みんながお互いに支え合えば、ぼくの弟、勇輔を含めて、全ての障害をもつ人が、地域で暮らせるようになると思う。

＜文責：川松 泰美＞

(2)引き継ぐべきものと改革すべきもの —— 算数の新たな取り組み

授業の根幹（授業作りの基礎的な考え方）～課題とは何か～

「ゆとり教育」の時代、明星学園では学校週5日制を公立よりもいち早く導入したが、教科課程については旧課程をそのまま実践していた。公立学校では、授業時数削減により学習内容が2割半ほど削られている中、明星では、どうしてそのようなことが可能だったのだろうか。明星学園がこの時期に貫いてきた「学び」とは、どういうものなのか。

明星学園におけるカリキュラム観、授業観を論ずるに当たり、1981年11月に発行された『明星の教育4』から、佐藤文夫の文章を引用してみる。〈※1〉

> どんな授業でも、子どもたちに学習課題がはっきりとわかりやすい形で提示されなければならない。しかも、子どもたちの今までの「体験や知識」あるいは「概念」などによって類推できるような「課題」であるなら、子どもたちは課題の解決に向かって、活発な思考や行動を展開しはじめるだろう。また、その「課題」が子どもたちの未知の世界を取り扱ったものであっても、直感的な思考をうながすモデルや教具が用意されているなら、子どもたちは新しい知的世界へと飛躍することさえ可能である。
>
> 授業は、ある単元の指導計画の一部を具体化するものであるが、一つひとつの授業には、必ず「課題」が設定される。そして、その課題は必然的に授業の流れや、子どもたちの活動—予想や仮説、理由づけや反論—を授業者にイメージさせるだろう。
>
> 子どもたちの「課題」に対する予想は、「あてずっぽう」なものから「論理的・分析的思考」のものまで、多彩であっていい。子どもたちが「課題」を自分のものにした時、子どもたちの自己運動としての「学習」活動が展開され、子どもたちは互いに相互作用しながら、新たな認識への準備が整えられる。当然、彼らの中に生じた対立や矛盾は、「客観的」な「実験」や「事実を明らかにする資料」によって解決される。教師の「お話し」や「子どもたちの討論」によって決着がつくものではない。従って「課題」が設定されたなら、その「課題」に対する客観的で、うたがいのない事実としての「実験」や「資料」が用意される。「実験」や「資料」から得られる結果が、子どもたちに結論を要求しているのである。
>
> このような授業であれば、子どもたちは何のためらいもなく、自由に考えることができるし、自由に主張することができるのである。

佐藤は、子どもたちが授業—学習する時、はっきりとその課題を意識できなかったら、どこへいくのか、見通しのない活動を強いられることになり、そのような授業では、どんなに面白い話術があったとしても、子どもたちの「知的興奮や課題に完全に没頭すること」がどんなにすばらしい感じのものなのかを知らせることはできないと主張している。ここでは、授業の「課題」について言及しているが、こうした主張の背後には、弁証法的世界観とJ.S.ブルーナー『教育の過程』がうかがえる。〈※2〉

ブルーナーは、デューイが提唱していた経験主義を否定し、『どの教科でも、知的性格をそのままにたもって、発達のどの段階の子どもにも効果的に教えることができる』という仮説を提唱した。『教育の過程』は、各学問界の著名人が集まり、教育方法を討議したウッズホール会議の報告書であるが、ブルーナーの視点でまとめられている。『教育の過程』の中で提唱されている事柄は大筋として以下のようである。

〈※1〉『明星の教育4』(1981年11月)
〈※2〉J.S.ブルーナー『教育の過程』(岩波書店、1963年)

科学、数学といった教科の中核をなす基本的な概念を理解することにより、その教科を理解しやすくなるし、そこから派生する様々な諸概念の理解を深めることもできる。教科の構造観を多くもてば持つほど、内容がぎっしりとつまった、長いエピソード（ひとまとまりの重要な学習経験）を疲労することなくやり遂げることができるし、また、生徒が独力で発見する力がつくように導いてゆく、胸をわくわくさせる順序で教えることによって、学問の基本的構造を生徒に提示することが可能である。つまり、学習の動機付けは、学習することそれ自体に対する興味・関心に基づくものでなければならないし、「わかってできる」という本来あるべき楽しさを土台に据えることにより、ある分野で習得した基本的諸概念は、ただ一般的原理を把握するということだけではなく、学習と研究のための態度、推量と予測を育ててゆく態度、自分自身で問題を解決する可能性にむかう態度などを発達させると主張している。また、本書の中で登場する“ラセン型教育課程”は、現在文部科学省が提唱している反復・繰り返しのものではなく、概念をより高次に高めるためのプロセスとして位置づけられているものである。

ブルーナーが提唱したこうした学習方法が発見学習と呼ばれる所以は、経験学習と系統学習との統一的なものを提唱していたからである。高度成長期から始まる明星の授業観の根源はここにあり、系統学習といいつつ知識をただ詰め込むだけの当時の一般的な授業とは、こうした点において大きく異なるのである。こうしたことから、学習内容を削減することなく、小学校で学ぶべき内容を、小学校という段階を越えてより高次な次元まで高めつつ、発展的に学習させることが可能であったということができる。

週5日制を導入するに当たり、世間では学習内容を減らしての導入になったが、明星学園ではそうしたこと無しに、従来通りのカリキュラムを貫くことができていたのには、こうしたカリキュラム観、教材観、授業観があったからと言える。

幼児期の空洞化～原体験の不足～

この10年間で子どもが変わった、という表現をよく耳にするようになった。直情的、我慢ができないなどだ。理由や背景は様々だろうから、一言で片付けてしまうのは危険だ。しかし、高度成長期と同様に、知識偏重の授業では理解できないからこそ、いらついて暴れてしまう子が増えていると言えるのではないだろうか。

また、清水真砂子氏によれば、“わからなさを楽しむことができない若者”が増えているという。氏は、結果を急ぐ教育の結果ではないかと言う。これはとても頷ける。

後者は、当学園においてそのような結果を急ぐ教育を行っているわけではないので、前者のような状況を示す子どもがどのようにして生まれてくるのかを考えなければならない。そこで、ヴィゴツキーのいう「内言」の発達について考察しておくことにする。

「内言」とは、私たちが口に出さずに頭の中（内側）で話す活動を指している。幼児期初期の子どもは、言葉を口にして、しゃべりながら思考している。しかし、7～8歳頃になると頭の中で話すことで思考することができるようになっていく。つまり、言葉を外に出して言う「外言」の経験の蓄積が、思考の言語とも言える「内言」の発達をうながすのである。そして、この時期に見られるのが、「独り言」や「つぶやき」である。子どもは、独り言を言いながら思考する経験を通して、内言によって思考することができるようになっていく。そして、内言の発達こそが、「書き言葉」の発達を可能にする。書きことばは、実際にはいない精神的に離脱したもう一人の自分

を措定しないと、他者に何を説明しているのかが分からなくなってしまう。あたかも自分を外から眺め、自分の姿を説明するために、頭の中での言葉の試行錯誤が必要である。内言こそが、このような言葉の試行錯誤を可能にするのである。内言によって可能になる書きことばの獲得とは、「思考すること」の発達である。〈※3、4〉

ヴィゴツキーは、このように子どもの思考と言語の関係を説明している。私は、こうした考え方を経験的に更に一歩進めて、次のように捉えている。

一般的には、幼児期において様々な経験を通して言語概念が発達するが、その獲得された語彙数が少ない、または獲得していたとしてもその仕方が形だけ、表面的な物になって来ているのではないだろうか。入学してくる子どもたちがどれだけの言語を獲得してきているのかの調査をしているわけではないが、相当の個人差があるだろうし、20年前と比較すれば明らかに減ってきていると思われる。百マス計算の生みの親である岸本裕史氏（百マス計算は、陰山英男氏が発案者ではない）の考え方の全てに賛成するわけではないが、彼が主張する「見えない学力」としての先行体験や言語環境についてはこの問題を解決するために大きな鍵を握っていると言えるだろう。つまり、幼児期に必要な親子の会話がどのようになされているのか、実体験を通してどれだけ沢山の具体的事実を認識してきているのかなどだ。氏が主張していることは、ヴィゴツキーのいう「内言の発達」を意味しているわけで、そうしたことが不十分な子どもは、幼児期において「内言」が十分に発達していないために、4年生の後半ぐらいから抽象的な概念が理解できず、授業について行けなくなってしまう子が出現していたという危険性がある。幼少期に、感覚を十分に発動させ、言語化し、思考と言語をつなぐ活動を十分行うことこそ、就学時前に重要な課題と言える。〈※5〉

新たな取り組み～感覚から抽象へ～

こうした子どもたちの原体験の不足、空洞化した言語の問題などを鑑み、我々明星学園算数部では教材のリアリティーを更に追求する必要性が生じた。この間の明星学園小学校算数部の取り組みの中で代表的な実践を幾つか紹介する。

- **ゲームによる導入～獲得すべき概念の眼を養う～**

その一つとして、概念形成の前段階（単元の導入時）にゲームを導入し、その概念に馴染みやすい感覚作りを行うプログラムに着手した。こうした研究から生まれたのが、外角の授業である。従来、ゲームと言えばもっぱら習熟を目的としたものであったから、あるひとまとまりの学習が終わった後に行っていた。これを、新しい概念の導入に用い、子どもたちにいわば、疑似体験（原体験）させようという試みだ。

東京学芸大学の関沢氏は、岩波ブックレットに発表した論文の中に以下のような一行を残している。

「…凸多角形の外角和がどのような形であれ必ず360度になるということを小学校でも扱うべきである。…」

この定理を子どもたちにどのようにして理解させることができるのか、実践研究は、明星学園の飯田達彦、百瀬弘両教諭を中心に、群馬大学名誉教授瀬山士郎氏にも加わってもらい、数年間

〈※3〉 レフ・ヴィゴツキー『思考と言語』（柴田義松訳/明治図書、1962年）
〈※4〉 中村和夫『ヴィゴーツキー心理学』（新読書社、2004年）
〈※5〉 岸本裕史『見える学力、見えない学力』（大月書店、1981年）

にわたって行われた。そして、外角という概念を導入するに当たり、既習事項である角の概念とは異なる、基線を任意に措定することができる認識をいかに形成させるのかが主たる研究対象となった。そこで、感覚づくりとなるゲームを導入することになった。先にも述べたように、従来、算数でゲームと言えば習熟を目的としたものばかりであった。しかし、ここでは外角という新しい概念を形成するために子どもたちに先ず視点を与えるべく場を設定しようというものであった。

① スイカ割りゲーム
目隠しをしたプレーヤーに助言者が指示を与え、スイカに見立てた紙風船を
割ることができるかどうかをゲーム化したもの。
指示は、歩数と方向のみを交互に与えるという設定。
―例―
右へ45度→5歩→左へ30度→1歩→打て！

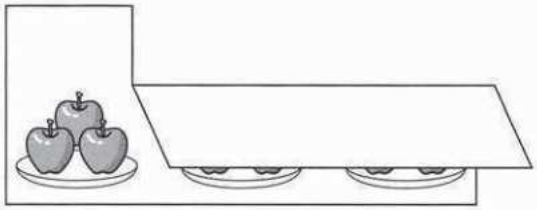
② ラジコンの操作
スイカ割りでつかんだ感覚を鳥瞰させることによって図式化できるように
するためのゲーム。

- **かけ算やわり算の式化～概念をどのようにして獲得させるのか～**

明星学園では、総合で行う“みいつけた”という活動がある。これは、子どもたちが身近な自然の発見を絵や文字に表し、先生や仲間に伝える活動である。この活動は、主体的、発見的に対象に働きかけさせることができると言う点において、算数でもいろいろな場面で有効に働く可能性があった。そこで、我々はいろいろな場面でこの方法の適応を試みた。このレポートでは、かけ算とわり算における実践例を示しことにする。

かけ算は、2年生の2学期後半に扱う。九九を教えれば良い、と考えられがちだが、量のかけ算1当たり量×いくつ分=全体量という、足し算が同種の演算であるのに対して、異種の量を創出する新しい演算であることを教えなければならない。しかも、2年生の全ての教科書がこの量のかけ算を扱っているので、日本全国でこのことが教えられなければならないものだ。しかし、一般的には、かけ算九九の指導はすれども、かけ算の意味に関してはほとんど教えられていない。確かにこの時期に扱う量（出題されるのが、1個、2個と数えられる分離量）である限り、足し算との区別はつけにくい。それは、答を出す時に、または数える時に、2・4・6・8…と数えるので、2の段を2+2+2+…と累加と言われる足し算で求めてしまいがちだからだ。しかし、子どもたちにかけ算の場面を絵と言葉で表現させることにより（単位を明確に付けさせることにより）、足し算との違いを捉えることができる。





（見本）
① リンゴがひとさらあたり３こずつのっています。
② ２さらあります。
③ リンゴはぜんぶで６こあります。
３こ／さら ×２さら =６こ

また、わり算には2種類がある。一当たり量を求めるわり算と、いくつ分を求めるわり算だ。後者のわり算は、密度などの内包量の世界では、第3用法と呼ばれ、小学生にとっては正答率の下がる、かけ算との混同を招きやすい難しいわり算と言われる。速さの問題ならまだよいのだが、割合を求める計算だと、かけ算の式を立てる子の割合がかなり高くなってしまう。

① 全体量÷いくつ分=一当たり量
―例―
時速20kmで進む自転車は、1時間半でどれだけの距離を進むでしょうか。
18cmが3に相当するとき、基準量の長さは、何cmですか。

② 全体量÷一当たり量=いくつ分
―例―
時速20kmで進む自転車で30kmを走るには、どれだけの時間が必要ですか。
6cmを基準量とする時、18cmはいくつに相当するか。

これを掛割図と言われる図で表すと、次のようになります。



私たち大人からすれば、面積で考え、面積÷縦=横、面積÷横=縦のように関係を抽象的に捉えることもできるし、第一、言葉通りに素直に読めば理解できることである。しかし、子どもからすれば、意味をよく捉えていないために、文章問題に出てくる数字をただ式に当てはめてみるなど、勘でやっている子が少なくないのだ。そうした子どもにとっては、掛割図だけでは意味が理解しきれない。そこで、実際の場面をより深く理解させることが必要になる。昔、私達が経験してきたような英語

の当てはめ的な授業では、なかなか新しい考え方、意味理解（概念）を構築させることはできない。

河住由美教諭がこの二つのわり算の区別で試みたのが、「みいつけた」である。（そもそも、私の記憶では、「みいつけた」は、彼女が、先生あのね、ということで始めたようだが）これは、先程も紹介したように、2年生のかけ算の指導でも一当たり量を教えた後、家庭での「一当たり探し」をさせると、子ども一人ひとりが自分のみの周りの小さな社会から自分で考えながら「同じ数ずつある物」を独り言のように繰り返しながら、試行錯誤しながら、抽出させる活動である。これを二つのわり算の区別の場面で用いたのだ。3年生の分離量の段階ではあるものの、立式においても明確な区別ができるようになったのである。従来、この区別は発達段階的に難しいとされてきたが、明星においては何でもない工夫により、そうした分かりにくさを払拭してしまったのである。

- **味覚（感覚）に訴える方法～教材の選択～**

感覚から抽象的な世界へ誘う新しい実践として取り組んだものの一つに6年生グラフの授業がある。これは、6年生比例の授業である。数年前、淘江正仁教諭が速さや密度などの内包量の授業に入る前に私に投げかけた言葉がきっかけとなっている。

「比例は、例年どうしていますか？」

「内包量と区別せずに、内包量の性質を扱った後に内包量の世界として扱うべきだと思うよ」。

「ですよね！」

これだけの会話で、彼は比例の導入教材を「カカオの含有率」にしたのである。比例の導入としては、時間に伴って水かさが増えていく変化など、現象が目に見える物を扱うのが一般的である。しかし、淘江はあえてカカオの含有率を教材化した。他の研究会でも当然このことは指摘されたが、実際のグラフの授業で子どもたちから発せられた言葉がその反論になっている。

グラフを導入した後の授業

T：「このグラフがブラックチョコレートのグラフです」。

T：「それでは、このミルクチョコレートのグラフはどのようになるでしょうか」。

C：「こう！（手を斜めに動かしながら）」

C：「もっとななめってる！」

T：「どういうこと？」

C：「ミルクチョコレートは甘い（カカオの含有率が低い）から、100gのときならカカオの含有量が少なくなる。ブラックチョコレートの下に来る」。

淘江は、高等学校で数学を教えた経験があるだけに、高校生のグラフの認識に疑問を持っていたし、小学生の段階からグラフを豊かに読み取ることを理解させたいと考えていたのである。その結果、子どもたちの感覚（味覚）とグラフを見事に結びつけ、後に扱った燃費などのグラフ理解もリアリティーを持って捉えさせることに成功した。

- **視覚情報に訴える方法～映像による刷り込み～**

もう一つは、映像的な連続した像をイメージとして子どもに与える教具である。明星では従来集合数を先に扱い、その後タイルを順番に並べ、順序数を扱ってきた。勿論、十進位取り記数法

もその中で扱ってきてはいた。しかし、…7・8・9と続いて来た数が、10になると繰り上がるという現象を連続的、感覚的に見せることはできていなかった。そこで、私が着目したのが数カウンターである。表示面を数字ではなく、タイルにし、手動ではあるが大きなドラムを回転させながらそのタイルを連続的に変化させてみせる教具を作成した。この教具を使うことにより、繰り上がり・繰り下がりの原理を理屈抜きに感覚的、映像として子どもたちにその像を作ることができるようになった。繰り上がりのある足し算に入る前に繰り上がり、という概念を数の構造として見せることができるようになったのである。

この教具を作って間もない頃、元本校教諭の故松井幹生氏がビデオを持って尋ねてくださった。氏は、私が操作するタイル・カウンターを見ながら、

「こういう教具が必要なのですよ」

と、言ってくださったのを今でもはっきりと記憶している。松井氏は、ご存知のように明星学園に在職中、遠山氏や銀林氏と共に水道方式の実践・研究の第一人者として日本中の教師から注目を集めた教師の一人であり、私たちにとっては神様のような存在であった。

私達の実践は、そうした先輩諸氏の財産の上にあり、今も遠山啓先生が創立された数学教育協議会に支えられていることは言うに及ばない。

＜文責：福田 純一＞

(3) 自然から学ぶ——「みいつけた」

明星学園小学校では1、2、3年生で自然のたよりの活動「みいつけた」を行っている。

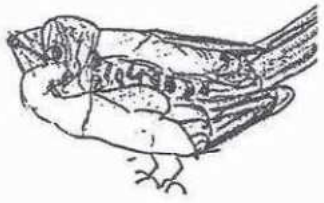
学校の行きかえり、家のまわりで見つけた自然を、毎朝発表する機会を設けている。口頭であっても、絵と文での発表であってもいいことになっている。都会には自然がなくなったといわれて久しいが、子どもたちは大人よりはるかに多くの自然を目撃している。伝えたい人がいるということ、見てくれる、聞いてくれる人がいるということは意欲的に自然に向かう気持ちを育てる。教室に持ち込まれた自然への感動はみんなで共有され、より豊かなものになっていく。自然の事実を認識することにとどまらず、話したり、綴ったりすることで、話す力、聞く力、書く力を伸ばしていくことにもなる。

感動する

子どもたちがどんなことに感動したのか、いくつか挙げてみたい。

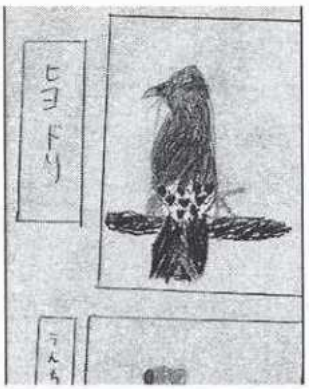
＊2年・女子

ドングリから芽が出ているのを見つけたよ。そのままずっと見ていたかったけど、学校におくれちゃうから、あるきはじめたら、どんぐりがあったほうから、かちっていう音がきこえた。ふりむいたら、すずめがどんぐりをくわえるおとだった。それからすずめが走ったから、おいかけようとした。だけどそのまえにすずめがどんぐりを食べちゃった。せっかく芽がでたのにかわいそうだな。だけどこれが自然のおきてなんだと、その時思ったんだ。



＊3年・男子

ヒヨドリがぼくの家のベランダにうんちをした。うんちの中をみると、うんちに実のたねがはいっている。たぶん赤い実をたべたのだろう。うんちの中にたねがはいっていてびっくりした。たまにぼくの家のいちごをぬすむけど。



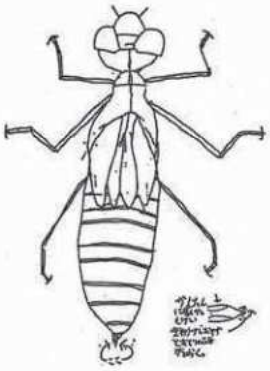


＊3年・男子

カタバミの実のふくらんだところをさわると、なかから種がパパーンと出てきました。おどろくほど種が遠くのほうまで飛んでいきます。種はぼくの手や足にくっつきました。種はでこぼこしています。

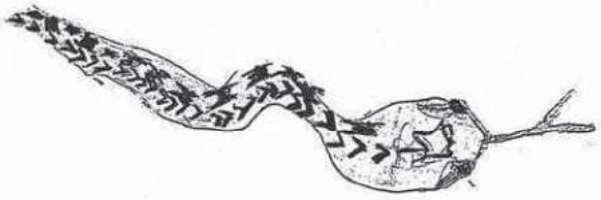
＊3年・男子

今日トウキョウサンショウウオの生態をしらべにいったとき、ぬまの中にあみを入れて、あみの中を見たら、ギンヤンマのヤゴがいた。それで何cmかなーと思ってみたら、5cmくらいの大きさでした。ヤゴの水のとりかえをするので、ヤゴをもっている時、ヤゴのおしりのぶ分がひらいたからびっくりした。なぜおしりのぶ分がひらいただけでびっくりしたかというと、およぐ時、そこが開いて、そこから空気を出して泳ぐようになっているとは知らなかったからです。



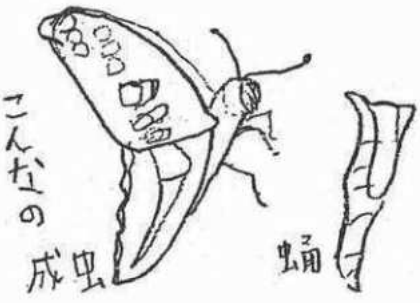
＊1年・男子

へびをみつけました。そのへびのしたのさきが、ふたつに分かれていました。しらべたら、したをだしたり、いれたりしてにおいをかいでいるそうです。へびはしぜんぶんかえんにかえっていきました。



＊3年・女子

チョウチョウの幼虫が葉をいっぱい食べたあと、蛹になって羽化しました。学校で羽化したチョウはアオスジアゲハといい、羽に青い線があります。少し飛びますが、幼虫の時はクスノキの葉を食べているので、ニッパみたいな歯があるけれど、いつのまにかストローのようなロになってしまったのが不思議です。みつをすわないときはストローをまるめているけど、みつをすうときはストローをのばします。



科学的思考

こうしてみてくると、レイチェル・カーソンがいっていた「センス・オブ・ワンダー」すなわち自然の神秘さを感じる心を、子どもたちは持っているのだということに気づかされる。感動は自分の生き方の軸にはめ込まれていくに違いない。私はテントウムシが集団で蛹になること、ミノムシやシャクトリムシがやがては蛾になること、ダンゴムシのメスにはオレンジ色の斑点があること……みんな子どもたちの「みいつけた」で教わった。

子どもたちは自然を見つめることで、ごく当たり前のように「働きかけることでわかる」「仮説を立て、観察する」「調べる」という科学的思考を手に入れていく。今度はそのことについていくつか挙げてみる。

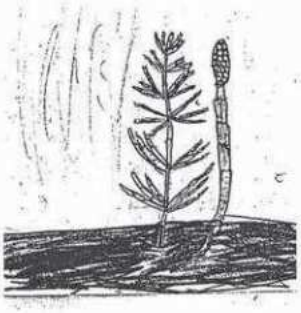


＊1年・女子

おせんべいをたべたらしけっていたから、ありがくるとおもって、にわにわざとすてたら、つぎの日見たら、すなの山ができていました。その山をこわしたら、おせんべいが小さくなってかくしてありました。すぐそこにすがありました。

＊2年・男子

枯れ木から、ふんが出ているので、ほってみると、中にトンネルがありました。いくらさがしてもいないけど、毎日ふんと食べかすがでてきます。きっとカミキリムシでしょう。



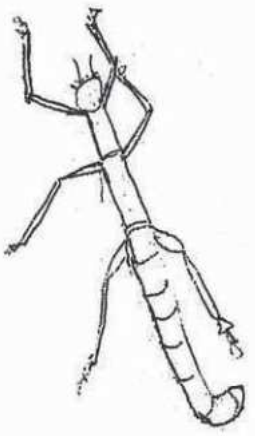


＊2年・女子

こがねいこうえんで、つくしとすぎなをみつけました。なんでいつもいっしょなのかなあとおもって、いえにかえってからしょくぶつずかんでみてみたら、ねっこがつながっているってかいてありました。

＊2年・男子

深大寺でハギの葉についているナナフシを採取しました。ナナフシは葉が風でゆれるような動きをする。本ではおどかすと死んだふりをすると書いてあるけれど、このナナフシは手としりをあげていかくする。ナナフシはメスだけで卵を産む。

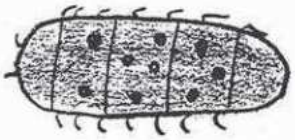


学び合う

子どもたちは「みいつけた」の発表で学びあっている。1年生の子がこういった。「わたしは学校はいろんなこと教えてもらうところだと思っていたのに少し違った。わたしが発見したことをみんなに教えること

ができるところだったんだ」と。
「みいつけた」を通して学び合ったことのひとつにダンゴムシのことがある。
2年生の時のことだった。「だんごむしがいたよ」という発表のあと、聞いていたひとりが疑問を出した。「ダンゴムシにオス、メスがあるのかなぁ？」と。そこですかさず、M君が「ぼく知ってるよ。ダンゴムシのメスはオレンジ色なんだよ」と言った。多くの子は「えー、オレンジ色のダンゴムシなんて見たことない！ じゃ見ているのはみんなオスっていうこと？」。そう言われて彼はがっくり。言うんじゃなかったと言わんばかりの困った顔になった。誰もはっきり自信を持って言えなかったので、調べてこようということになった。次の日、調べた結果「メスのダンゴムシには体にオレンジ色のはんてんがある」ということが分かった。M君の発言は間違っていなかった、ということになった。彼に笑顔が戻った。そればかりでなく、後日、つぎのような「みいつけた」の発表があった。

＊2年・女子



ダンゴムシが犬ごやの前でたまごを産んでいました。きいろっぽいたまごでした。ダンゴムシの体にはオレンジ色のぷつぷつがついていました。

この発表を機会に、生き物が見つかるたびに、オスとメスのちがいは？ という質問が出るようになった。学校の池でザリガニを見つけた時も「ザリガニがこんなにたくさんいたということは、オスとメスがいたに違いない」ということになってオス、メス探しになった。S君が言った。「ひっくりかえしておなかをみると、ひもみたいのがあるでしょ。それがメスのしるしだよ」。

ことばの獲得

「みいつけた」の発表は自分のことばで表現する。ことばに関して何とも愉快な報告があった。

＊1年・女子

12月3日　きよう学校へ行くとき、はたけにキャベツが土の上にあって、その土はふつうはちゃいろなのにつめたい空気で白いすなになっていました。
12月4日　きのう、学校のかえり、みたらキャベツばたけの白いすながきえてなくなっていました。

この子は自分の知っていることばの中から、はたけの霜を「白いすな」と表現した。それを聞いた友だちに「霜のことじゃない？」と言われ、「あれが霜なのか！ そういえばすごく寒かったな」。友だちから感動を持って「霜」ということばを獲得したのだ。

＊3年・女子

5月28日　今日、うちにうえてあるどんぐりからめの出ているどんぐりを見たら、ねもとのところから、だんだん木になっていた。



ドングリから芽が出ても、まだドングリは種だということに半信半疑だったのに違いない。しばらく観察を続けていくうちに、茎が木質化してくることで「木になった！」と思ったのである。

「みいつけた」のノートを見ていくと、3年生になる頃には、ことばが豊富に使われていることがわかる。

＊3年・女子

夜、井の頭公園を歩いていたら、セミの幼虫がいたのでつかまえて、家のカーテンに登らせておいたら、セミの幼虫の体に白線がついていた。すこしすると、その線がもっと大きくなっていったので、うかしているのがわかった。目は真っ黒で体は白で、羽は白い羽で、モスグリーンの羽のみゃくがきれいだった。だんだん羽がはってきて、羽がすきとおってきた。朝にはふつうのセミになっていた。

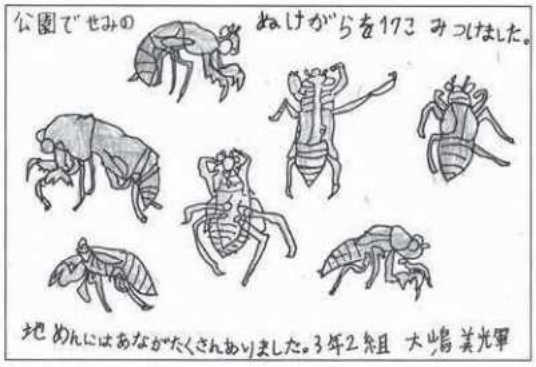


このように、難しいことばがごく普通に使われているのに驚く。

夏休み・冬休みのたより

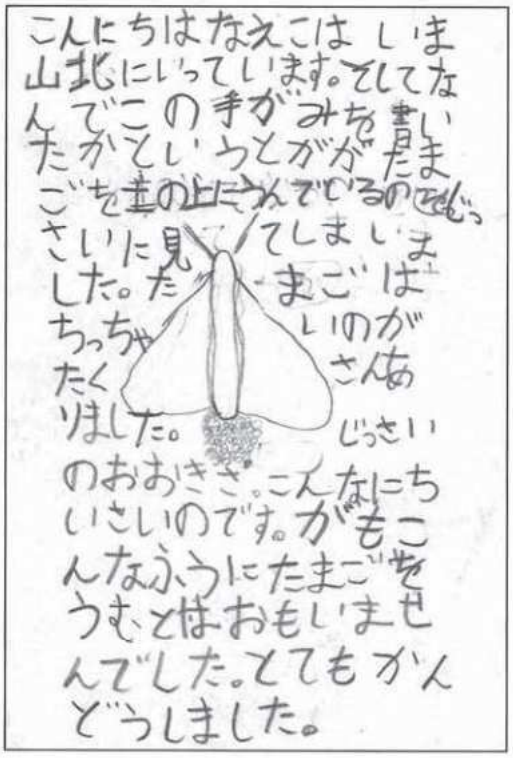
ふだんは「みいつけた」は教室に持ち込まれる。長い休みのときも報告する相手がいるといいなと思い、教頭になったとき全校生徒に「夏休みの『みいつけた』のおたより募集」という提案をした。以来12年間、毎年夏休み、冬休みにたくさんのたよりが届いた。どれも子どもたちがみつけた自然が絵と文で表現されている。普段と違って海や山や田舎からもたよりがあった。

その中からいくつか紹介する。





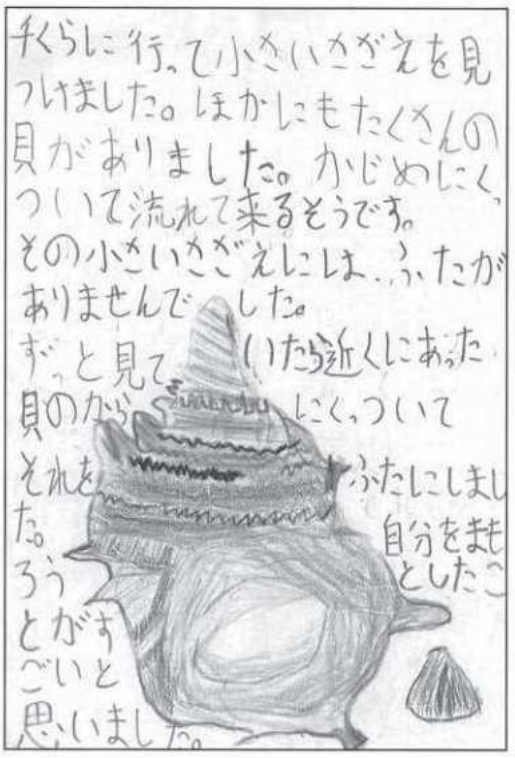



こんにちはなえこはしま
山北にいっています。でてな
んでこの手がみを書いま
たかてい うとがかたまで
ごを土の上にうんでいるの
さいに見てしまいまし
した。たまごはまいのがさん
ちっちゃいじっさい
たくりました。
のおおきさ。こんなにち
いさいのです。がもこを
んなふうにたまごをせ
うむとはおもいません
んでした。てもかん
どうしました。



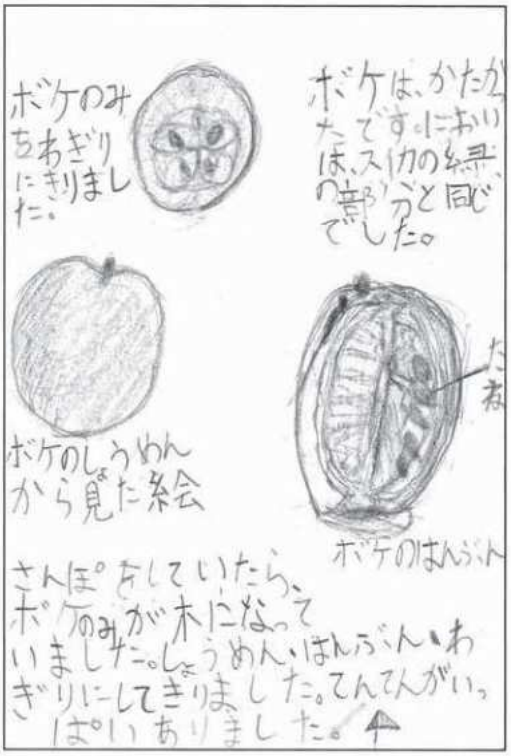
ぼくは山なしけんの大木へ行
きました。そこで、夜たくさんのホ
タルを見ました。おすはてをせん
のめりに入れたらはねで光っていました。
はねりが光ってきれいでした。
こうびをしているホタルもいました。また来年ホタルが
思いました。
ふえるといいなと
月川そうせい


うしがえるがいたよ・いなかのいけ。
にえたかいかな



天くらに行って小さいさざえを見つけました。ほかにもたくさんの貝がありました。かじめにくっついて流れて来るそうです。その小さいさざえには、ふたがありませんでした。ずっと見ていたら近くにあった貝のからにくっついてそれを


菩提樹の葉
初詣に行って大宮神社で菩提樹の葉を見つけました。葉の中にたねがみの中にたねがありました。葉をおさいふに入れておくとお金がふえるそうです。
2-2 大内理央


ボケのみをまっぷたつにきりました。
ボケは、かたかたです。においは、スイカの緑の部分と同じでした。
ボケのしょうめんから見た絵
ボケのはんぶん
さんぽをしていたら、ボケのみが木になっていました。しょうめん、はんぶんわぎりにしてきりました。てんてんがいっぱいありました。

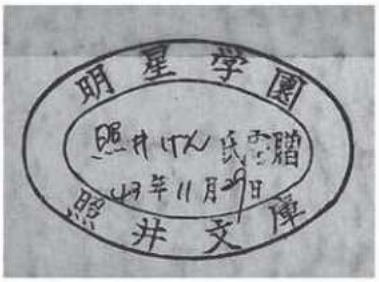

日光で
オオアカゲラを見つけました。
オオアカゲラは木のみきをぐるぐる回ってました。
頭の上の部分が赤かった。
羽は黒と白でしまうまみたいになってた。
オオアカゲラは足がじょうぶだから木のみきにつかまれる。
大きさは図かんでしらべたら、28cmくらいだから鳩くらいだった。
木をたたく音がオオアカゲラを見る前にきこえた。
もしかしたらたたいていたのはオオアカゲラなのかしれない。


先生お元気ですか
8月11日に20mmのカがいました。名前はヤマトマユカといいます。すごく大きくてびっくりしました。かいはキャンプ場でつかまえました。クはねの色がはなれるで「姫の害防」か「黒色でお里、生」みたいなところかあってそこがおもしろいと思いました。なんでかというとふくろうの顔みたいだったからです。

<文責：一瀬 清>

(4)図書室の実践　—照井文庫に託されたこと

創設と蔵書



照井文庫は1964年（昭和39）4月に誕生した。照井猪一郎小・中学校校長が2月に逝去の後、夫人の照井げん（創立同人、小・中学校、音楽）が、照井校長の蔵書すべてを学園に寄贈され、誕生した。校長の実践を創立当初から目の当たりにし、その思いを身近で受けとっておられたからであろう。その後もげん先生からは、図書を購入するための寄付が長い間続けられた。

照井文庫誕生を機に1965年6月、現在の場所（管理棟2階）に図書室が開設された。しばらくは、どの学校でもそうであるように、担任教師が図書室の仕事を兼任していた。当時、公立の学校ではもちろん私立学校でも専任司書を置くことは稀だったが、1968年、明星学園は専任司書として野口保子を採用した。創立当初から、子どもたちに何が必要か、どういう子どもに育てたいか、常に最上のものを子どもたちにと考えられてきた。その基本に立って図書室づくりも考えられていたのだ。

当時の様子について、本誌作成にあたり元専任司書・野口保子にたずねてみた。

野口：採用された時、図書室には、照井先生から寄贈された本も含めて約6,000冊の本がありました。岩波書店や福音館書店が出版した本は、ほとんど数冊ずつ揃っていたのよ。岩波書店のランドセルに入る本『ちびくろさんぼ』や『きかんしゃやえもん』などもそれぞれ数冊ずつありました。教師たちが「読み語り」に採り上げていた『岩波おはなしの本』全10巻や岩波少年文庫も当時出版されていたものは全部複数冊ずつ揃っていたし、さらに福音館書店の科学の本『じめんのうえ　じめんのした』などのシリーズも全部揃っていました。『じめんのうえ　じめんのした』と『かわ』はクラスの児童数ずつ揃っていたわね。教師たちが子どもたちの本をきちっと選んで与えようとしていたことが、そこにあった本からよく伝わってきました。照井（猪一郎）先生が創立当初からずっとやってきたことね。例えば、『新読本』を生み出す時、何作も物語をガリ版刷りにして、子どもだけでなく保護者の方たちにも配って、検討を重ね、子どもたちにいい作品を選びぬいていたでしょ。本の「読み語り」の実践も創立当初から積極的に行なわれているということが基本にあって、照井先生の蔵書が照井文庫という形で残ったし、創立当初から各学年の子どもたちに合う本をきちっと選んで各教室に置いていたので、今も学級文庫として残っているのじゃないかしらね。



今でも「照井文庫」の蔵書印が見られる

学級文庫については、戦前に明星学園に講演にみえた石井桃子さん（児童文学者）が、教室の本棚を見て、その充実ぶりに感心されたという話が今も語り継がれている。〈※1〉

〈※1〉本誌第1部139頁参照

野口：当時、講堂も体育館もない環境の中、図書室をつくり、1冊1冊本を選び、充実した蔵書が揃えられていて、専任司書を採用する学校なんてどこにも無かったのよ。


ストーリーテリングの授業

創立者たちの「いいもの（本物）を子どもたちに」という思いを託された一粒の種は、照井文庫として誕生しただけではない。検定教科書に採り上げられた『スーホの白い馬』や『ピーターのいす』のように絵本として出版された作品を国語の授業で文芸教材として採り上げる時、明星学園ではひとりひとりの子どもが絵本そのものを手元に持って読み進める。そうすることによって、絵本の絵からも届けられる豊かな内容を受け取ることができ、絵本作品を深く読み味わうことができると考えたのである。そんな、絵本そのものでする授業としても芽を出した。

継承

創立以来、選び抜かれた作品を読み語るという実践が続けられてきた。野口はさらに、小学校の授業に「ストーリーテリング」導入を、他校に先駆けて実現させた。1985年頃のことである。

ここでは、「ストーリーテリング」について簡単に説明しておくことにする。

「ストーリーテリング」とは物語やお話を覚えて、語って聞かせることで、「素話」とか「語り」とも言われている。

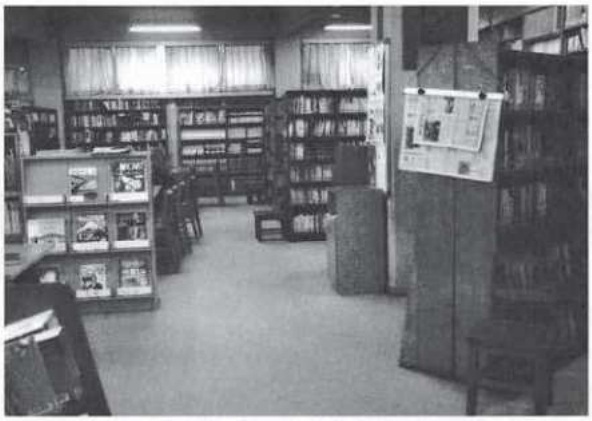
いろりばたで語りべから昔話を聞く子どもたちをイメージしてみてほしい。図書室の一角で子どもたちはストーリーテラーの語る話を聞く。絵はもちろん文字もない。ストーリーテラーが語る言葉だけから、登場人物や情景や出来事のすべてを想像し、次の展開を予想しながら、物語を純粋に楽しむ。

ものごとや人（自己を含めて他者）について想像したり理解したり、展開を予想したりする力が弱くなってきていると言われる今の時代、「ストーリーテリング」によって育まれる力は特に意義深いはずである。

明星学園の教師の中でも認知度の低かったそれを新しく国語の授業に導入する道のりは、勿論簡単なはずがない。だが、賛同者もあり、研究授業として「ストーリーテリング」を採り上げ、小・中の教師たち皆でプロのストーリーテラーによる語りを子どもたちと一緒に聞く機会を持った。その結果、たくさんの教師の賛同を得て、「ストーリーテリング」は明星学園の授業の中に組み込まれることになったのである。

最初は3年生だけに年に2回実施し、だんだんに学年を増やして1年生から3年生までを対象に年に2回ずつ実施できるようにした。現在は、1～4年生が毎月1時間ずつ大好きな「ストーリーテリング」の時間を楽しんでいる。お話（物語）を聞ける力、楽しめる力がどんな力を育むかは語るまでもない。このように「ストーリーテリング」を授業として導入した学校は今でもそう多くない。

本好きの子どもたちが多い中、野口は、子どもに本を渡していくことの重大さ、本を読むという最も自発的な行為をひとりひとりの個として尊重し援助していくことの重さを認識していた。ひとりひとりの子どもたちが次に読みたくなるであろう本を準備して待っていたり、「おもしろい本ない？」という子どもに、この子はきっとこの本を好むだろうとか、この本に誘おうとか、的確な個別対応をしていた。この対応は当時共に図書室を担った司書吉田美智子を通して今もしっかりと受け継がれている。


管理棟2階の小・中学校図書室

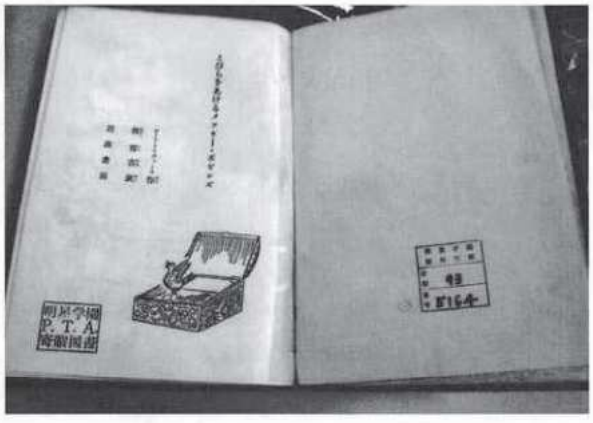
それぞれの子どもに応じて本を選ぶとき、「本の研究会」が欠かせない。野口は小学校の教師たちとの「本の研究会」、保護者たちとの「子どもの本を読む会」など、教師や保護者の方たちに請われ、それらの会で本を読む時間をともにしていた。そこでは、野口が選びぬいた本を紹介することが多く、教師や保護者たちの手元にいい本を届けていった。このことが、子どもたちの手元にもいい本を届けることにつながっていったことは、想像に難くないであろう。これらの会も今もなお受け継がれている。このように続けられていることの原点も「照井文庫」にあると言える。

そしていつの間にか「あの図書室を見て入学をきめました」と保護者が教師たちに語るような図書室に育っていた。

多くの人にささえられて

図書室づくりについて野口にたずねてみた。

野口：最初、図書室に入った時すごく悲しくなった。本がめちゃくちゃになっていて、6,000冊の本はあったけれど、そこは本を読む雰囲気の場所ではなかったの。まあ、常駐する人がいなかったからね。とにかく毎日お掃除に明け暮れたわ。それから、本を分類して整理し始めたの。



そんな時、おげん先生が図書室に寄って手伝いましょうかって言ってくださってね。本の整理をしばらく一緒にしてくださったの。

採用されてすぐ、当時小学校の校長だった寒川先生が私を研究会に誘ってくださったの。その研究会は、本の読み語りをしたり、ストーリーテリングをしたりする「語りの日」、どういう翻訳がいいか検討しあう「翻訳の日」、出版された本を皆で読み合う「子どもの本を読む日」の3日にわかれていて、週に3日通ったわ。私学の教師や翻訳家、出版社の人たちが出席していたわね。いろんな

人の研ぎ澄まされた感想や意見を聞き合うことで、いい語りやいい翻訳やいい本を選べるようになるのよね。ここがなかったら、私は仕事ができなかったと思う。ここで考え方の基本ができたと思っているわ。この研究会でストーリーテリングに魅せられていかなかったら、「これを子どもたちに」と思えなかったし、実現するまでそれを願い続けられなかったでしょうね。1人じゃ思えなかったんじゃないかしら。見たり聞いたりしたことがささえになっていたの。

ここでたくさんのいい本に出会うたびに学校にも欲しいと思った。そんな本について、機会があればいろんな人に話していたの。子どもたちがいい本を手にできるようにしたかったから、昔はよく三鷹図書館に風呂敷を持って借りに行ったのよ。1回に200冊くらい借りてくるの。保護者の方たちもよく手伝ってくださってね、風呂敷を持って一緒に行ってくださったの。1～2ヶ月に1回くらい行ったり来たりしたわ。まだ当時は学校予算に図書費が組まれて無かったけれど、おげん先生から寄付をいただいたり、保護者の方たちからもたびたび本をいただきました。ずいぶんたくさんの寄贈本があります。保護者の方たちは常に協力者だったわね。福音館の本は、保護者のお1人だった松居直さん（福音館書店相談役）を通して『こどものとも』や『かがくのとも』など出版されるたびに寄贈してくださったの。大塚勇三さん（翻訳家『ながくつしたのピッピ』など、寒川道夫元小学校校長の研究会仲間）、安野光雅さん（作家『さかさま』など、元明星学園小学校美術教諭）も著書を寄贈してくださった。松居直さんや齋藤惇夫さん（作家『冒険者たち』など、元保護者）は講演も快諾してくださったし、神沢利子さん（作家『くまの子ウーフ』など、卒業生祖母）は、子どもたちへの『くまの子ウーフ』の朗読を依頼すると快諾してくださって、たびたび来校してくださったわね。

図書室で本の「読み語り」を始めたのは横森先生（横森サチ子、元小学校教諭）だったわ。その後1～4年生はどのクラスも毎週1時間、図書室で本の「読み語り」をするようになって、先生たちとの「本の研究会」を始めるきっかけにもなったのよ。今では当たり前のように本の「読み語り」は図書室でしているけどね。

このようにして照井文庫は、そのたくされた思いを受け取った野口や他の教師、保護者たちとともに生き続け、いろいろな花を咲かせていった。



小学校新校舎の図書室

照井文庫として誕生した図書室は現在、小学校1～4年生くらいを対象にしたものと、5～9年生くらいを対象にしたものとの2つの図書室になっている。そこには選び抜かれた蔵書が約50,000冊置かれ、毎日活発に貸し出しが行われている。高校の蔵書は約27,000冊で、現在小・中・高合わせて司書は3名になっている。そして野口が退職した後も、照井文庫に託されたことはしっかり受け継がれ、今も生き続けている。

＜文責：大野 映子＞

3　中学校の実践

(1) 中学校の教科外教育

行事・生徒指導関連作業部会答申

行事・生徒指導関連作業部会は、2006年度からの6・6制、12年一貫教育をスタートさせるにあたり、教科教育を土台にしながらも、教科外活動をどう位置づけていくのかということについて検討してきた。卒業論文については1996年度から実施されているが、その実施形態や目的については当該学年に任されている。また、9年の修学旅行における民泊の実施は2005年、一つのコースとして始まったが、教員の中にも賛否両論がある。職場体験については、さまざまな地域・学校での実践を比較研究しながら、明星らしい、明星でなければできない、そんな活動を模索していた。

以下、2005年1月19日の全園会議に提出された試案である。その後、中学校ではこの方向に沿って一つ一つの教科外活動に意味が与えられ、7年生から9年生までつながりをもった活動として位置づくことになる。

「職場体験」「民家泊」「卒業論文」（中学校を中心に）

―中・高一貫の中で、生徒全員に課す教科外の活動―

行事・生徒指導関連作業部会　堀内 雅人

子どもの成長にとって何より大切なことは、学校教育・家庭教育・社会教育（地域の教育）がバランスよく、また互いに補完しあう形で機能していることだ。そのためにはそれぞれの立場にある人間が明確に自らの役割を認識し、そのことに責任を持っていなければならない。

〈学校教育〉が目指すものとは、とりもなおさず教科教育である。教科教育を通して子どもたちの成長にかかわることにおいてこそ、我々は専門性を有し、存在意義を持つ。もちろん、そのことがうまくいくようなハード・ソフト両面における校内の環境づくりは不可欠である。しかし、何が幹で、何が枝かの区別を忘れてはならない。

小・中学校の週5日制における理念は、まさに今述べてきたようなところにあった。つまり〈学校〉が担うべき役割を明確にし、責任を持って指導する一方、土曜・日曜を家庭や地域に返そうということである。学校と家庭とがそれぞれ自立し、違う立場から一人一人の子どもを見守り、育てていこうということである。

しかし、当然のことながら地域の教育力にはほとんど期待できない。おとなにとって特に中学生は「わからない存在」「こわい存在」である。多くの大人は子どもたちのふるまいに見て見ぬふりをするか、うわべのみの理解を示そうとする。家庭教育を本来、補完すべき地域による教育がうまく機能しないとき、困難な問題を家庭（核家族化の進んだ現在は親個人）が背負うことになってしまう。

理念的には学校週5日制を理解したとしても、現実の問題として子どもの成長に不安を覚えてしまうのは、特に中学校においてはこのことが大きく作用していると私は考えている。事態が深刻になれば皮肉にも、家庭は学校に一方的に多くのことを望むようになる。必然である。しかもその要求は、不安が感情となって現れた形で出されるため、おうおうにして具体性の欠けた本来だれにどのような形で求めるべきものなのかがはっきりとしていない場合が多い。たとえとても大切な問題意識を含んだものであったとしても、両者がうまくそれを共有することは難しい。

学校と家庭との間に、ある距離を置いた上での信頼関係というものがなければ、きしみはさらに広がる。やはり〈学校〉〈家庭〉〈地域社会〉というトライアングルは今のところ最も安定した形なのだろう。ここで改めて、学校教育が本来担うべき教科教育での力をいかにつけさせ、信頼を獲得していくかということを確認すると同時に、本来地域が担うはずの役割を当面は学校がその拠点となり、各方面の力を結集する場とする試みの必要性を述べたい。子どもたちの成長において、教科教育がそれのみで存在できると考えるには、あまりにも現実は複雑すぎる。以下、本稿では後者についてのみ記述を進める。


7年生八ヶ岳登山

そもそも地域社会教育とは何か。何を我々はそこに求めているのか。さまざまな定義が専門家によってなされているかもしれない。しかし、一言で言うならば「親でも教師でもない、魅力ある大人との出会い」であると私は考える。かつては、地域社会教育などと取り立てて言うまでもなく、あたりまえのこととしてあったものだろう。「魅力ある」とは「学校的」価値や「経済的」価値における魅力とは必ずしも一致しない。むしろ、それらと相反することもあるだろう。親の代わりでもない、一生懸命生活している大人である。

今、子どもたちはそんな大人たちと切り離され、〈家庭〉〈学校〉〈塾〉〈小グループの仲間〉といった閉塞的な「安全」（本当の意味の「安全」ではない）という名の檻の中に閉じ込められているような気がする。もし、魅力ある大人との出会いが子どもたちのそれぞれに現実のこととして起きたとき、逆に学校は今以上に学校らしく存在できるだろうし、親の知らないうちに成長している子どもの姿に突然気づかされ、不安が喜びへと変わる瞬間を味わえる家庭が多少なりとも増えるのではないかと期待するのである。

以上、〈地域社会〉による教育力の必要性と未熟なコミュニティの中におかれた子どもたちについて述べてきた。もし本校が大学進学者の人数のみで学校としての価値をアピールし、そのような視点に立って子どもたちを育てていこうとするのであれば、これらはさしたる障害ではないのかもしれない。しかし、一人一人の子どもを見守り、彼らの持っている可能性の実現に少しでも寄与しようと考えるなら、我々は教師（授業者）の顔とは別に、父母とともに一人の大人として果たす役割、子どもたちと社会をつなぐコーディネーターの役割もまた当面は担う必要があるのではないか。


中学校合唱コンクール

ただし、これは一人一人の心がけや情熱といったものに帰するべきではない。組織として動くことができるよう、一人一人の小さな力を結集させるための体制を整えることだ。幸い、明星学園には長い歴史があり、多くの校友に恵まれている。もしそのような場があれば学校の力になりたいと言ってくださる人も大勢いらっしゃる。そんな彼らの協力を仰ぎながら、いわゆる「明星ネットワーク」なるものを

築き上げ、「学校教育」とはまた別の視点から子どもたちにかかわってもらえるとしたなら、学校総体としての力も格段に大きなものとなるだろう。

中・高において学校6日制が決定した今、授業日数、授業時間数の増加分の一部を以上述べてきた趣旨に基づく教科外の活動にあてることに大きな無理があるとは思えない。

以下、紙面の都合で項目だけにする。

Ⅰ．8年時において生徒全員に5日間の職場体験を課す。
〈魅力ある大人との出会い〉〈社会との出会い〉〈自分自身との出会い〉

Ⅱ．学年宿泊旅行―他者との出会いから自己の発見へ―
① 7年赤岳登山〈大いなる自然との出会い〉
② 8・9年民家泊〈魅力ある大人との出会い〉〈異文化との出会い〉〈歴史との出会い〉

Ⅲ．9年時の卒業研究
卒業研究・論文〈自分を他者に伝える〉

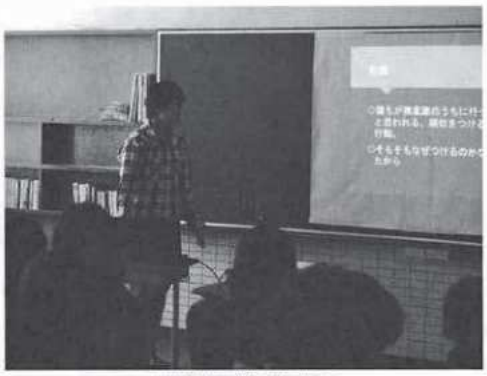
1）卒業研究

1996年3月、大月の嵯峨塩鉱泉に新9年スタッフが集まった。中学校の最終学年をどう過ごさせるか、泊まりがけで学年の構想を練るためである。前年度学年主任であった飯田啓介が退職したために、急遽学年主任となった堀内の呼びかけで、姫野・重吉・石井・岡本・古川・中西の7人が参加した。そこで話し合われたテーマの一本の柱が『卒業論文』への取り組みであった。

明星の授業は一時間の授業を大切にする。しかし、目指すものは一時間の中で完結するわけではない。それぞれの教科の授業実践の先にある子どもたちの姿について語り合った。自分の興味あること、疑問に思うことを他者に語りかけ、さらに自分の考えを文章にまとめる。そうすることで他者と深くつながってほしい。本当の意味の「自由」というものはこのようなプロセスをとおして獲得できるのではないか。学年全員の賛同を得て、この取り組みは始まった。

生徒からは次のようなテーマが提出された。

アメリカの黒人差別／宗教の差別について／グレン・グールドについて／ウイルスとは何か／水の神秘／ピーテル・ブリューゲルについて／兵馬俑について／江戸から学ぶこと／演劇の発生と本質／オーパーツと謎の遺跡／連立政権について／「自由」が持つ意味／グリム童話の残酷性について／自分の考えは幼いか？／孫子の兵法について／シカン文明について／いじめと心理／悪魔崇拝と犠牲／光源氏をめぐる女性たち／第二次世界大戦時のプロペラ飛行機……


中学校卒業研究発表

そこには我々の予想をはるかに超える興味、関心の広がりがあった。休み時間の生徒同士の会話にも変化が見られた。職員室に一人で相談に来る生徒も少なくはなかった。文章を書く力をつけさせることがこの取り組みの趣旨ではない。いかに教師が良き聞き手であるかが問われた。

問題は160人の生徒にどのように書かせ、冊子として完成させるかであった。中学校部会では反対意見も多く出された。「まずは、授業を大切にしないといけない」「自分の好きなことをやればいいというのはどうか？」「そんなものは、卒業論文とは言えない」しかし、全員がこの学年の取り組みを尊重してくれた。中学校のすべての教師が卒論の担当教師として数名ずつ生徒を見てくれることになったのだ。印刷は国分寺の鳥塚印刷にお願いした。ページ数がどれくらいになるのかもわからない。見積もりの取りようもなかった。そんな中、この取り組みに賛同してくれた鳥塚氏は親身に相談にのってくれ、一つ一つ形になっていった。できあがった原稿を送るたびに、鳥塚氏からは具体的な感想が返ってきた。彼は最初の良き読者であってくれたのだ。

1997年2月3日、ついに9年生全員の論文が載った『卒業論文集』ができあがった。クラスごとに4分冊、総計2,630ページ、厚さにすると13cmを超える大作となった。

責任者であった堀内は『卒業論文集』（1996年度）の最初のページに「卒業論文集に寄せて」と題し、次のように書いた。

一つの論文を書くということは、けっして容易なことではない。もし締め切り日というものがなかったら永遠に書き終わらないものなのかもしれない。文章を書くことで新たな疑問が生まれてくる。自分の考えの浅さが露呈する。自分自身と否が応でも向き合わざるを得ない。しかし、どこかで折り合いをつけ、決着をつける。そこに現在の自分が表明され、そこにこそ新たな可能性が潜んでいる。

中学校を卒業しようとする今、君たちは僕たちが差し出したこの困難な課題に対し、それぞれの解答を全員が提出した。正直、期待以上のものである。

なかには、あまりに難しいテーマを選んでしまい、途中で投げ出してしまいそうになった人もいただろう。また、自分の思っていることの半分も表現できず、悔しい思いをしている人もいるかもしれない。しかし、この論文執筆にかけた時間、悪戦苦闘の経験は何ものにもかえられない、君たちの財産である。そのことをこそ誇りにしてほしい。

君たちは、これからも自分の道を切り拓いていくことだろう。人生にはいくつかの節目がある。人はそこで過去の自分と決別し、別個の世界へ入っていく。そんなとき、もう一度この論文集を手にしてほしい。きっとこの4冊の分厚い冊子が、ただの記念文集ではなかったことに気づくにちがいない……。

論文集の完成した後、鳥塚氏から次のような提言があった。「ここまでやったのだから、父母から感想をもらったらどうだろうか。幸い、表紙に使った紙が余っている。費用をかけずに、それをまとめた小冊子を作ることができる」。お言葉に甘えた。ここでは、その一部を紹介したい。

- 脱帽。子どもがいつの間にか自立していたようです。卒業論文を書くということを聞き、我が息子に限って言えば、どうせろくに調べもせず、文の大半を引用で埋める程度のものを提出するくらいに思っておりました。論文集を手にし、その量には先ず驚きましたが、さしたる期待もせず、パラパラとめくっておりましたが、あれあれ、おやおや、何だこれはという次第です。彼等彼女等が自分自身で考え、自分の言葉で表現しているではありませんか。子どもに対する認識の甘さを痛感し、親の子離れを促されているように感じました。（吉田明生）

- 論文をみて、まず驚かされるのは、その選ばれたテーマの多様さである。身近な事柄からスポーツ、旅行、異国、科学、音楽、未来etc。生徒の数だけさまざまなテーマが選ばれている。一人一人が15歳という大人への橋を渡りはじめた今の、最も興味のあるものや体験や夢が、背伸びをしたり、稚拙だったり、素直だったり、と生徒一人一人の性格と個性が行間から感じ取られる。おそらく15歳の彼等は、やっと親の庇護から抜け出し、自分なりの生き方や考え方、そして社会や他者への接し方を形作ろうとしている門口にいるにちがいない。その世代の節目の時に、自らの心に刻まれた事柄や、興味を持った事柄について彼等なりに書籍や資料にあたって掘り下げ、一万語に近い言葉を論としてまとめあげたことは、これからの彼らにとって大変意義深いことのように思う。体験が経験に昇華し、夢に若干の現実が加わり、興味にそれなりの知識の援護がもたらされるに違いないと思われるからだ。卒業論文は壮挙であると思うが、それ以上に課題が生徒一人一人に委ねられた自由課題であったことと、その自由課題という困難さと一人の脱落者も出さずに生徒に応えさせた先生方のご努力と、それを支える学園の気風に心よりお礼を申し上げたい。そして生徒一人一人の努力に拍手を贈りたいと思う。（岩崎芙代子）

また、この年明星に講演に来られた当時都立大学総長であった山住正巳氏から、次のような言葉をいただいた。「子どもたちの選ぶテーマがおもしろいね。本当に発想が豊かだ。1セット、総長室におかせてくれないかな。学生と面談をするときに使わせてほしい」。ありがたい言葉だった。

翌1997年度は、森村が卒業論文の責任者となる。学年の中でもその実施に当たっては賛否が半ばした。「卒業論文の前にやらなければならないことがある」「指導の方法がない」「論文という名称がおかしい」「趣旨は分かるが、論文にこだわることはないのではないか」。しかし、森村の熱意もあり前年度と同様の取り組みを行うことになった。

以後、9年生では実施形態は当該学年に任されているものの、「卒業研究」をとおして中学校の教員全員がそこにかかわることが確認された。ただし、年により目標、ねらい、形態はまちまちであった。模索の時期である。その間の経緯については『明星の教育2013』に詳しく記されている。

2010年度には、平山の提言で東北大学の酒井聡樹氏を迎え、「論文の書き方」について教員間での研究会を持つことができた。

2011年度

全員が論文を執筆。今まで卒業研究の中でもう一つの柱であった作品制作・身体パフォーマンスについては明星祭で発表することにし、卒業研究では全員が論文を書くというように整理を行った。全員の論文の載った論文集を刊行。同時に各自一冊の本を製本する。また、12月には全員が9つのブースに分かれ、一人一人お客さんを前にプレゼンテーションを行った。この成功の陰には河住によるパソコン（特に発表に向けてのパワーポイント）の指導があった。この年の研究発表会は7・8年生向けだけではなく、新たに父母・一般の方に見ていただく日を設け、小学校や学外を含め広く広報をした。卒業研究が学年としてではなく、中学校全体として生徒の姿を見ていただくための取り組みとなった最初の年となった。

この年責任者となった堀内は『2011年度卒業論文集』の巻頭で次のように書いている。

『2011年度卒業論文集』に寄せて

ここに『2011年度卒業論文集』として、今年度の卒業研究の生徒の取り組みを一冊にまとめることができました。私自身、感慨深いものがあります。それはたぶん一つひとつの論文を読むだけでは見えてこないものなのかもしれません。

それぞれの論文には完成するまでの背景があり、ドラマがあります。けして本人にとって順調にいったわけではないでしょう。なかなか自分のテーマが決まらなかった生徒。先生に相談カードを持って自分の思いを伝える段になっても、学年以外の先生に声をかけられない生徒がどれほど多かったことか。せっかく自分でテーマを決めたのに、参考文献として選んだ専門書の前に身動きの取れなくなってしまった生徒も数多くいたはずです。それ以前にそもそも自分が何を考えようとしていたのか、方向性が途中でわからなくなってしまった生徒もいました。

初めて彼らの活動の全体像が見え始めたのは明祭での中間報告会でした。限られた人数で、それも窓の外から大きな音が響いてくるという過酷な条件の中でのプレゼンでしたが、コメンテーターの先生方からアドバイスや賛辞の言葉をもらい、発表者の眼はキラキラと輝いていました。それから3週間後、中学校のすべての先生方に協力してもらい、全ての9年生が8つの教室に分かれての中間報告会を持つことができました。多くの教室で質問や感想などがとびかい、予定の時間を大きく超えて盛り上がっていたグループもありました。論文を書く困難さとは別に、発表するということが人とつながる大きな契機になるのだということを感じた生徒は少なくなかったのではないでしょうか。

また、この時期本校の評議員でもある東京外国語大学の中山秀俊氏に主に言語・民族文化をテーマに取り組んでいる10名近い生徒が一人ひとり面談、アドバイスをいただきました。そのときの彼らの真剣に向き合おうとする姿は今でも私の脳裏にやきついています。中にはメールで連絡を取り合い、実際に大学の研究室にお邪魔することになった生徒もいたようです。来年度に向け、明星の中学生と研究の場である大学とをつなぐひとつの可能性を感じさせていただきました。

また、それとは別に、研究テーマを専門としている先生を自らさがし、大学の研究室を訪ねる生徒、いくつもの大企業に質問を送り、その回答を資料に自らの論を展開している生徒もいました。これらのことは、我々指導する立場の人間に大きな示唆と刺激とを与えてくれます。

このようにして12月、ついにカラー印刷された原稿に厚紙の表紙をつけ、この世に一冊の冊子を全員が手にすることとなりました。

今年度、もう一つの挑戦がありました。論文を書き、各自製本するというだけではなく、全員が自分の研究してきたことを一人ずつお客さんを前にして、プレゼンテーションをするということです。自分の研究してきたことを模造紙に書き込み、それを展示して見てもらうということはこれまでも何度かありました。しかし今回は全員が直接自分の言葉で目の前にいるお客さんに伝えるわけです。もちろん生徒にとって評判のいいはずはありません。大変な緊張感です。それにもまして自分の発表を聞いてくれる人がはたしているのだろうかという不安感も大きかったはずです。

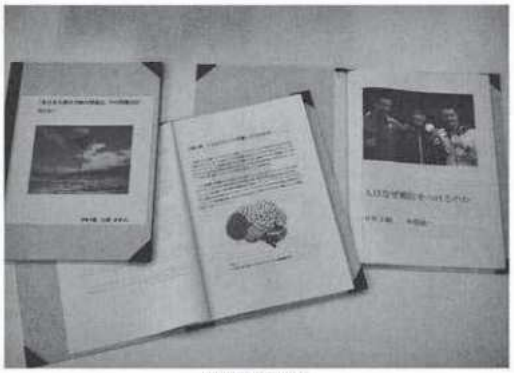
ところが、おもしろいことに話すことが苦手だと思っている生徒ほど一生懸命発表原稿を書き、担当の先生のアドバイスを聞き、練習を重ねるたびに顔を挙げ、指示棒で模造紙の資料を指し示すようになっていきました。最終日の一般の方向けの発表会では自分たちでお客さんを呼び込み、プレゼンをとおして一生懸命人とつながろうとしている生徒の姿をあちこち見ることができました。ごく自然に受付を手伝ってくれている生徒がいました。いちょうのホールに来ているお客さ

んに是非教室でのプレゼンを見てくれるよう、自分よりもっとすごい発表があると伝えている生徒がいました。全てのプログラムが終了した後、全員で気持ちよく会場の後かたづけをしている姿、もしかするとこの姿こそが今回の卒業研究の取り組みを象徴する一場面だったのかもしれません。

ブースの作り方、プログラムの組み方、プレゼンの練習の方法など不十分な点は多々ありました。にもかかわらず、彼らを変容させてくれたのはお客さんとして彼らの発言に耳を傾け、あたたかな言葉をかけてくださった方々のおかげです。私自身もそういった場所に立ち会うことができたわけです。

もっとこうすればよかったと悔しい思いをしている生徒も多くいると思います。友人の頑張りを見ながら自分だってできたはずだと複雑な気持ちの生徒もいるでしょう。でも、そのような思いはきっと次へつながります。これはゴールなのではなくスタートなのです。そのような流れの中で彼らの論文を見るとき、また別の輝きをそこに感じます。

今回、このような形で発表会を行えたのは、学年だけでなく学校を挙げての取り組みとしての第一歩を踏み出せたことが大きかったように思います。特に河住さんにはパソコンを一クラス分そろえることに尽力してもらい、ワード、パワーポイントの指導を一手に引き受けてもらいました。また、責任者としてなかなか先の見通しの立たない中、学年外でも姫野さんをはじめ多くの先生方に手をかしてもらいました。


卒業論文集

そして全員のデータを手軽に一枚のDVDとしてまとめるのではなく、一冊の論文集として製本することになったのは、みんなの論文をじっくり読んでみたいという多くの保護者のみなさんの声と、初めて担任として卒業生を送り出す小畑さんの「全員の論文を紙にのった活字として手にしたい」という熱い思い、そして「それなら費用を安くおさえるために、編集は全部自分がやる」と言ってくれた河住さんの心意気によるものです。

そんなたくさんの人たちの思いと、感謝の気持ちを添えて、この分厚くて重い一冊の論文集をお届けします。

この年の3月、今回の実践をふまえ、運営委員会より「卒業研究では全員に論文を課し、発表会において全員が一人一人プレゼンテーションを行う。発表会では父母・一般の方を対象とする日を設け、学年ではなく中学校全体としてその運営にあたる」という提案がなされ、中学校部会において賛成多数で可決された。

『卒論』資料1

2008年5月7日

〔2008年度　9年生卒業研究〕

生徒全員が、自分のテーマにそって、原稿用紙20枚程度の文章を書き上げる。書き上げたものは全て印刷し、冊子としてまとめる。

その中から数編を選び、学年末に下級生、父母、同級生を対象に、プレゼンテーション（発表会）を持つ。

〔年間予定〕

3/10　来年度の卒研（卒論）について発表
3/11　9年生（現10）卒研発表会
4/16　卒論テーマアンケート配布
4/23　卒論テーマアンケート一覧をもとに、各クラスで交流
《テーマを一つに絞り、なぜそのテーマにしたのか、何を明らかにしたいのか、何を読者に伝えたいのかを800字程度にまとめ（A）、5/7に持ってくる。》
5/7　卒論ガイダンス（いちょうのホール）
- 何を目標に卒論を書くか？
- 卒論を完成するまでの流れ
- 担当教員の決め方（相談カードを配布）
- 教員のアンケート一覧、卒論用ノートを配布

5/21相談カード回収
（調整期間）
5/28
～担当教師、テーマの発表
6/4
- Aについて、担当の先生と深く話をし、論文を書いているうちに迷ったり、わけがわからなくなってしまったとき、ここに戻ればよいというものにしておく。論文の下書きが完成したとき、この部分をもう一度推敲し、〔1.はじめに〕の章とする。
- 結論に至るまでの、おおまかな筋道（章立て・目次）を考える。
- どのような資料を集め、読み、調べたらよいか考え、実際に図書館等で参考文献を探す。

夏休み
- 途中経過をチェック
- 中間報告会（10月初旬）
- 下書き完成

冬休み
1/13　原稿提出〆切
1/16　印刷所に出稿完了→製本

『卒論』資料2

2008年5月7日

〔担当の先生について〕

9年生127人一人一人に、担当の先生がついてくれます。担当してくれるのは、一覧表にある中学校のすべての先生です。3人の先生（必ず他学年の先生を含む）から『卒論』のテーマとして見通しがもてるかどうかを判断してもらい、良ければ「卒論相談カード」にO.K.のサイン

をもらってください。原則として、サインをくれた先生の中から担当を選びます。サインをもらう前にいろんな先生と話してみることができれば本当は一番いいと思います。チャンスを作ってみてください。ただ、どんな先生であっても8人を超えて持つことは困難です。できるかぎり、他学年の先生にもお願いしましょう。提出期限を過ぎてしまった場合は、当然希望通りにならない可能性が高くなってしまいます。

サインをもらうためには、事前に書いてもらった「なぜそのテーマを選んだのか？」の文章と、何よりもやる気を見せなければいけません。もし不十分であれば、あっさりと「サインできない」と言われるでしょう。そこで引っ込んでしまっては意味がありません。なぜ無理なのか、それを知ることが一番の勉強です。そもそも、誰にでもサインする人よりも、なぜダメなのかきちんと説明してくれる人の方が熱心に面倒を見てくれたりもします。言われたことに納得がいくなら再考し、もう一度お願いに行くくらいの気概が必要です。

ただ先生たちは、みんなも知っているように、なかなか時間がとれません。相手の都合も考えず自分の要望を言うだけでは、うまい関係は作れません。これは授業とは違います。お願いして担当してもらうわけです。特に、初めて話をする先生に対しては、「卒論のことで相談したいんですが、少し時間をいただけますか？」「何時にうかがえばいいですか？」といった言葉からすべては始まるのだと思います。

「卒論相談カード」にサインをもらうための相談期間5/7（水）～20（火）
カード提出〆切（各クラス担任へ）5/21（水）

〔卒論ノートについて〕

卒論用のノートを全員に配布します。まず、今日配布した資料は全てノートに貼ってください。これからも適宜プリントを出していきますが、こまめに整理していってください。また、担当の先生との打ち合わせ内容もメモしていきましょう。当然、初めに書いた「なぜそのテーマを選んだのか？」の文章も重要なものです。

また、論文を書いていく過程で役に立ちそうだと思った参考文献は必ず書名・著者名・出版社名を記録しておいてください。後でもう一度調べなおそうと思ったとき大変助かります。それにできあがった論文の最後には参考にしたすべての文献のリストを載せてもらいます。今からそのつもりでいてください。

本当に重要だと感じる資料はコピーしてはっておいてもいいでしょう。もちろん下書きはこまめに書き、担当の先生に読んでもらいましょう。その他、自由にこのノートを活用してみてください。もしかすると印刷された文章よりもずっと思い入れの強いものになるかもしれません。

2) 修学旅行（伊江島民家泊）

2004年、修学旅行責任者の石井は学年で決定した沖縄旅行の行程の中に初めて民家泊を提案、コース別の中に伊江島と東村の民家泊を入れた。彼女は後日この修学旅行について「沖縄の豊かな自然や文化に触れてきました。見学というより体験することがメインで、民泊して農家の手伝いをしたり、沖縄料理を作ったり、エイサーを踊ったり、海でシュノーケリングをしたり、川をさかのぼったり、自分でしたいことを選ぶことができる旅でした」と記している。〈※1〉

2004年修学旅行行程

【第1日目】羽田――那覇――美ら海水族館――伊江島民泊・東村民泊・じんぶん学校泊
【第2日目】伊江島・東村（主に農家での手伝い）じんぶん学校（サバイバル生活）
【第3日目】マングローブ・カヌー体験、比地大滝・文化体験（エイサー・シーサーづくり・沖縄料理・沖縄菓子作り・紅型・黒砂糖づくり等）
【第4日目】A海コース（シーカヤック・シュノーケリング）
B南部戦跡コース（荒崎海岸・糸数壕・ひめゆり祈念資料館）
C文化体験コース（サンシン・沖縄料理・エイサー・シーサーづくり）
【第5日目】佐喜間美術館――国際通り――那覇――羽田

2005年、責任者の堀内は前年度を参考に9年生全員に2泊の民泊を経験することを提案し決定した。民泊場所については慎重を期すために伊江島と東村との2つに分けることにした。その様子について「学園報No.79」の『特集中学校沖縄修学旅行』から紹介する。


沖縄修学旅行

今年の修学旅行は民家泊をメインにすえた。伊江島と東村に分かれ、全員が3～5人の小グループで地元の家庭で2泊お世話になるのだ。一見何でもお金で手に入るような錯覚をおこしてしまうような世の中。情報があふれ、どのようにそれを受けとめてよいかとまどってしまう現代。それでいて何かが欠けているように感じている人々。

14～15歳の生徒たちに親でもなく教師でもない、日常を一生懸命生きている大人との出会いをさせたいという思いがあった。沖縄には彼らに触れさせたい文化、自然、歴史がある。現代人が考えなければならない今日的な問題が凝縮されているともいえる。それを単なる情報として与えるのではなく、同時代を生きている一人の大人と接することをとおして、彼らが何かを発見し、何かを学ぶことができたなら、素敵なことだと思った。

実際、彼らが書いた紀行文を読むとお世話になった「おじい」や「おばあ」の忘れられない一言、東京での生活では気にもとめていなかったようなことの発見があふれている。もちろん人と人との出会いに、一様の結果を求めても意味はない。ただ、一人一人の心の中で火花がとび、忘れられない1ページが生まれていたとしたら何よりも嬉しい。…中略…

修学旅行が終わり、民家の方々には一人一人礼状を書いた。事前にあいさつ状を送ったときと

〈※1〉『明星学園報』No.76（2004年10月）

はちがい、カラフルで気持ちのこもったメッセージの書いてあるものが多かったようだ。社会科からはレポートの提出という宿題がある。彼らがどのようなテーマを選ぶのか楽しみである。国語科ではフォトエッセーと民家泊についての作文が課題となっていて、今後文集としてまとめる予定でいる。ここでは夏休み中に送られてきた彼らの文章から一節を引用して、その報告としたい。(堀内雅人)

- 唐島 ありす　「今日から大家族だね」私たちの班が泊まった民家のおばあに言われて一番うれしかった言葉でした。
- 矢口 友佳子　夕食の時間。みんなでおしゃべりしながら食べるご飯は格別だった。学校の話、家族の話、友達の話……私たちは日が暮れてもしゃべり続けた。ゆみちゃん(民家の奥さん)が「おしゃべりするって、沖縄の方言で『ユンタク』って言うんだよー」と教えてくれた。私たちは何だか嬉しくなって、「じゃあ今ウチらはユンタクしているね」なんて言いながら笑った。とってもおだやかな時が流れていた。
- 長谷川 涼　おじさんはいつもと違い、真剣な顔で話していた。「伊江島に民泊している生徒は、その家の子どもだ。だからもちろん名字でなんか呼ばずに名前で呼ぶ。生徒としてではなく、自分の家の子ども、一人の人間として接している。だから君たちの意見を尊重する。昨日も言ったけどおじさんが何かを話していても聞きたくなければ聞かなくてもよい。眠たければ寝てもよい。ただ、わがままはいけない。あたりまえだけど一人にその権利があるんだから他の人たちにもその権利がある。それを大切にしなくちゃいけない」そう言った。……忘れられないのがおじさんの目。口でも言っていたし、目でも言っていた。この人は本当に人のことを思っている。そう感じた。
- 加藤 彩愛　私はパイナップルに帽子をかぶせる作業をした。帽子といっても新聞紙をかぶせるということであるが……休憩のときに私はおばあのとなりにいた。おばあがこっちの方が涼しいよと呼んでくれたから。なるほど確かにそうだった。そこは風の通り道だったのだ。そして少しおばあの話を聞いた。畑仕事は炎天下ではさすがにきつい。だから太陽の向きに合わせて自分が移動し、効率よく仕事をするのがコツだと言っていた。おじいとおばあは常に自然の動きとともに生きていた。クーラーを使わなくても風の通り道にいれば涼しい。わざわざ太陽の下で作業しなくても、日の当たらないところからすればよいのだ。
- 吉澤 吟平　伊江島にあるガマに連れて行ってもらった。そこでは150人近くが亡くなったという。そこでおじちゃんがぼそっと「戦争はやっちゃダメだよ」と言った。すっごい説得力があるというか、ぐさっときた。あらたまった様子で「戦争はやってはいけません」と言われるのよりも断然力がこもって、力を感じた。
- 高橋 雄也　最後の夜、食事をしながらおじさんがいろんな話をしてくれた。自分の話、息子の話、今までに民泊に来た子どもたちの話。そして、話の終わりをこう締めくくった。「俺はいつまでもお前たちの帰りを待ってるからな。高校生になっても、大人になっても、結婚しても、いつでもいいからこの家に帰ってこいよ」僕はみんなに気づかれないようにうつむき、目頭を強くおさえた。

2006年度

初めて9年生全員が伊江島で民泊することになる。伊江島における受け入れ態勢がしだいに充実してきたわけである。

2007年度

沖縄での民家泊（生徒全員）が始まって3年目、教員のほとんどがこの行事を経験したことを期に、それまで修学旅行については行き先、内容を含め学年が各決定していたが、当面「伊江島での民家泊2泊を含む沖縄旅行」と、中学校部会において決定された。

また、この年のバザーでは9年父母により沖縄物産店が行われ、伊江島観光協会からも3名の方が見え交流を深めることができた。バザーでのこの企画はその後も続けられ、伊江島の方々との修学旅行以外での交流も現在なお続けられている。

2008年度

伊江島での民家泊も定着、4泊5日の行事の中身も洗練されてきた。この年の行程は次のようなものである。以後、ほぼこの形が基本となる。

【第1日目】羽田――那覇――首里城――ひめゆり平和祈念館―ホテル泊（地元の子どもたちとの交流会）
【第2日目】文化体験（シーカヤック・シュノーケリング・サンシン・エイサー・琉球舞踊・サトウキビ収穫と黒糖づくり・紅型・ガラス細工等）――美ら海水族館―伊江島に渡る（民家泊）
【第3日目】伊江島各家庭での作業・レクレーション（民家泊）
【第4日目】伊江島――平和祈念資料館――ホテル泊（花火）
【第5日目】糸数壕――国際通り（昼食・おみやげ）――羽田

責任者である堀内は、修学旅行のしおりの巻頭で生徒に対し次のようにメッセージを送っている。

巻頭言（『修学旅行のしおり』より）

沖縄の修学旅行というと、「平和学習」ということがよく言われる。誤解を恐れずに言えば、昔からそのことになにかしら違和感があった。もちろん平和に対してではない。平和であることを本当の意味で希求するとき、たった数時間の事前学習や修学旅行用に設定された体験や見学で「平和」「戦争」といったものを一つの物語としてまとめてしまうことに、ある躊躇があったのだ。とはいえ、何も知らないことは、それ以上にこわいことだ。

初めて私が沖縄の民家を訪れ、村のおじいやおばあ、私と同年代の人たち数人とテーブルを囲み、話に興じたときの熱気は今でも忘れられない。その後も、東村や伊江島の民家に何度かお世話になった。「戦争中のこと」、村の中でも気を遣って話さなければならない「基地問題」、「団塊の世代とその上の世代との価値観のずれ」、「アメリカ人への思い」、「戦後、自分たちのできなかったこと」、「若い世代への期待と連帯」、「村が自立し、活性化するために」。どれもが深い話だった。現実と理想。けして簡単には答えの出ないようなものばかりだった。それでいて、前向きな明るさがあった。

子どもたちには、たとえ平和を求めるためであっても、安易な物語は与えたくない。安易なわ

かりやすい物語は、何かの拍子に簡単に反転してしまう。それよりも、すぐに答えは見つからなくとも、たとえ違和感しかそのとき感じなかったとしても、深く考えるためのきっかけをつかめるような出会いの場をつくってあげたい。

はかり知れない戦災を経験した伊江島の民家泊で、彼らはどんな時間を過ごすことになるのだろう。わからないことがあったら、素直に聞いてみることだ。知ったかぶりや、分かった気にならず、そこから考え始めればいいのだと思う。


沖縄修学旅行

数年前、『深呼吸の必要』という映画を見た。沖縄の広大なサトウキビ畑を舞台に、それぞれの“言いたくない事情”を抱えて集まってきた7人の若者たちの35日間を描いた物語である。彼らは、季節限定の“きびかり隊”としてやって来るわけだが、想像を絶する陽射しと過酷な単純作業に次第に挫折していく。しかし、島のおばあの素朴さや大自然の中での共同作業を通じて、人としてのかけがえのない何かをつかんでいく。

誰もが楽しめるような種類の映画ではない。大がかりな演出も、ドラマチックな音楽も皆無といって等しい。しかし、私にとってそれは不思議な魅力のある映画だった。最近、沖縄の代名詞のように使われる「癒し」や「ロハス」といった流行の言葉とは対極のものを感じた。彼らは沖縄という「他者」と出会うことで、今まで目をそむけてきた自分自身と、今まで逃げてきた現実の問題としだいに向き合おうとし始める。

この学年では、「他者との出会い」ということを言い続けてきた。「授業の中での学び合い」、「奥阿賀民家泊」、学園初の試みとなった「職場体験」。「卒論の取り組み」もその延長線上にある。国語の授業でも、「他者」や「人間関係」を扱った文章を多く取り上げてきた。「他者」と出会い、「自己」を発見する。かんたんなことではない。しかし、その困難さを実感し、素直に認められることこそがもしかしたら大切なのかもしれない。とは言え、避けて通れない悩みを抱えつつも、一人一人、ここまで着実に成長してきた。そしてこの沖縄修学旅行である。今までの学校行事で一番楽しかったといえる行事にしてほしいと思う。与えられるのを待つのではなく、自ら行動し、楽しさを見つけてほしい。きっと今までの経験が生きてくるだろう。

2学期に入ると、9年生として大きな責任のかかる運動会が待っている。中学校の卒業へ向け、各教科で与えられるハードルを越えていかなければならない。卒業制作や発表会もある。全員の論文の載った卒業論文集も完成させる。それらに全力で取り組むことで素晴らしい卒業式になるのだと思う。そのためにもこの修学旅行で学年としての、さらなるまとまりを。また、きれいごとではない互いの絆を深めてほしいと願っている。

ともあれ、沖縄の海は美しい。食文化も独特なものがある。大いに楽しみたい。そのためにも、エチケットやルールを守り、大人としてのふるまいをしよう。自らをコントロールできる者こそが大きな自由を自分のものにすることができる。楽しさと危険とは紙一重である。集団生活である。十分な注意と人に対する配慮を忘れないでほしい。きっとそれは、何倍もの心地よさとなって自分に返ってくるに違いない。

よい思い出を、この夏みんなでつくろう！

3) 職場体験

2006年、6・6制が始まり中・高の間の人事交流も行われた。また、これを機に2007年度より8年生における5日間の職場体験の実施が決定された（正確には3年間実施したのち、改めて存続させるか決定)。責任者になったのは進路指導部の安部喜史郎であった。安部はそれまで高等学校において「インターンシップ（職業体験)」の運営、実施の経験があった。2006年7年生の学年主任となった堀内と安部は父母から協力委員を募り、精力的に職場の提供を求めた。父母・卒業生を含めできるだけ明星の関係者のいる職場にお願いしたかった。とはいえ、大きな理想はあったがそれを形にするには暗中模索であった。安部はそのほとんどすべての職場をまわり、職場と学校との関係を築いていった。その際､問題となったのは父母や職場の方々に何を語るかであった。なぜ8年生に5日間の職場体験を課すのか？ 高等学校における「インターンシップ（職業体験)」と中学校における「職場体験」とではおのずからその目的は異なる。生徒指導部ではその目的を「出会い」と位置づけ、①人との出会い②現実の社会との出会い③働くこととの出会い④自分自身との出会いという4項目を挙げ、「職場体験ハンドブック」を作成した。ここでは、そのハンドブックの巻頭に書かれた堀内の生徒へのメッセージを記す。

自分の将来について考えたことがあるだろうか。漠然としたものであっても、目標やあこがれというものを持っているだろうか。現代社会は膨大な量の情報にあふれ、それでいて大切なものが見えにくくなっている。14歳の君たちにとって“大人”になるということがどういうことなのか、非常にわかりづらいはずだ。子どもより子どもっぽい大人はいくらでもいる。年齢や経済力だけで大人と呼ぶのだとすれば、あまりにさみしすぎる。この問題は、大人であるはずの私たちの側に痛烈な問題提起として跳ね返ってくる。

一方、君たちはそんな中、実際に現実を経験することなく頭だけでこの世の中を分かった気になっていはしないか。細切れの情報が、安物の物語のように次々と垂れ流されてくる。また、自分のことを簡単に決めつけ、それにとらわれてしまってはいないか。それでいて不安感はますます大きくなっていく。それは実は社会のことを、自分のことを本当の意味で実感できていないからだ。失敗するのが怖い。ますます自分の世界から出られなくなってしまう。自分のやりたいようにやるという“自由”からは“不自由”という結果が生まれるだけだ。そもそもこの世の中はわからないことだらけだ。簡単にわかるなどということはないし、わかったふりをすることもないのだ。

しかし、この世の中はそんなに捨てたものではない。素敵な“大人”はたくさんいる。家庭や学校とはまた別の場所で､そんな一人の“大人”に出会い、真剣に向き合うということこそが社会を知り、自分を知る上で今大切なのではないだろうか。そして、大人が大人として生きている場所の一つが仕事場であると私たちは考えた。

ある人にとってそこは､たった一度の判断ミスや、たった一回の失言で自分だけではなく、従業員の運命をも変えてしまう可能性を常にはらんでいる場かもしれない。一円の利益をあげるために私たちの想



職場体験(畳屋さん)

像もつかない苦労をされているかもしれない。多くの利益を上げることよりも、その人にとって大切な何かを持ち続けて働いている人がいる。人間の力ではどうにもならない一回の台風の被害でその年の収穫を失おうとも、変わることなく日々を生きている人がいる。私たちの世の中はそういう人たちのつながりで成り立っているし、私たちはそういうつながりの中に生きているのだと思う。

14歳の君たちを職場に5日間送るということは、仕事をおぼえてきてほしいということではない。ましてや、たんなる社会科見学などではない。実際の職場を見せていただき、多少の仕事のお手伝いをさせてもらうことをとおして、"本当の大人"と出会ってほしいがためのことである。そのような意味で、関心のある仕事が見つからないということは心配にあたらない。ある有名なコメディアンが言っていた。「過去を振り返り、自分を成長させてくれたのは常にそのとき自分にはむいていない、いやだなと思う仕事の中にあった」。むしろ、自分にとって意外だと思うことの中にこそ新たな突破口があるのかもしれない。

"本当の大人"とは外見のうすっぺらなかっこよさとは必ずしも一致しない。つらくても、よごれても自分の責任で行動し、だからこそプライドを持って生きている人のことである。ただ、職場に行きさえすればそういう人に会えると思ったら大間違いである。"本物の大人"に出会うためには、出会うための流儀がある。自分の身の丈に合わなくなったココロのカラを脱ぎ捨て、素直に、真剣にその人と向き合うことだ。初めての体験、わからないのはあたりまえだ。むしろわからないことはわからないと言い、素直に教えてもらうことから全ては始まる。そして最も大切なことは、相手の話をしっかり聞くということだ。人の話を聞けない人に、だれも本当に大切なことなど語ってはくれない。そんな単純なことができさえすれば、きっといい経験となって自分に返ってくるだろう。

職場体験の実施にあたっては、父母の皆さんを中心に、卒業生、広く学校関係者の皆さんのお力をいただいた。感謝をするとともに、今の学園が様々な形で、多くの方々によって支えられているのを感じる。

君たちは、その中に生き、それぞれの職場にでかけていくのだ。本気でしかられることもあるかもしれない。しかし、それらのことを肝に銘じ、たくさんのことを発見、吸収してきて欲しい。すばらしい出会いがあることを願っている。(「2007年度職場体験ハンドブック」より)

1997年11月5日から10日の間のうちの5日間、大きなトラブルもなく無事、第1回の職場体験は成功のうちに終わった。心なしか子どもたちの姿がたくましく見えた。ここでは「2007年度体験文集」の中から二人の感想を紹介する。

新しい私(パン製造・販売「ペリカン」)　8年　木村 祥乃(79回生)

職場体験を終えて、私の中で何かが変わった気がします。いろいろな経験をし、社会というものを垣間見たこの5日間で、何が変わったのか。それはうまく言葉にできないけれど、すごく大きな、私にとってとても大切なものです。私は今まで、家族に対して物事が思い通りにならなかった時、すぐイラだったり、ムッとしたりしていました。けれど今は、相手の立場を考えたり、違う方法を考えたりして、サラリと自然に物事を受け止められるようになったと思います。自分の態度や感情が相手に伝わり、お互いに気持ちよく楽しくすごせるようになるのです。まだ全ての場面でこのようにできるわけではないけれど、相手はもちろん、私自身も今の方が穏やかな気

持ちでいられます。だれでも家族に対して多少わがままになると思う。でも、私は今の気持ちを忘れないようにしたいと思います。母にも「職場体験をして何か変ったね。言われて、やるんじゃなくて自然に手伝ってくれるようになったね」。と言われました。店の中で常に気を配り、手の足りない所へ自分から手伝うようにするということを学んだ成果かなと思いました。

職場体験をする前は、知らない大人達の中へ入っていって仕事をするのはちょっと気が引けたりしました。不安がとても大きかったです。でも、行ってみると思っていたよりは平気でした。今思うと1日5時間半が5日というのは少なかった様な気がします。でも体験中全てが楽しかったわけではありません。一番苦戦したのは販売でした。知らない人と話すのが苦手な私は、将来は絶対に接客業は嫌だと思っていたのですごく心配でした。実際、お勘定を間違えてしまったり、あわてて袋を落としてしまったりしました。お店の人の言うとおりに手をよく洗い素手でパンを袋に入れていましたが、中にはそれを嫌がるお客さんもいて、「手、汚ないよね」と言われたりもしました。

後半に入ると、慣れてきて、緊張はしているけれど普通にお客さんに接することができるようになりました。

最後に、ペリカンのパンは本当においしかったです！！

職場体験を終えて（三鷹駅前保育園）　8年　平池 なつ子（79回生）

三鷹駅前保育園はビルの中にある。2階と3階の、2つのフロアを使っていろんなことをやっている。私が体験させてもらったのは2階のフロアを全部使ってやっている、子どもが毎日通って来るふつうの保育園での仕事。私は1歳児（1～2才の子）のクラスで5日間過ごした。

最初の日は本当に緊張した。小さい子と接するのはけっこう自信があったから、まず子どもたちとうち解けようと思ってクラスに入った。でも最初の最初から仕事というものにふれた。小さい子の数は2人や3人じゃない。朝は10人以上が1つのクラスにいる。言葉を少ししか知らない子たちが10人もいれば、たたくし、噛むし、髪の毛ひっぱるし、押し倒すし…。今まで私が接してきた小さい子っていうのは、いとこだったり親しい人の子供だったり。でもその時は数が1人や2人、できるだけその子のしたいようにさせて、同じ目線に立って最低限のことしか注意しないってかたちで、けっこうその子といい関係になることができていた。でも保育士って仕事は子供をきげんよくさせる事だけが仕事じゃない。時には子供を泣かせてでも危険から遠ざけなければならないということがわかった。一日目の朝、唯一自信のあった小さい子と接するということさえ、今までの感覚では通じないことがわかって、これからこの職場でやること全てが未経験なんだと思った。でもそれが良かったんだと思う。全部が知らないこと、わからないことだからこそ言われたことに素直になれる。

仕事をやりながら接している中で、自分とは性格的に合わないタイプかなって思った人もいた。でも自分は何もわからないんだからこの人の言うことを聞くしかない。もちろん態度には出さないけど、最初のうち内心はそんな感じだった。でも一緒に仕事をしていく中で、少しずつその人の優しさが見え隠れするのを感じるようになった。その時思ったのが、見え隠れする優しさって強くてものすごくかっこいい優しさだってこと。そしてその優しさを見たいのならまず相手に対して本気になること。中途半端な気持ちで接すれば、誰でも簡単にできる表向きの優しさしか見えてこないって知った。

一日目、働きながら私はすごく幼稚なことを考えていた。職場の人がもう少し気を遣ってくれ

ればいいのにって。こっちは初めての場所で何もわからなくて不安だってことくらいわかるでしょって。でもそれがものすごく幼稚な考えだって気づいたのは、自分が仕事に対して知らず識らず真剣になり始めたころ。職場の人たちが、私が職場に来ていることを中心的に考えてくれない、そんなのあたり前。ここの人たちの仕事は私の職場体験をサポートすることではない。今まではいつも先生や親がそばにいて、手を貸してくれていた。でもここではちがう。初めて自分が中心に置かれない場で学習する機会が与えられたんだと思った。そう思った時、たくさんのことを学びたいのなら自分自身に責任を持って積極的にいろんなことをやる事がどんなに大事なことかわかった。もし職場の人たちが私にたくさん声をかけ、話題を作るためにどうでもいい話をして、楽な仕事ばかりやらせてもらっていたらその時は楽しいかもしれないけど、こんな発見できなかった。職場の人たちは言葉ではなく仕事に対する姿勢で私にたくさんのことを教えてくれた。

本当に今回の職場体験は楽しかった。保育園に通う子供たちや先生が大好きになった。三鷹駅前保育園が大好きになった。本当はもっともっと一緒に過ごしたかった。こんなふうに素直に思えるのは子供たちがかわいかったからだけじゃなく、すてきな先生がたくさんいたから。

そしてすてきな想いを持ったすてきな大人に出会うきっかけとなったこの職場体験。最初に5日間って聞いたときは長いと思ったけどあっという間だった。これからまた毎日学校に通う生活にもどっていくけど、今回の体験で知ったこと感じたこと、いろんな時に活かせればなあと思っている。学校の先生たちは色々な準備やたくさんの心配で大変だったと思うけど、心のそこから楽しませてもらったこと本当に感謝しています。ありがとうございました。

■ 2007 年度職場一覧

【保育園・幼稚園】 愛の園保育園／井の頭保育園／上石神井第三保育園／さくらんぼ保育園／シオン幼稚園／新栄保育園／墨田みどり保育園／八王子ひまわり保育園／マリア保育園／三鷹駅前保育園／わかくさ保育園

【老人施設】 平和台介護老人保健施設・アバンセ／特別養護老人ホーム・小川ホーム／ブース記念老人保健施設・グレイス／介護付有料老人ホーム・シルバービレッジ中央／介護老人保健施設・花水木／介護付有料老人ホーム・ボンセジュール国立／介護付有料老人ホーム・ボンセジュール千歳船橋／介護付有料老人ホーム・ボンセジュール永山／ライフコミューン・一ツ橋学園

【福祉作業所】 調布ゆうあい福祉公社

【医療・療術】 医療法人社団美誠会・荒川病院／いまい接骨院／鍼灸治療院・じゅりん

【動物関係】 だちょう牧場並木屋／ドッグトレーニング狛江／野村動物病院／わんにゃんワールド

【酪農】 磯沼牧場・磯沼ミルクファーム

【農業・園芸】 根岸宅農園／JA東京あおば大泉地区振興センター

【小売業】 伊勢音／（株）一富士／荻窪タウンセブン・味玄商店／荻窪タウンセブン・藤巻商店／コープとうきょう狭間店／コープとうきょう牟礼店／サミット三鷹市役所前店／（株）花のサンライズ／DABOS（アウトドア用品）

【パン・菓子店】 （有）ペリカン／ペール・ノエル（みなみ野店）／レモンドロップ

【娯楽・スポーツ・健康】 ポレポレ東中野／みの石滝キャンプ場&相模湖カヌースクール

【住宅設備】 猿渡畳店／（株）ミヤシロ（各種看板企画制作）／ドルチェ・エビス（クリーニング）

【音楽スタジオ】 DustyMiller

【企業】 光写真印刷（株）／荒木塗装工業（株）／（株）クリアストーン／（株）三浦ピアノ／（株）

モマインターナショナル・エアステーション世田谷営業所
【学校】 尚美学園・東京ミュージック&メディアアーツ尚美
【造園】 石正園

2009年度、第3回の職場体験が終わり、ほぼ全員の教員がこの取り組みを経験したことになった。翌年度以降の実施について、議論が行われた。当然、賛否両方の意見が出された。生徒を職場に送り出すまでの準備は教員にとって非常に大きな負担となる。にもかかわらず結果は賛成多数であった。それは父母の期待の大きさと、何より生徒の成長を肌で感じることのできた結果ではなかったかと思われる。また、この年1月16日、「職場体験報告会」が保護者だけでなく初めて7年生対象に行われた。学年間のつながりが生まれる大きな一歩となった。

2010年度は父母による単年度の職場体験ボランティアの会が生まれた。それまで滞っていた資料の整理が進み、また職場にも実習の後、挨拶にうかがっていただいた。生徒は第一回目から実習の後、「体験文集」を作成し、また職場ごとにパネルを作り、明星祭で展示することが定例となっている。2011年度は、それまでいちょうのホールに7年生を集め、選ばれたグループによって行われていた報告会を、全ての9年生が7年生のいずれかの教室に出向き、報告会を行った。これにより、8年生全員が職場体験の報告をし、9年生ではやはり全員がお客さんの前で卒業研究のプレゼンテーションを行うという流れが確立した。

【年間活動計画】

学　年	学　期	内　　容
7	3	「職場体験」ガイダンス ・ハンドブック配布 ・「職場体験」調査① 8年生報告会見学（パネル展示・プレゼンテーション）
8	1	事前学習（L.H.Rを活用） ・調べ学習 ・講演会、卒業生登場 ・「職場体験」調査② ・その他
	夏休み	課題（宿題）
		・参考図書（感想文） ・仕事インタビュー
	2	「職場体験」体験職場の決定 事前準備 ・「マナー」の学習 ・「自己紹介書」の作成 ・「体験職場訪問」（挨拶・打ち合わせなど） 「職場体験の実施」 11月　日～11月　日 実習後のまとめ ・お礼状の作成・郵送 ・職場体験日誌の整理・感想文提出 ・職場体験「パネル」作成（日誌・写真・感想）
	3	7年生へのプレゼンテーション（報告会） 感想文集の完成
9	2	「明星祭」への参加、発表

■ 2008 年度以降、新たに協力を得た職場一覧

【保育園・幼稚園】阿佐ヶ谷幼稚園／観泉寺幼稚園／国立あゆみ保育園／小鳥の森保育園／昭栄保育園／杉並ゆりかご保育園／杉並ゆりかご保育園のはら分園／世田谷小鳥の森保育園／フィッシャー幼稚園／あおぞら園

【老人施設】特別養護老人ホーム・恵比寿園／介護付き老人ホーム・フローレンスケア聖蹟桜ヶ丘／調布市立養老院・八雲園

【福祉作業所】かみよん公房／目黒区立下目黒福祉工房

【医療・療術】東京慈恵会医科大学解剖学講座／杉並リハビリテーション病院／晴朗クリニック／はたの歯科医院／まんまる助産院／武蔵境中央整骨院

【動物関係】おぎはら動物病院／加藤動物病院／杉浦愛犬警察犬訓練所／東京乗馬倶楽部・渋谷区立ポニー公園／ハーモニイセンター／ Hund Training Zart（犬のしつけ、トリミング）

【農業・園芸】大橋えのき園／風の丘ファーム／倉本農園／紅林農園／滝澤花園／富岡農園／中山農園／農家（貫井さん）／松本園芸／ JA東京あおば大泉経済センター／調布のやさい畑

【小売業】グルッペ・荻窪店／グルッペ・吉祥寺店／グルッペ・三鷹店／フタバスポーツ／武蔵野市アンテナショップ麦わら帽子／やさい村／東洋計測器（株）

【パン・菓子店】ウルソン／ A.KLabo ／パティスリーサロン・ドゥ・ティゴセキ／ペール・ノエル（めじろ台店）

【飲食店・サービス業】スターバックスコーヒー国立店／仙川寿司／日本料理・夏の家／ル・ヴァン・ド・ヴェール（フランス料理）／沙羅舎・心泉茶苑／調布クレストンホテル

【娯楽・スポーツ・健康】緑が丘テニスガーデン／スポーツクラブ&スパ・ルネサンス国立／（株）ファンルーツ（サッカー）

【住宅設備】関口十一畳店／大工工房・亀工房

【音楽スタジオ】タカギーズホーム

【企業】日経印刷（株）／文伸印刷／（株）アルク／角川書店／（有）グループ・コロンブス／出版輸送（株）／（株）テレコム・アニメーションフィルム／ピーズインターナショナル／（株）ファンルーツ／ COLORS（Tシャツデザイン制作）／（有）スタジオちゅうりっぷ（アニメ制作）／（株）ダイスクリエイティブ／ノア・ドローム（人形）

【地域】三鷹国際交流協会／三鷹市市民協働センター／三鷹市井の頭地区住民協議会／三鷹市東児童館

【その他】東京国立博物館





8年生職場体験

(2) 教務上の諸問題

6・6制に伴う変更

2006年度6・6制移行に伴い、中学校は学校週5日制から6日制への切り替えを行った。それまで小学校とあわせていた体制を中・高で統一する形となった。中学校と高校の間で教員の人事交流が行われ、クラブ活動においても中・高合同で活動するクラブがより活発化した。和太鼓部・アンサンブル部・弓道部・剣道部・陸上部など合同クラブのその後の活躍を振り返るとき、その意味は大きい。

一方、不安材料もあった。学校週6日制とはいえ、労働条件の関係で教員は平日休みを1日取ることになる。つまり、担任のいない曜日ができてしまうのだ。それまで中学校の生活指導については担任を中心に学年集団全員で対処してきた。しかし時間割の関係で、水曜日以外学年全員がそろうということはなくなってしまう。高校生とは違う中学生という難しい時期にそれは可能かという不安である。休日休みを返上してでも教員は生徒とともにいるべきだという声も少なくはなかった。ただ、担任がいなければ心配だという現実こそ変えるべきだという意見もまた、一面の真実であった。体制の上では副担任制度が生まれた。全員がそろわなくとも、いかに教員間で伝え合い、問題を共有できるかということが求められた。

また、当然のことながら教科週時間数も変更された。以下、学校5日制前・5日制期間中・6日制変更後の時間数をまとめたものである。

	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保体	木・工	英語	特活
5日制前	4	4	4	4	2	2	3	2	4	1
5日制実施	3.5	3	4	3.5	2	2	3	2	4	1
6日制	5 ※2	4	4(5) ※1	4	2	2	3	2	5 ※3	1

※1. 数学は7・8年週4時間、9年週5時間
※2. 7・8年の国語は、「国語A＋国語B」の時間数。9年の国語は「現代文＋古典」の時間数
※3. 英語5時間=英語（4時間）＋オーラル・コミュニケーション（1時間）

授業時間数増に伴い、国語・数学で非常勤講師を採用、また専任教員数減の方針の下、音楽・美術・体育科においても非常勤講師、あるいは一部高校所属の教員が授業を持つことになった。

定期テストと補習への取り組み

長らく中学校では、各学期末年3回のみの定期テストを行っていた。中間テストを行わない点について、それを設定することで物理的にカリキュラムがしばられ、本来明星が理想とする体系的な学問の世界を授業の中で提示していくときの妨げになるためであると説明されてきた。むしろ単元のまとめの小テストを各教科の授業内で行い、定着度を測り、補いをするというリズムを作る方が実質的であるという考え方である。

現在もその考え方に賛同する者は少なくない。しかし、一方で中間テストを年間日程の中に位置づけ、テスト1週間前を学期末と同じようにクラブ活動休止期間にするなど、学校全体として学習に向かわせる雰囲気作りをする必要性が現実の生徒を見るときに増してきていたことも事実だった。短いタームの中で復習をさせ、テストによって明らかになった不十分な部分を補習等で

丁寧に補うという形である。一つの学期の学習内容を1回の定期テストで復習させるということは、現実問題としてなかなか厳しいことなのである。そんな経緯もあり、2007年度より10月後半に2学期中間テストを実施、中間報告書をだすことになった。

補習については、それまで各教科・学年個々にその多くは任されていた。ただ、学年の意図がなかなか家庭に伝わらない、あるいは学年による取り組みの差が実際以上に問題にされる状況が生まれるようになっていた。そこで、同じく2007年度より1学期終業の日の後、3日間の補習の日を年間予定表に前もって組み込むことが決定された。学期末の報告書を渡されても、そのまま長い休みに入ってしまうことへの不安感が保護者の間にあることも事実だった。もちろん、そこで決められた日程以外での補習については、それまでと同様個々自主的に行われている。

学期末の報告書、評価の問題について

明星学園中学校では、学期末の評価を単なる数字として表すのではなく、各教科それぞれがその学期の学習内容、評価の観点などとともにB5の用紙にまとめ、それらを一冊に綴じた「学習の記録」として終業の日に渡してきた。なぜそのような形を取っているかについて、お知らせ「学期末の報告書、評価の問題について」(2012年7月17日配布)で、次のように述べられている。

> 期末テストの点数や完成した作品が、個々の生徒を評価する上で大きな意味を持つことは異論のないところでしょう。しかし、それがすべてではありません。そこに至るプロセスを見なければいけません。プロセスを見る中から個々の生徒がどこでつまずき、どこが足りないのかが見えてきます。一人ひとり、何ができるようになり、何が不十分なのかがわかる報告書が望ましいのです。平均より上か下か、全体の中で自分がどの位置にいるかといったことはけして報告書の最も重要な目的ではありません。
>
> 1時間1時間の授業をしっかり受けているかどうかはノートの評価から見えてきます。学んだことが定着しているかどうかは、小テストや宿題の提出状況と大きな相関があるでしょう。仲間と協力できるかどうかが評価の一つになる教科もあるはずです。ノートがしっかり取れているのにテストの点数がよくないなら、そこにはどんな原因があるのでしょう。同じ80点でもA君の80点とB君の80点とでは全く違う意味を持っている可能性も十分あるわけです。
>
> そのようなプロセスの見える報告書にするためには授業者の評価の観点が述べられていなければなりません。当然教科によって、あるいは授業者によって細かい部分での評価の形式の違いが生まれてきます。これは教科の特殊性や授業者の評価に対する哲学の表れでもあります。もしこれを、上から与えられた画一的な形式の中に押し込んでしまうならば、それがいかに多くの観点が書きならべられているものであったとしても、生きた評価とはいえないのではないでしょうか。そのような思いを生かす形でこのような形の明星の報告書が生まれ、現在にいたっているわけです。

文科省から与えられる評価の形式が時代時代によって変わろうと、明星のこの考え方は変わらなかった。しかし形式が固定化されると、それがいかに実践に裏付けされた理想から生まれたものだったとしても、しだいに思考停止を招いてしまう。時に応じ、議論を続けることが大切である。2011年春の研究会において、学力・評価の問題について熱い議論が交わされた。力がついている

か否かを、何を持って評価するか？ 筆記テストに頼りすぎている面はないか？ 授業研究が形骸化してはいないか？ 低学力生徒の指導？ 教科の授業を卒業論文の指導にいかにつなげるか？ 教科と教科外教育との関係は？ 報告書は生徒の現実を反映したものになっているだろうか？ そもそもそれを受け取る家庭に学校側の意図は伝わっているのだろうか？

前出の「お知らせ」はそれを伝えるためのものでもあった。報告書がただの報告書であってはならない。その後につながるものでなくてはならない。引用を続ける。

> 各教科にはそれぞれ越えなければならないハードルがあります。教科にもよりますが、日常的にも補習や追試、個別の指導などは随時行われています。いろいろな方法を使いながらハードルを越えさせるのが我々の仕事です。
>
> 1学期の終りには、補習日を当初より年間予定に組み込んでいます。また2学期には全学年とも中間報告書をお渡しします。これは、2学期前半の学習について不十分なところをチェックし補いをすることで、後半の学習に向け、再スタートを切れるようにすることと同時に、学習のリズムをつくるためのものです。
>
> さて、明星学園は自由な学校、個性を尊重する学校であるとよく言われます。そのとおりです。しかし、誤解してはいけません。誰にでも苦手なものはあります。と同時に誰にでも長所があるはずです。しかし、個性を尊重するということは、苦手だと思っているものから逃げる自由を認めるということではありません。好き嫌いにこだわり、あるいは苦手だと自分で決めつけてしまうことは、これから新たな可能性を切り拓くはずの大切な芽を摘んでしまうことにもなりかねません。
>
> そもそも自由というものは、はじめからあるものではありません。自由とは獲得するものです。中学生段階では何よりも自由を獲得するための知恵と知識を身につけなければなりません。自分の頭で考えることです。人の話を聞けることです。自分の間違いを認められることです。他者の痛みを想像できることです。嫌いなこと、苦手なことから逃げていては、けしてそれらは身につきません。きちんと向き合わなければ、はたして本当に嫌いなのか、苦手なのかさえ分からないはずなのです。
>
> 逃げる自由を明星らしさと勘違いしてはいけません。もちろん、自分に厳しすぎる生徒には逃げ道の重要性を伝えてあげないといけません。ケースバイケースではあります。ただ、困難なことから逃げていては達成感も、本当の意味の悔しさも喜びも味わえません。これでは明星に入学した意味がなくなってしまいます。この点に関しては、学校と家庭とで協力しながら子どもたちを見守っていければと考えています。
>
> 学期末の報告書には自分のがんばったこと、不十分だったことがたくさん詰まっています。そこからこの後どうすればよいのかを是非読み取ってほしいと思います。

5段階評価の導入

2011年12月の中学校運営委員会合宿研究会のテーマの一つが、5段階評価の導入についてであった。それまでの「学習の記録」のプラス面とマイナス面について語られた。少なくともこの30年、このような議論はされたことがなかった。世間的な5段階評価は、明星の教育にとって相対立する象徴のように無言のうちに語られてきたような部分があった。「はたして、本当にそうなのだろうか？」これが研究会で提起されたことだった。明星の報告書と5段階評価とを二項対立で考えること自体、明星の教育を形式的に考えることにつながっていやしないか。

職員会議において、さまざまな不安が語られながらも運営委員会提案は可決された。不安は常につきまとう。大切なのは理想を語り続け、疑問を表明し続けることだ。2012年度より各学期末、これまでの「学習の記録」に加え、各教科の5段階評価をつけることになった。これはそれまでの「学習の記録」に光を与えるためのものであり、また各教科の評価が教科の中に閉じず、学年全体として共有し生徒個々への丁寧な指導につなげるためのものであった。以下、前出の「お知らせ」から、その意図について書かれた部分を引用する。

> 中・高一貫体制となって7年目に入りました。過去をさかのぼれば、高校へ内部進学したにもかかわらず、高等学校を卒業することなく、途中退学者が多く出てしまったこともありました。しかし近年、中学校からの内部生は自信を持って進学し、高等学校の中心になって授業にクラブに行事にと活躍しています。そんな充実した高校生活を送っている生徒が多い中、中には成績がなかなか上がらず、苦労している生徒のいることも確かです。
>
> このような中で昨年度、高等学校の職員会議において、きちんと学習に向かっている生徒については、卒業まで最大限の指導を尽くすということが確認されました。高等学校は義務教育ではありません。もちろん、これはだれでも卒業させるということを意味するのではありません。きちんと補習、レポート等の提出物を出す生徒であれば、一人ひとりの生徒に応じて、より丁寧に指導を行い、またより柔軟なハードルを用意し、しっかりそれを超えるようにさせるという覚悟でもあります。
>
> それを受け、中学校でも高校までの6年間を見通した上での評価、報告書の在り方について議論がなされました。先に述べたような今まで中学校として考えてきた報告書のあり方については変更ありません。むしろ、その意味をよりはっきりと伝えなければならない必要性を感じています。と同時に、不十分な項目について、とりあえずそのままでよいもの、すぐに補いをしておかなければならないものとの腑わけ、補いをするためには中学校段階では生徒によってはご家庭の協力が何よりも必要であること、必要な生徒については二者面談、三者面談を学期末に必ず行うことが確認されました。
>
> そのためには、各教科の評価を学年スタッフ全員で共有し、適切な指導を授業者個人としてだけではなく、学年スタッフ全員が了解していることが必要です。そこで今年度、それまでの報告書に加え5段階の評価（もちろん絶対評価です）を添付することにしました。これまでの報告書は自分自身を振り返るものであり、他者と比較する性質のものではありません。そのような細かな評価を他の教科を含めた全員の教師が把握するというのは現実的ではありません。また、テストの点数といったわかりやすい数字は一部の教科に限られたものです。5段階（A～E）といったおおまかな評価をつけ、それをもとに特にDとEの評価の生徒を中心に、一人ひとりの生徒についてどのような問題があるのか、今どのような手を打つべき

かといった意見交換をし、今後の指導に生かしていこうというわけです。

また、ご家庭においても二つの方向から報告書をご覧いただき、学期ごとの評価の推移、教科間の評価のばらつき等、参考にしていただければと思います。ただ、ここでくれぐれもお願いしたいのは、5段階評価をそれだけで見るのではなく、各教科の詳しい報告書とつなげてご覧いただきたいということです。そのことで、明星の授業についてより深くご理解いただけるのではないかと思います。

明星学園では創立以来、評価の問題については試行錯誤を続けてきた。「点数をつけない教育」、またある時は逆に「授業者の主観を排した客観的な評価」…。評価とは教育そのものだ。世間の学校であれば、当然のことながら形式も観点も上から与えられたものに縛られる。教育の現場において何の必然もなく、急に変更になることもある。この本質的な問題について試行錯誤できる自由は何よりもかけがえのないものであるといえる。

ただし、これも独善になることを戒めなければならない。目の前にいる子どもたちの姿が見える中での試行錯誤でなくてはならない。また、教育とは常に理想と現実との間に実像を結ぶ。今回の評価のあり方が、形式のみで固定化することのないよう、職員会議の中で確認された。



中学校マラソン大会(武蔵野公園)



授業研究(8年生体育)



7年生春の遠足　棒ノ嶺登山



8年生職場体験報告会(7年生向け)

＜文責：堀内 雅人＞

4　公開研究会

2006年、6・6制12年一貫がスタートし、教員組織は小学校と、中・高等学校となった。「6・6制推進委員会」の最終報告で今まで開催していた小・中合同の公開研究会は凍結し、中・高は公開研究会の在り方を検討してから実施することとなった。2006年小学校公開研究会が開催され、中学校では2007年から公開授業と研究会が開催された。2006年以降の公開研究会の概要を掲載する。

(1)小学校「公開研究会」

◆2006年公開研究会2006年10月23日（土）

テーマ「今、子どもたちにつけさせたい力～表現・体験・討論を通して～」
分科会

教科	内　容	授　業
国語 総合	豊かな文章を綴る力を育てる	提案：川松泰美（4年） 「この頃の生活の中で心が動いたこと」を綴る 福田純一（2年） 「和紙づくり」
英語	高学年の英語教育～子どもたちは英語の何をどのように学ぶのか～ 講師：久埜百合（中部学院大学） 司会：粕谷恭子（聖マリア小学校）	関連：平野篤子（2年） 「What do you have ？」 提案：入江潤（5年） 「Who is ～？」
体育	体育における表現とは 講師：荒木豊（山梨大学） 司会：平田和孝（公立屋城小学校）	提案： 剛力正和（2年）「集団音楽マット」 冨田秀和（6年）「集団音楽マット」

全体会
基調報告：「今、子どもにつけさせたい力」一瀬 清（小学校長）
講　　演：「表現と私」唐 十郎（作家・演出家・俳優）

◆2007年度公開研究会2007年10月20日（土）

テーマ「今、子どもたちにつけさせたい力～表現・討論・体験を通して～」
分科会

教科	内　容	授　業
算数	子どもたちが夢中になる算数 講師：田中かほる（元区立小学校） 市川良（区立新泉小学校） 司会：秋山敏文（区立弦巻小学校）	関連：根岸あずさ（2年）「かけ算」 提案：河住由美（5年）「平均」
音楽	子どもたちの歌声を求めて 講師：千葉祐（玉川大学） 司会：木下則文（玉川大学）	提案：秋野憲治（6年）「雪の降る街を」
社会	地球史から学ぶ歴史の授業 講師：城雄二（元広島大学） 司会：満川尚美（区立練馬小学校）	関連：川松泰美（5年）「弥生時代」 提案：江口聡江（4年）「地球史」

全体会
基調報告：「今、子どもにつけさせたい力」一瀬 清（小学校長）
講　　演：「大空のもと、自然の教えを聴きましょう」秋山 仁（理学博士・数学者）

◆2008年度公開研究会2008年10月25日（土）

テーマ「今、子どもたちにつけさせたい力～表現・討論・体験を通して～」
分科会

教科	内　容	授　業
算数	小数のわり算～分離量から連続量へ 講師：市川良（元公立小学校） 加藤博通（和光鶴川小学校） 司会：秋田敏文（公立弦巻小学校）	関連：大日方和美（3年）「整数のわり算」 江頭有子（4年）「小数のわり算」 提案：小野健太郎（4年）「小数のわり算」
社会	未来をひらく歴史教育をめざして 講師：大日方純夫（早稲田大学） 司会：高瀬真次（本校教諭）	関連：江口聡江（5年） 「日本古代国家誕生へ」 提案：川松泰美（6年） 「明治維新からアジア太平洋戦争敗戦まで」
美術	主体的に取り組くめる美術をめざして 講師：齋藤敏寿（筑波大学） 司会：佐藤晃（本校教諭）	関連：坂本直穏枝（5年）「一版多色木版画」 提案：池上初美（3年）「生き物のいる風景」

全体会
挨　拶：一瀬 清（小学校長）
講　演：「ことばを操る生きものとしての人間」小森陽一（東京大学）

◆2009年度公開研究会2009年10月24日（土）

テーマ「学び合う子どもたちの姿をめざして」
分科会

教科	内　容	授　業
総合	社会認識を育てるために ～私たちの生活を支える仕事（3年生） 講師：中妻雅彦（愛知教育大学） 司会：根岸あずさ（本校教諭）	関連：冨田秀和（3年） 「倉本さんの畑づくりを知ろう」 提案：伊野文子（3年） 「倉本さんの畑づくりを知ろう」
英語	環境の中で効率よく英語を習得させる指導法を考える～学習者が英語のしくみをつかむ効果的なアウトプット（小学校編） 講師：久埜百合（中部学院大学） 司会：工藤圭輔（本校教諭）	関連：乾篤子・James Levick（2年） 「Head, Shoulders Knees and Toes」 提案：入江潤・Vanessa Oguchi（4年） 「My dog has short legs」
国語	文学作品の読みを深め合うために 講師：松谷みよ子（作家） 司会：村田修二（本校高校教諭）	関連：川松泰美（2年） 『わにのおじいさんのたからもの』 照井伸也（6年） 「表現を広げよう」 提案：大日方和美（1年） 『花いっぱいになあれ』
理科	小学校段階で粒子を使って自然現象を理解できるか 講師：荒船次郎（東京大学名誉教授） 司会：合馬和章（川崎市立上戸小学校）	関連：小野健太郎（5年）「物質の三態」 提案：大沼有子（4年）「空気」

全体会
挨　拶：一瀬 清（小学校長）
講　演：「子どもの力は学び合ってこそ育つ」金森俊朗（上越教育大学・金沢大学）

◆2010年公開研究会2010年10月23日（土）

テーマ「学び合う子どもたちの姿をめざして」
分科会

教科	内　容	授　業
総合	社会認識を育てるために ～私たちの生活を支える仕事（2年生）」 講師：中妻雅彦（愛知教育大学） 司会：江口聡江（本校教諭）	関連：伊野文子（1年）「家の仕事」 提案：根岸あずさ（2年） 「守衛の東さんの仕事調べ」
体育	小学校体育のカリキュラムに民舞を位置づける 講師：久保健（日本体育大学） 司会：高瀬真次（本校教諭）	提案：冨田秀和・照井伸也（1年・4年） 民舞「荒馬」
国語	文学作品の読みを深めるために 講師：上西信夫（文芸教育研究協議会） 司会：入江潤（本校教諭）	関連：川松泰美（1年）詩「はじめまして」 提案：淘江正仁（4年）「友だちの友だち」
理科	小学校段階で粒子を使って自然現象を理解できるか 講師：梶雅範（東京工業大学） 司会：中井孝之（和光鶴川小学校）	関連：小野健太郎（6年）「金属の酸化」 提案：大沼有子（5年）「物質の三態」

全体会
挨　拶：一瀬 清（小学校長）
講　演：「子どもの学力の基本は好奇心」汐見稔幸（東京大学名誉教授・白梅学園大学学長）

◆2011年公開研究会2011年10月22日（土）

テーマ「学び合う子どもたちの姿をめざして」
分科会

教科	内　容	授　業
社会・総合	社会認識を育てるために ～近代産業を考える 講師：大日方純夫（早稲田大学） 中妻雅彦（愛知教育大学大学院） 司会：根岸あづさ（本校教諭）	関連：冨田秀和・伊野文子（2年） 「学校で働く人」 提案：河野茂（6年） 「近代産業と女性・子どもの労働」
算数	グラフを豊かに読み取らせるには何が必要か 講師：市川良（元公立小学校） 司会：秋田敏文（区立弦巻小学校）	関連：福田純一（3年） 「わり算・整数」 佐藤彩（4年） 「わり算・小数」 提案：河住由美（6年） 「内包量とグラフ」
英語	子どもの言語習得を促進させる評価の方法とは～自立的学習者を育てるための工夫 講師：粕谷恭子（東京学芸大学） 司会：姫野英二（本校中学校教諭）	提案：入江潤（6年） 「What did you do last night ？」 過去時制不規則動詞

全体会
挨　拶：一瀬 清（小学校長）
対　談：谷川俊太郎（詩人）　聞き手：小野健太郎（本校教諭）

◆2012年公開研究会2012年10月20日（土）

テーマ「本物のかしこさを求めて」
分科会

教科	内　容	授　業
社会	近現代をどうとらえ、教えるか 講師：大日方純夫（早稲田大学） 司会：加藤裕明（成城学園初等学校）	関連：淘江正仁（6年）「明治の国づくり」 提案：江口聡江（6年）「明治の国づくり」
美術・工作	6年間最後の課題を考える	関連：佐藤晃（6年）工作 「一枚の板から箱を作る」 提案：坂本直穏枝（6年）美術 「音の聞こえる風景」
算数	子どもと教材のつながりを育む算数～分数編～ 講師：市川良（元公立小学校） 司会：福田純一（本校教諭）	関連：佐藤彩（4年）「小数のわり算」 河住由美（3年）「わり算」 提案：小野健太郎（5年）「分数のかけ算」

全体会
挨　拶：一瀬 清（小学校長）
対　談：「わからなさに耐えるということ」清水真砂子（翻訳家・児童文学者・青山学院女子短期大学）

◆2013年公開研究会2013年10月19日（土）

テーマ「本物のかしこさを求めて」
分科会

教科	内　容	授　業
国語	本質を深くとらえる力をどうつけるか ～詩の授業を通して～ 講師：上西信夫（文芸教育研究協議会） 司会：堀内雅人（本校中学校教諭）	関連：大日方和美（4年） 海をテーマにする詩・くらべよみ 提案：淘江正仁（6年） 高村高太郎の詩・つづけよみ
体育	ボール運動で何をどのように教えるか 講師：岩田靖（信州大学） 司会：森敏生（武蔵野美術大学）	関連：永沼祐介（2年）「ラグハンド」 提案：冨田秀和（5年）「ハンドボール」

全体会
挨　拶：平田和孝（小学校長）
対　談：あまんきみこ（児童文学者）　聞き手：大日方和美（本校教諭）



(2) 中学校「公開授業と研究会」

◆2007年度中学校「公開授業と研究会」2007年11月7日（土）

提案授業と分科会

教科	内　容	授　業
数学	中学生に文字式とどう出会わせるべきか 講師：瀬山士郎（群馬大学） 講師：増島高敬（自由の森学園）	提案：平野康弘（7年）「文字・文字式」
理科	義務教育段階で遺伝をどのように教えるか 講師：池内達郎 司会：大谷康治郎 （千葉経済大学付属高校）	提案：平山勲（9年）「遺伝」
英語	中学校1年次段階の語順の学習	授業：工藤圭輔（7年）「語順」

◆2008年度中学校「公開授業と研究会」2008年11月29日（土）

提案授業と分科会

教科	内　容	授　業
国語	語り・視点—再話のこころみ 講師：竹内常一（前国学院大学） 司会：村田修二（本校高校教諭）	提案：堀内雅人（9年）「藪の中」 長谷川元子(7年)「少年の日の思い出」
数学	中学校におけるルートの分離的指導 講師：増島高敬（東京電機大学） 講師：平野康弘（本校教諭）	授業：山口一郎（11年）「対数」
理科	中学校で気象についてどう教えるか 講師：高橋宙（気象庁）	授業：井上成雄（9年）
英語	中学校1年段階の語順の学習 講師：太田洋（駒沢女子大学） 司会：入江潤（本校小学校教諭）	授業：工藤圭輔（7年）「語順」

◆2009年度中学校「公開授業と研究会」2009年10月31日（土）

提案授業と分科会

教科	内　容	授　業
数学	方程式の解法の見直し 講師：増島高敬（東京電機大学） 司会：平野康弘（本校教諭） 提案：中西正一（本校教諭）	提案：平野康弘（7年）「文字式」
理科	物質と電気 講師：荒船次郎（東京大学名誉教授） 司会：渡辺悦男（立正大学講師） 提案：岡本博行（本校教諭）	提案：平山勲（8年）「物質と電気」
英語	限られた環境の中で効率よく英語を習得させる指導法を考える ～学習者が英語のしくみをつかむ効果的なアウトプット(中学校編) 講師：新里眞男（東京国際大学） 司会：入江潤（本校小学校教諭）	提案:工藤圭輔（9年）「現在分詞と過去分詞」

◆2010年度中学校「公開授業と研究会」2010年11月27日（土）

提案授業と分科会

教科	内　容	授　業
数学	「関数をどう教えるか」 ～関数と座標幾何の分離～ 提案：中西正一（本校教諭） 講師：瀬山士郎（群馬大学） 司会：増島高敬（本校講師）	提案：中西正一（9年）「座標幾何」
英語	英語の基本をつくる ～語順をどう教えるか 提案：姫野英二（本校教諭） 司会：入江潤（本校小学校教諭）	提案：工藤圭輔（7年）「語順」
社会	中学・社会科の歴史教育における日本史と世界史の融合について 提案：比嘉ちひろ（本校教諭） 講師：米山宏史（法政中・高） 司会：川手晴雄（本校教諭）	提案：比嘉ちひろ（9年）「明治の日本」

◆2011年度中学校「公開授業と研究会」2011年10月23日（日）

提案授業と分科会

教科	内　容	授　業
数学	「関数」～中学生に教えるべき関数とは～ 講師：瀬山士郎（数教協・元群馬大学） 司会：増島高敬（本校教諭）	提案：平野康弘（9年）「関数」
理科	電気現象をどうモデル化するか 講師：秋光正子（学習院大学講師） 司会：浦辺悦夫（立正大学講師）	提案：霜田圭一（8年）「物質と電気」
英語	時制・現在進行形の後に現在完了形を教える 講師：和泉伸一（上智大学准教授） 司会：入江潤（本校小学校教諭）	提案：工藤圭輔（8年）「現在完了形」
国語	「語り手」指導から発展的になにを教えるか 講師：井筒満（明治大学） 司会：今井清光（都立江戸川高校教諭）	提案：石川信行（8年）「走れメロス」
社会	大正時代をどう教えるか 講師：富永信哉（桐朋中学・高等学校教諭） 司会：川手晴雄（本校教諭）	提案：小畑典子（9年）「大正時代の日本」

◆2012年度中学校公開研究会2012年10月21日（日）

提案授業と分科会

教科	内　容	授　業
数学	文章問題と方程式 講師：小林俊道（東京女子学園教諭） 司会：市橋公生（本校講師）	提案：中西正一（8年）「文章問題と方程式」
国語	芥川作品の中学教材としての価値を考える 講師：高橋博史（白百合女子大教授） 司会：堀内雅人（本校教諭）	提案：石川信行（9年）「藪の中」
理科	「気象」で何をどこまで教えるべきか 講師：高橋宙（気象庁気象研究所） 司会：佐藤完二（有限会社地球人）	提案：平山勲（8年）「気象」
英語	段落ごとに場面を読み取るリーディング 講師：桑原孝（東北外サ協） 司会：入江潤（本校小学校教諭）	提案：姫野英二（8年） 「段落ごとに場面を読み取るリーディング」
社会	中世の東アジアと日本 講師：三橋広夫（日本福祉大学教授） 司会：川手晴雄（元本校教諭）	提案：高橋珠洲彦（8年） 「中世の東アジアと日本」

◆2013年度中学校公開研究会2013年10月20日（日）

提案授業と分科会

教科	内　容	授　業
国語	小説作品の主体的な解釈を目指して ～再話作業による「高瀬舟」の実践～ 講師：高橋博史（白百合女子大学教授） 司会：今井清光（都立江戸川高校教諭）	提案：長谷川元子（9年）「山椒魚」
理科	イオンと化学変化 講師：下井守（東京大学名誉教授） 司会：大川満里子 （元練馬区立貫井中学校教諭）	提案：霜田圭一（8年）「イオンと化学変化」
英語	段落ごとに場面を読み取るリーディング指導 講師：和泉伸一（上智大学教授） 司会：入江潤（本校小学校教諭）	提案：姜福順（8年）「リーディング」
社会	中世の東アジアと日本 講師：三橋広夫（日本福祉大学教授） 司会：江口聡江（本校小学校教諭）	提案：小畑典子（8年） 「東アジア世界と古代中世の日本」

＜構成：一瀬 清＞

5 高等学校の実践

(1) カリキュラム改訂の取り組み

基礎学力重視の方向

2005年8月の最終報告後は校長教頭会が主導し、各教科が継続検討していくこととなった。高校では、2004年6月より「高等学校教育研究委員会」(委員長：田住見、姜福順・中井智子・新坂彩子・堀口隆士・簗賢二) が黒川校長より「2005年度以降のカリキュラム内容策定・改善、並びに中・高一貫に向けた教育内容の策定」について諮問を受け検討を始め、その年10月に答申が出された。特に、2002年より実施されてきた英数国3教科の基礎学力重視という方針の検討と、「基礎学力とは何か、現在どのような基礎学力が必要か」について明確にすることを課題としていた。10月の答申では、明星生が卒業後希望進路の実現を保障する学力が必要と考え、以下のようにのべている。

基礎学力とは

- 自主学習が可能になるための身体的・精神的な能力と、あらゆる思考の前提となる基礎言語能力であると考える。この基礎学力を養うことによって、自分で学習し、自分で思考する、精神的に自立した生徒の育成を目指す。
- 各教科で扱う内容は必要以上に専門化せず、進学先の高等教育機関で扱う抽象的な学問や専門的な技術の素地となるような、高校生として持つべき具体的な知識や経験を生徒に十分に身につけさせる必要がある。

そこに照らし、現状の生徒に補うべき基礎学力とは、以下の3点である。

① 学習の方略の体得
② 学習の前提としての論理性
③ 学習の前提としての体験

③については「コミュニケーションの能力、空間把握の能力、身体能力なども学習の前提として必要だと考える」として、行事・教科外活動との連携も指摘している。具体的には10年の自由選択廃止、11年時コース制の簡略化、第2外国語を初級・上級に分ける、HR人数の縮小、入学者のクラス分け試験作成等を提言した。また、現状の改善として、英数グレード制授業の検証、教科間の有機的連携、高校だけの視野ではなく中・高一貫の視点を持つこと等も提言された。しかし、具体化に伴って「何を必修とするのか」「時間割が組めるのか」「教室数や施設・人員の限界」等の問題を抱え抜本的な改革は進まなかった。

生徒の現状とカリキュラム議論

6・6制実施後の2008年には渡辺京校長の下で全教員に「学校カリキュラムアンケート」を実施し、運営委員会中心に論議を進めてきたが、日常業務に追われ運営委員会では提案をつくる作業ができなかった。集中して議論・提案作成し、運営委員会へ諮問する機関として再度「カリキュラム委員会」(委員長：横田逸郎、伊勢誠、石井孝) が任命された。特に生徒に見られる学習意欲の低下、必修と選択のアンバランス、特色ある選択授業の減少を問題点として指摘し、「生徒の学習意欲を高め、希望の進路実現できる力を育てる」ことと「中間層の意欲を高め、意欲のない生徒には学習をあきらめない・あきらめさせない体制を作る」事を重点にカリキュラムを再検討する事を課題とした。

2010年3月にカリキュラム検討の目標として、以下の3点が部会提案された。

①どのような生徒を育てたいか～教育目標
自分で考え、自分で学べる人間（自主的学習能力）
総合的な視野を持てる人間
文章で自分の考えをしっかり表現できる人間（言語表現能力）
自分で進路実現・問題解決していける人間（課題解決能力）
②11・12年生で学んでほしい授業とは
教科の枠を超えた総合的視野を育てる授業・明星祭での発表
学んだこと、考えたことを文章で表現することを要求する授業
受験に対応できる力を育てる授業
不得意な生徒のリベンジが可能な授業（あきらめない・あきらめさせない）
これだけは学んで卒業してほしいという内容の授業
③11・12年生の生活スタイル
1時間目から4時間目までは全員が学校で学ぶ
12年生も2学期まではできる限り行事に参加～行事内容の検討
塾に行かなくても大学に合格できる体制
12年3学期も学校で学べる体制

6月には報告が出され、「入学した生徒全員を卒業させる」そのためには、まず、学習に困難を抱えている生徒への特別コース（仮称：リベンジルーム）の設置や、個別対応（仮称：サポートルーム）が提案された。しかし、学力はあっても「怠学」傾向の生徒が多く見られ、こうした体制が本当に生徒の学習意欲を高めることにつながるか疑問視する意見も多く、高校部会で多数の賛同を得るに至らなかった。募集困難な状態にもかかわらず、毎年多くの生徒が進級できず退学していく現状を少しでも防ぎ、「入学した生徒を全員卒業させる」課題を前進させるために、当面、2012年度から英数国の3教科の学習困難生徒のための「Cコース」を設置することが校長から提案され、2013年度から実施された。その後カリキュラム問題は教務部（築教務部長）中心に検討され、運営委員会・部会で継続的に議論され、2013年5月には以下のような基本的考え方に基づく「最終提案」が出され、2014年度入学者からのカリキュラム変更が決定した。

カリキュラム変更に関する基本的な考え方

これまでのいわゆる中間層を中心とした生徒状況把握を通じて、11年までを基礎学力養成期間と位置づけ（10年次を全体の基礎、11年次を各コースの基礎）、11年次カリキュラムはコース別必修を軸に構成する。

具体的には10年は基本的には必修で構成し、科目数を減らし各科目に時間をかけること、11年次からは文・理・実技コースを設置し必修とコース別必修を中心にカリキュラムを構成することとした。さらにコース別必修はどのレベルの生徒にも対応し学習への意欲を継続させる工夫をする事を確認した。また、12年生については11年でのコース別必修を継続させると同時に、学力や進路・受験に応じた選択が可能な科目を設定し、午前中は全員が登校し学習習慣・生活リズムを維持することを目指した。午後の自由選択は、国公立受験への対応、さらには必修「総合」と合わせた「教科を超えた総合的視点を持つ選択授業」等の検討が課題となった。

2013年度に入り、必修「総合」を検討するための委員会が設置され検討が開始された。また、若い教員中心に、お互いの授業を見合い検討していく「自主研究会」も始まり、高校独自の研究スタイルを模索する動きも始まった。

＜文責：渡辺 京＞

(2) 国際交流のあゆみ(短期交換留学に焦点をあてて)

明星学園が初めて国際交流事業として生徒を海外に派遣したのは1988年に遡る。

旅行会社の語学研修(パッケージツアー)に参加する形態でオーストラリア・パース市に滞在した。この企画は1991年までの4年間実施された記録がある。

高校理科教諭の武者小路知行がPTA会報『道』に寄せた文章に当時の様子が垣間見られる。

> (世間で国際化が叫ばれるようになっても)本校の国際化はなかなか進展していないようにも感じていました。一方で生徒は「国際化」などという事とは関係なく、夏休みを利用した短期間のホームステイに数多く参加しているということが調査の結果分かり、…中略…学校が関与したホームステイ研修を考えたほうが良いのではないかと思い、昨年夏(1988年)に非公式の研修旅行としてオーストラリアでのホームステイが行われました。〈※1〉

25年前、明星学園は決して国際交流の先駆者ではなかったことが窺える。

1980年初頭には既に多くの私学がオセアニアやアメリカに正式な姉妹校を持っていたし、他校の校長室や応接室の壁には誇らしげに海外姉妹校提携文書が輝いていた。

海外渡航に多くの規制がかけられていた公立高校との差別化を謳い、私立高校ならではの特色として海外研修は生徒募集に活用されていた。

遅ればせながら1992年に明星学園にも転機が訪れた。加藤信夫高校長が、西オーストラリアにある州立Eastern Hills High School並びに州立Swanview High Schoolとの間に姉妹校提携を二校同時に調印した。学園と先方に斡旋業者を入れない交流プログラムを実現したのだ。パッケージツアーより安価で明星学園独自の企画をもっと自由に組めるようになった。毎年40名以上の生徒が二校に分宿し夏休みの3週間を過ごした。当時の短期留学を引率した英語科の奥西克昌は、明星学園報に「このプログラムは決して楽しいことばかりではありません。生徒たちにとっては苦しいことも多いのです。…中略…生徒たちにとって異文化との出会いは、まさに衝撃的なのです」と報告している。〈※2〉

参加費用を安くしてより多くの家庭に参加させたい。事前学習をしっかり行ない、物見遊山に終わらない、小さな親善大使を育成したい。そんな気概がいっぱいに詰まっていたことを物語る。異国の地で外国人から日本のことをあれこれ質問される。改めて自分が日本の事を知らないと悟る。単なる語学学習ではなく、外から内を冷静に見つめさせることに重点を置いた。この理念は明星学園の短期交換留学



オーストラリア短期留学



インターナショナルデー

〈※1〉 PTA会報『道』No.112(1990年3月5日)
〈※2〉 『明星学園報』No.40(1993年4月)


タイ短期留学

の原点となり、現在も引き継がれている。

姉妹校提携をしたことにより人の流れが生まれた。こちらからも出向くが、あちらかもやって来ることとなった。

多くの生徒が日本にいながらにして異文化に触れられる留学生の受け入れ事業は重要だ。1993年、オーストラリアの姉妹校から初めて留学生がやってきた。

その後現在に至るまで定期的に外国人留学生は来日するのだが、当時は勝手が分からず非常に大変な作業であった。後の国際部の前身である国際交流委員会なる小組織はあったが、数人の教員で受け入れ業務を経験してみてさまざまな問題に触れることになる。

以下は先の奥西の学園報での報告だ。〈※2〉

帰国後、彼ら（オーストラリア人）の滞在に関して疑問、批判が続出しました。「彼らは何のために日本に来たのですか」というものです。食事（和食）にはほとんど手をつけようとしない。日本語に関心を示そうともしない。すぐ自分の部屋に入ってしまい、家族と話そうともしない。この交流の根幹に関わる厳しい批判でした。

このような批判や疑問は当然教員間にも存在したし、国際交流そのものを否定する空気がその後も学園を包む。外国人留学生を受け入れる苦労は海外へ出かけて行く生徒の支援以上に大変なものだった。

苦労の甲斐あって、外国人から評価される面も多いことを紹介したい。


留学生の紹介

一年たりとも欠かさず毎年明星学園を訪ねてくるタイ人留学生一行には、「日本を見習い将来の自国や東南アジアを背負う若者を育てたい」というアルンウイタヤ学園の明確な方針がある。引率をされるアルンウイタヤ学園校長のテパラット・ピティサン（DheparatPitisan）氏は「明星学園ほど日本人の縮図であり様々な若者の本音が見える場所はない」と印象的なことを述べられていた。明星学園に居心地の良さを感じる外国人は多い。海外から来校するたくさんの外国人留学生のコメントを聞いてみても実感できる。

受け入れ事業を充実させるために組織的な協力が必要とされた。1998年明星学園高校に国際交流事業全般を取り扱う国際部という部署ができた。

「明星生が海外へ出向く」「外国人が明星学園へやって来る」経験値を上げマニュアル化してしまえば単純な繰り返しのようだが、業務全てが順風満帆というわけではなかった。

明星学園後援会会報に、国際部部長の瀬野卓志が寄せた報告には次のような記述がある。

明星学園高等学校では教務部・生徒指導部・進路指導部・入学広報部・総務部の専門部があり、国際部もその一つです。他の専門部はどの学校でも必要とされる部署で、それなくして学校は存在しない部署です。しかし国際部はそうではありません。そのような活動をする

必要はないといわれれば、いつでも廃止の憂き目に合う可能性がある部署なのです。また、国際部を専門部として認めるかどうかといえば、学内に反対意見も多くあり、現在（2006年当時）もその状態に大きな変化があるとは思えない状態です。つまり、国際部の仕事は、明星学園専門部で唯一理念的な部署、理念のみで成立している部署であり、それ故にうさんくさく見られる部署でもあるのです。〈※3〉



学園業務はどの場面であれ、教職員が一丸となって事にあたるし、事務的に仕事内容は整理して分掌が行われる。国際交流活動は日本と海外という限定的な場面が主になるため、教職員が一丸となって事にあたる実感を受けにくい。仕事量は多いのだが全体に達成感が伝わりにくいのだ。

2000年代になってからは安定した国際交流のために姉妹校も幾度となく変更がなされた。姉妹校の変更を余儀なくされる一番大きな要因は、先方の日本人生徒の受け入れ担当が転勤や定年で業務が継続できなくなるときだ。日本の企業では配慮を欠かさない、次の担当者への引き継ぎが期待できない面が大きいのだ。

二番目は以前のような提携文書を取り交わさない相互交流が主流になったことだ。

カジュアルな交流ができるようになったことは良い面でもあるが、一方で姉妹校が別の日本の学校や台湾・シンガポールの学校さえも受け入れるようなケースが出始めた。これは国際交流事業がさまざまな経済効果を生み出し、利益誘導をもたらす手段になったことが挙げられる。明星学園が初めて西オーストラリア・パース市郊外に姉妹校を持った1990年代は先方も明星もボランティアベースだった。学校の受け入れはもちろん、ホストファミリーの滞在費も無償であった。純粋に異文化理解に興味を持ち、お互いの窓口担当者は多くの時間を割いて助けあった。そこには金銭的利益は存在しなかった。

しかし、1990年代後半になると日本からの教育旅行がお金になることが衆知となり、公立・私立を問わずオセアニア（オーストラリア・ニュージーランド）の多くの学校が斡旋業者を仲介にして、受け入れに金銭を授受するようになった。国際交流はビジネスになったのである。日本を始めとする非英語圏からの英語学習者の需要を当て込み、ホストファミリーにも滞在費が業者を通じて支払われた。姉妹校といえども仲介業社を通しての交渉ごとになった。他の日本の高校と同一日程で受け入れられたり、夏休み中の交流を断られたりする事態も起きた。そのような情勢の中で明星学園は西オーストラリア州の公立高校からクイーンズランド州の私立高校へ派遣先を変えた。1999年より数年ごとにAll Saints'Anglican School, Mary Mount School, Pleasant Point School（全てクイーンズランド州にある私立学園）等、今日では記憶も薄れがちな学校を



留学生との交流

〈※3〉『明星学園後援会報』No.38（2007年6月）

転々とするように交換留学が行われた。当然参加費用は斡旋業者の意向で徐々に高騰していった。

2005年、ようやく安定した姉妹校Trinity Collegeをクイーンズランド州ブリスベン郊外に見つけ2013年現在まで良好な関係を続けている。隔年で先方からもオーストラリア人生徒が明星学園を訪れている。さまざまな変遷を辿りながら明星学園のオーストラリア短期留学は2013年度で21回目を迎えた。

2004年に新しい姉妹校が増えた。タイのプラチュアップキリカン県にあるアルンウイタヤ学園（Arunvithaya School）と姉妹校提携を結び相互交流を開始した。修学旅行コースのひとつとして1993年から多くの明星生がタイを訪れていた。その内容を異文化交流に特化して組み直し、毎年夏休みに10日間の日程でタイ短期留学が実施されるようになった。タイ国内情勢悪化のため中止の年も経験したが2013年で7回を数えた。



オーストラリア短期留学は英語学習に対応し、西欧的な物の見方や考え方を体験するのに効果的な地域だ。一方、21世紀を担う日本の若者が人生の早い段階で東南アジアを見ておくことも、異文化を実感する上でとても有効だ。今後も西欧とアジアの間でバランスの取れる人材育成のために短期留学を活用して欲しい。

1998年から2014年現在までの歴史の中で感じることは、国際交流は世界の平和と安寧が大前提あるということだ。さまざまな国際情勢や社会情勢に影響を受けるからだ。明星学園でも過去に9・11テロ、SARSに代表される新型ウィルスの流行、タイ政局悪化等により短期留学が中止となった。また、2011年に発生した東日本大震災は滞在していた長期交換留学生を全員帰国せしめた。その後遺症は2013年度現在も残り、本来明星学園に受け入れる長期留学生の上限6名に届かない。





2013年には新たな問題が浮上した。教育旅行は経済情勢にあまり左右されないと言われてきた。しかし長期にわたる景気低迷とデフレ、急激な為替の変化（特に円安）により安定した留学プログラムが難しくなった。高騰する短期留学にかかる費用も25年前の2倍から3倍に迫る。それが一つの要因となり2014年度、長年続いたオースラリア短期留学が催行中止になったことは残念である。

国際交流事業のための知的財産（ノウハウ）が他私学より備わったのは紛れもない事実だ。仮にこれを活かせないならば多くの関係者が次のように表現するだろう。

“What a waste ！ ”「もったいない、宝の持ち腐れだ」といったところか。

25年という歴史が培ったかけがえのない知的財産を創立100周年へ引き継げるよう守って行きたい。

＜文責：伊勢 誠＞

(3) 自治会活動

1）自治会

高校の自治活動は自治会を中心に行われる。自治会はここ5～6年にいくつかの大きな改革を行った。

その一つはクラブの予算についてである。以前は自治会の生徒がクラブの予算を決めてきた。しかし、問題点として、

① 約400万円の予算を10人程度の自治会役員が決める。金額が大きすぎて役員の負担が大きい。
② 前年度のクラブ予算を元に、役員の判断で前年度に対して1、2万円動かすが、そこに客観性はない。また、各クラブの要望を長期にわたり客観的に判断することができない。役員の中にクラブに入っている生徒も多く、公平性という観点から難しい。
③ 複数のクラブで、一人当たり、年度当初に支払っている自治会費（5,000円）を超えて支給されている、

などが問題点として挙げられた。改善策として、クラブ予算は学校側（教師）が組み、自治会費は行事・委員会活動のみに充てるようになった。

もう一つは、自治会役員の任期延長である。自治会役員の任期は12年生の明星祭後までとなった。そのため、自治会に10年生からいる生徒は、体育祭、明星祭を3回経験することになる。例年、明星祭などの行事は、11年生が中心となって行ない（体育祭は12年）、12年では行事運営に携わらないため、その経験を次の年に引き継ぐことが難しかった。これでは生徒にノウハウが蓄積しにくく、行事の充実・発展も困難であった。自治活動に12年生まで関わることで、経験が生き、自分たちで動かせる範囲が多くなる。このように制度を整え、多くの経験を蓄積することで、生徒の自治活動が充実したものとなってきた。

自治会は行事を含め、多くの仕事に携わるようになってきた。以前は、行事にほとんど関わることがなく、外から見ている生徒にとって、自治会が何をしている組織か分からなかった。そのため、自治会役員に立候補する生徒は少なかった。各行事の委員には行動力を持つ生徒が集まるが、これは、各行事自体が面白く、やりがいのあるものだからだと考えられる。このような生徒に自治会役員への立候補を促せるように、自治会役員が各行事の運営に携わっているということを生徒全体に見える形にする必要がある。各行事の運営を自治会役員と各委員会の連携を行うことで、自治会役員に行事運営の経験を積ませ、その経験を次に生かせる。また、自治会の魅力を高め、より意欲的で実行力のある生徒が自治会に集まり、生徒たちによる自治を推進させることができるようになった。

2）行事

学校で行事が行われる理由はいろいろあるが、最大の理由は「みんなが協力して一つのことを作りあげること」にある。仮に学校が勉強だけの場であれば、高校段階で、今は通信制高校や高等学校卒業程度認定試験（旧大検）があり、学校に行かなくても大学進学への道は開かれている。それでも、学校が存在している理由は、学校でしか出来ないことがあるからで、その一つが行事だろう。行事によりクラス集団をつくり、クラスにまとまりが生れれば、クラス、学校への所属意識も高まり、学校生活の充実へとつながって行くだろう。また社会にでれば集団で作業することがほとんどで、ある目的のために集団の中で、個人がどのような役割を担い、どのようにふるまうのか、体験的に学習することは重要である。クラブは、サッカー部であればサッカーに興味

のある人、音楽部であれば音楽が好きな人という、ある目的を持った集団である。クラスはこれらとは異なり、特定の方向性を持っていない。偶然集まった人たちからなる集団である。行事の成功に向けて協同することを通して、学習していくのである。

高校では、1学期に体育祭、2学期に明星祭、3学期に音楽祭という3つの大きな行事がある。

1年かけてこれらの行事を中心にクラスのまとまりを作っていく。



体育祭

2013年度の体育祭は例年から大きく変わった。2012年度の全校生徒からのアンケートや自治会での話合いで、体育祭に球技だけでなく運動会的要素を取り入れたいとの希望があった。今までの体育祭の問題点として、「10年生の試合数が少なく、時間を持て余してしまう」、「体育が苦手な人も含めてみんなが楽しめるものになっていない」、「クラスで一つになる機会がない」というような点があがった。



そこで、クラス全員で出来るものと、今までの球技大会とを両方併せ持った形を提案した。

1日目の午前はクラス全員で出来るもの、午後は学年ごとにクラス対抗でできるもの、2日目の午前は選抜のもの（これは従来の球技大会と同じ形）、午後は、再びクラスでできるもの、最後に縦割りの選抜リレーとした。

1日目の午前はクラス全員ができるものとして大縄、全員リレーとした。大縄は、クラスで息を合わせなければいけないもので、ウォーミングアップにもなるものを選んだ。運動が苦手な子が縄にかかっても、やり直して、3分間で一番多く飛べた回数を採用することとした。

全員リレーは、大縄同様にみんなで出来るものとして選んだ。全員リレーは名列順とし、名列を背番号としたが、理由は次のようなものである。好きなように走ると審判が順番をチェックするのが煩雑で、見ている人が今どの順番で走っているのか分からない。休みが多いクラスは、足の速い人を補充するため、有利になるというようなものである。また、Tシャツに名列番号をアイロンでつけた。



体育祭

1日目の午後は学年ごとに競技を行った。これは、例年、3学年で試合をすると10年生はすぐ負けて、暇な人が多数出ることを防ぐためである。また予選リーグはクラス全員が必ず1回試合に出るようにして、午前中の全員で行うという流れを継続させた。決勝トーナメントは代表選手が出ることとして、競技性を高めた。競技の選定は以下のように行った。10年はまだ知り合って間もないか


体育祭

ら、みんなが出来るドッチボール、11年は10年の時に体育でやったバスケットボール、12年は11年の時にやったハンドボールにした。学年ごとに運営したので、通常10年の体育祭委員は上級生の言うことを聞いているだけだが、学年を動かしていく難しさを学べたのではないかと思う。

2日目の午前は今までの体育祭と同様に3学年で競技を行った。初めは男女混合バレーとしたが、生徒のアンケートから男子サッカーの声が強く、女子バレー、男子サッカーとした。

午後の「しっぽとり」は、オリジナル競技である。これは体育祭に激しいものを持ちこみたいという狙いがあり、騎馬戦や棒倒しが候補に挙がったが、危険があるということで、新しく自分たちで競技を生み出した。いくつかの試行錯誤を重ねてルール化したが、約15人×6クラスという多人数でゲームをしたことがないという状況だったが、うまく出来たのではないかと思う。ただのしっぽとりではなく、ボールを入れることで、チームとしての作戦が必要となるように工夫した。選抜リレーは予想通り盛り上がった。最後に3学年の縦割りチームで写真を撮った。

生徒側から変えることができるという経験は、「自主自立」を促す強力な仕組みである。

明星祭

明星祭は、クラスとしてのまとまりをつくる場、クラブ・委員会・授業など日常の活動を報告する場、高校への進学を考えている中学生へ向けて魅力を発信する場、などさまざまな目的を持っている。


明星祭、中庭の巨大パネル

ここ数年、10・11年の各クラスが取り組むことになっている企画を映画制作とし、全クラスに学校からビデオカメラを貸与した。映画にした理由は次の通りである。ステージ企画でもよかったが、ステージ企画はクラスの全員参加のために、全ての企画をその時間止めなければいけなくなり、全体の運営が難しいと判断した。映画であれば、事前に完成させてしまうため、当日がフリーになり、タイムスケジュールが組みやすい。以前のクラスごとの教室を使った企画では、12クラスそれぞれの個性が出る企画を出すのが難しく、企画が重複することが多かった。一部のクラスでは、明星祭の間際になって企画を決めて、やっつけで行うことも散見された。またクラブや有志、バンドなどに参加する生徒がいて、クラス企画から抜けてしまうため、当日のクラス企画を充実したものにすることも難しい。これらの点を考えて、じっくりと準備をして取り組める映画製作とした。クラス企画を映画にすれば、明星祭の前に完成でき、当日、生徒は個々の取り組みに力を注ぐことが可能になる。映画は、脚本、音楽、演技、演出、衣装、編集など多岐にわたる役割分担があり、総合芸術としてクラス全員で取り組むことができる。クラスの成員がお互いの長所を知り、適切な役割分担をすることで、質の高い映画の完成を目指した。ロングホームルーム（LHR）の年間計画を整備し、じっくりと時間をかけてクラス全員を巻き込む形で映画を作ることにした。

中学生が明星祭に参加するようになって数年になる。学年ごとの企画、卒業研究、ステージの有志企画、バンドなどのかたちで参加している。また、中学生にお化け屋敷のスタッフや、当日のボランティアを募り運営を手伝ってもらった。中庭の巨大パネル製作では夏休みに中学生が来て手伝う場面もあった。中学の自治会役員が明星祭委員会に参加し、中学とのパイプ役を担うなどの動きができてきた。中学の自治会で活躍した生徒は、高校に進学後、自治会役員に立候補するなど、自治活動に中・高通じて参加する流れができつつある。

明星祭にOBが集まる場を作りたいと考え、今年度はグラウンドにテントを用意した。OB、退職した教員などの関係者が集まるホームカミングデイとしての機能を持った場にしたいと考えている。また、明星祭を通じて、地域とともにある学校と感じられる場にすることができればいいと考えている。「夏の学校」や「秋の学校」の開催で、学校が地域に開かれた取り組みが行われている。自治会では、保健委員会とクラブで土曜日に地域の清掃に取り組むようになった。このように少しずつ地域貢献しながら、交流を作っていきたい。外部模擬店は三鷹台商店街を始め、近隣のお店に来て頂くことができた。地域の人たちも参加して明星祭が開かれれば、明星学園の地域での役割も広がっていくだろう。

音楽祭



音楽祭は、体育祭、明星祭のクラスでの活動を通じてできた関係を生かす集大成の行事である。2部構成になっていて、1部は、音楽選択者の合唱、クラスの課題曲・自由曲の合唱、2部は9年生の学年合唱、音楽部、有志等の発表が行われている。2部の内容は年度によって少しずつ変化している。自由曲は必ずしも合唱曲ではなく、選曲にクラスの個性がでる。11月ぐらいから練習が始まって1月末の発表まで、徐々に雰囲気が高まってくる。歌を歌うというシンプルな行動の中に、選曲や衣装などの舞台演出を含めたクラスの個性をどう盛り込めるかが見どころであり、1年間の成果を発揮できる場となっている。

＜文責：薬師 大五郎＞

6　高等学校「安全の日」の取り組み

1986年12月、高校で起きた在校生の死亡事故への反省から、再びこのような事故を起こさない「決意を新たにする日」として、毎年12月1日を「安全の日」としてきた。

この事故を機に学園では「全園安全委員会」を設置し、年2回、学園全体の施設設備が安全かどうか、教職員と保護者が一緒に点検すると同時に、「安全の日」には生徒に向けて安全な日常生活への注意を喚起する取り組みを行っている。事故を知る職員も少なくなってくるなかで、事故の教訓を風化させずしっかり伝える努力が必要となっている。

以下の文章は2013年の「安全の日」に、生徒に向けて放送されたものである。(2013年度は1日が日曜日だったため12月2日に放送)

明星学園高校 「安全の日」の放送

2013年12月2日

明星学園高校　校長　河住貴夫

みなさんおはようございます、校長の河住です。

今日は明星学園の「安全の日」です。「安全の日」にあたり、私からみなさんにぜひ伝えたいことがあります。

27年前の1986年、当時は校舎が整備されておらず不備があり、安全対策もとられていなかった為に、この年の12月4日、当時の12年生が校舎の屋上から転落し、命を失うという、痛ましい事故がありました。学校として責任を認め、謹んで哀悼の言葉を申し上げます。

このような事故を二度と再び起してはならないとの思いから、現状のように柵の補強を行い、屋上への出入りを遮断するなど、施設の安全対策を強化してきました。さらに、明星学園では事故の反省を忘れず、生徒が安全な生活を送れるよう決意を新たにする日として、毎年12月に「安全の日」をもうけてきました。

「安全の日」だけではなく、事故後、「全園安全委員会」を設置し、日常的に校内の危険な場所を保護者の方々と一緒に点検し、改善するための取り組みも行ってきました。先日も、何人かの先生方や保護者の方で、校舎内やグラウンド等、危険なところがないか調べました。

こうした努力は今後も続けていきますが、学校が施設・設備の安全に注意を払うだけでは事故は防げません。もう一度、皆さんも自分たちの生活空間を見直し、危険な箇所がないか、注意を払ってみてください。そして、皆さんの中で、校内で危険なところに気が付いたら、是非私たち教師に連絡してください。

また、通学途中を含めた日常の生活を振り返り、毎日の行いにも注意を払いながら、安心で安全な学校生活が送れるよう、私たち教職員と協力していきましょう。

今学期も残すところあとわずかとなりました。1週間後には定期試験も控えています。今は心を集中し今学期のまとめにつとめてください。特に12年生は、高校生活最後の授業になっていきます。ぜひ、1日1日を大切に過ごしてください。

以上、「安全の日」のお話をこれで終わります。

＜文責：渡辺 京＞

7　学園の危機管理体制

2011年（平成13）3月11日、東日本大地震が発生した。学校でも建物が激しく揺れ、今までに経験したことのない恐怖を感じた。当日、学内には大勢の児童・生徒が残っており、帰宅途中の子どもたちもいた。携帯電話は不通となり、交通機関はすべてストップした。小学校では保護者に児童の引き取りを要請し、中･高等学校の生徒は自力で帰るか、学校に泊まるかを選択させた。小学校では15名、中学校では30名、高等学校では50名余りの児童・生徒が学校に泊まり、一夜を過ごした。備蓄米と圧縮毛布が初めて役に立った。翌日は交通機関も復旧し、それぞれ帰宅した。

この3.11大震災の経験は学園全体の防災意識を変え、物心両面で災害に対する備えの重要性を再認識することとなった。学園では震災後、体育館・中学校校舎・高校校舎の耐震工事を実施した。また「備蓄品の補充」、「学校災害対策本部避難所運営マニュアル作成」「緊急連絡方法をウェブ通信にする」などの対応を急いだ。以下、本学園の危機管理について述べる。

(1)防災

避難所

2001年（平成13）、明星学園は三鷹市と「避難所等施設利用に関する協定書」を取り交わし、地域防災避難所に指定された。これにより大地震があったときは、三鷹市から救援物資が届けられ、人員が配置されるなど公的支援を受けられることになった。大地震の発生時には体育館を開放し、近隣の人たちの避難所にする。児童・生徒は校舎内で避難生活をすることとなる。また日常的に災害に備えて、三鷹市の災害対策用の資材及び必需品を備蓄する倉庫を校内に置くこととなった。さらに地域防災無線設備を校舎内に置き、いつでも互いに連絡し合うことが可能となった。

防災備蓄

明星学園では早くから災害用の水、カンパン、備蓄米などの食糧に加え、圧縮毛布を備蓄し、児童･生徒全員が避難生活をおくることができるように態勢を整えてきた。2011年3月11日の東日本大地震後の防災対策として、東京都からすべての学校に対して防災備蓄に対する助成金提供があった。さらに明星ではPTAからの資金援助があり、新たに倉庫をつくって、防災備蓄の充実を図った。これによって全児童・生徒が支援物資がなくとも3日間の避難所生活ができる蓄えとなった。

さらに小・中学校では非常時に児童一人一人に配る非常持ち出し袋も備えた。その中にはライト、シート、非常食などが入っている。以下は現在の防災備品の一覧である。

◆ＰＴＡの寄付により購入できたもの

防災倉庫	① 防災倉庫（小・中で2棟 高校は倉庫改修）
災害時の緊急連絡に関する備品	② ソーラー発電・蓄電器（小・中・高各1台）
	③ 長時間充電パソコン（小・中1台・高校1台）
災害時の放送に関する備品	④ 電池式屋外用アンプスピーカー（小・中1台）
	⑤ ハンドフリー拡声器（小・中・高各1台）

◆東京都の補助により購入できたもの

小学校	中学校	高等学校
①アルファー米 400人×3日=1200食 ②缶入りパン 400人×3日=1200食 ③防災ラーメン 400人×3日=1200食 ④缶詰フルーツ 480缶 ⑤アレルギー用3種 50人×3日×3種=450食 ⑥寝袋 425個 ⑦マット 1畳×25枚 ⑧折りたたみ用畳 1780㎜×880㎜を160枚 ⑨使い捨てカイロ 1200個 ⑩チャッカマン 5個 ⑪ストーブ 3個 ⑫固形燃料 45個 ⑬手回し式ラジオ 5個 ⑭ソーラー充電器 10個 ⑮LED充電ライト 10個 ⑯乾電池 単三600個 単一600個 ⑰非常持ち出し袋 （袋・ライト・シート・ARKⅢ 400個）	①アルファー米 400人×3日=1200食 ②缶入りパン 400人×3日=1200食 ③防災ラーメン 400人×3日=1200食 ④缶詰フルーツ 480缶 ⑤アレルギー用3種 50人×3日×3種=450食 ⑥寝袋 425個 ⑦マット 1畳×25枚 ⑧折りたたみ用畳 1780㎜×880㎜を160枚 ⑨使い捨てカイロ 1200個 ⑩チャッカマン 5個 ⑪ストーブ 3個 ⑫固形燃料 45個 ⑬手回し式ラジオ 5個 ⑭ソーラー充電器 10個 ⑮LED充電ライト 10個 ⑯乾電池 単三600個 単一600個 ⑰非常持ち出し袋 （袋・ライト・シート・ARKⅢ 400個）	①保存水 500㎖ 24×67=1608本 ②アルファー米 800人×2日=1600食 ③缶入りパン 800人×2日=1600食 ④防災ラーメン 800人×2日=1600食 ⑤缶詰フルーツ 960缶 ⑥アレルギー用3種 80人×3日×3種=900食 ⑦簡易トイレ 段ボール組み立て19 簡易トイレ4800個 ⑧寝袋 800個 ⑨折りたたみ用畳 1780㎜×880㎜を320枚 ⑩使い捨てカイロ 2400個 ⑪チャッカマン 10個 ⑫ストーブ 3個 ⑬固形燃料 90個 ⑭手回し式ラジオ 10個 ⑮ソーラー充電器 20個 ⑯LED充電ライト 20個 ⑰大型ケトル 16個 ⑱簡易食器 800個 ⑲乾電池 単三1200個 単一1200個 ⑳ARKⅢ 720個

小学校では保護者に対して防災グッズ携行のお知らせを配布した。これは登下校時に被災することに備えての措置で、子ども一人一人が防災グッズをかばんに入れるよう促した内容である。小さな巾着袋に入れるものとして、非常食、10円玉（公衆電話用）、常備薬、ライトなどをお願いした。

防災訓練

小・中学校では防災頭巾を一人一人椅子に備え付ける形で所持することとした。普段から使い方に慣れるよう、避難訓練では毎回、防災頭巾を着用している。

防災訓練は年3回、小・中（井の頭キャンパス）と高（牟礼キャンパス）がそれぞれ学期ごとに行っているが、3年ごとに小・中・高合同での避難訓練も行う。その際は地域の人にも参加していただき、炊き出しも行っている。小学校では引き取り訓練を実施し、中学校では集団下校などを実施している。

ウェブでの緊急連絡

3.11東日本大震災の発生直後、携帯電話が通じなくなり、保護者と連絡が取れないという事態を体験した。中学・高校ではすでに電話連絡網からウェブ通信への切り替えを進めていたが、3.11以降は小学校を含めて、全学園的に緊急連絡をウェブ通信で行う体制を整えた。大地震発生時の連絡のみならず、不審者情報、学校からのお知らせ等、一斉配信のできるウェブ通信を使うようになった。

(2) 防犯

名札

2001年、大阪池田小学校で起きた殺傷事件は、学校が必ずしも安全な場所ではないことを告げることとなった。事件後、明星学園では素早く防犯マニュアルを作成し対応した。小・中学校の正門前に警備員室を設け、常駐する警備員を配置した。それまでは、犬の散歩をしている人が通りぬけるほどの長閑さであったが、校門での出入りに注意を払い、教職員、保護者、参観者、取引業者などすべての来校者に名札着用を義務づけ、不審者の発見時にはすばやく連絡をとりあうことができるようにした。

また地域の不審者情報が入った場合、小学校では対応を4段階とし、情報受信のつどレベルを判断して対応策を決めることとした。

レベル1　情報を教師の範囲にとめおく
レベル2　子どもに注意を促す（該当する親への連絡）
レベル3　集団下校
レベル4　保護者引き取り

地域との連携

防犯は地域の人との協力が欠かせない。校長･教頭･PTAの代表は青少年対策委員会（通称「青少対」）に積極的に参加し、地域の人とともに防犯に努めている。

青少対では地域パトロールを行っており、危険な個所を記入した地域安全マップ作成・配布などの活動も行っている。また緊急時に子どもたちが駆け込むことができる「子ども避難所」の普及にも努めている。明星学園も「子ども避難所」となっている。

2001年からは近隣の公立学校（三鷹の森学園第5小学校・連省学園三鷹市立第4小学校・三鷹の森学園第3中学校）と不審者情報を共有している。また三鷹市は犯罪情報・不審者情報などを登録者の携帯電話にメールで配信しており、学園関係者もこれに登録することで情報を得やすくなった。同じころ、三鷹市では市内に通うすべての小・中学生に無償で防犯ベルを配布することとした。初年度は全学年の児童に、翌年からは新入生に配布しており、現在も続いている。

(3) 安全教室

小学校における安全教室は毎年恒例化してきている。

＊1年生　交通安全教室
　三鷹警察による道路横断指導、道路を歩くときの注意
　保護者の協力によって実習

＊2年生　安全教室
　京王電鉄の車掌による駅のホーム、電車の中でのふるまい方

＊3年生　交通安全教室
　三鷹警察による「自転車教室」

＊1・4年生　NPO法人「青い空」（CAP）によるワークショップ
　暴力・いじめから身を守る



(4) 放射能・放射線対策

東日本大震災で引き起こされた原子力発電所の事故は、大量の放射性物質を広範囲に放出した。遠く離れた東京でも事故の影響を受け、放射線量が以前より高くなった。放射線の人体への影響は計り知れない。これまでにわかっていることは、大人より成長期である子どもの方が放射線による体の異変が起きやすいということである。三鷹市では順次学校をまわり、各校4ヶ所の定点で放射線量を計測し、国際的基準である0.12マイクロシーベルトより高い線量であったところは洗い流すように各学校に指示があった。明星学園ではすべての計測地点で、公的な測定では0.09マイクロシーベルト以下であった。

しかし、独自に放射線測定器を購入し、放射性物質が蓄積しやすい個所は除去したり、洗い流したりした。保護者有志の協力を得て、小・中学校65か所で測定し、以下のような対策をとることとした。

1. 教室前の畑……土を入れ替えた。
2. 事務室前花壇及び体育館の雨どい下……雨どい工事をし、排水溝に雨水が流れるようにした。
3. 中庭、1・2年教室前、グラウンド……表土を削り、土を入れ換えた。

千葉県の最南端・千倉での海の行事（小学校夏季行事）は当面中止とし、長野県黒姫での4・5・6年生合同の夏季行事に変更した。小・中・高とも宿泊を伴う行事については、現地の余震対策や避難にかかわる安全を確かめたうえでないと実施しないという措置をとった。小学校では日帰りの遠足などにおいても同様に安全を確かめたうえで実施するものとした。

＜文責：一瀬 清＞

8 保護者・地域・卒業生との協力

2013年4月、約40年ぶりに、中学校の入学式で「明星学園行進歌」が唱われた。6・6制以後、黒川校長・渡辺校長の後を引き継ぎ、昨年度より校長になった河住の提案で「中学校の式典で明星学園行進歌を唱う」こととなった。

子どもたちはリハーサルの時、はじめて耳にした行進歌に戸惑いながらも、なんとか唱えるようになろうと取り組んだ。子どもたちに対し河住校長はこんな話をした。「思い描いてほしい。今から90年前、この場所でみんなと同じように勉強したり遊んだり、泣いたり笑ったりしていた先輩たちの姿を。この歌は、90年の時を超え、みんなと同じように明星学園で学んでいった2万人ちかい先輩たちと今の君たちを繋いでくれる、そんな力を持った歌なんだ」。

入学式本番では在校生が立派に歌い上げ、保護者席、来賓席からも歌声が聞こえてきた。

(1) 小・中・高がひとつになって取り組むPTA活動

90年の歴史において、明星学園は何度となく困難な時期をむかえた。しかしいずれの時も、保護者、卒業生、学園関係者の方々のお力を得て乗り越えてきた。とりわけ創立期の「母の会」を出発点とするPTAの活動は大きな支えとなった。明星学園のPTAは、小学校・中学校・高校が一つになって活動する大所帯の組織で、このように12年間を貫くPTAの組織は、東京都内でもあまり例を見ない。

専門部制から協力員制への移行

6・6制に移行する2006年度までは、代議員が学年学級委員会の他、文化部・厚生通安部・公費助成部・広報部などの専門部に別れる専門部制をとり、学園の教育活動の理解や支援、会員間の相互理解と交流の機会として、学園を側面から支える活動に精力的に取り組んできた。

また、バザー委員会によるバザー事業では、長年にわたり学園への財政的援助とともに、子どもたち・保護者・教員・卒業生が交流する場として、非常に大きな役割を担っている。近年では、バザー収益金やPTA剰余金を防災対策に使用し、防災備品の整備を進めることができた。

現在では、「より多くの人が、出来る時に出来うる協力を」ということを柱にして、学年学級委員会だけを残し、交通安全協力員・安全点検協力員・公費助成協力員・広報協力員など、年間を通したものではなく期間を限定した活動に対して協力員をつのる協力員制に移行している。学年学級委員会は、長年にわたり学校とクラス・学年・各部をつなぐ役割を担うとともに、近年では「明星の学び」を保護者の方々と一緒に理解し合う場として、多くの機会をつくっている。

活発なサークル活動

子どもたちが明星の学びで「個性尊重・自主自立・自由平等」の獲得を目指すように、PTA活動もその根底に「個性尊重・自主自立・自由平等」という理念が息づいている。その一つにPTAのサークル活動があげられる。近年、保護者によるサークル活動が盛んに行われるようになり、現在、PTA和太鼓サークル・合唱サークル・サンバサークル・社会科サークルなど、子どもたちに負けない活動を行ってきている。2012年度から、こういったPTAサークル活動を知ってもらう意味も込めて、毎年3月にはすべてのPTAサークルが一同に会して発表する「PTAサークル発表会」を開催している。



PTAバザーのにぎわい



グラウンドにも模擬店

(2)子どもたちの教育活動を支援するボランティア活動

「出来る時に出来うる協力を」というPTA活動の協力員制に呼応するように、学校からもさまざまな形で学校の教育活動を支援するボランティアを募集し、多くの方々の協力を得ている。

災害時に子どもたちの避難生活と近隣の方々の避難所生活を両方担うことになる明星学園にあって、学校・地域・市とともに避難所運営を手伝う「避難所運営ボランティア」。

短期・長期の留学生の受け入れも多くの家庭の協力によって成り立っている。

また、6・6制を機に本格的に教科外活動の取り組みとして取り入れた8年生の「職場体験」では、保護者・卒業生・学園関係者の協力を得て、60近い受入職場を確保しながら毎年実施することが出来ている。

20年近く続けている9年生「卒業研究論文」では、「卒業研究サポートボランティア」を募集し、様々な分野での知識や技術を持っている保護者に、子どもたちの卒業論文への取り組みにアドバイスをもらっている。毎年冬になると、8年生「職場体験報告会」・9年生「卒業論文発表会」を開催しているが、年々素晴らしい発表会になってきている。近年、当該学年だけでなく、他学年や小学校の保護者が見に来るようになったが、卒業生や学園関係者に、今の子どもたちを知ってもらうよい機会になっている。

また、高校では昨年度から、小学生の保護者を中心に「進路指導ボランティア」を募集し、10年生・11年生の進路相談に協力してもらっている。看護師・キャビンアテンダント・弁護士・新聞記者・サッカーコーチなど、さまざまな職種の協力者が子どもたちに話をして、仕事の内容だけでなく、自身がどのように高校時代を過ごしてきたか、また、子どもたちにどのように高校生活を過ごしてほしいかといったアドバイスをしてもらった。ある小学校の保護者で、卒業生でもある方が、「明星学園で高校生活を送ったことが、現在の職業に生かされていることはありますか」という質問に対して、「どの職業でもそうだと思いますが、お客様の価値観は多様です。さまざまな価値観をもった方々と、どう接するかが社会のなかでは重要になります。個性豊かで、さまざまな価値観をもった仲間たちと過ごせた高校生活が、今の職業にとても生かされています」と語ったことが、とても印象的であった。

また、ボランティアだけでなく、自発的な有志の会で学園をサポートしている保護者もいる。普段なかなか学校に関わる機会の少ない父親たちが、お互いの親交を深めると同時に、学園に協力できることを協力していくといった趣旨で「おやじ会」を立ち上げた。「おやじ会」は、日常生徒や教員が手の届かないような場所を清掃したり、ゴーヤのカーテンをつくったりとさまざまな場面で活躍している。

明星会には、職場体験の受入職場としての協力や卒業論文発表会の卒業生への広報など、さまざまな場面で現在の学校と卒業生をつなぐ大きな役割を担ってもらっている。今後、ホームカミングデイなどを充実させ、卒業生同士の旧交を温めると同時に、今の学校を知ってもらう機会を設けていきたい。

また、さまざまな分野で活躍しているたくさんの卒業生には、ぜひ現在の子どもたちの教育活動、職場体験や卒業論文、進路相談などのボランティアとして関わっていただき、学校と卒業生をつなぐネットワークをつくっていければと考えている。

＜文責：河住 貴夫＞

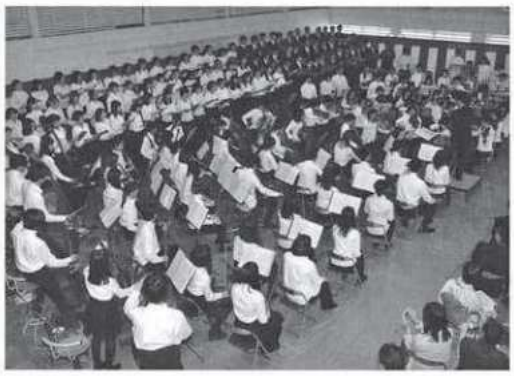
9　創立90周年

(1)創立90周年記念式典・祝賀会

2014年5月11日（日）、明星学園高等学校（牟礼キャンパス）において、創立90周年記念式典・祝賀会を行い、三鷹市長をはじめ三鷹市の行政、議会の代表の方々、三鷹市選出の衆議院議員、都議会議員の方々、近隣の小学校、中学校、高等学校や幼稚園、保育園、地域の代表の方々をはじめ、学園関係者、卒業生の代表を含む320名に出席いただいた。

式典は、高等学校第一体育館で午前10時に開式。司会は堀内雅人中学校副校長と八鍬音羽氏(59回生)が務めた。参加者全員で明星学園行進歌を斉唱し、出口一彦理事長が式辞を述べたあと、4人の来賓の方々に祝辞をいただいた。





三鷹市長・清原慶子氏からは、明星学園が地域活動や地域防災に積極的に協力していることや、児童生徒、卒業生の活躍の紹介などを交え、明星学園の教育の更なる発展を期待していること。東京私立初等学校協会会長・矢崎昭盛氏からは私立小学校と明星学園がこれまで果たしてきた役割と今後への更なる期待を。東京私立中学高等学校協会会長・近藤彰郎氏からは、歴史的に私立学校が、掲げる教育理念を不屈の精神で守ってきたこと、これからも、日本の発展には私立学校が役割を果たさなければいけないとのこと。成城学園の学園長･油井雄二氏からは、成城小学校が大正自由教育運動の拠点として立ち上がり、そこを母体に明星学園が生まれ、成城の教育理念が引き継がれていること、そして今後とも兄弟校としてともに発展し人材育成に貢献したいとのこと。以上のように各氏からお話をいただいた。

祝電披露のあと、アンサンブル部、音楽部の卒業生・ＰＴＡを含む約200名による「アイーダ：凱旋行進曲」が祝賀演奏され、その余韻が残るなかで閉式となった。

祝賀会は、会場を高等学校第三体育館に移して開会。司会は八鍬音羽氏（59回生）。全国大会への出場を控えた和太鼓部による「天と地」の演奏のあと、玉川学園高学年教育部長・藤樫大二郎氏からは明星が標榜した教育理念の先見性について、和光学園理事長・奥平康照氏からは明星学園の授業に関する賛辞をいただいた。仁科雪子ＰＴＡ会長のご発声で乾杯。東京都議会議員都議会議長・吉野利明氏、東京都議会議員・中村洋氏、衆議院議員・伊藤達也氏から祝辞をいただいた。ヴァイオリニストの増田太郎氏（54回生）の演奏と歌、文化功労者（2008年表彰）の霜田光一氏（東京大学名誉教授・物理学者/6回生）と牧阿佐美氏（バレリーナ/20回生）の紹介、玉川大学教授でオペラ歌手の藤澤眞理氏（46回生）の歌などで会を盛り上げていただいた。会の最後に、平田和孝小学校長が来賓の方々へ謝辞を述べ、閉会した。

＜文責：赤井 創＞

(2) 記念式典 理事長式辞　出口一彦



明星学園は、お蔭さまでこの5月15日、創立90周年の大事な節目を迎えることになります。来し方90年を振り返り、やがて参ります100周年に向けて決意を新たにするため、ここに記念式典を挙行いたしましたところ、三鷹市長の清原慶子様、東京私立初等学校協会長、矢崎昭盛様、東京私立中学・高等学校協会長、近藤彰郎様、成城学園の学園長、油井雄二様をはじめ、ご多忙の中、多数のご来賓の方々にご臨席いただき、盛大に催すことができまして、先ずは心より、御礼申し上げます。

また本日は、この式典の後、午後からホームカミングデイを催し、多くの卒業生と、これまで、教壇に立たれておられた先生方もご一緒に、共にお祝いし、喜びあいたいと考えております。

さて、明星学園が創立されました90年前の大正13年、1924年という年は、第一次世界大戦の後、我が国の経済社会が、一時の活況を呈し、大正デモクラシーの息吹の中、新たな市民層、中産階級が形成された時期といわれています。このような社会背景のもと、明治以降整備されたとはいえ、官制の画一的な児童教育に飽き足らない若き教育者たちが、ドルトン・プラン等欧米の新教育運動に呼応して、我が国の歴史と、国情に即した教育理念を掲げ、自ら学校を興し、それに賛同していただける支持者、保護者を集め、実践を高めた時期でもありました。当時その頂点に立っておられたのが、成城小学校の澤柳政太郎先生でありました。明星学園の建学の同人、赤井米吉、照井猪一郎、照井げん、山本徳行の4人は、まさしく成城小学校で、澤柳先生から直接の薫陶をいただいた後、独立させていただいた生い立ちがございます。本日ご来場いただいています、玉川学園様、和光学園様も同じような経緯を経て建学されておりまして、大正自由教育研究の第一人者であられる、中野光先生は玉川、和光、明星の3校を以て成城学園を生みの親とする「だんご三きょうだい」にたとえておられます。

そして先ほどご斉唱いただきました明星学園行進歌は、学園の保護者でもありました北原白秋先生の作詞になるものですが、その中で謳われている「井の頭の池は近く、遥かに富士山を仰ぎ見る」この三鷹の草深き大地に、4人の教師は新しい教育の開拓者として自らの学園の建設を期し、その名を明星学園と定めたのであります。90年前、大正13年5月15日の開校式の当日は雨でした。ここに照井先生の記録があります。「あいにくの雨を半葺きの屋根はしのぎかねて、式壇はぬれるにまかされた。参列の子どもたちの、親たちの、来賓の頭から頬をつたって、雫は床をぬらした。でもみんなの顔は輝きに溢れていた。」このくだりは、何度読んでも感動を新たにします。敷地は、緑に囲まれた1,000坪の麦畑、校舎といってもそれは109坪のほんのバラック普請、集まった児童は1年生から3年生までの合わせて男女21人、という小さな学園ではありましたが、澤柳先生をはじめ各界の有力者の期待と祝福を受けて船出いたしました。

そしてその後の世界大恐慌から、アジア・太平洋戦争という苦難の時期を乗り越えて、戦後を迎えることになります。学園の規模も小学校に加え、中学校、高等学校まで進展し、現在は、二つのキャンパスに教職員、百数十名、生徒数、千三百余名、卒業生は一万八千人を数えるに至りました。

このたびも、学園の歴史、『明星の年輪―明星学園90年のあゆみ』を取りまとめておりますが、この90年の歴史を改めて振り返ってみますと、決して、理想を追い続けた甘美なみちのりばかりではありません。輝かしい創立の理想を受けてのその後の後継者のたどった道は、長く厳しく苦難につぐ、苦難の連続でもありました。しかしその中で、多くの保護者、卒業生、加えて地域の方々の厚いご支持をいただき、今日を迎えることができましたのは、何といっても創立同人の打ちたてた建学の理念であります「個性尊重」「自主自立」「自由平等」の三つの柱であり、教職員のこれまでの真摯な実践でもありました。戦後の文教政策の基本として制定された教育基本法の前文にこの三つの精神が謳われていることはまた学園の誇りとするところでもあります。開校披露式での赤井先生の式辞を読み返してみますと、「理想」という言葉が何度も出てまいります。そしてそれは我が国社会の必要とする人物を養成しようとする一教育機関であり、経営においても、教育においても、我儘勝手をするところではなく、名は私立学校ではあっても、いわば「社会立」の学校であると定義して、教育者としての責任と覚悟を明らかにしております。

このような建学時の理想が、この90年の歴史の根底を支えて今日を迎えておりますが、創立100周年を10年後に控えた今、学園も時代の大きな転換期に遭遇していると申せましょう。高度成長が終焉して、先の見えない経済社会の停滞のなか、少子高齢化、福祉、格差等数々の難問を抱えて、いわばある種の閉塞状態が覆っていると申しても過言ではありません。教育についても価値観の多様化、児童生徒の生活環境、保護者の意識も大きく変わってきています。このような状況の中で教育の在り方についての議論については尽きないものがあります。その中で明星学園が、今後とも、新たな生徒、保護者、さらに地域の方々に引き続き信頼と選択をいただくためには、建学の理念とその理想を、今の時代にいかように生かしていくか、今の時代の学園に対する期待と願望をいかに誠実に受け止め、お応えしていくかに、かかっていると考えます。明星学園は、小学校から高等学校まで、多様な個性、才能を持った児童、生徒が、それぞれの段階で入学してまいります。成長過程も生活環境も違う子どもたちが、多様な「個性」を互いにぶつけ合い、切磋琢磨して、「自由」な校風のなか、明るく伸びやかに育っております。これは皆様が高く評価して下さるところであり、学園の誇りとするところであります。そしてこれから、より充実させていかなければならないのは、そのような子どもたちが、高等学校を卒業して次のステップ、上級学校に進み、いずれは社会人として活躍するための「力」をしっかりと身につけさせていくことだとおもいます。そのための早い段階からの基礎学力の徹底した習得のうえに、どのような進路、進学を目指そうとも、それに対応した「力」、外からの評価をも、しっかり受けられる「力」を身につけさせていく。これは学園の掲げる大事な理念のひとつ「自主自立」を一人一人に徹底し、確実にすることであります。これを今後の10年の大きな課題にしてまいりたいと考えます。これが学園を応援して下さる、期待と信頼を寄せて下さる皆さまに対するお約束としたいと考えます。



本日から次の100周年に向かって第一歩を踏み出します。建学の同人の一人に加えられる上田八一郎先生は、私ども古い卒業生に「クールブレーンとウォームハート」という言葉を教えてくださいました。「冷静な頭脳に、温かい心」。換言するならば、「合

理的な精神と、思いやり」でしょうか。学園を卒業して上級学校に進み、その先社会に飛び込んで、他の人のお役に立ち、それを通じて個人としても豊かな生活を営んでいく、その原点はこの言葉に集約されていることを実感いたします。

幸い明星学園は、豊かな自然と、温かい地域の方々に囲まれています。加えて小学校・中学校・高等学校に特化した「教育」の、90年にわたる蓄積がございます。いま、ここに学園関係者全員が、心を一つにして、先に進むならば、次の輝かしい100周年へと自ずから道は開けていくものと考えます。

皆様の変わらざるご支援とご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げまして、創立90周年記念式典の式辞といたします。

(3) 創立90周年記念ホームカミングデイ

2014年5月11日、90周年式典と並行して、初めての「ホームカミングデイ」が行われた。90周年を迎える明星学園の歴史を振り返るとき、さまざまな面で卒業生に支えられてきていることに気づかされる。一方で、一旦卒業すると敷居が高くなってしまって、なかなか母校に足を運ぶ機会もないという声も聞こえてくる。

もう一度、卒業生たちに母校に戻ってきてもらおう、自分たちが明星で過ごした時代、風景を思い出してもらおう、そして今の明星を知ってもらいたい、そんな思いからホームカミングデイが企画された。

当日は11時から受付を開始。高校会議室では現役生徒のクラブ活動、各行事での様子をパネルを用いて展示。



また、学園資料整備委員会により、学園の歴史がわかりやすく展示された。テーブルの上には歴代の高校卒業アルバムがずらっと置かれ、卒業生たちはそれをながめながら昔話に大いに盛り上がっていた。







1階の教室では美術・工作・木工・工芸の作品が並べられた。1年生から12年生までの実践の流れと同時に、子どもたちの成長の様子が伝わる展示だった。





13時からは高校第一体育館で、和太鼓部による祝賀演奏「絆」を皮切りに全体会を開始。河住貴夫中・高校長の挨拶の後、小・中・高それぞれの自治会の生徒が明星の現在を、スライドを使って紹介。特に小学生のはきはきと原稿を読む姿が印象的だった。







全体会の後、第三体育館で女子バスケット部による紅白戦が行われた。女子バスケ部は今年も東京都代表としてインターハイに出場することが決まっている。この日は中学校女子バスケ部のメンバーもユニフォームを着て、会場整理のお手伝い。紅白戦の後はあこがれの高校生と練習をさせてもらい大興奮だった。



中学校弓道部は弓道場での範射会。今年の中学生は3名が来年度の国体に向けたジュニア強化選手に選ばれている。また、高校弓道部は一昨年・昨年に続き今年も国体出場選手を輩出した。



式典で「アイーダ」を演奏してくれたアンサンブルクラブは、歓談場所となっている食堂・ラウンジで小編成での演奏をきかせてくれた。アンサンブル部もまた昨年度は東京都代表として全国コンクールで活躍した。そんなクラブの活動実績が発表されるたびに会場から大きな拍手がわき起こった。





数年前から中学校では、9年生全員が「卒業論文」に取り組み、「卒業研究発表会」として発表している。この日は代表の3人が
「どうすれば僕は飛べるのか」
「日本の外交戦略への地政学の活用について」
「ロボットに心は存在するのか」
の発表を行った。

卒業生からは「今の中学生はすごいことをやっているねえ！ 自分たちの頃は何にも考えていなかったよ！」そんな声が聞こえてきた。



続いて、音楽部による合唱。音楽部のOB・OGの結束力には目を見張るものがある。この日も式典では現役・卒業生・ＰＴＡサークルあわせ総勢100名を超える迫力で「アイーダ」を合唱してくれたが、ホームカミングデイのイベントではアカペラで美しい歌声を響かせてくれた。



小学校の「日本の芸能クラブ」も大活躍。基本に忠実に、日頃の成果を見せてくれた。「日本の芸能クラブ」は、毎年3月に行われている「中・高和太鼓部定期演奏会」でも今年特別出演し、大きな拍手をもらった。なによりも先輩たちへのあこがれから和太鼓を始め、全国大会を目指していく流れを実感できる今日のプログラムであった。



中庭には大きなテントが立てられ、卒業生の輪の中に退職された懐かしい先生のお顔も見受けられた。この日にあわせて同窓会を企画された学年もいくつもあったようだ。食堂では11回生の皆さんが元気なお顔で集まっていらっしゃった。



さらに、目立っていたのが小さなお子さんを抱えたり、お腹の大きな卒業生。子育てで忙しく、なかなか外には出られない様子。卒業以来初めてやってきたという卒業生もたくさんいらっしゃったようだ。「うちの子、明星に入れます！」、何とも心強いことばもいただいた。





そんな出会いの場所を、おいしい食事でいろどってくれていたのが食堂の皆さんと「おやじ会」の方々だった。この場を借りて感謝申し上げたい。



中庭テントの脇には4つのブースが設置された。「入学広報部」「国際交流部」「明星学園学童クラブ“すずかけの木”」「明星会」。

今回のホームカミングデイの大きな目的の一つに卒業生の方々に明星学園の現在を知ってもらい、広く明星の魅力を伝えてほしいということがあった。今回多くの卒業生に小・中・高それぞれのパンフレットを手にとってもらうことができた。

また、今年度より待望の「明星学園学童クラブ」が誕生した。両親が仕事をお持ちのご家庭にとっては心強い味方になってくれる存在だ。今回ブースを出すことで、学童クラブの存在を多くの方に知っていただくことができた。また、会を支えてくれるスタッフの募集についての問い合わせも何件もきているようだ。今後のますますの活動の発展を期待したい。



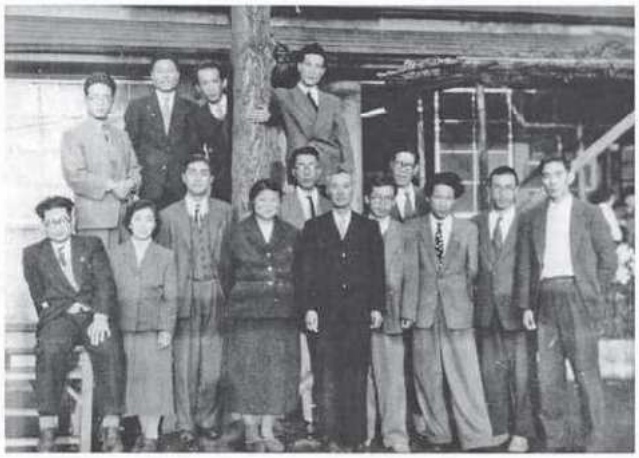
時間はあっという間に過ぎていく。15時半になり、再び第一体育館に全員集まってほしいという放送が入った。閉会式の合図である。ダンス部のパフォーマンスの後、出口理事長からのお礼の言葉。全員で明星行進歌を合唱、世代を超えて学園としての一体感を感じることができた。最後は、人見武彦明星会会長の三本締めで閉会した。

当日は6回生から81回生まで1,000人を超す卒業生と関係者が参加され、大盛況となった。「一回で終わりではなく、毎年といわなくとも定期的に企画してほしい」「こんなにたくさんの同級生や先生たちに会えるとは思わなかった。楽しかった」「同窓会をやることはあっても、一つ上の学年や下の学年の人と会う機会というのは、なかなかないものです。今日は本当に懐かしい人に出会うことができました」そんな声をあちこちからいただくことができた。「受付にいると、年配の卒業生の方たちが声をかけてくれて、昔の明星の様子を聞くことができました」そんな話をしてくれた若い教師もいた。

10年後の100周年に向け、我々教職員が改めてホームカミングデイの意義を確認する、大変貴重な一日となった。

＜文責：堀内 雅人＞

思い出の教師たち













主要参考文献

『明星の年輪―明星学園50年のあゆみ』（1974年）
『明星の年輪―明星学園60年のあゆみ』（1984年）
『明星の年輪―明星学園70年のあゆみ』（1994年）
赤井米吉『ダルトン案と我が国の教育』（集成社　1924年）
赤井米吉『体験の教育』（集成社　1926年）
赤井米吉『新しき教育計画のために』（刀江書院　1932年）
赤井米吉『世界の教育の動きを見て』（刀江書院　1937年）
赤井米吉『新世界観と教育』（教育建設社　1941年）
赤井米吉『愛と理性の教育』（平凡社　1964年）
パーカスト著・赤井米吉訳・中野光編『ドルトンプランの教育』（『世界教育学選集』80／明治図書　1974年）
赤井つる『この道・赤井米吉遺稿集』（1975年）
照井猪一郎『自然科の究明』（明星学園　1931年）
照井猪一郎『幼学綱要読本』（成美會　1931年）
『残照 照井猪一郎先生遺稿集』（照井猪一郎先生遺稿集刊行委員会　1968年）
百年誌編纂委員会編『赤井・照井両先生 生誕百年誌』（明星学園　1988年）
『漫思凡考 上田八一郎先生を偲ぶ』（上田八一郎先生記念出版刊行会　1971年）
百年誌編纂委員会編『上田八一郎先生 生誕百年誌』（明星学園　1991年）
山本徳行『坂』（今治明徳高等学校　1967年）
山本徳行『峠』（1977年）
霜田静志『芸術を基調とせる低学年の教育記録』（平凡社　1927年）
霜田静志『低学年児童の教育』（刀江書院　1935年）
明星学園出版部発行『明星の教育』（1931年1月創刊）
小学部教育月報『ほしかげ』（1933年6月創刊）
高等女学校『明星時報』（1932年5月創刊）
旧制中学校『星雲時代』（1932年11月創刊）
新制高等学校『青雲』の時期を経て1950年『星雲時代』復活
中学校学園会（生徒会）『黎明』（1948年）
『明星学園ＰＴＡ会報』（1952年6月創刊）　No.38（1957年6月）から『道』に改題
『明星会（同窓会）会報』（1955年5月創刊）
『明星学園後援会会報』（1968年7月創刊／No.1は『明星学園後援会ニュース』）
学校法人発行『明星学園報』（1979年12月創刊）
無着成恭『第2教育ノート』（凡書房新社　1963年）
無着成恭編『続・山びこ学校』（むぎ書房　1971年）
無着成恭『無着成恭の詩の授業』（太郎次郎社　1982年）
無着成恭『無着成恭の昭和教育論』（太郎次郎社　1989年）
須田清『かな文字の教え方』（麦書房　1967年）
恩地邦郎『芸術と教育』（第一法規出版　1971年）

寒川道夫『人間教師として生きる』（新評論　1978年）
遠藤豊編『学校が生きかえるとき　上・下』（太郎次郎社　1979年）
上川淳『暦日』（私家版　1999年）
『成城学園五十年』（成城学園　1967年）
『成城学園六十年』（成城学園　1977年）
『沢柳研究・第5号』（成城学園沢柳研究会　1971年）
『渾沌・第8巻第1号』（渾沌社　1929年）
小原国芳『日本の新学校』（玉川学園出版部　1930年）
志垣寛『池袋児童の村小学校要覧』（1924年）
月刊『全人』（玉川大学出版部　1963年）
志垣寛『教育太平記　教育興亡五十年史』（洋々社　1956年）
『愛と反逆—文化学院の五十年』（文化学院出版部　1971年）
『自由学園の手紙①卒業生の歩んだ道』（自由学園出版部　1994年）
中野光『大正自由教育の研究』（黎明書房　1968年）
中野光　同上　教育名著選集⑥（黎明書房　1998年）
中野光『教育改革者の群像』（国土社　1976年）
中野光『大正デモクラシーと教育』（新評論　1977年）
中野光『新訂増補　大正デモクラシーと教育　1920年代の教育』（新評論　1990年）
中野光『学校改革の史的原像—「大正自由教育」の系譜をたどって—』（黎明書房　2008年）
中野光『大正自由教育の軌跡—人間ペスタロッチーに支えられて—』（学文社　2011年）
宗像誠也・国分一太郎編『日本の教育—“教科書裁判”をめぐる証言—』（岩波書店　1962年）
勝田守一・中内敏夫『日本の学校』（岩波書店　1964年）
山住正己『日本教育小史—近・現代』（岩波書店　1987年）
山住正己『教科書』（岩波書店　1970年）
山住正己『「教育」の同時代史』（平凡社　1984年）
徳武敏夫『日本の教科書づくり』（みくに書房　1985年）
中村紀久二『教科書の社会史—明治維新から敗戦まで』（岩波書店　1992年）
海後宗臣・仲新・寺崎昌男『教科書でみる近現代日本の教育』（東京書籍　1999年）
村井実訳・解説『アメリカ教育使節団報告書』（講談社学術文庫　1970年）
『東京都教育史　通史編　3』（東京都教育研究所　1996年）
国立教育研究所編『日本近代教育百年史』（財団法人教育研究振興会　1974年）
池田進・本山幸彦編『大正の教育』（第一法規出版　1978年）
相澤熙『日本教育百年史談』（学芸図書出版社　1952年）
柳久雄・川合章編『現代日本の教育思想　戦前編』（黎明書房　1962年）
柳久雄・川合章編『現代日本の教育思想　戦後編』（黎明書房　1963年）
久保義三『昭和教育史　上』（三一書房　1994年）
久保義三『昭和教育史　下』（三一書房　1994年）
黒澤英典『戦後教育の源流』（学文社　1994年）
前田多門『山荘静思』（羽田書店　1947年）
『神谷美恵子著作集　第6巻』（みすず書房　1981年）

大田堯『戦後日本教育史』（岩波書店　1978年）
大田堯・堀尾輝久『教育を改革するとはどういうことか』（岩波書店　1985年）
教育制度検討委員会　梅根悟編『日本の教育をどう改めるべきか』（勁草書房　1972年）
同上編『続日本の教育をどう改めるべきか』（勁草書房　1973年）
教育新聞社『戦後教育史への証言』（教育新聞社　1971年）
日本史教育研究会『Story 日本の歴史―近現代史編』（山川出版社　2000年）
児童問題史研究会監修『現代日本児童問題文献選集　17』（日本図書センター　1987年）
稲垣忠彦・中野光・寺崎昌男編『日本の教師21　教師の教育改革構想』（ぎょうせい　1995年）
久保田宏明・小田全宏・森上展安『親の役目―子どもをより良くするために』
（日本教育システム開発協会　2007年）
田畑修一郎『さかだち学校』（偕成社　1942年／田畑文学を語る会により1993年復刊）
新井徹著作刊行委員会『新井徹全仕事』（創樹社　1983年）
久保島信保『ぼくたちの学校革命―山梨県巨摩中学校の記録―』（中公新書　1974年）
『いま語り伝えたいこと―三鷹戦時下の体験―』（三鷹市　1986年）
遠山啓『数学の学び方・教え方』（岩波新書　1972年）
J.S.ブルーナー『教育の過程』（鈴木祥蔵・佐藤三郎訳／岩波書店　1963年）
レフ・ヴィゴツキー『思考と言語』（柴田義松訳／明治図書　1962年）
中村和夫『ヴィゴーツキー心理学』（新読書社　2004年）
岸本 裕史『見える学力、見えない学力』（大月書店　1981年）
『日本私立小学校連合会のあゆみ―創立35周年記念』（1977年）
『日本私立小学校連合会―結成50年のあゆみ』（1992年）
『日本私立小学校連合会―結成70年のあゆみ』（2012年）
『日本私立初等学校協会の歩み―結成70年―』（2005年）
三鷹市教育委員会 写真集『みたかの今昔』（2000年）／本誌8頁写真提供

編集後記

『明星の年輪―明星学園90年のあゆみ』編集委員会は2009年7月にスタートした。思えば、5年となるのだが、あっという間に日が過ぎたように思う。

より豊かな内容にするため、さまざまな方に執筆や協力をお願いし、多くの文献からも引用させていただいた。

本誌の前に作成された『明星の年輪―明星学園50年のあゆみ』『同60年のあゆみ』『同70年のあゆみ』は原田満寿郎（本校元教諭・元理事）、谷井精之助（元理事・元明星会会長・7回生）の努力に負うところが多い。本誌は、その成果を受け継ぎながら、さらに正確な事実を反映できるようこころがけた。

第1部の学園創立期の内容は大正自由教育研究の第一人者、中野光氏の著作を参考にさせていただいた。第3部の終戦直後の教育の記述にあたっては、黒澤英典氏（武蔵大学名誉教授）にご教示をいただいた。

また、多くの方々が寄稿してくださり、貴重な証言や、資料の提供をしてくださった。

本誌作成に先立ち、学園に資料整備委員会が発足し、専任職員を置き保護者や卒業生が膨大な資料の発掘・整備を続けてくださっている。それにより、執筆・編集作業が大きく進んだことを特筆したい。

この年誌の編纂にあたり、ご協力くださったすべての方々に感謝の念をお伝えする。

90年にわたる歩みのなかで、明星学園は「個性尊重」「自主自立」「自由平等」のゆるぎない教育理念のもと、どんな逆風のなかにあっても社会に存在し続けてきた。それができたのは、情熱を持った教職員がいて、好奇心に満ちた子どもたちがいて、卒業生、保護者、学校関係者の支えがあってこそであった。

明星学園は常に一貫教育の完成に向かって努力し、主体的学びによる自己確立、学力とはなにかという本質的な問いを追求し続けてきた。この永遠の課題に、明星学園はこれからも取り組み続けていくであろう。

本誌は予想を超えて膨大なものになったが、多くの方々に読んでいただきたいと強く願っている。

脈々と積み重ねた財産が現在の明星学園を明るく照らし、明日への道を切り開く糧となることを願ってやまない。

編集委員長　一瀬 清

『明星の年輪―明星学園90年のあゆみ』編集委員会

出口 一彦（理事長）／一瀬 清※（編集委員長・前小学校長）／渡辺 京※（前中・高等学校長）
依田 好照※（元小・中学校長）／平田 和孝（小学校長）／河住 貴夫（中・高等学校長）
石川 趙夫（常務理事）／舩山 典彦（常務理事）／赤井 創（常務理事）
塚田 勝俊（元常務理事、2011年逝去）／原田 茂（事務長）
森村 卓（高等学校教諭）／堀内 雅人（中学校教諭）／照井 伸也（小学校教諭）
大野 映子※（元小学校教諭・33回生）／松浦 恭子※（29回生）／串田 妙子※（36回生）
大草 美紀※（学園資料整備担当・51回生）　（※編集実務担当）

執筆・構成

赤井 創／伊勢 誠／一瀬 清／大草 美紀／大野 映子／河住 貴夫／川松 泰美／工藤 圭輔
串田 妙子／黒川 実／出口 一彦／照井 伸也／野口 淳／平田 和孝／福田 純一／堀内 雅人
村田 修二／村田 晴海／森村 卓／薬師 大五郎／依田 好照／和田 武久／渡辺 京

協力

中野 光（教育学）／黒澤 英典（教育学）
岸 すみれ（本校元教諭・10回生）／田中 一水（本校元教諭・16回生）／新山 英輔（19回生）
田中 祥子（本校元教諭・21回生）／川手 晴雄（本校元教諭・33回生）／足立 淳（教育学）
野口 保子（元本校司書）

写真・資料提供

長瀬 達也（秋田大学）／奈良 正博（元保護者）／進藤 緑（元保護者）／吉原 靖子（13回生）
服部 貞夫（15回生）／森 武夫（15回生）／田中 一水（16回生）／新山 英輔（19回生）／服部 道夫（20回生）
濱田 眞男（20回生）／富永 一矢（22回生）／佐藤 善彦（24回生）／槻木 瑞生（26回生）／五十嵐 美土（27回生）
服部 文夫（28回生）／吉田 悦子（31回生）／富平 玲子（33回生）／山下 美紀（33回生）／堀越 泰世（36回生）
三鷹市教育委員会

資料整備ボランティア

〈ＰＴＡ〉

相澤 玲子／浅井 正美／浅尾 三枝子／伊崎 君枝／今井 陽子／上原 里香／鵜川 裕美子／内田 薫／小林 由季
高橋 美佳／瀧澤 美穂／竹本 琴子／鍔 みや／鶴見 静香／名尾 素美子／中山 久美子／原谷 薫／古川 和美
丸山 知子／三浦 さつき／三上 聖子／谷戸 成智子／山森 睦代／吉原 真理子

〈卒業生〉

宮澤 操子（23回生）／松平 満子（25回生）／松浦 恭子（29回生）／青山 敏子（30回生）／佐藤 靖子（30回生）
柳川 敬子（32回生）

（敬称略）

裏表紙　星章デザイン 横川 武（本校元教諭・元理事・1回生）

明星の年輪
―明星学園90年のあゆみ―

2014年10月1日発行

編　集：『明星の年輪 明星学園90年のあゆみ』編集委員会
発行者：学校法人 明星学園　出口 一彦
〒181-0001 東京都三鷹市井の頭5－7－7
TEL 0422－43－2195
印刷・製本：株式会社 共同印刷所

